

栃木県埋蔵文化財調査報告第 360 集

東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第 2 分冊)

2013. 3

栃木県教育委員会
財)とちぎ未来づくり財団

とう や なかじま
東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

ごんげんやま いそおか
権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第2分冊)

2013. 3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ未来づくり財団

総目次

(第1分冊)

序

目次・検索表・例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の方法

第3節 調査の経過

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要

第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層

第2節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告

第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定
- 権現山遺跡 -

第5章 権現山遺跡 SG10 区

第1節 縄文時代の竪穴建物跡

第12節 古墳時代の低地遺物包含層

第21節 中世の上坑

第2節 縄文時代の上坑

第13節 古墳時代の柱穴状上坑

第22節 遺構外出土の中世遺物

第3節 弥生時代の上坑

第14節 古墳時代の遺構外遺物

第23節 中世～近世の溝状遺構

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

第15節 平安時代の竪穴建物跡

第24節 近世の溝状遺構

第5節 古墳時代の竪穴掘治遺構

第16節 平安時代の上坑

第25節 近世の上坑

第6節 古墳時代の鉄屑遺物

第17節 古代の道路跡

第26節 時期不明の掘立柱建物跡

第7節 古墳時代の区画外部の溝状遺構

第18節 中世の井戸

第27節 時期不明の井戸

第8節 古墳時代の溝状遺構

第19節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物

第28節 時期不明の溝状遺構

第9節 古墳時代の井戸

第20節 中世の柱穴状上坑と中央部・北部柱穴部

第29節 時期不明の柱穴状上坑

第10節 古墳時代の円筒形上坑

第30節 時期不明の上坑

第11節 古墳時代の上坑

第31節 時期・性格不明の遺構

(第2分冊)

第6章 権現山遺跡 SG2 区

第1節 古墳時代の上坑

第3節 時期不明の溝・集石遺構

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

第4節 時期不明の上坑

第7章 権現山遺跡南部 SG2 区・SG10 区・SG15 区周辺の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

第3節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体分析

第2節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区のテフラ分析

第4節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析

第8章 権現山遺跡 SG5 区

第1節 古墳時代の居館（貯宅）関連施設

第7節 古墳時代の上坑

第13節 中世～近世の溝状遺構

第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係

第8節 低地部の古墳時代遺物包含層

第14節 時期不明の掘立柱建物跡

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

第9節 遺構外出土の古墳時代遺物

第15節 時期不明の欄列

第4節 古墳時代の遺物集中地点
(祭祀遺構)

第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テフラと古環境

第16節 時期不明の溝状遺構

第5節 古墳時代の性格不明遺構

第11節 平安時代の上坑

第17節 時期不明の井戸

第6節 古墳時代の溝

第12節 中世～近世の上坑

第18節 時期不明の上坑

第19節 時期不明の柱穴状上坑

第9章 権現山遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の上坑

第3節 時期不明の溝

第5節 低地地積の調査

第2節 時期・性格不明の遺構

第4節 時期不明の上坑

第6節 西区の遺構外出土遺物

第10章 権現山遺跡 SG15 区

第1節 古墳時代以降の自然流路

第2節 時期不明の上坑

第3節 時期不明の溝

第11章 磯岡遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の竪穴建物跡

第3節 時期不明の礎石集中地点

第2節 時期不明の溝状遺構

第4節 時期不明の上坑

第12章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

第3節 奈良・平安時代

第5節 近世

第2節 古墳時代

第4節 中世

参考文献・写真図版

第2分冊 目次

目次	iii
権現山遺跡南部・磯岡遺跡 遺構一覧・検索表(第2分冊)	xxii
第6章 権現山遺跡SG2区	443
第1節 古墳時代の土坑	443
第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物	446
第3節 時期不明の溝・集石遺構	462
第4節 時期不明の土坑	464
第7章 権現山遺跡南部SG2区・SG10区・SG15区周辺の古環境	468
第1節 分析結果の概要と考古学的評価	468
第2節 権現山遺跡SG2区・SG10区・SG15区のテフラ分析	株式会社 古環境研究所 470
第3節 権現山遺跡SG2区・SG10区・SG15区の植物珪酸体分析	株式会社 古環境研究所 474
第4節 権現山遺跡SG2区・SG15区の花粉分析	株式会社 古環境研究所 478
第8章 権現山遺跡SG5区	486
第1節 古墳時代の居館(居宅)関連施設	486
第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係	504
8.2.1. テフラ分析の視点と考古学的評価	504
8.2.2. 栃木県、権現山遺跡SG5区の自然科学分析	株式会社 古環境研究所 505
第3節 古墳時代の竪穴建物跡	508
第4節 古墳時代の遺物集中地点(祭祀遺構)	614
第5節 古墳時代の性格不明遺構	618
第6節 古墳時代の溝	619
第7節 古墳時代の土坑	631
第8節 遺構外出土の古墳時代遺物	652
第9節 低地部の古墳時代遺物包含層	653
第10節 権現山遺跡SG5区低地部の指標テフラと古環境	656
8.10.1. 分析調査の視点と考古学的評価	656
8.10.2. 権現山遺跡SG5区低地の土層とテフラ	株式会社 古環境研究所 657
8.10.3. 権現山遺跡SG5区低地における放射性炭素年代測定	株式会社 古環境研究所 660
8.10.4. 権現山遺跡SG5区低地における植物珪酸体分析	株式会社 古環境研究所 661
8.10.5. 権現山遺跡SG5区低地における花粉分析	株式会社 古環境研究所 665
第11節 平安時代の土坑	668
第12節 中世～近世の土坑	669
第13節 中世～近世の溝状遺構	669
第14節 時期不明の掘立柱建物跡	671
第15節 時期不明の柵列	673
第16節 時期不明の溝状遺構	674

第 17 節	時期不明の井戸	676
第 18 節	時期不明の土坑	678
第 19 節	時期不明の柱穴状土坑	682
第 9 章	権現山遺跡 SG9 区	688
第 1 節	古墳時代の土坑	688
第 2 節	時期・性格不明の遺構	690
第 3 節	時期不明の溝	691
第 4 節	時期不明の土坑	695
第 5 節	低地堆積層の調査	697
第 6 節	西区の遺構外出土遺物	702
第 10 章	権現山遺跡 SG15 区	703
第 1 節	古墳時代以降の自然流路	703
第 2 節	時期不明の土坑	708
第 3 節	時期不明の溝	709
第 11 章	磯岡遺跡 SG9 区	711
第 1 節	古墳時代の竪穴建物跡	711
第 2 節	時期不明の溝状遺構	714
第 3 節	時期不明の焼土集中地点	716
第 4 節	時期不明の土坑	716
第 12 章	まとめ	717
第 1 節	縄文・弥生時代	717
第 2 節	古墳時代	717
12.2.1.	古墳時代の土器変遷	717
12.2.2.	古墳時代の集落と変遷	723
12.2.3.	古墳時代の各遺構	726
12.2.4.	古墳時代の出土遺物	728
第 3 節	奈良・平安時代	734
第 4 節	中世	734
第 5 節	近世	736
参考文献		736
報告書抄録		巻末

挿図目次

第 239 図	権現山道跡 SG2 区 全体図 (1/500)	444	第 297 図	権現山道跡 SG5 区 SI-11 (1) 遺構	539
第 240 図	権現山道跡 SG2 区 SK-100・103 遺構・遺物	445	第 298 図	権現山道跡 SG5 区 SI-11 (2) 遺構	541
第 241 図	権現山道跡 SG2 区 流路 1 ～ 4 試掘トレンチ TX11 ～ 13 断面図 (1/100)	447	第 299 図	権現山道跡 SG5 区 SI-12 遺構・遺物	543
第 242 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 1 ～ 3 (1/200)	448	第 300 図	権現山道跡 SG5 区 SK-13 遺構・遺物	545
第 243 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 1 ～ 3 (1/200)	449	第 301 図	権現山道跡 SG5 区 SI-14 (1) 遺構	546
第 244 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 2 ～ 4 (1/200)	451	第 302 図	権現山道跡 SG5 区 SI-14 (2) 遺構	547
第 245 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 2 ～ 4 (1/200)	452	第 303 図	権現山道跡 SG5 区 SI-15 (1) 遺構	549
第 246 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 2 ～ 4 (1/200)	453	第 304 図	権現山道跡 SG5 区 SI-15 (2) 遺構	551
第 247 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 2 ～ 4 (1/200)	454	第 305 図	権現山道跡 SG5 区 SI-15 (3) 遺構	553
第 248 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 4 断面図	455	第 306 図	権現山道跡 SG5 区 SI-16 (1) 遺構	555
第 249 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 4 断面図	455	第 307 図	権現山道跡 SG5 区 SI-17 (1) 遺構・遺物	557
第 250 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 5 ～ 7 (平面図 1/200・断面図 A/F 1/80)	456	第 308 図	権現山道跡 SG5 区 SI-17 (2) 遺構	559
第 251 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 5 ～ 7 (平面図 1/200)	457	第 309 図	権現山道跡 SG5 区 SI-18 (1) 遺構・遺物	562
第 252 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 流路 5 ～ 7 (平面図 1/200)	458	第 310 図	権現山道跡 SG5 区 SI-18 (2) 遺構	563
第 253 図	権現山道跡 SG2 区 SK-46 遺構	463	第 311 図	権現山道跡 SG5 区 SI-19 遺構・遺物	565
第 254 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 低地 16-19 グリッドにおける樹木花粉組成図	465	第 312 図	権現山道跡 SG5 区 SI-20 (1) 遺構	568
第 255 図	権現山道跡 SG2 区 Ⅱ区 低地 16-19 グリッドにおける樹木花粉組成図	466	第 313 図	権現山道跡 SG5 区 SI-20 (2) 遺構	569
第 256 図	権現山道跡・磯岡道跡周辺の古墳域分佈集積地点 (1/4,000)	469	第 314 図	権現山道跡 SG5 区 SI-21 (1) 遺構	572
第 257 図	権現山道跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の上層柱状図とテラ分析結果	473	第 315 図	権現山道跡 SG5 区 SI-21 (2) 遺構	573
第 258 図	権現山道跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物性炭体分析結果	475	第 316 図	権現山道跡 SG5 区 SI-22 (1) 遺構・遺物	576
第 259 図	権現山道跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物性炭体の顕微鏡写真	478	第 317 図	権現山道跡 SG5 区 SI-22 (2) 遺構	577
第 260 図	権現山道跡 SG2 区 13-21 グリッドにおける樹木花粉組成図	480	第 318 図	権現山道跡 SG5 区 SI-23 遺構・遺物	580
第 261 図	権現山道跡 SG2 区 13-21 グリッドにおける花粉組成図 (花粉粒数が基数)	480	第 319 図	権現山道跡 SG5 区 SI-24 (1) 遺構	582
第 262 図	権現山道跡 SG15 区北低地 16-19 グリッドにおける樹木花粉組成図	481	第 320 図	権現山道跡 SG5 区 SI-24 (2) 遺構	584
第 263 図	権現山道跡 SG15 区北低地 16-19 グリッドにおける花粉組成図 (花粉粒数が基数)	481	第 321 図	権現山道跡 SG5 区 SI-25 遺構・遺物	586
第 264 図	権現山道跡各地区および磯岡道跡 3 区の花粉・原子体 (1)	483	第 322 図	権現山道跡 SG5 区 SI-26 遺構・遺物	588
第 265 図	権現山道跡各地区および磯岡道跡 3 区の花粉・原子体 (2)	484	第 323 図	権現山道跡 SG5 区 SI-28 遺構	590
第 266 図	権現山道跡 SG5 区 全体図 (1/1,000・等高線 主曲線 20m)	487	第 324 図	権現山道跡 SG5 区 SI-29a-b (1) 遺構・a 期遺物	592
第 267 図	権現山道跡 SG5 区 北半部全体図 (1/500・等高線 主曲線 20m)	488	第 325 図	権現山道跡 SG5 区 SI-29a-b (2) a 期遺物	594
第 268 図	権現山道跡 SG5 区 南半部全体図 (1/500・等高線 主曲線 20m)	489	第 326 図	権現山道跡 SG5 区 SI-45 遺構・遺物	596
第 269 図	権現山道跡 SG5 区 SD-43 (1) 遺構	490	第 327 図	権現山道跡 SG5 区 SI-95 遺構・遺物	597
第 270 図	権現山道跡 SG5 区 SD-43 (2) 遺構	491	第 328 図	権現山道跡 SG5 区 SI-99 遺構・遺物	598
第 271 図	権現山道跡 SG5 区 SD-227 (1) 遺構・遺物	493	第 329 図	権現山道跡 SG5 区 SI-100 遺物	601
第 272 図	権現山道跡 SG5 区 SD-227 (2) 遺構	495	第 330 図	権現山道跡 SG5 区 SI-107 遺構・遺物	604
第 273 図	権現山道跡 SG5 区 SA-151 (1) 遺構全体図 (1/300)	499	第 331 図	権現山道跡 SG5 区 SI-116 (1) 遺構	606
第 274 図	権現山道跡 SG5 区 SA-151 (2) 遺構北辺	500	第 332 図	権現山道跡 SG5 区 SI-116 (2) 遺構・遺物	607
第 275 図	権現山道跡 SG5 区 SA-151 (3) 遺構東辺北半部	501	第 333 図	権現山道跡 SG5 区 SI-137 遺構・遺物	612
第 276 図	権現山道跡 SG5 区 SA-151 (4) 遺構東辺南半部	502	第 334 図	権現山道跡 SG5 区 SI-155 遺構	614
第 277 図	権現山道跡 SG5 区 SA-151 (5) 遺構南辺	503	第 335 図	権現山道跡 SG5 区 SX-118 (1) 遺構・遺物	615
第 278 図	権現山道跡 SG5 区 惣穴建物と土館間遺構の上層柱状図・断面図とテラ分析結果	506	第 336 図	権現山道跡 SG5 区 SX-118 (2) 遺構	616
第 279 図	権現山道跡 SG5 区 SI-1 遺構・遺物	509	第 337 図	権現山道跡 SG5 区 SX-129 遺構	618
第 280 図	権現山道跡 SG5 区 SI-2 遺構・遺物	510	第 338 図	権現山道跡 SG5 区 SD-41 (2) 遺構	621
第 281 図	権現山道跡 SG5 区 SI-3 (1) 遺構・遺物	512	第 339 図	権現山道跡 SG5 区 SI-42 遺構・遺物	622
第 282 図	権現山道跡 SG5 区 SI-3 (2) 遺構	513	第 340 図	権現山道跡 SG5 区 SD-44 遺構・遺物	624
第 283 図	権現山道跡 SG5 区 SI-4 遺構・遺物	514	第 341 図	権現山道跡 SG5 区 SD-101 (1) 遺構	628
第 284 図	権現山道跡 SG5 区 SI-5 (1) 遺構	516	第 342 図	権現山道跡 SG5 区 SD-101 (2) 遺構	628
第 285 図	権現山道跡 SG5 区 SI-5 (2) 遺構	518	第 343 図	権現山道跡 SG5 区 南半部上層遺構 (1/200・等高線 主曲線 10cm)	632
第 286 図	権現山道跡 SG5 区 SI-6 (1) 遺構	520	第 344 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (1) 遺構	634
第 287 図	権現山道跡 SG5 区 SI-6 (2) 遺構	522	第 345 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (2) 遺構	635
第 288 図	権現山道跡 SG5 区 SI-6 (3) 遺構	525	第 346 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (3) 遺構	636
第 289 図	権現山道跡 SG5 区 SI-7 (1) 遺構・遺物	526	第 347 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (4) 遺構	637
第 290 図	権現山道跡 SG5 区 SI-7 (2) 遺構	527	第 348 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (5) 遺構	639
第 291 図	権現山道跡 SG5 区 SI-8 (1) 遺構・遺物	530	第 349 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (6) 遺物	642
第 292 図	権現山道跡 SG5 区 SI-8 (2) 遺構	532	第 350 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (7) 遺物	644
第 293 図	権現山道跡 SG5 区 SI-9 (1) 遺構・遺物	293	第 351 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (8) 遺物	646
第 294 図	権現山道跡 SG5 区 SI-9 (2) 遺構	535	第 352 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (9) 遺物	648
第 295 図	権現山道跡 SG5 区 SI-10 (1) 遺構・遺物	536	第 353 図	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (10) 遺物	650
第 296 図	権現山道跡 SG5 区 SI-10 (2) 遺構	537	第 354 図	権現山道跡 SG5 区 遺構外出土の古墳時代遺物	652
			第 355 図	権現山道跡 SG5 区 低地グリッドおよび SG-190・191 の上層柱状図とテラ分析結果	658
			第 356 図	権現山道跡 SG5 区 低地地帯における植物性炭体分析結果	662
			第 357 図	権現山道跡 SG5 区 低地地帯における植物性炭体の顕微鏡写真	664
			第 358 図	権現山道跡 SG5 区 低地地帯における花粉組成図 (花粉粒数が基数)	665
			第 359 図	権現山道跡 SG5 区 低地地帯の花粉・原子体	667
			第 360 図	権現山道跡 SG5 区 SK-120 遺構・遺物	668
			第 361 図	権現山道跡 SG5 区 SK-138 遺構・遺物	669
			第 362 図	権現山道跡 SG5 区 SD-133・134・135 遺構	670
			第 363 図	権現山道跡 SG5 区 SD-134・135 遺物	670

第 366 図	権現山道跡 SG5 区 SB-154・157 遺構	672	第 390 図	権現山道跡 SG15 区 流路 2 および試掘トレンチ TX 16 の流路図(1/100)	706
第 367 図	権現山道跡 SG5 区 SB-159 遺構	673	第 391 図	権現山道跡 SG15 区 流路 2 北方の TX16 出土遺物	707
第 368 図	権現山道跡 SG5 区 SA 158 遺構	674	第 392 図	権現山道跡 SG15 区 時期不明の土坑 遺構	708
第 369 図	権現山道跡 SG5 区 SD-108・115・148 遺構	675	第 393 図	権現山道跡 SG15 区 SD-1 遺構・遺物	709
第 370 図	権現山道跡 SG5 区 SE-114・127・136・216 遺構	677	第 394 図	権現山道跡 SG15 区 SD 2 (平面図 1/80・断面図 1/40)	710
第 371 図	権現山道跡 SG5 区 時期不明の土坑 (1) 遺構・遺物	679	第 395 図	磯岡道跡 SC9 区 全体図(1/200・等高線上面図 20cm・断面図 10cm)	713
第 372 図	権現山道跡 SG5 区 時期不明の土坑 (2) 遺構・遺物	681	第 396 図	磯岡道跡 SC9 区 SI-49a・b 遺構・遺物	714
第 373 図	権現山道跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (1) 遺構	683	第 397 図	磯岡道跡 SC9 区 SD-40・48 遺構 SD-40 遺物	716
第 374 図	権現山道跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (2) 遺構	684	第 398 図	磯岡道跡 SC9 区 SX-50 遺構	717
第 375 図	権現山道跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構	685	第 399 図	磯岡道跡 SC9 区 時期不明の土坑 遺構	717
第 376 図	権現山道跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (4) 遺構	686	第 400 図	権現山道跡南部・磯岡道跡 SC9 区出土土器の変遷 (1) 土師器杯・高杯	718
第 377 図	権現山道跡 SC9 区 全体図(1/600・等高線上面図 20cm)	689	第 401 図	権現山道跡南部・磯岡道跡 SC9 区出土土器の変遷 (2) 土師器鉢・小形壺と須恵器・陶質土器	719
第 378 図	権現山道跡 SC9 区 SK-37 遺構	690	第 402 図	権現山道跡南部・磯岡道跡 SC9 区出土土器の変遷 (3) 土師器大形壺・甕・甌	720
第 379 図	権現山道跡 SC9 区 SX-54 遺構	690	第 403 図	権現山道跡南部・磯岡道跡 SC9 区古墳前期 後半～古墳中期	724
第 380 図	権現山道跡 SC9 区 SD-7・8 遺構・遺物	692	第 404 図	権現山道跡南部・磯岡道跡 SC9 区古墳後期～終末期前半	725
第 381 図	権現山道跡 SC9 区 SD-34・35・38 遺構	694	第 405 図	権現山道跡南部 SG5 区 居間周圍遺構と特殊遺物	727
第 382 図	権現山道跡 SC9 区 時期不明の土坑 遺構	696	第 406 図	権現山道跡 SG10 区の餅付壺と銅削	728
第 383 図	権現山道跡 SC9 区 中央区微高地新石器期トレンチ 断面図(1/160)	698	第 407 図	権現山道跡 SG10 区の有蓋壺と銅削	729
第 384 図	権現山道跡 SC9 区 中央区微高地遺構外出土遺物	699	第 408 図	製部上平の柘子壺をテテ済す壺	730
第 385 図	権現山道跡 SC9 区 中央区南東部低地調査区 (1) 遺構(等高線上面図 20cm)	700	第 409 図	頸部に紐突縁を持つ小形壺	730
第 386 図	権現山道跡 SC9 区 中央区南東部低地調査区 (2) 遺物	701	第 410 図	権現山道跡南部の新漆器	731
第 387 図	権現山道跡 SC9 区 西区遺構外出土遺物	702	第 411 図	権現山道跡南部・磯岡道跡 SC9 区出土土器の変遷 (3) 古墳終末期 後半・古代・中世	735
第 388 図	権現山道跡 SG15 区 全体図および断面図(1/400)	704			
第 389 図	権現山道跡 SG15 区 流路 1 および試掘トレンチ TX 15	705			

表 目 次

第 144 表	権現山道跡 SG2 区 古墳時代の土坑	445	第 183 表	権現山道跡 SG5 区 SI-25 出土遺物	587
第 145 表	権現山道跡 SG2 区 古墳時代の土坑 出土遺物	445・446	第 184 表	権現山道跡 SG5 区 SI-26 出土遺物	588・589
第 146 表	権現山道跡 SG2 区 流路 1 ～ および流路 周辺の遺構外 A ～ F 区 出土遺物	459 ～ 462	第 185 表	権現山道跡 SG5 区 SI-28 出土遺物	591
第 147 表	権現山道跡 SG2 区 時期不明の土坑	464・466	第 186 表	権現山道跡 SG5 区 SI-29a 出土遺物	593 ～ 595
第 148 表	権現山道跡 SG2 区 時期不明の土坑 出土遺物	466	第 187 表	権現山道跡 SG5 区 SI-45 出土遺物	596
第 149 表	権現山道跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区 テフラ検出分析結果	472	第 188 表	権現山道跡 SG5 区 SI-95 出土遺物	598
第 150 表	権現山道跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区 屈折率測定結果	472	第 189 表	権現山道跡 SG5 区 SI-99 出土遺物	599
第 151 表	権現山道跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区 植物性遺体分析結果	475	第 190 表	権現山道跡 SG5 区 SI-100 出土遺物	600 ～ 603
第 152 表	権現山道跡 SG2 区・SG15 区 花粉分析結果	482	第 191 表	権現山道跡 SG5 区 SI-107 出土遺物	604
第 153 表	権現山道跡 SG5 区 SD-43 出土遺物	491・492	第 192 表	権現山道跡 SG5 区 SI-116 出土遺物	608 ～ 610
第 154 表	権現山道跡 SG5 区 SD-227 出土遺物	494 ～ 498	第 193 表	権現山道跡 SG5 区 SI-137 出土遺物	611 ～ 613
第 155 表	権現山道跡 SG5 区 SA-151 柱穴の遺構	504	第 194 表	権現山道跡 SG5 区 SX-118 出土遺物	616 ～ 618
第 156 表	権現山道跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果 (1)	507	第 195 表	権現山道跡 SG5 区 SD-114 出土遺物	619 ～ 621
第 157 表	権現山道跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果 (2)	507	第 196 表	権現山道跡 SG5 区 SD-42 出土遺物	623
第 158 表	権現山道跡 SG5 区における屈折率測定結果	507	第 197 表	権現山道跡 SG5 区 SD-44 出土遺物	625・626
第 159 表	権現山道跡 SG5 区 SI-1 出土遺物	509	第 198 表	権現山道跡 SG5 区 SD-101 出土遺物	627 ～ 630
第 160 表	権現山道跡 SG5 区 SI-2 出土遺物	511	第 199 表	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 出土遺物	631 ～ 640
第 161 表	権現山道跡 SG5 区 SI-3 出土遺物	511 ～ 513	第 200 表	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 出土遺物	640 ～ 652
第 162 表	権現山道跡 SG5 区 SI-4 出土遺物	515・516	第 201 表	権現山道跡 SG5 区 古墳時代の土坑 出土遺物	653
第 163 表	権現山道跡 SG5 区 SI-5 出土遺物	517 ～ 519	第 202 表	権現山道跡 SG5 区 低地グリーンド遺物出土状況	654
第 164 表	権現山道跡 SG5 区 SI-6 出土遺物	521 ～ 525	第 203 表	権現山道跡 SG5 区 低地部の古墳時代遺物包含層 出土遺物	655～656
第 165 表	権現山道跡 SG5 区 SI-7 出土遺物	528・529	第 204 表	権現山道跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果	658
第 166 表	権現山道跡 SG5 区 SI-8 出土遺物	531・532	第 205 表	権現山道跡 SG5 区における屈折率測定結果	659
第 167 表	権現山道跡 SG5 区 SI-9 出土遺物	534	第 206 表	権現山道跡 SG5 区 低地部における植物性遺体分析結果	662
第 168 表	権現山道跡 SG5 区 SI-10 出土遺物	535 ～ 537	第 207 表	権現山道跡 SG5 区 低地部における花粉分析結果	666
第 169 表	権現山道跡 SG5 区 SI-11 出土遺物	538 ～ 540	第 208 表	権現山道跡 SG5 区 SK-120 出土遺物	669
第 170 表	権現山道跡 SG5 区 SI-12 出土遺物	542 ～ 544	第 209 表	権現山道跡 SG5 区 SK-138 出土遺物	669
第 171 表	権現山道跡 SG5 区 SI-13 出土遺物	545	第 210 表	権現山道跡 SG5 区 SD-134 出土遺物	670
第 172 表	権現山道跡 SG5 区 SI-14 出土遺物	547・548	第 211 表	権現山道跡 SG5 区 SD-135 出土遺物	671
第 173 表	権現山道跡 SG5 区 SI-15 出土遺物	550 ～ 554	第 212 表	権現山道跡 SG5 区 SD-108 出土遺物	674
第 174 表	権現山道跡 SG5 区 SI-16 出土遺物	556	第 213 表	権現山道跡 SG5 区 SE-114 出土遺物	676
第 175 表	権現山道跡 SG5 区 SI-17 出土遺物	558 ～ 561	第 214 表	権現山道跡 SG5 区 時期不明の土坑	678 ～ 682
第 176 表	権現山道跡 SG5 区 SI-18 出土遺物	563・564	第 215 表	権現山道跡 SG5 区 時期不明の土坑 出土遺物	682
第 177 表	権現山道跡 SG5 区 SI-19 出土遺物	566・567	第 216 表	権現山道跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑	683 ～ 687
第 178 表	権現山道跡 SG5 区 SI-20 出土遺物	570・571	第 217 表	権現山道跡 SC9 区 SD-7 出土遺物	693
第 179 表	権現山道跡 SG5 区 SI-21 出土遺物	574・575	第 218 表	権現山道跡 SC9 区 SD-8 出土遺物	693
第 180 表	権現山道跡 SG5 区 SI-22 出土遺物	577 ～ 579	第 219 表	権現山道跡 SC9 区 SD-38 出土遺物	695
第 181 表	権現山道跡 SG5 区 SI-23 出土遺物	581	第 220 表	権現山道跡 SC9 区 時期不明の土坑	695
第 182 表	権現山道跡 SG5 区 SI-24 出土遺物	583 ～ 585	第 221 表	権現山道跡 SC9 区 中央区微高地の遺構外出土遺物	697
			第 222 表	権現山道跡 SC9 区 中央区南東部低地調査区出土遺物	701

第 223 表	榑岡山道跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物	702
第 224 表	榑岡山道跡 SG15 区 流路北 TX16 出土遺物	707-708
第 225 表	榑岡山道跡 SG15 区 時期不明の土坑	708
第 226 表	榑岡山道跡 SG15 区 SD-1 出土遺物	709
第 227 表	磯岡道跡 SG9 区 SI-49a-b 出土遺物	715
第 228 表	磯岡道跡 SG9 区 SD-40 出土遺物	715

第 229 表	磯岡道跡 SG9 区 時期不明の土坑	717
第 230 表	榑岡山道跡南部と磯岡道跡 SG9 区における古墳時代・古代・中世遺構と時期区分	721
第 231 表	榑岡山道跡南部におけるカマドの位置	726
第 232 表	古墳時代の築造機構および磯岡道跡出土遺構(榑木城域)	732-733

写真図版目次

図版一	磯岡道跡 SG9 区 航空写真・全景 磯岡道跡 SG9 区 全景(北から) 磯岡道跡 SG9 区 全景(北西から) 磯岡道跡 SG9 区 全景(南東から) 磯岡道跡 5 区(右)と SG9 区(左) 磯岡道跡 5 区(右)と SG9 区(左)
図版二	磯岡道跡 SG9 区 古墳時代の堅穴建物跡・時期不明の溝 SG9 区 SI-49a-b 全景(南から) SG9 区 SI-49a-b 南東部(南から) SG9 区 SI-49b 貯蔵穴 P6 土層断面(南から) SG9 区 SI-49a 貯蔵穴 P7(北から) SG9 区 SI-49a 貯蔵穴 P7 遺物出土状況(南から) SG9 区 SI-49a-b 炉(東から) SG9 区 SD-40(南から)
図版三	榑岡山道跡 SG2 区 全景 SG2 区 全景(北から) SG2 区 全景(北から) SG2 区 A 区 全景(南から) SG2 区 A 区 全景(南から)
図版四	榑岡山道跡 SG2 区 古墳時代の土坑・時期不明の土坑 SG2 区 A 区 SK-100・101・102 付近(北東から) SG2 区 SK-100(右)・左は SK-101・102(南東から) SG2 区 SK-100 遺物出土状況(南東から) SG2 区 SK-103 遺物出土状況(南西から) SG2 区 SK-103 土層断面(南から) SG2 区 SK-1(南から) SG2 区 SK-2(南から) SG2 区 SK-36(北から)
図版五	榑岡山道跡 SG2 区 時期不明の土坑 SG2 区 SK-3 ~ 8・SK-16(南から) SG2 区 SK-5 遺物出土状況(北から) SG2 区 SK-6 土層断面(南から) SG2 区 SK-7 土層断面(南から) SG2 区 SK-8 土層断面(南から) SG2 区 SK-8(中央)とその周辺(東から) SG2 区 SK-9 土層断面(南から) SG2 区 SK-10 土層断面(南から)
図版六	榑岡山道跡 SG2 区 時期不明の土坑 SG2 区 SK-11(南から) SG2 区 SK-12(左)・13(右)(南から) SG2 区 SK-12(手前)・13(右)(西から) SG2 区 SK-15(東から) SG2 区 SK-7(中央)・16(左)(南から) SG2 区 SK-17 遺物出土状況(東から) SG2 区 左奥から SK-12・13・14・18(東から) SG2 区 SK-15(中央)・18(奥)(東から)
図版七	榑岡山道跡 SG2 区 時期不明の土坑 SG2 区 SK-18(南から) SG2 区 SK-19(東から) SG2 区 SK-20 遺物出土状況(西から) SG2 区 SK-24(左)・25(中央)・26(右)(南から) SG2 区 F 区 SK-26(北東から) SG2 区 SK-26(南から) SG2 区 SK-29(奥)・28a・28b(手前)(南から) SG2 区 SK-29(奥)・28a・28b(手前)(南西側)
図版八	榑岡山道跡 SG2 区 時期不明の土坑・溝・集石遺構 SG2 区 SK-31(奥)・32(手前)(南から) SG2 区 SK-33 土層断面(南から) SG2 区 SK-34 ~ 43 付近(南東から) SG2 区 F 区 SD-46(東から) SG2 区 SK-47(南から) SG2 区 SK-47(真上から) SG2 区 SK-47(南から) SG2 区 SK-47(南東から)
図版九	榑岡山道跡 SG2 区 A 区の土層・B 区 流路 1 と流路 2 SG2 区 A 区 流路 1 西平浅間 B テラコ面(左上)(南から) SG2 区 A 区 流路 1 中央部土層断面(南から)

図版一〇	榑岡山道跡 SG2 区 B 区 流路 1 ~ 3 SG2 区 B 区 流路 1 流木の状況(南東から) SG2 区 B 区 流路 2 東平分遺物出土状況(南東から) SG2 区 B 区 全景(東から、手前は流路 2) SG2 区 B 区 流路 2 北西部遺物出土状況(南東から) SG2 区 B 区 流路 3 中央部遺物出土状況(南から) SG2 区 B 区 流路 3 中央部遺物(北から) SG2 区 B 区 流路 3 南西部遺物(南西から)
図版一一	榑岡山道跡 SG2 区 C 区 流路 2-3-4 SG2 区 C 区 流路 4 東端(東から) SG2 区 C 区 流路 2(左)・流路 4(右)土層断面(西から) 上位が浅間 B・中位が FA、下位が浅間 C テラコ SG2 区 C 区 中央部東平流路 4 土層断面(西から) 上位が浅間 B・中位が FA、下位が浅間 C テラコ SG2 区 C 区 流路 4 中央部東平 FA 層及び遺物(西から) SG2 区 C 区 流路 2(奥)・流路 4(手前)遺物出土状況(南から) SG2 区 C 区 流路 3・4FA テラコの降下断面(西から) SG2 区 C 区 流路 3・4 上部 FA テラコ降下状況(西から)
図版一二	榑岡山道跡 SG2 区 C 区 流路 4 SG2 区 C 区 中央部流路 4FA テラコ降下状況(西から) SG2 区 C 区 浅間 C テラコ降下状況(西から) 手前は SK-103 右は流路 4 SG2 区 C 区 中央部流路 4(東から) SG2 区 C 区 流路 4 SP2-SP8 土層断面と FA テラコ(東から) SG2 区 C 区 流路 4 SP8 北側の土層断面(南西から) 中位に FA テラコ SG2 区 C 区 流路 4 SP4 北側の土層断面(南西から) 最上層に浅間 B・中位に FA テラコ SG2 区 C 区 流路 4 SP2 北側の土層断面(西から) 最上層に浅間 B・中位に FA テラコ SG2 区 C 区 中央部北平流路 4 遺物出土状況(東から)
図版一三	榑岡山道跡 SG2 区 C 区 流路 4-D 区 流路 5 SG2 区 C 区 西平部流路 4 遺物出土状況(南から) SG2 区 C 区 西平部流路 4 須置器林出土状況(南から) SG2 区 D 区 流路 5 東平部 FA 層の土層断面(西から) SG2 区 D 区 流路 5 東平部 FA 層上面(西から) SG2 区 D 区 流路 5 東平部 FA 層上面(東から) SG2 区 D 区 流路 5 東平部 FA 層上面(東から) SG2 区 D 区 流路 5 東平部(東から) SG2 区 D 区 流路 5 東平部土層断面(東から) 中位は FA 層
図版一四	榑岡山道跡 SG2 区 D 区・E 区・F 区 流路 5 ~ 7 SG2 区 D 区 流路 5 中央部 FA 層上面(西から) SG2 区 D 区 流路 5 中央部土層断面(西から) SG2 区 D 区 流路 5 中央部(西から) SG2 区 D 区 中央部黒色土層中の遺物集中地区(西から) SG2 区 E 区 流路 7(北東から) SG2 区 E 区 遺物出土状況及び流路 6(奥)(南から) SG2 区 F 区 流路 7(手前)と土垣群(西から)
図版一五	榑岡山道跡 SG5 区 航空写真 SG5 区 全景(北東上空から) SG5 区 全景(東上空から)
図版一六	榑岡山道跡 SG5 区 航空写真 SG5 区 全景(西上空から) SG5 区 全景(南上空から)

図版一七	<p>権現山遺跡 SG5 区 航空写真 SG5 区 北半部 (南上空から) SG5 区 北半部 (南上空から) 白線は方形権現遺構 SA-151</p>	
図版一八	<p>権現山遺跡 SG5 区 航空写真 SG5 区 北半部 (東上空から) 白線は方形権現遺構 SA-151 SG5 区 北半部 (東上空から) SG5 区 中央部 (西上空から)</p>	
図版一九	<p>権現山遺跡 SG5 区 豪族屋敷跡 SG5 区 SA-151 全景 (真上から) SG5 区 SA-151 南東部 (西から) SG5 区 SA-151 ビット 土層断面 (南から) SG5 区 SA-151 柱穴 P33 土層断面 (東から) SG5 区 居館北辺溝 SD-43 (西から、右は SD-44) SG5 区 SD-43 遺物出土状況 (南東から) SG5 区 居館南辺溝 SD-227 (南から) SG5 区 SD-227 遺物出土状況 (南西から)</p>	
図版二〇	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-1 全景 (南から) SG5 区 SI-1 遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-1 カマド土層断面 (南から) SG5 区 SI-1 カマド遺物出土状況 (西から) SG5 区 SI-1 貯蔵穴掘方 (西から) SG5 区 SI-1 貯蔵穴遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-2 全景及び遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-2 掘方 (南から)</p>	
図版二一	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-2 貯蔵穴 P5 (北から) SG5 区 SI-2 P6(左)・P7(右) (東から) SG5 区 SI-2 カマド (東から) SG5 区 SI-3 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-3 貯蔵穴 P3 遺物出土状況 (西から) SG5 区 SI-3 カマド土層断面 (東から) SG5 区 SI-3 カマド土層断面 (南から) SG5 区 SI-3 カマド全景 (南から)</p>	
図版二二	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-4 全景及び遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-4 掘出ビット (南から) SG5 区 SI-4 北西部遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-5 全景 (南から) SG5 区 SI-5 遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-5 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-5 貯蔵穴遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-5 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)</p>	
図版二三	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-5 北部遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-5 南部遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-5 北東部遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-6 全景 (南から) SG5 区 SI-6 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-6 貯蔵穴遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-6 石製模造品出土状況 (東から) SG5 区 SI-6 北東部遺物出土状況 (東から)</p>	
図版二四	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-6 カマド遺物出土状況 (北から) SG5 区 SI-6 カマド土層断面 (東から) SG5 区 SI-6 カマド (南から) SG5 区 SI-6 カマド遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-6 カマド土層断面 (南から) SG5 区 SI-7 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-7 掘方 (南から) SG5 区 SI-7 カマド (南から)</p>	
図版二五	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-7 カマド掘方 (南から) SG5 区 SI-8 掘方 (南から) SG5 区 SI-8 全景 (東から) SG5 区 SI-8 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-8 土層断面 (南から) SG5 区 SI-8 遺物出土状況 (南東から) SG5 区 SI-8 カマド (南から)</p>	
図版二六	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-8 貯蔵穴土層断面 (南から) SG5 区 SI-9 全景 (南から) SG5 区 SI-9 掘方 (南から) SG5 区 SI-9 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-9 土層断面 (南西から) SG5 区 SI-9 貯蔵穴遺物出土状況 (北から) SG5 区 SI-9 貯蔵穴 P5 土層断面 (南西から)</p>	
図版二七	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-9 カマド周辺遺物出土状況 (南東から) SG5 区 SI-9 カマド土層断面 (東から) SG5 区 SI-9 南東主柱穴 P4 土層の杯 (南から) SG5 区 SI-10 全景 (南から) SG5 区 SI-10 掘方 (南から) SG5 区 SI-10 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-10 土層断面 (南から) SG5 区 SI-10 カマド土層断面 (東から) SG5 区 SI-10 カマド土層断面 (南から)</p>	
図版二八	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-11 全景 (南から) SG5 区 SI-11 掘方全景 (南から) SG5 区 SI-11 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-11 貯蔵穴 P5 土層断面 (南から) SG5 区 SI-11 南東部遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-11 高杯出土状況 (南から) SG5 区 SI-11 糞出土状況 (北から) SG5 区 SI-11 小形遺物出土状況 (北から)</p>	
図版二九	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-12 全景 (東から) SG5 区 SI-12 掘方 (南から) SG5 区 SI-12 遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-12 貯蔵穴遺物出土状況 (東から) SG5 区 SI-12 カマド (西から) SG5 区 SI-13 全景及び遺物出土状況 (南東から) SG5 区 SI-13 カマド (南東から) SG5 区 SI-14 全景 (南から)</p>	
図版三〇	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-14 カマド遺物出土状況 (南東から) SG5 区 SI-14 カマド西側石製玉出土状況 (南西から) SG5 区 SI-14 貯蔵穴土層断面 (南から) SG5 区 SI-15 全景及び遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-15 掘方 (南から) SG5 区 SI-15 南部掘物石出土状況 (北西から) SG5 区 SI-15 カマド (南から) SG5 区 SI-15 カマド遺物出土状況 (南東から)</p>	
図版三一	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-15 カマド掘方 (南から) SG5 区 SI-15 全景及び遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-16 北半部掘方及び掘坑 (東から) SG5 区 SI-16 カマド (南から) SG5 区 SI-16 カマド土層断面 (東から) SG5 区 SI-17 全景及び遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-17 掘方 (南から) SG5 区 SI-17 竪 (南から)</p>	
図版三二	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-17 北部遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-17 南部遺物出土状況 (北から) SG5 区 SI-17 貯蔵穴土層断面 (南から) SG5 区 SI-18 全景及び遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-18 掘方 (南から) SG5 区 SI-18 貯蔵穴土層断面 (南から) SG5 区 SI-18 カマド土層断面 (南から)</p>	
図版三三	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-19 掘方全景 (南から) SG5 区 SI-19 全景及び埋地説明台 (南東から) SG5 区 SI-19 カマド東側遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-19 北東部遺物出土状況 (北西から) SG5 区 SI-19 カマド (南から) SG5 区 SI-19 東棟付近遺物出土状況 (南から) SG5 区 SI-20 全景 (西から)</p>	
図版三四	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-20 遺物出土状況 (西から) SG5 区 SI-20 カマド (西から) SG5 区 SI-20 カマド土層断面 (西から) SG5 区 SI-20 カマド土層断面 (南から) SG5 区 SI-20 南東部遺物出土状況 (西から) SG5 区 SI-21 全景及び遺物出土状況 (西から) SG5 区 SI-21 掘方 (西から) SG5 区 SI-21 貯蔵穴 (西から)</p>	
図版三五	<p>権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡 SG5 区 SI-21 貯蔵穴 (南から) SG5 区 SI-21 カマド遺物出土状況 (西から) SG5 区 SI-21 カマド遺物出土状況 (北西から) SG5 区 SI-21 カマド (西から) SG5 区 SI-21 カマド土層断面 (西から)</p>	

	SG5 区 SI 22 全景 (南西から)		
	SG5 区 SI 22 遺物出土状況 (西から)		
	SG5 区 SI 23 全景 (南から)		
図版三六	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 23 掘方 (南から)		
	SG5 区 SI 23 カマド (西から)		
	SG5 区 SI 23 貯蔵穴 (南から)		
	SG5 区 SI 23 貯蔵穴上層断面と FA (南から)		
	SG5 区 SI 24 全景及び遺物出土状況 (西から)		
	SG5 区 SI 24 掘方 (西から)		
	SG5 区 SI 24 遺物出土状況 (北から)		
	SG5 区 SI 24 遺物出土状況 (西から)		
図版三七	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 24 掘方 (東から)		
	SG5 区 SI 25 全景 (南から、右は SI 23)		
	SG5 区 SI 25 掘方 (南から)		
	SG5 区 SI 25 貯蔵穴上層断面 (南西から)		
	SG5 区 SI 26 全景 (南から)		
	SG5 区 SI 26 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SI 26 1 層除去状態とカマド (南から)		
	SG5 区 SI 26 カマド (西から)		
図版三八	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 26 カマド 上層断面 (西から)		
	SG5 区 SI 26 貯蔵穴 (西から)		
	SG5 区 SI 28 全景 (南から)		
	SG5 区 SI 28 掘方 (南から)		
	SG5 区 SI 28 貯蔵穴上層断面 (南から)		
	SG5 区 SI 28 カマド (南から)		
	SG5 区 SI 28 カマド 上層断面 (南から)		
	SG5 区 SI 28 カマド 掘方 (南から)		
図版三九	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 29a+b (左下) 周辺 (南東から)		
	SG5 区 SI 29a 全景 (南から)		
	SG5 区 SI 29a+b 掘方 (南から)		
	SG5 区 SI 29a 南東部遺物出土状況 (北から)		
	SG5 区 P 255 を SI 29a+b (左) が切る状況 (南から)		
	SG5 区 SI 45 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SI 95 全景 (南西から、右は SI 6)		
	SG5 区 SI 95 掘方 (南から)		
図版四〇	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 95 掘方 (南から)		
	SG5 区 SI 100 全景 (南から)		
	SG5 区 SI 100 遺物出土状況 (南東から)		
	SG5 区 SI 100 遺物出土状況 (南西から)		
	SG5 区 SI 100 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SI 100 貯蔵穴上層断面 (南から)		
	SG5 区 SI 100 遺物出土状況 (西から)		
	SG5 区 SI 107 カマド (南から)		
図版四一	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 107 全景 (南から)		
	SG5 区 SI 107 カマド 上層断面 (南から)		
	SG5 区 SI 116 全景及び遺物出土状況 (東から)		
	SG5 区 SI 116 掘方 (東から)		
	SG5 区 SI 116 貯蔵穴及び遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SI 116 貯蔵穴上層断面 (東から)		
	SG5 区 SI 116 貯蔵穴 (南から)		
図版四二	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡		
	SG5 区 SI 137 現地説明会 (西から)		
	SG5 区 SI 137 全景 (西から)		
	SG5 区 SI 137 掘方 (西から)		
	SG5 区 SI 137 カマド (西から)		
	SG5 区 SI 137 カマド西半部上層断面 (南から)		
	SG5 区 SI 137 貯蔵穴 P (西から)		
	SG5 区 SI 137 貯蔵穴 P6 (西から)		
	SG5 区 SI 155 掘方 (南から)		
図版四三	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の溝		
	SG5 区 SD-41 上層断面 A-A' (南西から)		
	SG5 区 SD-41 上層断面 B-B' (南から)		
	SG5 区 SD-41+42 区 11 トレンチ北壁 (南東から)		
	SG5 区 SD-42 上層断面 C-C' (西から)		
	SG5 区 SD-44 東端部遺物出土状況 (南東から)		
	SG5 区 SD-42 東部 (南から、手前は SK-98)		
	SG5 区 SD-43 (左)+44 (右) (南西から)		
図版四四	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の溝・遺物集中地点		
	SG5 区 SD-44 遺物出土状況 (南東から)		
	SG5 区 SD-101 中央部東半 (南から)		
	SG5 区 SX-118 全景及び遺物出土状況 (東から)		
	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (北東から)		

	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (西から)		
	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (西から)		
図版四五	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-31 遺物出土状況 (東から)		
	SG5 区 SK-34 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-35 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-47 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-51 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-51 上層断面と FA 及び遺物 (南から)		
	SG5 区 SK-82 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-96 遺物出土状況 (南から)		
図版四六	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-92 上層断面 (東から)		
	SG5 区 SK-96 遺構確認状況及び遺物 (南から)		
	SG5 区 SK-98 (北東から、手前は SD-42)		
	SG5 区 SK-106 (北東から)		
	SG5 区 SK-106 上層断面と FA 及び遺物 (南西から)		
	SG5 区 SK-110 (南から)		
	SG5 区 SK-111 (南から)		
	SG5 区 SK-112 (南から)		
図版四七	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-121 (東から)		
	SG5 区 SK-130 (南から)		
	SG5 区 SK-140 (南から)		
	SG5 区 SK-142 (南から)		
	SG5 区 SK-144 (南から)		
	SG5 区 SK-145 (南から)		
	SG5 区 SK-149 (南から)		
図版四八	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-181 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-181 上層断面と軽石層 (南から)		
	SG5 区 SK-185 (南から)		
	SG5 区 SK-186 南 (東から)		
	SG5 区 SK-186 北 (東から)		
	SG5 区 SK-186 北 (東から)		
	SG5 区 SK-187 (左)+188 (右) (南から)		
	SG5 区 SK-189 上層断面 (南から)		
図版四九	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-190 上層断面及び遺物 (南東から)		
	SG5 区 SK-191 遺物出土状況 (東から)		
	SG5 区 SK-191 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-192 (南から)		
	SG5 区 SK-193 上層断面 (北から)		
	SG5 区 SK-194 (南から)		
	SG5 区 SK-195 上層断面と FA 及び遺物 (南から)		
	SG5 区 SK-196 遺物出土状況 (東から)		
図版五〇	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-197 (南から)		
	SG5 区 SK-198 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-202 上層断面と遺物 (北から)		
	SG5 区 SK-203 FA 及び遺物出土状況 (南東から)		
	SG5 区 SK-203 上層断面と FA 及び遺物 (東から)		
	SG5 区 SK-203 遺物出土状況 (東から)		
	SG5 区 SK-203 遺物出土状況 (南西から)		
	SG5 区 SK-203 (東から)		
図版五一	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-204 上層断面 (南から)		
	SG5 区 SK-205a (左)+205b (右) (北西から)		
	SG5 区 SK-205a (手前)+205b (奥) (東から)		
	SG5 区 SK-205a+b 上層断面 (南から)		
	SG5 区 SK-205a+b 上層断面と遺物 (西から)		
	SG5 区 SK-206 (北から)		
	SG5 区 SK-208 (西から)		
	SG5 区 SK-208 上層断面と FA (北から)		
図版五二	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑		
	SG5 区 SK-210 遺物出土状況 (西から)		
	SG5 区 SK-218 上層断面 (北西から)		
	SG5 区 SK-211 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-212 (南から)		
	SG5 区 SK-213 北 遺物出土状況 (西から)		
	SG5 区 SK-219 遺物出土状況 (南から)		
	SG5 区 SK-223 (北から)		
	SG5 区 SK-224 (南から)		
	SG5 区 SK-224 遺物出土状況 (南東から)		
図版五三	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代・平安時代・中世の土坑		
	SG5 区 SK-247・248・249・250・251 (東から)		

	SG5区 SK-247 遺物出土状況(東から)
	SG5区 SK-248 遺物出土状況(南から)
	SG5区 SK-249 土層断面(南から)
	SG5区 SK-250 土層断面(北から)
	SG5区 SK-120 遺物出土状況(東から)
	SG5区 SK-120 土層断面及び遺物(東から)
	SG5区 SK-138(南から)
図版五四	権現山遺跡 SG5区 中世～近世の溝・時期不明の掘立柱建物跡と井戸跡
	SG5区 SD-133(南から、手前は SX-118)
	SG5区 SD-135 全景(南から)
	SG5区 SD-135 土層断面(東から)
	SG5区 SB-154 全景(南から)
	SG5区 SB-157 全景(南から)
	SG5区 SB-159 全景(南西から)
	SG5区 SE-114 全景(東から)
	SG5区 SE-127 全景(南から)
図版五五	権現山遺跡 SG5区 時期不明の井戸跡・時期不明の溝状遺構
	SG5区 SE-136 全景(南から)
	SG5区 SE-136 土層断面(東から)
	SG5区 SE-216 土層断面(西から、左上部は SD-135)
	SG5区 SD-108 土層断面(東から)
	SG5区 SD-115 確認状況(南から)
	SG5区 SD-148 南西部(南から)
図版五六	権現山遺跡 SG5区 時期不明の土坑・時期不明の柱状遺構
	SG5区 SK-27(南から)
	SG5区 SK-33(西から、奥は SK-34)
	SG5区 SK-32(南から)
	SG5区 SK-33(北東から)
	SG5区 SK-36(東から)
	SG5区 SK-37 遺物出土状況(東から)
	SG5区 SK-38(北東から)
	SG5区 SK-39 遺物出土状況(北東から)
	SG5区 SK-40 遺物出土状況(東から)
図版五七	権現山遺跡 SG5区 時期不明の土坑
	SG5区 SK-46(東から)
	SG5区 SK-49(南から)
	SG5区 SK-50(南から)
	SG5区 SK-52 土層断面(南から)
	SG5区 SK-81 遺物出土状況(東から)
	SG5区 SK-83(南から)
	SG5区 SK-84(南から)
	SG5区 SK-81・83・84(南から、中央は SK-82)
	SG5区 SK-85(南から)
図版五八	権現山遺跡 SG5区 時期不明の土坑
	SG5区 SK-87(南から)
	SG5区 SK-88 遺物出土状況(南から)
	SG5区 SK-90 遺物出土状況(南から)
	SG5区 SK-91 土層断面(南から)
	SG5区 SK-94(東から)
	SG5区 SK-97(南から)
	SG5区 SK-103 遺物出土状況(西から)
	SG5区 SK-104 遺物出土状況(南から)
図版五九	権現山遺跡 SG5区 時期不明の土坑
	SG5区 SK-105 遺物出土状況(南から)
	SG5区 SK-109(南から)
	SG5区 SK-113(南から)
	SG5区 SK-117 遺物出土状況(南から)
	SG5区 SK-119(南から)
	SG5区 SK-123(南から)
	SG5区 SK-125(西から)
	SG5区 SK-126(東から)
	SG5区 SK-124(東から)
図版六〇	権現山遺跡 SG5区 時期不明の土坑
	SG5区 SK-128(南から)
	SG5区 SK-131(手前)・132(奥)(東から)
	SG5区 SK-130(南から)
	SG5区 SK-141(南から)
	SG5区 SK-143(南から)
	SG5区 SK-146(東から)
	SG5区 SK-147 土層断面(南から)
	SG5区 SK-150(南から)
	SG5区 SK-152(南から、右は SK-145)
	SG5区 SK-153(東から)
図版六一	権現山遺跡 SG5区 低地部調査区
	SG5区 低地北西部(南から)

	SG5区 低地北部(南から)
	SG5区 低地南部(南から)
	SG5区 低地南東部(南から)
	SG5区 低地北部(北から)
	SG5区 低地中央部 SK-218 付近(南西から)
	SG5区 低地北端部(西から)
	SG5区 低地調査区北東壁の上層(西から)
図版六二	権現山遺跡 SG9区・磯岡遺跡 SG9区 航空写真 SG9区 全景 手前が磯岡遺跡・奥が権現山遺跡(東上空から)
	SG9区 全景 手前が権現山遺跡・奥が磯岡遺跡(西上空から)
図版六三	権現山遺跡 SG9区・磯岡遺跡 SG9区 航空写真 SG9区 全景 右が磯岡遺跡・左が権現山遺跡(南上空から)
	SG9区 全景 右が権現山遺跡・左が磯岡遺跡(北上空から)
図版六四	権現山遺跡 SG9区 時期不明の遺構・時期不明の土坑
	SG9区 SK-37 FA堆積状況(南東から)
	SG9区 SK-37(南東から)
	SG9区 西区北部 SX-54(南から、左は SK-59)
	SG9区 SX-54 北西部(東から)
	SG9区 SX-54(西から)
	SG9区 SK-9 土層断面(北西から)
	SG9区 SK-11～14(南から)
	SG9区 SK-39(西から)
図版六五	権現山遺跡 SG9区 時期不明の土坑・溝
	SG9区 SK-57(右)・58(左)(北から)
	SG9区 SK-59(東から)
	SG9区 SK-64(北から)
	SG9区 SD-7 遺物出土状況(北西から)
	SG9区 SD-8(北から)
	SG9区 SD-38(北西から)
	SG9区 SD-38(南から)
図版六六	権現山遺跡 SG9区 低地部調査区
	SG9区 中央区南東部低地 SD-7 付近(北から)
	SG9区 中央区南東部低地 SD-7 付近(南から)
	SG9区 中央区南東部低地(南から)
	SG9区 中央区南東部低地土層断面 A A'(東から)
	SG9区 中央区南東部低地土層断面 C C'(西から)
	SG9区 中央区南東部低地 6.3-2.5 グリッド遺物出土状況(南から)
	SG9区 中央区南東部低地土層断面 D D'(南から)
	SG9区 中央区南東部低地土層断面 E E'(南から)
図版六七	権現山遺跡 SG10区 航空写真
	SG10区 全景(東上空から)
	SG10区 全景(西上空から)
図版六八	権現山遺跡 SG10区 航空写真
	SG10区 全景(南上空から)
	SG10区 全景(北上空から)
図版六九	権現山遺跡 SG10区 縄文時代の竪穴建物跡・土坑
	SG10区 SI-63 全景及び遺物出土状況(南から)
	SG10区 SI-63 掘方(南から)
	SG10区 SI-63 伊・炭化物確認状況(南から)
	SG10区 SI-63 南東部遺物出土状況(西から)
	SG10区 SI-63 土層断面(東から)
	SG10区 SI-63 有孔円筒形土製品出土状況(北東から)
	SG10区 SI-63 伊(南から)
	SG10区 SK-219(東から)
図版七〇	権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑・弥生時代の土坑
	SG10区 SK-265 土層断面(南東から)
	SG10区 SK-307(南から)奥は SD-204
	SG10区 SK-443 遺物出土状況(南から)
	SG10区 SK-697 溝は SD-527・711(北東から)
	SG10区 SK-697・SD-527 土層断面(北から)
	SG10区 SK-699 SD-527 に切られる状況(南から)
	SG10区 SK-699・SD-527 土層断面(西から)
	SG10区 SK-544(南から)右は SK-543
図版七一	権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
	SG10区 SI-2 全景(南から)
	SG10区 SI-2 遺物出土状況(南から)
	SG10区 SI-2 掘方(南から)
	SG10区 SI-2 間仕切溝 D4(東から)
	SG10区 SI-2 間仕切溝 D3(上)・D2(右)(東から)
	SG10区 SI-2 貯蔵P5 土層断面(西から)
	SG10区 SI-2 伊(西から)
	SG10区 SI-6 全景(南から)

図版七二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-6 掘方 (南東から)
 SG10 区 SI-6 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-6 貯蔵穴 P6 土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-6 間仕切溝 D3 (手前 D3・奥 D4 南から)
 SG10 区 SI-6 間仕切溝 D2 (南から)
 SG10 区 SI-9 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-9 掘方 (南から)

図版七三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-9 焼土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-10 全景 (南から)
 SG10 区 SI-10 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-10 掘方 (南西から) 手前は SI-88
 SG10 区 SI-10 カマド (南から)
 SG10 区 SI-10 カマド掘方 (南から)
 SG10 区 SI-10 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (北から)
 SG10 区 SI-12 全景及び遺物出土状況 (南から)

図版七四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-12 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-12 カマド土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-13 (右)・SI-85 (左) 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-13-SI-85 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-13-SI-85 土層断面南部 (東から)
 SG10 区 SI-13-SI-85 土層断面北部 (東から)
 SG10 区 SI-13 貯蔵穴 P6 土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-14 全景及び遺物出土状況 (南から)

図版七五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-14 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-14 カマド (南から)
 SG10 区 SI-14 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-15 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-15 掘方 (東から)
 SG10 区 SI-15 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-15 貯蔵穴 P6 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-15 床下の間仕切溝 D1 (南から)
 SG10 区 SI-15 床下の間仕切溝 D2 (南から)

図版七六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-16 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-16 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-16 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-16 貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-16 床下の間仕切溝 D1 (南から)
 SG10 区 SI-16 床下の間仕切溝 D2 (南から)
 SG10 区 SI-18a・18b・18c 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-18a・18b 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (南から)

図版七七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-18c 貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-19a・19b 全景及び遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-19a・19b 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SI-19 掘方 (東から)
 SG10 区 SI-19b 貯蔵穴 P7 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-19a・19b 貯蔵穴 C (東から)
 SG10 区 SI-20 全景及び遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-20 掘方 (西から)

図版七八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-20 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-20 貯蔵穴 P6 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-21a・b 全景 (東から、左は SI-19・20)
 SG10 区 SI-21a カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-21a 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-22 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-22 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-22 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)

図版七九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-23 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-23 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-23 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-23 貯蔵穴 P4 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-24 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-24 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-24 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-25 全景及び遺物出土状況 (北東から)

図版八〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-25 掘方 (南東から)
 SG10 区 SI-25 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南東から)

SG10 区 SI-25 貯 (南東から)
 SG10 区 SI-28 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-28 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-28 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-28 貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-28 P7 土層断面及び遺物 (南から)

図版八一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-30 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-30 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-30 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-30 貯蔵穴 P5 周辺遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-30 貯 (北から)
 SG10 区 SI-32 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-32 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-32 南西部遺物出土状況 (南から)

図版八二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-32 カマド (西から)
 SG10 区 SI-32 貯蔵穴 P5 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-33 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-33 北西部遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SI-33 北東部遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SI-33 西半部土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-33 東半部土層断面 (南から)

図版八三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-33 北半部土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 南半部土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 P5 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 貯蔵穴 P6 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 貯 1 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 貯 2 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34a・b・c 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-34a・b・c 西側穴 P・粘床 M・M' 土層断面 (西から)

図版八四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-34a・b・c 粘床 J・M・M' 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34a 北部の遺物 (南から)
 SG10 区 SI-34a カマド南側の遺物 (北東から)
 SG10 区 SI-34a 中央部遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-34a 中央部遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-34a カマド裏面出土状況 (南東から)
 SG10 区 SI-34a・b 北東主柱穴 P1a・b 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34b・c 南西主柱穴 (西から、右は期・左は期)

図版八五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-34b 南西主柱穴 P3b (南から)
 SG10 区 SI-34a・b P4・P11 付近段状土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-34b 入口ピット土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-34c 入口ピット P5c 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34a・b・c の入口ピット P5a ~ c (南東から)
 SG10 区 SI-34a・b 貯蔵穴 P6a・b (北から)
 SG10 区 SI-34a 貯蔵穴南側土層断面 I (東から)
 SG10 区 SI-34c 貯蔵穴 P6c 土層断面 (南から)

図版八六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-34b P7 (東から、右が南側)
 SG10 区 SI-34a P8 付近土層断面 C C' (南東から、奥は SI-26C)
 SG10 区 SI-34a・b P8a・b 遺物出土状況 (南東から)
 SG10 区 SI-34a カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-34a・b カマド掘方 (南から)
 SG10 区 SI-34a カマド南側の小溝断面 C C' (南から)
 SG10 区 SI-35 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-35 カマド (南から)

図版八七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡・竪穴貯蔵溝跡
 SG10 区 SI-36 全景及び土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-36 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-36 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-37 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-37 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-37 カマド (南から)
 SG10 区 SI-37 カマド袖・丸柱土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-37 貯蔵穴 P5 土層断面 (東から)

図版八八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-38 全景 (南から)
 SG10 区 SI-38 粘床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-38 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-38 貯蔵穴 P6 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-38 掘方 (南から)

SC10区SI-39 カマド(南から)
 SC10区SI-39 貯蔵穴P5(南から)
 SC10区SI-40 全景及び遺物出土状況(南から)

図版八九 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-40 掘方(南から)
 SC10区SI-40 カマド(南から)
 SC10区SI-40 貯蔵穴P5土層断面(南から)
 SC10区SI-40 貯蔵穴P6土層断面(南東から)
 SC10区SI-40 床下間仕溝D2(南から)
 SC10区SI-40 北西部周溝E-E(南から)
 SC10区SI-45 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-45 北部遺物出土状況(東から)

図版九〇 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-45 南部遺物出土状況(東から)
 SC10区SI-45 カマド遺物出土状況(東から)
 SC10区SI-45 カマド火床土層断面(東から)
 SC10区SI-45 貯蔵穴P5土層断面(南から)
 SC10区SI-47 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-47 南部遺物出土状況(東から)
 SC10区SI-47 北部遺物出土状況(南東から)
 SC10区SI-47 貯蔵穴P6土層断面(西から)

図版九一 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-47 間仕切溝D1(南から)
 SC10区SI-48 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-48 掘方(西から)
 SC10区SI-48 入口ゼットP7土層断面(東から)
 SC10区SI-48 P8土層断面(東から)
 SC10区SI-48 井土層断面(西から)
 SC10区SI-49 全景(南から、奥はSE-232)
 SC10区SI-49 貯蔵穴土層断面(南から)

図版九二 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-50 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-50 掘方(南から)
 SC10区SI-50 北東区遺物出土状況(南西から)
 SC10区SI-50 南東区遺物出土状況(南西から)
 SC10区SI-50 北東区遺物出土状況(西から)
 SC10区SI-50 南東区東室遺物出土状況(南西から)
 SC10区SI-50 北東区床下黒褐色土層(南から)
 SC10区SI-50 入口施設及び遺物出土状況(南から)

図版九三 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-50 北東部(北東から)
 SC10区SI-50 貯蔵穴P10遺物出土状況(北から)
 SC10区SI-50 井土層断面(南西から)
 SC10区SI-50 井土層断面(北から)
 SC10区SI-50 井土層断面(南から)
 SC10区SI-50 井土層断面(南から)
 SC10区SI-50 井土層断面(南から)
 SC10区SI-50 井土層断面(南から)

図版九四 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-50 井4・5・6(南から)
 SC10区SI-50 南西区貼床土層断面(西から)
 SC10区SI-50 北東区貼床土層断面(東から)
 SC10区SI-50 間仕切溝D1a土層断面(南から)
 SC10区SI-50 間仕切溝D2土層断面(東から)
 SC10区SI-50 間仕切溝D3(南から)
 SC10区SI-50 間仕切溝D4土層断面(南から)
 SC10区SI-50 間仕切溝D5a土層断面(南から)
 SC10区SI-50 間仕切溝D6a土層断面(東から)
 SC10区SI-51b-c 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-51a-b-c 掘方(南東から)

図版九五 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-51a-b-c 南西部土層断面(東から)
 SC10区SI-51a 貯蔵穴P5(南から)
 SC10区SI-51b 貯蔵穴P5土層断面(南から)
 SC10区SI-51b P3西の間仕切溝H-H(南から)
 SC10区SI-53 全景及び遺物出土状況(東から)
 SC10区SI-53 土層断面(東から)
 SC10区SI-53 井土層断面(南東から)
 SC10区SI-55 全景及び遺物出土状況(南から)

図版九六 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-55 貯蔵穴P5土層断面(南から)
 SC10区SI-55 井土層断面(東から)
 SC10区SI-55 南東部貼床中の焼土(南から)
 SC10区SI-56 掘方(南から)
 SC10区SI-56 貯蔵穴P3遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-57 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-57 土層断面及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-57 貯蔵穴P3遺物出土状況(南から)

図版九七 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-57 入口施設P4土層断面(東から)
 SC10区SI-57 井土層断面(北から)
 SC10区SI-58 掘方(南から)
 SC10区SI-58 カマド掘方(南から)
 SC10区SI-58 貯蔵穴P10土層断面(東から)
 SC10区SI-58 カマド土層断面(東から)
 SC10区SI-58 貼床土層断面(東から)
 SC10区SI-58 北部貼床土層断面(西から)

図版九八 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-59 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-59 貯蔵穴土層断面(南から)
 SC10区SI-59 井土層断面(東から)
 SC10区SI-60 全景及び遺物出土状況(東から)
 SC10区SI-60 掘方(東から)
 SC10区SI-60 東半部遺物出土状況(北東から)
 SC10区SI-60 西端破壊部の貼床土層断面(西から)
 SC10区SI-60 貯蔵穴P12遺物出土状況(南西から)

図版九九 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-60 井土層断面(北東から)
 SC10区SI-60 間仕切溝D1-D2(西から)
 SC10区SI-60 間仕切溝D3(東から)
 SC10区SI-61 全景及び遺物出土状況(東から)
 SC10区SI-61 掘方(東から)
 SC10区SI-61 貯蔵穴周辺遺物出土状況(南西から)
 SC10区SI-61 貯蔵穴土層断面及び遺物(東から)
 SC10区SI-61 井土層断面(北から)

図版一〇〇 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-61 間仕切溝D2土層断面(南から)
 SC10区SI-61 間仕切溝D3土層断面(北から)
 SC10区SI-61 間仕切溝D5土層断面(南から)
 SC10区SI-61 間仕切溝D7-D8(北東から)
 SC10区SI-64a 全景(南から)
 SC10区SI-64a 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-64a 遺物出土状況(東平)(南から)
 SC10区SI-64a 遺物出土状況(西平)(南から)
 SC10区SI-64a 遺物出土状況(南端中央)(南から)

図版一〇一 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-64a 貯蔵穴P5土層断面(南から)
 SC10区SI-64a 井土層断面(南から)
 SC10区SI-64a 間仕切溝D2(南東から)
 SC10区SI-64b 掘方(北東から)
 SC10区SI-64b P10土層断面(北西から)
 SC10区SI-64b 貯蔵穴P11土層断面(西から)
 SC10区SI-65 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-65 掘方(南から)

図版一〇二 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-65 カマド付近遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-65 カマド遺物出土状況(南東から)
 SC10区SI-65 カマド袖及び火床土層断面(南東から)
 SC10区SI-65 カマド掘方(南から)
 SC10区SI-65 柱穴P1石出土状況(南から)
 SC10区SI-66 全景(南から)
 SC10区SI-66 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-66 掘方(南から)

図版一〇三 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-66 遺物出土状況(北西から)
 SC10区SI-66 貯蔵穴土層断面及び遺物(西から)
 SC10区SI-67 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-67 掘方(南から)
 SC10区SI-67 入口部貼床土層断面(西から)
 SC10区SI-67 FAテラコ堆積状況(北西から)
 SC10区SI-67 南東部遺物出土状況(北東から)
 SC10区SI-67 貯蔵穴P5及び遺物(西から)

図版一〇四 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-67 貯蔵穴P5土層断面及び遺物(西から)
 SC10区SI-69 全景及び遺物出土状況(南から)
 SC10区SI-69 掘方(西から)
 SC10区SI-69 墳頂及び貯蔵穴周囲の高まり(南東から)
 SC10区SI-69 南西部遺物出土状況(北東から)
 SC10区SI-69 入口施設P5(左)・P7(中央)・P8(右)(東から)
 SC10区SI-69 貯蔵穴P6土層断面及び遺物(南から)
 SC10区SI-69 北カマド袖及び南カマド土層断面(南西から)

図版一〇五 権現山道跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SC10区SI-69 カマド貼床土層断面(南から)
 SC10区SI-69 北カマド(西から)

SG10 区 SI-69 南カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-70 全層 (北から)
 SG10 区 SI-70 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-70 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-70 カマド土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-70 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (東から)

図版一〇六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-70 床下の間仕切溝 D1 (東から)
 SG10 区 SI-70 床下の間仕切溝 D2 (南から)
 SG10 区 SI-72 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-72 全層 (南から)
 SG10 区 SI-72 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-72 カマド遺物出土状況 (北から)
 SG10 区 SI-72 カマド土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-72 貯蔵穴土層断面 (東から)

図版一〇七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-73 全層及び遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-73 FA テララ確認状況 (南から)
 SG10 区 SI-73 FA より上位の遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-73 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-73 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-73 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-73 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-74+113a+113b 全層 (西から)

図版一〇八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-74 遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-74 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-74 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-74 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-74 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-74 カマド掘方 (西から)
 SG10 区 SI-74 貯蔵穴 P5 土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-74 炭化材・焼土出土状況 (西から)

図版一〇九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-75 全層 (南から)
 SG10 区 SI-75 テララ確認状況 (南から)
 SG10 区 SI-75 張出ビット P5 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-76 全層及び遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-76 跡土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-76 入り階段土層断面及び遺物 (北東から)
 SG10 区 SI-76 入り階段遺物出土状況 (南東から)
 SG10 区 SI-78 焼土層断面 (南東から)

図版一一〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-78 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-78 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-78 カマド土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-78 貯蔵穴周辺遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-78 貯蔵穴土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-79 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-79 北西部土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-79 覆土上面の FA と土層断面 (南から)

図版一一一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-79 焼土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-80 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-80 跡土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-80 南東部土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-80 貯蔵穴 P5 土層断面 (北から、右は P6)
 SG10 区 SI-80 P7 (左)・P5 (右) 間の盛土断面 (東から)
 SG10 区 SI-80 炉土層断面 (北東から)

図版一一二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-81 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-81 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-81 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-82 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-82 北東部土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-83 全層及び遺物出土状況 (北西から)
 SG10 区 SI-83 掘方 (北西から)
 SG10 区 SI-83 土層断面 (南西から)
 SG10 区 SI-83 南部杯出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-83 南西部土層断面 A' (南東から)
 SG10 区 SI-83 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-83 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-83 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-83 焼土 (北西から)
 SG10 区 SI-84 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-84 炭化材・焼土出土状況 (東から)

図版一一四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-84 貯蔵穴 (東から)
 SG10 区 SI-84 南部の炭化物 (南東から)
 SG10 区 SI-85 全層 (南から、右は SI-13)
 SG10 区 SI-85 カマド遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-85 貯蔵穴 P3 遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-86 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-86 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-86 FA テララ確認状況 (東から)

図版一一五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-86 テララ降下面 (南から)
 SG10 区 SI-86 南東部遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-86 新貯蔵穴 P3 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-86 旧貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-86 南東部床下と旧貯蔵穴 P6 (南から)
 SG10 区 SI-86 炉土層断面 (北西から)
 SG10 区 SI-87 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-87 掘方 (南から)

図版一一六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-87 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-87 カマド土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-88 全層 (南から、奥は SI-10)
 SG10 区 SI-88 掘方 (南から、奥は SI-10)
 SG10 区 SI-88 土層断面及び遺物 (南から)
 SG10 区 SI-88 貯蔵穴付近遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-88 貯蔵穴土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-88 炉土層断面 (東から)

図版一一七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-89a-b 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-89a-b 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a (南から、左は P11)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a を覆う床土 (北東から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a 遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a 下半部 (北から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a 最下部遺物 (北から)
 SG10 区 SI-89a 新貯蔵穴 P6a 及び周辺遺物 (南東から)

図版一一八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-89a P7a 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-89a-b 炉 (東から)
 SG10 区 SI-89b 貯蔵穴 P13 土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D5 土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D2 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D4 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D5 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-101 掘方 (南から)

図版一一九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-101 北部土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-101 跡土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-101 貯蔵穴土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-101 北西部遺物 13・14 出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-101 北東部遺物 17 出土状況 (北から)
 SG10 区 SI-104 全層及び遺物・焼土・炭化物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-104 全層 (南東から)
 SG10 区 SI-104 掘方 (南から)

図版一二〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-104 焼土・炭化物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-104 貯蔵穴 P3 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-104 貯蔵穴 P4 土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-105 全層及び遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-105 掘方 (東から、右は SI-90)
 SG10 区 SI-105 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-105 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-106 全層及び遺物出土状況 (南から)

図版一二一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-106 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-106 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-106 炉土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-108 全層及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-108 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-108 貯蔵穴 P3 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-108 炉土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-110 全層及び遺物出土状況 (南から)

図版一二二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-108・110 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-110 南西部遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-110 貯蔵穴土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-111 テララ確認状況 (東から)

SG10区SI-111 全景及び遺物出土状況(南から)
SG10区SI-111 扉床土層断面(南から)
SG10区SI-111 東部縦方
(南から、地山の白色は本七椏軽石)
SG10区SI-111 土層断面(南から)
SG10区SI-111 土層断面(東から)

図版一三 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡

SG10区SI-111 南西部土層断面(南東から)
SG10区SI-111 北東部土層断面(南東から)
SG10区SI-111 土層断面(南西から)
SG10区SI-111 貯蔵穴P3(北東から)
SG10区SI-111 貯蔵穴P5土層断面(北から)
SG10区SI-111 貯蔵穴P3(北から、手前はP4)
SG10区SI-111 貯蔵穴P3付近(西から)
SG10区SI-111 北西部板材痕跡(南東から)

図版一四 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡

SG10区SI-111 東壁板材痕跡(南から)
SG10区SI-111 南壁板材痕跡(西から)
SG10区SI-111 炉土層断面(東から)
SG10区SI-113a 全景(西から、深い窪穴はSI-74)
SG10区SI-113a 東部土層断面と遺物(南から)
SG10区SI-113a 貯蔵穴P5土層断面(南から)
SG10区SI-113a 間仕切溝D1土層断面(南から)

図版一五 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡

SG10区SI-113a(上層)・b(下層) 西壁中央(南から)
SG10区SI-113a(上層)・b(下層) 北東部(東から)
SG10区SI-113b 廊下(西から)
SG10区SI-113b 貯蔵穴P5土層断面
(南から、手前はSI-113a貯蔵穴)
SG10区SI-114 全景及び遺物出土状況(南から)
SG10区SI-114 土層断面(南東から)
SG10区SI-115 全景(南から)
SG10区SI-115 土層断面C'(南から)

図版一六 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

SG10区SD-43 遺物出土状況(西から)
SG10区SD-43 遺物出土状況(東から、左はSD-44)
SG10区SD-43 土層断面B-B'(東から)
SG10区SD-43 土層断面A-A'(東から)
SG10区SD-221 全景(西から)
SG10区SD-221 全景(東から)
SG10区SD-221 遺物出土状況(東から、奥はSD-43)
SG10区SD-221 土層断面B-B'(東から)

図版一七 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-221 土層断面A-A'(東から)
SG10区SD-41-42 全景(南から)
SG10区SD-41-42 北部遺物出土状況(北東から)
SG10区SD-41-42 北部遺物出土状況(南から)
SG10区SD-41-42 遺物出土状況
(北から、右中央はSK-216)
SG10区SD-41-42(南から、左はSI-2)
SG10区SD-41-42 南部遺物出土状況(南から)

図版一八 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-41-42 遺物出土状況
(南から、右はSK-207)
SG10区SD-304a+b 全景(北西から)
SG10区SD-304b 南中部(北西から、手前はSI-64)
SG10区SD-304a+b(南から、手前はSI-64)
SG10区SD-304b 遺物出土状況
(南東から、手前はSD-204)
SG10区SD-304a+b 北部土層断面C'(南から)
SG10区SD-304b 北部土層断面E-E'(南東から)

図版一九 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-304b 北部(南から、奥はSI-64)
SG10区SD-304b 南部遺物出土状況
(北西から、SD-501 ~ 503間)
SG10区SD-304b 南端遺物出土状況
(北西から、手前はSD-204)
SG10区SD-304b 南部土層断面H-H'(南東から)
SG10区SD-505 土層断面(南から)

図版二〇 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-319 全景(南から)
SG10区SD-319 遺物出土状況(南から)
SG10区SD-509 全景(南から)
SG10区SD-509 土層断面B-B'(南から)
SG10区SD-527 全景(南から)
SG10区SD-527 遺物出土状況(南から)
SG10区SD-527 土層断面C'(南から)

図版二一 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-527 土層断面E-E'(南から)
SG10区SD-527 土層断面F-F'(南から)
SD10区SD-527 遺物3-6出土状況(南東から)
SG10区SD-527 遺物4出土状況(南から)
SG10区SD-533-534(東から)
SG10区SD-533 土層断面(東から)

図版二二 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-534 土層断面C-C'(東から)
SG10区SD-534 土層断面B-B'(東から)
SG10区SD-534(左)・535(右)・(東から)
SG10区SD-535(東から)
SG10区SD-535 土層断面F-F'(東から)
SG10区SD-535 土層断面G-G'(東から)
SG10区SD-540 土層断面A-A'(東から)
SG10区SD-540 土層断面B-B'(東から)

図版二三 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構

SG10区SD-540 全景(東から)
SG10区SD-594 西部遺物出土状況(東から)
SG10区SD-594 FAテラ堆積状況(東から)
SG10区SD-594 土層断面A-A'(東から)
SG10区SD-594 土層断面B-B'(東から)
SG10区SD-696(南から、中央はSD-527)
SG10区SD-696(西から、中央はSD-527)

図版二四 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の溝状遺構・井戸跡

SG10区SD-711(北東から、下層にSK-697・SD-527)
SG10区SD-711-527・SK-697 土層断面B-B'(西から)
SG10区SD-821 全景(南東から)
SG10区SD-821 北半部(南東から)
SG10区SD-821 北端部(南西から)
SG10区SD-821 土層断面C-C'(南東から、下半は地山)
SG10区SE-552(東から、奥はSK-553a・553b)
SG10区SE-552(南東から)

図版二五 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑

SG10区SK-210 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-216(南から、奥はSD-41-42)
SG10区SK-217(南から)
SG10区SK-550 土層断面(東から)
SG10区SK-551(南東から)
SG10区SK-561(南から)
SG10区SK-571(南から)
SG10区SK-571 FAテラ堆積状況(南から)

図版二六 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑・土坑

SG10区SK-621 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-674(南から)
SG10区SK-29 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-46(南から、中央はSK-261a)
SG10区SK-91(南東から)
SG10区SK-94 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-95 土層断面(東から、内側はSI-19)
SG10区SK-207 遺物出土状況(北から)

図版二七 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑

SG10区SK-208 遺物出土状況(東から、中央はSD-201)
SG10区SK-220 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-222(南から、右はSK-5)
SG10区SK-233 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-261a(奥)・b(手前)(南西から)
SG10区SK-266 遺物出土状況(南東から)
SG10区SK-274 遺物出土状況(東から)
SG10区SK-275 遺物出土状況(南から)

図版二八 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑

SG10区SK-286(南から)
SG10区SK-292 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-293 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-339(左)・341(手前)・P-335(右奥)(南から)
SG10区SK-343 土層断面(北東から)
SG10区SK-346 土層断面及び遺物(南から)
SG10区SK-439 遺物出土状況(南から)
SG10区SK-449 遺物出土状況(南から)

図版二九 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑

SG10区SK-456(南から)
SG10区SK-543(南西から、左はSK-544)
SG10区SK-553a(左)・553b(右) 土層断面(南から)
SG10区SK-553a(南から)
SG10区SK-553b(南から)
SG10区SK-570 確認状況(西から)
SG10区SK-570 確認状況(北東から)
SG10区SK-570 土層断面(北西から)

図版一四〇 梅理山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑・低地調査区

SG10 区 SK 570 FA テフラ検出状況 (南から)
 SG10 区 SK 600 (東から)
 SG10 区 SK 683 (東から)
 SG10 区 SK 803 遺物出土状況 (北西から)
 SG10 区 SK 819 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK 820a+b (南西から)
 SG10 区 SK 901 ~ 910 低地調査区全景 (南西から)
 SG10 区 SK 901 遺物出土状況 (西から)

図版一四一 梅理山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑・低地調査区

SG10 区 SK 902 (西から)
 SG10 区 SK 903(左)・904(左) 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK 906 (北から)
 SG10 区 SK 908 (北東から)
 SG10 区 SK 909 土層断面 (西から)
 SG10 区 SK 910 (東から)
 SG10 区 SK 910 土層断面 (東から)

図版一四二 梅理山遺跡 SG10 区 平安時代の竪穴建物跡

SG10 区 SI 90 全景 (南から)
 SG10 区 SI 90 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI 90 掘方 (南から)
 SG10 区 SI 90 畝床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI 90 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI 90 カマド (南から)
 SG10 区 SI 90 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI 90 カマド土層断面 (東から)

図版一四三 梅理山遺跡 SG10 区 平安時代の竪穴建物跡・土坑・古代の道路跡

SG10 区 SI 90 カマド掘方 (南から)
 SG10 区 SK 235 土層断面及び遺物 (南東から、周囲は SI 30)
 SG10 区 SD 250a+b 遺構確認状況 (南から)
 SG10 区 SD 250a+b 全景 (南東から)
 SG10 区 SD 250a+b 全景 (南から)
 SG10 区 SD 250a+b 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 250a+b 土層断面 B B' (南から)
 SG10 区 SD 250a+b 土層断面 C C' (南から)

図版一四四 梅理山遺跡 SG10 区 中世の井戸跡

SG10 区 SE 232 上半部 (西から)
 SG10 区 SE 232 土層断面 (南から)
 SG10 区 SE 232 底面付近の遺物 (南から)
 SG10 区 SE 232 下半部 (南東から)
 SG10 区 SE 237 上半部 (南から)
 SG10 区 SE 237 土層断面 (南から)
 SG10 区 SE 237 底面付近の遺物 (南から)
 SG10 区 SE 237 全景 (南東から)

図版一四五 梅理山遺跡 SG10 区 中世の井戸跡

SG10 区 SE 252 上半部 (南から)
 SG10 区 SE 252 下半部土層断面 (南から)
 SG10 区 SE 252 全景及び遺物 (南から)
 SG10 区 SE 344 上半部土層断面 (東から)
 SG10 区 SE 344 土層断面 (東から)
 SG10 区 SE 344 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SE 377 上半部 (北東から)
 SG10 区 SE 377 土層断面 (北東から)

図版一四六 梅理山遺跡 SG10 区 中世の井戸跡・土坑

SG10 区 SE 377 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SE 377 全景 (東から)
 SG10 区 SE 569 上半部 (南から)
 SG10 区 SE 569 土層断面 (南から)
 SG10 区 SE 569 全景及び遺物 (南東から)
 SG10 区 SK 92 全景 (北西から)
 SG10 区 SK 251 土層断面及び遺物 (南東から)

図版一四七 梅理山遺跡 SG10 区 近世の土坑・中世～近世の溝状遺構

SG10 区 SK 71 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SD 263 (東から)
 SG10 区 SD 263 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 263 土層断面 B B' (東から)
 SG10 区 SD 263 土層断面 C C' (東から)
 SG10 区 SD 201a 西辺溝 (北から)
 SG10 区 SD 201a+204 合流点付近 (東から)

図版一四八 梅理山遺跡 SG10 区 近世の溝状遺構

SG10 区 SD 204 全景 (南から)
 SG10 区 SD 204 西辺溝 (北から)
 SG10 区 SD 204 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 204 土層断面 B B' 北半 (西から)

SG10 区 SD 204 土層断面 C C' (南から)
 SG10 区 SD 204 土層断面 E E' (南から)
 SG10 区 SD 204 土層断面 G G' (南から)
 SG10 区 SD 204 土層断面 K K' (南東から)
 SG10 区 SD 204 南端部 (南から、手前は SD 42)

図版一四九 梅理山遺跡 SG10 区 近世の溝状遺構

SG10 区 SD 503 北部 (西から)
 SG10 区 SD 503 北東部 (北から)
 SG10 区 SD 503 北西部 (北東から)
 SG10 区 SD 503 南部 (東から)
 SG10 区 SD 503 東部 (南から)
 SG10 区 SD 503 北東部 (南東から)
 SG10 区 SD 503 南西部・SI 64 付近 (南東から)
 SG10 区 SD 503 土層断面 A A' 北から、右は SK 561)

図版一五〇 梅理山遺跡 SG10 区 近世の溝状遺構・時期不明の掘立柱建物跡と竪土

SG10 区 SD 503 土層断面 D D' (南から、右は SD 527)
 SG10 区 SD 503 土層断面 I I' (西から)
 SG10 区 SD 503 土層断面 K K' (西から)
 SG10 区 SD 503 土層断面 L L' (南から、手前は SK 513 南面)
 SG10 区 SD 503 土層断面 (東から、手前は S・S・奥が R・R'、右は掘立柱遺構)
 SG10 区 SB 603 全景 (東から)
 SG10 区 SB 603 全景 (北から、手前は SD 503)

図版一五一 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 205 (東から)
 SG10 区 SD 205 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 224 全景 (南東から)
 SG10 区 SD 224 北半部 (北東から)
 SG10 区 SD 224 中央部土層断面 (南から)
 SG10 区 SD 224 北部土層断面 (南から)
 SG10 区 SD 283 北部 (南から、下層は SI 37)

図版一五二 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 283 南部 (南から)
 SG10 区 SD 283 北端部 (北から)
 SG10 区 SD 283 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 283 土層断面 B B' (南から)
 SG10 区 SD 505(奥)・506(手前) (北から)
 SG10 区 SD 283 土層断面 E E' (南から)
 SG10 区 SD 505(左)・506(右) 土層断面 D D' (東から)

図版一五三 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 506 (南から)
 SG10 区 SD 506 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 506 土層断面 B B' (南から)
 SG10 区 SD 506 土層断面 C C' (東から)
 SG10 区 SD 508 (西から、手前は SD 503)
 SG10 区 SD 508 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 510 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 518 (東から、手前は SK 519)

図版一五四 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 521a+b (南から、奥は SD 522)
 SG10 区 SD 521a+b 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 522 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 541(手前)・542(奥)・518(左) (東から)
 SG10 区 SD 541 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 542 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 542 土層断面 B B' (東から)

図版一五五 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 560 (南東から、奥は SK 557 ~ 559)
 SG10 区 SD 560 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 686 (南東から、奥は SI 70)
 SG10 区 SD 686 土層断面 A A' (東から)
 SG10 区 SD 814 全景 (南西から)
 SG10 区 SD 814 全景 (東から)

図版一五六 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 814 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SD 814 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SD 814 調査区東壁 (北西から)
 SG10 区 SD 815 全景 (南から)
 SG10 区 SD 815 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 815 土層断面 B B' (南から)
 SG10 区 SD 815-816 (南東から)

図版一五七 梅理山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構

SG10 区 SD 816 土層断面 A A' (南から)
 SG10 区 SD 816 土層断面 B B' (南から)

SG10区SD-817 (手前)・818 (奥) (南から)
SG10区SD-817 土層断面A A' (東から)
SG10区SD-818 土層断面A A' (南から)
SG10区SD-823 全景及び土層断面A A' (南から)
SG10区SD-826 (南から)
SG10区SD-826 土層断面A A' (南から)

図版一五八 権現山遺跡 SG10区 時期不明の井戸跡

SG10区SE-236 上半部 (西から)
SG10区SE-236 土層断面 (東から)
SG10区SE-236 全景 (東から)
SG10区SE-316 上半部 (南から)
SG10区SE-316 全景 (南から)
SG10区SE-345 上半部 (南東から)
SG10区SE-345 土層断面 (北から)
SG10区SE-345 底付近の遺物 (北から)

図版一五九 権現山遺跡 SG10区 時期不明の井戸跡

SG10区SE-345 土層断面 (北から)
SG10区SE-345 全景 (北から)
SG10区SE-352 上半部 (東から)
SG10区SE-352 土層断面 (南から、右はSD-304)
SG10区SE-352 全景 (東から)
SG10区SE-455 上半部 (南から)
SG10区SE-455 土層断面 (北から)
SG10区SE-455 全景 (北西から)

図版一六〇 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-1 (南から)
SG10区SK-68 (南から)
SG10区SK-77 東から、奥はSK-253)
SG10区SK-202 (南から)
SG10区SK-203 遺物出土状況 (東から)
SG10区SK-209 (南から)
SG10区SK-212 (東から)
SG10区SK-213 (南から)
SG10区SK-214 (南西から)
SG10区SK-215 (南西から)
SG10区SK-223 (東から)
SG10区SK-225 (南から)
SG10区SK-226 (南西から)
SG10区SK-228 手前>229(奥) (南から)
SG10区SK-230 (南から)
SG10区SK-231 (東から)
SG10区SK-234 (北東から)

図版一六一 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-238 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-239 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-242 (南から、中央はP-245・246)
SG10区SK-243 遺物出土状況 (北から)
SG10区SK-253 (東から)
SG10区SK-254 (東から)
SG10区SK-262 (東から)
SG10区SK-264 (北東から)
SG10区SK-267 (南東から)
SG10区SK-271 (南東から)
SG10区SK-272 (東から)
SG10区SK-273 (東から)
SG10区SK-276 (東から)
SG10区SK-287 (南から、下層はSI-56)
SG10区SK-290 (南から)
SG10区SK-294 (南から)
SG10区SK-297 土層断面 (東から、右はSD-263)
SG10区SK-298 土層断面 (東から)

図版一六二 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-306 (南から)
SG10区SK-317 (南から)
SG10区SK-318 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-321 (北西から、右はP-320)
SG10区SK-327 (東から)
SG10区SK-328 (東から)
SG10区SK-329 (東から)
SG10区SK-336 (右)・337 (左) (南から)
SG10区SK-338 (南から)
SG10区SK-347 (南から)
SG10区SK-348 (南から)
SG10区SK-349 (東から)
SG10区SK-351 (西から)
SG10区SK-353 (東から)
SG10区SK-354 (東から)

SG10区SK-355 (北から)
SG10区SK-372 (南東から)
SG10区SK-405 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-408 (南から)

図版一六三 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-447 (東から)
SG10区SK-450 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-451 (南から)
SG10区SK-452 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-454 土層断面 (東から)
SG10区SK-457 遺物出土状況 (南から)
SG10区SK-502 土層断面 (東から、右はSD-503)
SG10区SK-511 土層断面 (南から)
SG10区SK-512 (南から)
SG10区SK-514 (南から)
SG10区SK-517 (西から)
SG10区SK-523 (東から)
SG10区SK-524 土層断面 (南西から)
SG10区SK-525 (南から)
SG10区SK-526 土層断面 (南から、右はSD-304)
SG10区SK-528 (東から)
SG10区SK-532 (東から)
SG10区SK-536 土層断面 (北から)

図版一六四 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-537 (東から)
SG10区SK-545 (南から)
SG10区SK-552a (南から)
SG10区SK-553b (南から)
SG10区SK-553a (左)・b (右) 土層断面 (南から)
SG10区SK-554 土層断面 (南から)
SG10区SK-555 (北東から)
SG10区SK-557 土層断面 (東から)
SG10区SK-558 (東から)
SG10区SK-559 土層断面 (東から)
SG10区SK-562 (東から)
SG10区SK-563 (東から)
SG10区SK-564 土層断面 (南から)
SG10区SK-566 (南から)
SG10区SK-567 (西から)
SG10区SK-568 土層断面 (南から)
SG10区SK-572 (南から)
SG10区SK-573 (西から)
SG10区SK-576 土層断面 (南から)
SG10区SK-581 (東から)
SG10区SK-582 土層断面 (東から)

図版一六五 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-583 (東から)
SG10区SK-585 (東から)
SG10区SK-592 土層断面 (東から)
SG10区SK-595 (東から)
SG10区SK-596 (東から)
SG10区SK-597 (東から)
SG10区SK-604 土層断面 (南から、右下はSB-603)
SG10区SK-605 土層断面 (東から)
SG10区SK-606 土層断面 (南西から)
SG10区SK-612 (南から)
SG10区SK-613 (南から)
SG10区SK-614 (東から)
SG10区SK-615 (東から)
SG10区SK-616 (東から)
SG10区SK-619 土層断面 (東から)
SG10区SK-620 土層断面 (東から)
SG10区SK-630 (南東から)
SG10区SK-631 (南東から)

図版一六六 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

SG10区SK-632 (南から)
SG10区SK-639 (南から)
SG10区SK-657 (東から)
SG10区SK-673 遺物出土状況 (北東から)
SG10区SK-675 遺物出土状況 (西から)
SG10区SK-682 土層断面 (東から)
SG10区SK-685 (東から)
SG10区SK-694 (南から)
SG10区P-805・803とSK-804・806 (左から) (南東から)
SG10区SK-804 土層断面 (東から)
SG10区SK-806 土層断面 (東から)
SG10区SK-808 (南から)
SG10区SK-808-810-811-812-813 (右から) (南から)

- SG10区SK 810 (南から)
SG10区SK 811 上層断面 (南から)
SG10区SK 812 (南から)
SG10区SK 813 (南から)
SG10区SK 822 (南から)
- 図版一六七 権現山遺跡 SG15区 全景**
SG15区 東半部 (西から)
SG15区 東半部 (南西から)
SG15区 調査区全景 (東から、手前はSK 3)
SG15区 西半部 (南東から、中央は流路2)
SG15区 調査区西壁上層断面 (東から)
- 図版一六八 権現山遺跡 SG15区 時期不明の土坑・溝**
SG15区SK 6 (右)・7 (左) (南から)
SG15区SK 4 上層断面 (南西から)
SG15区SK 5 (南から)
SG15区SK 9 (南から)
SG15区SK 8 (南から)
SG15区SD-1 全景 (南から)
SG15区SD-2 全景 (南から)
SG15区SD-1 上層断面 A-A' (南東から)
SG15区SD-1 上層断面 B-B' (南東から)
- 図版一六九 権現山遺跡 SG15区 時期不明の溝・古墳時代以降の自然流路**
SG15区SD-1 木杭と上層断面 (南から)
SG15区SD-1 木杭と上層断面 (南から)
SG15区SD-2 上層断面 A-A' (北から)
SG15区SD-2 上層断面 D-D' (南から)
SG15区 流路1 西部 (南西から)
SG15区 流路1 北半部 (西から)
SG15区 流路1 南西部 (北から)
SG15区 流路1 調査区南壁のテフラ層 (北から)
- 図版一七〇 権現山遺跡各地区 縄文時代遺物**
SG10区 縄文・弥生時代土坑 遺物
縄文時代の遺構外出土遺物 SG10区SK 307-1~3
SG10区SK 219-1 SG10区SK 697-1・2
SG10区SK 265-1 SG10区SK 544-1~5
- 図版一七一 権現山遺跡 SG10区 縄文時代建物跡 遺物**
SG10区SI 63 縄文土器・有孔円筒状土製品
SG10区SI 63-1 SG10区SI 63-10
SG10区SI 63-6 SG10区SI 63-11
- 図版一七二 権現山遺跡 SG10区 縄文時代建物跡 遺物**
SG10区SI 63 石皿・洲片・被熱罨
SG10区SI 63-13 石皿 (表面)
SG10区SI 63-13 石皿 (裏面)
SG10区SI 63-22 被熱罨
- 図版一七三 権現山遺跡各地区 古墳時代・中世・近世の金属製品**
SG5区の鉄製品 SG5区 X 線写真
権現山SG9区の銅製品 SG10区 X 線写真
SG10区の鉄・銅製品
- 図版一七四 権現山遺跡 SG5区・SG10区 古墳時代の鉄副遺物**
SG5区SI 100-32 (右写真構成番号26の裏面)
SG5区SI 100-32-33・SD 42-12
SG10区の鉄副遺物
SG10区の鉄副遺物 (今回追加報告分)
SG10区SI 36-2 SG10区SI 106-12
- 図版一七五 権現山遺跡 SG2区 土師器・須恵器**
SG2区SK 103-1 SG2区流路4-36
SG2区SK 103-2 SG2区流路4-37
SG2区SK 103-3 SG2区流路4-38
SG2区流路2-5 SG2区流路4-37・38
SG2区流路2-7 SG2区流路4-41
SG2区流路2-8 SG2区流路4-42
SG2区流路2-9 SG2区流路4-43
SG2区流路2-10 SG2区流路4-46 口縁部
SG2区流路2-11 SG2区流路4-46 胴部
SG2区流路2-17 SG2区流路4-47
SG2区流路2-19
- 図版一七六 権現山遺跡 SG2区 土師器・須恵器・円筒埴輪**
権現山遺跡 SG5区 居館出土遺物
SG2区流路4-50 SG5区SD 227-1
SG2区流路4-52 SG5区SD 227-3
SG2区A区-59 SG5区SD 227-4
SG2区B区-62 SG5区SD 227-10
SG2区D区-70 SG5区SD 227-36
SG2区D区-71 SG5区SD 227-37
SG2区D区-72 SG5区SD 227-42
SG2区D区-73

- 図版一七七 権現山遺跡 SG5区 居館・整穴建物跡 遺物**
SG5区SD 227-71 SG5区SI 5-17
SG5区SI 5-2 SG5区SI 5-18
SG5区SI 5-6 SG5区SI 5-19
SG5区SI 5-8 SG5区SI 6-1
SG5区SI 5-9 SG5区SI 6-3
SG5区SI 5-12 SG5区SI 6-4
SG5区SI 5-14 SG5区SI 6-5
SG5区SI 5-15 SG5区SI 6-8
SG5区SI 5-16 SG5区SI 6-9
- 図版一七八 権現山遺跡 SG5区 土師器・石製品・埴輪土塊**
SG5区SI 6-12 SG5区SI 10-2
SG5区SI 6-13 SG5区SI 10-5
SG5区SI 6-17 SG5区SI 10-3
SG5区SI 6-18 SG5区SI 10-15
SG5区SI 6-19 SG5区SI 11-1
SG5区SI 6-41~46 SG5区SI 11-4
SG5区SI 8-19 SG5区SI 11-5
SG5区SI 9-1 SG5区SI 11-8
SG5区SI 9-5 SG5区SI 11-9
SG5区SI 9-10
- 図版一七九 権現山遺跡 SG5区 土師器・須恵器・石製品**
SG5区SI 11-11 SG5区SI 13-5 底面
SG5区SI 11-19 SG5区SI 14-7 ~ 10
SG5区SI 11-22 SG5区SI 15-4
SG5区SI 11-23 SG5区SI 15-14
SG5区SI 11-12 SG5区SI 15-16
SG5区SI 12-1 SG5区SI 15-17
SG5区SI 12-4 SG5区SI 15-31
SG5区SI 13-5 SG5区SI 15-32
- 図版一八〇 権現山遺跡 SG5区 土師器・石製品・支脚・埴輪土塊**
SG5区SI 15-34 SG5区SI 17-16
SG5区SI 15-35 SG5区SI 17-17
SG5区SI 15-36 SG5区SI 17-18
SG5区SI 15-37 SG5区SI 17-19
SG5区SI 15-39・40・44・55 SG5区SI 17-36
SG5区SI 16-2 SG5区SI 17-38
SG5区SI 17-4 SG5区SI 17-43
SG5区SI 17-7 SG5区SI 17-47・48
SG5区SI 17-8 SG5区SI 19-1
SG5区SI 17-9 SG5区SI 19-2
- 図版一八一 権現山遺跡 SG5区 土師器・須恵器**
SG5区SI 19-3 SG5区SI 20-13
SG5区SI 19-4 SG5区SI 20-17
SG5区SI 19-8 SG5区SI 20-18
SG5区SI 19-10 SG5区SI 21-4
SG5区SI 20-9 SG5区SI 21-10
SG5区SI 20-8 SG5区SI 21-11
SG5区SI 20-8 口縁部 SG5区SI 21-12 上半
SG5区SI 20-10 SG5区SI 21-12 下半
SG5区SI 20-12
- 図版一八二 権現山遺跡 SG5区 土師器・支脚**
SG5区SI 21-13 SG5区SI 22-6
SG5区SI 21-14 SG5区SI 22-7
SG5区SI 21-15 SG5区SI 22-8
SG5区SI 21-20 SG5区SI 22-10
SG5区SI 22-1 SG5区SI 22-12
SG5区SI 22-2 SG5区SI 22-13
SG5区SI 22-3 SG5区SI 22-14
SG5区SI 22-4 SG5区SI 22-21
SG5区SI 22-5 SG5区SI 22-22
- 図版一八三 権現山遺跡 SG5区 土師器・陶質土器・土製品・石製品**
SG5区SI 22-23 SG5区SI 19-11・SI 24-27
SG5区SI 22-26 SG5区SI 24-29
SG5区SI 22-27 SG5区SI 24-31
SG5区SI 22-28 SG5区SI 25-4
SG5区SI 24-3 SG5区SI 25-4 正面
SG5区SI 24-4 SG5区SI 29a-1
SG5区SI 24-5 SG5区SI 29a-17
SG5区SI 24-26 SG5区SI 29a-18
- 図版一八四 権現山遺跡 SG5区 土師器・石製品**
SG5区SI 29a-21 SG5区SI 100-23
SG5区SI 29a-22 SG5区SI 100-35・36
SG5区SI 45-3 SG5区SI 116-1
SG5区SI 45-3 胴部接合痕 SG5区SI 116-3
SG5区SI 100-10 SG5区SI 116-4
SG5区SI 100-11 SG5区SI 116-7
SG5区SI 100-14 SG5区SI 116-8

	SG5区SI-100-16	SG5区SI-116-9	SG10区SI-14-4	SG10区SI-16-10
	SG5区SI-100-17	SG5区SI-116-17		
	SG5区SI-100-19		図版一九一	樟現山遺跡SG10区土師器・石製品
図版一八五	樟現山遺跡SG5区古墳時代建物跡・遺物集中地点・溝遺物		SG10区SI-16-14	SG10区SI-16-39
	SG5区SI-116-32	SG5区SX-118-34～40	SG10区SI-16-16	SG10区SI-16-41
	SG5区SI-116-34	SG5区SD-41-3	SG10区SI-16-18	SG10区SI-16-44
	SG5区SI-116-34内面	SG5区SD-41-4	SG10区SI-16-19	SG10区SI-16-46
	SG5区SI-116-47	SG5区SD-41-5	SG10区SI-16-20	SG10区SI-16-56
	SG5区SI-116-49	SG5区SD-41-7	SG10区SI-16-21	SG10区SI-16-61・62
	SG5区SI-116-50	SG5区SD-41-15	SG10区SI-16-22	SG10区SI-18a-5
	SG5区SI-116-51・52	SG5区SD-42-10	SG10区SI-16-24	SG10区SI-18a-5底部の 白土
	SG5区SI-116-54	SG5区SD-42-11	SG10区SI-16-26	
	SG5区SX-118-11	SG5区SD-44-6	SG10区SI-16-35	図版一九二
	SG5区SX-118-14	SG5区SD-44-14	樟現山遺跡SG10区土師器・灰土塊・石製品	SG10区SI-19a-10
	SG5区SX-118-21		SG10区SI-19a-1	SG10区SI-19a+b-24
図版一八六	樟現山遺跡SG5区古墳時代溝・土坑遺物		SG10区SI-19a-2	SG10区SI-19a+b-30
	SG5区SD-101-3	SG5区SK-198-1	SG10区SI-19a-3	SG10区SI-20-7
	SG5区SD-101-10	SG5区SK-203-3	SG10区SI-19a-4	SG10区SI-20-9
	SG5区SD-101-35	SG5区SK-203-4	SG10区SI-19a-5	SG10区SI-20-10
	SG5区SD-101-40	SG5区SK-203-7	SG10区SI-19a-7	SG10区SI-20-11
	SG5区SD-101-41～43	SG5区SK-203-9	SG10区SI-19a-9	SG10区SI-20-11底面
	SG5区SK-31-2	SG5区SK-203-13	SG10区SI-19a-13	SG10区SI-20-12
	SG5区SK-34-5	SG5区SK-204-1	SG10区SI-19a-14	SG10区SI-20-17
	SG5区SK-35-1	SG5区SK-204-2	SG10区SI-19a-17	
	SG5区SK-191-3		図版一九三	樟現山遺跡SG10区土師器・須恵器・土・石製品
図版一八七	樟現山遺跡SG5区古墳時代土坑・低地包含層・遺構外・平安時代土坑・近世溝遺物		SG10区SI-20-13	SG10区SI-23-10
	SG5区SK-204-12	SG5区低地包含層-16・17	SG10区SI-20-25～28	SG10区SI-23-12
	SG5区SK-207-4	SG5区低地包含層-18～22	SG10区SI-22-4	SG10区SI-23-25
	SG5区SK-208-1	SG5区古墳時代の遺構外-1	SG10区SI-22-9	SG10区SI-23-14
	SG5区SK-208-3	SG5区古墳時代の遺構外-3	SG10区SI-22-8	SG10区SI-23-26
	SG5区SK-215-3	SG5区古墳時代の遺構外-7	SG10区SI-22-12	SG10区SI-23-27
	SG5区SK-218-3	SG5区SK-120-1	SG10区SI-22-2	SG10区SI-23-28
	SG5区SK-220-2	SG10区SD-135-1	図版一九四	樟現山遺跡SG10区土師器・須恵器・石製品
	SG5区SK-224-1	SG10区SD-135-1内面	SG10区SI-23-22	SG10区SI-25-11
	SG5区SK-224-1内面	SG10区SD-135-1内底面	SG10区SI-23-29	SG10区SI-25-25
	SG5区低地包含層-3		SG10区SI-23-30上半	SG10区SI-25-25底面
図版一八九	樟現山遺跡SG9区土師器・須恵器・陶器・石製品・瓦		SG10区SI-23-30下半	SG10区SI-25-26
	樟現山SG9区SD-7-1	樟現山SG9区中央区南東部低地-9	SG10区SI-23-35	SG10区SI-25-27
	樟現山SG9区SD-7-2	樟現山SG9区中央区南東部低地-10	SG10区SI-23-37	SG10区SI-25-27底面
	樟現山SG9区SD-8-1	樟現山SG9区中央区南東部低地-1	SG10区SI-24-2	SG10区SI-25-35
	樟現山SG9区中央区南東部低地-1	樟現山SG9区中央区南東部低地-2	SG10区SI-25-5	SG10区SI-25-37
	樟現山SG9区中央区南東部低地-2	樟現山SG9区中央区南東部低地-3	SG10区SI-25-6	SG10区SI-25-38
	樟現山SG9区中央区南東部低地-3	樟現山SG9区中央区南東部低地-4	SG10区SI-25-8	SG10区SI-25-40
	樟現山SG9区中央区南東部低地-4	樟現山SG9区中央区南東部低地-5	SG10区SI-25-85	SG10区SI-25-40
	樟現山SG9区中央区南東部低地-5	樟現山SG9区中央区南東部低地-6	SG10区SI-25-87	SG10区SI-25-40
	樟現山SG9区中央区南東部低地-6	樟現山SG9区中央区南東部低地-7	SG10区SI-25-87	SG10区SI-25-40
	樟現山SG9区中央区南東部低地-7	樟現山SG9区西區遺構外-2	SG10区SI-25-88	SG10区SI-30-1
	樟現山SG9区中央区南東部低地-8	樟現山SG9区西區遺構外-5	SG10区SI-25-94	SG10区SI-30-12
	樟現山SG9区中央区南東部低地-8上半	樟現山SG9区西區遺構外-6	SG10区SI-25-97	SG10区SI-30-35-36
	樟現山SG9区中央区南東部低地-8下半		SG10区SI-25-103	
図版一八九	樟現山遺跡SG10区土師器・須恵器・石製品		図版一九五	樟現山遺跡SG10区土師器・石製品
	SG10区SI-2-1	SG10区SI-6-1	SG10区SI-25-54	SG10区SI-25-108
	SG10区SI-2-4	SG10区SI-6-3	SG10区SI-25-54杯部内面	SG10区SI-25-111
	SG10区SI-2-6	SG10区SI-6-8	SG10区SI-25-56	SG10区SI-25-115
	SG10区SI-2-8	SG10区SI-2-14	SG10区SI-25-58	SG10区SI-25-116
	SG10区SI-2-10	SG10区SI-6-18	SG10区SI-25-85	SG10区SI-25-116脚内面
	SG10区SI-2-12	SG10区SI-6-19	SG10区SI-25-87	SG10区SI-25-116
	SG10区SI-2-15	SG10区SI-6-24	SG10区SI-25-87	SG10区SI-28-5
	SG10区SI-2-16・17	SG10区SI-6-29	SG10区SI-25-87	SG10区SI-28-16
	SG10区SI-2-28	SG10区SI-6-32	SG10区SI-25-88	SG10区SI-30-1
	SG10区SI-2-34		SG10区SI-25-94	SG10区SI-30-12
図版一九〇	樟現山遺跡SG10区土師器・須恵器・石製品		SG10区SI-25-97	SG10区SI-30-35-36
	SG10区SI-6-44a	SG10区SI-15-2	SG10区SI-25-103	
	SG10区SI-6-44b	SG10区SI-15-8	図版一九六	樟現山遺跡SG10区土師器
	SG10区SI-6-45・46	SG10区SI-15-21	SG10区SI-32-8	SG10区SI-34a-7
	SG10区SI-9-15	SG10区SI-16-1	SG10区SI-32-8底面	SG10区SI-34a-10
	SG10区SI-10-15	SG10区SI-16-2	SG10区SI-33-4	SG10区SI-34a-11
	SG10区SI-10-15底部	SG10区SI-16-3	SG10区SI-33-6	SG10区SI-34a-12
	SG10区SI-13-4	SG10区SI-16-4	SG10区SI-33-9	SG10区SI-34a-13
	SG10区SI-14-1	SG10区SI-16-9	SG10区SI-33-9杯部内面	SG10区SI-34a-14
			SG10区SI-34a-1	SG10区SI-34a-16
			SG10区SI-34a-2	SG10区SI-34a-17
			SG10区SI-34a-4	SG10区SI-34a-22
			SG10区SI-34a-5	SG10区SI-34a-23
			SG10区SI-34a-6	
図版一九七	樟現山遺跡SG10区土師器・羽口・支脚・石製品		SG10区SI-34a-24	SG10区SI-36-1
			SG10区SI-34a-25	SG10区SI-36-3
			SG10区SI-34a-26	SG10区SI-36-4
			SG10区SI-34a-30	SG10区SI-36-17
			SG10区SI-34a-33	SG10区SI-36-21上面
			SG10区SI-34a-34	SG10区SI-36-21下面
			SG10区SI-34a-38	SG10区SI-36-22
			SG10区SI-34a-46	SG10区SI-37-11
			SG10区SI-34a-63	SG10区SI-37-14～16
			SG10区SI-34a-66～68	

圖版一九八 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、土玉、石製品
 SG10 区 SI-40-15 SG10 区 SI-47-10
 SG10 区 SI-40-18 SG10 区 SI-47-17·18
 SG10 区 SI-45-1 SG10 区 SI-49-6
 SG10 区 SI-45-1 底面 SG10 区 SI-49-9
 SG10 区 SI-45-2 SG10 区 SI-49-10
 SG10 区 SI-45-7 SG10 区 SI-50-3
 SG10 区 SI-45-12~14 SG10 区 SI-50-4
 SG10 区 SI-45-15 SG10 区 SI-50-7
 SG10 区 SI-47-4 SG10 区 SI-50-8
 SG10 区 SI-47-8 SG10 区 SI-50-9

圖版一九九 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、石製品、鉄珠
 SG10 区 SI-50-10 SG10 区 SI-50-67
 SG10 区 SI-50-12 SG10 区 SI-50-68
 SG10 区 SI-50-13 SG10 区 SI-50-71
 SG10 区 SI-50-14 SG10 区 SI-50-72
 SG10 区 SI-50-19 SG10 区 SI-50-73
 SG10 区 SI-50-49 SG10 区 SI-50-74
 SG10 区 SI-50-44 SG10 区 SI-53-1
 SG10 区 SI-50-59 SG10 区 SI-53-2
 SG10 区 SI-50-60 SG10 区 SI-53-4

圖版二〇〇 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、石製品
 SG10 区 SI-53-4 杯部底面 SG10 区 SI-59-4
 SG10 区 SI-55-10 SG10 区 SI-59-10
 SG10 区 SI-55-12 SG10 区 SI-59-14
 SG10 区 SI-55-15 SG10 区 SI-59-15·16
 SG10 区 SI-56-1 SG10 区 SI-60-7
 SG10 区 SI-57-1 SG10 区 SI-60-7
 SG10 区 SI-57-10 SG10 区 SI-60-22
 SG10 区 SI-57-14 SG10 区 SI-61-2
 SG10 区 SI-59-1 SG10 区 SI-61-19
 SG10 区 SI-59-3 SG10 区 SI-64-1

圖版二〇一 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、石製品
 SG10 区 SI-64a-6 SG10 区 SI-65-16
 SG10 区 SI-64a-10 SG10 区 SI-66-1
 SG10 区 SI-64a-32 SG10 区 SI-66-3
 SG10 区 SI-64a-33 SG10 区 SI-66-4
 SG10 区 SI-64a-49 SG10 区 SI-66-5
 SG10 区 SI-64a-50·51 SG10 区 SI-66-10
 SG10 区 SI-64a-52 SG10 区 SI-66-17
 SG10 区 SI-64a-53~55 SG10 区 SI-66-29
 SG10 区 SI-64a-56 SG10 区 SI-66-30
 SG10 区 SI-64a-58 SG10 区 SI-66-31
 SG10 区 SI-65-1

圖版二〇二 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、羽口、石製品
 SG10 区 SI-66-38·39 SG10 区 SI-67-19
 SG10 区 SI-66-40 SG10 区 SI-70-1
 SG10 区 SI-67-2 SG10 区 SI-70-10
 SG10 区 SI-67-3 SG10 区 SI-70-11
 SG10 区 SI-67-4 SG10 区 SI-70-12
 SG10 区 SI-67-6 SG10 区 SI-70-13
 SG10 区 SI-67-7 SG10 区 SI-70-15
 SG10 区 SI-67-10 SG10 区 SI-70-15 送風口
 SG10 区 SI-67-16 SG10 区 SI-70-16
 SG10 区 SI-67-17 SG10 区 SI-70-16 内面
 SG10 区 SI-67-18

圖版二〇三 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、石製品
 SG10 区 SI-70-17 SG10 区 SI-72-12
 SG10 区 SI-72-1 SG10 区 SI-72-13
 SG10 区 SI-72-2 SG10 区 SI-72-14
 SG10 区 SI-72-5 SG10 区 SI-72-23·24
 SG10 区 SI-72-7 SG10 区 SI-73-2
 SG10 区 SI-72-7 内面 SG10 区 SI-73-4
 SG10 区 SI-72-8 SG10 区 SI-73-7
 SG10 区 SI-72-10 SG10 区 SI-73-14·15
 SG10 区 SI-72-11

圖版二〇四 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、石製品
 SG10 区 SI-74-1 SG10 区 SI-76-1
 SG10 区 SI-74-2 SG10 区 SI-76-1 底面
 SG10 区 SI-74-3 SG10 区 SI-78-1
 SG10 区 SI-74-11 SG10 区 SI-78-2
 SG10 区 SI-75-4 SG10 区 SI-78-3
 SG10 区 SI-75-6 SG10 区 SI-78-4
 SG10 区 SI-75-12 SG10 区 SI-78-5
 SG10 区 SI-75-13 SG10 区 SI-78-6
 SG10 区 SI-75-14 上面 SG10 区 SI-78-8
 SG10 区 SI-75-14 下面

圖版二〇五 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、石製品、玉
 SG10 区 SI-78-11 SG10 区 SI-84-1
 SG10 区 SI-78-13 SG10 区 SI-84-2
 SG10 区 SI-78-14 SG10 区 SI-84-3
 SG10 区 SI-78-15 SG10 区 SI-84-4
 SG10 区 SI-78-19 侧面·破面 SG10 区 SI-84-8
 SG10 区 SI-80-6 SG10 区 SI-84-10
 SG10 区 SI-81-18·19 SG10 区 SI-86-1
 SG10 区 SI-83-2 SG10 区 SI-86-8
 SG10 区 SI-83-3 SG10 区 SI-86-18

圖版二〇六 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、石製品、土玉
 SG10 区 SI-86-21 SG10 区 SI-88-2
 SG10 区 SI-87-1 SG10 区 SI-88-3
 SG10 区 SI-87-2 SG10 区 SI-88-4
 SG10 区 SI-87-3 SG10 区 SI-88-5
 SG10 区 SI-87-3 内面 SG10 区 SI-88-16
 SG10 区 SI-87-4 SG10 区 SI-88-18
 SG10 区 SI-87-5 SG10 区 SI-88-19
 SG10 区 SI-87-6 SG10 区 SI-88-23
 SG10 区 SI-87-10 侧面·破面 SG10 区 SI-89a-1
 SG10 区 SI-88-1

圖版二〇七 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、石製品、金床石
 SG10 区 SI-89a-2 SG10 区 SI-101-17 上半
 SG10 区 SI-89a-3 SG10 区 SI-101-17 下半
 SG10 区 SI-89a-14 SG10 区 SI-101-18
 SG10 区 SI-89a-16 SG10 区 SI-101-19 ~ 22
 SG10 区 SI-89a-19 SG10 区 SI-105-76
 SG10 区 SI-101-1 SG10 区 SI-106-12 左側面
 SG10 区 SI-101-4 SG10 区 SI-106-12 表面
 SG10 区 SI-101-7 SG10 区 SI-106-12 右側面
 SG10 区 SI-101-13 SG10 区 SI-106-12 裏面
 SG10 区 SI-101-14 SG10 区 SI-106-12 下面

圖版二〇八 梅塢山遺跡 SG10 区 土師器、須惠器、石製品
 SG10 区 SI-106-7 SG10 区 SI-111-1
 SG10 区 SI-106-9 SG10 区 SI-111-4
 SG10 区 SI-108-2 SG10 区 SI-111-7
 SG10 区 SI-108-3 SG10 区 SI-111-8
 SG10 区 SI-108-5 SG10 区 SI-111-9
 SG10 区 SI-110-1 SG10 区 SI-111-10
 SG10 区 SI-110-2 SG10 区 SI-111-13
 SG10 区 SI-110-8 SG10 区 SI-SD-43-9
 SG10 区 SI-110-9 SG10 区 SI-SD-43-25
 SG10 区 SI-110-28

圖版二〇九 梅塢山遺跡 SG10 区 古墳時代溝 土師器
 SG10 区 SD-43-34 SG10 区 SD-41-42-32
 SG10 区 SD-221-10 SG10 区 SD-41-42-33
 SG10 区 SD-41-42-8 SG10 区 SD-41-42-40
 SG10 区 SD-41-42-9 SG10 区 SD-41-42-46
 SG10 区 SD-41-42-25 SG10 区 SD-41-42-46 底面
 SG10 区 SD-41-42-26 SG10 区 SD-41-42-47
 SG10 区 SD-41-42-27 SG10 区 SD-41-42-53
 SG10 区 SD-41-42-30 SG10 区 SD-41-42-54
 SG10 区 SD-41-42-31 SG10 区 SD-41-42-59
 SG10 区 SD-41-42-31 底面 SG10 区 SD-41-42-61

圖版二一〇 梅塢山遺跡 SG10 区 古墳時代溝 土師器、須惠器、羽口、石製品
 SG10 区 SD-41-42-62 SG10 区 SD-319-3
 SG10 区 SD-41-42-63 SG10 区 SD-527-1
 SG10 区 SD-41-42-64 SG10 区 SD-527-4
 SG10 区 SD-41-42-65 SG10 区 SD-527-6
 SG10 区 SD-41-42-71~73 SG10 区 SD-527-7
 SG10 区 SD-41-42-74~76 SG10 区 SD-527-11
 SG10 区 SD-41-42-77 SG10 区 SD-527-20
 SG10 区 SD-304b-4 SG10 区 SD-527-21
 SG10 区 SD-304b-6 SG10 区 SD-527-22
 SG10 区 SD-319-2

圖版二一一 梅塢山遺跡 SG10 区 古墳時代溝 土師器、須惠器、石製品
 SG10 区 SD-527-27 SG10 区 SK-207-1
 SG10 区 SD-594-3 SG10 区 SK-207-2
 SG10 区 SD-594-4 SG10 区 SK-222-2
 SG10 区 SD-594-5 SG10 区 SK-222-4
 SG10 区 SD-821-1 SG10 区 SK-222-4 底面
 SG10 区 SD-821-2·3 SG10 区 SK-266-2
 SG10 区 SK-621-15 SG10 区 SK-274-1
 SG10 区 SK-210-2 SG10 区 SK-346-4
 SG10 区 SK-46-2 SG10 区 SK-346-4 底面
 SG10 区 SK-46-7

- 図版二一二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代土坑・遺構外・平安時代
 建物跡・中世井戸の遺物
 SG10 区 SK-439-3 SG10 区 SI-90-2
 SG10 区 SK-801-3 SG10 区 SI-90-3
 SG10 区 SK-803-1 SG10 区 SI-90-3 底面
 SG10 区 SK-903-7 SG10 区 SI-90-4
 SG10 区 氈地遺物包含層 SG10 区 SI-90-5・6
 -24 SG10 区 SE-237-1
 SG10 区古墳時代の遺構外 SG10 区 SE-237-3
 -14・17 SG10 区 SE-252-1
 SG10 区古墳時代の遺構 SG10 区 SE-252-3・4
 外-21 SG10 区 SE-344-1
 SG10 区 SI-90-1 SG10 区 SE-377-2
- 図版二一三 権現山遺跡 SG10 区 中世井戸の木製品
 SG10 区 SE-569-1 側板 SG10 区 SE-569-3~5
 SG10 区 SE-569-1 底板 SG10 区 SE-569-6a・6b・7・8
 SG10 区 SE-569-2
- 図版二一四 権現山遺跡 SG10 区 中世井戸・土坑・遺構外と近世
 土坑・溝および時期不明土坑の遺物
 SG10 区 SE-569-9 SG10 区 SD-201a-2
 SG10 区 SE-569-10 SG10 区 SD-201a-3・4
- SG10 区 SE-569-11 SG10 区 SD-201a-5
 SG10 区 SK-92-1 SG10 区 SD-201a-6
 SG10 区 P-425-1 SG10 区 SD-201a-7
 SG10 区 P-640-1a・1b SG10 区 SD-201a-8・9
 SG10 区中世遺構外-1 SG10 区 SD-201a-13
 SG10 区中世遺構外-2 SG10 区 SK-254-1
 SG10 区中世遺構外-4 SG10 区 SK-272-1
 SG10 区 SK-71-1 SG10 区 SK-532-1
 SG10 区 SK-71-4
- 図版二一五 権現山遺跡 SG15 区 土師器・近世陶器
 磯岡遺跡 SG10 区 土師器
 SG15 区 SD-1-1 磯岡 SG9 区 SI-49a-1
 SG15 区流路 2 北方-2 磯岡 SG9 区 SI-49a-2
 SG15 区流路 2 北方-4 磯岡 SG9 区 SI-49a-4
 SG15 区流路 2 北方-6 磯岡 SG9 区 SI-49b-5
 磯岡 SG9 区 SI-49b-6
- 図版二一六 権現山遺跡 SG5 区・SG10 区 航空写真
 上部 SG10 区 2000 年 2 月 10 日撮影
 下部 SG5 区 1998 年 7 月 28 日撮影
 合成写真 上方が北

権現山遺跡南部 遺構一覧・検索表 (第2分冊)

権現山遺跡 SG2 区

古墳時代の土坑 2 基 (SK-100・103) は第 144 表 (p.445) を参照。

古墳時代の自然流路

	グリッド	東側関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
流路 1	X12 ~ 13.5 Y20 ~ 22	流路 2 と同時存在	3.5 ~ 11.0	0.16 ~ 0.46	SG15 区の流路 2 に連続?	446 ~ 459
流路 2	X11.5 ~ 13.5 Y10.5 ~ 21	流路 1 と同時存在、流路 4 に合流	2.4 ~ 7.5	0.26 ~ 0.64	同上	447 ~ 460
流路 3	X11.5 ~ 13 Y18.5 ~ 19.5		5.0 ~ 13.1	0.32		447 ~ 460
流路 4	X11 ~ 12 Y10 ~ 21.5	流路 2 が合流	5.7 ~ 9.5	0.40 ~ 0.64	SK 47 が河原部付近にあり	447 ~ 462
流路 5	X10 ~ 11 Y19 ~ 21.5		1.2 ~ 3.9	0.19 ~ 0.34		454 ~ 462
流路 6	X9 ~ 10 Y19.5 ~ 21		7.5 ~ 8.7	0.19 ~ 0.45		454 ~ 462
流路 7	X8.5 ~ 10 Y20 ~ 22		2.3 ~ 8.5	0.10 ~ 0.14		457 ~ 462

時期不明の溝状遺構

	グリッド	東側関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
SD-46	8.5.20.5	SK-11・13 と連続	0.49 ~ 0.70	0.07 ~ 0.12		462 ~ 463

時期不明の集石遺構

	グリッド	東側関係	径 (m)	高さ (m)	その他	距離ページ
SK-47	11.0.19.0	流路 4 の A+C 部下	約 0.80	0.03 ~ 0.22		463

時期不明の土坑 49 基 (SK-1 ~ 45・101・102) は第 147 表 (p.464 ~ 466) を参照。

権現山遺跡 SG5 区

古墳時代の居館 (居宅) 関連施設 区画溝

	グリッド	東側関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
SD-43	16.16-17	SI-100 ~ SD-43 ~ SD-44	1.00 ~ 2.10	0.26 ~ 0.60	SG10 区に連続、区画北側区画溝	486 ~ 491
SD-227	13.16-17	SD-227 ~ SD-101 ~ SI-20 ~ 21	1.23 ~ 1.93	0.44 ~ 0.66	区画南側区画溝	492 ~ 498

古墳時代の居館 (居宅) 関連施設 方形構列遺構

	グリッド	東側関係	短冊 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
SA-151	14.16-17, 15.17, 16.16-17	PO-P7 ~ SK-35 ~ SK-36, SI-18 ~ 127 (7) より古, SD-41・101 より古 (推定)	東西 22 間 (47.1m)、北辺 12 間 (24.7m) 以上、東辺 9 間 (18.1m) 以上	0.40 ~ 1.04	SG15 区 SD-43 と SG10 区 SD-227 が北側に、SD-227 が南側に平行する区画溝として存在	498 ~ 504

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	短冊 (m)	東側関係	高さ	付随施設	距離ページ
SI-1	19-15	東西 9 間 1.75 × 南北 4.80		カマド 1 (東)	竪穴 1	508 ~ 509
SI-2	19-15-16	(推定) 東西 7.44 × 南北 7.54	SI 45 より新	カマド 1 (北)	竪穴 1、人口施設	509 ~ 511
SI-3	18-15	東西 4.96 以上 × 南北 6.91		カマド 1 (北)	竪穴 1、人口施設	511 ~ 513
SI-4	18-16	東西 (推定) 7.10 × 南北 7.05	SG10 区 SI 18 より新? SG10 区 SI 21 より古?	不明	墓出土坑 1	514 ~ 516
SI-5	17-15, 18-15	東西 3.75 以上 × 南北 8.51		不明	竪穴 1	516 ~ 519
SI-6	17-15-16	東西 7.00 × 南北 6.05	SI 95 より新	カマド 1 (北)	竪穴 1	519 ~ 525
SI-7	16-16, 17-16	東西 4.04 × 南北 3.35	SI 100 より新	カマド 1 (北)		525 ~ 529
SI-8	15-16, 16-16	東西 2.74 以上 × 南北 5.03	SI 12 より新	カマド 1 (北)	竪穴 1	529 ~ 532
SI-9	15-16, 16-16	東西 4.68 × 南北 4.90		カマド 1 (北)	竪穴 1	532 ~ 535
SI-10	16-16	東西 3.89 × 南北 3.99		カマド 1 (北)	竪穴 1、人口施設	535 ~ 537
SI-11	15-17, 16-17	東西 7.67 × 南北 7.37	SI 11 ~ SD-42 ~ SD-41	不明	竪穴 2	537 ~ 541
SI-12	15-16	東西 2.51 以上 × 南北 (推定) 4.80	SI 8 より古	カマド 1 (東)	竪穴 1	541 ~ 544
SI-13	15-16	東西 2.34 以上 × 南北 4.96 以上	SD-148 より古?	カマド 1 (東)		544 ~ 545
SI-14	15-16	東西 6.01 × 南北 6.95	SI 14 ~ SK-132 ~ SK-131, SI 15 ~ SK-87 ~ 88 より古, SD-148 と連続	カマド 1 (北)	竪穴 1	545 ~ 548
SI-15	15-16	東西 5.53 × 南北 5.25	SI 14 ~ SK-132 ~ SK-131, SI 15 より新, SD-148 より新?, SK-68-90 より古	カマド 1 (北)	竪穴 1	548 ~ 554

SI 16	15-16	東西 185m 以上×南北 4.71	SI 17 より新	カマド 1 (北)	554 ~ 556
SI 17	14-16, 15-16	東西 4.75 以上×南北は 6.47	SI 16 より古	炉 1 (北)	556 ~ 561
SI 18	14-17, 15-17	東西 4.71 ×南北 4.65	SA 151 より新	カマド 1 (北)	561 ~ 564
SI 19	14-16-17	東西 6.83 ×南北 6.04	SK 96 と重複	カマド 1 (北)	564 ~ 567
SI 20	14-17-18	東西 4.25 ×南北 4.20	SD 101+SK 106 より新	カマド 1 (南)	567 ~ 571
SI 21	13-17, 14-17	東西 5.25 ×南北 5.28	SD 101 より新	カマド 1 (南)	571 ~ 575
SI 22	14-17-18	東西 4.35 ×南北 5.84	SI 107 より古	不明	575 ~ 579
SI 23	13-16-17	東西 5.00 ×南北 5.61	SI 25 → SI 23 + SK 110	カマド 1 (南)	579 ~ 581
SI 24	13-17-18	東西 8.57 ×南北 8.01	SD 108 より古	炉 1 (北)	581 ~ 585
SI 25	13-16	東西 (推定) 5.09 ×南北 5.18	SI 25 → SI 23 + SK 110	不明	586 ~ 587
SI 26	12-16, 13-16	東西 3.91 以上×南北 4.88	SK 117 より古	カマド 1 (南)	587 ~ 589
SI 28	12-16-17	東西 6.25 ×南北 6.00	P 255 → SI 29b → SI 29a → SI 28, SB 159 と重複	カマド 1 (北)	589 ~ 590
SI 29a	12-17	東西 5.53 ×南北 5.63	P 255 → SI 29b → SI 29a → SI 28, SB 159 と重複	不明	591 ~ 595
SI 29b	同上	同上	同上	不明	591 ~ 593
SI 45	19-15-16	(推定) 東西 5.50 ×南北 5.50	SI 2 より古	不明	595 ~ 596
SI 95	17-15-16	東西 6.42 ×南北 6.12	SI 6 より古	炉 1 (北)	597 ~ 598
SI 99	12-16-17, 13-16-17	東西 4.14 ×南北 4.62	不明	不明	598 ~ 599
SI 100	16-16, 17-16	東西 7.63 ×南北 7.87	SI 7+SD 43+64 より古	不明	599 ~ 603
SI 107	14-17-18	東西 3.80 ×南北 2.78	SI 22 より新	カマド 1 (北)	604
SI 116	14-16	東西 3.20 以上×南北 6.85	SI - 116 → SK 130 → SD 101	不明	605 ~ 610
SI 137	13-17, 14-17	東西 6.10 ×南北 6.05	SA 151 より新	カマド 1 (南)	611 ~ 613
SI 155	13-17	東西 (推定) 4.33 ×南北 3.57 以上	SD 108 より古	不明	人 1 階段 613 ~ 614

古墳時代の遺物集積地点(祭祀遺構)

グリッド	形状	集積関係	規模 (m)	深さ (m)	距離(ページ)
SX 118	10-17	隅丸方形	SD 133 より古	東西 2.35 ×南北 (推定) 2.26	0.05 ~ 0.13 614 ~ 618

古墳時代の性格不明遺構

グリッド	形状	集積関係	規模 (m)	深さ (m)	距離(ページ)
SX 129	8-18	不整形	直径 8.26 以上×短径 3.64	0.13 ~ 0.20	618

古墳時代の溝状遺構

グリッド	集積関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離(ページ)
SD 41	13 ~ 15-16, 15-16-17, 16-17	SI 11 → SD 42 → SD 41, SD 101+SA 151 と重複	0.06 ~ 1.80	0.40 ~ 0.55	SK 10 区 SD 41 に連続 619 ~ 621
SD 42	15-17-18, 16-17	SI 11 → SD 42 → SD 41+SK 98	1.20 ~ 3.76	0.52 ~ 0.55	SK 10 区 SD 42 に連続 622 ~ 623
SD 44	16-16-17	SI 100 → SD 43 → SD 44	0.06 ~ 1.70	0.27 ~ 0.57	SK 10 区に連続 623 ~ 626
SD 101	13-16-17, 14-16-17	SI 116+SK 130+SD 227 + SD 101 → SI 20 + 21 + SD 108 SD 41+SA 151 と重複	1.06 ~ 1.76	0.43 ~ 0.53	12 世紀以降の溝が重複している可能性もある 626 ~ 630

古墳時代の土坑 71 基 (SK 31・34・35・47・51・82・86・92・96・98・106・110 ~ 112・121・130・140・142・144・145・149・181・185 ~ 200・202 ~ 208・210 ~ 215・217 ~ 226・247 ~ 253) は別 199 表 (p.631 ~ 640) を参照。

平安時代の土坑

グリッド	形状	集積関係	規模 (m)	深さ (m)	距離(ページ)
SK 120	9.5-17.5-18.0	隅丸長方形	直径 2.09 ×短径 0.55	0.38	668 ~ 669

中世～近世の土坑

グリッド	形状	集積関係	規模 (m)	深さ (m)	距離(ページ)
SK 138	15.0-16.5	隅丸長方形	直径 1.45 ×短径 1.12	0.19	669

中世～近世の溝状遺構

グリッド	集積関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離(ページ)
SD 133	10.0-17.5-18.0	SX 118 より新	0.22 ~ 0.34	0.06 ~ 0.11	SD 134 に分岐する 669 ~ 670
SD 134	10.0-17.5-18.0		0.63 ~ 1.41	0.23 ~ 0.34	SD 133 が分岐する 670
SD 135	10.5-17.5-18.0	SK 136・216 より新	1.69 ~ 2.04	0.24 ~ 0.39	670 ~ 671

時期不明の掘立柱建物跡

グリッド	形状	集積関係	長さ	幅	距離(ページ)
SB 154	15-16-17	長方形	SD 41 と重複	奥行 4 間 (3.00m)	奥行 2 間 (3.42m) 671 ~ 672
SB 157	13-17	方形	SK 136・216 より新	奥行 2 間 (3.55 ~ 3.66m)	奥行 2 間 (3.48m) 672
SB 159	12-17	ほぼ方形	SI 28+29 より新	奥行 2 間 (5.27 ~ 5.42m)	奥行 2 間 (5.06 ~ 5.34m) 672 ~ 673

時期不明の横列

	グリッド	形状	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	距離ページ
SA-158	12-17	コの字状	S3-28・29と重複	東西3間 (0.23m)、南北1間 (西側1.00、東側1.76m)	0.12～0.35	673～674

時期不明の溝状遺構

	グリッド	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
SD-108	13-16～18	S3-24・155・SD-101・SK-100 より新	1.02～2.06	0.55～0.94		674～675
SD-115	11-17, 12-17	S8-159と重複	0.35～0.95	0.10～0.12		674～675
SD-148	15-16・17, 16-17	SK-146・150より古 S211・14・15と重複	0.38～0.78	0.25～0.32		675～676

時期不明の井戸跡

	グリッド	形状	非階段部	径 (m)	深さ (m)	距離ページ
SK-114	12-16	円形		1.00	2.80	676～677
SK-127	9-0・180	円形	SK-126より古	1.80	不明	677
SK-136	10-17	円形	SD-135より古	3.05	1.02	677～678
SK-216	10-17	楕円形	SD-135より古	1.90×1.40	1.58	677～678

時期不明の土坑 46基 (SK-27・30・32・33・36～40・46・49・50・52・81・83～85・87・88・90・91・94・97・103～105・109・113・117・119・122～126・128・131・132・139・141・143・146・147・150・152・153) は第214表 (p.678～682) を参照。

時期不明の柱穴状土坑 74基 (P-53～80・160～167・170・172～180・182～184・234～246・255～257・260～267) は第216表 (p.683～687) を参照。

権現山遺跡 SG9 区

古墳時代の土坑

	グリッド	形状	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	距離ページ
SK-37	6.5-23.0	円形	SD-7より古	直径 1.15×短径 1.05cm	0.19	688～690

時期・性格不明遺構 (通路状遺構?)

	グリッド	形状	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	距離ページ
SK-54	12.0-18.5	連続する円形並		南北幅 1.60～1.70程度	0.09～0.22	693～691

時期不明の溝状遺構

	グリッド	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
SD-7	7.0-23.0	SK-37より新	1.28～1.43	0.12～0.15	SD-8と連続?	691～693
SD-8	7.5-22.5, 8.0-22.5	SK-30と重複	1.16～2.64	0.11～0.21	SD-7と連続?	692～693
SD-34	8.0-21.0, 8.5-21.0		0.36～0.51	0.01～0.05		693～694
SD-35	8.0-20.0		0.59～1.02	0.14～0.43		693～694
SD-38	7.22, 8.22		1.26～1.94	0.08～0.17		693～695

時期不明の土坑 20基 (SK-9～14・16～22・33・39・53・57～59・64) は第220表 (p.695) を参照。

権現山遺跡 SG15 区

古墳時代以降の自然道路

	グリッド	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
道路1	15.0-21.5-22.0	SD-1・SK-3より古	12.2以上	約0.56		703～705
道路2	14.5-20.0, 15.0-20.0		2.8～11.0	約0.40		706～708

時期不明の土坑 7基 (SK-3～9) は第225表 (p.708) を参照。

時期不明の溝状遺構

	グリッド	非階段部	幅 (m)	深さ (m)	その他	距離ページ
SD-1	15-21.5	道路1より新	0.47～0.69	0.05～0.09		709
SD-2	15-20.5-21		0.48～0.70	最大0.70	SG2区の道路1に連続?	709～710

磯岡遺跡 SG9 区

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模 (m)	発掘関係	火焔	付属施設	総撮ページ
SI-49a	6.5 24.5	(推定) 1 辺 4.5 前後	SI-48 と重複	中 (土)	基礎穴 1	711 ~ 714
SI-49b	同上	同上	同上	同上	同上	711 ~ 714

時期不明の溝状遺構

	グリッド	発掘関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	総撮ページ
SD-40	6.0 24.0, 6.5 24.0 7.0 24.0		2.00 ~ 2.30	0.27 ~ 0.30	遺跡 SG9 区 SD-8 と関連?	714 ~ 715
SD-48	6.5 24.0	SI-49a・b を切る可能性あり	0.20 ~ 0.26	0.05 ~ 0.08		715

時期不明の焼土集中地点

	グリッド	形状	発掘関係	規模 (m)	厚さ (m)	総撮ページ
SK-50	7.0 24.5			直径 0.74 × 短径 0.56	0.06	716

時期不明の上坑 5 基 (SK-41・42・44・47・52) は第 229 表 (p.716) を参照。

第6章 権現山遺跡 SG2区

権現山遺跡 SG2区は、河内郡上三川町大字磯岡字西谷 407-1・407-2・408-1・408-2・408-5・409-1・409-2・410-1 に所在し、「西谷田」の低地部に立地する。権現山遺跡 SG5区 の集落部から東側の低地へ降りた部分である。SG2区 の位置は北緯 36° 28' 53"、東経 139° 54' 22" (世界測地系) である。権現山遺跡 SG2区 は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.1 ~ 79.2m、東側の磯岡遺跡台地部 (標高 80.0 ~ 80.2m) との比高が約 1.0m、西側の権現山遺跡 SG5区 台地部 (標高 80.0 ~ 80.5m) との比高が約 0.9 ~ 1.4m である。SG2区 の範囲は南北 100m × 東西 70m で、調査面積は 7,000㎡。権現山遺跡 SG2区 の北側には SG15区 が隣接し、南側には SG9区 が続く。

東西方向のベルト 5本と南北方向のベルト 1本を「キ」の字状に残して調査を行った。東西方向のベルト 5本の北側には、幅 2m の試掘トレンチ (1994年度に設定した TX11・TX12・TX13 と 1995年度の TX9・TX10) がそれぞれ位置している。

東西方向のトレンチ 5本で土層堆積状況を観察した後に、A区~F区 の各小地区ごとに直線状の掘乱溝 (後世の暗渠) を掘り下げ、また必要に応じてサブトレンチも設けて、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラの降下面を断面で確認した。テフラ層を参考にして古墳時代水田遺構の確認を目指したが、水田は認められなかった。群馬県域のように厚いテフラが降下した状況ではないので、水田にテフラが降下しても耕作ですぐに覆乱されることが予想できる。したがって、Hr-FA が薄層として残っている SG2区 は、古墳時代中・後期の水田に利用されなかったのであろう。As-B テフラは薄層として部分的に確認できたが、C区 などでは面的な広がり認められなかった部分もある。各小地区で認められた旧流路跡 7箇所および F区 の土坑群を調査した。流路 1から流路 7までは河川跡で、いずれも人為的な溝ではないと判断されている。

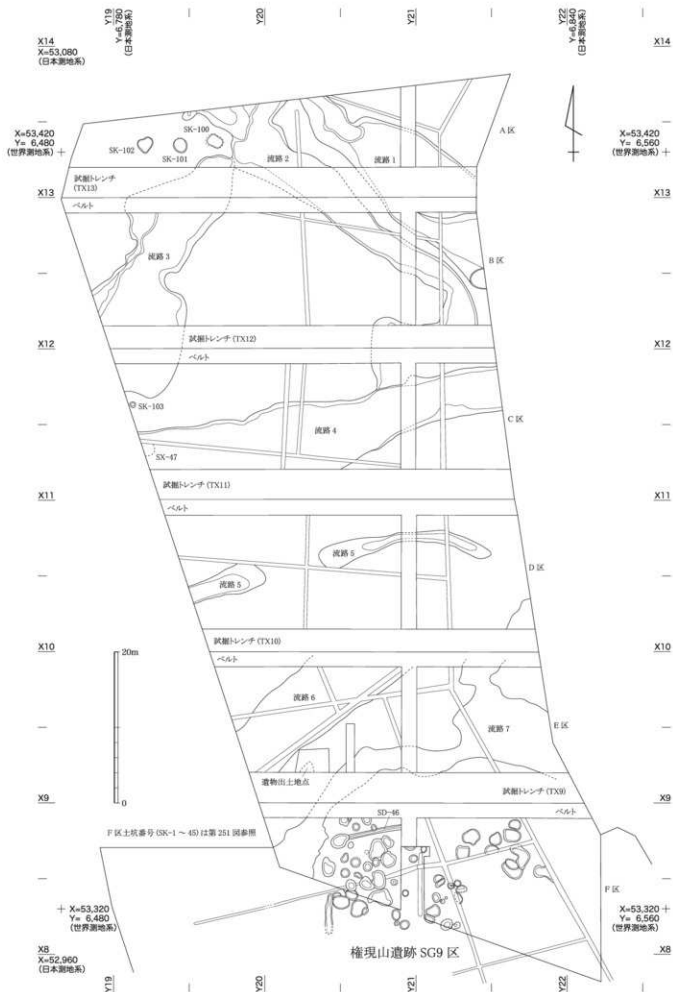
各地区ともに、地山の白色粘土層が出る面まで掘り下げて調査を行なった。試掘トレンチ (TX9 ~ TX13) では、さらに下の砂礫および砂礫層まで掘り下げた部分がある。TX13 トレンチでは、As-C 軽石よりも下層まで掘り下げて、13-21 グリッド付近から自然木が出土した。

SG2区 の南端部は、1999年度調査の権現山遺跡 SG9区 でも重複して調査を行った部分があり、SG2区 で調査済の土坑を再度確認している。この時に、SG2区 中央部南端で南北ベルト下に隠れていた土坑 4基・溝 1条の調査を実施できた (SG9区 SK-19 ~ 22 と SD-34)。

第1節 古墳時代の土坑 (第 240 図、写真図版 4・175)

古墳時代と考えられる土坑は SG2区 の北部にあり、SK-100・103 の 2基を調査した。各土坑の詳細を第 144 表に示す。SK-100 は袋状にオーバーハングする土坑で、弱くぐりける平面形で東半部底面がわずかに低いので、東半部を掘り広げた可能性が現地調査時に指摘されている。

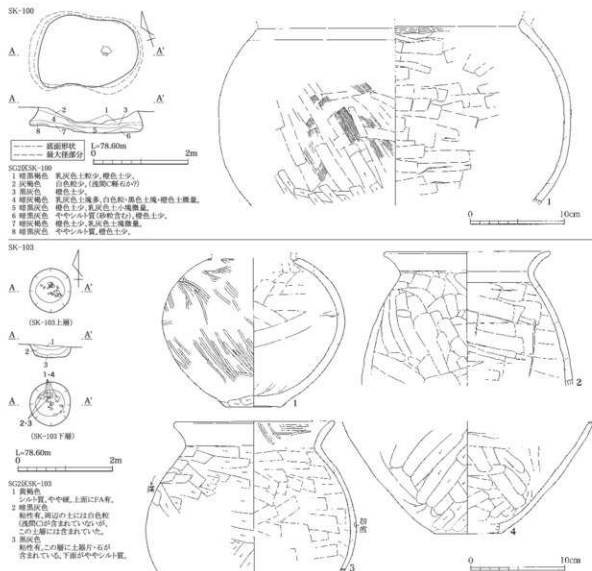
古墳時代と判断した根拠は出土土器だけでなく、後期初頭に降下した Hr-FA テフラと古墳前期に降下した浅間 C 軽石 (As-C) がある。ただし両土坑のテフラを屈折率などで同定したものではない。Hr-FA 火山灰が上面にある SK-103 の場合は、覆土下層で出土した中期末の土師器と矛盾しない。SK-103 の覆土中位と SK-100 の 2層中にある白色粒は現地調査時に As-C と判断されている。SK-100・103 の東方 40m (試掘トレンチ TX13 の 13-21 グリッド; 第 241 図) で確認された Hr-FA 層および As-C 層と対比して As-C と判断したものである。両土坑覆土の軽石は白色粒として少量含まれる程度なので、古墳前期に降下したテフラが古墳中期前葉~中葉の土坑へ流入したと考えることが適切であろう。SK-103 の稲稈圧痕がある土師器の類例は、SG2区 では遺構外 A区 の杯と流路 2 の甕にもあり、他地区では SG10区 SI-50 などにある。



第 239 図 権現山遺跡 SG2 区 全体図 (1/500)

第144表 権現山遺跡 SG2区 古墳時代の土坑

遺構名	グリッド	形状	垂向階層	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	軸線	覆土
SK-100	13.0-19.5	不規則円形	重層なし(断面あり)	2.08	1.44	0.53	N-72°-W	白色粒あり (As-C)
壁がカーブ・バッキングする。埋没しかけた土坑を東側へ傾り上げた可能性が現地調査時に考えられている。遺物は土師器大形甕の口~胴部、初期横根椀、鉢、漆塗片の土。土坑壁面の地山は水成堆積の乳白色粘土で、土坑底面の地山は砂礫層。								
SK-103	11.5-10.0	円形	重層なし	0.88	0.87	0.28		上面にFA、中に白色粒 (As-C) 覆土層にFAあり。遺物は土師器甕(3)と中形壺(1)の2個体および別個体(2-4)の破片が出土。土坑壁と底面の地山には礫を多く含む。



第240図 権現山遺跡 SG2区 SK-100-103 遺構・遺物

第145表 権現山遺跡 SG2区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 増加 段階	大きさ 縦×横	特徴	色調 粘土・地蔵 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG2区 SK-100				
1 土師器 甕	高 縦 19.7 最大 横 37.3	外面は胴部ナナメハケ後にナナメハラナド、下位ナメハラケズリ、内面はヨコハラナド後、胴下位に浅いヨコハケ。内面が暗褐色に汚れるが、破片化した後に付着したように見られる。	10YR5/2 灰黄期	底土 26cm 胴 1/12周、胴 1/6周 A区 SK-100
SG2区 SK-103				
1 土師器 壺	高 縦 15.7 底 6.0 最大 横 19.3	外面はハラケズリでわずかに凹底状。外面胴下部にヨコハラナドまたはヨコハラケズリ、外面胴部に密なナメハラミギキ。内面は底部に多方向と体部に横~斜位のハラナド、胴部ユビオサエ。	2.5YR5/8 明赤期 やや暗赤 透明細粒中々多、 白・黒・赤黒~細粒少 中々破置	底土 8cm、C区FA下層 の3片も接合 胴 1/2周、底全周 1、C区内側FA下

第6章 権現山遺跡 SG2区

2 土師器 遺	口 径 17.0 高 残 14.2 最大 径 22.4	外面の胴部はナメヘラナデで、非常に浅いハケメのように見える。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の胴部はヨコヘラナデ。外面胴部に20cm大の思痕あり。外面の口縁部が暗褐色に汚れる部分もあるが、破片化してから二次的に付着した疑いがある。 [注記] ① C区西側FA、D、C区西5、C区西7	7.5V84/3 堀 やや軽い 白・灰色硬～細粒多。 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	C区西部の26片とSK-103底上11cmの小片5点が接合 口2/3割、胴1/2割 注記は左欄
3 土師器 遺	口 径 16.9 高 残 15.9 最大 径 22.3	やや薄い。外面は胴下半に斜位と上半に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後、内面に少しだけヨコヘラミガキ。内面の胴部はヨコヘラナデ。外面に細粒が1箇所現れている。外面の中心以下に僅か明瞭に付着する。 [注記] ① ③、B区西、C区、C区西側FA、D、C区西11、C区西間C中～E	10YR7/4 に近い黄橙 やや軽い 白・黒・透明細～細 粒多、白硬少 軟質	底上11cm、底上8cmや C区西部の破片少数も接 合 口全割、胴11/12割 注記は左欄
4 土師器 遺	高 残 11.9 底 7.5 最大 径 26.6	胴の大きさに比べてやや薄い。外底面は外周部をヘラケズリ。外面は胴部ナメヘラケズリ。内面は底部に多方向ヘラケズリ。胴部に斜一横位ヘラナデ。 [注記] ① C区、C区西4、C区西5、C区西8、C区西10、C区西側FA、D、C区西間C中～E	5YR5/6 明赤橙 やや軽い 白・黒・灰色・透明 細～細粒多、白・灰色硬少 やや軟質	C区西部の31片とSK-103底上8cmの1片が同一個体 底1/3割 注記は左欄

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

SG2区の調査区は、北から順にA～F区と呼称している。この各地区で、流路1～7を調査した。南へ傾斜する地形にあるので、各流路は南東方向および南西方向へ流れていたと考えられる。

1995年3月に調査した試掘トレンチTX11～13の断面図が作成されているので、第241図に示した。遺跡の有無を確認する目的で設けたトレンチなので、特徴が記録されていない個別土層もある。この付近の低地堆積土全体に対して、I層（耕作土）からX層（砂層）およびXI層（砂礫層）までの共通記号を与え、それに該当する層の説明が記録されている。IV層が1108年に降下した浅間B軽石（As-B）、VI層が古墳後期初頭の極名ニツ岳澁川テフラ（Hr-FA）、VIII層が古墳前期の浅間C軽石（As-C）である。

流路1と流路2のプラント・オパール分析では、古墳時代層からイネが検出されていない（第7章第3節）。SG2区のすぐ北側に隣接する試掘トレンチTX14内14-20グリッドの低地堆積層でも、古墳前期以降降下した浅間C軽石の直下層でプラント・オパール分析を行い、やはりイネは検出されなかった。古墳時代層でイネ珪酸体を確認されるのは、SG2区からSG15を隔てて北方へ50mの地点にある試掘トレンチTX16内の流路覆土（16-19グリッドのHr-FA下層）まで離れている。SG2区周辺には古墳時代の水田が営まれていなかったと考えられる。

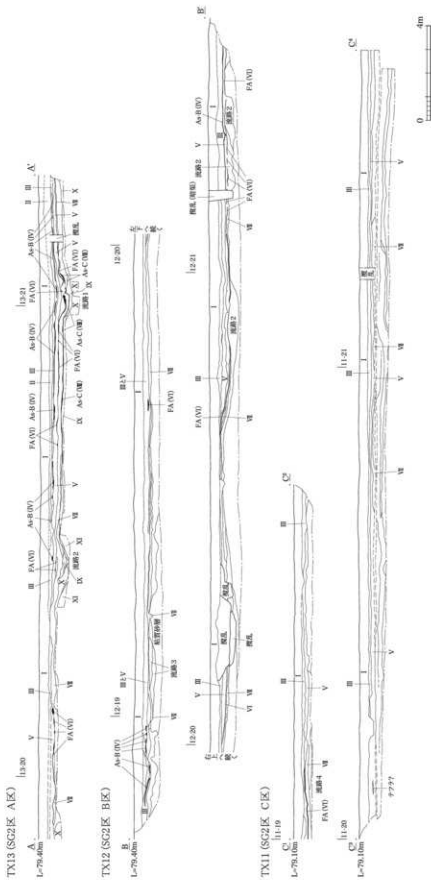
SG2区A区・B区 流路1（第241～244図、写真図版9・10）

A区とB区にまたがり、北と東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はない。西側の流路2と同時に存在し、流路2が流路1よりも少し早く埋没したと考えられる。流路1と流路2が、北方25mにある権現山遺跡SG15区の「流路2」に連続することも想定できる。幅は3.5m（北西部）～11.0m（南東部）。東西両岸からの深さを断面図A-A'で計測すると、古墳前期のAs-C降下時点で32～46cm、Hr-FA降下時点で32～36cm、As-B降下時には16～20cmほどの落ち込みで、埋没して浅くなるのがわかる。流路底（X層上面）の標高は78.86m。

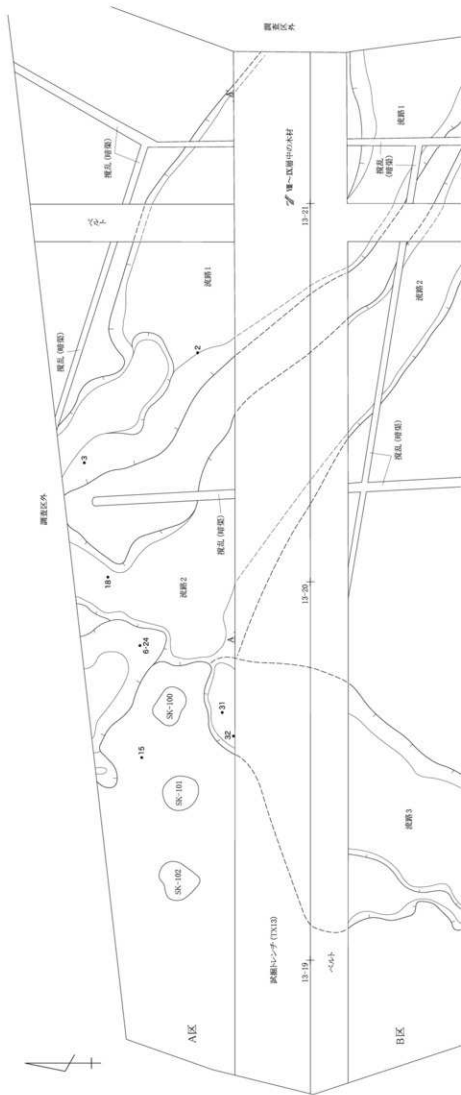
覆土は自然埋没で、古墳前期の浅間C軽石（As-C）、古墳後期初頭の極名澁川テフラ（Hr-FA）、1108年の浅間Bテフラ（As-B）が認められた。これらについて、13-21グリッドでテフラ検出分析を実施した（第7章第2節）。古墳前期から後期までの流路で、古代末にはほとんど埋没していたことがわかる。

A区ではHr-FA（VI層）よりも下位で自然木が出土した。試掘トレンチTX13内の13-21グリッドでは、As-C軽石を含むVIII層と、少し下位のIX層から、流路中に埋没した自然木が出土した。これに続く南側のB区でも複数の自然木がある。古墳前期以前には、洪水時などに流木が堆積する環境にあったことがわかる。これらの自然木の出土状況は、写真で記録されている（写真図版9・10）。

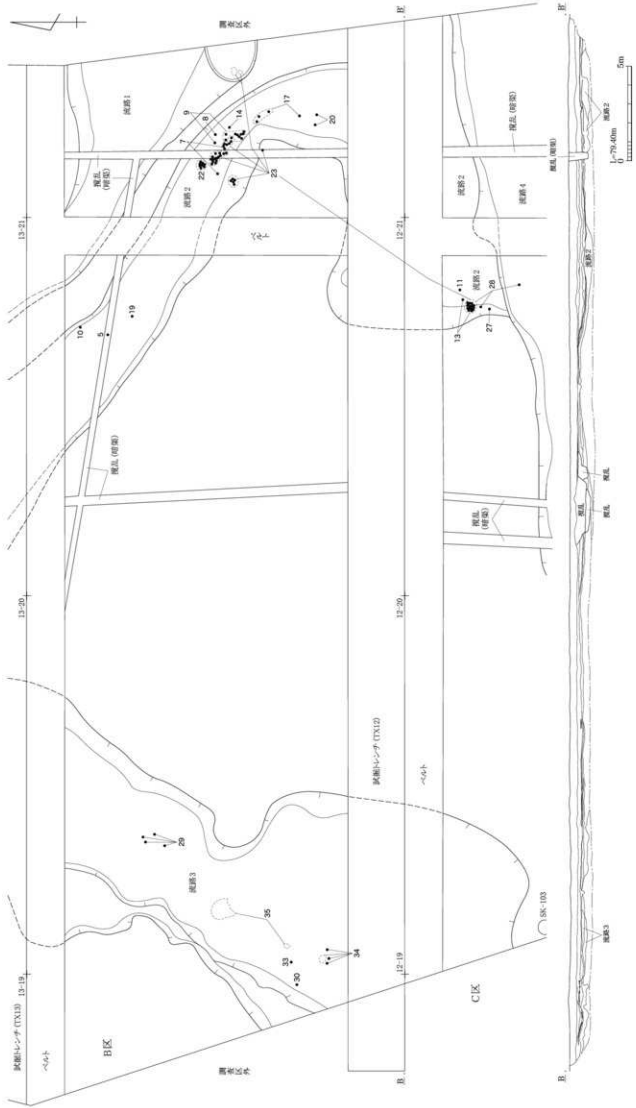
流路1埋没土の花粉およびプラント・オパール分析を、13-21グリッドで実施した（第7章第2・3節）。花粉分析結果によると、As-C降下以前では周辺に落葉広葉樹林や小規模な湿地が分布していたことと、Hr-FA直下では森林が減少して水の循環が悪く水田にあまり適さない湿地環境が推定されている。プラント・オパール分析の結果では、Hr-FA直下層からAs-C下位層までの試料でイネが検出されなかった。遺物は少なく、古墳中期後葉の土師器杯（第244図1）や、中期末頃の須恵器裏片（4）を含む。



第241図 棒現山遺跡 SG2区 流路 1~4、試験トレンチ TX11~13 断面図 (1/160)



第242図 樺現山遺跡SG2区A区 流路1~3 (1/200)



第243図 梅現山道跡SG2区B区 流路1~3 (1/200)

SG2区A・B・C区 流路2 (第241～245図、写真図版10・11・175)

SG2区北部のA区とB区にまたがり、南のC区で流路4に合流する。北と東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はなく、東側の流路1と同時に存在する。古墳前期のAs-Cや後期初めのHr-FAテフラの入り方からみて、流路2が流路1より少し早く埋没したと考えられる。流路1と流路2が、北方25mにある権現山遺跡SG15区の流路2に連続することも想定できるが、中間にあるTX14では確認できていない。幅2.4m(B区東部)～7.5m(A区中央部)で、流路の東西両側からの深さは、A区の断面図A-A'で62cm(X層上面)あるいは42～52cm(XI層上面)、B区の断面図B-B'では64cmだがFAテフラ降下時には埋没して26cm。底面は南へ低くなるように傾斜する。底面標高はA区断面図A-A'のXI層上面で78.02m、B区北端で77.92～77.99m、B区南東部で77.77m、B区断面図B-B'で77.98m、C区中央部北端では78.09～78.15mである。

覆土は自然埋没で、試掘トレンチTX12の南壁面で土層断面を観察すると、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラを覆土上位に薄い層で確認できる(B区断面図B-B'のVI層)。C区の11-20グリッド北東部では、Hr-FA下位で浅間C軽石(As-Cテフラ、B区断面図B-B'のVIII層)を含む黒色土の分布範囲を除去した結果、流路2の南端部を確認できた。以上のテフラからみて、古墳前期に存在していた流路2の大半が古墳後期初頭までに埋没したことがわかる。12-21グリッドでテフラ検出分析と屈折率測定を実施し(第7章第2節)、As-C(古墳前期)とHr-FA(古墳後期初)とAs-B(1108年)の他に、1128年に降下した浅間川川テフラ(As-Kk)も認められた。

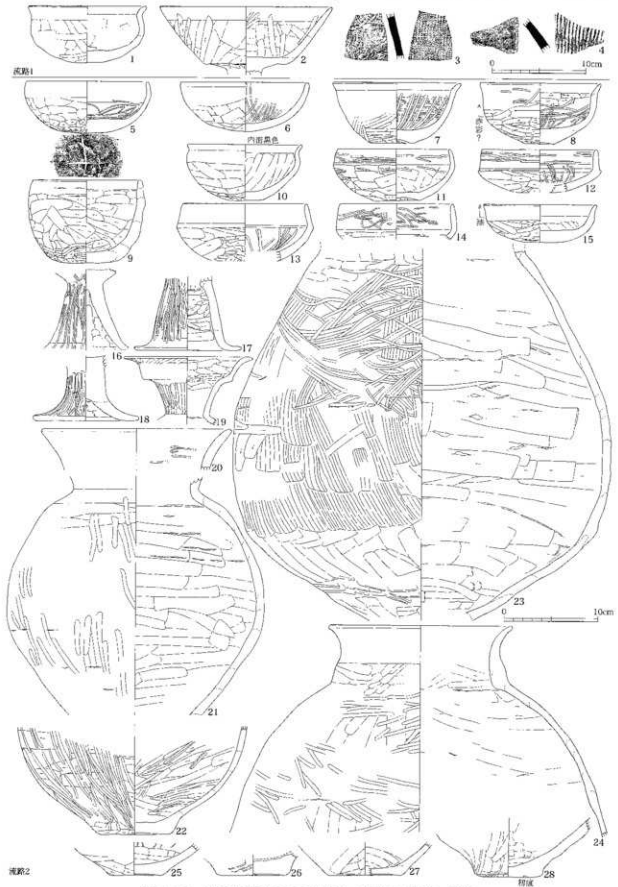
また、12-21グリッドで、流路2埋没土As-Kk直上層からHr-FA直下層までのプラント・オパール分析を実施した(第7章第3節)。その結果、As-B直下層において、低い値(1,400個/g)ではあるがイネが検出され、12世紀初めに近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。As-Kk直上層にもイネがあるが、低い値(800個/g)であった。古墳時代層からはイネが検出されていない。

一定量の遺物が出土した。古墳中期後葉から中期末の土師器が多い。A区・B区では中期後葉の土師器が多く、C区では中期末の土師器・須恵器杯などが多い。磨滅・剥落した土器も少量含む(6・7・10)。しかし、残存度の高い杯や甕も多いので、水で流されてきた遺物とみるよりも、付近で使用・廃棄したものが多いと考えられる。杯類のうち7は外面のミガキや内面のハケメ調整が異質で、他地域の土器かもしれない。8を赤彩、10の内面を炭素吸着で黒色処理しているならば、中期後葉では珍しい事例である。中期末の遺物も多い(11～14)。鉢(9)の外面を密に磨く箇所は、焼成前に生じた亀裂を補修した可能性がある。補修痕跡のある土師器は、SG5区SI-21やSG10区SI-6などにある。20・23・24はかなり大形の壺。稲刈り痕跡がある土師器(28)の類例は、SG2区SK-103などにある。

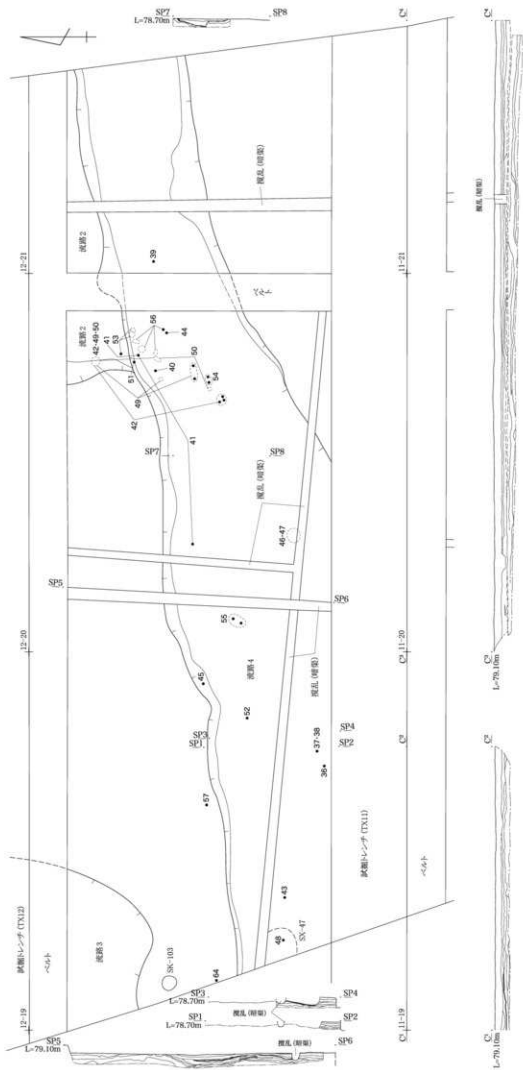
古墳前期後葉の二重口緑壺(19)の類例は、砂田姥沼遺跡2区SI-1にある(『東谷・中島地区遺跡群』11)。図示以外に古墳後期前葉の土師器片がA区・B区にごく少量ある。A区の流路2北端には終末期中葉の杯(15)がある。SG2区のB区東半には縄文中期の加曾利E式土器片もある(『東谷・中島地区遺跡群』10の第39図227)。

SG2区A・B・C区 流路3 (第241～243・245・246図、写真図版10・11)

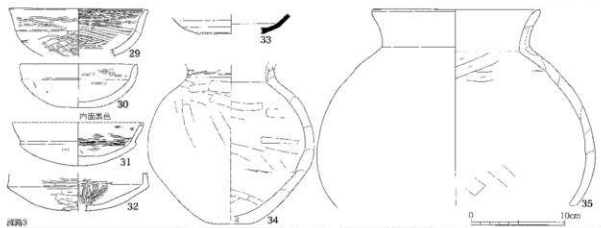
B区の西部を中心として、A区西部からC区北西部にかけて確認した。重複する遺構はない。幅5.0m(A区)～13.1m(B区南西部)で、確認面からの深さはB区断面図B-B'で32cm。底面が南へ傾斜する可能性があるが不詳な部分が多い。B区断面図B-B'で流路3の底面標高が78.26～78.28m、VII層下面が78.39mである。A区では流路3内にFAテフラ層(VI層)がなく、V層とVII層が認められた。B区の土層断面B-B'で覆土上層にHr-FAテフラ(VI層)が載る部分がある。ただしFAテフラを面的に確認したわけではないので、B区の遺物(29・30・33・34・35)とFAの上下関係は遺物出土レベルから判断した。C区西部では流路3の上部でHr-FAテフラを面的に確認した(写真図版11)。A区に古墳中期末・後期前葉(32)・



第 244 図 権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (1) 流路1・流路2



第 245 図 権現山遺跡 SG2 区 C 区 流路 2~4 (1/200)



第246図 権現山遺跡SG2区 流路出土遺物(2) 流路3

後期後葉(31)の土師器が少量あり、B区に古墳中期後葉～末の土師器がある(29・30)。磨滅・剥落した土器も少量含む(30・31)。31は内面の炭素吸着が特徴である。また、縄文土器や石器もごく少量ある。C区の流路3には遺物がない。

SG2区C区 流路4(第241・245・247・248図、写真図版11～13・175・176)

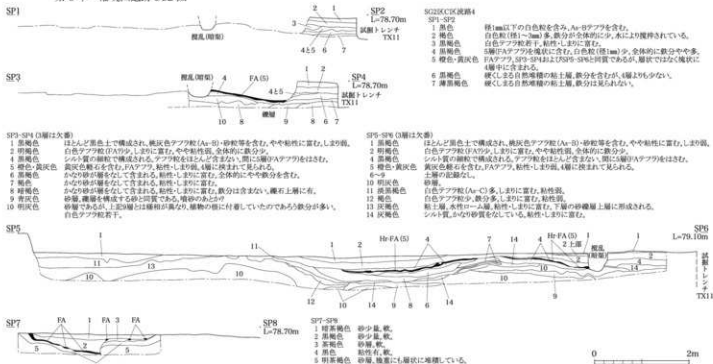
C区で確認した。時期不明の集石遺構SX-47が調査区西端部の底面に作られている。流路は幅5.7m(東端部)～9.5m(中央部)で、確認面からの深さは40～64cm。SG2区の所在する低地全体が南へ低くなる地形なので、北東側から南西方向へ流れていたと考えられる。ただし底面標高値は77.9～78.2m前後で、東西どちらかへの明確な傾斜を読み取れない。底面の標高値は、調査区西端で78.1～78.2m。西部のSP1-SP2付近で78.24～78.53m、SP3-SP4付近で78.13～78.16m。中央部のSP5-SP6付近で77.92～78.27m、SP7-SP8付近で78.10m。

C区全域の流路4内(SP1-2とSP3-4とSP5-6)で、1108年のAs-Bと考えられる灰褐色テフラ粒を1層中に含むが、層状のテフラとしては確認できない。古墳後期初頭のHr-FAテフラは面的に確認できた(写真図版12)。C区の東西土層断面図C1-C2で覆土中位にHr-FAテフラ(VI層)があり、またC3-C4の西部にも性格不詳のテフラが記録されている。東西土層断面図C3-C4は、階段状に壁面を残して固化したセクションを一枚の断面図に合成したので、上段と下段の図の間が欠落している部分もある(第241図下の破線部)。流路4に直交する土層断面のうち3箇所(SP3-4、SP5-6、SP7-8)をみると、黒褐色土である4層の断面中に、FAテフラ(5層)の塊が断続的な層状に連なって認められた。FAテフラが流路4の中位に降下した古墳後期初頭には、流路内が不規則に埋没していたことが分かる。流路4の中央部にFAテフラが分布しているので、その部分にSP7-SP8ラインを設定した結果として、溝の南北線にかからない中央部にSP7-SP8ラインがある。SP5-SP6の11層には古墳前期に降下した浅間Cと考えられる白色テフラ粒が多く、純層ではなくて層中に拡散していた。

遺物は、流路2が流路4に合流する付近に多く、FAテフラ層よりも下位にある(写真図版11)。流路4の最下部で出土した縄文中期の深鉢大破片(写真図版11、『東谷・中島地区遺跡群10』第39図214)は阿玉台IV式で、流路4が縄文中期から存在していた可能性を示している。11-20グリッド流路4のFAテフラより下層で、身に蓋を被せて正位で出土した完形の須恵器杯(37・38)は、杯身が砂層に載り、杯蓋は黒色土層と砂層の境界部にあった。37・38の内部は空洞で内面に汚れないが、ごく少量の褐色物が残っていた。近くと同じレベルに須恵器蓋もある(36)。47と48の付近には少量の炭片が伴っていた。

FAテフラ下で出土した須恵器蓋(36)と、セットの蓋杯(37・38)はTK23型式。土師器杯をみると

第 6 章 権現山遺跡 SG2 区



第 247 図 権現山遺跡 SG2 区 C 区 流路 4 断面図

古墳中期後葉のものが最も多く(42・43)、中期末の遺物も多い(40・41)。接合復元できる個体が多いので、数個体の土器が各時期に遺棄または廃棄された状況が考えられる。磨滅・剥落した土器はごく少ない(45)。鉢(44)は緻密な胎土で、焼成時に生じた亀裂に沿って破損した可能性があり、焼成前の修理ヘラミガキ痕跡などは見られない。小形壺のうち 47 と 48 は丁寧な薄い製品。42 と 46 は煤や被熱痕からみて火災にあったかのようである。土師器壺変類は、口縁部片をみると図示した 49～56 以外に 2 個体分ほどがあるが、小破片ばかりなので図示していない。炉で使った痕跡のある変類が多い(49～54)。

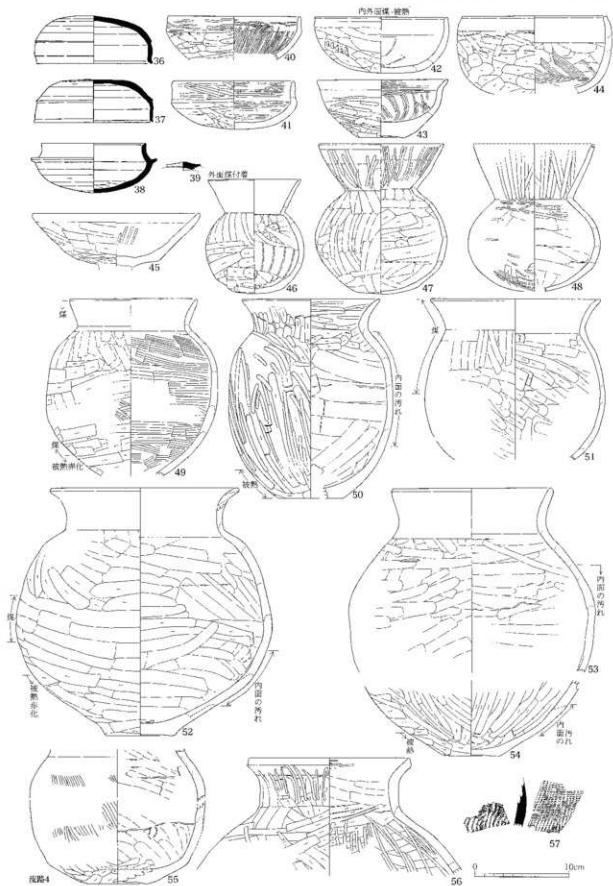
C 区西部では FA 層より上にも土師器が若干あるが小片で図示できない。縄文土器は上述の阿玉台 IV 式の他に加曾利 E 式があり、弥生中期後半の土器もある(『東谷・中島地区遺跡群 10』第 39 図 229、第 42 図 19)。

SG2 区 D 区 流路 5 (第 249・250 図、写真図版 13・14)

D 区だけで確認した。西は調査区外まで伸びる。東側は確認面より浅くなって消滅するが、さらに伸びていたものと考えられる。また、中央部も確認面より浅くなって途切れている。重複する遺構はない。幅 1.2～3.9m、確認面からの深さは、底面の範囲を図示した部分で計測すると 19～34cm。途中で確認面よりも浅くなるので、底面が一定方向へ傾斜していないことがわかる。底面標高は東端で 78.39m、中央部で 78.48m、西端で 78.61m。埋土は自然埋没で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラが覆土中位に層として認められた。溝を FA 層上面まで掘り下げた段階で写真をいったん撮影して FA 層上面レベルを計測し、その後に溝底面まで掘り下げた。FA 層上面と溝底面のレベル差は 6～16cm 程である。遺物は、図示した古墳後期末の杯(第 250 図 58)の他に、古墳中期後葉の土師器杯と高杯が各 1 片出土した。

SG2 区 D 区・E 区 流路 6 (第 239・249 図、写真図版 14)

流路 6 はわずかな窪み状の浅い流路跡である。流路 6 の平面形は E 区で確認され、幅 7.5～8.7m、確認面からの深さは 19～45cm(断面 SP11-SP12 における 1～3 層の厚さ)。D 区では流路 6 の平面形が確認されていないが、流路 6 が北東に延びる方向に沿って D 区で 12 世紀初頭の As-B テフラが 4 箇所認められ(標高 78.45～78.69m)、As-B よりも下層には古墳後期初頭の Hr-FA テフラおよび白色粒を少量含む(断



第248図 権現山遺跡SG2区 流路出土遺物(3) 流路4

面図 SP11・SP12 の 2～3 層)。これらのテフラが流路 6 の痕跡を反映している可能性がある。遺物は出土しなかった。テフラを参考にすると、古墳時代から古代までの流路跡と考えられる。

SG2 区 D 区・E 区・F 区 流路 7 (第 239・249・251 図、写真図版 14)

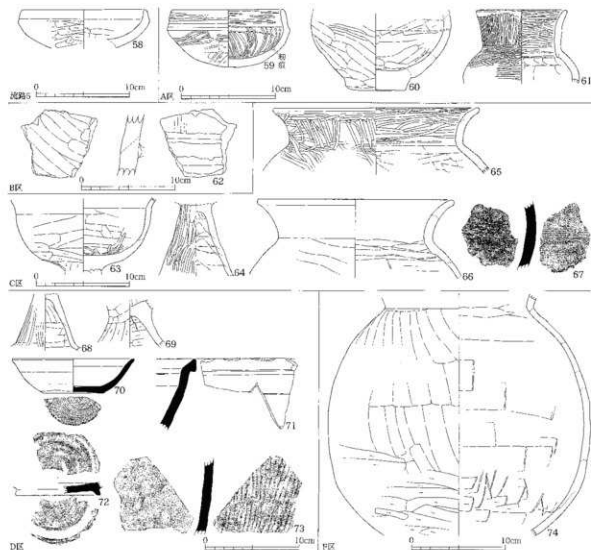
流路 7 はわずかな窪み状の浅い流路跡で、テフラ集中部なども認められなかった。E 区東側および F 区西側の調査区外へ伸びている。また、北に分かれた部分は D 区の南東隅へ伸びていた可能性がある。東部で幅 7.9～8.5m、北へ分かれて伸びる部分で幅 5.0m、F 区へ伸びる西部で幅 2.3～5.8m。確認面からの深さは非常に浅く、F 区へ伸びる西部で計測すると深さ 10～14cm、底面標高 78.41～78.44m。底面の傾斜方向は不詳である。流路 7 の土層断面図は作成されていない。遺物は出土しなかった。火山灰や遺物から時期を限定できないが、流路 1～6 と同様に古墳時代から古代までの流路跡と判断した。

遺構不明および遺構外出土の遺物 (第 250 図 59～74、写真図版 176)

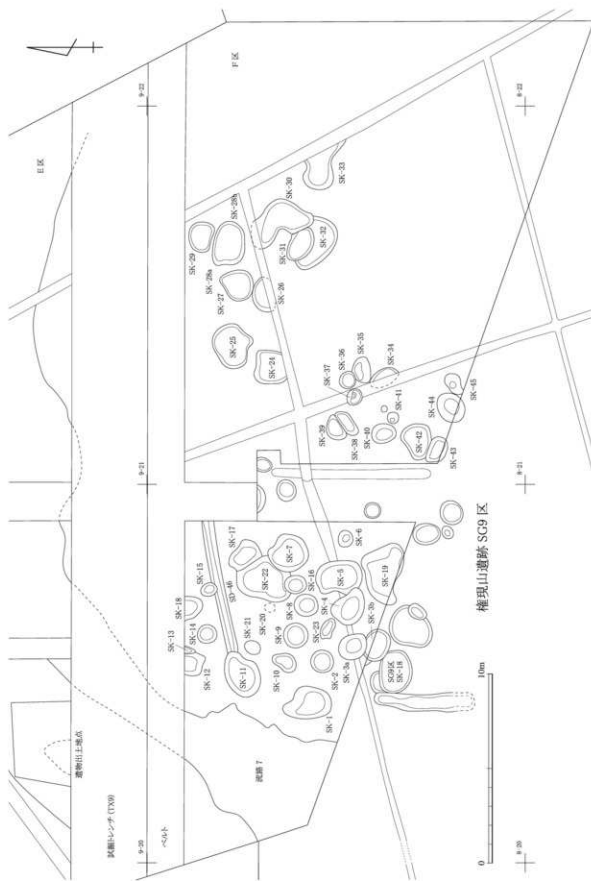
A 区～F 区の流路およびその周辺で出土したが、遺構外および帰属遺構不明の遺物を示した。

[A 区] 59 は古墳中期末葉の杯で、流路 2 に伴う可能性がある。稲粒圧痕がある土師器は、SG2 区 SK-103 などにある。60 は粗雑な調整の小形甕。61 は胎土の特徴からみて古墳後期後半または終末期の甕。

[B 区] 62 は古墳中期の円筒埴輪で、西方 700m の東谷笹塚古墳 (今平 2012) から持ち込まれたものだろう。B 区には弥生土器と石器も少量ある (『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 42 図 31、第 47・48 図 35・41)。



第 250 図 権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (4) 流路 5・流路周辺の遺構外 A～F 区



第 251 図 権現山遺跡 SG2 区 F 区 (1/200)

〔C区〕 63～66は残存度の大きな古墳中期の土師器破片。

〔D区〕 古墳前期の土師器高杯と台付甕（68・69）は、D区の10-20グリッドにある遺物集中地点で、SP11-12断面図の3層、つまりFAテフラより下層にある。古墳前期の台付甕は、南に連続するSG9区の南東部低地でも出土している。70～73は8～9世紀の須恵器。

〔E区〕 全体図に記入した遺物出土地点があるが、すでに報告した縄文後期と弥生中期の土器片（『東谷・中島地区遺跡群』10の第40図266・269と第42・43図63・64・89）の他は、土師器壺甕類4片・須恵器3片（杯2・甕胴部1）・自然礫3点だけで、図示できる遺物がない。

〔F区〕 74は、土坑群集中地区の遺構外で出土した土師器甕破片を図上復原したものである。

第146表 権現山遺跡 SG2区 流路1～5および流路周辺の遺構外A～F区 出土遺物

番号 種類	大きさ [cm・g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または表材)	出土状況 保存状態 注記
流路1				
1 土師器 杯	口 復 12.5 高 6.0	外面は底部がナデで丸底の頭部がやや平面気味。体部は横～斜位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面は底～底部ヘラナデで、体部はヨコヘラナデが多い。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗青 黒・灰色・透明釉～ 細粒やや多、白・赤釉～細粒少 やや破損	FAテフラ下5cm 口2/3埋 B区東6
2 土師器 高杯	口 復 18.2 高 残 7.1 底 8.6	外面は底部タナヘラナデ。外面の杯体部に斜位のヘラナデとヘラミガキを口縁部ヨコナデの前と後に行う。内面の杯体部に横～斜位と縦位のヘラナデをやや広い口縁部ヨコナデの前と後に行う。	5YR6/6 暗 やや暗黒 赤釉～細粒多、白・ 黒・透明釉～細粒少 破損	浅岡Bテフラ下34cm 口3/4埋、杯底全周 A区西101
3 須恵器 甕		外面は木直交の縦位平行溝を彫った叩き板で覆格子叩き。内面はやや浅い同心円文当具輪。裏面は暗赤灰色。	5Y5/1 灰 面青 白細粒少 破損	浅岡Bテフラ下35cm 胴部1片 A区西102
4 須恵器 甕		外面は縦位の平行帯目。内面はおそらく磨り滑りにより無文。	10YR4/1 灰 やや暗青 白釉～細粒やや多 破損	1994年度試掘トレンチ 13-21グリッド 胴部1片 TX13-21
流路2				
5 土師器 土師器 鉢	口 13.1 高 5.5 最大 13.4	底部が厚く体部が薄く、外面は中位にナデと下位～底部に円筒方向のヘラナデあり。外底面中央に樽成面の短線「+」あり。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の底～底部にナデ後、底部に不定方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。	10YR7/2 に近い黄緑 暗黒 白・赤釉～細粒と黒・透 明細粒少 やや破損	底上31cm 口3/4埋 B区西133
6 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 5.2	外面は体部ヘラナデ。底部多方向ヘラナデ。内外面の口縁部はヨコナデと思われが不明確。内面に放射状および斜位のヘラミガキ。内外面の全体を焼成して調整が不明確。	5YR6/6 暗 やや暗黒 白・赤釉～細粒多、 やや破損	FA層下 口1/12埋、体3/4埋 A区西104、FA下
7 土師器 杯	口 復 13.6 高 6.4 底 4.6	外底面は強いナデ後少しヘラミガキする。外面は体部下位に斜～縦位のヘラミガキ。内外面の体部上位は磨成して調整不明。内面の中～下位にヨコナデ放射状ヘラミガキ。	10YR7/3 に近い黄緑 暗赤 赤釉～細粒と白・黒・透 明細粒少 やや破損	底上1～底上31cm(FA 層下) 口1/3埋、体～底全周 注記左欄
8 土師器 杯	口 12.6 高 6.4 底 最大3.0 最大 12.8 重 残2.587	口～体部の絶好の内面で明瞭。外底面は円筒方向のヘラナデで凹底。外面は中位ナデ。下位ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ後少しヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ。体部ナデ後に上位ヨコヘラナデと放射状の後縁方向の線らなヘラミガキ。外面口縁部と内面全体に赤色(10R4)の帯が付着し、赤彩している可能性もある。	2.5YR6/6 暗 暗赤 白・黒釉～細粒と透明細 粒少 やや破損	底上4cm(FA層下) 口11/12埋、体～底全 周 B区101
9 土師器 鉢	口 11.5 高 8.7 底 6.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデあり。体～底部の境界付近に密なヘラミガキを行う部分があり、焼成時に生じた亀裂を補修したのかも知れない。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は上半ナデ、下半に横と中位底部に1方向のヘラナデ。	5YR7/8 暗 やや暗黒 赤釉～細粒やや多、 白・黒細粒少 破損	底上2～3cm 口1/6埋、底全周 B区東105、108
10 土師器 杯	口 12.0 高 5.9 底 3.8 最大 12.1	外底面は円筒方向のヘラナデで平底。外面は中位に横～斜位ナデ。下位ヨコヘラナデ。口縁部と両面にヨコナデ。内外面は体部ナメナデ。口縁部ヨコナデ。内面全体が炭素を吸着して黒色。重量226.4g。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗黒 透明釉～細粒多、 白・黒釉～細粒と赤細粒少 やや破損	ほぼ完形 B区西132
11 土師器 鉢	口 11.7 高 5.5 底 4.8 最大 12.8	外面の口～体部に浅い段あり。外底面は1方向ヘラナデで凹底。外面は体部ヨコヘラナデ後に上部ヨコヘラミガキ。内外面は口縁部ヨコナデとヘラミガキ。内外面部に斜～縦位ヘラナデ後に少しヘラミガキ。 [写真保存 222.7g]	2.5YR6/8 暗 やや暗黒 白・赤・透明釉～細 粒と黒細粒少 やや破損	底上11cm 口1/6埋、底全周 C区61-A
12 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 4.6 最大 復 13.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデ。内外面の口縁部をヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面は体部をヘラナデ後に横位および放射状のヘラミガキ。 [注記]A区FA下、A区西104、TX13-20～21 S11	5YR5/6 明赤陶 暗赤 白・赤釉～細粒と黒・透 明細粒少 破損	FA下(浅岡B下28cm と94年度試掘トレンチ TX13の各1片も同一製 体) 口1/4埋 注記左欄
13 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 6.1 最大 復 14.5	外面は中位にナデと下位にヘラナデ。口縁部ヨコナデ。口～体部の間に浅い段あり。外面は体部をナデ後にナメヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	10YR8/3 浅黄緑 暗赤 赤釉～細粒と白・黒・透 明細粒少 やや破損	底上2～3cm 口1/3埋 C区62-A、63
14 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.8 最大 復 12.7	外面の口～体部に浅い段あり。外底面は1方向ヘラナデ。内外面口縁部と内面体部にヨコナデ後、横～斜位のヘラミガキ。	10YR6/3 に近い黄緑 暗赤 赤釉～細粒と白・黒・透 明細粒少 空や破損	FA層上3cm 口1/3埋 B区東8
15 土師器 杯	口 11.9 高 4.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデで、脛前部の底部に木葉面があったのかも知れない。内外面口縁部をヨコナデ。内面底部に1方向のヘラナデ。外面口縁部と内面全体に仕上げ。	10YR7/2 に近い黄緑 暗赤 白・透明細粒多、黒細粒 少 破損	A区流路2北端 口7/12埋、体2/3埋 A区西105
16 土師器 高杯	高 残 6.5 脚跡 復 11.2	外面は脚柱部タナヘラナデで脚柱部ヨコナデ後に脚全体をタナヘラミガキ。杯内面の調整は磨成して不明。脚内面は上位ナデ。中位ヨコヘラナデ。底部ヨコナデ。流路3出土遺物の可能性もある。 [注記]TX13-20、TX13-20S10	2.5YR5/8 明赤釉 暗赤 白・赤釉～細粒と 黒・透明細粒やや多 やや破損	1994年度試掘トレンチ の13-20グリッド 脚柱3/4埋、脚跡5/12 埋 注記左欄

第6章 権現山遊跡 SG2区

17	高 視 7.7 土跡跡 高林	狭く深い彫部が特徴的。外面はナデと彫部ヨコナデ後に脚柱部タテヘラミガキ。内面は彫部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ。	2/5V4/1 黄灰 白・透明細少 赤細粒少 や砕質	底面上と底上11cmが接 合(FAより下) 脚柱一彫部1/2厚 B区東112, 121
18	高 視 7.8 土跡跡 彫板 復 11.2	外面全体をナデ後にタテヘラミガキ。脚内面は上部にタナナデ、最近くに斜一横位のヘラナデ。	2/5V3/8 碧 白・透明細少 赤細粒多、白・ 黒・透明細粒少、 赤・黒	V脚(近 FAより下) 脚柱3/4厚、彫部5/12厚 A区西103
19	口 視 13.6 高 視 7.1 土跡跡 遺	やや傾く軽い。外面が彫部にやや光沢のあるタテヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に上平をナメヘラナデ。内面はヨコナデ後に口縁部の受口部分をやや光沢のあるヨコヘラナデ。	5YR5/6 明黄緑 白・透明細少 赤細粒少、白・ 黒・赤細粒少 や砕質	底上20cm 口5/6厚、健全側 B区西134
20	口 視 19.8 高 視 4.4 最大 復 20.2	やや厚手。口縁部の内外面をヨコナデ。内面に少しヨコヘラミガキを行う。	10YR7/3 にぶい黄緑 粗い 白・黒・透明細少 赤細粒少、灰色 赤細粒少 や砕質	FA上1~3cm 口1/4厚 B区東125, 128
21	高 視 25.3 最大 復 27.2	外面彫部は粘土積み上げ程度で少し程度のナデ後に、縦位の太いヘラミガキ。内外面は口縁部ヨコナデ。内面彫部はヨコヘラナデで、胴に白土に積み上げをやや多く残す。外面彫部に6~13cm大の黒斑がある。焼物使用痕や着物は見られない。 [注記]A区FA下, TX13-20, 3, 4, 5, TX13-20~2111	2/5Y3/6/4 にぶい粗 赤粗い 白・灰色・透明細 赤細粒多、白・灰色 赤細粒少、黒細粒少 や砕質	A区FA脚上と1994年 成試掘1レンテ TX13 のFA下1/2厚 胴1/12厚、胴1/4厚、 胴下端1/6厚 注記は左欄
22	高 視 11.4 最大 復 24.2	外底面は円板状に突出した底面をナデした後、1方向ヘラナデで平底状にする。外面彫部は下位ナデと中位および下位ヨコヘラケズリの後タテヘラミガキ。内面は彫部に多方向と体部に斜位のヘラナデおよびヘラケズリ。内面全体が炭素を吸着して黒色。	10YR7/3 にぶい黄緑 粗い 白・透明細少 赤細粒多、白・灰色 赤細粒少 や砕質	底上21cm(FA下26cm) 胴1/2厚、健全側 B区東103
23	高 視 39.2 最大 復 40.1	おそろく円板状の底面が接合面でおかれた状態。外面は下位に薄なヘラナデ+中位以上に浅いタテヘラ+上位ナメヘラミガキ。彫部はタテヘラナデ。内面はヨコナデで、横み1/2位の黒が残りつつある部分をやコヘラケズリで薄する。焼物痕や黒は見られない。 [注記]A区、A区西106, B区東7, 103, 106, 107, 109, 111, 130, 131, B区FA下, B区西FA下, C区63	10YR5/2 灰黄緑 白・透明細少 赤細粒多、白・灰色 赤細粒少 や砕質	底上2~31cm(FA脚上 1~5cm) 胴1/12厚、胴1/4厚、 胴下1/2厚 注記は左欄
24	口 視 19.4 高 視 22.1	大形で彫部が特に厚い。外面は彫部をタテヘラナデ後に横一斜位の太いミガキ。彫部に薄なヨコヘラナデ。内外面は彫部ヨコヘラナデ、脚柱部ナメヘラナデ。26と同一個体の可能性が高い。 [注記]A区、A区SK-100, A区西104, A区FA下, B区FA下, TX12B区22, TX13-20, TX13-20, 2111	10YR7/3 にぶい黄緑 粗い 白・灰色・透明細 赤細粒多、白・灰色 赤細粒少、黒・灰色 赤細粒少 や砕質	FA脚上 口1/2厚、胴2/3厚、 胴1/4厚 注記は左欄
25	高 視 3.5 最大 復 5.4	外底面は円筒方向のヘラケズリでわずかに凹面状。外面は斜位のヘラケズリ後ヘラナデ。内面は円筒方向の1方向ヘラナデ。	10YR7/3 にぶい黄緑 粗い 白・透明細少 赤細粒多 や砕質	1994年成試掘1レンテ のFA中2厚 健全側 TX13-20~21S11
26	高 視 2.3 最大 復 7.0	外底面が円板状に突出する形で、底面は1方向ヘラケズリにより少し凹面状になる。外面はタテヘラナデ。内面は彫部のため調整不明。24と同一個体の可能性が高い。	10YR7/3 にぶい黄緑 粗い 白・灰色・透明細 赤細粒多、白・灰色・ 透明細少、黒・赤 赤細粒少 破質	FA脚上 底5/6厚 B区西FA下
27	高 視 3.5 最大 復 3.8	薄く軽い。外底面は1方向ヘラケズリでわずかに凹面状。内外面の彫部にナメヘラナデ。内面彫部に1方向または多方向のヘラナデ。	5YR5/6 明黄緑 粗い 白・黒細粒多、 赤・黒 透明細少 赤細粒少 や砕質	底上7cm 底1/3厚 C区65
28	高 視 6.5 最大 復 7.2	外底面はおおよそ1方向のヘラケズリで、縦向き黒が1箇所ある。外面彫部はタテヘラナデ。内面は彫部に多方向と胴部に横一斜位のヘラナデ。内面が黒色帯または暗褐色に汚れる。	2/5Y3/6/4 にぶい粗 粗い 灰緑帯-黒帯と白 赤細粒多、赤・黒細 赤細粒少 や砕質	底上2~23cm 健全側 C区63, 64, 75
通路3				
29	口 視 14.6 高 視 5.0	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後に、全体をやや緩らなヨコヘラミガキ。内面は彫部ヨコヘラミガキ。	5YR5/6 碧 粗い 白・透明細少 赤細粒多、赤細 赤細粒少 や砕質	B区V脚(FA脚下) 口1/2厚 TX12B区50~53, TX12-19B区, B区西
30	口 視 12.4 高 4.6	全体が磨耗し、外面調整は不明。内面は口縁部と体部にヘラミガキの痕跡がわずかに残る。	2/5Y7/4 にぶい粗 赤粗い 白・黒・透明細 赤細粒少 や砕質	B区西-V脚(FA脚より 上) 口1/4厚 TX12B区16, B区西
31	口 視 13.8 高 視 4.6	外面は口縁部ヨコナデで、体部は磨減が著しいため調整不詳だが、おそろくヨコヘラケズリ。内面は底面に多方向、体部と口縁部に横位の密なヘラミガキ。内面は炭素吸着の黒色状態。	10YR7/3 にぶい黄緑 粗い 白・透明細少 赤細粒多、白・黒 赤細粒少 や砕質	A区V脚またはV脚 口1/5厚、体5/12厚 A区西106
32	高 視 4.0 最大 復 15.0	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は口縁部に横位と体部に後射状の密なヘラミガキ。胴に1/3位の認められない。	10YR9/1 粗灰 白・透明細少 赤細粒多、白・黒 赤細粒少 や砕質	A区V脚またはV脚 体1/6厚 A区西107
33	高 視 2.1 最大 復 12.5	破片が小さいので復原性は参考値。内外面ヨコナデ(ロクロ右回転)の後に、外面底部をへつり切り削り後ナデ。	N5/10 灰 面状 白細粒少 破質	B区西-V脚(FA脚より 上) 体1/12厚 TX12-23
34	高 視 9.1 最大 復 17.6	小さい平底で、胴部と底部の境界が不明確。外面は底部と胴部全体をナデまたはヘラナデし、ヘラミガキも行っているかもしれないが、外面全体が磨減現象の中で不明確。外面彫部はヨコヘラミガキ。内面は彫部下部に積み上げ体面を成し、全体を横位と斜位のヘラナデ。	5YR7/6 碧 粗い 黒細粒-赤細粒 赤細粒多、白・ 赤細粒-黄と透明細 赤細粒少 や砕質	B区西-V脚(FA脚より 上) 口1/4厚、底5/12厚 TX12B区11~13, 17, 22, B区西
35	口 視 17.7 高 視 20.7 最大 復 29.6	外面は磨耗が激しく調整不明。内面は彫部下位ナメヘラナデ、胴部ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 [注記]TX12B区27, 31, 40~47, 50, TX12-19B区, TX12-19B区(南, B区西)	10YR8/3 浅黄緑 白・透明細少 赤細粒多、赤細粒 赤細粒少 や砕質	B区西-V脚(FA脚より 上) 口1/2厚、胴3/4厚 注記は左欄
通路4				
36	口 視 12.2 高 5.1 最大 復 12.4 底 視 164.3	外面の胴部に明瞭な段と、内面の口縁部に明瞭な斜面を持つ。内外面の彫部ヨコナデと胴立と内外面の彫部回ヘラケズリは、ともにロクロ右回転(反時計回り)。	N4/0 灰 面状 白細粒少 破質	断面図C'のV脚より 下、SP1.2の7脚(FA下) 法ぽ定形 口11/12厚 C区西内60
37	口 視 12.6 高 4.5 最大 復 184.7	口縁部に明瞭な段を持つ。上向きでロクロナデし、伏せて天井部を回転ヘラケズリする時ともにロクロは左回転(反時計回り)。	S54/1 暗黄灰 面状 白・灰色赤細 赤細粒少 破質	FA脚上SP1.2の7脚 上で砂層上面) C区西内54

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

38	土砂函 椀	口 11.0 高 5.2 最大 13.3 底 190.8	口縁部透明な段を持つ。上向きでロコロナデ時、使った天井部を回転ヘラズリする時とくにロコノは左回転(反時計回り)。内面底部中央部に不規則なナデを転く行方。	5Y5/1 灰 磨面 灰色 灰緑と白転~ 微量	FA層D(SP2-7の7層 下で中層)55 完全同 C区西側 55
39	土砂函 椀	口径 3.6 高 0.9	断面中央部には、らせん状に凹凸ような窪み凹みが見える。ロコノ回転方向は不明。裏の上面に自然剥がれ落ちて白く発色している。	7.5Y5/1 灰 磨面 白転~白緑少 微量	FA層1-4m 完全同 C区ウマミ
40	土砂函 椀	口 径 13.8 高 4.6 最大 復 14.4	外面は体部ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ時、やや残らなヨコヘラズリ。内面は体部にナデまたはヘラズリ後、煎な放射状ヘラミガキ。	7.5Y5/6/4 に近い 磨面 灰色・透明緑と白転~ 白・黒・赤・透明緑 少~全欠	底上 14cm(FA層下) C区1/4層 C区80
41	土砂函 椀	口 12.8 高 5.1 最大 13.3	外面は底部に多方向に体部に横位のヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデヨコヘラズリ。内面は体部にヘラズリ後ヨコヘラミガキ。底部に1方向または多方向のヘラミガキ。外面の体部全体に黒染あり。	5Y8/6 磨 面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	FA層下(底上20cm、 4層)SP5-6の2層に も1片あり C区5層、体2/3層 C区西側
42	土砂函 椀	口 14.0 高 5.9	1層な作りで、外面の口縁部を外へ転く曲げる。外面は体部上平ヨコヘラズリまたはヨコナデ。体部に横位と底部に多方向のヘラズリ。内面は体部に横位と底部に多方向のヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内外全面に不規則な黒染と発色が見られる。	7.5Y5/6/4 に近い 磨面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	底付近、流路2の底上 2cm、1片複合(FA層) C区2/3層 注記は左欄
43	土砂函 椀	口 13.7 高 6.1 底 4.9 底 306.5	底部が深い。外底部は凹状で、幅広いミガキできれいに仕上げられる。底上から1層な作りで、上平ヨコヘラズリと下平ヨコヘラズリ。内面は体部上平ヨコヘラズリと下平ヨコヘラズリ。内面は体部に多方向ヘラズリ後、放射状のヘラミガキ。	7.5Y5/6/4 に近い 磨面 赤・黒・灰色緑と白・ 黒・透明緑少 微量	底付近(FA層下) C区7/12層、底5層、 底全同 C区西 57
44	土砂函 椀	口 径 15.4 高 8.1 最大 復 16.4	1層な作りで、外面の口縁部を外へ転く曲げる。外面は体部上平ヨコヘラズリまたはヨコナデ。体部に横位と底部に多方向のヘラズリ。内面は体部に横位と底部に多方向のヘラズリ。内外全面に不規則な黒染と発色が見られる。	5Y8/6 磨 面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	底上 4cm(FA層下) C区1/3層 C区77
45	土砂函 高杯	口 17.6 高 5.7 最大 17.8	外面は杯部全面に放射状のヘラズリ。杯部ナメヘラズリ後上下ヨコヘラズリと口縁部ヨコナデ。内面は放射状のヘラミガキ。口縁部ヨコナデと杯部ナメヘラズリを繰り返す行方。	5Y8/6 磨 面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	FA上SP5-6の2層ま たは11層) C区西 17
46	土砂函 小形皿	口 9.8 高 12.0 底 4.0 最大 10.4	平たい。外底部は1方向ヘラズリ後にヘラズリ。体部はタテヘラズリ後に中下位ヨコヘラズリ。内外面の口~底部にヨコナデ。内面は中位以下に反時計回りのヨコヘラズリ。上位にヨコヘラズリとユビササエ後ナメヘラズリ。外面全体に発色が見られる。黒染も認められる。	10Y8/74 に近い 磨面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	FA層D(SP5-6の10層 付近) C区3/4層、底1/6層、 体3/4層 C区西側 24
47	土砂函 小形皿	口 13.2 高 15.9 最大 13.9	平たい。外底部は1方向ヘラズリ後に全体を1層なナメヘラズリ。内外面の口縁部ヘラズリと口縁部ヨコナデ後、頭部の内面に密で内面に残らなタテヘラズリ。内面は体部にナメヘラズリと底部にユビササエ後、中位にナメヘラズリ。	10Y8/64 に近い 磨面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	FA層D(SP5-6の10層 付近) C区3/4層、底1/12層、 体3/4層 C区西側 24
48	土砂函 小形皿	口 径 12.7 高 15.6 最大 復 14.0	外面は体部ヘラズリと底部ヘラズリ後に残らなヘラミガキ。頭部タテヘラズリと口縁部ヘラズリ。内面は底部に放射状のヘラミガキ。口縁部にナデ後ヨコヘラミガキ。頭部にナメヘラズリ後タテヘラミガキ。	10Y8/63 に近い 磨面 白・黒・赤~白緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	底付近(FA層下) 底5/12層、体2/3層 C区、C区西 59
49	土砂函 小形皿	口 径 13.4 高 18.7 最大 復 18.2	外面は斜位タテヘラズリ後、側部をヨコヘラズリし、胴中にヨコヘラズリ。内外面の口縁部ヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内外面の胴部に密で内面に残らなタテヘラズリ。内面は体部にナメヘラズリと底部にユビササエ後、中位にナメヘラズリ。 [注記] 区 63、81、86、C区西 87	2.5Y8/6 磨 面 白・黒・赤~透明緑~緑 多、白・赤・灰色緑少 微量	底上 2~15cm、流路2 の底上2cmも2片出 土(層下) C区1/3層、底3/4層 注記は左欄
50	土砂函 小形皿	口 14.6 高 21.0 底 6.8 最大 復 17.3	外面は中位より多方向ヘラズリ。外面口縁部ヨコナデと頭部および側部タテヘラズリ後、側部タテヘラミガキ。内面は底部に多方向、側部に放射状のヘラズリ。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキと側部ヨコヘラズリ。外面の胴下縁が強く黒染し、内面の胴部から胴中部までに暗褐色の汚れが見られる。 [注記] 区 63、73、79、C区西 91、99	7.5Y5/6/3 に近い 磨面 白・黒・赤~透明緑~緑 多、白・赤・灰色緑少 微量	底上1~底上20cm、流 路2の底上2cmで1 片出(土層下) C区5層、底1/2層、側 2/3層、底5/12層 注記は左欄
51	土砂函 蓋	口 径 17.8 高 17.0 最大 復 19.0	やや平たい。外底部は斜下位にナメヘラズリ。胴上平に斜~縦位ヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は底部にヘラズリ後、上~中位にナメヘラズリ。外面上平部に発色が見られる。 [出土] 土層1(底上2cm)と流路4の底上11cm(複合(FA層下))	10Y8/53 に近い 磨面 白・黒・赤~透明緑~緑 多、白・赤・灰色緑少 微量	出土状態は左欄 C区1/3層、底3/4層、 底全同 C区63、69、C区西側
52	土砂函 蓋	口 径 20.1 高 26.1 底 7.4 最大 27.2	口縁部と頭部間で発色が見えないので器高は推定値。外底部は多方向ヘラズリ。外側下縁ヨコヘラズリ後に側部全体をヘラズリし、胴部に斜位の厚い部分にヘラズリ。内面は主に横位のヘラズリ後、胴下位の積み上げ停止部をヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面の胴部に横位と底部に放射状。胴中に発色が見られる。内面の胴下位に暗褐色の汚れが見られる。 7.5Y5/6/4 に近い 磨面 白・黒・赤~透明緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	FA層下 C区1/3層、底3/4層、 底全同 C区58	
53	土砂函 蓋	口 径 16.7 高 19.4 最大 復 26.2	外面は斜位にタテヘラズリ後ヨコヘラズリ。内面は側部ヨコヘラズリ後に斜下位にヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内外面の中位以下で暗褐色に少し汚れる。外面は口縁部から胴部までの所々に発色が見られる。内面は口縁部から胴部までの所々に発色が見られる。内面は口縁部から胴部までの所々に発色が見られる。内面は口縁部から胴部までの所々に発色が見られる。 7.5Y5/6/4 に近い 磨面 白・黒・赤~透明緑と白・ 黒・透明緑少 やや微量	流路2の底上7cmと流 路4の底上17~20cm が発色(土層下) C区5層、底1/3層 C区67、73、74、 TX12	
54	土砂函 蓋	高 残 8.2 底 6.0	外底部は1方向ヘラズリ後にナデで少し凹状。外面胴部は主に縦位のヘラズリ後、全体をナメヘラズリ。内面は底部に1方向ヘラズリ後、斜位にナメヘラズリ。内外面の胴部および側部が黒染し、それより上への内面に暗褐色の汚れが付着する。	10Y8/63 に近い 磨面 白・黒・赤~透明緑~緑 多、白・赤・灰色緑少 微量	底付近(FA層下) 底全同 C区59、93
55	土砂函 蓋	高 残約 14 底 6.3 最大 復 18.6	外底部は多方向ヘラズリで凹状。外面は体部下平ヨコヘラズリ、中~上位ナメヘラズリ。内面は主に斜位の1層なナメヘラズリで、粘土層が1層な作り。薄く剥がれるように断面判定して発色が見えない部分が多いため、外面黒染は不明なところが多く、腐蝕片と体部腐片の位置関係も想定による。	5Y8/6 磨 面 白・黒・赤~透明緑少 微量	FA層下(SP5-6の14層 付近) 体1/3層、底全同 C区59、93
56	土砂函 蓋	口 径 17.4 高 12.4 最大 残 28.0	外面は斜位ナメヘラズリ。口縁部ヨコナデ後に側部タテヘラズリとタテヘラミガキ。内面は斜位ヨコヘラズリ後に残らなタテヘラズリとヨコヘラミガキ。頭部、側部は放射状のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラズリ。 [注記] 区 71、72、76、78、西側、西側 32、53	7.5Y5/6 磨 面 白・黒・赤~透明緑と透 明緑多、白・灰色緑~緑 少、白・透明緑少 微量	底上5~27cm(FA層 下)。FAより上の層 1片も発色 C区5層、底全同 注記は左欄

第6章 権現山遺跡 SG2区

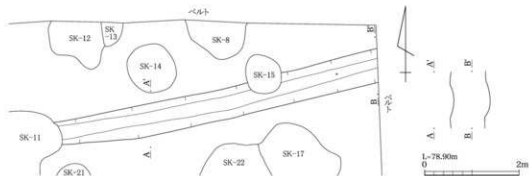
57	遺跡部 遺	高 残 5.4	外面は縦位の平行叩き後カキ。内面は同心円文当具組。	5Y6/1 灰 黒炭 灰色・透明細～細粒と 白・黒細粒少 やや硬質	浅褐色Cナラより上 製部1片 C区西16
通路5					
58	土師器 杯	口 残 13.1 高 残 4.0 最大 残 14.0	外面は体部ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の体部にヘラナデまたはナデ。内面を染上げしていたかもしれないが不明。	10Y8/3 浅黄緑 硬質 赤～黒細粒や中少。透明細～細 粒と白・黒細粒少 硬質	底付造 口1/12残。体1/6残 TX10-20D区5
通路周辺の遺構A～F区					
59	土師器 杯	口 11.6 高 6.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラズリ後。体部に少しヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部にヨコヘラズリ後。斜状のつらミガキ。裾裾の縁部に内面体部に1箇所ある。	2S5/6/6 黄赤褐色 やや軟い。白・黒・赤・透明細～細粒	足跡トランプ内 13-20 灰付造(通路27) 口1/3残。体5/6残 TX13、951207
60	土師器 小形甕	高 残 8.2 底 6.2 最大 残 14.8	外面は縦位の1方向ヘラズリ。外面体部はナメヘラナデで、体部の位の横み上げ休止部付近にナメヘラミガキを行く部分もある。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデ後。横み上げ休止部付近にナメヘラズリ。横み上げ休止部で接合面が新がれたところで、厚さ1mm程のヘラズリで粘土を入れて接合部を強化したことがわかる。外面全体が焼熟している可能性あり。	10Y8/3 深い黄褐色 やや軟い。白・黒・赤・透明細～細粒	PA下 製下平2/3残。底全面 A区FA下
61	土師器 甕	口 9.3 高 残 7.7 最大 残 12.3	内外全面と内面口一箇所に密なヘラミガキ。内面縦部に横位の軽いエピソードをおよびナデ。古墳後期後半～終末期の杯類に用いられるのと同じ技法で製作する。おそらく、水的作用で裏面と破面に褐色の鉄分が薄く付着する。	10Y8/3 深い黄褐色 硬質 白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	通路1～3切取 口全残。肩3/4残 A区E307
62	円筒埴輪	厚 残 2.3	内面縦線と横線にほぼ不明で、実用よりも上はタテハケの可能性が高い。外面はナメナデ。実用は製部だけを残して大半が割棄している。	7.5Y8/3 浅黄緑 やや軟い。白～細粒と灰色粗粒 多。赤・透明細～細粒と黒細粒 少 硬質	足跡トランプ内 12-20 グリッド(通路27) 製部1片 TX12-20B区
63	土師器 高杯	高 残 6.6 最大 残 15.4	外底面から脚柱部にタテヘラズリ。外面は体部ヨコヘラズリ後に下位ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の体部下位から底面を主に斜状の密なつらミガキ。	10Y8/4 深い黄褐色 やや軟い。白・赤・透明細～細粒 多。白～黒細粒と黒細粒少 やや硬質	通路3-4付近のFA下 製1/12残。杯底全面 C区西側PA下
64	土師器 高杯	高 残 7.4 底 残 8.0	薄くて丁寧な製品。外面はナデ後にタテヘラミガキ。内面は横み上げ筋をナメナデで丁寧に消しているが、まだ少し残っている。	7.5Y8/6 暗 やや軟質。白・透明細～細粒多。 赤・灰色粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	通路3-4間の付着付 製部1片 TX12-20B区
65	土師器 甕	口 残 21.8 高 残 7.0	外面は縦位に斜位のヘラナデ後ヘラミガキ。内外面の口一箇所にヨコナデ後、外面に横位と縦位。内面に横位のヘラミガキ。内面の縦部にヨコヘラナデ。[注記]C区西側FA下、11-21C区表層	10Y8/3 深い黄褐色 やや軟い。白・黒・赤・透明細 粒と白・灰色少	通路2-4付近との西部 FA下下5/6片が接合 口1/2残。肩1/3残 注記は不詳
66	土師器 甕	口 残 20.4 高 残 8.3	外面は縦部ヨコヘラズリ。内外面の口一箇所にヨコナデ。内面縦部はヨコヘラナデで、ヘラの側縁が底面を突きまわした痕跡の浅い段が見立つ。	10Y8/3 深い黄褐色 やや軟い。黒細粒多。白・ 灰色・透明細～細粒や中多 硬質	通路3-4付近 口5/12残。肩2/3残 C区西側
67	遺跡部 甕	高 残 7.9	外面は7面の工具で横位のカキまたは磨き磨き面。内面は非常に浅い当具面で、木製当具の年輪がわずかに同心円状に見える。	N4/0 灰 やや軟質 白～細粒や中少。白硬少	通路2-4付近の埋戻 製部1片 C区埋戻内壁土
68	土師器 高杯	高 残 5.9 最大 残 7.5	薄く軽い。外面は脚柱部をタテヘラナデおよびタテナデの後にタテヘラミガキ。脚内面は上部タテナデ後に下部ヨコヘラズリ。内外面の脚縁部にヨコナデ。	10Y8/4 深い黄褐色 やや軟い。白・黒・灰色・透明 細～細粒多。赤細粒少 やや硬質	10-20グリッド遺物集 中地区SP11-12の3割 脚上平全周 D区E35
69	土師器 台付甕	高 残 5.0 最大 残 6.8	外面は脚内面タテヘラズリ後に脚一箇所の中間部を丁寧なヘラナデ。脚内面底部はナデで、底面中央が深く凹む。脚内面はヨコヘラズリで、内面を内面順に近く磨く。脚内面は炭素を多く吸着して黒色。	2S5/4 黄灰 やや軟い。白・灰色・透明細粒 と白・黒・透明細粒多 やや硬質	10-20グリッド遺物集 中地区SP11-12の3割 脚上平全周 D区E17
70	遺跡部 底	口 残 12.8 高 3.7 底 残 6.4	ロクロ右回転(時計回り)で回転ヨコナデ後に回転糸切り磨し。外面体部下端のヨコナデがやや軟質。三稜形。	2S5/6 黄灰 硬質 透明細粒や中少。黒・ 透明細粒少 やや硬質	D区南東部遺構外 口1/12残。底少1/2 D区東側表土
71	遺跡部 鉢	口 残 31～ 35 高 残 7.6	内外面クロコナデで、口縁部は外面側に垂直な面をなす。外面の口縁部から3.7cmのレベルで製部に浅い段がある。磁子窯産の奈良～平安時代遺物。	N4/0 灰 やや軟い。白～細粒多。白硬 少 硬質	D区南東部遺構外 口全残。肩1片 TX10-21 D区2
72	遺跡部 有台鉢	高 残 1.4 底 残 8.0	外底面は倒立してロクロ右回転(時計回り)で、ヘラナデ後に高台を転り付けしてその周囲を回転ヨコナデ。内底面は使用によってかなり滑らかに磨かれている。	N6/0 灰 やや軟質。白～細粒やや中。 透明細粒少 硬質	D区南東部遺構外 底1/3残 TX10-21 D区3
73	遺跡部 甕	高 残 8.1	外面は縦位の平行叩き。内面は無文当具または有文当具痕をナデ消した痕。底面は暗赤灰色(10R4/1)。権現山SG9区SD38の腹と似た調整だが、色調や焼成は異なる。	5P85/1 青灰 やや軟い。白硬粒多。白硬～粗 粒少 硬質	通路5-7付近 製部1片 D区表下層土
74	土師器 甕	高 残 25.5 最大 残 27.9	外面は製部タテヘラズリ後に下位をヨコヘラズリ。内外面の口一箇所にヨコナデし。外面の一部製部が小さな段をなす。内面は縦部ヨコヘラズリで、製部下位の接合部を薄くするようヘラナデと強いヘラナデを繰り返している。焼熟前や内面の汚れは見られない。	10Y8/4 深い黄褐色 やや軟質。白・黒・透明細～細 粒や中多。白・灰色少 硬質	SK-30高脚の2片とSK 27-40高脚の8片が接合 製1/6残。製1/4残 F区東16、41

第3節 時期不明の溝・集石遺構

SG2区SD-46 (第252図、写真図版8)

SG2区南端のF区で8.5-20.5グリッドにある時期不明の溝。東端はベルト内で終わる。西端と中央部で時期不明のSK-11・15と重複するが、新旧関係は不明である。現地調査時には遺構番号を与えられず、整理作業時に「SD-46」と命名した。この事情からみて、遺構ではなくかなり新しい時期の溝あるいは掘削の可能性もある。

幅49～70cm、残存する深さは7～12cm。底面は東部が僅かに高い傾向を持ち、底面標高は東端で



第252図 権現山遺跡SG2区SD-46遺構

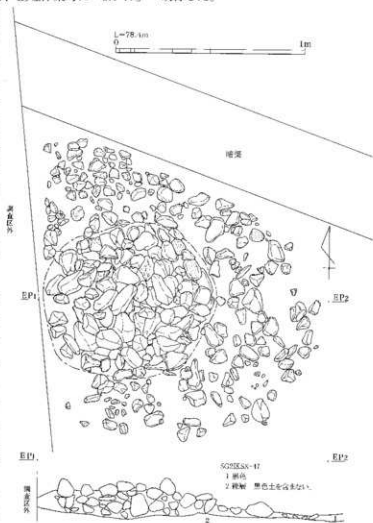
78.51m、西部で78.47m。現地調査時に、おそらく新しい時期の溝と判断されたため、埋土の特徴が記録されていない。遺物は土師器3片（高杯1片と壺甕類2片）だけで、図示できる遺物はなく、遺構の時期も特定できない。

SG2区SX-47（第253図、写真図版8）

SG2区中央西端で、C区の11.0-19.0グリッドにある時期不明の集石遺構。西側は調査区外へ少し続く。北端が、近代以降の暗渠で少し埋されていると考えられる。集石遺構の下部に土坑などは認められなかった。現地調査時には「C区石積」の遺構名で、整理作業時に「SX-47」へ改称した。

古墳中期遺物やHr-FAテフラ層が覆土中にある流路4の底面（礫層直上）に作られているので、古墳中期以前の遺構である。古墳前期の浅間C軽石とSX-47の関係を示す土層は観察できていないが、流路4の埋積土中に浅間C軽石があることからみて、SX-47が浅間C降下より古い可能性がある。流路4東部の底面付近で縄文中期阿玉台IV式の大形破片もあり（写真図版11）、加曾利E式や弥生中期後半の土器片も流路4で出土しているので、縄文・弥生時代まで遡る可能性もある。

中央部では径約80cmの範囲に最大径15cm以下程度の礫が密度高く積まれ、集石の高さは最大3～22cm。その範囲より外は径5～10cmほどの小礫がやや疎らに分布する。図にドットを記入した礫は、実測原因でも描き分けている石で、表面が荒れた石質であろう。礫を覆う土層および礫の間を埋める土は黒色土である。礫が置かれている下面は標高78.12～78.16mで、自然礫層である。遺物は出土しなかった。



第253図 権現山遺跡SG2区SX-47遺構

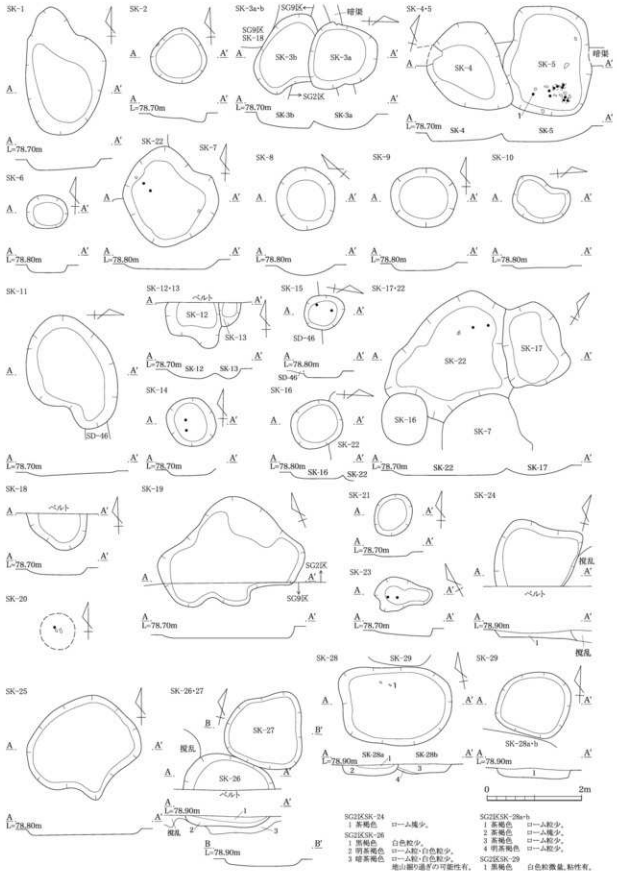
第4節 時期不明の土坑 (第254・255図、写真図版4～8)

時期不明の土坑はSG2区で合計49基を確認した。SG2区北部のA区とC区にSK-101・102があり、南部のF区にはSK-1～45 (SK-3とSK-28はそれぞれa・bの2基)がある。F区土坑群の続きは、南側のSG9区にも見られる。SG2区SK-1～20と101・102の遺構番号は現地調査時に与えたものであり、SK-21～45の番号は整理作業時に命名した。各土坑の詳細を第147表に示す。

土層断面の記録がある土坑は少ない。SK-26・29にはテフラの可能性のある白色粒を含む。SK-102には榛名山から噴出した八崎軽石(Hr-HP, 5.0万年前)の塊および粒を含むことが肉眼観察で記録されているが、テフラ検出分析や屈折率測定で確定された所見ではない。試掘トレンチ調査時に実施した周辺土層のテフラ検出分析でも八崎軽石は確認されていない(第7章第2節)。SG2区SK-28a・31には、権現山遺跡SG9区中央区微高地の遺構外出品(第384図10)と同一個体の破片がある。胴部上～中位がカキメ、下位が真格子叩き調整をおこなう古墳終末期～奈良時代初めの須恵器裏で、三鹿窯製品かもしれない。SK-28a・31は古墳時代または奈良時代の可能性があるといえる。

第147表 権現山遺跡SG2区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重要程度	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	方位	備注
SK-1	8.5-20.0	不整楕円形	重要なし	2.72	1.70	0.20	N5°W	黒褐色土+ローム堆(写真)
遺物は土師器破片2点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-2	8.5-20.5	円形	重要なし	1.19	1.18	0.11		褐色土+ローム堆多(写真)
遺物は土師器破片1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-3a	8.0-20.5	不整円形	SK-3bと重要	1.54	1.36	0.33	N18°W	記録なし
中央を暗渠に切られる。SK-3bと重要するが断片不明。遺物なし。								
SK-3b	8.0-20.5	不整楕円形	SK-3a・SG9区SK-18と重要	1.82	1.02	0.34	N32°E	黒褐色土+ローム堆と白粘土少(写真)
SK-3aおよびSG9区SK-18と重要するが断片不明。南端はSG9区で調査。遺物なし。								
SK-4	8.0-20.5	不整円形	SK-5と重要	2.06	1.60	0.36	N67°W	記録なし
中央を暗渠に切られる。SK-5と重要するが断片不明。遺物なし。								
SK-5	8.0-20.5+8.5-20.5	楕円形	SK-4と重要	2.34	1.88	0.29	N13°W	黒褐色土+ローム堆小(写真)
中央を暗渠に切られる。SK-4と重要するが断片不明。縄文時代のスレイバー1点と弥生土層片が多数出土したが、土師器も混じっているため、弥生時代の遺構ではない。								
SK-6	8.0-20.5	円形	重要なし	0.85	0.70	0.19		黄褐色土+黒褐色土少(写真)
遺物なし。								
SK-7	8.5-20.5	不整円形	SK-22と重要	2.10	2.00	0.20	N6°W	暗褐色土+ローム粒少(写真)
SK-22と重要するが断片不明。遺物は土師器破片4点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-8	8.5-20.5	円形	重要なし	1.33	1.31	0.22		暗褐色土 中位にローム堆(写真)
遺物なし。								
SK-9	8.5-20.5	円形	重要なし	1.38	1.29	0.14		暗褐色土 西半にローム堆(写真)
遺物なし。								
SK-10	8.5-20.5	不整楕円形	重要なし	1.23	0.90	0.04	N9°E	暗褐色土+ローム堆(写真)
遺物なし。								
SK-11	8.5-20.0+8.5-20.5	不整楕円形	SD-46と重要	2.52	1.83	0.10	N74°E	暗褐色土+縄状ローム(写真)
時期不明のSD-46と重要するが断片不明。遺物は土師器破片小片1点のみ。								
SK-12	8.5-20.5	不整形	SK-13と重要	1.12以上	0.99	0.20	N11°E	暗褐色土+ローム堆少(写真)
SK-13と重要するが断片不明。此期はベルトのため調査区外。遺物なし。								
SK-13	8.5-20.5	楕円形	SK-12と重要	0.52以上	0.47	0.21	N16°E	暗褐色土+ローム堆多(写真)
SK-12と重要するが断片不明。此期はベルトのため調査区外。遺物なし。								
SK-14	8.5-20.5	円形	重要なし	1.09	1.03	0.17		記録なし
遺物は土師器小形壺2点。弥生土層片1点も出土したが、そこから混入の可能性あり。								
SK-15	8.5-20.5	円形	SD-46と重要	0.88	0.76	0.14		暗褐色土(写真)
時期不明のSD-46と重要するが断片不明。遺物は土師器破片1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-16	8.5-20.5	円形	SK-22と重要	1.11	1.01	0.13		記録なし
SK-22と重要するが断片不明。遺物なし。								
SK-17	8.5-20.5	不整楕円形	SK-22と重要	1.73	1.35	0.20	N47°W	記録なし
SK-22と重要するが断片不明。遺物は弥生土層片と土師器破片各1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-18	8.5-20.5	不整形	重要なし	0.70以上	0.37	0.14	N88°W	黒褐色土(写真)
北半はベルトのため調査区外。遺物なし。								
SK-19	8.0-20.5	不整方形	重要なし	3.12	2.32	0.24	N18°E	暗褐色土+ローム堆(写真)
南端はSG9区で調査。遺物は弥生土層小片1点のみで、そこから混入の可能性あり。								
SK-20	8.5-20.5	円形	重要なし	—	—	—	南0.16以上	記録なし
相対調査時に掘り込んでいないと記録されている。遺物は弥生土層片1点と土師器片2点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-21	8.5-20.5	円形	重要なし	0.95	0.79	0.08		記録なし
遺物なし。								
SK-22	8.5-20.5	不整形	SK-7・16・17と重要	2.71	2.21	0.17	N35°E	記録なし
SK-7・16・17と重要するが断片不明。遺物は弥生土層片3点と土師器片3点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-23	8.5-20.5	不整楕円形	重要なし	1.24	0.72	0.14	N61°W	記録なし
遺物は弥生土層片2点と土師器片1点のみ。時期を特定できるものではない。								
SK-24	8.5-21.0	不整形	重要なし	2.07	1.57	0.15	N49°E	
南端を暗渠に切られる。遺物なし。								



第254図 権現山遺跡SG2区 時期不明の土坑(1) 遺構

第6章 権現山遺跡 SG2区

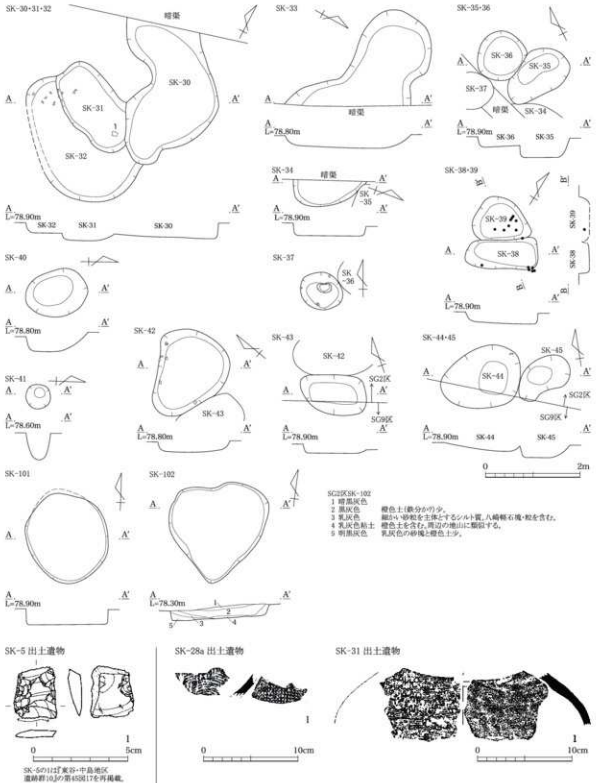
SK-25	8.5-21.0	不整円形	重なりなし	2.40	2.18	0.12	N-80° E	記録なし
南端に別の土坑となる可能性がある[浅い]物みあり。遺物なし。								
SK-26	8.5-21.5	楕円形	SK-27と重なり	1.91	残0.73	0.35	N-77° E	
SK-27と重なるが新訂不明。遺物なし。								
SK-27	8.5-21.0・8.5-21.5	不整円形	SK-26と重なり	1.61	1.51	0.16	N-18° W	記録なし
SK-26と重なるが新訂不明。遺物なし。								
SK-28a	8.5-21.5	楕円形?	SK-28aより新	2.30	1.65	0.25	N-79° W	
SK-28aを切る。遺物は土師器片と古銅器土器一糸白時代初めころの短冊形鏡片各1点のみで。遺物の時期を特定できるものではない。								
SK-28b	8.5-21.5	円形?	SK-28aより古	2.30	1.65	0.25	N-79° W	
SK-28aに切られる。断面図の記録から。遺物はSK-28aから出土したものとと思われる。								
SK-29	8.5-21.5	円形	重なりなし	1.47	1.38	0.24		単層
遺物なし。								
SK-30	8.5-21.5	不整形	SK-31・32と重なり	残2.93	1.76	0.37		記録なし
北側は明渠に切られる。SK-31・32と重なるが新訂不明。遺物なし。								
SK-31	8.5-21.5	楕円形	SK-30・32と重なり	2.07	1.12	0.35	N-57° W	黒周土(写真)
SK-30・32と重なるが新訂不明。遺物は土師器片と古銅器土器一糸白時代初めころの短冊形鏡片1点のみで。遺物の時期を特定できるものではない。								
SK-32	8.5-21.5	楕円形	SK-30・31と重なり	2.92	1.21	0.21	N-57° W	暗褐色土(写真)
SK-30・31と重なるが新訂不明。遺物はごくわずかで。時期を特定できるものではない。								
SK-33	8.0-21.5・8.5-21.5	ひょうたん形	重なりなし	残2.12	2.67	0.24	N-81° W	黒周土 下部にローム塊(写真)
東側は明渠に切られる。遺物なし。								
SK-34	8.0-21.0	楕円形	SK-35と重なり	1.56	残0.55	0.28	N-20° W	記録なし
SK-35とわずかに重なるが新訂不明。西平は明渠に切られる。遺物なし。								
SK-35	8.0-21.0	楕円形	SK-34・36と重なり	1.42	0.95	0.40	N-75° E	記録なし
SK-34とわずかに重なりSK-36と重なるが、ともに新訂不明。遺物なし。								
SK-36	8.0-21.0	円形	SK-35と重なり	1.05	1.04	0.22		記録なし
SK-35と重なるが新訂不明。SK-37と接する。遺物なし。遺物なし。								
SK-37	8.0-21.0	円形	重なりなし	0.91	0.78	0.45以上		記録なし
SK-36と接する。中央を明渠に切られる。調査中にレベルを計測しなかったため、断面図はない。遺物は赤土師器片が少量で、時期を特定できるものではない。								
SK-38	8.0-21.0	長方形	SK-39と重なり	1.52	0.60	0.25	N-67° E	記録なし
SK-39と重なるが新訂不明。遺物は赤土師器片2点と土師器片4点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-39	8.0-21.0・8.5-21.0	不整円形	SK-38と重なり	1.25	0.92	0.22以上	N-68° E	記録なし
SK-38と重なるが新訂不明。遺物は赤土師器片1点と土師器片3点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-40	8.0-21.0	楕円形	重なりなし	1.32	1.00	0.41	N-8° W	記録なし
遺物なし。								
SK-41	8.0-21.0	円形	重なりなし	0.52	0.51	0.58		記録なし
縦層まで掘り込む。遺物なし。								
SK-42	8.0-21.0	楕円形	SK-43と重なり	1.90	1.63	0.26	N-84° E	記録なし
SK-43と重なるが新訂不明。遺物は赤土師器片3点。土師器小形器片1片、森林1片のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-43	8.0-21.0	楕円形	SK-42と重なり	1.37	0.84	0.10	N-66° W	記録なし
SK-42と重なるが新訂不明。南端はSG9区で調査。遺物なし。								
SK-44	8.0-21.0	楕円形	重なりなし	1.68	1.32	0.18	N-82° W	記録なし
重なりなし。南端はSG9区で調査。遺物は土師器小形器片1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-45	8.0-21.0	不整円形	重なりなし	1.20	0.70	0.25	N-65° E	記録なし
南端はSG9区で調査。遺物なし。								
SK-101	13.0-19.0	楕円形	重なりなし	1.99	1.72	0.34	N-5° W	記録なし
遺物なし。								
SK-102	13.0-19.0	不定形	重なりなし	2.18	2.14	0.30	N-6° E	黒色土あり 自然埋没状
不定形だが、円形土坑が削れてこの形になった可能性もある。1層はA区西平全体を覆う黒色土系。3層と5層は西側から流入。遺物なし。								

* 覆土の(写真)はカラー写真による断面内容

第148表 権現山遺跡 SG2区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (m×m)	特 徴	土色 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG2区 SK-28a				
1 遺器類	高 残 2.3	外面は魚鱗形明子、内面は凹凸心円文用貝地。SG2区SK-31および権現山遺跡SG9区中央区遺高増8-21グリッド出土の遺器類と同一個体。三少遺産物の可能性あり。	2.5Y7/2 灰黄 胎土・焼成 白・灰色・透明釉～細粒	割部1片 F区東37
SG2区 SK-31				
1 遺器類	高 残 2.4 最大 残 26.8	残存破片が小さいので復原性は参考値。外面はカキメで腹部近くは浅く、胴部では深い。内面は凹凸心コナナガ。SG2区SK-28aおよび権現山遺跡SG9区中央区遺高増8-21グリッド出土の遺器類と同一個体。三少遺産物の可能性あり。	2.5Y8/1 灰白 胎土・焼成 白・灰色・透明釉～細粒	割1/12片 F区東40

第4節 時期不明の土坑



第255図 権現山遺跡 SG2区 時期不明の土坑(2) 遺構・遺物

第7章 権現山遺跡南部SG2区・SG10区・SG15区周辺の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

東谷・中島地区南部に所在する権現山・杉村・磯岡遺跡の低地で、1994年度確認調査トレンチの土層試料を分析した。ここでは権現山遺跡南部の分析結果を報告する。権現山遺跡北部と杉村遺跡は北部の報告書『東谷・中島地区遺跡群』10の第7章、磯岡遺跡は『東谷・中島地区遺跡群』6の巻末で分析結果をすでに報告した。これら周辺遺跡の分析結果や考古資料の状況を含めたコメントを以下で述べる。

【縄文時代の埋没樹木層】 SG2区流路2付近では、古墳前期のAs-Cよりも下層で自然木が出土している。同様な事例として、権現山SG9区の南に続く県道調査区で低地の自然堆積層中に縄文晩期ころの埋没樹木層を確認し、放射性炭素年代は2,660±60年BPである（正式報告未刊、とちぎ生涯学習文化財団2000）。洪水時には流木が自然流路内や低地に堆積するような環境を示している。西側の台地上ではSG10区に大洞C2式期の竪穴建物があり、SG5区にもC2式期の有孔円盤状土製品が3点ある（第10図）。

【完新世の指標テフラと堆積環境】 権現山SG2区、SG10区北・東側、SG15区南・北側でテフラを分析した。

権現山SG2区北東部（12-21Gと13-21G）・SG15区周辺（14-20Gと16-19G）・SG10区東側（18-22G）で、古墳前期のAs-C軽石から12世紀のAs-BとAs-Kkまでを確認した。As-Cは流路内に堆積層が確認できない場合もあるが、古墳後期初頭のHr-FA層は埋没した自然流路埋土の上部で多くの土層断面に認められる。中期・後期には前期よりも流路の埋没が進み、安定した堆積層が形成されたことがわかる。As-Cより上層には、洪水を示すような砂礫層や流木もない（第241・383図）。SG10区北側（26-18G）だけは古墳時代テフラを確認できず、杉村SG1区の古代道路遺構（推定東山道）を設置するような後世の土地利用で改変された可能性がある。

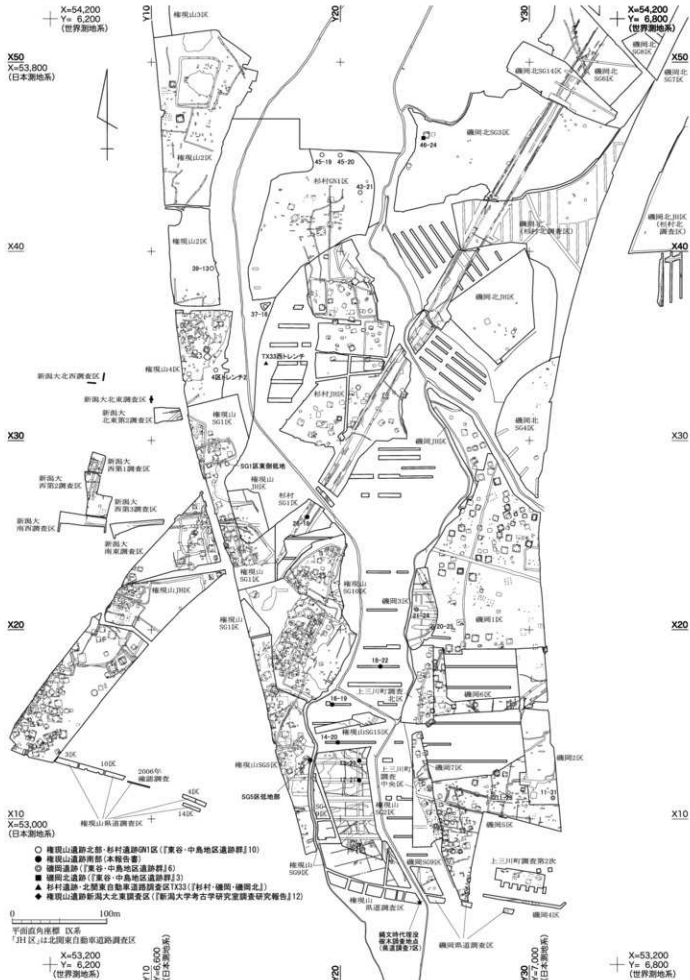
【古墳前期～中期の植生】 As-C下位からHr-FA直下層までの森林植生は落葉広葉樹のコナラ亜属が主で、ハンノキ属の湿地林がしだいに減少した。権現山遺跡北部にある2区東側（39-13G）と同様の分析結果である。SG2区北東部とSG15区北側のHr-FA直下層は、樹木が減りヨシ属やカヤツリガサ科などが繁茂する湿地環境で、水田にあまり適さない。SG2区北半部とSG15区北側には古墳中期の土器を伴う自然流路があり、SG2区では自然流路脇に中期の土坑もあるので、水田耕作以外の活動を低地で行ったことがわかる。

【古墳時代の稲作】 権現山遺跡南部の分析地点では、SG15区北側（16-19G）だけがHr-FA直下層にイネ植物珪酸体を含み、古墳後期初頭以前の稲作を周辺で推定できる。ただし、珪酸体は1,500個/gで少なく、水田遺構も不明で、古墳中期の流路をトレンチで確認しただけである（第390図）。北方の杉村遺跡周辺で古墳後期初めころの稲作が推定されるが、水田遺構は未確認である。杉村遺跡はGN1区でFA上層とFA混層にイネ植物珪酸体を2,000～2,300個/g、北関東自動車道調査区TX33西でFA混層に4,700個/gを含む。

権現山SG2区北東部・SG15区南側・SG10区東側では、古墳前期や後期初頭のテフラ直下層にイネ植物珪酸体がない。権現山遺跡南部の低地がほとんど水田化していないことがわかる。SG2区とSG9区の古墳時代土坑や、土器を廃棄した網状流の自然流路群が水田関連遺構であるとは、考古学的にも考えにくい。

【古代の稲作】 権現山SG2区北東部（12-21G）のAs-B直下層と、SG10区北側（26-18G）のAs-Kk直下層およびAs-B下層にイネ植物珪酸体を含むので、12世紀前半頃の稲作を周辺に推定できる。ただし、珪酸体の量が最も多いAs-B直下層でもそれぞれ1,400個/gおよび2,200個/gで、いずれも低い値である。

北方の杉村遺跡GN1区の東端と北端（43-21と45-20G）では1108年降下のAs-B混層にイネ珪酸体が多い（3,000～6,200個/g）が、水田遺構は確認されていない。周辺の稲作は、SG5区の分析結果（第8章第10節）でもふれる。古環境研究所に委託して実施したテフラ・花粉・植物珪酸体分析結果を以下に掲載する。



第 256 図 権現山遺跡・磯間遺跡周辺の古環境分析実施地点(1/4,000)

第2節 権現山遺跡SG2区・SG10区・SG15区のテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

宇都宮市域には、日光火山群男体火山をはじめ、浅間火山や榛名火山などの噴火に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が分布している。これらテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされており、それらとの層位関係を求めることで遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代がわかる示標テフラがある。

東谷中島遺跡の発掘調査では、低地部や台地部の土層断面中にテフラの層や粒子の濃集層が検出された。そこで地質調査を行い土層の層序を記載することになった。そしてテフラおよび土壌の試料などを対象にテフラ検出分析を行って、噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出同定を行い、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。さらに屈折率測定を行って、示標テフラとの同定の精度を向上させた。

調査分析の対象とした地点は、12-21グリッド、13-21グリッド、14-20グリッド、16-19グリッド、18-22グリッド、26-18グリッドの6地点である。

2. 土層の層序

(1) 12-21 グリッド [権現山遺跡SG2区北東部低地]

低地部に位置するこの地点では、下位より灰色砂層（層厚 25cm）、黒褐色土（層厚 3cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 1cm）、黒褐色土（層厚 14cm）、白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚 9cm）、黒褐色土（層厚 2cm）、成層したテフラ層、黒褐色土（層厚 0.3cm）、灰色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）、黒褐色砂質土（層厚 21cm）、暗褐色作土（層厚 4cm）、作土（層厚 12cm）が認められる（第 257 図上）。

これらのうち成層したテフラ層は、下部の褐色粗粒火山灰層（層厚 2cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）から構成されている。

(2) 13-21 グリッド [権現山遺跡SG2区北東部低地]

低地部に位置する本地点では、下位より黒泥層（層厚 3cm）、菓理の発達した灰色砂層（層厚 5cm）、木本類の大型植物遺体を含む灰色がかった暗褐色泥層（層厚 12cm）、白色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、黒灰色粘質土（層厚 9cm）、白色粗粒火山灰混じり黄色細粒火山灰層（層厚 2cm）、暗灰色粘質土（層厚 8cm）、白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚 11cm）、白色粗粒火山灰混じり灰色土（層厚 13cm）、暗灰色土（層厚 2cm）、成層したテフラ層、黒灰色砂質土（層厚 7cm）、暗灰色砂質土（層厚 18cm）、灰色土（層厚 23cm）、作土（層厚 18cm）が認められる（第 257 図上）。

これらのうち成層したテフラ層は、下部の黄褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚 0.5cm）から構成されている。

(3) 14-20 グリッド [権現山遺跡SG15区南側低地]

低地部に位置するこの地点では、下位より灰色砂礫層（層厚 44cm、礫の最大径 74mm）、灰色砂質土（層厚 15cm）、砂混じり暗灰色土（層厚 14cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、暗灰色土（層厚 4cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）、灰褐色砂質土（層厚 3cm）、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚 16cm）、暗褐色土（層厚 18cm）、作土（層厚 18cm）が認められる（第 257 図上）。

(4) 16-19 グリッド [権現山遺跡SG15区北側低地]

ここで検出された溝の覆土は、下位より黒色粘質土（層厚 8cm）、灰色砂の薄層を挟む黒灰色土（層厚 19cm）、黒褐色土（層厚 14cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 1cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚 20cm）、暗灰色粘質土（層厚 4cm）、黒灰色粘質土（層厚 6cm）、黄褐色粗粒火山灰層（層厚 0.4cm）、黒色土（層厚 3cm）、砂混じり黒褐色土（層厚 15cm）、灰褐色土（層厚 16cm）、作土（層厚 21cm）から構成される（第 257 図上）。これらの土層のうち、下位より2層目の黒灰色土からは、古墳時代中期の土器

が検出されている。

(5) 18-22 グリッド [権現山遺跡 SG10 区東側低地]

低地部に位置するこの地点では、下位より暗灰色土（層厚 12cm 以上）、灰色粗粒火山灰層（層厚 0.8cm）、暗灰色土（層厚 3cm）、暗灰色砂質土（層厚 3cm）、ラミナ状に灰色砂層を挟む暗灰色土（層厚 18cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 0.6cm）、白色粗粒火山灰混じり灰褐色砂質土（層厚 13cm）、暗灰色砂質土（層厚 8cm）、暗灰色砂質土（層厚 23cm）、灰色砂質土（層厚 12cm）が認められる（第 257 図下）。

(6) 26-18 グリッド [権現山遺跡 SG10 区北側低地にある杉村遺跡 SG1 区]

低地部と台地部の中間点に位置するこの地点では、灰褐色粘質土（層厚 22cm 以上）、暗褐色土（層厚 1cm）、成層したテフラ層、暗褐色土（層厚 0.3cm）、灰色細粒火山灰層（層厚 1.2cm）、黄色シルト層（層厚 1cm）、黒色土（層厚 0.8cm）、褐色粗粒火山灰混じり灰色土（層厚 26cm）、灰色土（層厚 8cm）、暗灰色表土（層厚 17cm）が認められる（第 257 図下）。これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下部の褐色粗粒火山灰層（層厚 1.5cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）から構成されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

前述した地点において認められたテフラ層およびテフラの遺集層について、示標テフラの検出同定を行うためにテフラ検出分析を行った。また示標テフラの降灰が期待された土壌についても、基本的に 5cm ごとに採取された試料のうちの 5cm おきの試料を対象にテフラ検出分析を試みた。分析の対象とした試料の合計は、43 点である。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

1) 12-21 グリッド [権現山遺跡 SG2 区北東部低地]

この地点では、試料番号 3 に白色で比較的良好に発泡した軽石（最大径 2.7mm）が比較的多く認められる。この軽石の斑品には、角閃石や斜方輝石が認められる。このテフラは、軽石の特徴さらに淘汰が良くないことなどから Hr-FA に由来するものと考えられる。したがって試料番号 3 のテフラ層は、Hr-FA に由来する可能性が大きいと考えられる。

試料番号 2 には、淡褐色で発泡の良い軽石がとくに多く認められた。この軽石の最大径は 1.3mm で、斑品に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から As-B に由来すると考えられ、試料番号 2 のテフラ層は As-B に同定される。さらに試料番号 1 には、淡褐色（ごく少量の褐色軽石を含む）で発泡の良い軽石が多く認められた。この軽石の最大径は 1.3mm で、斑品に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 1128（大治 3）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間泊川テフラ層（As-Kk, 早田, 1991, 1994）に由来すると考えられる。層相を合わせると、試料番号 1 のテフラ層は As-Kk に同定される。

2) 13-21 グリッド [権現山遺跡 SG2 区北東部低地]

ここでは、試料番号 2 に As-C に由来する灰白色軽石（最大径 2.0mm）がとくに多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 2 のテフラ層は As-C に同定される。また試料番号 1 には Hr-FA に由来すると考えられる白色軽石（最大径 2.0mm）が比較的多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 1 のテフラ層は、Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。なお試料番号 1 より上位にある成層し

たテフラ層は、層相から As-B に同定される。

3) 14-20 グリッド [権現山遺跡 SG15 区南側低地]

試料番号 1 には、As-C に由来する灰白色軽石 (最大径 2.1mm) がとくに多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 1 のテフラ層は、As-C に同定される。またその上位の黄色細粒火山灰層は、層相や層位などから Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。

4) 16-19 グリッド [権現山遺跡 SG15 区北側低地]

この地点の試料番号 1 には、Hr-FA に由来すると思われる白色軽石 (最大径 1.9mm) が少量含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 1 のテフラ層は、Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。またその上位の黄褐色粗粒火山灰層は、層相や層位などから As-B に同定されるものと考えられる。

5) 26-18 グリッド [権現山遺跡 SG10 区北側低地にある杉村遺跡 SG1 区]

試料番号 1 の黄色シルト層には、下位の As-Kk に由来すると思われる淡褐色と褐色の軽石 (最大径 1.1mm) がとくに少量認められた。それ以外に特徴的なテフラ粒子は認められなかったことから、試料番号 1 の洪水が何らかの火山活動によって引き起こされたものとは考えにくいようである。なおその下位の 2 層のテフラについては、層相から下位より As-B と As-Kk に各々由来していると考えられる。

なお分析の対象としなかった 18-22 グリッド [権現山遺跡 SG10 区東側低地] の 2 層のテフラ層は、層相から各々下位より As-C と As-B に同定されるものと考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

As-C に同定された 14-20 グリッド試料番号 1、Hr-FA、As-B に同定された 12-21 グリッドの試料番号 3 および 2 の 3 試料について位相差法 (新井, 1972) による屈折率の測定を行い、示標テフラとの同定の精度を向上させることにした。

(2) 測定結果

屈折率の結果を第 150 表に示す。14-20 グリッド試料番号 1 には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は、1.513-1.519 である。また斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.707-1.711 である。これらの特徴は As-C のそれと一致する。

また 12-21 グリッド試料番号 3 には角閃石のほか斜方輝石や磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は 1.500-1.502、斜方輝石の屈折率 (γ) は 1.710 ±、角閃石の屈折率 (n_2) は 1.672-1.680 である。これらの重鉱物の組合せや屈折率は Hr-FA の特徴と一致する。さらに試料番号 2 には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は 1.525-1.530、斜方輝石の屈折率 (γ) は 1.708-1.710 である。これらの重鉱物の組合せや屈折率は、As-C の特徴と一致する。以上のように、屈折率測定の結果、テフラ検出分析によるテフラ同定の結果を支持している。

第149表 権現山遺跡SG2区・SG10区・SG15区
テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
12-21G	1	+++	淡褐	1.3
	2	++++	淡褐	1.3
	3	++	白	2.7
13-21G	1	++	白	2.0
	2	++++	灰白	2.0
14-20G	1	++++	灰白	2.1
16-19G	1	+	白	1.9
26-18G	1	+	淡褐	1.1

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度,
+: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

第150表 権現山遺跡SG2区・SG15区
屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	屈折率
14-20 グリッド	1	opx.cpx.mt	gl (n) :1.513-1.519 opx (γ) :1.707-1.711
		12-21 グリッド	2
3	ho>opx.mt		

屈折率の測定は、位相差法 (新井, 1972) による。
gl: 火山ガラス, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石,

5. まとめ

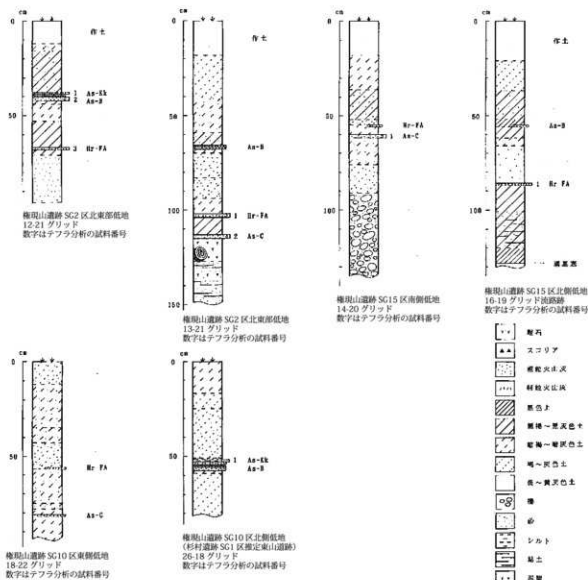
東谷中島遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より男体七本桜軽石 (Nt-S, 約 1.2 ~ 1.3 万年前)、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約 6,300 年前)、浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉)、榛名二ツ岳沢川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭)、浅間 B テフラ (As-B, 1108 年)、浅間粕川テフラ (As-Kk, 1128 年) に同定されるテフラ層またはそのテフラ粒子が検出された。

(報告書編者註: 男体七本桜軽石と鬼界アカホヤ火山灰は杉村遺跡 GN1 区の 45-20 グリッドで検出され、今回掲載した分析結果には登場しない。45-20 グリッドの分析結果は『東谷・中島地区遺跡群』10 の 162 ページに掲載した。)

文献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラ起源の広域テフラ-アカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, p.143-163.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編『筑碓北原遺跡・今井神社古墳群・筑碓青柳遺跡』, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no.53, p.2-7.



第 257 図 権現山遺跡 SG2・SG10・SG15 区の土層柱状図とテフラ分析試料

第3節 権現山遺跡SG2区・SG10区・SG15区の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。また、イネの消長を検証することで埋藏水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、12-21グリッドで6点、13-21グリッドで5点、14-20グリッドで1点、16-19グリッドで4点、18-22グリッドで2点、26-18グリッドで4点の計22点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 μm 、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42kHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 μm 以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94(稲実重は1.03)、8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第151表および第258図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、39-13グリッドと20-25グリッドを除く地点については、水田跡の探査が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属など)、タケ亜科(おもにネザサ節)の主要な5分類群に限定した。〔報告書編者註:上記の39-13グリッドは『東谷・中島地区遺跡群』10, p.169で報告した権現山遺跡2区、20-25グリッドは『東谷・中島地区遺跡群』6, p.308で報告した磯岡遺跡3区を指す。〕

〔イネ科〕

機動細胞由来:イネ、キビ族(ヒエ属など)、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、ジュズダマ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、くさび型、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)。

第151表 権現山遺跡 SG2-SG10-SG15区 植物珪酸体分析結果

※主要な分類群について詳細

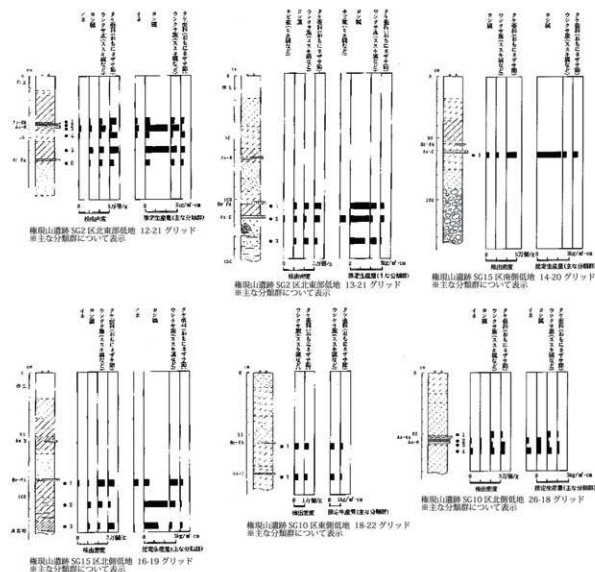
検出頻度(単位: ×100個/目)

分類群 \ 区別	権現山遺跡 SG2区 北東部低地 12-21グリッド					権現山遺跡 SG2区 北東部低地 13-21グリッド					権現山遺跡 SG15区 南側低地 14-20 グリッド			権現山遺跡 SG15区 北側低地 16-19グリッド			権現山遺跡 SG10区 東部低地 18-22 グリッド			権現山遺跡 SG10区 北側低地 (杉木遺跡 SG1区 東部山遺跡区) 26-18グリッド				
	1	2	3	4	5	6	1	2	2'	2''	3	1	1'	2	3	1	2	3	1	2	3	4		
イネ	8			14	8						8					16	15					7	22	
キビ類(ヒエ属など)											8													
ヨシ類	8	7	36	8	38	8	31	31	30	7	23	38	8	30	37	22						7	7	7
ウシクサ類(スズキ属など)	31	7	65	15	45	30	46	46	23	30	45	31	64	22	45	22	37	38	31	7	22	36		
ササ類(おもにミササギ属)	63	15	22	85	91	45	69	46	61	45	30	99	64	45	22	52	44	30	15	7	44	44		

検定生産量(単位: kg/ml-sec)

イネ	0.23	0.43	0.23								0.64					0.47	0.44					0.22	0.64
キビ類(ヒエ属など)											0.64												
ヨシ類	0.50	0.47	2.28	0.49	2.38	0.48	1.94	1.95	1.92	0.47	1.43	2.41	0.50	1.88	2.36	1.42					0.47	0.46	0.46
ウシクサ類(スズキ属など)	0.39	0.09	0.81	0.19	0.56	0.37	0.57	0.58	0.28	0.37	0.56	0.38	0.79	0.28	0.56	0.28	0.46	0.47	0.38	0.09	0.27	0.45	
ササ類(おもにミササギ属)	0.36	0.07	0.10	0.41	0.44	0.22	0.33	0.22	0.29	0.22	0.14	0.48	0.31	0.21	0.11	0.25	0.21	0.14	0.07		0.21	0.21	

※区別の検出率を1.0と仮定して算出。



第258図 権現山遺跡 SG2-SG10-SG15区の植物珪酸体分析結果

クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

5. 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) 12-21 グリッド（第258図上段左）〔権現山遺跡SG2区北東部低地〕

As-Kk直上層（試料1）からHr-FA直下層（試料6）までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk直上層（試料1）とAs-B直下層（試料3、4）からイネが検出された。このうち、As-B直下層（試料3）では密度は1,400個/gと比較的低い値であるが、直上をAs-B層で覆われていることから上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の試料では、1,000個/g未満と低い値である。

(2) 13-21 グリッド（第258図上段中）〔権現山遺跡SG2区北東部低地〕

Hr-FA直下層（試料1）からAs-Cの下位層（試料3）までの層準について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 14-20 グリッド（第258図上段右）〔権現山遺跡SG15区南側低地〕

As-C直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

(4) 16-19 グリッド（第258図下段左）〔権現山遺跡SG15区北側低地〕

Hr-FA直下層（試料1）から溝基底（試料3）までの層準について分析を行った。その結果、Hr-FA直下層（試料1、1'）からイネが検出された。密度は約1,500個/gと比較的低い値であるが、直上をHr-FA層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(5) 18-22 グリッド（第258図下段中）〔権現山遺跡SG10区東側低地〕

Hr-FA直下層（試料1）およびAs-C直下層（試料2）について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(6) 26-18 グリッド（第258図下段右）〔権現山遺跡SG10区北側低地にある杉村遺跡SG1区〕

As-Kk直上層（試料1）からAs-Bの下層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk直下層（試料2）とAs-Bの下層（試料4）からイネが検出された。このうち、As-Bの下層（試料4）では密度が2,200個/gと比較的低い値であり、As-Kk直下層（試料2）でも1,000個/g未満と低い値であるが、それぞれ直上層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、各層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

以上のように、43-21グリッドのAs-B混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12-21グリッドのAs-B直下層や16-19グリッドのHr-FA直下層、26-18グリッドのAs-B下層、45-20グリッドのAs-B混層とHr-FA混層などでも稲作が行われていた可能性が認められたが、密度は比較的低い値である。その原因としては、1) 稲作が行われていた期間が短かったこと、2) 洪水などによって耕作土が流出したこと、3) 土層の堆積速度が速かったこと、4) 採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、5) 稲の生産性が低かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

6. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ

類が含まれる)やキビ族(ヒエヤアワ、キビなどが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはキビ族とジュズダマ属が検出された。

キビ族は、13-21グリッドのAs-C直下層(試料2)、45-20グリッドのHr-FA混層(試料3)、43-21グリッドのAs-B下層(試料3)、39-13グリッドの泥炭層(試料3)から検出された。キビ族にはヒエヤアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、ここでヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は低いと考えられる。

ジュズダマ属は、39-13グリッドのAs-C下層(試料1、2)と最下層(試料4)から検出された。同属には野草のジュズダマの他に栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別するのは困難である。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、各層準でハトムギが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題とした。

7. 植物珪酸体分析からみた植生・環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

As-Cより下位では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、ヨシ属やウシクサ族(スキ属など)、タケ亜科なども少量検出された(第258図)。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題とした。

おもな分類群の推定生産量(各図の右側)によると、As-Cより下位ではヨシ属が卓越しており、As-C混層からHr-FA直下層にかけても多くの地点でヨシ属が優勢となっていることが分かる。

これらの結果から、Hr-FAより下位の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境が継続されていたものと考えられ、Hr-FA直下層の時期に調査区の一部でそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

8. まとめ

以上のように、43-21グリッドの浅間Bテフラ(As-B, 1108年)混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12-21グリッドのAs-B直下層や16-19グリッドの榛名二ツ岳澗川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下層、26-18グリッドのAs-B下層、45-20グリッドのAs-B混層とHr-FA混層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA直下層の時期に調査区の一部でそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

(報告書編者註) 上記「8. まとめ」等で述べられている39-13と43-21と45-20グリッドは『東谷・中島地区遺跡群』10のp.167-168で報告済の権現山遺跡2区と杉村遺跡GN1区を指す。

参考文献

杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究, 第2号: p.27-37
杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕遺跡のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20:p.81-92。

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9:p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17:p.73-85。



第 259 図 権現山遺跡 SG2・SG10・SG15 区の植物珪酸体の顕微鏡写真

第4節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、13-21 グリッドで 3 点、16-19 グリッドで 3 点の計 6 試料である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村 (1973) を参考にし、以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
 - 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
 - 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
 - 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
 - 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
 - 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。
- 以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン()で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結果

分析の結果、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉26、シダ植物胞子2形態の計60分類群が同定された。花粉遺体一覧を表に示し、花粉数が100個以上の試料は樹木花粉および花粉総数を基数とする花粉組成図を作成した。以下に同定された分類群を示す。

[樹木花粉]

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、キハダ、カエデ属、トチノキ、シナノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、ニワトコ属-ガマズミ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、バラ科、ウコギ科

[草本花粉]

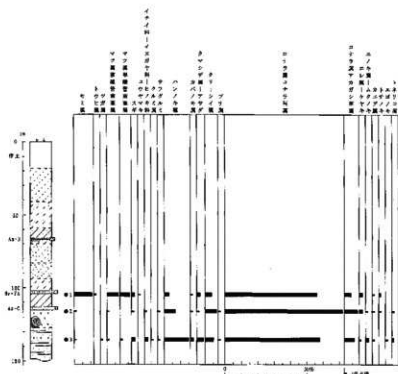
ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、イボクサ、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、セリ科、シソ科、ナス科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

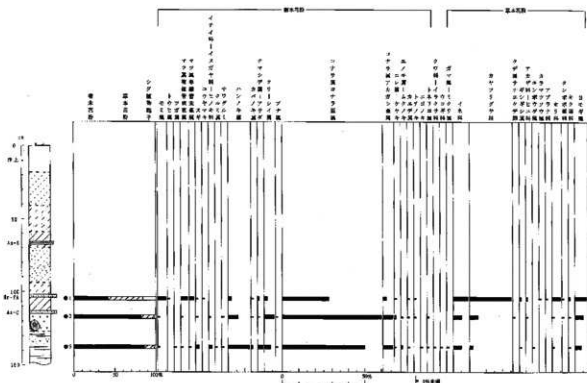
単条溝胞子・三条溝胞子

(1) 13-21 グリッド (第260・261図) [権現山遺跡 SG2区北東部低地]

試料3では草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属、クリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。ハンノキ属は、湿地林を形成するハンノキとみなすのが妥当である。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が主に出現するが低率であり、ガマ属-ミクリ属も出現する。試料2も試料3と傾向が類似し、草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、クリーシイ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属が主に伴われる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現するが低率である。試料1では草本花

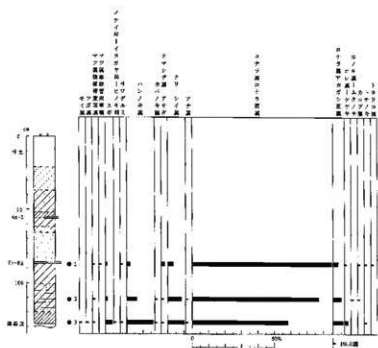


第260図 権現山遺跡SG2区13-21グリッドにおける樹木花粉組成図

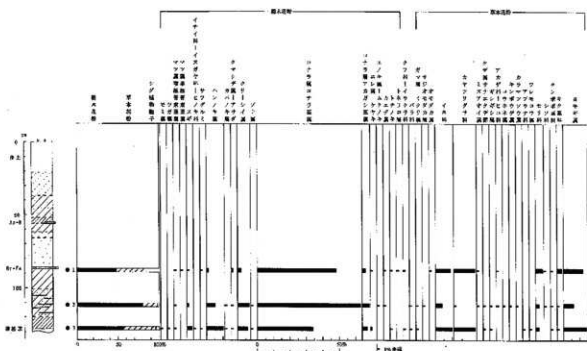


第261図 権現山遺跡SG2区13-21グリッドにおける花粉総数組成図(花粉総数が基数)

粉の占める割合が増加し、樹木花粉と同程度となる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、モミ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属の針葉樹とハンノキ属、クレーシイ属の広葉樹が伴われる。草本花粉ではカヤツリグサ科が高率であり、イネ科、ヨモギ属、セリ科などが伴われる。



第 262 図 権現山遺跡 SG15 区北側低地 16-19 グリッドにおける樹木花粉組成図



第 263 図 権現山遺跡 SG15 区北側低地 16-19 グリッドにおける花粉組成図(花粉総数が基数)

(2) 16-19 グリッド (第 262・263 図) [権現山遺跡 SG15 区北側低地]

試料 3 では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属、クリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉ではヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科が主出現する。試料 2 では樹木花粉の占める割合が高くなる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、クリーシイ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属が主に伴われる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが出現するが低率であり、ガマ属一ミクリ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属が出現する。試料

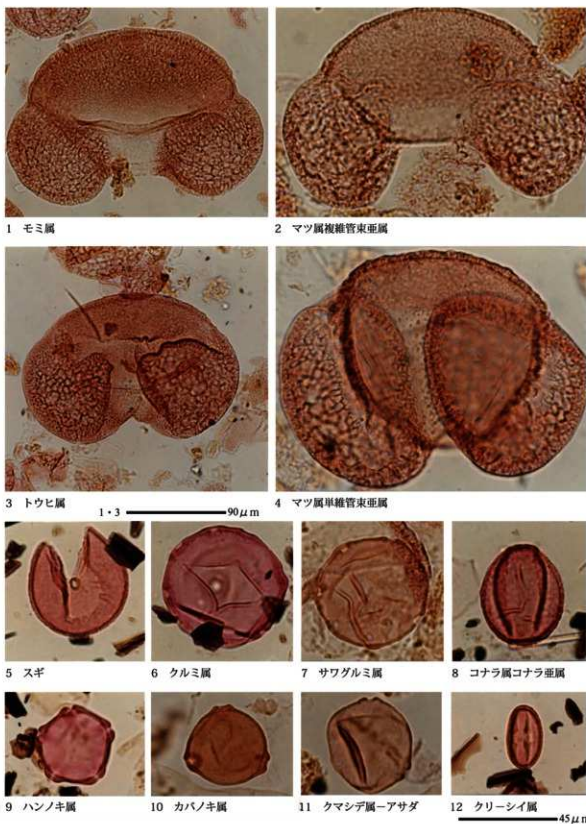
第152表 権現山遺跡SG2・SG15区 花粉分析結果

学名	和名	SG2区北東部低地			SG15区北側低地		
		13-21グリッド			16-19グリッド		
		1	2	3	1	2	3
分類群							
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Abies</i>	モミ属	20	1	2			1
<i>Picea</i>	トウヒ属	1					
<i>Tsuga</i>	ツガ属			1			1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑維束亜属	13	1	1	1	1	1
<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属単純維束亜属	11		1	2		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3	1	7	3	4	15
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1					
Taxaceae-Cephalotaxaceae	イチイ科-イスガヤ科		1	7			1
	-Cupressaceae						
<i>Juglans</i>	クルミ属			2			
<i>Pterocarya thoiifolia</i>	サワグルミ		1	3	1		2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	6	24	59	6	19	56
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1	6		1	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属						
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	4	1	15	6	2	2
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	7	25	20	7	26	36
<i>Fagus</i>	ブナ属		2	2		2	3
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	101	250	226	213	246	204
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	7	26	25	7	16	20
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	3	6	1	2		7
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		3	6		1	
<i>Acer</i>	カエデ属	1	1	2	1	1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	2	2		1		2
<i>Styrax</i>	エゴノキ属			1			
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		2	4	2		

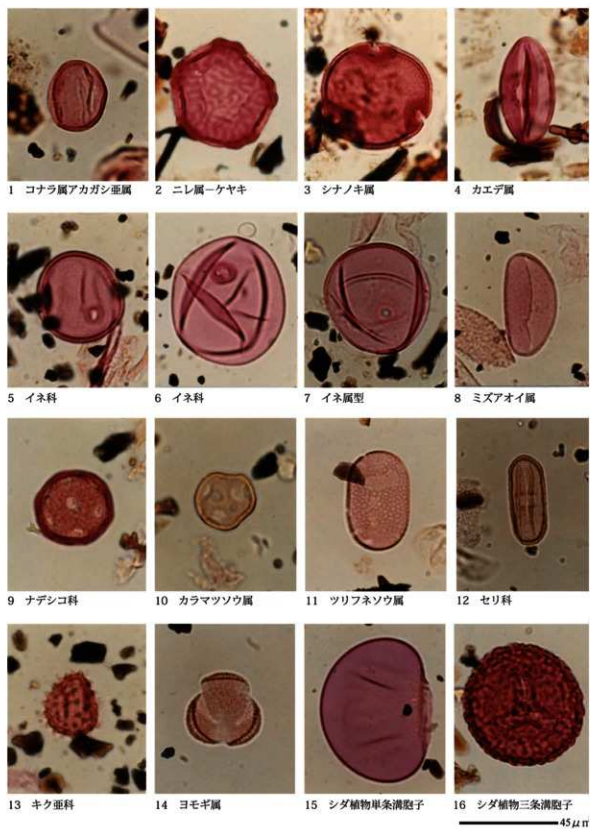
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1	2		1
Rosaceae	バラ科					2	1
Araliaceae	ウコギ科			1			

Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属			1		1	2
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属					1	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				2		
Gramineae	イネ科	34	20	23	38	15	60
<i>Oryza type</i>	イネ属型				3		2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	91	20	9	59	2	79
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属				1	1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		2			1	1
<i>Rumex</i>	ギンギン属	4		1		1	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	5	1		3	1	
<i>Nuphar</i>	コウホネ属					1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			1		1	
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	2				2	
Cruciferae	アブラナ科	2					1
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属						1
Umbelliferae	セリ科	17	1	4	16	9	14
Labiatae	シソ科		1		4	1	
Lactuosoideae	タンポポ草科	1	1		4	2	1
Asteroidae	キク草科	4	1	4	11	3	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	26	19	16	53	25	85

Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	71	5	1	79	10	24
Trilate type spore	三条溝胞子		1	1	4	1	5
Arboreal pollen	樹木花粉	181	348	391	252	319	353
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	2	2	2	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	186	66	59	194	67	250
Total pollen	花粉総数	367	414	452	448	388	605
Unknown pollen	未同定花粉	3	2	7	4	4	1
Fern spore	シダ植物胞子	71	6	2	83	11	29



第 264 図 権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (1)



第 265 図 権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (2)

1では草本花粉の占める割合が増加し、樹木花粉と同程度となる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占する。草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科を主に出現し、オモダカ属、ミズアオイ属も出現する。

4. 花粉分析からみた植生・環境・農耕

(1) 13-21 グリッド (第260・261図) [権現山遺跡 SG2区北東部低地]

As-Cより下位(試料2、3)の堆積当時は、周辺にはコナラ属コナラ亜属を主としてクリーシイ属、クマシデ属アサダなども見られる落葉広葉樹林が分布していたと推定される。また、周囲にはハンノキの湿地林も分布していたと考えられるが、気候の乾燥化などによってしだいに減少したものと推定される。コナラ属アカガシ亜属は低率であり、やや遠方で森林を形成していたと考えられる。

草本は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、ガマ属ミクリ属が主に繁茂する小規模な水湿地が分布していたと推定される。また、その周囲のやや乾燥したところにはヨモギ属が繁茂していたと考えられる。

Hr-FAの直下(試料1)の時期では、森林が減少し、草本の繁茂する湿地が拡大したと推定される。カヤツリグサ科が主に繁茂する湿地であり、水の循環が悪く、水田にはあまり適さない環境であったと推定される。周辺地域には、コナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林や、モミ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単管束亜属などの針葉樹が分布していたと考えられる。

(2) 16-19 グリッド (第262・263図) [権現山遺跡 SG15区北側低地]

試料はすべてHr-FAの下位の時期である。周囲はコナラ属コナラ亜属を主とする森林がやや多く分布し、クリーシイ属なども構成要素であったと考えられる。下部(試料3)ではハンノキ(ハンノキ属)の湿地林も分布していたと考えられるが、気候の乾燥化などによってしだいに減少したものと推定される。

溝の中はカヤツリグサ科、イネ科、ガマ属ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが繁茂する水湿地の環境であったとみなされる。溝の周囲にはヨモギ属の繁茂するやや乾燥した日当たりの良いところも分布していたと推定される。

5. 小結

浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)より下位から榛名ニツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下層にかけては、森林植生としてはコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が優勢であり、周辺にはハンノキ(ハンノキ)の湿地林が広がっていたと考えられる。Hr-FA直下層では、樹木が減少してイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が増加したと考えられ、やや開けた景観を呈していたと推定される。

参考文献

- 中村純(1973)花粉分析, 古今書院。
 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法, 角川書店。
 日本第四紀学会編(1993)第四紀試料分析法, 東京大学出版会。
 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。

- 中村純(1980)日本産花粉の標徴, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集。
 中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として, 第四紀研究13。
 中村純(1977)稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学 第10号。

第8章 権現山遺跡 SG5 区

権現山遺跡 SG5 区は、宇都宮市東谷町字杉村 912-1・912-2、東谷町字下原 7・8・9・10 に所在し、「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地する。権現山遺跡の中心部と考えられる首長層居館跡 2 基のうち南側居館の東半部をとりまく遺構集中地区である。SG5 区の位置は北緯 36° 28' 55"、東経 139° 54' 20" (世界測地系)、発掘調査前の現況地形は台地部標高 79.7 ~ 80.5m、東側の低地部 (標高 79.1 ~ 79.5m) との比高が約 0.6 ~ 1.1m である。SG5 区の範囲は南北長 240m × 東西幅 10 ~ 40m で、調査面積は 7,000m²。

権現山遺跡 SG5 区の北東側は、SG10 区の遺構密集地区へ続く。ただし、SG5 区北端部から SG10 区西部にかけての部分は、地山ローム層までおよぶ土取痕で攪乱されていて、遺構のほとんどが消滅している。SG5 区の西側隣接地は、2012 年 9 月に新潟大学考古学研究室が調査して SA-151 や SD-227 の続きを確認している。SG5 区から未調査部分を中間にはさんで 90 ~ 250m 西側には、北関東自動車道建設に伴って調査した権現山遺跡 A 区 (谷中・大島編 2001) がある。SG5 区の東側低地部には、権現山遺跡 SG2 区・SG9 区・SG15 区の土坑群と流路跡が隣接する。

第1節 古墳時代の居館 (居宅) 関連施設

方形柵列遺構 (SG5 区 SA-151) の北側と南側に区画溝を伴う遺構である。北側の区画溝は SG5 区 SD-43 と SG10 区 SD-221 で、その中間は陸橋状に途切れる。南側の区画溝は SG5 区 SD-227 が該当する可能性を持つが、東側が SD-101 に切られているために不明な部分が多い。SD-101 と同様に SD-227 も北側へ向かってカーブする溝であったと想定した場合には、北側区画溝が南へ向かってカーブすることと対応していたと考えることもできる。

SG5 区 SD-43 (北側区画溝) (第 269・270 図、写真図版 19)

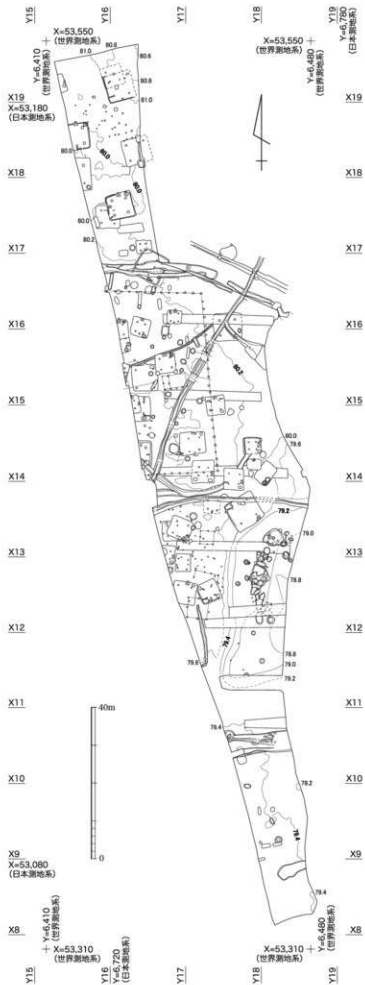
【位置】 SG5 区中央北寄りの 16・16・17 グリッドにあり、SG10 区まで延びる。東端部は SG10 区 SD-43 として調査を行った (第 159 図)。古墳中期中～後葉の SI-100 を切り、ほぼ平行する古墳後期の SD-44 に切られる。西側は調査区外となる。

【規模と形状】 約 3.6m の間 (陸橋?) をあけて東側にある SG10 区 SD-221 と対応して、方形柵列遺構を中心とした居館の北側を区画する溝の可能性が高い。東端部は SG10 区 SD-43 として調査を行ったので、SG5 区と SG10 区の両者を接続した図面を、第 269 図上段に示した。ほぼ東西方向に直線的に伸び、長さは SG5 区で 22.8m、SG10 区を含めると 30.3m である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦な部分が多い。幅は 1.00 ~ 2.10m、底面の幅は 0.70 ~ 1.60m、深さは 0.26 ~ 0.60m である。

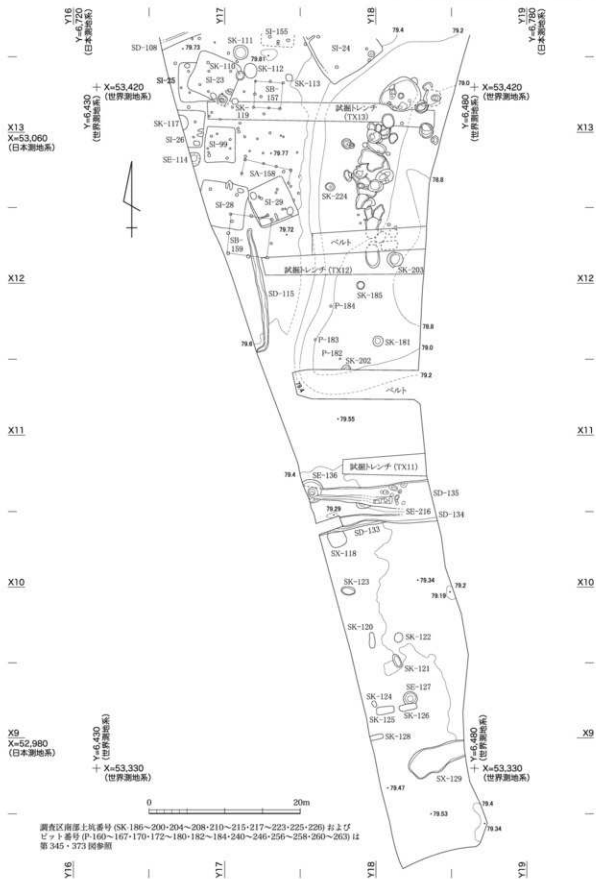
【覆土】 レンズ状の自然堆積である。最上層に白色粒子 (火山灰か) を多く含む。断面図 F-F' に示した位置で、古墳中期の SI-100 と、SI-100 を切る SD-43・44 の埋土を採取してテフラ検出分析を実施した (SI-100 の土層断面 C-C' および本章第 2 節を参照)。その結果によると、SD-43 の上層部で確認された白色軽石が、古墳後期初頭の榛名二ツ岳渋谷川テフラ (Hr-FA) である可能性が高い。

【遺物出土状況】 古墳中期中～後葉の SI-100 を切るので、SI-100 から多くの遺物が流入した可能性がある。「SD-43・44」出土として取り上げた土師器椀形杯・高杯・壺・甕が 2 袋分あり、ほとんどが SD-43 の時期と考えられたので、SD-43 出土として扱った。ただし、これにも SI-100 の遺物が混入している可能性はある。

【出土遺物】 溝としては遺物が多い。高杯が多いのが特徴的で、杯・甕・鉢が次いで多い。小形壺・鉢はごくわずかである。杯・鉢・小形壺の外面に煤が少量付着したものがある。高杯は脚上半で見ると 6 個体あり、10 と 13 はややハの字に開く形状である。脚の中程がふくらむ 9 と 14 はやや古い特徴なので、SI-100 か



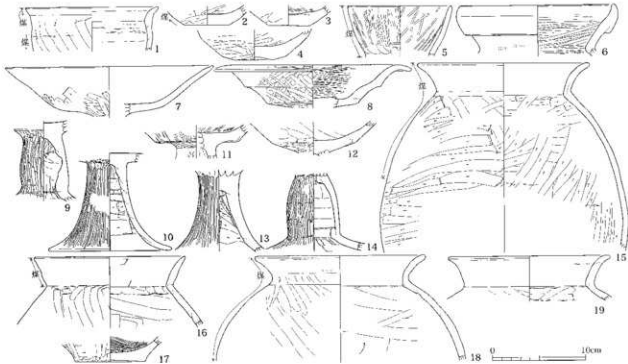
第 266 図 権現山遺跡 SG5 区 全体図 (1/1,000・等高線主曲線 20cm)



第268図 権現山遺跡SG5区 南半部全体図 (1/500・等高線主曲線20cm)

らの混入品も含む可能性がある。受口口縁の壺(6)は、5区ではSD-227などにある。図化以外の大形壺類は底部で数えて4~5個体(上げ底1点、他は平底)がある。図示以外の土師器は合計494片・5,966gで、内訳は杯鉢類83片・664g、高杯50片・964g、小形壺8片・166g、壺類353片・4,172g。

古墳中期末~後期中葉頃の杯などが少数混じっているが、遺物総体の時期は古墳中期後葉とみられる。古相の特徴を持つ遺物はSI-100から流入したものかもしれない。その場合には、SD-43よりも古いSI-100を中期後葉の古相と考えることになる。



第270図 権現山遺跡SG5区SD-43(2)遺物

第153表 権現山遺跡SG5区SD-43出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.1 高 残 4.6	内口口縁で、口縁端部はさらに外反する。外面口縁部ヨコナデ。体部斜位 のツナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部ナデのちわずかにミガキ。表面は 表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。外面口縁部および体部下 下に泥が付着しており、ややくびれて頸部になる体部上平には泥が付着 しない。	5YR6/6 粉 やや緻密 白・黒・赤・透明 粒少、赤・灰色顔料微量 やや硬質	底上32cm [1]-体1/3周 27, 4・8
2 土師器 鉢	高 残 2.1 底 4.7	外面体一底部ケズリ。底部平底。内面体一底部丁寧なナデ。外面体一部 黒色物質(泥か)付着。	5YR6/4 に近い やや緻密 砂粒少、白・赤 粒と砂粒微量 やや硬質	底上15cm 底完存 21
3 土師器 鉢	高 残 2.2 底 4.2	外面体部下~底部ナデ。底部平底。内面底部密な多方向のミガキ。外面 体部下平~底部は表面が細かく剥落しており、調整不明な部分が多い。	5YR5/8 明赤陶 やや緻密 白・赤・灰色顔料微 量 硬質	東部底上10cm 体下平~底完存 19
4 土師器 小形壺	高 残 3.2 底 4.0	外面体部下平~底部ナデのち光沢のあるナデ。底部は中央部がくぼむ。内 面体部下平~底部光沢のあるナデ。	5YR6/6 粉 やや粗い 赤粒~細粒少、白・ 砂粒~細粒微量	体下平~底1/4周 SD-43, 44 覆土
5 土師器 壺	口 復 11.0 高 残 5.4	外面口縁部下端ナデのち口縁部ヨコナデのち縦方向の緩らかなミガキ。内面 口縁部ヨコナデのち斜め方向の緩らかなミガキ。外面残存部全体に黒色物質 (泥か)付着。	10YR7/3 に近い黄粉 やや粗い、赤・砂粒少、白粒 ~細粒微量 全半硬質	底上23cm [1]1/4周 22
6 土師器 壺	口 復 17.0 高 残 5.4	粘土層付着による閉合口縁で、口縁端部は内彎する。外面口縁部下平5cm/1 cmのハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのちミガキ、胴部上端 5cm/1cmのハケ。口縁端部は細かな欠損・剥落・磨滅が著しい。	7.5YR6/6 粉 やや緻密 白・透明細~微粒 少、白・黒色顔料微量 硬質	底上22cm [1]1/3周 1
7 土師器 高杯	口 復 22.0 高 残 5.3	外面体部口縁~体部ヨコナデのち体一底部ケズリ。内面口縁~体部ヨコナ デ。底部ナデ。口縁端部はわずかに内彎する。	10YR7/4 に近い黄粉 やや緻密 白粒少、白粒粒と 黒屑~微粒微量 硬質	杯口一底1/4周
8 土師器 高杯	口 復 20.8 高 残 4.5	杯部は二重口縁状。外面体部口縁~体部ヨコナデのち幅広いミガキ。ミガ キは体部中央の縁の上下とも極稀に集められる。底部ナデのち緩らかな密 なミガキ。内面体部口縁~体部ヨコナデ・体一底部ナデのち口縁~底部 なミガキ。内面のミガキは単位が不明。	7.5YR6/6 粉 やや緻密 赤粒~細粒と白・透 明細粒少、白・砂粒顔料微量 硬質	底上20cm [1]1/12周 杯底1周 13

第8章 権現山遺跡 SG5 区

9 土師器 高杯	高 残 8.5	胴部上平エンタンス状。外面胴部上下縦方向のケズリのみ縦方向のミガキ。胴部中位および下平にミガキの当りが見える。胴部上下端には、わずかに横方向のミガキあり。内面杯部底部ケズリのみわずかにミガキ。胴部上平斜しナデで、上下両端部付近にしぼり目が見える。胴部ト平ヘラナデ。胴部上端径 4.2cm。	2.5Y8/2 灰白 や/砂礫 白・赤・砂礫 白・赤・砂礫	底上 28cm 胴体共存 30
10 土師器 高杯	高 残 10.3 脚 復 13.0	外面胴部上下縦方向のケズリ、ト平ヨコナデのみ縦横方向の密なミガキ。杯部底面には、ミガキを兼ねた上具の当りが見える。内面杯部底部密なミガキ。胴部上端ナデ、中位ヘラナデのト平ヨコナデ。上平～中位は斜横線が顕著に見える。胴部上端径 4.2cm。	5Y8/8 明赤褐 や/砂礫 白・黒・透明燧石 砂礫～粗粒と白・赤・粗粒燧石 破片	底上 41cm 胴上平完存、下平 1/4 周、24、25
11 土師器 高杯	高 残 3.5	円筒状の底部に粘土を貼って杯部を作っている。筒い帯りのため形もあまり、外面杯部外部ナデのみ横方向の疎なミガキ。底部外縁には粘土接合が明瞭に見える。外面部分はケズリのみ横方向の疎なミガキ。杯部底面ト平上端ナデのみわずかにミガキ。胴部と杯部底面との境に横方向のミガキ。胴部は縦方向のミガキ。内面杯部底面～底部ナデの放射状の疎なミガキ。胴部上端ナデ。胴部上端径 4.1cm。	2.5Y8/8 糖 や/砂礫 白・赤 粗粒多 や/砂礫	杯底 2.5 周 SD-43、44 覆土
12 土師器 高杯	高 残 3.6	内面杯部外部ナデ、底部ケズリ。内面は表面の細かな刻線が著しい。胴部上端ナデ。杯部は円筒状の底部に粘土を貼り、杯部および縁を作り出している。	7.5Y8/6 糖 や/砂礫 白・赤・砂礫 や/砂礫	底上 22cm 杯体 1/3 周、底 1/2 周 16
13 土師器 高杯	高 残 8.5	外面胴部縦方向のナデのみ縦方向の密なミガキ。内面胴部上端ナデ、上平ケズリのみト平ヨコナデ。胴部上端径 4.3cm。	7.5Y8/6 糖 や/砂礫 砂礫少、白・赤・砂礫 や/砂礫	底上 23cm 胴上平完存 18
14 土師器 高杯	高 残 8.2	胴部上平エンタンス状。外面胴部上平密なミガキ。柱状部下平にミガキの当りが見える。内面胴部上平横方向のナデ。胴部ト平ヘラナデ。胴部ト平上端の粘土接合が明瞭に見える。胴部上端の種子から、ソケット状に突出させた杯部底面を胴部に挿入する高杯と想定される。胴部上端径 3.3 ㎝。	5Y8/8 糖 や/砂礫 白・赤・砂礫～粗粒 や/砂礫	底上 3cm 胴体共存 4
15 土師器 高杯	口 18.2 高 残 19.9 最大 復 26.3	外面胴部上平斜位のナデのみ胴部上端横方向のナデのみ胴部上平～中位縦方向のケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上平～中位縦方向のナデのみ縦方向のミガキ。外面口縁～胴部上平一部厚付き。	7.5Y8/4 にぶい糖 や/砂礫 白・赤・粗粒・砂礫 粗い・白～粗粒 粗い・白～粗粒	口～胴上平 2/3 周 SD-43、44 覆土 D/D、SD-44 覆土、 SD-43 30 31、C
16 土師器 高杯	口 復 16.0 高 残 7.5	外面胴部上平ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのみヨコナデ・胴部上平ヘラナデ。胴部上端横線が見える。外面口縁部厚付き。	10Y8/2 灰青褐 や/砂礫 白～粗粒少、赤粗 粒燧石 破片	口～胴上平 1/3 周 SD-43、44 セク B 甲
17 土師器 高杯	高 残 2.7 底 7.4	外面胴部下端ケズリのみ一部縦方向のナデ。底部ケズリ。底部はや/突出する平底で、全体に浅くくぼむ。内面底部 6 本 /10mm のハケ。	7.5Y8/7 糖 粗い・白～粗粒と透明粗粒少 や/砂礫	底上 45cm 底完存 23
18 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 11.1	外面胴部上平ナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部上平ヘラナデ。外面口縁～胴部上平厚付き。	10Y8/3 にぶい黄褐 や/砂礫 白～粗粒少、白・赤・砂礫 粗粒燧石 破片	口～底完存、胴上平 1/6 周
19 土師器 高杯	口 復 17.2 高 残 4.7	外面胴部上端ナデのち口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ナデで、縁線が見える。	2.5Y6/2 灰青 や/砂礫 白・赤・砂礫少 破片	底上 22cm 口～胴上平 1/4 周 14

SG5 区 SD-227 (南側区画溝) (第 271・272 図、写真図版 19・173・176・177)

〔位置〕 SG5 区中央西寄りの 13-16・17 グリッドに位置する。

SD-101 に東側を切り、西側は調査区外へ続く。古墳中期中葉～後葉の SD-227 を、古墳時代(中期後葉?)の可能性のある溝 SD-101 が合流するように切り、東側部分では SD-101 が SD-227 を掘り直すようになる(土層断面 C-C')。SD-227 → SD-101 → 古墳後期の SI-21 という順序で重複する。

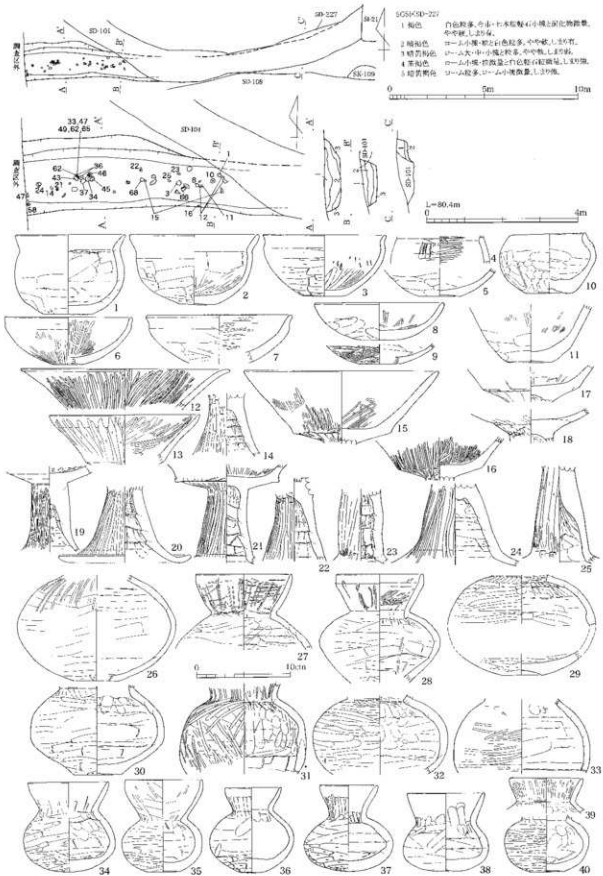
〔規模と形状〕 方形欄柵跡 SA-151 南辺の南側に沿って伸びるので、居館の南辺を区画する溝の可能性はある。長さは確認できる部分で 16.8m 以上である。西半部は直線的で、東半部は北へ向かって少し曲がり、SD-101 に破壊された北側に SD-227 が少し残る(断面 C-C')。底面が平坦な逆台形状の断面形で、幅 1.23～1.93m、底面幅 0.95～1.18m、深さ 0.44～0.66m である。

〔覆土〕 主に 1～3 層で、レンズ状に自然堆積する。2 層に多量の白色粒子を含むのが特徴的で、火山灰(古墳後期初頭の Hr-FA)の可能性もある。

〔遺物出土状況〕 SD-101 に破壊されなかった西半部の 13.5-16.5 グリッドに遺物が多い。溝底面のものから、底面より 30～40cm 浮いた遺物までみられる。「SD-101 表探 13.5-16.5 (SD-101 南)」などとして取り上げた遺物も少量あり、SD-227 出土品と接合したものは SD-227 の遺物として扱った(20・29・30・35・44・64・71)。SD-227 との接合品以外は、SD-227 の遺物と決める根拠がないので、表探品として扱った。SD-101 出土遺物にも SD-227 からの流入品を含むとも考えられるが、両遺構間での接合例はほとんどない。

〔出土遺物〕 壺・小形壺・高杯が主体だが杯も多い。4 は外面に刻線がある。6～8 は初期の模倣杯。7 は内面の横位ヘラミガキが特徴で、SG10 区 SI-16 の 1 に似る。小形壺は口頸部が長い 35 もあるが、短いものが多い。土師器の甕(54)は SD-227 に対応する居館北側区画溝(SG10 区 SD-43)や、SG5 区 SX-118、SG9 区西区遺構外にもある。63 は口縁部が内彎する壺。貼付口縁壺(67)は 5 区 SI-100 など、受口状口

第1節 古墳時代の居館(居宅)関連施設



第271図 権現山遺跡SG5区SD-227(1)遺構・遺物

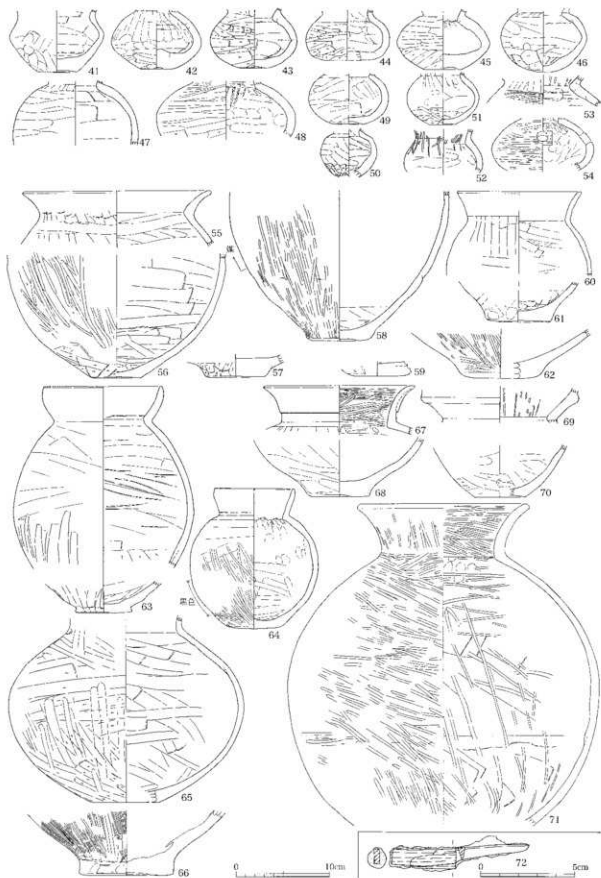
第8章 権現山遺跡 SG5 区

緑壺 (69) は 5 区 SD-43 などにある。図示以外の土師器は合計 684 片・6,486g で、内訳は杯 156 片・799g、高杯 48 片・541g、鉢 34 片・398g、小形壺 46 片・308g、壺甕類 400 片・4,440g。72 は刃部が減った鉄製品の刀子。

古墳中期後葉の遺物が主体で、中期中葉的な遺物も少量含む (1・35)。中期末葉の土器はほとんどない。浅身の椀形杯が多い SD-101 は SD-227 より少し新しい特徴を示すようにも見える。壺・小形壺・高杯が主体の SD-227 に対し、SD-101 は小形壺が少なく、椀形杯・高杯・壺・甕が同量ずつある。SI-116 と SD-227 (古墳中期中～後葉) → SD-101 (中期後葉?) → SI-20 と SI-21 (後期初頭) の順序が考えられる。

第 154 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-227 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 保存状態 日記
1 土師器 杯	口 11.7 高 8.4 底 4.8	内面口縁。軟質なため表面が磨滅している部分が多い。外面口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。底部平底。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラナデ。体部には縁部面が部分に残り、体部上端に磨滅。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 赤黒～細粒少、白粒 少、透明面粒微量 やや軟質	底上 21cm 口～体 2/3 弱、底定存 4、一拵、SD-227 土層
2 土師器 杯	口 復 13.8 高 7.4 底 3.7	内面口縁。外面口縁～体部上端ヨコナデ。体～底部ナデケズリ。底部平底で、わずかに凹凸くぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラナデのち縁部に放射状のナデ。体部は放射状のナデケズリ。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや暗褐色 赤黒～細粒と 白・赤粒少、黄褐色 と赤・黒粒少	口～体 1/3 弱、底定存 やや軟質
3 土師器 杯	口 復 13.0 高 6.5 底 4.4	薄手。外面口縁部ヨコナデのち体～底部丁寧なケズリ。底部は平底だが、中央が突出するため安定はしない。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ナデのち放射状のナデ。体部には、調整用の工具を突き刺したような穴や窪の跡あり。	5YR5/8 明黄褐色 やや暗褐色 白粒少、白・赤粒粗粒微量	底上 10cm 口～体 1/3 弱、底定存 16
4 土師器 杯	高 復 3.0	内外面とも丁寧な調整。外面体部上丁寧なナデで、縦割 4 本あり。長さでは左から 1.4cm、1.2cm、1.7cm、1.7cm、縦割 1～1.5cm、深さ 0.5mm、ナデによって一部滑りしてしまっている部分があり、縦割面に割られたことがわかる。内面口縁部丁寧なナデ。体部は全体が凹凸くぼむ。内面体～底部ナデ。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 白・赤粒～細粒微量 やや軟質	体 1/2 弱、底定存 やや軟質
5 土師器 杯	高 復 3.0 底 4.2	外面体～底部丁寧なナデ。底部は全体が凹凸くぼむ。内面体～底部ナデ。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 白・赤粒～細粒微量 やや軟質	体 1/2 弱、底定存 やや軟質
6 土師器 杯	口 復 13.6 高 5.0 底 復 3.0	口縁部は外縁が直立し、外面口縁部中央がわずかにくぼむ。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち縦方向のミガキ。底部ケズリのちミガキで、全体がくぼむ。内面口縁部～体部ヨコナデのち口縁～底部放射状のミガキ。全面磨滅無残部。	10YR5/6 黄褐色 やや暗褐色 赤黒粒少、白・透明面粒微量	口～底 1/6 弱
7 土師器 杯	口 復 15.4 高 復 5.1	赤みあり。外面口縁部ヨコナデ。体部縁部ナデで、無調整部分あり。内面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち口縁～体部縁部ナデミガキ。	10YR8/4 浅黄褐色 やや暗褐色 白・赤粒～細粒少、 砂粒～細粒微量 やや軟質	口～体 1/5 弱
8 土師器 杯	口 復 13.8 高 3.0 底 4.3	全体に成形・調整が打く、赤みあり。外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリのち縁部ナデ。底部平底で、中央、内面口縁部～体部ヨコナデ。体～底部ヘラナデのち縁部縁部ナデ。内面は表面の磨滅のため調整不明な部分あり。	7.5YR6/4 浅黄褐色 やや暗褐色 赤黒～細粒少、白粒 少、透明面粒微量 やや軟質	底上 24cm 口～体 1/2 弱、底定存 9、SD-229 土層、SD- 101 層 17
9 土師器 杯	高 復 2.2 底 4.4	磨滅な作り。外面体～底部ナデのち体部ミガキ。底部は全体がくぼむ。内面体～底部ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 白・赤・砂粒～細粒 微量	体～底 1/2 弱
10 土師器 杯	口 7.7 高 6.3 底 5.1 最大 10.2	成りゆきや中盤であり、手取は粗。外面体～底部ナデ。体部には工具が当たったことによる沈凹 1 本あり。底部は平底で、中央が不整凹凸くぼむ。口縁部内外面ヨコナデ。内面体～底部ナデで、底部は前後直線が現れるため平底ではない。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・赤・砂粒～細粒少、 破裂	底上 25cm 完形 9
11 土師器 杯	高 復 6.2 底 4.2	内外面とも表面が磨滅しており、特に内面に磨滅。外面側部丁寧なナデのち縁部ミガキ。底部はナデと見られ、わずかに全体がくぼむ平底。内面側部丁寧な～底部縁部方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 赤黒～細粒と白・砂 粒微量 多、白・砂粒粗粒少、赤 粒微量 多、やや軟質	底上 15cm 体 1/2 弱、底定存 7
12 土師器 高杯	口 復 22.2 高 復 4.3	外面体口縁部ヨコナデ。体部ナデのち口縁～体部ミガキ。内面口縁部～体部ヨコナデのちナデのちミガキ。	7.5YR6/3 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・赤・砂粒～細粒 少、赤・砂粒微量 微量 やや軟質	底上 8～20cm 杯口～体 1/2 弱 2、3、6、一拵
13 土師器 高杯	口 復 15.9 高 復 5.2	外面体口縁部ヨコナデのち口縁～体部光沢のあるケズリ。内面体口縁部ヨコナデのち体部光沢のあるケズリのち口縁～体部縁部方向のミガキ。外面口縁部～体部一部黒色物質 (煤か) 付着。	10YR6/4 に近い黄褐色 暗褐色 赤黒～細粒少 やや軟質	杯口～体 1/5 弱
14 土師器 高杯	高 復 6.6	外面側部上丁寧なナデのち中位以下に縁部ナデ。内面側部上丁寧なナデで、縁部縁部面。縁部体部上端とも、人為的な欠陥の可能性あり。	10YR7/6 明黄褐色 やや暗褐色 白・赤粒～細粒微量 やや軟質	底上 9cm 脚上平定存 34
15 土師器 高杯	口 復 20.6 高 復 7.7	外面体口縁部ヨコナデ。体部 5 本 /1cm のハケのち縁部縁部方向のナデのち縁部縁部方向のミガキ。底部 5 本 /1cm のハケのち縁部縁部方向のナデのち縁部縁部方向のミガキ。内面は表面の磨滅のため調整不明な部分あり。	5YR6/8 橙 やや暗褐色 赤黒～細粒と砂粒粗 粒少、砂粒粗粒少、白粒粗粒微量 やや軟質	底上 13～16cm 杯口～体 2/3 弱 1、20
16 土師器 高杯	高 復 4.5	外面体口縁部縁部方向のケズリ・底部外縁部方向のケズリ・底部中央ナデのち体～底部ミガキ。内面体部体～底部密なミガキ。内面のミガキは、体部縁部方向主体。底部は一方直主体。	2.5Y7/4 浅黄褐色 赤・白粒～細粒微量 やや軟質	底上 24cm 杯体～底 1/3 弱 10
17 土師器 高杯	高 復 3.8	内外面とも表面の磨滅が著しく、調整不明な部分多い。外面体部体～底部ナデ。内面体部体～底部ヘラナデのち縁部ナデミガキ。	10YR7/6 明黄褐色 やや暗褐色 赤黒～細粒と砂粒粗 粒少、白粒粗粒微量 やや軟質	杯体～底 3/4 弱
18 土師器 高杯	高 復 3.5	外面体部体～底部ナデ。杯部は円盤状の底部に体部以上を積み上げて作るもので、円盤部分の外縁が磨滅が目立たない段差として残る。脚部上端ミガキ。内面体部体部ヨコナデ。底部ナデ。ミガキの可能性あるが、表面の磨滅のため不明。脚部上端ナデ。	10YR7/6 明黄褐色 赤黒粒と白粒粗粒微量 やや軟質	杯体 1/3 弱、底定存 やや軟質



第272図 権現山遺跡SG5区SD-227(2)遺物

第8章 権現山遺跡 S5区

19	高 9.0	柱状部、外面底部ナデナデ、脚部上半縦方向のナデの縦方向の織りミガキ、脚部上半は縦線状にぼむ。内面底部ナデのち多方向のミガキ、脚部上半ヘラナデで、上端は調整されている。	I0Y8/4 浅黄緑 白・赤・砂粗～細粒多 白～砂粗微塵量 硬質	SD-101 東平面の破片と 接合 底一底一部、脚上半存在 SD-101 16, 48
20	高 9.8 脚部 14.0	外面脚部上半丁寧なナデ、下半ヨコナデのち脚部縦方向のやや縦ならミガキ、内面脚部上半は縦線状としばり目を明瞭に現し、下半ヘラナデのちヨコナデ、縦線は、下から見て時計回りに縦線状に積み上げている。	7.5YR7/6 橙 白・赤・透明～微粒少、白・砂粗～細粒微塵量 硬質	SD-101 付着の破片と接合 脚一部欠 13.5-16.5 SD-101 脚
21	高 10.5	杯部底部に明確な輪を作る。柱状部、外面杯部体部下端ヘラナデのち輪を含む部分の縦方向のナデ、底部～脚部上半縦方向のナデのち縦方向の織りミガキ、内面杯部底部ナデのち縦方向の織りミガキ、脚部上半ナデ、中位ヘラナデで、縦線縦線状に現る。粘土層は下から見て時計回りに上へ積み上げており、因のちから3日目で輪が一旦切れる。	7.5YR7/6 橙 白・赤・灰色細～粗 白～灰色微塵量 白～砂粗	底上 36cm 杯一底一上半存在 32
22	高 9.8.8	外面脚部上端ケズリ・上半丁寧なナデのち脚部上半縦方向のミガキ、内面杯部底ケズリのち縦ならミガキ、脚部上半斜リナデで、しばり目と縦線状に現る。	7.5YR5/6 明黄 白・赤・砂粗～細粒少 硬質	底上 12cm 脚上半存在 22
23	高 9.7.9	柱状部、外面脚部上半縦方向のナデのち下半部分的にミガキ、工具を強く叩くためか、ミガキの断面に円形にこぼれが形成される。内面脚部上半斜リナデで、縦線縦線状に現る。	5YR5/6 橙 白・赤・砂粗～細粒少、白・砂粗微塵量 硬質	底上 21cm 脚上半存在 12
24	高 9.8.6	脚部上半平たい、外面脚部上半丁寧なナデ、下半ヨコナデのち脚部縦方向の縦ならミガキ、内面脚部上半ケズリで、縦線縦線状、下半ヨコナデ。	I0Y8/4 浅黄緑 白・赤・砂粗～細粒少、白・灰色微塵量 白～砂粗	底上 47cm 脚上半存在 22
25	高 9.10.2	外面脚部上半丁寧な縦方向のナデのち中位以下に縦なら縦方向のミガキ、内面脚部上半縦方向のナデで、ナデのち上方を絞って成形したらしく、上端は縦線できないほど強く絞る。上半はほぼ横方向のナデ。	2.5YR5/8 明赤 白・透明～砂粗粒多 硬質	溝底面 脚上半存在 17, 18面
26	高 11.2 底 9.5.0	外面脚部上半ナデのち縦方向のミガキ、脚部下半ナデのち下端ケズリ、底部ナデで、平底、内面脚部上半ナデで、縦線縦線状。脚部中位～底部ヘラナデで、脚部下半に積み上げ休止による接合面あり。	I0Y8/7/4 に近い黄緑 明赤 白～微粒少 白～砂粗微塵量	脚 1/2周、底一部 白～砂粗
27	口 9.10.2 高 9.8.0 小形	口縁部は中位内側する。外面口縁部縦方向のヘラナデのちヨコナデのち縦線縦線方向の織りミガキ、脚部縦線および斜め方向のヘラナデのちナデ、内面口縁部上半ヨコナデ、下半ヘラナデのち口縁部縦線・縦方向の織りミガキ、脚部上半斜リナデで、縦線縦線状。	I0Y8/7/4 に近い黄緑 白～微粒少、砂粗 白～砂粗微塵量 白～砂粗	口～脚上半 1/3周 ～脚部微塵 白～砂粗
28	口 9.8.6 高 11.5 小形	外面口縁部～脚部上端ヨコナデのち口縁部縦方向の織り縦ならミガキ、脚部ケズリ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち縦方向の織り縦ならミガキ、脚部ヘラナデで、上端にしばり目現る。下半には積み上げ休止による接合面あり。	5YR4/3 に近い白 白・赤・砂粗～細粒少、白・砂粗微塵量	口 1/3周, 脚 1/4周
29	高 9.8.0 底 9.4.2 最大 9.15.0	外面脚部～脚部上端ケズリ状の織りミガキ、底部は大きくこぼむ。内面脚部ミガキ、脚部上半ナデのちヘラナデで、指道正組・しばり目現る。脚部中位～底部ヘラナデ。内面は残存部はほぼ全体が黒色部。外面脚部径 6.4cm。	5YR5/6 明赤 白～微粒少、白粗粒と赤粗粒 白～砂粗	SD-101 付着の破片と接合 脚部上・中位～底一部 1/3 SD-101 付着表尺、16.5-13.5、SD=101 脚
30	高 9.5 底 5.1 最大 9.14.1	外面脚部上半～中位ナデ、脚部下半丁寧なケズリ。底部は平底だが、籐なケズリにより作り出されるため、凹みあり。内面口縁部下半ヨコナデ、脚部上半斜リナデで、縦線縦線状に現る。脚部中位～底部ヘラナデで、脚部上半は強く絞る。脚部底面径 7.8cm。	I0E5/6 赤 白～砂粗 赤粗～細粒多、白粗粒～微粒微塵量 白～砂粗	SD-101 付着の破片と接合 脚上半～中位 1/3周 16.5-13.5 SD-101 脚
31	高 9.6 脚部 13.8	外面口縁部下半ヨコナデのち縦方向の織り縦ならミガキ、脚部ナデのち中位～脚部上端縦ならミガキ。ミガキは強く絞るため、ミガキの部分は溝状にこぼむ。内面口縁部下半ナデのち縦方向の織り縦ならミガキ、脚部上半～中位ナデで、指道正組としばり目現る。脚部下半はヘラナデで、積み上げ休止による接合面がある。接合面より上の部分は、下よりも白く粘土を使っているため、接合面を境に表面の色調が若干異なる。	7.5YR7/6 橙 白～砂粗 赤粗～細粒多、白粗粒～微粒少 白～砂粗	脚～脚 1/2周 白～砂粗
32	高 9.8.4 脚部 9.14.2 小形	外面脚部上端ヨコナデ、脚部ナデのち脚部縦線ミガキ、内面脚部ナデのち口縁部の横方向の織りミガキ、脚部上半ナデで、指道正組・しばり目、粗粒と白粗粒微塵量、脚部下半横方向のナデで、積み上げ休止による接合面あり。外面脚部径 6.8cm。	2.5YR5/6 橙 白～砂粗 赤粗～微粒少、砂粗粒と白粗粒微塵量 白～砂粗	脚一部欠 底上 38cm 脚 1/3周
33	高 9.7.8	内外面とも表面が滑らかであり、調整不明な部分あり。外面脚部ナデのち横方向のミガキ、内面脚部ナデ・ヘラナデで、脚部上半に縦線縦線状。脚部下半には積み上げ休止による接合面があり、内外面ともこの部分で角度が変化する。	I0Y8/3 浅黄緑 白～砂粗 赤粗～細粒少、白・透明～細粒微塵量 硬質	底上 38cm 脚 1/3周
34	口 9.8.6 高 9.5 最大 9.7	内外面とも表面の滑らかより調整不明な部分あり。外面口縁部上端ヨコナデ・口縁部ナデのち縦方向の織りミガキ、ミガキの線密で不明。脚部ヘラナデで、ハヤクになる部分あり。体一底部密なミガキ、底部は平底で、わずかにこぼれる。内面口縁部上半ヨコナデ・下半ナデのち口縁部縦方向のミガキ、ミガキの線密不明。体一底部ヘラナデで、体部上端にしばり目現る。	7.5YR6/6 橙 白～砂粗 白～透明～砂粗 白・赤・透明～砂粗 白～微粒少、赤・砂粗微塵量 硬質	SD-101 付着の破片と接合 口 1/4周、体下半 1/2周、体下半存在 SD-101 付着表尺
35	口 9.8.2 高 9.7 底 3.3 最大 8.5	丸い体部。外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半～体部上端ヘラナデ、体部上半～中位ナデ、体部下半～底部ケズリ、底部は丸状支持つづね、底部は底で地締するのみだが、底部を厚く作っているため、起き上がり小笠の形状に正立を促す。内面口縁部ヨコナデ、体一底部はナデ・ヘラナデで正立を促す。表面の滑らかと丸形であることから観察できない。体部上半面は縦線状、外面脚部径 4.2cm。	5YR5/6 橙 白・赤・砂粗～細粒少 白～砂粗	SD-101 付着の破片と接合 口 1/3周、体一底存在 29, 31
36	口 9.6.0 高 9.0 底 2.5	扁平な体部。外面口縁部上半ヨコナデのち下半ヘラナデ、体部上半ナデのち下半～底部ケズリ。丸底。内面口縁部下半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。体部上半～中位ナデで、縦線縦線状。底部ヘラナデ。外面脚部径 4.0cm。	7.5YR7/4 に近い橙 白～砂粗 灰色微塵量、白・赤・砂粗～細粒少 白～砂粗	底上 39cm 口 1/4周、体一底存在 28
37	口 9.6.2 高 9.1 最大 9.4			

38	土俵部 小形部	口 復 8.2 高 4.2 底 8.4 最大 9.0	下ぶくれな体部。外面側部上方へのラナデのち口縁部ヨコナデ・体・底部ナデ。底部は中央を待つ平底で、中央がわずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデの一部ナデ。体・底部ナデで、指頭直縁と縦縁直縁。底部中央はやや高く残される。	7.5Y86/8 橙 やや暗赤 赤黒～暗緑少、白黒～暗緑微量 やや黄緑	口1/3周。体・底部 欠
39	土俵部 小形部	口 復 7.8 高 3.7	口縁部内外面ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミガキが強く残されるため、形状はわずかに。外面側部ナデで、ミガキの可能性あり。内面側部ナデで、指頭直縁がわずかに残る。	7.5Y80/4 に近い やや暗赤 赤黒～暗緑少、赤黒 やや黄緑	口～胴上1/2周
40	土俵部 小形部	高 復 6.0 底 3.8 底 9.0	丸く扁平な体部。外面側部上端へラナデ・体部ト下～底部ケズリのち体部ミガキ。底部平底で、全体にくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体部ト下ナデで、指頭直縁がわずかに残る。体部ト下～底部ト下ナデ。外面側部復元 5.8cm。	10Y87/4 に近い 暗赤～白黒～暗緑少、赤・砂粒 ～暗緑微量 やや黄緑	胴～底1/2周
41	土俵部 小形部	高 復 6.6 底 4.1	外面側部ト下ヨコナデのち体部ト下～底部へラナデ。工具先端が削れているためか、ハヤタシで見える。底部は平底で、浅くくぼむ。内面口縁部ラナデのちヨコナデ。体・底部へラナデ。外面側部復元 8.2cm。	10Y85/4 浅黄緑 やや暗赤 白・赤黒～暗緑と砂粒微量 黄緑	胴1/4周。底完存
42	土俵部 小形部	高 復 6.2 底 3.6 底 9.6	そろばん玉に近い体部形状。外面側部ト上へラナデ。体部中位ナデ。ト下平なナデ。底部ナデで平底だが、中央に径約1.0cm、深さ約2mmのくぼみあり。内面側部ト上ナデで、縦縁直縁。体部ト下～底部へラナデ。底部は外面がへラナデされることで、中央が高く残されている。また、一部に工具先端によると思われる連続した剝突・剝削がある。調整行為の一種か。	7.5Y85/4 に近い やや暗赤 白・赤黒～暗緑・砂粒～微量 やや黄緑	胴1/4周。底3/4周
43	土俵部 小形部	高 復 6.3 底 3.5 底 9.2	丸くやや扁平な体部。外面側部ラナデのち横方向のナデの体・底部ケズリ。底部は平盤な平底で、中央の径約1.8cmの部分がかぼむ。内面口縁部ト下ヨコナデ。体部ト上ナデ。体部ト下～底部へラナデ。体部ト下縦縁直縁。外面側部径 5.6cm。	10Y87/6 明黄緑 やや暗赤 砂粒多、砂粒少 白・赤黒微量 黄緑	底上42cm 体～底完存 30
44	土俵部 小形部	高 復 5.3 底 4.8 底 8.8	下ぶくれな体部。外面側部上端ヨコナデ。体部ナデのちト下平なナデ。体部ト下ナデで、体部ケズリで平。内面側部ト下ナデ。外面側部径 5.2cm。	7.5Y87/6 橙 やや暗赤 赤黒～暗緑少、白細粒微量 やや黄緑	SD-101付近の破片と組み合わせ 体上平3/4周。体下平1/2周。底1.6cm SD-101付近表層
45	土俵部 小形部	高 復 6.3 底 4.0 底 9.8	小形でそろばん玉状の体部。外面側部ト上平なナデのちト下平ケズリ。底部ナデで平底だが、中央から径約2.2cm、深さ0.3cmのくぼみあり。内面口縁～底部ナデと見られるが、体・底部の詳細な観察はできない。体部ト下平にぼり目跡が残る。外面側部径 4.4cm。	5Y86/8 橙 赤黒～暗赤 白・赤黒～暗緑少 やや黄緑	底上40cm 体～底完存 25
46	土俵部 小形部	高 復 6.3 底 9.1	体部は丸く、底部がやや突出する形状。外面側部上端へラナデのち体部ト下～中位ナデのち体部ト下～底部ケズリ。底部は丸底だが、中央の径約2.0cmのくぼみあり。内面側部ト下平ナデ。胴部ト上平～中位へラナデ。体部ト下平にぼり目跡に正す。内面側部ト下ナデで、縦縁直縁。胴部ト下～底部へラナデ。外面側部径 5.4cm。	5Y86/8 橙 やや暗赤 赤黒～暗緑少、赤黒 白細粒微量 やや黄緑	底上39cm 体～底完存 27
47	土俵部 小形部	高 復 6.8 底 13.2	焼熟のためか、内外面とも表面が赤紫色に変色している。外面は表面が磨滅。内面はクレタータ状に剥落している。外面側部ト上平～中位ナデ。ミガキの残存性あり。内面側部ト下平ナデ。胴部ト上平～中位へラナデ。	7.5R5/1 赤灰 暗赤～赤黒～暗緑少、砂粒微量 白細粒微量 やや黄緑	底上38cm 胴上平～中位1/4周 31
48	土俵部 小形部	高 復 6.0 底 14.6	外面側部ケズリのち側部ト上平～中位部ミガキ。内面側部横方向のミガキ。胴部ナデで指頭直縁としぼり目が見える。	5Y86/8 橙 やや暗赤 赤黒～暗緑少、白細粒微量 やや黄緑	胴上平～中位1/2周
49	土俵部 小形部	高 復 5.3 底 3.0 底 8.4	体部やや扁平で丸い。外面側部ト上ヨコナデ・体部ト下～底部ケズリのち体部ナデ。底部は全体にくぼむ。内面口縁部ナデ。体部ト上ナデで、しぼり目わずかに残る。体部ト下～底部へラナデ。内外面とも赤褐色色があるところかクレタータ状に剥落する。外面側部径 5.4cm。	7.5Y80/6 橙 やや暗赤 赤黒～暗緑多、白細粒微量 黄緑	底上38cm 体1/2周。底は底完存 31
50	土俵部 小形部	高 復 5.2 底 6.0	小形。外面側部ナデのち体部ト下平ケズリ。内面側部ト下～体部ナデ。	7.5Y88/8 黄緑 やや暗赤 砂粒と白細粒微量 やや黄緑	口ト下～体1/3周
51	土俵部 小形部	高 復 5.4 底 2.6 底 7.6	丸い体部。外面側部～胴部ト上へラナデ。胴部中位は成形期のナデのみ。体部ト下平なナデケズリ。底部ケズリで、浅くくぼむ。内面側部ヨコナデ。体部ト上平ナデ。体部ト下へラナデ。外面側部径 4.5cm。	5Y85/4 に近い 赤黒 赤・白・砂粒～微量少 黄緑	胴1/3周。底1/2周
52	土俵部 小形部	高 復 4.5 底 8.4	外面口縁部ト下～体部ト上ヨコナデ・体部ナデのち口縁部ト下～体部ト下平なナデ。内面口縁部ト下ヨコナデのち縦方向の線ならミガキ。体部ナデで、しぼり目残る。	7.5Y87/6 橙 やや暗赤 赤・砂粒～暗緑微量 やや黄緑	口ト下平～胴1/4周
53	土俵部 小形部	高 復 3.3	外面側部～胴部ト上へラナデのち胴部ト上平横方向の線ならミガキ。内面側部ヨコナデのち縦方向の線ならミガキ。胴部ト上ナデで、縦縁直縁に残る。外面側部径 8.0cm。	5Y86/4 に近い 暗赤 砂粒～暗緑少、白細粒 微量 黄緑	胴～胴上平2/3周
54	土俵部 遺	高 復 5.7 底 大 復 10.8	胴部最大径部よりやや上中に、彫刻にはほぼ直交する孔あり。径1.2cm。外面側部ナデのち縦方向のミガキ。内面側部ナデのち縦方向のミガキ。胴部ナデで、上平にしぼり目や指頭直縁が見える。	5Y86/8 橙 やや暗赤 赤黒～暗緑少、白細 ～暗緑微量 やや黄緑	胴2/3周
55	土俵部 遺	口 復 20.0 高 復 6.0	外面側部～胴部ト上へラナデのち口縁部ヨコナデ・胴部ト上平ナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部ト上へラナデ。外面口縁～胴部ト上平ナデ付着。外面口縁部表面の剥落著しい。	2.5Y6/3 に近い 黄多。白・黒・赤・砂粒 微量。白細～暗緑と赤・砂粒 微量 黄緑	口～胴上平1/5周
56	土俵部 遺	高 復 13.1 底 5.0	外面側部ト下平ケズリ・ナデのち密な縦方向のミガキ。底部ケズリ・ナデのち一方のミガキ。底部は突出する平底で中央のみわずかにくぼむ。底部外縁は使用のためか表面が磨滅する。内面側部ト下～底部へラナデ。内面は表面がクレタータ状に剥落するため、調整不明部分が多い。外面側部中位付近付着。彫刻は内面は平底だが、外面側部ト下は連続時の凹凸を残す。	10Y87/4 に近い 暗赤 やや暗赤 砂粒多、砂粒少 白・赤黒微量 やや黄緑	胴ト下平1/4周。底1/3周
57	土俵部 遺	高 復 2.2 底 6.4	外面側部ト下平ケズリ・ナデのみ。胴部ナデ。底部は突出する平底。内面は表面の剥落が著しく、調整不明。	10Y87/4 に近い 黄緑 白・灰色、透明細粒微量 黄緑	底完存
58	土俵部 遺	高 復 15.8 底 7.2 最大 復 23.2	外面側部ト下平ケズリ・ナデのち密な縦方向のミガキ。底部ケズリ・ナデのち一方のミガキ。底部は突出する平底で中央のみわずかにくぼむ。底部外縁は使用のためか表面が磨滅する。内面側部ト下～底部へラナデ。内面は表面がクレタータ状に剥落するため、調整不明部分が多い。外面側部中位付近付着。彫刻は内面は平底だが、外面側部ト下は連続時の凹凸を残す。	2.5Y4/2 暗黄 やや暗赤 白・透明細～暗緑多。白・透明 ～暗緑微量 やや黄緑	底上19cm 胴ト下平1/4周。底完存 37

第8章 権現山遺跡 SG5 区

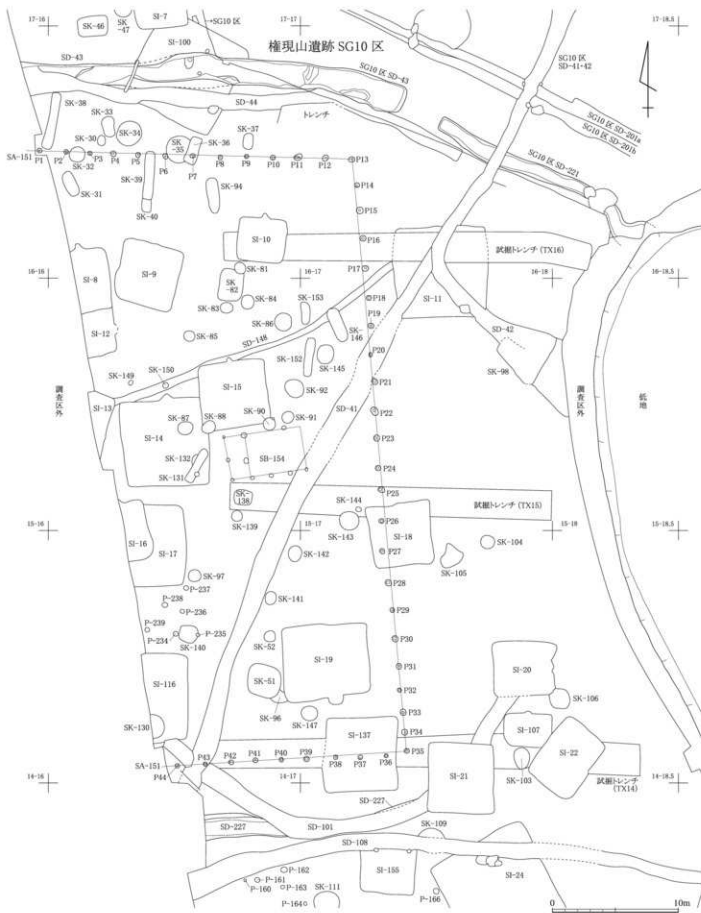
59 土師器 土師	高 甕 1.7 底 6.0	外面胴部下端～底部ナデのち胴部下端わずかにミガキ。底部丸味を持つ平底。内面底部強いナデのち稀らな多方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや暗赤 ～細粒少、白濁 ～細粒と黒粒散見 やや灰濁	底欠存
60 土師器 土師	口 径 13.2 高 甕 8.9 最大 復 15.4	縁手。外面胴部上平ヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデで、一部ケズリあり。	10YR7/4 に近い貴體 やや暗赤 白濁～細粒少、白濁 と赤黒粒散見	口～胴上平1.6周
61 土師器 高	高 甕 4.2 底 6.8	整形・調整ともやや中硬、手捏ねのような作り。外面胴部下平～底部ナデ、底部は平底で、外側に小粒土質が多量入り付いている。内面底部強いナデのち胴部下平ヘラナデ。	2.5YR7/4 浅黄 やや暗赤 赤黒～細粒と白濁 少、白・透明粒散見	胴下平一部、底は底欠存
62 土師器 高	高 甕 5.3 底 復 8.8	外面胴部下平密なミガキ。底部丸味を持つ平底で、磨滅により調整は不明。内面胴部下平～底部丁寧ナデ。外面胴部下平は黒褐色を呈する。	5YR6/8 橙 やや暗紅、白濁～微粒多、白 ～粗粒少 やや灰濁	底上38cm 胴下平～底1/4周 31
63 土師器 土師	口 径 12.3 底 復 6.0	外面胴部丁寧ナデのち胴部下平見沢のある縦方向のナデ。底部ナデで、突出する平底。口縁部内外面ヨコナデで、内槽する。内面胴部下端には、胴部側からの粘土のめくれがある。胴～底部ヘラナデ。胴部下平には積み上げ休止による接合面があり、内面にわずかな段差として残る。	10YR7/4 に近い貴體 やや暗赤 砂粒少、白・黒粒 ～細粒散見	口～底1/2周
64 土師器 土師	口 径 8.6 高 14.7 底 5.6 最大 復 13.6	小形。接合しない各部分を岡上で復元したもの。外面口縁～胴部上端ヨコナデのち、胴部縦方向のナデのち中位～下平中心に縦方向のミガキ。底部ケズリのち疎らなミガキで、丸味を持つ平底。内面口縁部ヨコナデ。胴部上平ナデで、前面土柱としぼり目が残る。胴部下平～底部ナデで、底部は荒く磨される。胴部外面に卑閑な黒灰あり。	7.5YR5/4 に近い白 やや暗赤 白・砂粒と白・黒 粒少、白・砂粒散見	SD-101 付添の破片と接合 口1/6周、胴1/2周、 底一部欠 SD-101 覆土、13.5-16.5 SD-101 面
65 土師器 大形甕	高 甕 19.7 底 復 6.8 最大 復 25.0	外面胴部ヨコナデ。胴部中位～下平ケズリのち胴部上平縦ないし斜め方向のナデ。口位～下平縦方向の疎らなナデ。底部ケズリで平底と見られる。内面胴部ヘラナデ。胴～底部ヘラナデ。胴部上平に積み上げ休止による接合面があり、内面に接合、外面には角度の寛化として表れる。	10YR6/6 明黄緑 やや暗赤、砂粒～細粒多、白濁 ～細粒と赤黒～細粒散見	底上28cmとSD-101 面～底1/2周 31
66 土師器 大形甕	高 甕 6.8 底 10.0	大形。胴部下平日本本1cmのハケのち斜ヘラナデのち疎らなミガキ。胴部下端～底部ナデのち底部外周ケズリ。突出する平底で、中央の径約4.5cmの部分ケズリ。内面は底現存部が強く剥離しており、調整不明。	5YR6/6 赤黒 ～赤黒、赤黒～細粒多、白 ～微粒	溝底面 胴下平2/3周、底面欠 14
67 土師器 大形甕	口 径 16.0 高 甕 5.2	粘土貼付による複合口縁。外面胴部上端ナデのち口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのち縦方向のミガキ。胴部上端ナデのちケズリと8区で、指節上直残る。	10YR6/4 に近い貴體 やや暗赤 砂粒～細粒少、白 ～赤黒～細粒散見	口2/3周、胴上端1/3周
68 土師器 大形甕	高 甕 6.2 底 6.6	中形。精良な胎土で、調整も丁寧。外面胴部下平丁寧ナデ。底部ケズリのちナデ。底部の突出する平底で、中央の径約2.5cmの部分ケズリによりくぼむ。内面胴部下平～底部はヘラナデと見られるが、表面の剥離が著しく、詳細は不明。	10YR7/4 に近い貴體 やや暗赤 粗粒少、砂粒と白 やや灰濁	底直上 胴下平～底欠存 21
69 土師器 大形甕	口 径 19.0 高 甕 3.7	複合口縁状または突口状になるものと見られる。外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。	7.5YR5/6 明黄 やや暗赤、透明・砂粒多 やや灰濁	口～胴1/6周
70 土師器 甕か甕	高 甕 5.5 底 復 5.2	外面胴部下平ナデのち胴部下端～底部ケズリ。底部くぼむ。内面胴部下平～底部ヘラナデ。	10YR6/6 明黄緑 やや暗赤、白・透明～細粒少 やや灰濁	胴下平～底1/3周
71 土師器 大形甕	口 径 18.2 高 甕 34.0 最大 復 33.0	厚口縁で、口縁部は外向きの面となる。大形。外面口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。胴部ナデのち斜め方向のミガキ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち縦方向の密なミガキ。胴部ヘラナデのち疎らなミガキ。ミガキは胴部上平横方向。下平は縦方向上平。胴部下平には積み上げ休止による接合面があり、外面はわずかな段差として、内面は部分のな緩むとして段差として残る。	10YR7/6 明黄緑 やや暗赤 白濁～細粒と赤黒 ～微粒と砂粒少	SD-101 付添の破片と接合 口～底2/5周 13.5-16.5 SD-101 面
72 鉄製品 刀子	長 7.3 厚 0.3 重 7.15	刃部は断面三角形で、基部より幅が狭くなるので、底が湾りていると思われる。基部末端面は基部の主軸にやや斜交する形で終わり、断面は長方形。柄木の目方が直り、断面四角を示した位置では柄木の丸味も少し認められる。刃部長30mm、刃幅約7.6×厚2.8mm、基部長33mm、基部幅8.0×厚3mm。		完形

SG5 区 SA-151 (方形柵列遺構) (第273～277図、写真図版19)

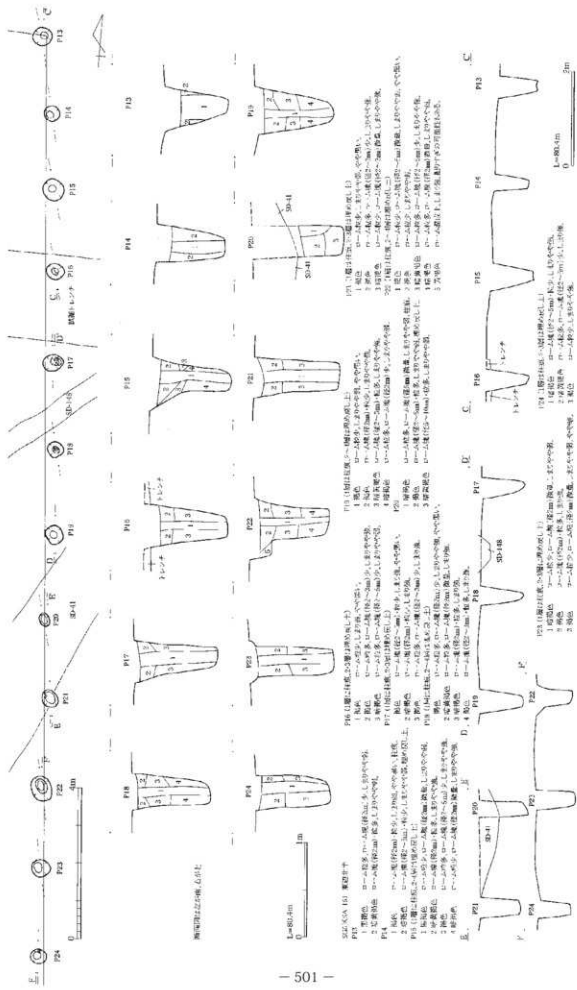
居館跡の柵列と考えられる。南北辺の一部と、東辺を調査した。

【位置】SG5区中央西寄りの14-16・17、15-17、16-16・17グリッドに位置する。北辺の北側に4m離れて平行するSD-43と、その東に続くSG10区SD-221、南辺に平行して南側4mで確認されたSD-227の各溝が、本柵列跡と同一の居館を構成し、外側の南北を区画する溝の可能性が有る。東辺中央の西4mにある時期不明のSB-154がこの居館に含まれるかもしれないが、SB-154は柱痕部埋土のしまりが弱いのでそれほど古くないとも考えられる。P.16・25・35・39～42は確認調査時のトレンチに削られる。

P.26・27とP.36～38が古墳後期のSI-18・137に切られる。試掘トレンチに削られるのでSI-137との重複関係は不確定だが、SI-18に切られることは確実である。北辺ではP6とP7→古墳時代土坑SK-35→時期不明土坑SK-36の順に重複する。P.20・21・43が古墳後期のSD-41と重複し、P.43が古墳時代中期(?)のSD-101と重複する状況は、土層断面の記録を確認できないが、各ピットがおそらくこれらの溝に切られると推定される。



第 273 図 権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (1) 遺構全体図 (1/300)



第 275 図 棒現山遺跡 SG5 区 SA-151 (3) 道標墓辺北半部

〔規模と形状〕 調査した部分では東辺22間(47.1m)、北辺12間(24.7m)、南辺9間(18.1m)である。東辺軸線はN-2'-Wである。柱間は北辺が1.81m(P2-P3間)～2.21m(P6-P7間)、東辺が1.45m(P34-P35間)～2.53m(P27-P28間)、南辺は1.71m(P35-P36間)～2.33m(P38-P39間)で、1.90m前後の部分が多い。径8～14cm程の柱痕を残すものが多く、P30の柱痕は特に太く、径20cmである。抜き取り穴は見られない。〔覆土〕 P10・15・39でテフラ検出分析を行った結果は、柱痕や裏込から古墳前期のAs-Cを検出し、後期初頭のHr-FAテフラが見られない(本章次節)。周辺に古墳前期の遺構がないので、古墳中期の柵列と考えられる。

〔遺物および出土状況〕 遺物はほとんど出土しなかったため、図示できるものはない。P21に土師器壺または甕の胴部が1片あり、丸みがあることから長胴ではなく球胴気味の器形と考えられる。この他に、P24で流紋岩の自然礫が1片出土した。

第155表 権現山遺跡SG5区 SA-151 柱六の規模

番号	径	高さ	番号	径	高さ	番号	径	高さ	番号	径	高さ
P1	42 × 36	80	P12	52 × 45	69	P23	49 × 44	89	P34	53 × 49	59
P2	44 × 38	76	P13	51 × 47	82	P24	43 × 37	80	P35	39 × 38	53
P3	40 × 37	69	P14	41 × 38	74	P25	56 × 43	86	P36	34 × 32	40
P4	47 × 45	70	P15	57 × 52	92	P26	42 × 34	87	P37	39 × 37	53
P5	39 × 38	64	P16	50 × 44	91	P27	42 × 36	71	P38	36 × 33	53
P6	40 × 30	64	P17	55 × 45	90	P28	56 × 50	78	P39	47 × 43	67
P7	40 × 33	54	P18	41 × 40	92	P29	43 × 41	77	P40	41 × 33	69
P8	36 × 34	63	P19	51 × 45	92	P30	51 × 47	64	P41	43 × 38	69
P9	37 × 33	57	P20	35 × 27	104	P31	45 × 44	59	P42	37 × 35	73
P10	44 × 40	61	P21	50 × 38	92	P32	32 × 31	47	P43	40 × 31	63
P11	66 × 47	68	P22	71 × 50	85	P33	53 × 47	51	P44	33 × 34	59

(単位はcm)

第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係

8.2.1 テフラ分析の視点と考古学的評価

SG5区で確認した古墳時代の居館と考えられる方形柵列遺構SA-151の年代を、テフラとの関係から絞り込むことが、この分析の第1の目的である。次に、その周辺にある古墳時代溝・建物跡で確認されている白色粒子と古墳時代テフラとの対応関係を確定することが第2の目的である。古墳時代の遺構としては、古墳時代居館の北側区画溝である可能性を持つSD-43と、SD-43に先行する古墳中期の建物跡SI-100と、SD-43を切る古墳後期の溝SD-44を選択した。この他に選択したSI-116は古墳中期の建物跡で、調査区西壁の土層断面から、古墳時代の土坑SK-130および古墳時代の可能性がある溝SD-101との関係を検討することができた。

結果として、古墳時代の居館に係わる方形柵列SA-151が古墳前期のAs-C以後で、古墳後期初頭のHr-FA以前であることが示された。また、居館北側区画溝の可能性のあるSD-43などについては、古墳前期のAs-C→SI-100とSD-43→古墳後期初頭のHr-FA→SD-44という順序が考えられた。これらの結果は、SA-151が古墳後期の建物に切られているという考古学的所見や、SI-100およびSD-43の出土遺物とよく整合している。方形柵列SA-151と北側区画溝SD-43を伴う居館が古墳中期の遺構である可能性が高いといえる。

SI-116の堆積土層とSD-101との関係においては、考古学的所見とテフラ検出状況の間で矛盾が生じている。SD-101は古墳中期のSK-130とSI-116を切り、古墳後期のSI-20・21に切られる。土層および遺構の前後関係は、SI-116の中層→SK-130→SI-116の上層→SI-116の埋土上部を覆うB層→SD-101である。このB層において、12世紀初頭(1108年)に降下したAs-Bテフラが検出された。SD-101とB層の前後関係が確実で、またテフラの混入がなければ、SD-101が12世紀以降の溝になる可能性が、火山灰年代学の立場から示されたことになる。この所見は、古墳後期のSI-20・21がSD-101を切るという考古学的所見

と矛盾する点に問題がある。古墳時代の竪穴建物を12世紀以降の溝が切っている状況を2棟の竪穴建物の堆積層で同時に認識する可能性は低いことが考古学の立場からは言えるので、現地所見を尊重してSD-101を古墳時代の溝として報告している。ただし、古墳後期のSI-20・21をSD-101が切ると解釈する(SI-20・21の断面図中にSD-101を読み取る)ことも可能かもしれない。また、SI-116の調査区西壁土層断面において、SD-101が古墳時代の遺構としてはかなり上位のレベルから掘り込まれていることが図示されている点にも、不自然さが感じられる。SD-101の遺物は大半が古墳時代中期であるが、内面塗装仕上げで白色気味の胎土の奈良時代杯1片、古代の常総型裏破片、中世以後の常滑産裏1片も混入している。したがって、古墳時代の溝に12世紀以後の遺構が重複していたと考える余地も残る。将来、SG5区の西側でSD-101が調査される機会があれば、この問題が検証されるであろう。

古環境研究所に委託して実施したテフラ検出分析および屈折率測定の結果を以下に掲載する。

8.2.2 栃木県、権現山遺跡 SG5 区の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

栃木県域完新世に形成された火山灰土中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な遺構が検出された権現山遺跡 SG5 区においても、遺構覆土のテフラ検出分析と屈折率測定を行い、示標テフラとの層位関係から遺構の年代に関する資料を収集することになった。

2. 土層の層序

(1) 116号住居

116号住居の覆土は、下位より黄褐色土ブロック混じり暗褐色土(層厚3cm)、暗褐色土(層厚9cm)、黒褐色土(層厚12cm)、若干色調の明るい黒褐色土(層厚21cm)、暗褐色土(層厚15cm)、黒褐色土(層厚12cm)、黒褐色表土(層厚15cm)からなる(第278図1)。

(2) 100号住居Fライン

100号住居の覆土は、下位より黄灰色土ブロック混じり黒褐色土(層厚9cm, 12層)、黒褐色土(層厚24cm, 11層)、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土(層厚4cm)、白色粗粒火山灰混じり灰色細粒火山灰層(層厚1cm)、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土(層厚2cm, 以上5層)からなる(第278図2)。

(3) SD-43 Fライン

SD-43の覆土は、下位より黒褐色土(層厚5cm)、黄灰色土ブロック混じり暗褐色土(層厚13cm)、黄色土粒子混じり黒褐色土(層厚17cm)、黒褐色土(層厚15cm)、灰色細粒火山灰層ブロック混じり黒褐色土(層厚12cm)からなる(第278図3)。

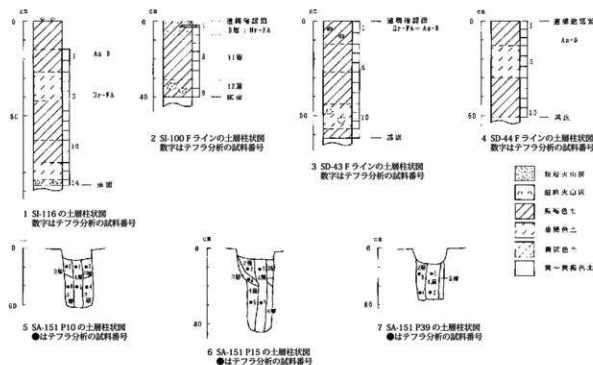
(4) SD-44 Fライン

SD-44の覆土は、下位より黒褐色土(層厚21cm)、暗褐色土(層厚17cm)、黒褐色土(層厚13cm)からなる(第278図4)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

上述4地点のほか、SA-151P10(第278図5)、SA-151P15(第278図6)、SA-151P39(第278図7)から採取された合計40点の試料を対象にテフラ検出分析を行った。テフラ検出分析の手順は次の通りである。



第 278 図 権現山遺跡 SG5 区 竪穴建物跡と居館関連遺構の土層柱状図・断面図とテフラ分析試料

- 1) 試料 10g を秤量。
 - 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
 - 3) 80°C で恒温乾燥。
 - 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。
- (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 156・157 表に示す。分析を行った結果、3 種類の軽石が検出された。もっとも下位にある軽石は、スポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径 2.0mm）で、班晶に斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 4 世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石（As-C、新井，1979）に由来すると考えられる。その上位にある軽石は、あまり発泡のよくない白色軽石（最大径 3.0mm）で、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 6 世紀初頭に権名火山から噴出した権名二ツ岳澁川テフラ（Hr-FA、新井，1979、坂口，1986、早田，1989、町田・新井，1992）または 6 世紀中葉に権名火山から噴出した権名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井，1962、坂口，1986、早田，1989、町田・新井，1992）に由来すると考えられる。最上位の軽石は、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径 1.1mm）で、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石については、その特徴から 1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ（As-B、新井，1979）に由来すると考えられる。

116 号住居址では、試料番号 14 から 3 にかけて、As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 5 以上の試料に、Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が比較的多く含まれている。さらに試料番号 1 には、As-B に由来する軽石も比較的多く認められた。100 号住居址 F ラインでは、試料番号 9 から 3 にかけて As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 1 には、とくに Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が多く含まれている。

SD-43 F ラインでは、試料番号 12 から 5 にかけて、As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 3 および 1 に Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が含まれている。さらにこれらの試料には、As-B に由来する軽石も多く含まれている。SD-44 F ラインでは、試料番号 9 から 5 にかけて As-C に由来する軽石が認

第156表 権現山遺跡 SG5 区における
テフラ検出分析結果(1)

地点	試料	軽石の層	軽石の色調	軽石の最大径
116号	1	+++	淡褐>白	1.1,1.3
住居址	3	+++	白>灰白	1.2,1.3
	5	+++	白>灰白	1.8,1.2
	7	+++	灰白	1.2
	9	+++	灰白	1.3
	11	+++	灰白	1.5
	13	+	灰白	1.1
	14	+	灰白	1.1
100号	1	++++	白	3.0
住居址	3	+++	灰白>白	1.1,1.0
	5	+++	灰白	1.2
	7	+++	灰白	1.2
Fライン	5	+++	灰白	1.2
	9	+++	灰白	1.3
SD-43	1	++++	淡褐>白	1.2,1.2
Fライン	3	+++	淡褐>白	1.2,1.1
	5	+++	灰白	1.1,1.0
	7	+++	灰白	1.4
	9	+++	灰白	1.3
	11	+++	灰白	1.2
	12	++	灰白	1.4
	SD-44	1	++++	淡褐>白
Fライン	3	+++	淡褐>白	1.1,2.0
	5	+++	灰白>白	1.2,1.4
	7	+++	灰白>白	1.6,1.3
	9	+++	灰白, 白	1.3,1.3

++++: 多くに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は mm.

第157表 権現山遺跡 SG5 区における
テフラ検出分析結果(2)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SA-151 P10	1層上部	++	灰白	1.1
	1層下部	++	灰白	1.3
	2層	+	灰白	1.2
	2層	++	灰白	2.0
SA-151 P15 (欄列)	3層	+	灰白	1.2
	3層	+	灰白	1.1
	1層上部	++	灰白	1.1
	1層下部	++	灰白	1.2
SA-151 P39	2層	++	灰白	1.2
	3層	++	灰白	1.2
	4層	++	灰白	1.3
	1層上部	+	灰白	1.1
Fライン	1層下部	+	灰白	1.2
	2層上部	+	灰白	1.1
	2層下部	+	灰白	1.2

++++: 多くに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は mm.

第158表 権現山遺跡 SG5 区における屈折率測定結果

地点	ライン	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	屈折率
100号	F	1	1.501-1.503	ho-opx(cpx)	opx(y) : 1.708-1.711
住居址				ho (n)	: 1.671-1.677

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石.

重鉱物の ○ は量の少ないことを示す.

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

められた。また、試料番号9以上のいずれの試料からも、Hr-FAまたはHr-FPに由来する軽石が検出された。さらに試料番号3および1には、As-Bに由来する軽石が比較的多く認められた。

SA-151のP10の覆土については、いずれの土層からもAs-Cに由来する軽石が検出された。また欄列の一部と考えられているSA-151のP15の覆土についても、いずれの土層からもAs-Cに由来する軽石が検出された。さらにSA-151のP39の覆土についても、いずれの土層からもAs-Cに由来する軽石が検出された。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

含まれる軽石の特徴から、Hr-FAまたはHr-FPの一次堆積層と考えられた100号住居址Fライン5層中のテフラ(試料番号1)について、示標テフラとの同定精度を向上させるために屈折率測定を行った。測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972)による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を第158表に示す。試料番号1に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.501-1.503である。また、この試料には重鉱物として角閃石や斜方輝石が含まれており、ほかに単斜輝石もわずかに認められる。斜方輝石(y)と角閃石(n₂)は、各々1.708-1.711と1.671-1.677である。本遺跡の位置やテフラの分布を考慮すると、このテフラはHr-FAの可能性の方がより大きいと思われる。

5. 考察—遺構の年代について

116号住居址では、最下位の試料から上位でAs-Cに由来する軽石が認められた。また、試料番号5付近にHr-FAの降灰層準のある可能性が考えられた。したがって、その年代はAs-C降灰後でHr-FA降灰前と考えられる。

100号住居址も、最下位の試料番号9からAs-Cに由来する軽石が検出され、5層中にHr-FAと思われるテフラ層が認められた。したがって、この住居址の年代もAs-C降灰後でHr-FA降灰前と考えられる。

SD-43では、最下位の土層中よりAs-Cに由来する軽石が認められた。また試料番号3付近にHr-FAとAs-Bの降灰層準があると考えられた。したがって、このSD-43の年代は、As-C降灰後でHr-FA降灰前と考えられる。またSD-44では、最下位の土層中よりAs-CとHr-FAに由来する軽石が認められた。このことか

ら、SD-44 については、Hr-FA 降灰後の可能性も考えられる。

SA-151 の P10、P15、P39 のいずれの遺構についても、覆土から As-C に由来する軽石のみが認められた。したがって、これらの遺構の年代については、As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と考えられる。

6. まとめ

権現山遺跡 SG5 区において、テフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、遺構の覆土から、浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉)、権名二ツ岳活川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭)、浅間 B テフラ (As-B) に由来する可能性が高いテフラ粒子を検出することができた。そして、分析の対象となった遺構のほとんどの年代は、As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と推定された。ただし SD-44 のみ、ほかの遺構よりも新しい可能性が指摘された。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示層テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 坂口 一 (1986) 権名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6 世紀における権名火山の 2 回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

SG10 区では古墳時代の竪穴建物跡を 37 棟調査した。この集計値は、建て替えのある SI-29a と SI-29b を 2 棟の建物として数えている。また、SG5 区と SG10 区の境界にある建物 2 棟 (SG5 区 SI-4 と SI-100) を 37 棟の中に入れてある。

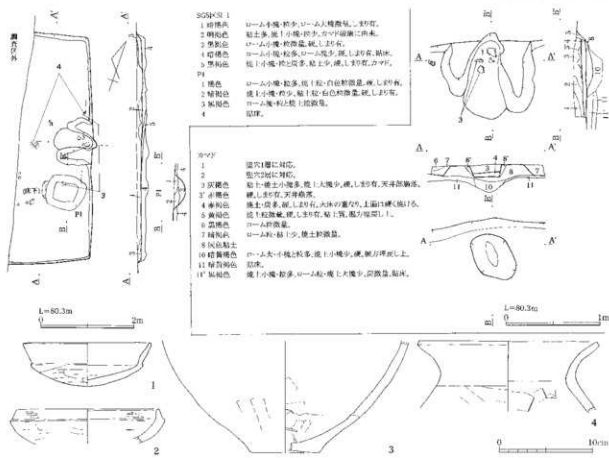
SG5 区 SI-1 (第 279 図、写真図版 20)

【位置】 SG5 区北部、19-15 グリッド。古墳後期の建物は東に SI-2、南に SI-3 がある。東壁から 1.5m ほどだけを調査し、大半は調査区外。重複する遺構はない。

【規模と形状】 方形と予想され、南北の中軸線は N-71°-W である。東西長は最大残存の南壁で 1.75m、南北長 4.85m。残存壁高は 6～9cm である。床面はほぼ平坦で、全体に締まっている。ローム粒・塊の多い暗褐色土で貼床する。掘方は床面から深さ 5～14cm で、底面に細かな凹凸が著しい。カマド部の下方と、貯蔵穴 P1 の西側で、竪穴掘形に浅い凹みが認められた。柱穴は調査区内からは確認されていない。カマド南側に隣接して検出された貯蔵穴は 82×75cm の略方形で、床面からの深さ 24cm、底面は鍋底状となる。覆土は 3 層に分層される。1・2 層は掘方とほぼ同じ厚さで、ローム粒・塊が 3 層より多く、硬くしめることから、建物廃絶時には閉口していた可能性もある。

【カマド】 東壁際中央やや南寄りにある。両袖幅 97cm、煙道先端から袖先端まで 90cm。袖部は灰色粘土の 8 層で構築し、内壁は被熱で赤変する。火床面付近は、床面より約 15cm 不整楕円形に掘ったのちローム塊が多い 10 層で、さらに袖部から連続して灰色粘土を火床面の下層にも 10cm ほどの厚さで整地層として敷き、火床面とする。火床面上には 6～8cm の厚さで焼土と炭化物の多い赤褐色土が水平に堆積し、上面がカチカチに硬化していることから新期火床面に用いた可能性がある。天井部粘土が崩れたと考えられる 3 層が堆積する。煙道は北壁を約 15cm 「U」字状に掘り、煙道奥壁部を 5 層で埋め戻している。

【遺物および出土状況】 遺物はわずかで、カマドとその西側に見られる。口縁部外面まで磨く身模倣杯 (2) は後期中頃以前に多い。図示した杯 2 点と裏 1 点のほかは、ごくわずかな破片しかない。図示以外の土師器 61 点・564g の内訳は杯 7 片・24g、壺甕類 43 片・456g、甕 11 片・84g。須恵器・石・礫は出土しなかった。



第 279 図 権現山遺跡 S5G5 区 SI-1 遺構・遺物

第 159 表 権現山遺跡 S5G5 区 SI-1 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ 縦×横	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.4 高 4.65	外面口縁部、内面口縁へ体部下平なヨコナデ。内面底部はナデで、くぼむ。外面底部はケズりで、口縁部直下に無調整部分あり。内外面とも強く焼熟して奪り、表面がケラター状に剥落する。	5YR6/6 橙 やや硬質 白・黒・赤微粒微量 硬質	カマド内床直上 1cm 口1/3周、体一径 1/2 周 1, 2, K
2 土師器 杯	口 径 14.8 高 径 3.6 最大 径 16.4	胎土、表面とも黒褐色。口縁部内面はヨコナデのち横方向のヘラナデ。体部外面はヘラナデと見られるが、こまかく剥落しているため不明確。体部内面はヘラナデのち円周方向のミガキナ。	10YR3/1 黒褐 やや軟い 黒褐・細粒やや多、 白細粒と砂微粒少、透明微粒微量 やや硬質	口へ体 1/4 周 K, 中央上 K
3 土師器 甕	高 径 11.8 底 径 7.4	外面口縁部下平方向のヘラナデ。胴部下端は横方向のヘラナデ。底部ヘラナデのヘラナデ。ややくぼむ。断面がケラター状の剥落傾向強く、調整不明確。一部に灰色胎土が付着する。内面胴部下平へ底部ヘラナデ。底部付近には、ヘラの端部が当たってできたと思われるヘラミガキ状の調整がわずかに見られる。	10YR6/4 に近い黄褐 やや軟い 白細粒少、灰色微粒微量 やや軟質	カマド内床直上 2 片、北 壁厚部直床直上、甕破穴 P1 内 胴下平一部 3, 4, 13, 14, K
4 土師器 甕	口 径 18.9 高 径 7.4	外面口縁部ヨコナデのち、胴部ナデ。口縁部端部には、わずかな凹線がある。内面口縁部ヨコナデのち、胴部ヘラナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや軟い 白・黒微粒少、白・ 黄褐色・灰色微粒微量 やや硬質	中央部床直上と北東壁厚 床直上が接合 口へ胴上平 1/4 周 10, 13

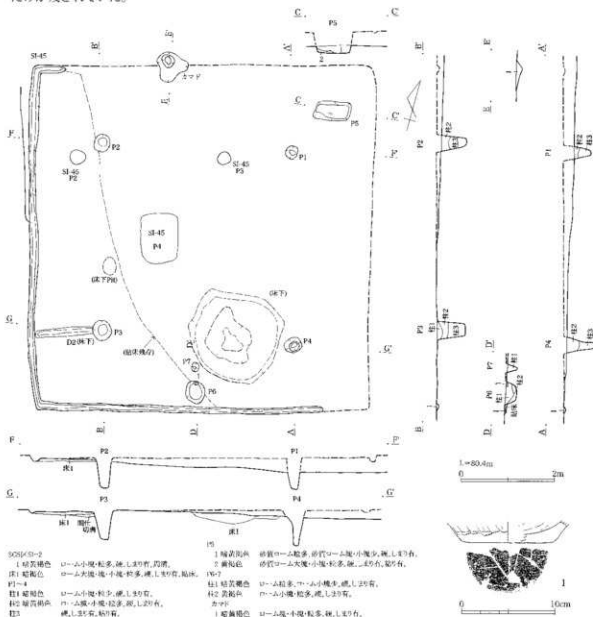
S5G5 区 SI-2 (第 280 図、写真図版 20・21)

【位置】 S5G5 区北部の 19-15・16 グリッド。西に古墳後期の SI-1・3 があり、東側は SG10 区の前古墳時代遺構群がある。北半で古墳中期の SI-45 を切ると思われるが、土層断面では確認できなかった。

【規模と形状】 中央より東の部分は床面まで削平されて消滅している。ほぼ方形と思われる。中軸線は西壁から推定して N-16°-W、推定規模は東西 7.44 × 南北 7.54m。確認面が低かったためか壁や床面は残っていない。残存する西壁際から推定すると、外区で掘方から 6 ~ 10cm の厚さでローム塊・粒の多い暗褐色土の貼床 1 層で埋め戻し、硬く締まる。南西向きが明らかでないが、掘方は内区より外区が 5 ~ 10cm 深い。中央南寄りで、188 × 182cm のほぼ円形で、掘方底面から最深 24cm の土坑状の掘方を確認した。

主柱穴4本は、P1は径27×25×深さ35cm(推定床面から58cm)、P2は36×35×深さ55cm(推定床面から63cm)、P3は41×39×深さ59cm、P4は37×31×深さ61cm(推定床面から66cm)。柱間はP1-P2間が4.02m、P3-P4間が4.06m、P1-P4間が4.07m、P2-P3間が3.98mでほぼ同一であり、主柱穴を方形に配置する。南壁際中央にあるP6は入口ピットの可能性があり径48×41cm、深さ21cm(推定床面から24cm)である。また、南壁に直交してP6の北20cmにあるP7も規模は小さいが入口関連ピットと見られ、径19×17cm、深さ22cm(推定床面から25cm)である。残存部の壁際に周溝D1があり、本来は全周していたと推定される。貼床下の掘方底で1本確認した間仕切溝D2はP3に付随して西壁に接し、断面「U」字状で長さ120cm、幅15～19cm、残存する深さ6cm。貯蔵穴P5は東西軸の長方形・平底で、壁が外傾する。かなり削平されているが、確認面で75×38×深さ15cm(推定床面から深さ44cm)。P5の1・2層に砂質ローム塊・粒が目立つ。

【カマド】カマド付近は壁穴とともに削平され、カマド掘方の下部を反映する66×62cmの不整形の凹みだけが残されていた。



第280図 権現山遺跡SG5区 SI-2 遺構・遺物

【覆土】最も残りの良い西側でも、確認面がほぼ床面であるため覆土は不明。

【出土遺物】遺物はごくわずかで、図示以外の土師器 37 片・182g の内訳は杯 16 片・64g、高杯 5 片・24g、壺蓋類 16 片・94g。杯破片は半球状のみで漆仕上げをし、須恵器杯身模倣の破片はない。棒状脚の高杯片がある。古墳後期でも古い時期かもしれない。

第 160 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-2 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 蓋	高 径 2.3 底 径 9.0	平底。外面胴部下端は縦方向のヘラケズリ。底面には本葉痕があり、焼熱のためか変色している。内面胴部下端～底部はヘラナデと見られるが、表面が磨滅しているため不明。	2.5YR6/0 緑 黒い、白・黒・赤粒多、白・黒・赤粒少 敷貫	P6 付添 底 1/2 割 1

SG5 区 SI-3 (第 281・282 図、写真図版 21)

【位置】SG5 区北部の 18-15 グリッドにあり、西側約 1/3 は調査区外となる。東に後期の SI-4、南に中期の SI-5 がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】ほぼ方形と推定され、南北方向の中軸線は N-9° W である。南北長 6.91m、東西長は確認できる部分で 4.96m 以上。壁は外傾し、残存高 5～18cm。床面はほぼ平坦だが、東及び南側外区が中央より 2～5cm ほど低く、全体が締まる。掘方は床面から深さ 6～16cm で底面に小さな凹凸がある。ローム粒・塊を少量含む暗黄褐色土の 3 層で全体を貼床する。

主柱穴と推定される P1 と P2 を東側で確認した。西側調査区外に 2 本推定され、4 本主柱であろう。P1 は径 74 × 68 × 深さ 83cm、P2 は径 69 × 63 × 深さ 84cm、柱間は 4.00m。床面での掘方は径 65～70cm と大きい。下方の柱根部は径 20～30cm である。

南壁際中央、壁から 30cm 離れた P5 と、その 10cm 北にある P4 が入口ピットと思われる。P4 は径 51 × 46 × 深さ 41cm、P5 が径 50 × 42 × 深さ 37cm である。南壁西側以外で確認した壁溝 D1 は断面 U 字状で幅 14 × 22cm、床から深さ 5～10cm。南側では長 130 × 幅 18 × 20 × 深さ 6cm の壁溝が壁から 5cm ほど離れる。

北東隅にある貯蔵穴 P3 は東西軸の長方形で、95 × 84 × 床面から深さ 38cm。開口部は蓋をするために 8～20cm 幅で 2～5cm の浅い段があり、底面は略方形のほぼ平坦面、壁は直線的に外傾する。貯蔵穴の覆土 1 層は微量の炭・焼土粒を含み、2・3 層にローム塊・粒が多い。

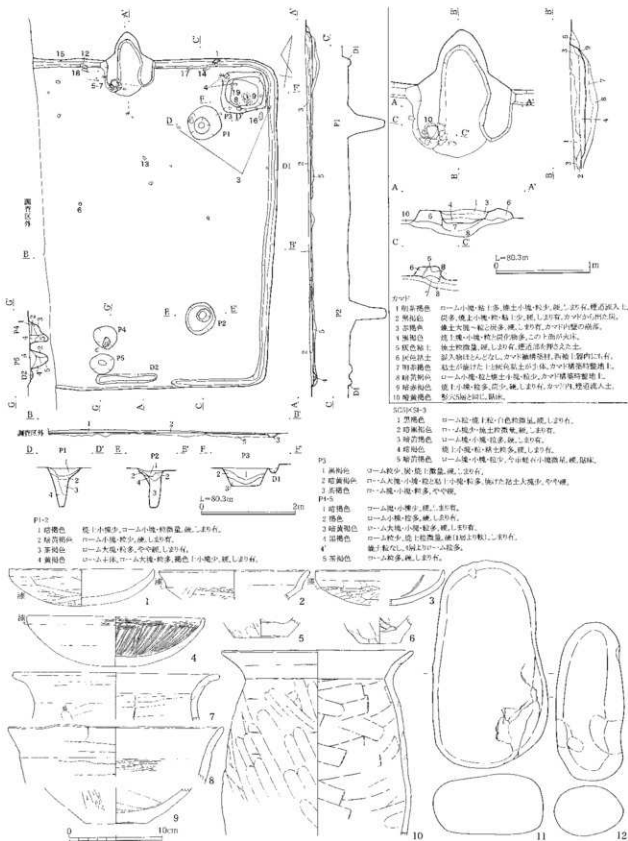
【覆土】1 層は微量の白色粒子（テフラ?）、2 層はローム塊を少量含み、いずれも硬くしまる。3 層は焼土・粘土粒の多いカマド崩落土である。

【カマド】北壁際中央やや東寄りにある。両袖幅 105cm、煙道先端から焚口部掘り込みまで 135cm。掘方を埋め戻した 8 層上に灰色粘土の 6 層で袖を構築する。西袖先端に土師器甕 (10) を倒立している。燃焼部は床面より若干窪み、8 層の上に灰色粘土を敷く。火床はほぼ平坦で、被熱して焼土化が著しい。煙道は北壁より 80cm ほど U 字状に掘り、周囲を灰色粘土の 5 層で補強している。粘土が多い 1 層は煙道側からの崩落流入土、3 層が焼土主体の天井・内壁崩落土と思われる。炭化物の多い 4 層が煙道と焚口から推定し、この上面を火床に使ったと推定される。

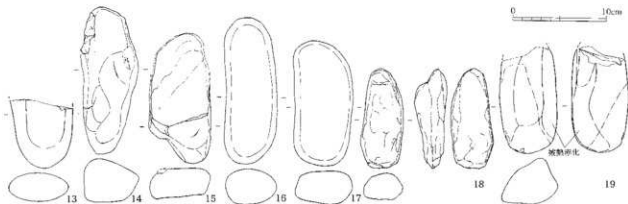
【遺物および出土状況】遺物はカマドと貯蔵穴の周辺に多い。遺物量は比較的あり、杯・甕・編物石が多く、高杯・壺・小形土器が混じる。1～4 は後期後葉の漆仕上げ杯。9 は厚さ 1.7cm 位の厚い壺底部。図示以外の土師器と土製品合計 144 点・1,570g の内訳は杯 48 片・401g、高杯 10 点・115g、壺蓋類 82 片・1,020g、甕 2 片・28g、焼粘土塊 2 点・6g。大形壺蓋類底部 1 片、半球状杯 3 片、口縁が内傾する杯 1 片を含む。

第 161 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-3 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 15.4 高 3.9	外面体～底部ヘラケズリ。内面底部ナデ。口縁部内外面および内面体部コナテ。内面全体漆仕上げ。	10YR6/2 灰黄褐色 中～中密 赤粒と白細粒と黒 微粒微塵 中～中敷貫	北東壁溝底上 4cm 口～体 1/2 割。底面存 18



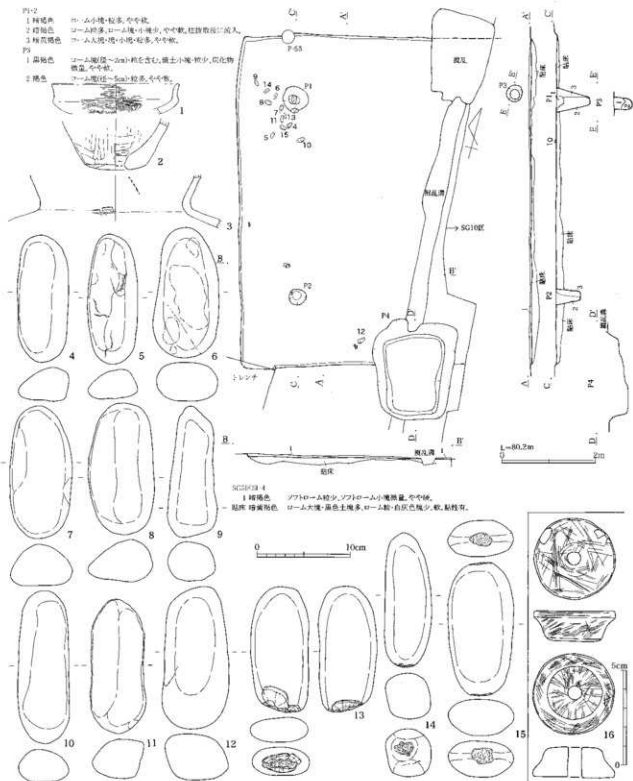
第281図 権現山遺跡SG5区 SI-3(1) 遺構・遺物



第282図 権現山遺跡 S5G5 区 SI-3(2) 遺物

2 土師器 杯	口 径 16.0 高 残 3.1	外面体部ヘラケズリ。口縁部内外面、体部内面ヨコナデ。外面口縁部および内面口縁部へ体部直上上げ。	10YR6/4 ぶい黄褐色 中や暗褐色 細砂粒質	口縁部破片 6
3 土師器 杯	口 径 13.6 高 残 3.7	外面体一部ナデのちヘラケズリ(光沢あり)。口縁部内外面および内面体部へ底ヨコナデ。内面にヘラ描き1本あり。外面口縁部へ体部直上上げ。	5YR6/6 暗褐色 中や暗褐色 黒細粒と細砂粒少、白粗粒少量 白粗粒多 微質	北東部直上 10cmと北東部直上 7cmが接合 口一底 1/2周 33, 43
4 土師器 杯	口 径 18.8 高 残 5.2	外面体一部ヘラナデと見られるが、焼割のため不明。口縁部内外面と体部内面ヨコナデのち体部一部ナデのち外面微粒状のへらミガキ。口縁部内外面は横方向のヘラミガキ。内面全体と外面口縁部直上上げ。	25Y7/3 浅黄褐色 中や暗褐色 白粗粒多、白微粒多 白粗粒多 微質	新設穴P3付直上 1cmとP3直上 12cmが接合 体一部、底完存 4
5 土師器 小形土器	高 残 2.0 底 残 5.5	外面体高いナデのち一部ヘラケズリ。底部は高いヘラケズリで、ややくぼむ。内面体へ底部高いナデ。	5YR7/6 暗褐色 中や暗褐色 赤粗粒と白・黒・赤粗粒多 微質	北西部直上 2cm 体一部、底完存 4
6 土師器 小形土器	高 残 2.0 底 残 4.3	外面体一部ナデ。外面の調子はわずかで、粘土の織り目が見える部分も多く、表面は平滑ではない。内面体へ底部ナデのちヘラケズリ。外面同様のナデが内面に施される。ケズリも雑でヘラ部は明瞭。3.5mmほどの厚さで附られる部分もある。	5YR7/6 暗褐色 中や暗褐色 白粗粒少、赤粗粒と白・赤・透明細粒質多 中や微質	中央部直上 1cm 体下部へ底完存 37
7 土師器 盤	口 径 22.0 高 残 4.9	口縁部内・外面ヨコナデ。外面側部上端はナデだが、ごく一部にナデに先行する10本/1cmのへらが見られる。内面側部上端はヘラナデ。口縁部内・外面に、灰白色粘土と靨が付着する。	10YR6/2 灰黄褐色 中や暗褐色 白粗粒少、赤粗粒と白・赤・透明細粒質多 中や微質	北西部直上 2cm 口 1/5周 4
8 土師器 皿	口 径 22.9 高 残 6.1	土器片全体が、焼熱により赤変している。外面側部上端ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。外面は口縁部へ側部上端に粘土の粗粒質が残る。口縁部にヒビが入っているが、内面は中や微質であり、磨り割に変形してしまった部分を部分的に磨き出した結果、磨成みにヒビを生じさせてしまったものと見られる。側部上端内面はヘラナデのち横方向のヘラミガキ。	10YR7/4 ぶい黄褐色 中や暗褐色 白粗粒と白・黒・赤粗粒少量 中や微質	P3直上 17cm 口 1/5周 26
9 土師器 皿	高 残 3.7 底 残 6.8	外面は焼熱により著しく赤変し、表面のほとんどが剥落している。外面側部は縦方向のケズリ方向のミガキ。底部は剥落のため調整不明、わずかにくぼむ。内面側部下端へ底部ヘラナデ。	25Y7/3 浅黄褐色 中や暗褐色 白・黒・透明細粒質多、砂粒少量 微質	新設穴P3直上 7cmとP3付直上 1cm 側下部へ底完存 20, 23
10 土師器 皿	口 径 20.4 高 残 19.5	外面側部上下は一部縦方向のヘラケズリのち全体に斜め方向のナデ。粘土の織り目はほぼ消えているが、削っていないため表面には粗粒質の様子を示す円筒方向の凹凸が残る。口縁部内外面はヨコナデ。内面側部上平は部分的に灰白色粘土が付着する。口縁部の一部は、焼熱のため赤変し、表面がクレーター状に剥落する。	10YR7/6 明黄褐色 中や暗褐色 白粗粒多、白微粒と赤粗粒少量 中や微質	カマ西側直上 8cm、逆位で出土 側上平完存 1
11 罐	長 20.0 幅 12.2 厚 6.4	扁平な直方体状の罐。河原石。一部に黒色物質付着。部分的に焼熱している可能性あり。重量 2797.3g。	25Y6/4 ぶい黄褐色 中や暗褐色 微粒質	P3内 完形 P3
12 石器 扁卵石	長 16.7 幅 7.3 厚 5.3	薄い棒状の罐。河原石。加工の痕跡なし。重量 1038.3g。	N5/ 灰褐色 中や暗褐色 砂質	北東部直上 1cm 完形 7
13 石器 扁卵石	長 残 7.4 幅 残 6.8 厚 3.0	薄い棒状の罐と見られる。河原石。左上部に、わずかに焼熱のため赤変している部分がある。残存重量 189.7g。	5Y6/2 灰オリーブ 中や暗褐色 微粒質	中央部直上 約 1/2周現存 12
14 石器 扁卵石	長 15.5 幅 6.1 厚 5.5	薄い棒状の罐。河原石。側面に剥離あり。剥離のための打撃は1回のみと見られる。重量 594.5g。	25Y6/4 ぶい黄褐色 中や暗褐色 微粒質	北東部直上 完形 17
15 石器 扁卵石	長 残 13.7 幅 残 6.1 厚 3.1	薄い直方体状の罐。河原石。上半の大部分が即席面から欠損する。残存重量 358.1g。	N5/ 灰褐色 中や暗褐色 砂質	北東部直上 8cm 一部欠 42
16 石器 扁卵石	長 15.4 幅 5.3 厚 3.8	河原石。加工の痕跡なし。重量 556.3g。	5Y5/2 灰オリーブ 中や暗褐色 微粒質	北東部直上 完形 32
17 石器 扁卵石	長 13.3 幅 6.2 厚 3.5	薄い棒状の罐。河原石。加工の痕跡なし。重量 502.9g。	10YR5/6 黄褐色 中や暗褐色 微粒質	北東部直上 2cm 完形 16
18 石器 扁卵石	長 10.3 幅 4.6 厚 2.8	薄い棒状の罐。河原石。加工した痕跡なし。上下両端がわずかに欠損しているように見えるが、人為的なものではないと推定する。重量 193.8g。	25Y4/1 黄褐色 中や暗褐色 微粒質	北東部直上 ほぼ完形 8
19 石器 扁卵石	長 残 10.7 幅 残 6.0 厚 4.7	薄い棒状の罐。河原石。残存する部分の2/3ほどが焼熱により赤変している。残存重量 457.2g。	5Y5/1 灰褐色 中や暗褐色 微粒質	新設穴P3直上 11cm 一部欠 21

第8章 権現山遺跡SG5区



第283図 権現山遺跡SG5区 SI-4 遺構・遺物

SG5区 SI-4 (第283図、写真図版22)

【位置】SG5区北部の18-16グリッドにあり、東側1/3はSG10区に入る。古墳後期の建物は北にSI-2、西にSI-3、南にSI-6がある。建物中央を南北方向の長方形攪乱坑と溝に切られる。また、東側のSG10区ではSI-4東半部壁は確認されていない。明確でないが、古墳中期のSG10区SI-18→後期のSG5区SI-4→後

期末のSG10区SI-21という重複関係が想定される。北辺が重複する時期不明のSG5区P-55との新旧関係は不明。

【規模と形状】 ほぼ方形と推定され、南北の中軸線はN-14°-W。南北長7.05m、主柱穴から東西壁までの距離を約1.2mと仮定した場合の東西推定長は7.1m。東西残存長は5.09m。残存壁高は3～7cm。床はほぼ平坦で、硬化部はないが全体に締まる。ロームと黒色土の混じった暗黄褐色土でほぼ全面に厚さが3～16cmの貼床を施す。掘方は外区が内区より若干深い。主柱穴は4本と推定されるが、実際に確認できたのはP1～P3の3本で、南東主柱穴は不明である。北東主柱穴P3はSG10区SI-18調査時に確認した。柱間は東西4.70m、南北4.14m。床面からの深さはP1=69cm、P2=51cm、P3=51cm。P3の上部は掘乱で削られている。

南壁際ほぼ中央のP4は、発掘調査時には別の土坑(旧名称はSG5区SK-48)としたが、位置や形態などから本建物の張出ピットである。212×146×深さ40cmの南北に長い方形で、南辺より北辺が少し長い。南壁から115cm張り出す。底面は152×102cmで開口部と相似形で、北西部はなだらかに15～20cm高くなる。壁は急傾斜で、床面から深さ10～20cmでなだらかになる。土層断面図はないが、確認面ではローム塊・粒を少量含む暗褐色土であった。張出ピットはSG5区SI-19・45にあり、SG10区SI-72などにも見られる。

【火処】 確認されなかった。遺物の時期からみて、北壁にカマドを持っていたことが想定できる。

【覆土】 覆土は1層だけが残る。

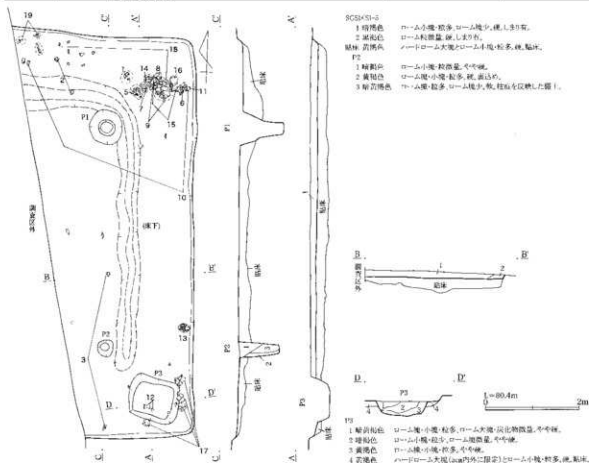
【遺物および出土状況】 北西の主柱穴周辺に編物石・般若石がまとまる。遺物はごくわずかで、図示以外の土師器合計52片・528gの内訳は杯・鉢16片・148g、壺・甕類35片・370g、甕1片・10g。このうち張出ピット(調査時名称SK-48)の遺物は計35片で、杯・壺・甕のほか、口縁部が身模倣形土師器杯に類似した鉢片がある。竪穴覆土で出土した杯類は、有稜の古墳後期の模倣杯や、中期末頃の杯がある。覆土中の土器では時期を確定できないが、張出ピットP4の土器により古墳後期前半と考えられる。SG5区ではSI-4・15に紡錘車があり、紡錘車状土製品がSI-24にある。SG10区ではSI-59などに紡錘車がある。紡錘車が孔外周の接線方向に擦痕を持つ点は、補助具で回転させた痕跡であると指摘されている(大倉2002)。

第162表 権現山遺跡SG5区SI-4出土遺物

番号 種類 部材	大きさ 縦×横	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状況 位置
1 土師器 杯	口 縦13.4 高 残3.2	胎土、表面とも黒色。外面体部はナダのち長楕円ミガキ。外面口縁部はヨコナダのち横方向の密なミガキ。内面口縁-体部ヨコナダのち体部放射状の密なミガキのち口縁-体部上半部横方向のミガキ。	5Y4/1 灰 やや硬質	P4内 口-体一部 SK-48
2 土師器 甕	高 残5.4 底 復6.6	外面胴部下半部方向の軽いナダ。底部丸いナダ。起して外面の唇部は広く、底面では胎土の跡がほとんど消えないままとっている。胎部はそれぞれは、念だが、平滑とは言えない。内面胴部下半-底部ヘラケズリのち一部ナダ。底部-孔あり。ヘラケズリで整形される。孔径は復原約2cm。	7.5Y8/4 灰 やや硬質 白・赤黒粒多。赤黒 少 硬質	P4内 壁-底1/4 SK-48
3 土師器 甕	高 残6.4	内・外面とも、表面が剥落している部分が多い。外面胴部ヨコナダ。胴部上端ヘラケズリのちヘラミガキ。内面胴部ヘラケズリのちヨコナダのちヘラミガキ。内面胴部上端ナダ。	10YR8/3 浅黄褐色 やや軽い 赤黒粒少。砂礫質 やや硬質	P4内 壁-胴上端一部 SK-48
4 石器 編物石	長 13.4 幅 5.4 厚 3.6	やや厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量332.7g。	2.5Y7/2 灰黄 やや硬質 灰山質	北西部床土2m 完形 9
5 石器 編物石	長 13.5 幅 5.3 厚 3.0	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量404.5g。	7.5Y6/1 灰 やや軽い 黄灰質	北西部床土3m 完形 9
6 石器 編物石	長 13.8 幅 7.0 厚 4.2	やや厚い棒状の礫。河原石。表面には黒色物質が付着するが、裏面にはなし。加工の痕跡なし。重量580.4g。	2.5Y6/2 灰黄 やや硬質 灰山質	北西部床土2m 完形 4
7 石器 編物石	長 14.0 幅 6.6 厚 4.4	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量599.7g。	N5/ 灰 やや硬質 灰山質	北西部床土2m 完形 9
8 石器 編物石	長 14.0 幅 6.9 厚 4.5	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量658.2g。	5Y7/1 灰白 やや硬質 灰山質	北西部床土2m 完形 3
9 石器 編物石	長 13.9 幅 5.3 厚 4.2	厚い棒状の礫。内柱状。河原石。加工の痕跡なし。重量479.8g。	5Y7/1 灰白 硬質 灰山質	北西部床土2m 完形 1
10 石器 編物石	長 16.2 幅 5.5 厚 3.7	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量490.2g。	2.5Y6/2 灰黄 やや硬質 灰山質	中央部床土4m 完形 11

第8章 権現山遺跡SG5区

11 石塔 脇物石	長 14.2 幅 5.9 厚 4.1	厚い棒状の礎。河原石。加工の痕跡なし。重量 563.0g。	7.5Y6/1 灰 やや暗赤 黒紋付	北西部床土 4cm 完形 6
12 石塔 脇物石	長 15.1 幅 7.2 厚 4.4	厚い棒状の礎。河原石。加工の痕跡なし。重量 852.1g。	10YR7/6 明黄褐色 やや暗赤 黒紋付	南東部床土 1cm 完形 12
13 石塔 脇物石	長 13.3 幅 6.2 厚 3.0	薄い棒状の礎。河原石。下端に蹴打痕と、蹴打に伴う割離あり。重量 371.7g。	5Y6/1 灰 やや暗い 灰山附	北西部床土 4cm 完形 7
14 石塔 脇物石	長 14.1 幅 4.9 厚 4.8	厚い棒状の礎。河原石。下端に蹴打痕あり。重量 593.3g。	10Y6/1 灰 やや暗赤 灰山附	北西部床土 2cm 完形 2
15 石塔 脇物石	長 14.1 幅 7.0 厚 3.9	やや薄い棒状の礎。河原石。上下両面に蹴打痕あり。左右両側にも蹴打痕がある可能性があるが、磨滅のため不詳。重量 620.7g。	5Y6/2 灰オリーブ やや暗い 灰山附	北西部床土 4cm 完形 9
16 石製品 絞磨石	径 4.3 厚 1.6 重 44.17	上面に欠損と見られる小さな割離 2ヶ所あり。截頭円錐形で、上下面はともに平削。側面はくぼむ。上面には、円周方向の直線と放射、および孔付近のみにある浅い凹線を描く彫刻あり。側面は、中央のくぼんだ部分に製作時のものと見られる横位の研磨痕が集中。上・下端は側面などなく、光沢を持つ。使用による磨耗か？下面は光沢があり、軸へ向きつく方向の擦痕が多い。孔径は上端 0.94mm、中央 0.84mm、下端 0.723mmで、中央がややふくらみ、下端の方が幅広になっている。孔径からみると、下から穿孔した可能性がある。	2.5GY2/1 黒 細密 滑石片岩 硬質	P4 内 ほぼ完形 SR-48



第284図 権現山遺跡SG5区 SI-5(1)遺構

SG5区 SI-5 (第284・285図、写真図版22・23・177)

【位置】SG5区北部の17-15、18-15グリッドにあり、西側約2/3は調査区外となる。北と南東に古墳後期のSI-3・6がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】方形と推定され、中軸はN-4°-E。東西長3.75m以上、南北長8.51m。壁はほぼ垂直で残存高9～13cm。ローム塊の多い暗黄褐色土で全体を平坦に貼床し、硬化部はないが全体が締まる。床から深さ6～35cmの掘方底は細かな凹凸が著しい。北側と東側の掘方底で、主柱穴の外側を結んで内・外区を区画するような溝状掘り込みがあるが、旧建物の付属施設が確認できないことや土層断面から、これが旧建物の壁溝である可能性は低い。主柱穴2本はP1-P2間が4.63m。P1=径75×70×深さ92cm、P2=径

35×33×深さ86cmで、P1は底面上45cmから円錐状に開く。南東隅の貯蔵穴P3は長軸が南壁より14°ほど北に振れる長方形で、中央が若干窪む鍋底状で壁が外傾し、104×91×床面から深さ32cm。

【火処】不明であるが、調査区外側に炬を持つことが想定される。

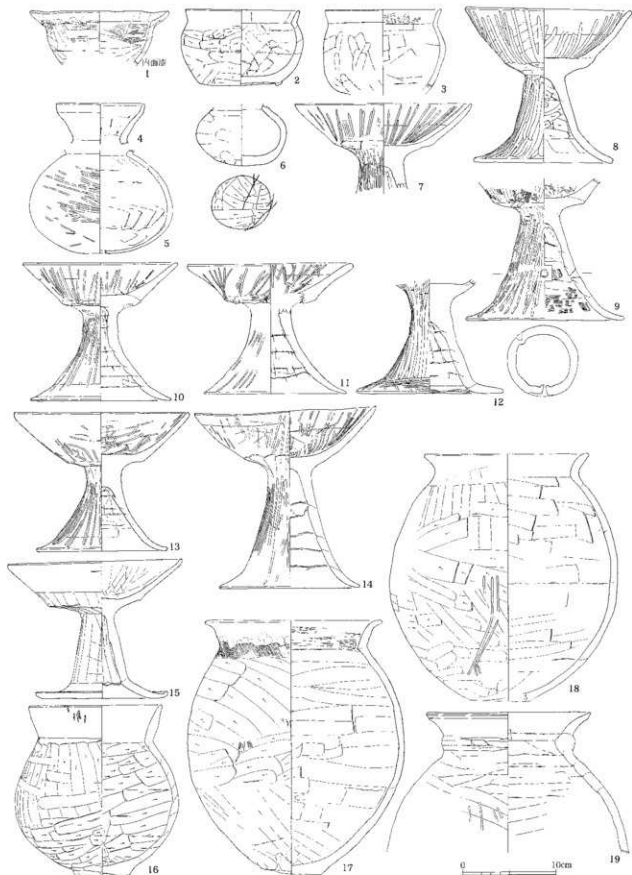
【覆土】東壁際の2層をのぞくと、ローム粒・塊が多い1層で埋まる。貯蔵穴1層に微量の炭粒があり、1・3層にローム塊・粒が多い。

【遺物出土状況】北東部と南東部にあり、東壁際に多い。北東部の土師器群は、床面との間に少量の覆土をはさむので、建物が廃絶した少し後でまとめて廃棄されたものとみられる。

【出土遺物】比較的多い。高杯が多く、小・中・大形の壺・甕類や杯も含む。図化以外に上げ底状の杯底部と口縁が内彎する椀形杯が各1点ある。1は漆仕上げの杯として初期の例。高杯は出土個体の大半を占めたが、別個体破片も少しある。低めの八字状脚が多く、屈折脚(12・15)もある。9は脚部に貫通孔と非貫通孔を持つ。高杯の非貫通孔はSG5区SI-15・116などにあり、SG10区SI-25に貫通孔と非貫通孔がある。10と11はよく似る。17は底面がやや突出する。底が凸面状の甕はSG10区SI-16などにある。図示以外の土師器合計207片・1.523gの内訳は、杯64片・299g、高杯42片・425g、壺・甕類101片・799g。

第163表 権現山遺跡SG5区SI-5出土遺物

番号 器物 名称	大きさ (mm×g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 5.7	全体に赤みあり。外面口縁部は複合口縁状にわずかな段差を持つが、9本/1cmのハケによるわずかな粗粒とされる部分が多い。ハケのちね・口コナが施されるが、微細な凹凸・ハケ調整の痕跡が少い。体部がやや丸みナシ。内面口縁部ヘラナデ(ハケの可能性あり)のちよコナデ、体部ヘラナデの上・下半1cmのハケのちよコナデ。内面全体漆仕上げ。漆仕上げの初期の1例。	5YR5-6 明赤陶 やや凝縮 白・赤粒多 やや硬質	北東部床10cm 体1/3周 11
2 土師器 鉢	口 復 12.1 高 8.0 底 7.0 最大 復 13.0	外面口縁部コナデのちよコナデ。体部がやや丸み。ケズリのちよコナデ。底面厚さ0.85×0.7×0.25mmの粘土塊を意図的に貼ったと見られる。内面口縁部ヘラナデのちよコナデ。体部上平ハケナデ。縦線・面三角面が浅い。体部4角・底部ヘラナデ。体部下半は底が熱赤変。口縁部および体部中位へ下平復付着。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや凝縮 白粒～細粒と白・赤・平面粗粒混在 やや硬質	北東部床面上～床土5cmが 接合 体上半1/3周、下半1/2周 18, 20, C一括
3 土師器 鉢	口 復 12.3 高 残 8.8 最大 12.9	赤みあり。外面口縁部コナデ。体部ナデ。ナデは軽く、粘土の層が見える。内面口縁部1cm/10cmのハケ後ちよコナデ。体部ヘラナデ。外面口縁部に復付着し、体部上半は少しあり。体部下半は熱赤変あり。	10YR7/4 に近い黄褐色 微赤 赤粒～細粒少。粗粒少量 混在 赤粒 白・赤 やや硬質	中央床土5cmと南東部床土 3cmが接合口一部、体 1/2周 27, 37
4 土師器 小形甕	口 復 9.4 高 残 4.3	外面口縁部下ちよコナデ、口縁部下～底部コナデの可能性あるが、表面割れのため不詳。内面口縁部下ヘラナデのちよコナデ全体コナデ。	10YR8/4 浅黄褐色 やや凝縮 白・黒・赤・灰色粗 粒 白・赤粒多 やや硬質	口1/2周
5 土師器 小形甕	高 残 11.0 脚 15.2	縁割で丸底。外面黒赤あり。表面は磨滅しているところが多いが、裏面部分では調整が良く残っている。内面は割部下平で、クレーター状に割落しているところあり。外面割部上平ナデのちよコナデ。割部中位～底部ケズリのちよコナデ。内面割部上平ナデ。縦線と指爪痕が見える。割部中位～底部コナデ。粘土の織み上げ体止による接合痕が残る。全体に薄手で、特に底部付近が強い。	5YR7/6 暗 やや凝縮 白・赤粒～細粒と粗 粒 赤粒少、白粒～粗粒少量 やや軟質	北東部床土2cm 深1/3周、体全周 10
6 土師器 小形甕	高 残 6.5 脚 9.6	外面割部上平コナデ。割部ナデ。底部は丸底で、高いケズリ。縦線あり。内面はほぼ全面が厚く割落するため調整不詳。	2.5YR5/6 明赤陶 やや凝縮 白・赤粒～細粒少量 やや軟質	北東部床土6cm 深～底ほぼ完全存 2
7 土師器 高杯	口 18.6 高 残 9.5 最大 18.6	外面杯体部ナデ。口縁コナデ後口縁部コナデ～体部縁からタテミガキ。底～脚上平ナデ～下半はやや硬質。脚部縁からタテミガキ。内面杯体部ナデに口縁コナデ～縁から復付着ミガキ。脚部底にタテミガキ。	5YR7/6 暗 中やや凝縮 赤粒少、白粒～粗粒少量 やや軟質	北東部床直上 口完全存、脚上平5/6周 9
8 土師器 高杯	口 17.7 高 16.2 脚 14.8	厚手。縦線。外面杯体部口縁部コナデのちよコナデ斜位のヘラナデ。底面外周縁のケズリのみは底面ナデ。および口縁～体部縁まで縁から縦方向のミガキ。脚部上平ハケナデ・ヘラナデ。脚部下コナデのちよコナデに縦方向の幅広ミガキ。ミガキは光沢のないものが先に密に施されたのち光沢を持つものがやや疎らに施される。内面杯体部～底部ヘラナデのちよコナデのちよコナデの口縁部～体部縁の縁から縦方向のミガキ。底面は方向の異なるミガキ。底部と体部の接合の織り目明瞭。脚部上平ナデのちよコナデのケズリ。下平ヘラナデのちよコナデ。脚部上半に縦線あり。杯部口縁部縁部は、前面を持つ。脚部縁にも、面を持つような形状あり。	7.5YR7/4 に近い暗 やや凝縮 白粒～粗粒少。砂粒 粗～細粒少量 硬質	北東部床直上3cm 杯口3/4周、杯体脚上 平完全存、脚体脚上 平完全存、杯体脚上 平完全存 6
9 土師器 高杯	高 残 15.1 脚 16.8	外面杯体部縁部8本/1cmのハケのちよコナデのちよコナデ。底面ヘラナデのちよコナデ。脚部上平ヘラナデ。下平コナデのちよコナデのちよコナデ。ミガキは上平・粗粒。下半は中やや硬質。脚部上平へのちよコナデ。内面杯体部縁部ヘラナデのちよコナデのちよコナデのちよコナデ。底面は縦線と指爪痕のミガキ。脚部上平ナデ。底面縁部明瞭。中位以下の縦線以前のナデである。中位コナデのちよコナデ。脚部の下縁上平約5cmのところは孔2ヶ所あり。一方は外面径0.2mm内径3mmで、底面にはほぼ垂直に穿孔される。もう一方は、底面は丸いナデで、底面は上平に12°の穴があり、外面径は約7mm、深さは約7.5mmで、底面にはほぼ垂直である。工具は鉛筆型のものを用いたと見られ、工具を回転させながら外面から内面方向へ孔を開けようとしている。内面には、穿孔に伴う粘土の盛り上がりがある。粘土の盛り上がりは全く調整されておらず、土器全体の整形が終了したのちに穿孔されたことが認められる。	5YR7/6 暗 中やや凝縮 赤粒～細粒多、白・赤 粗粒中～中少、透明粗粒少、赤 粒少量 やや軟質	北東部床直上～床土4cm が接合 杯体1/4周、杯底3/4周、杯体穴深 7, 8



第285図 権現山遺跡SG5区 SI-5(2) 遺物

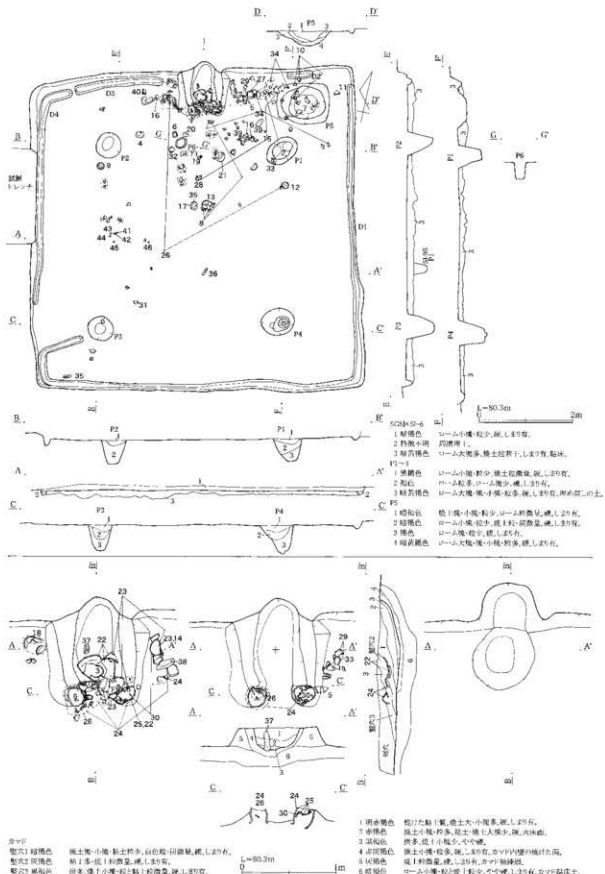
10 土師器 高杯	口 復 16.4 高 14.5 脚 復 15.0	白色土と褐色土がマール状に混じる部分あり。外面杯部口縁ヨコナデ、体部ナデ後縁部で残る縦のミガキ。口縁部中央縁を持つ方に凹み取りあり。杯部底部～脚部上平縁は縦・横方向のミガキ。脚部ナデ、下平コナデ後タテミガキが上下で、下平で残る。内面杯口縁～体部ヨコナデ後縁の縦ならミガキ。底部はナデ後ミガキと見られるが、表面磨滅し不明瞭。脚部斜いナデで、下平ヘラナデ。組織は、粘土の絞り目顕微。下平コナデ	2.5YR5/8 明赤褐 やや暗赤 赤褐～暗緑多、白輝 微質	北東部床直上8cmと北西部床直上が接合 杯口～底1/3弱、底～脚上平一部欠、脚中位～下平1/3弱 1、24
11 土師器 高杯	口 復 17.5 高 15.0 脚 復 15.0	10に類似する胎土。技法の高杯。微質な胎土。杯部口縁～体部ヨコナデ、体部下平ナデの縦ならみやや斜め方向のミガキ。底部ヘラナデ。脚部上平ナデ、下平コナデの縦方向のミガキ。磨滅しているところが多いが、上下は、下平は残らなものであろう。内面口縁ヨコナデ、体～底部近いヘラナデで残る縦ならミガキ。脚部上平～中位斜いナデ。中位わずかにヘラナデ。組織は明瞭で粘土の絞り目も見える。下平ヘラナデ後ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや暗赤 赤褐～暗緑多、白輝 やや微質	北東部床直上8cm 杯口～底1/3弱、脚上平一部欠、下平1/2弱 1
12 土師器 高杯	高 残 12.5 脚 15.5	全体に、やや赤む。外面杯底面～脚部下平ナデ・ヘラナデ後密なタテミガキ。杯部底部にヘラ微あり。脚下部は大きく開いており、ヨコナデの縦方向の密なミガキ。杯部底部はヘラナデのミガキと見られるが、割直し、不明瞭。杯部底部と底部の接合が見える。脚部斜いナデのみ、縦横と縦に入る粘土の絞り目も顕微。下部はヘラナデ～ヨコナデ～一部ナデ。ミガキ。赤みを修正したものか。	2.5YR6/6 黄 やや暗赤 黒微粒多、赤微粒少	野庭穴P3 底直上5～10cmが接合 杯底～脚上平完存、脚下部1/2弱 38、39、C一括
13 土師器 高杯	口 18.5 高 14.7 脚 復 13.8	外面口縁ヨコナデ、体部ナデの縦ならミガキ。杯底面ヨコナデ。脚上平ナデナズリ、下平コナデのミガキ。陶質あり。内面杯部体～底部ヘラナデのミガキ。杯部ヨコナデのミガキ。ミガキは底部方向のみ。口縁～体部口縁方向に上から見て五角形のミガキを中央部まわりに残す。全体に残るが底部付近のみやや微。脚部上平ナデ。上平に大きな段差の組織は、中に3本の粘土組織が見える。下平ヘラナデのヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや暗赤 白・黒・赤微粒多、赤微粒少、赤微質	野庭穴床直上2cm、床面より浮いた状態 杯～脚上平完存、脚下部1/3弱 30
14 土師器 高杯	口 19.1 高 19.2 脚 14.8	やや軟質なため、表面の磨滅で調整不詳。外面杯部ヘラナデ後口縁ヨコナデ後残る大きなタテミガキ。杯底面～脚部ヘラナデ。脚部下平コナデ後タテミガキ。ミガキは、上下では密だが、下平は開いた形のため、やや疎らに見える。内面杯部～底部ナデ、口縁ヨコナデ後放射状ミガキ。脚部はナデで、組織が磨滅。下平コナデ。	5YR6/8 橙 やや暗赤 赤褐～暗緑多、粗砂微粒少、白微粒少、黒細粒と微質	北東部、床面に接した状態 杯～脚上平完存、脚下部1/3弱 8
15 土師器 高杯	口 18.6 高 14.7 脚 14.0	柱状部、外面杯底面方向のヘラナデの口縁～体部ヨコナデ、脚部縦方向のヘラナデの横方向のミガキ。脚部下平コナデ、底部は上方に反りかえる。内面杯部はヘラナデの口縁～体部ヨコナデの粗く斜い放射状ナデ。底部は丁寧なナデ、脚部は斜いナデで、縦方向の粘土の絞り目も顕微。下平コナデで、下部にはヨコナデ後付着した粘土が現存。杯部上縁～体部と下平下平黒微。	5YR7/8 黄 やや暗赤 白微粒多、粗砂微粒	北東部床直上2～4cmが接合 杯口～底1/2弱、脚中位完存、脚下部1/2弱 3、7
16 土師器 小形甕	口 14.6 高 18.0 底 6.0 最大 17.3	外面製部上平縁のヘラナデの下平やや右がりのナズリ。このあたり、製部上下には、わずかに横方向のナデが施される。底部はやや凹み、ドーナツ状に平む。そのうち底面外縁のみ斜いナズリ。口縁部外面6本1/1cmのケのちヨコナデ。製部にも、ナズリの前にハケが施されていた可能性あり。口縁部上面・外面にヘラの当たりあり。意図してつけられたものではじと施される。製部外面にも一部あり。内面は脚部～底部ヘラナデの縦ならミガキ。粘土の組織が磨滅されずに残っているところが多い。口縁部内面ヨコナデ。外面製部下平～口縁部保付存。脚部下平一部微粒赤微。	5YR6/6 橙 やや暗赤 白・赤微～暗緑多、白・赤微少	北東部床直上3cm 口～脚2/3弱、底存 4
17 土師器 甕	口 復 18.7 高 26.9 底 6.0 最大 23.0	外面製部上平縁のヘラナデの下平やや右がりのナズリ。このあたり、製部上下には、わずかに横方向のナデが施される。底部はやや凹み、ドーナツ状に平む。そのうち底面外縁のみ斜いナズリ。口縁部外面6本1/1cmのケのちヨコナデ。製部にも、ナズリの前にハケが施されていた可能性あり。口縁部上面・外面にヘラの当たりあり。意図してつけられたものではじと施される。製部外面にも一部あり。内面は脚部～底部ヘラナデの縦ならミガキ。粘土の組織が磨滅されずに残っているところが多い。口縁部内面ヨコナデ。外面製部下平～口縁部保付存。脚部下平一部微粒赤微。	5YR6/8 橙 やや暗赤 白・平透明粗粒と細粒多、黒微粒少、黒微質	南東部床直上～床直上4cmが接合 脚上平1/3弱、脚中位2/3弱、脚下部4/5弱 口はほぼ完存、脚中位33、34、35、36、C一括
18 土師器 甕	口 17.4 高 20.3 底 6.2 最大 24.1	外面は製部上平縁のヘラナデの下平残るミガキ。脚部上平～底部ヘラナデのミガキ。平縁の底面にミガキのような浅い線があるが、意図して施されたものでは考えられない。口縁部内外面はヨコナデ。内面製部はヘラナデで、下平、中位、上平の3ヶ所に粘土を上げ休止によると見られる磨滅がある。外面製部中位より上には磨滅が付着しており、特に中位(脚部上平～16cmの位置)に顕微。内面は底部から底部7cm程の部分が黒褐色に色づく。コナデ?	7.5YR6/6 橙 やや暗赤 白微～暗緑多、白・赤微粒少、赤微質	北東部床直上4cmと北西部床直上8～10cmが接合 口はほぼ完存、脚中位5、12、19
19 土師器 甕	口 復 17.4 高 残 14.9	外面製部上平縁～密な縦のミガキ。製部の突起は粘土割付けではなく、製部の粘土割付け時、すでに作られていたものと見られる。突起はヘラで成り成されたもの。口縁部ともミココナデされる。ヘラ微は明瞭に見える。内面製部上平はヘラナデ。特に上端は粘土の磨滅が目明瞭。口縁部ヘラナデのヨコナデ。ミガキが施されている可能性はあるが、表面磨滅のため不詳。	10YR7/4 白～黄赤 やや暗赤 白・赤微粒多 やや微質	北野塚床直上4～11cmが接合 口一部、脚上平1/6弱 23、25、C一括

SG5区 SI-6 (第286～288図、写真図版23・24・177・178)

【位置】SG5区北部の17-15・16グリッド。古墳後期のSI-4が北東部、中期のSI-5が北西にある。南西部で古墳中期のSI-95を切る。西壁中央を試掘トレンチに割られる。

【規模と形状】東西7.09×南北6.95mの方形で中輪線はN-13°-W。壁は直線的に外傾し、残存壁高は2～21cm。床面はほぼ平坦でローム粒・塊の多い暗黄褐色土で床全体を貼床し、硬化部はないが全体に締まる。掘方は床面から深さ6～18cmで、底面に緩い凹凸がある。写真を見ても、SI-95を切る部分の床は、他部分より黒色土の比率が多い。

主柱穴はP1～P4の4本。P1は径47×67×深さ49cm、P2は径52×54×深さ51cm、P3は51



第286図 権現山遺跡 SG5 区 SI-6(1) 遺構

×56×深さ58cm、P4は径57×70×深さ61cm、P1-P2間が3.83m、P3-P4間が3.88m、P1-P4間が3.80m、P2-P3間が3.89mの方形配置。カマド前面の貼床下で確認したP6は径22×25×掘方底面から深さ36cmで、土層は不明。

壁溝D1～D4がほぼ全周し、北壁際と西壁南部で一部途切れる。断面U字状で幅13～22cm、深さは床面から5～13cm。西壁に対して直角にならないが、壁溝D1がP3方向に折れる部分は間仕切溝の可能性もある。

北東隅の貯蔵穴P5は東西軸の隅丸長方形で96×111×深さ32cm。底面は皿状、壁はなだらからで西側に緩い段がある。覆土はレンズ状に自然堆積し、1・2層に炭や焼土粒を少し含む。

〔カマド〕北壁中央にある。両袖幅110cm、煙道先端から袖先端まで125cm。暗褐色貼床土の6層で掘方を10～20cm埋め戻した上に灰褐色粘土の5層で袖を構築し、内面は被熱で焼土化が著しい(4層)。両袖先端に土師器甕を各1個倒立させ(25・26)、口縁部東向きの人れ子状に差し渡し、焚口天井を作った別の甕2個(24・30)がそのままゆっくりと崩れた可能性がある。西袖先端に倒立した甕26は底部を割ったように観察され、東側の甕25と高さを揃えるため加工した可能性がある。両袖先端の甕内部にはしまりのない均質な土を人為的に入れ、堅く突き固めてはいない。西袖の甕内部は焼土小塊・粒と土師器片を少量含む黒色土、東袖の甕内部はローム粒の多い暗褐色土であった。

火床はほぼ平坦で、煙道にかけて焼土化が著しい(4層)。架口部には、中軸より若干西側に寄って長20cmの河原石の支脚が直立する。南側にある土師器甕22を掛けていたかもしれない。煙道は北壁より40cmほどU字状に掘り、貼床と同じ土層で埋め戻して整形後は20cmほど壁外に出る。炭化物多量と焼土少量を含む黒褐色土の3層が火床直上に薄く流入堆積し、その上の焼土化が著しい2層が天井内壁、焼土化した粘土主体の1層が天井崩落土と思われる。

〔覆土〕覆土はしまりのあるローム粒・塊を少量含む暗褐色土。2層(壁溝埋土)は整理作業時に与えた土層番号で、詳細な特徴は不明。現地調査時の図面では壁溝のうち片方だけが貼床よりも下層として図化されていて不合理なため、断面図を修正した。

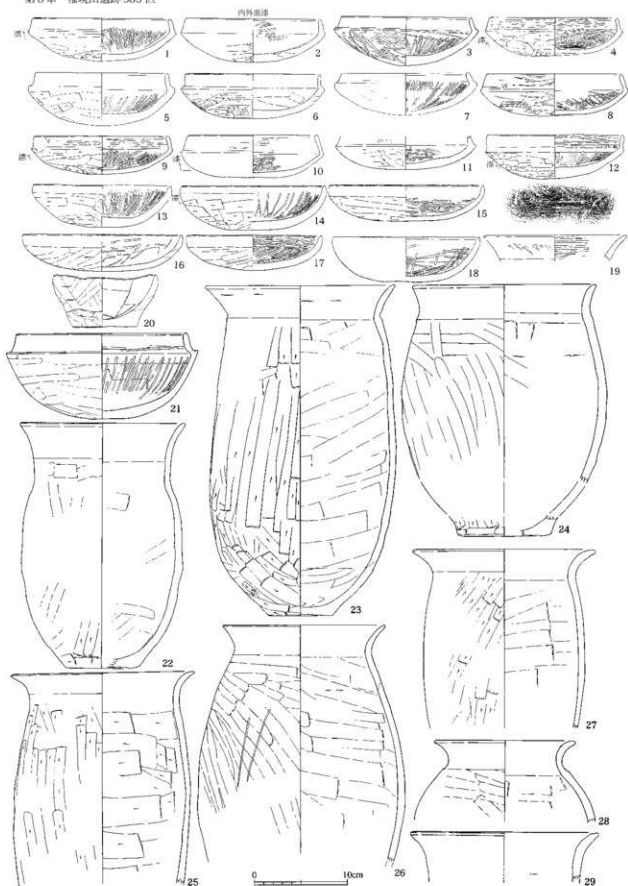
〔遺物出土状況〕カマド・貯蔵穴とその南側付近に遺物が多い。北西部にも安置状態の土器や石製白玉がある。11の杯は北東部の貼床下で出土した。

〔出土遺物〕遺物量が多い。身模倣形杯・半球形杯・長胴甕が主体で、壺・鉢・小形土器などが少量ずつある。古い時期の遺物もあり、重複するSI-95から混入した可能性があるが、遺構間で接合できたものはなかった。図化以外に甕が底部で数えて6個体分あり、そのうち3個体程度が長胴甕である。杯は図化以外に身模倣形が2個体、半球形杯が7個体分ある。図化以外の土師器1,357片・11,118gの内訳は杯272片・2,328g、高杯48片・518g、壺甕類1,033片・8,185g、甕4片・87g。粘板岩製の白玉と剥片がある。粘板岩製品はSG5区ではSI-14と低地部古墳時代包含層に白玉、SI-17に砥石、SI-25に模造品、SI-116・137に剥片がある。また、SG10区ではSI-20などに白玉、SI-47などに模造品がある。

第164表 権現山遺跡SG5区SI-6出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 4.5 最大 15.6	外面口縁部コナデ。体～底部ケズリのち体部光沢を持つナデ。内面口縁～体部コナデのち体～底部放射状の密なミガキ。内面クレーター状の剥離あり。内面全体・外面口縁～体部塗土仕上げ。口縁端部の大部分が磨滅・欠損している。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや暗い 白・灰色礫と白微粒 少。透明微塵質 少/少硬質	カマド西側床土4cm 口～体一部欠 94
2 土師器 杯	口 径 14.0 高 4.6 最大 15.3	外面口縁部コナデ。体～底部ケズリのち体部ナデ。内面口縁～体部コナデのち口縁部傾方向のミガキ。体～底部多方向の密なミガキ。組織の内面などから薄く剥がれやすい土質であり、面多くは剥離のため欠けている。内外面全面塗仕上げ。	2.5YR8/2 灰白 密質 灰色礫と白・黒微塵と白 砂粒微塵 やや硬質	P1付近床土6cmと北部 床土6cm 口～体1/5弱。底一部 欠損。内面剥離 11、46、97欠
3 土師器 杯	口 13.7 高 5.1 最大 15.2	外面口縁部コナデ。体～底部ケズリのち面から多方向のミガキ。内面口縁コナデのち体～底部放射状の規則的な線ならぬミガキのち体部縦方向の密なミガキ。口縁部付着を中心に、焼熱のため赤変、表面剥離あり。口縁～体部一部灰白色粘土付着。口縁端部の大部分が磨滅・欠損している。	7.5YR7/0 粉 やや密質 白・黒・透明微粒 少、砂粒微塵 硬質	カマド内 口～体2/3弱。底完存 カマド3

第8章 権現山遺跡SG5区

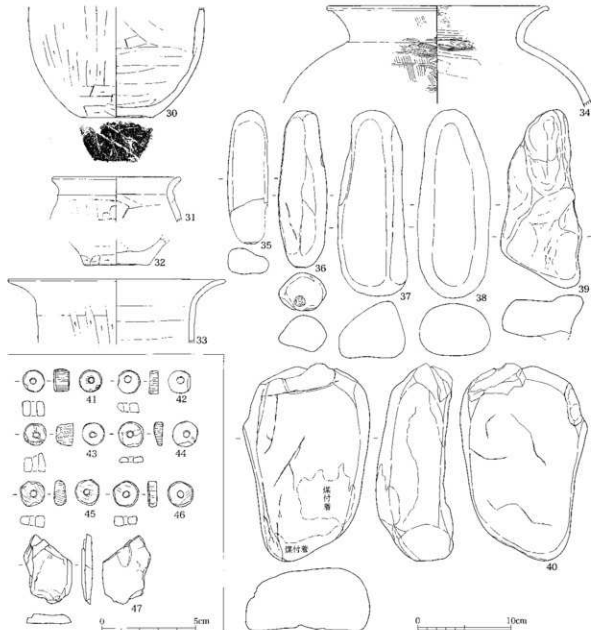


第287図 権現山遺跡SG5区SI-6(2)遺物

4	土師 杯	口 13.3 高 4.0 最大 14.3	外面口縁部コナデのちろみのミガキ、体~底部ケズリのち底部突起を持つナデ、いびつな丸底。内面コナデのち体部上端~口縁部縦方向のミガキ、体部多角形状。底部~方向のいびつな密なミガキ。内面でミガキが揃えられない部分はほとんどない。縁飾は少ないが、内面全体、外面口縁~体部全仕上り。	I0YR8/3 淺黄褐色 やや暗褐色 白微塵、黒・透明 粗粒と細粒微塵	北西内床土7cm ほぼ円形 2
5	土師 杯	口 14.0 高 5.5 最大 15.5	外面口縁部コナデ、体部上端ナデ、体~底部ケズリのちケズリ、内面体~底部ヘラナデのち口縁~体部コナデのち体~底部放射状の規則的な線なミガキ。	5YR5/6 明茶褐色 やや暗い 白・黒・透明粗粒少 赤粒微塵	カマド東側地上とカマド東側土12cm 口~底1部欠 51、118
6	土師 杯	口 復 14.2 高 復 4.7 最大 復 15.2	外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのちケズリ、クローラー状のケズリ堀、内面口縁部コナデ、体~底部ヘラナデ。	I0YR6/3 に近い黄褐色 暗赤 粗粒少、白微塵~細粒微塵	北西床土9cm 口~底1.4部欠 82、表裏
7	土師 杯	口 復 13.4 高 4.4 最大 15.0	外面口縁部コナデ、体~底部はほぼ全面が細かく割裂しているが、ケズリと見られる。内面口縁部のち体~底部放射状の密なミガキ。口縁部の大部分は削滅し、内側に陥没する面となっている部分が多い。体~底部は、外面は全体に細かく割裂、内面はクレター状に割裂。	5YR6/8 暗 やや暗い 白・黒・透明粗粒~粗粒少 赤粒	新設P5上方の床~土1部 口~底1.2部欠 32
8	土師 杯	口 14.1 高 4.4 最大 15.6	薄手・破片状態。外面口縁部コナデのち横方向の線なミガキ、体~底部ケズリのち密なミガキと横方向のミガキ。内面口縁部コナデ、体部上平口コナデ、体部下平~底部ヘラナデのち底部~方向の密なミガキ、体部多角形状の密なミガキ。内・外面全仕上り。	I0YR2/1 黒 やや暗褐色 黒粒~細粒多、白・透明粗粒少 赤微塵	中央床土7cmとカマド南側5cm 口2/3部欠、体一部欠 4、6、77
9	土師 杯	口 14.2 高 4.1 最大 15.0	外面口縁部コナデのちわずかに横方向のミガキ。縁は割削、体~底部ケズリのち突起を持つナデ、内面コナデのち口縁部縦方向の線なミガキ、底~体部多角形状の密なミガキ。内面全体、外面口縁~体部全仕上り。	I0YR4/1 暗灰 暗赤 透明粗粒多、白微塵少 赤粗粒微塵	北西内床土4cm埋没 完全形 1
10	土師 杯	口 復 13.7 高 4.5 最大 復 15.1	外面口縁部コナデのちコナデミガキ。表面は細かく割削し、ミガキの密度は高。体~底部ケズリ、表面は細かく割削しており、調整不詳。内面口縁部コナデのち体~底部放射状の密なミガキ、ミガキは密だが、体部縦方向のミガキ、体~底部のミガキは稀薄で、単位をとらえにくい。内面全体、外面口縁~体部全仕上り。	I0YR6/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・黒・透明・砂微塵 粗粒多、白・黒・透明粗粒微塵	新設穴P5床土21cmと 砂吹高床土5cm 口~体1.5部欠、底定存 37、38、132、P5貯穴
11	土師 杯	高 復 3.5 最大 14.8	胎土・表面とも黒褐色。外面口縁部コナデのちわずかに横方向のミガキ、体部ケズリのナデ。内面口縁~体部コナデのち体部多方向のミガキ。	I0YR7/3 に近い黄褐色 やや暗褐色 粗粒少、粗~細粒少 赤微塵 やや軟質	北東部埋没床土 口~底1.4部欠 131
12	土師 杯	口 14.3 高 4.7 最大 14.6	外面口縁部強いコナデ、体~底部ケズリのち横方向の突起を持つミガキ、体~底部外面には、突起を削いだかと思われる部跡。内面コナデのち口縁部縦方向の密なミガキのち体~底部放射状のミガキ。比較的密だが、体部は密でない部分も残る。ケズリが不十分なため底は厚く、外が底定痕のところあり。	7.5YR6/4 に近い 暗褐色 黒粗粒と粗粒少、赤微塵 やや軟質	東部床土8cm 口~底2/3部欠、底定存 10
13	土師 杯	口 14.5 高 4.6 最大 14.8	胎厚厚く、重い。外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのちケズリ。丸底だが、底部付近のケズリはやや突出、いびつな平底のようになっている。内面コナデのち口縁部~体部コナデのち放射状のミガキ、ミガキは密だが、ミガキの面にほぼ平行に隙間が空いている。口縁部表面の割削・割削痕が深い。土師~体部内外面一部埋没付。	2.5YR6/8 暗 やや暗褐色 粗粒と粗~細粒少 赤微塵 白微塵	中央床土4cm ほぼ円形 5
14	土師 杯	口 復 15.2 高 4.6 最大 復 15.6	外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのちケズリ。内面ヘラナデのちコナデのち放射状の規則的に線なミガキ。外面口縁~体部、内面全体仕上り。	5YR5/6 明茶褐色 やや暗褐色 白・黒・透明粗粒多、粗~細粒少 赤微塵	カマド東側地上4cm 口~底2/3部欠 108
15	土師 杯	口 復 16.2 高 3.8 最大 復 16.4	外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのち突起を持つナデ。内面ヘラナデのちコナデのち体部縦方向~底部~方向の密なミガキ。ミガキの強度は薄く、ミガキの方向が判明しない部分も多い。口縁~体部外面一部埋没付。	I0YR7/3 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・透明粗粒多、粗粒少、白微塵 微塵	新設穴P5付床土1.12cmと中央床土5cm 口~底1/3部欠 43、58
16	土師 杯	口 16.8 高 3.9	外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのち丁寧なナデ。内面ヘラナデのち口縁~体部コナデのちやや密なミガキ。ミガキは横方向を基本とした多方向のものと見られるが、1本の単位がつかぬほど複雑はわずかであるため、本明細。	I0YR6/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 黒粗粒多と白・透明粗粒多、白微塵粗粒少 赤微塵	北西部上3cmとカマド西側土17cm 体~底2/3部欠 63、64、87、表裏
17	土師 杯	口 14.1 高 4.2 最大 14.4	口縁部端が細かく欠損する。外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのち突起を持つナデ。内面コナデのち口縁部縦方向のミガキのち体~底部~方向の密なミガキ。外面口縁~体部全仕上り。	I0YR6/3 に近い黄褐色 やや暗褐色 粗粒少、白・透明・黒粗粒微塵 微塵	北西内床土5cm ほぼ円形 7
18	土師 杯	口 17.8 高 4.7	外面口縁部コナデ、体~底部ケズリと思われるが、ほぼ全体が細かく割削しているため不明。内面ヘラナデのち口縁~体部コナデのちミガキ。内面を割削、割滅しているところが多いため底数は判明しえないが、ミガキは全体に露で、放射状のものも横方向のものが揃えられないと見られる。胎土は白白色と明褐色土がマール状になるもの、内面黒色埋没、仕上り1部の可能性もある。	7.5YR6/4 に近い 暗褐色 赤粗粒多、粗粒少 赤微塵	カマド西側地上3~13cm 体~底定存 115
19	土師 杯	口 復 15.2 高 復 2.8	外面口縁部コナデのち線な密な方向のミガキ、体部ナデ。内面口縁~体部コナデのち横方向の密なミガキ。内面黒色埋没。	2.5Y5/2 暗灰黄 粗粒多、白・透明粗粒少 赤微塵	中央床土10cm 口1/4部欠 微塵
20	土師 杯 小形土器	口 10.8 高 5.5 底 6.7 最大 11.2	縁形、口縁土境のみあり。外面口縁~体部深いナデ。縁縁部面に残る。底部ナデ、平底。内面ヘラナデ。	I0YR7/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 白微塵と透明粗粒少、透明微塵	北西床土6cm 口~体1.2部欠、底定存 81
21	土師 杯	口 17.8 高 9.0 最大 20.2	外面口縁部コナデ、体~底部ケズリのナデ。体部のケズリ、ナデは横方向、底部付近は多方向。内面口縁部コナデのち一部縦方向のミガキ、体部コナデのち体~底部ヘラナデのち放射状の規則的なミガキ。内面~底部はクレター状に割削して調整不詳。	5YR/7明赤褐色 やや暗褐色 粗~微粒少、赤・透明粗粒多、白微塵粗粒少 赤微塵	中央床土4cm 完全形 3
22	土師 杯	口 復 17.4 高 復 25.9 底 7.8	胎土は砂~びく、もろい。内外面とも、表面の割削痕が深い。口縁部内外面口縁部コナデ、割削は左上縦方向のケズリで、上端と下端の横方向のケズリ、底部ケズリ。平底だが、少くばく。内面割削~底部ヘラナデ。側部下平~底部~面は、縁跡により変色しているところあり。口縁~体部外面の各所に灰白色粘土付着。	I0YR7/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 粗粒多、白・透明粗粒少、赤微塵 赤微塵	カマド東側地上4cmとカマド東側土11.4部欠、側下平1.3部欠、口~体1.1部欠、カマド下、カマド下
23	土師 杯	口 20.0 高 34.9 底 6.8	胴部最大径は19.6cmで、口縁部径よりわずかに小さい。口縁部内外面口縁部コナデのち字に反する。胴部縦方向のケズリのち側下平斜め方向のケズリ。底縁部は字の軽いつまみ。平底で、わずかにくぼむ。内面割削~底部ヘラナデ。胴部外面一部に灰白色粘土付着。胴部内外面一部、クレター状に割削。 [注記]1108、カマド1、カマド8、カマド	5YR6/8 暗 やや暗褐色 粗粒多、白・透明粗粒少、赤微塵 赤微塵	カマド東側地上16cm埋没 口1/4部を構成し、縁位付土。カマド東側土4cm、側下平4cm上平1.2部欠、胴部土1部~底ほぼ完全 注記は左欄

第8章 権現山道跡 S5区

24	土師器 土師 底 高 26.5 底 高 2.8 最大 復 21.4	砂質の粘土のため、外・内面の質感が著しく、調整不明瞭な部分多い。外面割線ナデで、上半は中位、内面は斜め方向、割線下端ケズリ。底部ナデで、下部ナデに浅くくぼむ凸筋。口縁部内外面ヨコナデ、内面割部ヘラナデ。断面ナデ。外面割部には、各所に灰白色粘土付着。外面口縁部一部に灰白色粘土付着。口縁上部4.5mm。割下部一部、底1.4mm。辻記付、114、143、カマド7、カマド9、カマド10	5YR5/6 明色焼 やや暗い 白・赤緑～黄緑 やや硬質	カマド西側扉面より17cm下・床土15cm、26の土から横位の状態で、カマド裏輪と中央部床土5cm 遺存・辻記は左欄
25	土師器 底 高 19.4 底 高 22.5	外面割部タケケズリ。組織単位の内中位割部に残る。内面割部ヘラナデ。割部調整後口縁内外面ヨコナデ。割部外面中位以下は、黒熟赤変し表面割落が見え、内内面は部分的に灰白色粘土が付着。	10YR6/4 に近い黄緑 粗い平透 明細～細多量、白緑と黒～黄緑 砂粒少、赤緑粒微量 やや硬質	カマド裏輪 口～割上平1/2部、割中位1/3周 9、137、138、K9 0
26	土師器 高 17.1 底 高 17.8 最大 復 24.9 最大 復 21.8	口縁部内外面ヨコナデ。外面割部斜め方向の細ケズリ。中位以下は底土2本あり。内面割部ヘラナデ。割部外面全体に灰白色粘土付着。カマドに使用した粘土か。 [遺存付]口～割上平は凸筋。割中位1/2周 辻記付10、96、134、143、K10、表裏、カマド	10YR6/4 に近い黄緑 粗い 灰色・透明細粒少、白・赤・砂粒と黒 やや透明・透明明～黄緑粒微量 やや硬質	カマド西側扉面より6～17cm下で底土を割った形で底位出土。中央部床土8cmと北側床土4cm 遺存・辻記は左欄
27	土師器 底 高 19.2 底 高 19.0	口縁部内外面ヨコナデ。外面割部縦方向のケズリ。ケズリの一部は、ヨコナデ後に塗される。内面割部ヘラナデ。割部中位黒熟により赤変。	7.5YR6/6 粗 粗い 暗緑～透明細粒少、砂粒少、白・黒・赤粒微量 やや硬質	北側扉面直上と北側床土2cm 口～割上平1/4周 52
28	土師器 高 15.0 底 高 8.5	口縁部内外面ヨコナデ。外面割部上半部ヘラナデのちナデ。内面割部ヘラナデ。口縁部内面上半は、表面の割落著しい。	10YR6/4 に近い黄緑 粗い 灰色・透明細粒少と白・黒 粗粒少	中央部床土5cm 口～割上平1/4周 52、90
29	土師器 底 高 20.0 底 高 5.3	内外面とも口縁部ヨコナデ。口縁部一部に灰白色粘土付着。	2.5YR6/8 粗～やや粗い 黒緑 粗多、砂粒と白・赤粒～細粒微量 やや硬質	カマド裏輪上2～3cm 口1/3周 107、120、126、表裏
30	土師器 高 11.6 底 高 7.8 最大 復 18.6	外面割部タケケズリの下端ヨコケズリ。底部木葉面のちヘラナデ。中央がわずかにくぼむ。内面割～底部ヘラナデ。割部に積み上げ止痕あり。休止後の積み上げはやや硬で、休止前に比し厚膜は厚くなる。休止後の粘土は、前のものより硬質が強い。割部外面が黒熟赤変。クレタースト状の割線あり。	2.5YR6/8 粗 やや暗い 粗～細粒多量、砂粒と赤緑粒微量 やや硬質	カマド裏輪上4cmとカマド裏輪 割下平～底2/3周 108、141、142、K9
31	土師器 底 高 13.6 底 高 4.8	緻密な粘土であり、脆くなる可能性もあろう。口縁部内外面ヨコナデ。外面割部ナデの縦ならぬ縦ならぬ縦な灰白色粘土付着。組織単位以下は、内面割部ヘラナデ。	7.5YR7/7 粗 暗赤 赤粒～粗 やや硬質	南部土1.8cm 口～割上平1/3周 84
32	土師器 底 高 2.8 底 高 7.0	外面割部下端ナデのちケズリ。底部ケズリで、中央ややくぼむ。内面割部下端～底部ヘラナデ。内面表面の割落著しい。	7.5YR6/6 明色 やや暗い 平透明細粒多、白・透明明細と粗砂粒少、黒粒微量 やや硬質	中央部床土1cm 底土50分
33	土師器 底 高 23.0 底 高 17.0	外面割部縦方向のケズリのち口縁部ヨコナデのち割部縦方向の縦ならぬナデ。内面口縁部ヨコナデ。割部ヘラナデ。内面は表面の割落が著しく、ミガシの有無は確認できない。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗い 白・赤・砂粒と、白粒と黒粒～細粒微量 やや硬質	カマド南側床土9cm、カマド裏輪上2cmとP1付高底土6cm 口～割上平1/6周 11、72、121、表裏
34	土師器 底 高 23.6 底 高 10.6	外面口縁部一部は5本/1cmのハケのちヨコナデ。割部上半5本/1cmのハケのち縦ならぬ縦のミガシ。内面口縁部ヨコナデのち縦ならぬ縦のミガシ。割部下端5本/1cmのハケのち横方向のミガシ。割部上半平ヘラナデ。口縁部内面は、ハケのちヨコナデの可能性あり。内面は、表面から粘土まで、黒色処理をしたような黒色。	10YR6/4 に近い黄緑 やや暗色 透明明細粒少、白粒～細粒と粗～細砂粒微量 やや硬質	北側扉面上7～14cm 割上平1/4周 30、38、45、48、76、カマド
35	石器 幅 14.2 厚 4.3 幅 2.6	特に加工の痕跡なし。現存重量 218.9g。	5Y6/2 灰オリーブ やや暗い 安山岩	高野原床土5cm 一次火 86
36	石器 幅 16.6 厚 5.1 厚 3.8	先端と側面の2ヶ所に縦行痕あり。このほか割下平の高側縁は表面が割れており、わずかに削りだされている可能性がある。重量 322.9g。	7.5Y6/1 灰 やや暗い 安山岩	中央部南寄り床土4cm 完形 20
37	石器 幅 19.6 厚 7.0 支脚 厚 6.0	特に加工の痕跡なし。全体に褐色を呈しており、表面全体が黒熟していると思われる。重量 1272.7g。	5Y6/1 灰 やや暗色 流紋岩	カマド内床土18cm 完形 カマド13
38	石器 幅 20.0 厚 7.7 厚 6.7	特に加工の痕跡なし。重量 1314.8g。	10YR7/3 に近い黄緑 粗い 安山岩	カマド裏輪上2cm 完形 112
39	石器 幅 18.6 厚 8.7 幅 6.6	特に加工の痕跡なし。現存重量 1008.1g。	2.5Y7/3 浅黄 粗い 礫石	一部床土5cm 一次火 68
40	石器 幅 20.7 厚 13.4 厚 6.7	一部傷付。現存重量 2940.2g。	2.5Y7/3 浅黄 やや暗色 礫石	カマド西側床土16cm ほぼ完形 89
41	石製彫刻品 白玉 径 1.18～ 1.12 厚 0.80～ 0.79	表面両端は彫削に当たった割線面と見られ、研削される。側面は穿孔と同方向の切削加工面をそのまま残す。表面面の孔径の差から、片面穿孔と見られる。重量 1.51g。孔径 0.33～0.30mm。	N5/ 灰 磨面 粘板岩(軟質)	西部床土5cm 完形 18
42	石製彫刻品 白玉 径 1.21～ 1.18 厚 0.48～ 0.39 重 0.86	表面両端は彫削に当たった割線面と見られ、表面は丁寧に、裏面はわずかに研削される。表面は比較的丁寧に研削されるが、裏面はくぼむかにも削られた程度で、42のように、欠損品の両方か。加工中に薄くなってしまったものを完成品とした可能性がある。側面は穿孔と平行する切削加工面をそのまま残すほか、裏面からの小さな割線がある。薄いつの孔径の差は既述の41が、他の白玉から推測すれば、片面穿孔の可能性が高い。孔径 0.29～0.27mm。	5R5/1 青灰 磨面 粘板岩(軟質)	西部床土13cm 完形 19
43	石製彫刻品 白玉 径 1.16～ 1.10 厚 0.94～ 0.74 重 1.40	表面両端は彫削に当たった割線面と見られるが、表面は段差を持って、裏面は凹面となって研削される。研削は表面がやや丁寧に、裏面はくぼむかにも削られる程度で、42のように、欠損品の両方か。加工中に薄くなってしまったものを完成品とした可能性がある。側面は穿孔と平行する切削加工面をそのまま残すほか、裏面からの小さな割線がある。薄いつの孔径の差は既述の41が、他の白玉から推測すれば、片面穿孔の可能性が高い。孔径 0.29～0.27mm。	2.5C/7/1 明オリーブ灰 磨面 粘板岩(軟質)	西部床土12cm 完形 20
44	石製彫刻品 白玉 径 1.37～ 1.28 厚 0.42～ 0.25 重 0.80	表面両端は彫削に当たった割線面と見られ、表面は段差を持って、裏面は凹面となって研削される。研削は表面がやや丁寧に、裏面はくぼむかにも削られた程度で、42のように、欠損品の両方か。加工中に薄くなってしまったものを完成品とした可能性がある。側面は穿孔と平行する切削加工面をそのまま残すほか、裏面からの小さな割線がある。薄いつの孔径の差は既述の41が、他の白玉から推測すれば、片面穿孔の可能性が高い。孔径 0.29～0.27mm。	N5/ 灰 磨面 粘板岩(軟質)	西部床土7cm 完形 21



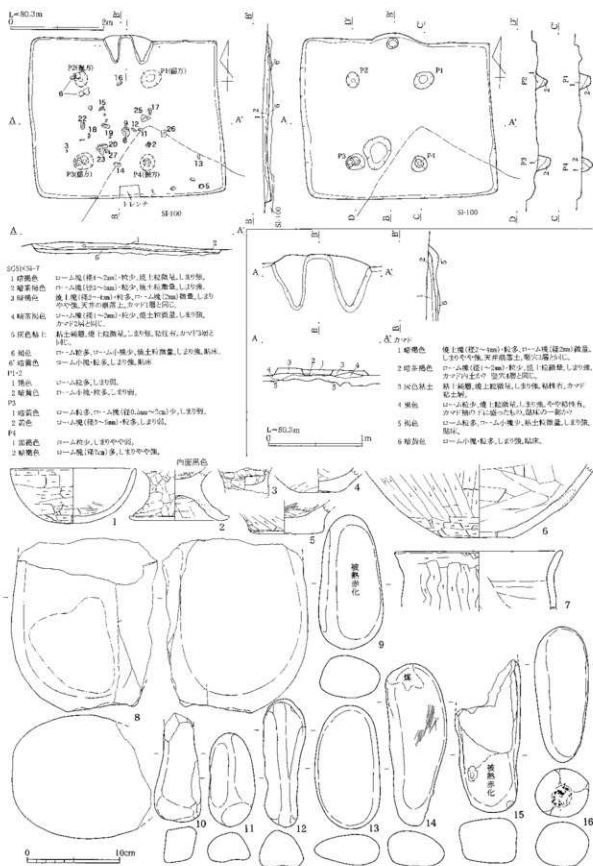
第288図 権現山遺跡 SG5区 SI-6(3) 遺物

45 石製槌製品 白玉	径 1.39 ~ 1.28 厚 0.61 ~ 0.37	表裏両面は磨理に当たった剝離面と見られ、両面ともほぼ同様に研削される。側面は切附加工痕と、切別に伴う小さな剝離面とが残る。表裏面の孔径の差から、片面穿孔と見られる。重量 1.26g、孔径 0.30 ~ 0.29mm。	S36/1 青灰 磨理 粘板質(軟質)	西部床上 8cm 定形 22
46 石製槌製品 白玉	径 1.34 ~ 1.29 厚 0.53 ~ 0.37	上下両面は磨理に当たった剝離面と見られ、両面ともほぼ同様に研削される。側面は切附加工痕と、切別に伴う小さな剝離面とが残る。表裏面の孔径の差から、片面穿孔と見られる。重量 1.08g、孔径 0.31 ~ 0.30mm。	N4 灰 磨理 粘板質(軟質)	西部床上 6cm 定形 23
47 石製 銅片	長 3.2 幅 2.4 厚 0.5	磨理面に当たって剝離されたもの。加工痕は全く見られない。石製槌製品の素材だろうか。重量 4.55g。	N5/ 灰 磨理 粘板質(硬質)	北部床上 8cm 定形

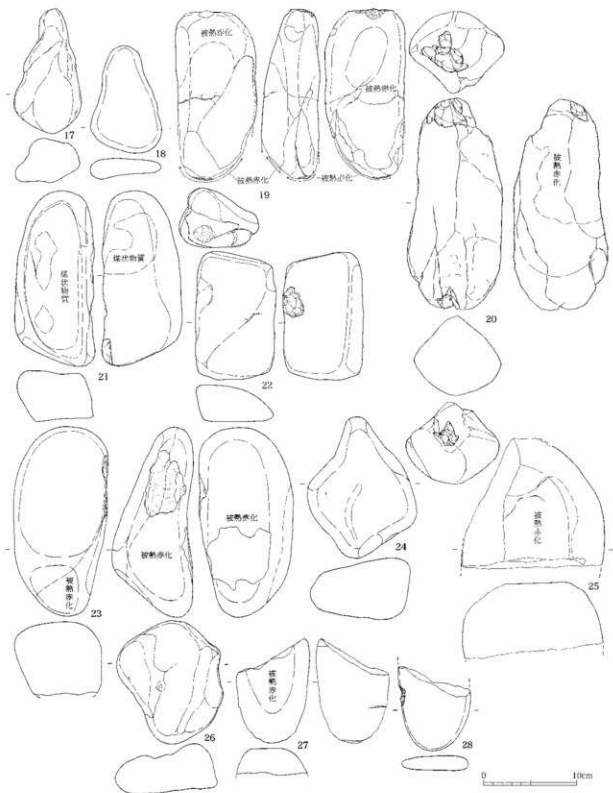
SG5区 SI-7 (第289・290図、写真図版24・25)

【位置】SG5区北部の16-16、17-16グリッドに位置する。古墳時代の円筒形土坑SK-47が西側に近接する。南東で古墳中期のSI-100を切る。

【規模と形状】東西4.04×南北3.35mの東西に長い長方形で中軸はN-3°-W。壁はなだらかに外傾し、残



第289図 権現山遺跡SG5区 SI-7(1) 遺構・遺物



第290図 権現山遺跡 SG5 区 SI-7 (2) 遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

存高は6～13cm。床はほぼ平坦で、東側が少し低い。床面下4～11cmの掘方底に細かな凹凸があり、ローム粒・塊を含む褐色土で全体を貼床する。P3の東で75×58cm×掘方から深さ15cmの楕円状窪みを確認した。

主柱穴P1～P4は床面で確認できず、貼床下の掘方で確認した。P1=径44×35×深さ25cm、P2=32×27×深さ23cm、P3=40×34×深さ31cm、P4=34×31×深さ24cm（いずれも掘方からの深さ）。P1-P2間が1.48m、P3-P4間が1.34m、P1-P4間が1.77m、P2-P3間が1.71mで、南北柱間が東西柱間よりやや長い方形配置である。

[カマド]北壁中央にある。両袖幅106cm、煙道先端から袖先端まで60cm。貼床上に黒色土の4層を敷いた後、灰色粘土の3層で袖部を作る。火床面付近はほぼ平坦で、煙道は北壁より若干掘り込む程度である。1層は焼土塊・粒が多く、天井内壁の崩落土と考えられる。

[覆土]下層よりも上層に径3～5mm大のロームが多く混じる。

[遺物および出土状況]建物中央部に編物石と礫が多い。土師器は少なく、甕が主体で杯または鉢などが少し混じり模倣杯(?)は1～2片だけみられた。2は古墳時代終末期に極小化する以前の、後期後半の内面炭素吸着する高杯。土師器壺甕類は図化以外に底部が3個体分あり長胴甕はほとんどない。7は内外面を磨かない甕。編物石と被熱礫が多い。緻密硬質なホルンフェルスの砥石(28)は、SG5区ではSI-7.15,22.29,100,116とSD-101・SK-218にあり、SG10区SI-12などにもある。ホルンフェルス割片はSG5区SK-141,143にある。図化以外の土師器176片・1.754gの内訳は、杯30片・205g、高杯1片・14g、小形土器3片・42g、甕壺類140片・1.478g、甕2片・15g。SI-100から混入した古い時期の遺物を少量含むかもしれない。

第165表 権現山遺跡 SG5 区 SI-7 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・装成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.5 高 径 5.8	全体に磨減な調整。赤褐色土と白色土がマーブル状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデの口縁～底部ケズリ。口縁部はほとんど削られており、口縁部のヨコナデは、こむぎあししからぬ。内内面～底部ヘラナデの口縁～体部ヨコナデのちね～底部わずかな多方向のミガキ。ミガキの単位は不明だが、充分は不明。	5YR5/6 明赤釉 や中細白 白粉粒少、白粉粒と赤粉粒混 や中硬質	口～底 1/2 周
2 土師器 高杯	高 径 5.3	外面脚部方向のケズリのチナデ。脚部上平は、方向のケズリのため、細く上げ体取られたようになっており、ナデによっても消されずに残っている。内面杯部ナデ・ヘラナデのちねらミガキ。ミガキは口縁部方向に集まるものが多い。脚上端ナデ、脚中位～下平ヘラナデ後ヨコナデで、中位は粗磨面が顕著。杯内面黒色処理。	5YR6/8 暗赤 や中細白 白粉～微粒少、黒・透明磨面微 や中硬質	中央部床土8cm 杯底～脚上平完存、脚下半 1/6 周 2/7
3 土製品 小形土器	高 径 2.6	丸い鉢形になるものと見られる。外面口縁～体部ナデ。指面は粗磨面。内面ナデで、指面は粗磨面。体～底部の整形のうち、口縁部を新たに削り付けたものと見られる。内面には粗磨面が明瞭に残る。	10YR5/2 灰青釉 や中細白 赤・黒・半透明粒多、白・透明明少 や中硬質	西部床土7cm 製 1/3 周、底内面のみ 完存 9
4 土師器 甕	高 径 2.3 底 径 4.2	白色土がマーブル状に混じる胎土。外面脚部下端ケズリ、底部は高いナデで、粘土の継ぎ目も残る。くぼみ底。内面脚部下端～底部深いヘラナデ。	5YR5/6 明赤釉 や中細白 白粉～微粒少、黒・赤・透明明少 や中硬質	製下平～底完存
5 土師器 甕	高 径 3.2 底 径 7.8	外面脚部下端深いケズリ、底部ナデ。底部は突出する平底で、中央へこむ。内面粗磨面。ナデの一部にミガキ粒のヘラナデあり。外面一部削付着。内面底部全体にコガ付着。	5YR5/6/3 に近い黄緑 暗赤 白粉～微粒多、黒磨面微 硬質	中硬質 底完存 14
6 土師器 甕	高 径 7.7 底 径 7.4	外面脚部下平～底部ケズリ。内面脚部下平～底部ヘラナデ。脚部の粘土層も上げ体取による接合痕はケズリとヘラナデによりほとんど消しているが、体止前後の脚部の粗さが異なること、体止後に削りつけた粘土の剥離、断面に見る接合痕などに表れている。外面脚部一部削付着。	2.5Y6/3 に近い黄 や中細白・赤・透明・砂粒 少、白・砂粒～細粒微 や中硬質	P2 付近床土7cmとP2南 脚部床土6cm 製下平 1/2 周 2、3
7 土師器 皿	口 径 17.8 高 径 6.2	外面口縁部ヨコナデのちね部ケズリ、口縁部外面粗磨面あり。内面口縁部ヨコナデのちね部ナデ。	10YR5/7 明黄釉 暗赤 白・赤・透明粒多、黒 粗粒微量 硬質	口～脚上平 1/6 周
8 石器 砥石	長 18.4 幅 15.5 厚 13.0 重 5.29g	本来は、棒状の大體であって、残存するのは1/3くらいと推定される。表面中央付近が平滑な砥面であり、現存する砥面の中央にあたることから、欠陥被破石として使用されたものと見られる。裏面中央にも平滑な面があるが、こちらは表面と比べるとやや中粒、砥面とまでは言えない。	5Y7/2 灰白 粗磨 安山岩	中央部床土9cm 完形 20
9 石器 編物石	長 14.1 幅 6.8 厚 4.5	河原石。刃に加工の痕跡なし。ほぼ全体が被熱によりわずかに赤変している。重量 671.4g。	10YR5/3 に近い黄緑 暗赤 白・赤・透明磨面 底粒少	中央部床土5cm 完形 21
10 石器 編物石	長 11.1 幅 4.8 厚 3.5 重 315.6	河原石。刃に加工の痕跡なし。表面の色の変化はほとんどないが、下右側の欠陥は抜けはけとも見られるため、全体に被熱している可能性がある。上平の欠陥も被熱によるものかもしれない。	7.5Y7/1 灰白 安山岩	一部欠
11 土師器 編物石	長 9.8 幅 4.8 厚 3.3	河原石。刃に加工の痕跡なし。重量 223.4g。	2.5Y6/1 黄灰 や中細白 安山岩	中央部床土10cm 完形 23

12	石塔 断片石	長 13.3 幅 4.5 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 405.1g。	10BC3/1 暗青灰 やや細密 流紋状	中央部床土 8cm 宍形 22
13	石塔 断片石	長 13.0 幅 6.9 厚 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 412.7g。	5Y6/2 灰オリーブ やや細密 交代状	南東部 宍形 29
14	石塔 断片石	長 17.0 幅 6.0 厚 4.8	河原石。表面の一部磨損あり。砥石として使用か? 上部に僅かなような黒色物質付着。重量 691.7g。	10Y5/2 オリーブ灰 緻密 ホルンブルス	南西部土 6cm 宍形 28
15	石塔 断片石	長 縦 15.9 幅 6.0 厚 4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。広い範囲が焼熟により赤変しており、焼けはむけも2ヶ所見られる。上部の欠損も焼熟によるものかもしれない。残存重量 688.5g。	7.5Y5/2 灰オリーブ やや細密 交代状	中央部床土 6cm 一部分 宍形 16
16	石塔 断片石	長 14.3 幅 5.7 厚 3.1	河原石。下端は黒色物質が付着するほか、表面の磨滅が著しく、断面も見られる。素材の形状が変わるほどの磨耗はないが、砥石として使用されたことがあったと推測される。全体が焼熟変色?。	10YR6/6 明黄褐色 やや細密 交代状	北西部土 8cm 宍形 15
17	石塔 断片石	長 13.1 幅 7.1 厚 4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 431.7g。	7.5Y7/1 灰白 緻密 磨岩	中央部 宍形 24
18	石塔 断片石	長 11.3 幅 7.5 厚 2.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 239.8g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや細密 交代状	中央部 宍形 18
19	石塔 断片石	長 17.8 幅 8.5 厚 5.3	河原石。上下両端に磨打あり。全体に強く焼熟していると思われる。中に新しい赤変、中位にヒビが入るほか、全体に表面の剥離が著しい。重量 1256.0g。	5YR5/6 明赤褐色 やや細密 流紋状	中央部床土 3cm ほぼ宍形 19
20	石塔 断片石	長 22.4 幅 10.1 厚 8.7	大形。上下両端に磨打による剥離あり。表面に焼熟によると思われる赤変あり。重量 2195.3g。	10Y5/3 黄褐色 粗い 流紋状	中央部床土 6cm 宍形 20
21	石塔 断片石	長 18.5 幅 8.3 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。一部腐のような黒色物質付着。赤変してはいるが、焼熟しているのかもしれない。重量 1462.9g。	5Y6/2 灰オリーブ やや細密 流紋状	宍形
22	石塔 断片石	長 13.5 幅 8.6 厚 3.5	河原石。側面からの剥離1枚あり。全体が、焼熟により変色している可能性あり。重量 852.7g。	2.5Y5/2 暗黄褐色 やや細密 流紋状	中央部床土 5cm 宍形 17
23	石塔 断片石	長 20.0 幅 10.0 厚 7.5	表面を中心に広い範囲が焼熟・赤変しており、表面には焼けはじけも見られる。カマドに使用されていた可能性あり。側面の剥離は焼熟後のもの。重量 2215.3g。	2.5Y6/2 灰黄 やや細密 磨岩	中央部床土 6cm ほぼ宍形 31
24	石塔 断片石	長 14.8 幅 11.6 厚 6.9	河原石。特に加工の痕跡なし。一部黒色物質(燻か)付着。重量 1308.3g。	5YR5/4 にぶい橙 やや細密 交代状	宍形 一括
25	石塔 断片石	長 縦 13.8 幅 14.8 厚 縦 7.3	大形の破片の断片。表面中央の平坦面が焼熟のためか赤変している。残存重量 1855.0g。	10YR8/2 灰白 やや細密 流紋状	中央部床土 9cm 破片 25
26	石塔 断片石	長 13.1 幅 11.3 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 868.6g。	2.5Y7/2 灰黄 やや細密 磨岩	中央部床土 10cm 宍形 26
27	石塔 断片石	長 縦 11.0 幅 7.5 厚 縦 2.7	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は焼熟により著しく赤変している。残存重量 268.3g。	2.5YR4/3 にぶい赤褐色 やや細密 流紋状	中央部床土 6cm 破片 27
28	石塔 断片石	長 縦 7.8 幅 7.4 厚 1.6	河原石。左側縁に、磨打によるものとも見られる剥離1ヶ所あり。また、表面左側縁付着は、それ以外の部分に比べて平滑になっている。砥石として使用された可能性あり。残存重量 149.2g。	5Y5/2 灰オリーブ ホルンブルス	宍形 一部分 一括

SG5区 SI-8 (第291・292図、写真図版25・26・178)

【位置】SG5区中央部北寄りの15-16、16-16グリッドに位置する。東に古墳中期末～後期初めのSI-9が近接する。西半は調査区外。古墳中期末のSI-12を南側で切る。

【規模と形状】西半は調査区外となるが、平面方形と予想される。中軸線はN-10°-W。南北長5.03mで、東西長は2.74m以上。壁は直線的に外傾し、残存高は7～17cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。床面から掘方底面までの深さは2～14cmで、ローム粒・塊の多い暗褐色土で全体を貼床する。

本来は4本主柱穴で、東側柱穴と推定されるP1・P2を調査した。P1は径35×37×深さ26cm、P2は径30×34×深さ38cmで、P1-P2間は2.63m。貼床除去後、カマド前面でP4・P5、中央でP6、南東隅でP7の計4本を確認した。P4は径23×24×深さ13cm、P5は径24×26×深さ39cm、P6は径40×48×深さ55cm、P7は径24×27×深さ31cmで、P6は斜めに掘られる。北東隅の貯蔵穴P3は壁が緩く外傾する東西軸の隅丸長方形で52×79×床面から深さ32cm。底面中央の22×30×深さ5cmが竈口。P3覆土は自然埋没でローム粒が多い。

【カマド】北東主柱穴の位置から判断して、北壁中央やや東よりに位置する。両袖幅95cm、煙道先端から焚口まで128cm。貼床整形後に灰褐色粘土主体の8～11層で袖部を構築し、両袖先端に倒立した土師器裏7・8で焚口部を補強する。東側の土師器裏8が中央寄りの位置にあることがやや不自然で、現地調査時の所見ではカマド崩落時にずれたと考えられている。カマドを人為的に壊して裏を動かしたと考えることになるであろうが、そのように断定できるかどうかは不明瞭である。5～7層は焼土が多く天井内壁崩落土及び流入土、焼土粒が多い粘土の2・3層が天井崩落土と考えられる。煙道は北壁から凸字状に108cm突出し、火床面

からならだかに上がる。なお、掘方整形段階で、両袖基部に高さ3～5cmの地山を掘り残している。

〔覆土〕 レンズ状の自然堆積で、下層にローム粒が多く、第1・2層に炭・埴土を若干含む。

〔遺物出土状況〕 全域にある。東袖先端の裏(8)周辺に裏(6)、貯蔵穴の南東に潰れた丸壺(5)がある。

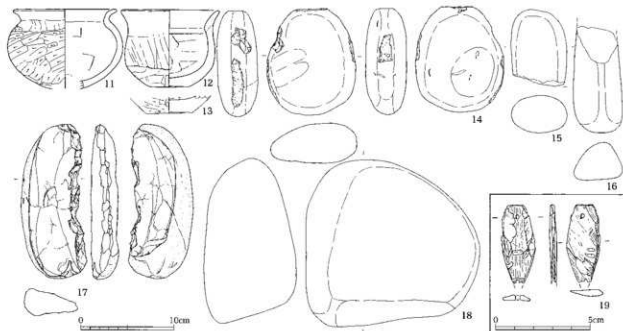
〔出土遺物〕 遺物は少ない。土師器は杯と甕が主体で、甕・鉢を少し含む。杯は漆仕上げが主体で、外面のミガキが衰退するが口縁部内面に横位ミガキが少し残る古墳後期中葉～後葉のもの。古墳中期後葉(本道跡編年3段階)頃かと思われる混入遺物があり、重複するSI-12からの混入品も含むかもしれない。土師器鉢の一部(11・12・13)と剣形石製模造品19は中期の混入遺物。滑石製模造品がSG5区SI-8・100・116とSD-44(混入品)・SX-118およびSG10区SI-30・64aなどにあり、粘板岩製模造品はSG5区SI-6などにある。図化以外の土師器168片・1.281gの内訳は、杯64片・387g、甕壺類103片・869g、甕1片・25g。

第166表 権現山遺跡 SG5 区 SI-8 出土遺物

番号 種別	大きさ 単位	特徴	色調 粘土・灰泥 (または材料)	出土状態 残存状況 注意
1 土師器 杯	口 13.8 高 4.4	外面口縁部ヨコナデ。体部下平ナデで、楕圓面残る。内面体～底部放射状の密なミガキあり。口縁～体上部端方向の密なミガキ。口縁～体外部外面・内面全体漆仕上げ。内面体～底部レータース状に剥落する。	7.5YR6/4 にぶい糖 や中硬質 透明粒数 や中硬質	P1付近床1.8～16cmと P1付近床1.8cm 口2/3露。体～底完存 4.5、6
2 土師器 杯	口 径 13.2 高 3.8	外面口縁部ヨコナデ。体～底部ケズリ。内面体～底部ナデ。口縁～体部ヨコナデのち体～底部縁的な放射状のミガキ。口縁部外面・内面全体漆仕上げと見られるが、足跡に残るは口縁部内外面のみ。	7.5YR7/6 糖 や中硬質 赤褐色と赤・砂細粒 或	中央部床1.9cm 口～体1/4露 23
3 土師器 杯	口 径 13.4 高 4.1	褐色土と白色土がマーブル状に混ざる粘土。外面口縁部ヨコナデ。体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキのち口縁部端方向の疎らなミガキ。外面口縁～体部。内面全体漆仕上げ。	5YR5/6 透明粒 や中硬質 赤褐色と赤・白 ～細粒少 或質	赤明部床1.1cm 口～体1/6露 33
4 土師器 杯	口 径 15.0 高 残 3.6	外面口縁部ヨコナデのち強いミガキのような放射線文。体部ケズリのち強いミガキ。ミガキのような放射線文。内面ヨコナデのち放射状の疎らなミガキ。外面口縁部。内面全体漆仕上げ。口縁部端は剥落著しい。	2.5YR4/4 にぶい赤 や中硬質 黒褐色と白細粒と細 砂多	南面床1.4cm 口～体1/4露 37
5 土師器 甕	高 残 19.2 底 7.5 胴 22.5	褐色土と白色土がマーブル状に混ざる粘土。外面胴部上平横方向のナデ。下平横方向のケズリのち胴部全体横方向の光沢のあるナデ。胴下半に粘土積み上げ体止による接合痕あり。底部ナデ。内面ヘラナデで、総輪彫あり。全体は整形が良く、接合部分は明瞭なうす。楕圓の単位が器面の凹凸として残っている。	10YR6/2 灰黄褐 や中硬質 白・黒細粒多。黒・砂細 粒少。赤細粒数 や中硬質	北面床1.3～5cm 胴上半1/2露。胴下半 ～底は底完存 10, 12
6 土師器 甕	口 径 19.0 高 残 13.9	外面胴部傾いたナデのち縦方向の軽いケズリ。口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。全体にしろく。内面は剥落著しい。外面および口縁部内面にはわずかに灰白色粘土が付着。	10YR7/4 にぶい赤 や中硬質 砂粒と白・黒・半透 明粒数 や中硬質	カマ下東側付近床1.1cm と南面床1.7cm 胴上半1/3露 3, 35, K, 38, 41K
7 土師器 甕	口 径 29.2 高 残 28.5	外面口縁部ヨコナデ。胴部傾いたナデのち縦方向の光沢を持つケズリ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部ヘラナデで総輪彫。指通しを穿てる。全体の整形はやや良く、楕圓の単位が、胴部の凹凸として残っている。	7.5YR6/6 糖 や中硬質 白・透明粒と白細粒 と白・黒・透明粒少 或質	カマ下西側直線上で遊器 口～胴下半完存 K, K40
8 土師器 甕	口 径 19.4 高 残 20.0	外面胴部傾いたヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面横方向のヘラナデ。胴部外面に焼熱による赤変あり。	7.5YR7/8 黄褐 や中硬質 白・黒細～粒数多。 白細粒少 や中硬質	カマ下東側付近床1.1cm で遊器 胴上半一部欠 K, K41
9 土師器 鉢	口 径 9.0 高 残 7.2 最大 13.4	褐色土と白色土がマーブル状に混ざる粘土。外面体部ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ヘラナデ。口縁部端は内向き面となっているが、これは着痕による変形の可能性あり。口縁部外面・内面全体漆仕上げと見られるが、残存部分は少ない。	7.5YR7/4 にぶい糖 や中硬質 白・黒細粒と赤 砂細粒少。赤細粒数 や中硬質	中央部床1.4～14cm 口径付。体1/2露 18, 22, 27
10 土師器 鉢	口 径 10.0 高 残 6.2	口縁部が外側に薄層杯類似の口縁部形状。外面体部ナデ。楕圓面わずかに残る。口縁部外面ヨコナデのち内面体部ヘラナデ。外面口縁部および内面全体漆仕上げ。薄く剥がれるように欠損する。	5YR7/8 糖 や中硬質 赤・砂粒～細粒少 や中硬質	カマ下西側床1.3cm 口～体1/4は底完存 1
11 土師器 鉢	口 径 11.0 高 残 8.4 最大 復 12.2	小形甕のような形状。口縁部内外面ヨコナデ。外面体部傾いたナデのち斜め方向のケズリ。内面体部ヘラナデ。内面口縁部ヘラナデ。内面口縁部レータース状に剥落著しい。	2.5YR6/8 糖 や中硬質 白・黒細粒と白・赤 細粒多。赤砂少 や中硬質	P2付近床1.5cm 口～胴下平1/3露 30
12 土師器 鉢	口 径 10.4 高 8.1 底 4.0	外面口縁部ヨコナデ。体部下平ケズリのち体部全体横方向のナデのち体部中央方向のナデ。体部下平ナデによる粘土のはみ出し。ケズリ際の表面の残れがそのまま残存など。調整は稀。底部ナデ。わずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラナデ。胴部に楕圓面残る。	10YR7/3 にぶい赤 や中硬質 白・半透明細粒少。黒・赤細粒多 や中硬質	西面床1.1cm 胴上半1/4露。胴下半 1/2露。底完存 26
13 土師器 鉢	高 残 1.8 底 5.0	小形でない小形甕の可能性あり。外面胴部下平～底部ケズリ。底部はわずかにくぼむ。ケズリは高く、底部はいびつな凸となる。内面底部ヘラナデ。	7.5YR6/6 糖 や中硬質 白・黒細粒と赤・砂細 粒と白・透明粒と砂細粒数 や中硬質	P2付近床1.6cm 底完存 31
14 石 磨石	長 11.1 幅 9.3 厚 4.3	表面左側中央に溝状の2本の研磨部。表面右下に横方向の研磨部あり。ともに凹面。周縁に溝状と、それに伴う彫痕あり。重量425.0g。	2.5YR7/2 灰黄 靑い 安山岩	貯蔵穴P3付近床1.7cm 厚 13
15 石 磨石	長 残 8.0 幅 5.9 厚 3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量284.4g。	2.5YR7/2 灰黄 や中硬質 安山岩	中央部床1.4cm 一部欠 21

第8章 権現山遺跡 SG5 区

16 石鏡 幅物石	長 11.0 幅 5.2 厚 4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 322.9g。	10YR5/1 焼灰 硝子 灰山付	中央部床上 3cm 一部欠
17 石鏡 磨部	長 17.2 幅 6.9 厚 2.9	扁平、棒状の河原石を素材とし、両面を大きく剝離したのち、刃部を作出する。両面調整だが、調整は表面に集中する。重量 410.4g。	2.5GY5/1 オリーブ灰 硝子 ホルンフェルス(泥岩起源)	P2 付道床上 6cm 完形 38
18 鏡	長 18.4 幅 17.4 厚 9.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 4400g。	5Y7/2 灰白 硝子 灰山付	南東部床上 3cm 完形 39
19 石製網造品 網形	長 4.1 幅 1.8 厚 0.35 重 4.0	全体に貫いづくりで、表面左右と裏面の大部分に剥離面を残す。光沢の弱い糸線状の研磨痕で、表面は縦に、裏面は斜めに研磨される。側縁は上端が刃に直交する研磨。両側縁上平は素材のために鋭い縁辺となり、両側縁下平は平行する研磨が施される面となる。孔径は中央から表面からの穿孔と見られ、孔径は表側 2.15mm裏側 2.38mmである。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 硝子 硝石	中央部床上 14cm 一部欠 14



第 292 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-8 (2) 遺物

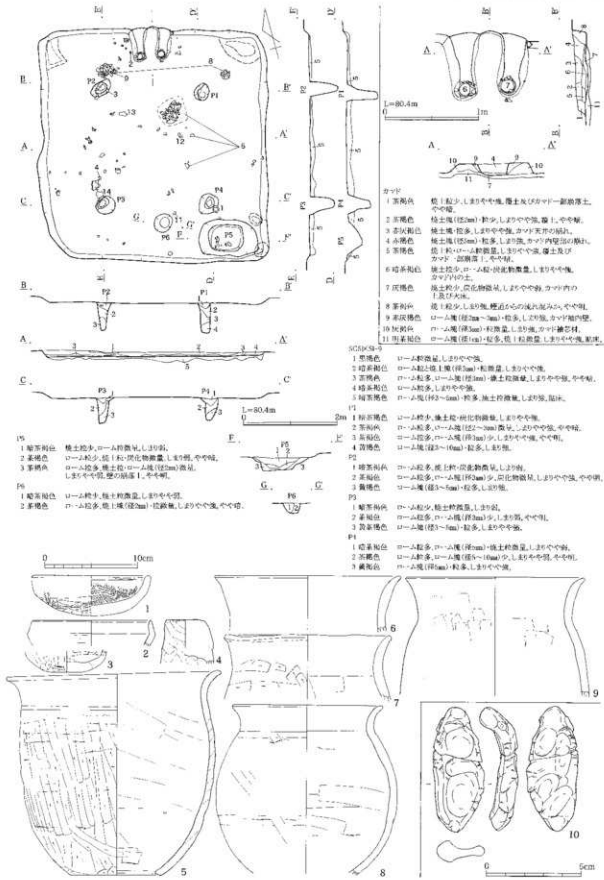
SG5 区 SI-9 (第 293・294 図、写真図版 26・27・178)

【位置】SG5 区中央部北寄りの 15-16、16-16 グリッド。西に古墳後期の SI-8 と中期の SI-12、東と南東に古墳後期の SI-10・15 がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】東西 4.68 × 南北 4.90m のほぼ方形で、南北の中軸線は N-16-E。壁は直線的に外傾し、残存高は 4 ~ 14cm。床はほぼ平坦で、全体が強く締まる。掘方は床面から深さ 2 ~ 14cm で底に緩い凹凸があり、北西と北東の隅がやや深い。ローム粒・塊の多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。主柱穴 4 本は、P1 が径 36 × 30 × 深さ 64cm、P2 は径 39 × 29 × 深さ 59cm、P3 は径 42 × 38 × 深さ 54cm、P4 は径 46 × 38 × 深さ 46cm で、北側の柱穴がやや深い。柱間は P1-P2 間が 2.14m、P3-P4 間が 2.26m、P2-P3 間が 2.44m、P1-P4 間が 2.26m で、ほぼ方形に配置する。南中央の壁から 50cm 北にある入口ビット P6 は径 41 × 35 × 深さ 22cm。

南東隅にある貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形で、124 × 73 × 床面から深さ 28cm。床面から約 15cm 下には東西で幅 20 ~ 30cm、南北で幅 8 ~ 10cm の平坦面が全周する。平坦面内側の規模は 73 × 56cm。平坦な長方形底面から壁がやや外傾して上がり、平坦面となってからやや急に立ち上がり床に至る。P5 の覆土は下層ほどローム粒が多く、各層に少量の焼土を含む。

【カマド】北壁はほぼ中央に、貼床整形後に構築している。削平され、床面から 10 ~ 15cm ほどだけが残る。両袖幅 85cm。煙道先端から焚口部まで 73cm。灰褐色粘土主体の 9・10 層で構築した両袖の先端には、西に 6、東に 7 の土師器甕を倒立して補強している。内壁の 9 層は燃焼による焼土化が著しい。火床はほぼ平坦で、



カマド
 1 築構色 粘土粒少、しまりややね、薄土及びカマド一筋筋厚土、
 今やね。
 2 赤褐色 粘土粒(厚2mm)粒少、しまりややね、輪しややね。
 3 赤褐色 粘土粒、粒多、しまりややね、カマド実付の跡付。
 4 赤褐色 粘土粒(厚2mm)粒多、しまりややね、カマド内壁部の跡付。
 5 築構色 粘土粒、粒多、しまりややね、薄土及びカマド一筋筋厚土、今やね。
 6 暗赤褐色 粘土粒少、ローム粒(粒径0.5mm)粒多、しまりややね、
 カマドの内土。
 7 灰褐色 粘土粒少、炭化物粒付、しまりややね、カマドの内
 土及び今やね。
 8 築構色 粘土粒少、しまりややね、輪しややね、カマドの内
 土。
 9 赤褐色 ローム粒(厚2mm)粒多、しまりややね、カマドの内
 壁。
 10 灰褐色 ローム層(厚1cm)粒多、しまりややね、カマドの内
 壁。
 11 築構色 ローム層(厚1cm)粒多、しまりややね、カマドの内
 壁。

SG5-9-9
 1 築構色 ローム粒多、しまりややね。
 2 暗赤褐色 ローム粒上層(厚3mm)粒多、しまりややね。
 3 築構色 ローム粒多、ローム層(厚3mm)粒多、しまりややね、ややね。
 4 暗赤褐色 ローム粒多、しまりややね。
 5 築構色 ローム層(厚2-3mm)粒多、粘土粒粒多、しまりややね、
 厚土。
 P1
 1 暗赤褐色 ローム粒少、粘土粒(粒径0.5mm)粒多、しまりややね。
 2 築構色 ローム粒多、ローム層(厚2-3mm)粒多、しまりややね、ややね。
 3 築構色 ローム粒多、ローム層(厚3mm)粒多、しまりややね、ややね。
 4 築構色 ローム層(厚3-4mm)粒多、しまりややね。
 P2
 1 築構色 粘土粒、炭化物粒多、しまりややね。
 2 築構色 ローム粒多、ローム層(厚3mm)粒多、しまりややね、ややね。
 3 築構色 ローム層(厚3-4mm)粒多、しまりややね。
 P3
 1 暗赤褐色 ローム粒少、粘土粒粒多、しまりややね。
 2 築構色 ローム粒多、ローム層(厚3mm)粒多、しまりややね、ややね。
 3 築構色 ローム層(厚3-4mm)粒多、しまりややね。
 P4
 1 築構色 粘土粒、炭化物粒多、しまりややね。
 2 築構色 ローム粒多、ローム層(厚3mm)粒多、しまりややね、ややね。
 3 築構色 ローム層(厚3-4mm)粒多、しまりややね。

第293図 権現山遺跡 SG5区 SI-9(1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

壁穴床面よりわずかに下がる。燃焼部には、焼土と炭化物を含む流入土の6・7層、その上に天井内面が崩れた3・4層が堆積する。煙道先端は北壁ラインとほぼ同じで、直線的に上がる。

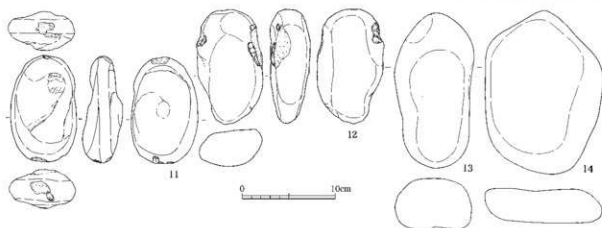
[覆土] 自然堆積で、全体的にしまりが良く、3・4層にはローム粒が多い。

[遺物出土状況] カマド南方の床付近に甕(5)が潰れている。カマド南西の床付近にも土師器製の胴部破片がまとまっているが、復原・図示はできなかった。ここには甕8と9の破片が混在している。1は完形の杯で、床から少し浮くが正位で出土した。貯蔵穴P5の底付近に土器片が入っていた。南西部の遺物は床から浮くものが多いが、14は床面に置いた自然石で、作業用の台石に使ったとも考えられる。

[出土遺物] 遺物は少ない。杯と甕・壺類の破片が主体で、杯の個体数が多い。漆仕上げの杯は少なめである。胎土が黒色で漆仕上げの身模倣形杯や半球形杯は一定数が接合できたが、口縁部が無いため図示できなかった。小形甕は図示した3の他に同様の破片が1点ある。土製支脚(4)は、SG5区SI-15とSG10区SI-37にも例がある。10は指明痕が目立つ焼粘土塊。陶化以外に球剛に近い砂質胎土の甕1点、大形壺底部(平底)1点、長胴破片などがある。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計306片・2.228gで、内訳は杯84片・394g、高杯1片・11g、壺壺類214片・1.709g、甕3片・92g、小形土器2片・11g、焼粘土塊2点・11g。

第167表 権現山遺跡 SG5 区 SI-9 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 現在位置 記号
1 土師器 杯	口 12.6 高 4.2	やや横な作り。外面体部ナデ。底部ケズリのち体部へつ状工具の端部による見られる疎らなナデ。工具の角度の違いか、ミガキ状になることと美観のよくなることあり。口縁部コナデ。内面コナデのち口縁部むかひな縁方向のミガキ。底・底部から見て三角形となることが多い。	10YR7/4 白・黒・赤相多量 やや微細 砂礫微量 今午焼貫	P4付近床土4cmで正位はほぼ完成 2
2 土師器 杯	口 径 12.4 高 径 3.8 最大 径 13.5	外面体部ナデ。口縁部コナデ。内面口縁部コナデ。漆仕上げの可能性あるが、不詳。	2.5Y4/2 暗灰黄 今午焼貫 白磁粒多。砂礫・細砂・粘質	カマド西側床土3cm 口へ46-一部 59
3 土師器 小形甕	高 径 2.5 底 3.4	外面胴部ナデ→底部ナデ。丸味を持つ平底。外面胴部ナデ→底部へつナデ。底部中央に、焼成時の製材の影による亀裂あり。	7.5Y8/6/4 に近い黄緑 白磁粒多。砂礫細砂 今午焼貫	P2付近床土7cm 胴下部へ成 3/4 周 48, 51, 52 覆土
4 土製品 支脚	上面 4.2 高 径 4.6	外面体部ナデ。上面へつナデ。内面ナデ。上面が平用に仕上げられれば以外は内外面とも調子が良く、形もいびつ。	5Y8/5 明赤黄 今午焼貫 土赤相・細粒多。白磁粒少 今午焼貫	南西部床土4cm 上平ほぼ完成 15
5 土師器 甕	口 23.0 高 21.5 底 9.8	外面胴部縦方向のケズリ。胴下部には、縦ミ上げ休止による接合痕があり、この部分で角度が変化する。胴部上平には縦溝が良く残る。口縁部コナデ。内面は口縁部コナデのち胴部へつナデ。胴部には、縦溝が弱く残る。底部は直線状に面取りされるが、焼成後に倒れて作られた部分もあるように見られる。	10YR7/6 明赤黄 今午焼貫 白磁・細砂粒多。赤相→細粒微量 今午焼貫	中央部床土2~3cmと南部床土2cm 胴3/4周、底完存 6, 23, 24, 30, 74, 一括
6 土師器 甕	口 径 19.6 高 径 5.7	砂を多量に含む胎土のため、表面の滑減が著しく、調整を明確にしないところが多い。口縁部内外面コナデ。	10YR7/6 明赤黄 今午焼貫 砂礫・細粒多。砂礫少。白・透明細粒微量 今午焼貫	カマド西側床土上で遊位 口2.5周 64
7 土師器 甕	口 17.6 高 径 7.1	外面口縁部コナデのち胴部上端ケズリ。内面胴部上端へつナデのち口縁部コナデ。口縁部外面焼成による赤変あり。	10YR7/3 に近い黄緑 今午焼貫 黄緑相多。白・黒・灰相細砂・砂礫→細粒多。微量 今午焼貫	カマド東側床土4cmで遊位 口完存 65
8 土師器 甕	口 径 15.8 高 径 17.8 最大 径 19.0	外面は縦溝が顕著。内面はクレター状に顕著しており、調整は不明確。外面胴部ナデ。口縁部内外面コナデ。胴部ナデに粘土のみ上げ休止による接合痕があり。内面面に縦溝目、器厚の変化が認められる。	2.5Y8/6 暗 今午焼貫 白・黒相と砂礫多。赤相→細粒微量。 今午焼貫	北部床土上→床土4cm 口へ胴下平1/2周 49, 51
9 土師器 土甕	口 18.8 高 径 12.6	砂を多量に含む胎土のため、表面の滑減が著しく、調整を明確にしないところがある。外面胴部縦方向のケズリ。口縁部内外面コナデ。内面胴部へつナデ。胴部外面焼成により赤変しているところあり。	10YR6/4 に近い黄緑 今午焼貫 砂礫→細粒多。砂礫と白・透明細粒微量 今午焼貫	北部床土上 口へ胴下平1/3周 49
10 土製品 焼粘土塊	長 6.5 幅 2.7 厚 1.1 重 15.9	白色土と褐色土とがマール状に混じる胎土。表面には、指頭圧痕と、それと同時に生じた粘土の亀裂が目立つ。	7.5Y8/6/8 暗 微赤 赤磁粒微量 今午焼貫	完形
11 石器 敲石	長 11.2 幅 7.0	河原石。上下両面に敲打痕あり。重量 388.4g。	5B6/1 青灰 今午焼貫 安山岩	南部床土3cm 完形 6
12 石器 敲石	長 12.0 幅 6.9 厚 4.2	河原石。上下両面に敲打痕中。敲石の可能性もあるが、敲打面が凹面となり、紐をかけることを意図しているように見られることから、輪物石とした。重量 469.9g。	10Y6/1 灰 微赤 安山岩	中央部床土3cm 完形 安山岩
13 石器 敲石	長 16.3 幅 8.3 厚 6.2	河原石。特に加工上の痕跡なし。重量 1098.9g。	7.5Y8/6/1 暗灰 今午焼貫 安山岩	中央部床土3cm 完形 43
14 石器 敲石	長 17.1 幅 12.4 厚 3.3	河原石。特に加工上の痕跡なし。重量 1338.7g。	5Y7/2 灰白 微赤 砂岩	P3付近床土上 完形 12



第294図 梅現山遺跡SG5区SI-9(2)遺物

SG5区SI-10 (第295・296図、写真図版27・178)

【位置】SG5区中央部北寄りの16-16グリッド。西に古墳中期末～後期初めのSI-9、南西に時期不明のSK-81と古墳時代のSK-82がある。試掘トレンチで中央が削られる。

【規模と形状】東西3.89×南北3.99m。隅部がやや丸い方形で、南北の中軸線はN-4°-E。壁は直線的に外傾し、残存高は13～17cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方底面は四隅が床面より6～10cm窪み、ローム粒が多い明褐色土で貼床を施す。

主柱穴4本はP1=径25×30×深さ30cm、P2=32×35×深さ35cm、P3=27×29×深さ46cm、P4=30×32×深さ46cmで、南のP3・4が深い。P1-P2間=1.96m、P3-P4間=2.05m、P2-P3間=2.05m、P1-P4間=2.00mの方形配置。南壁際中央の入口ピットP6は径29×34×深さ34cm。

北西隅のP5が貯蔵穴と考えられている。ただし、大きさ・形状・主軸方向・覆土状況からみて貯蔵穴とするにはやや疑問も残る。P5は南北軸の隅丸長方形で、南と北は北西主柱穴と壁に近接する。南北55×東西35×深さ22cmの底面碗状で、壁はなだらかに上がり、覆土1～3層にローム粒の混入が目立つ。

【カマド】北壁中央にあり、貼床整形後に構築する。両袖幅92cm、煙道先端から焚口まで102cm。袖は灰褐色粘土主体の8～10層で構築し、内壁の10層は被熱で焼土化が著しい。東袖先端に土器器裏(5)を倒立して焚口を補強する。火床はほぼ平坦で、竪穴床よりわずかに窪む。燃焼部は流入土3～7層の上に天井の崩れた1・2層が堆積する。煙道は北壁より45cm突出し、火床面からなだらかな段をもって上がる。

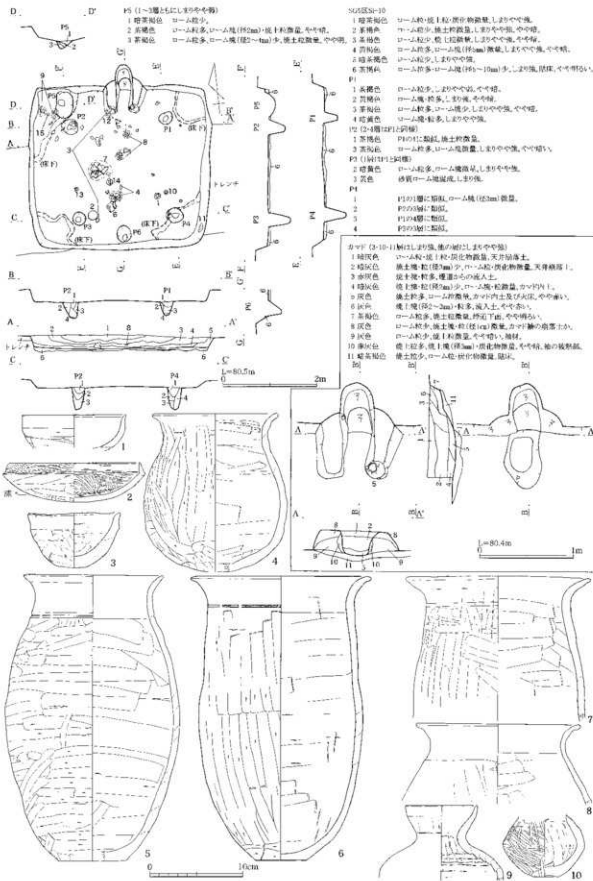
【覆土】レンズ状自然堆積で、1～3層に焼土粒微量と遺物多数を含む。下層の4・5層はローム粒が多い。【遺物出土状況】中央部に多い。一般に貯蔵穴周辺に土器が多いので、北西のP5周辺にも土器が多い点は、やや不整形なP5を貯蔵穴とみなす根拠になるかもしれない。1と10は床から浮いて正位で出土した。

【出土遺物】やや少ない。身筒椀形杯(2)が少なく、不掲載破片中にもほとんどない。甕がやや多く、杯と甕も目立つが、甕破片は復原図示できなかった。図示しなかった小形土器の1点は、土製支脚の上部破片の可能性もある。焼粘土塊は特に大きな1点を図示した(15)。図示以外の土器と焼粘土塊は合計146片・1.629gで、内訳は杯36片・324g、高杯3片・85g、甕類71片・693g、甕30片・481g、小形土器2片・33g、焼粘土塊4点・13g。混入遺物は中期末頃の椀形杯・小形甕・高杯などがある。確認調査時のトレンチTX16で出土した土器粗製杯・高杯・大形甕は、SI-10に伴う可能性もある(第356図3・6・7)

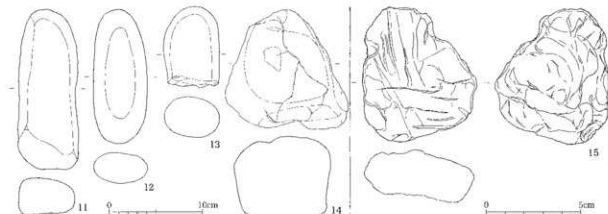
第168表 梅現山遺跡SG5区SI-10出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土位置 保存状態 注記
1 土師陶 杯	口 11.0 高 残 3.5	外面体部ケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ。内面は小さなクレータ一次に剥落しているところが多い。下平は、組織のつなぎ目から欠損していると思われる。	7.5YR7/6 糖 褐色赤・黒細粒と白微粒少 やや軟質	南東部床土7cm正位 口一俵はほぼ完存 4

第8章 権現山遺跡SG5区



第295図 権現山遺跡SG5区 SI-10(1)遺構・遺物



第296図 権現山遺跡SG5区 SI-10(2)遺物

2 土師器 杯	口 13.8 高 4.1 最大 15.0	外面体~底面ケズリのち体部ナデ。口縁部ヨコナデのち密なミガキ。内面ヨコナデのち体~底面ケズリのち体部の口縁~体部縦方向のミガキ。内面のミガキはやや緩んで、口縁部上平にはミガキがない。口縁部底面は包含が欠損するが、磨滅してはいない。外面口縁~体部、内面全体垂直仕上げ、漆はわずかしみ残存していない。	10YR7/0 明黄褐色 白・砂粒~細粒少 やや硬質	南部床上12cm位はほぼ完成形
3 土師器 小形土器	口 9.8 高 5.8 底 3.4	高いつくり。外面体~底面高いナデ。指道直度・粘土の観察面。底面はほぼ平直。内面体~底面ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色 細粒・細砂多、透明細粒微量 やや軟質	カマド内袖付近床土17cmと部床土11cmはほぼ完成形
4 土師器 甕	口 13.4 高 16.2 底 15.2	外面口縁部ヨコナデのち体~底面ケズリ。結構を示す露面の凹凸が顕著で、隙目も部分的に残る。底面は丸底だろう。内面体~底面ヘラナデ。口縁部ヘラナデのちヨコナデで、ごく一部に横方向のケズリがある。外面は、部分的に表面の剥落あり。	7.5YR6/6 糖 やや軟い 白濁~微粒と透明細粒多、白濁と黒細粒と赤細粒微量 やや硬質	中央部南寄り床土7~12cm位 口~胴上平はほぼ完成形、胴下平~底3/4度 3, 8
5 土師器 甕	口 14.8 高 30.3 底 7.2 最大 18.4	外面胴部上平縦方向のケズリのち横方向のナデ。下半横方向のケズリのち部分的にナデ。胴壁には、結構の痕跡である凹凸が残るほか、粘土の磨き目も部分にある。底面はナデで、平直。口縁部ヨコナデで、下部の部分がほぼ花梨状にへこむ。内面胴~底面ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 糖 やや軟い 砂粒と白濁~微粒と黒細粒と赤細粒 やや硬質	カマド南袖土25cmで位 底一部欠損 41
6 土師器 甕	口 19.0 高 復30.0 底 5.4	口縁~胴上平と胴下平~底面はそれぞれ緩るところがないが、調整や仕上げから底面を復した。外面胴部縦方向のケズリのち上平のみ縦方向のヘラナデ。底面はナデで、平直。口縁部ヨコナデ。外面口縁~底面ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。胴部外面には、反側粘土が強く付着する。	7.5YR7/4 に近い糖 やや軟い 白・黒・赤粒多。 砂粒少 やや軟質	南部床上4cm位 口~底一部欠 2. UT-TN SG TX16-16S, UT-TN SG TX16-16 No.2
7 土師器 甕	口 19.5 高 復15.3	口縁部が最大径となる。外面胴部縦方向のケズリのち胴部上平縦方向のナデ。上平~中位部の約1/2に復付着。	10YR7/4 に近い黄褐色 粗い 白・黒・赤粒と砂粒多 硬質	中央部床上9cm 口~胴上平はほぼ完成形
8 土師器 甕	口 復17.2 高 復8.4	胴部厚薄、外面胴部縦方向のナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ。焼酎によると見られる赤変。表面の剥落が一部にあり。	7.5YR6/6 糖 やや軟い 白細粒多、透明細粒少 やや硬質	中央部床上10~13cm 筒位 胴上平1/6度 11, 12. UT-TN SG TX16-16S
9 土師器 甕	口 復7.6 高 復8.0 最大 復13.0	外面口縁部上平ヨコナデ。口縁部下平~胴部上平1率なナデ。口縁部下平には、しぼり目のような粘土の痕跡と、ヘラの当たりあり。内面胴部上平ナデで、結構の痕跡。口縁部ヨコナデ。古墳中期の遺物が混入。	2.5YR8/8 明赤褐色 やや軟質 白・黒細粒多、赤細粒少 やや軟質	PS付近床土9cmと北西 部床土19cm 口~胴上平1/3度 29, 31. UT-TN SG TX16-16S
10 土師器 小形甕	口 復6.0 高 復6.6 底 2.5	外面胴~底面ナデ・胴部上端ヨコナデのちやや密なミガキ。胴部は斜め方向のち部分的中位部方向のミガキを有する。底面小さくこぼむ。内面胴部ヨコナデ。胴~底面ヘラナデで、上平は斜め、下平は丁寧に磨かれる。古墳中期の遺物が混入。	2.5YR7/8 糖 やや軟い 白細粒と赤細粒~細粒少 やや軟質	南部床上5cm 胴~底はほぼ完成形
11 石器 燧石片	長 16.8 幅 6.5 厚 4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 8951g。	5Y6/2 灰オリーブ 赤褐色 モルブ・フォルス	東寄り近床土11cm 完成形
12 石器 燧石片	長 14.1 幅 5.6 厚 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 4509g。	5Y6/1 灰 やや硬質 燧石片	カマド内側床土17cm 完成形 39
13 石器 燧石片	長 復8.5 幅 3.8 厚 4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 3493g。	5Y7/1 灰白 やや軟い 燧石片	中央部南寄り床土9cm 一部欠 24
14 燧石片	長 12.5 幅 13.0 厚 9.1	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は全体的に磨滅のためかわすかに赤変しており、特に隅の左端凸部が顕著。表面の割々所に残りはむけと見られる小さな欠損あり。現在重量 1863.6g。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや軟質 燧石片	中央部床上1cm ほぼ完成形 35
15 土師器 甕土師	長 7.0 幅 6.0 厚 2.3 最大 68.5	表面は磨が顕著である。磨滅はナデと見られるが、隅の表面磨は、ヘラ状工具によると見られる直線状の工具痕が残る。表面の1/2ほどは焼成時に灰変を吸着したためか、黒っぽく変色している。	10YR8/4 浅黄褐色 粗い 赤細粒と砂粒少、白細粒微量	北西部床上1cm 完成形 30

SG5区 SI-11 (第297・298図、写真図版28・43・178・179)

【位置】SG5区中央部北よりの15-17、16-17グリッドに位置する。西側9mに古墳後期のSI-10がある。古墳後期の溝SD-41と中期の溝SD-42が中央を「人」の字状に切り、SI-11→SD-42→SD-41の順になる。

時期不明のSD-148に北西部を切られる可能性もあるが、試掘トレンチが入っているため前後関係は不明。

【規模と形状】東西7.67×南北7.37mの方形で、南北の中軸線はN-3°-W。壁は外傾し、残存高は20～28cm。床面はほぼ平坦で、全体的に硬くしまる。掘方は床面から深さ2～18cmで底面に緩い凹凸があり、ローム粒・塊の多い明黄色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴P1～P4のうちP1・P2はトレンチ、P4はSD-42に上部を切られる。P1は径36×46×深さ63cm(床面から推定76cm)、P2は径50×54×深さ60cm(床面から推定71cm)、P3は径45×46×深さ61cm、P4は径38×42×深さ30cm(床面から推定62cm)で、南側のP3・P4に比べ北側のP1・P2の方が深い。P1-P2間が3.97m、P3-P4間が3.87m、P1-P4間が3.94m、P2-P3間が3.95mでほぼ同じく、柱穴を方形に配置する。

貼床除去後、南西主柱穴P3の40cm北で25×25×掘方から深さ15cmのP7を確認した。貼床除去後に南部で確認した幅23×30cm・長約5mの壁溝D1は、床面では確認できなかった。貼床除去後、南壁中央で壁に直交して確認した間仕切溝D2は長123×幅19～24cmで、深さは不明(10cm程度?)である。

貯蔵穴は2箇所で、南東隅から北2mのP5と西1.5mのP6である。P5は南北軸の隅丸長方形で、銅底状底面から壁が緩く上がり、63×118×床面から深さ29cm。P6は東西軸の隅丸長方形で、平底で壁が直線的で、58×80×床面からの深さ推定47cm。P5は上層に焼土、下層にローム粒が多い。P6の最上層に炭粒を含む。SG5区ではSI-11・19・25・29・100・137に2箇所の貯蔵穴があり、SI-28もその可能性を持つ。本書掲載の他地区では、SG10区SI-6や磯岡SG9区SI-49などが複数貯蔵穴を持つ。

【火処】確認できなかった。古墳中期後葉なので仮想定できるが、SD-41・42が確認調査トレンチに壊されたと思われる。

【覆土】覆土は概ね自然堆積で、壁周辺の3・4層に焼土粒や炭化物を含み、焼土塊も所々確認されている。火災建物の可能性がある。火災建物はSG10区SI-66などがある。

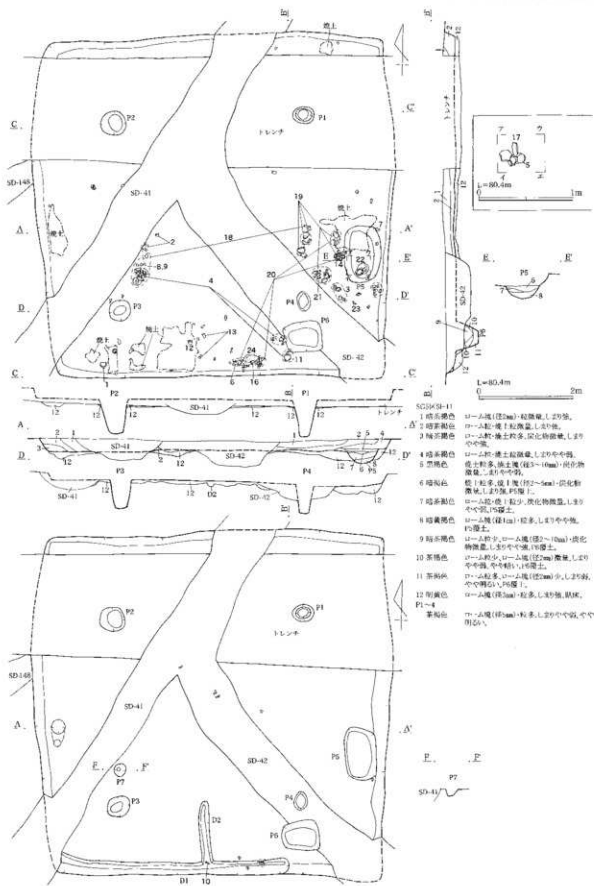
【遺物出土状況】2箇所ある貯蔵穴の周囲に多い。南西主柱穴P3の北東では、床上6cmのレベルで立てた状態の高杯2個(8・9)の杯部が破損・落下していた。

南部では、口を北に向けた完形の小形壺(12)が、焼土混じり覆土層中に倒れている。南部の大きな自然礫(24)は出土レベルの記録がないが、写真を見ると周囲にある6・16・20などの破片と同様の高さで出土した。東側の貯蔵穴P5では、底面から5～7cm浮いて完形の甕(22)と杯・壺(5・17)がある。北側はトレンチで破壊されたため遺物が不明である。

【出土遺物】杯類は椀形杯で、模倣杯はない。5は内面形が内傾口縁の椀形杯であるが、外面形は模倣杯に近づいている。12は須恵器を模倣した可能性もある有段口縁の小形壺。大形甕は破片もない。口縁に細突線を持つ壺(23)は細片化して不明な点が多いが、SG5区SD-42にあるような細突線を持つ陶質土器の可能性も残る。遺物量は多めで、図示以外の土師器合計523片・4.207gの内訳は、杯84片・76g、高杯146片・1.060g、壺甕類293片・3.071g。図化以外に、内斜口縁の椀形杯は3個体以上、高杯は脚柱部で見ると3個体、大形・単口縁の甕壺類口縁部が2個体分ある。壺は大形・中形・小形品の破片がある。

第169表 権現山遺跡SG5区SI-11出土遺物

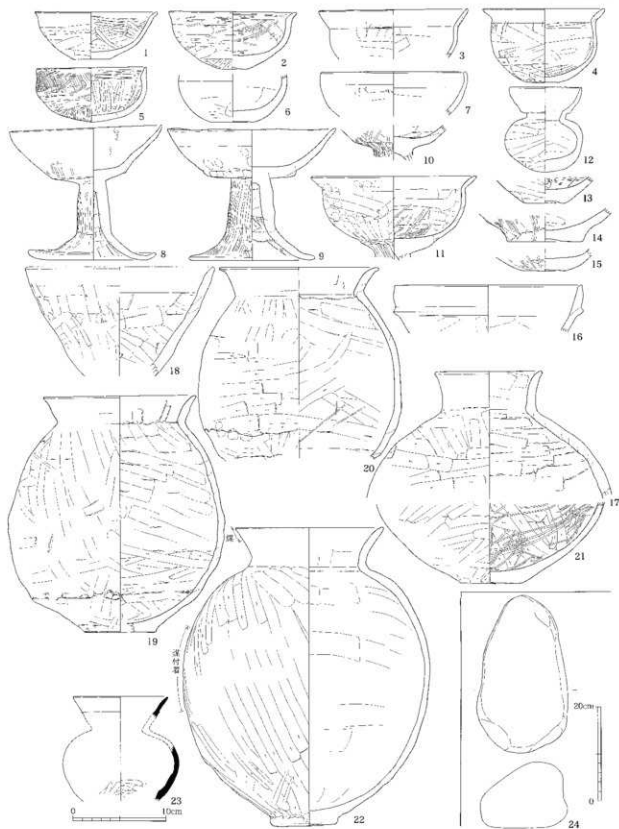
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.9 高 5.0 底 3.7～4.6	やや歪みあり。外面口縁部ヨコナデ。体～底部ケズリのちねいなデ。底部は平底で、外周を高く削られることで作出されるため、不整な輪郭形となっている。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラナデのち体部横方向で線らな入いミガキ。	10YR8/8 黄緑 やや細密 砂粗～細粒少、砂粗 間密 やや硬質	南壁階床上12cm 口～体2/3割、底完存 1
2 土師器 杯	口 13.5 高 6.0 底 3.0	外面体部中位～下平ケズリのち体部上平～中位ナデ・口縁部ヨコナデのち口縁～体部緩らかな横方向のミガキ。底部ケズリのちナデで、中央が小さくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～底部線らなミガキ。口縁～体部は横方向、底部は多方向と見られる。内面体～底部クレーター状の割傷あり。	2.5YR5/8 明赤褐色 やや粗い 砂粗～細粒と白微粒 多、白塵と赤・透明細粒少 やや硬質	中央部床上8cm 口～体1/6割、底完存 45、46
3 土師器 杯	口 径 15.8 高 径 3.1	外面口縁部ヨコナデのち体部上平ナデ。体部下平ケズリのちナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	5YR5/8 明赤褐色 やや細密 白微粒少 やや硬質	南東部床直上 口～体1/6割 12



第 297 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-11 (I) 遺構

第8章 権現山道跡 S5区

4	土師 土師 底 3.2	口 12.8 高 7.8	薄平で、赤みあり。外面体部軽いなでのち口縁部ヨコナデ、体部下平-底部ケズリ。底部は平底だが、ごくわずかにくぼむ。粘土層み上げ後体上部をすぼめたるしく、体部下平には、しぼり目がある。体部上半面には必ずりがあるが、これはしぼり目をついたため調整せらる。内面体部ケズリのち体部上半平-底部ヘラナデのち底ケズリ。口縁部ヨコナデ。	2.5YR4/6 赤褐色 白顔料と白・赤・砂 や今穀多 砂礫少 や今穀質	P6 付近床土 2 ~ 4cmと 中央部床土 6cm 口~体部1/3残、底共存 3, 5, 16
5	土師 土師 最大 11.8	口 11.6 高 5.7 底 4.4	口縁部はほとんどが破断欠損している。外面体-底部ケズリのち口縁部-体部斜め方向・底部方向の5本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデのち口縁部-体部斜め方向・底部方向のミガキ。内面口縁部5本/1cmのハケのち軽いなでのち口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。外面体-底部は調整のため調整がやや不明瞭であり、底部のミガキの濃さなどは不詳。	7.5YR6/6 橙 や今穀少 白・黒・赤顔料 や今穀質	P5 底土 7cm 口縁部欠損 56
6	土師 土師 底 4.4 体 11.5	高 5.4 底 4.4	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのみナデ。底部強いナデで、わずかにくぼむ。や今穀い、白・黒・赤顔料-顔料多、透明顔料少 や今穀質	5YR6/6 橙 や今穀い、白・黒・赤顔料-顔料多、透明顔料少 や今穀質	南東部床土 9cm 体部下平-底部 14
7	土師 土師 底 15.2	口 15.2 高 4.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。被熱により、全面が赤化している。	10B6/6 赤褐 や今穀多 黒顔料顔料、白・透明顔料顔料、赤顔料少 や今穀質	P5 付近床土 6cm 口~体 1/4 周 24
8	土師 土師 高 13.5	口 16.1 高 14.2 底 13.5	表面は全体に赤化し、調整不明瞭。外面体口縁部ヨコナデ、体-底部ナデのち口縁部ヨコナデ、脚上~中位ナデ。下端ヨコナデのち脚部斜め外側に斜め方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体-底部ナデのち口縁部ヨコナデ。脚上~中位ナデで、結構粗、紋り目顕著。下平ヘラナデのち下端ヨコナデ。ミガキは全体に密に施したと見られる。	10YR6/4 に近い黄褐色 や今穀多 白・黒・赤・砂礫顔料 や今穀質	中央部床土 6cm ほぼ完全 5
9	土師 土師 高 13.2	口 17.6 高 13.8 底 13.2	外面体口縁部ヨコナデ、体-底部ナデ、指頭圧痕顕著。脚上~中位ナデ、下端ヨコナデのち脚上~中位ナデ。内面体部赤化し、調整不明瞭。口縁部ヨコナデ、体-底部ナデヘラナデ。ミガキの有無は不詳である。脚上~中位ナデヘラナデで、結構粗は中位で顕著。下平ヘラナデのち下端ヨコナデ。内外面全体に黒色物質少量。	10YR8/4 浅黄褐色 や今穀多 赤顔料-顔料と砂礫顔料 や今穀質	中央部床土 6cm ほぼ完全 5
10	土師 土師 高 3.7	高 3.7	外面体-底部ケズリのち軽いなでのち線らなミガキ。脚部上端ケズリのち線らなミガキ。内面口縁部-底部ヘラナデ。ミガキの有無は不詳である。脚部上端に欠損ありナデ。	2.5YR5/6 明赤 や今穀い、砂礫-顔料と白顔料 顔料多、砂礫顔料 や今穀質	D2 底土 7cm 体部-底部、底共存 57
11	土師 土師 底 17.4	口 17.4 高 8.9	外面体口縁部軽いなでのちナデ、体-底部軽いなでのち底部細かなミガキ。体部には、指頭圧痕・結構粗目立つ。内面口縁部ヨコナデのち体-底部ヘラナデのち線らなミガキ。脚部上端ナデ。口縁部外面一部腐食付着。	7.5YR7/3 に近い橙 や今穀い、白・赤・透明顔料多、白・平透明少、平透明少 や今穀質	P6 付近床土 4cm 体口~体 1/3 残、底~ 口縁部上端共存
12	土師 土師 最大 8.3	口 7.6 高 8.9 底 8.3	指頭圧痕の程度が、外面口縁部-脚部上端ヨコナデ、脚-底部ケズリとナデ、丸底。内面口縁部ヨコナデ、脚-底部ナデ。口縁部は3.2cm、高さ1.2cmの円形部分の部分が欠損するが、欠損部はやや赤化しており、欠損後使用したものとみ考えられる。	5YR5/6 明赤 や今穀い、白・赤・砂礫-顔料 少、砂礫顔料 や今穀質	南東部上内床土 7cm ほぼ完全 2
13	土師 土師 底 4.2	高 2.8 底 4.2	外面体部軽いなでのち、底部はケズリのみナデで、くぼむ。内面体-底部強いナデ。工芸であるうちの一部分は赤化しているらしく、ヘラナデのみに、7本/1cmのハケが見られる。	10YR7/3 に近い黄褐色 や今穀多 赤顔料-顔料少、砂礫 と白顔料顔料 や今穀質	南東部床土 8 ~ 9cm 脚上平1/3残、底共存 36, 38
14	土師 土師 底 7.8	高 3.5 底 7.8	外面体部下端ケズリのみナデのち線らなミガキ。底部ケズリで、ドーナツ状にくぼむ。内面ヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 や今穀多 透明顔料-顔料多、 白・黒・赤顔料少 や今穀質	P5 付近床土 7cm 脚上平 底 1/2 周 11
15	土師 土師 底 2.4 体 4.0	高 2.4 底 4.0	外面体部下端ナデのち線らなミガキ。底部ナデで、わずかにくぼむ。内面ナデ。内面一部黒色物質付着。外面一部被熱により赤化。	5YR6/8 橙 や今穀い、白・赤・砂礫-顔料多 や今穀質	脚上端~底共存
16	土師 土師 底 20.0 高 5.0	口 20.0 高 5.0	有孔1種状。口縁部は段より上内外面ともヨコナデ。下は1層ナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色 や今穀多 黒・透明顔料と砂礫 -顔料少 や今穀質	南東部床土 9cm 口11/4 ~ 9cm 28
17	土師 土師 底 11.2 高 13.5	口 11.2 高 13.5	白土と褐色土がマフール状に混ざる。外面体部下端方向のナデのち下平のみ横方向のケズリ。口縁部ヨコナデ。内面体部上平ナデ。線らなヘラナデ。結構粗顕著。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR6/6 浅黄褐色 や今穀多 白・赤顔料-顔料少 や今穀質	P5 底土 7cm 口~脚上平 3/4 周 55
18	土師 土師 底 20.0 高 11.5	口 20.0 高 11.5	作りがやや粗。外面口縁部ヨコナデのち体部軽いなでのち、指頭圧痕顕著。体部上半に線らなミガキに伴う集合部があり、内外面に線らなミガキがあるほか、脚部の赤化と調整が変化する。内面口縁部ヨコナデ、体部下平斜め方向のヘラナデのち体部上平方向のヘラナデ。 注1: 底層, SD-42 No.5, SD-42 No.6, SD-42 17.5-15.5	10YR7/3 に近い黄褐色 や今穀多 砂礫と砂礫-顔料と や今穀質	中央部床土 6cmと東部部 土 8cm 口~体 1/2 周 注1: 底層
19	土師 土師 底 16.0 高 7.5 最大 22.8	口 16.0 高 7.5 最大 22.8	外面体部ナデ。結構粗目立つ。脚上平の積み上げ体土による集合部顕著。底層ケズリ。口縁部ヨコナデ。内面体部赤化がひどく、下平の集合部もある。ヘラナデで、接合部分のみケズリが露される。底層ヘラナデ。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。外面口縁部腐食付着。外面一部に腐食付着。内面一部腐食付着。	10YR5/2 黄褐色 や今穀多 白・赤顔料顔料多、砂礫 と赤顔料顔料 破片	南東部土 3 ~ 10cm ほぼ完全、脚上 1/2 周 6, 7, 8, 9, 10, 11
20	土師 土師 最大 16.8 底 21.4	口 16.8 底 21.4	19に類似する。外面体部ナデのち中位体部方向のケズリ。脚上平の積み上げ体土による集合部顕著。口縁部ヨコナデ。内面体部赤化がひどく、下平の集合部もある。ヘラナデで、接合部分のみケズリが露される。底層ヘラナデ。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。外面口縁部腐食付着。外面一部に腐食付着。内面一部腐食付着。	10YR6/6 明黄褐色 や今穀多 白・赤・平透明顔料 -顔料多 や今穀質	東部部土 3 ~ 7cmと南東部 土 1/4 周 10, 11, 14, 15, 29
21	土師 土師 底 6.5	高 8.5 底 6.5	脚部下平の粘土層み上げ体土で欠損していると思われる。欠損部分の内外面には接合に伴う粘土の線らなミガキがある。外面体部強いナデのち線らなミガキを伴うナデ。底部層には一部ケズリあり。底部は平で、わずかにくぼむ。内面脚部下平-底部ケズリのみ線らなミガキ。底面周辺の内面が被熱している可能性あり。	10YR5/3 に近い黄褐色 や今穀多 白・黒・砂礫少、 砂礫と白・黒・砂礫顔料 や今穀質	南東部床土 7cm 脚上平 1/3 残、底共存 9, SD-42
22	土師 土師 底 31.6 高 6.8 最大 26.0	口 15.5 高 31.6 底 6.8 最大 26.0	外面口縁部ヨコナデ。脚部斜め方向のケズリのみ上平一部ナデ。底層ナデで、ドーナツ状にくぼむ。内面口縁部はヘラナデのちヨコナデ。脚上~中位ナデ。ミガキは強く露される。外面体部赤化がひどく、口縁部上平腐食付着。内面脚部下平コガ付着。内面脚部中位はクレタータ状に剥落するため調整不明瞭。	10YR6/4 に近い黄褐色 や今穀い、白顔料-顔料多、白顔料 と黒・透明顔料-顔料少 や今穀質	P5 底土 5cm No.4①、No.4②
23	土師 土師 底 10.0 高 8.3 最大 12.2	口 10.0 高 8.3 最大 12.2	口縁部内外面口ロコナデ、脚部内外面口ロコナデのち外面下平ナデ。内面下平は棒状工具で突いた痕が集中している。口縁部内面、脚部上平平自然腐食付着。	5Y/1 灰 顔料と白顔料 破片	南東部床土 2cm 口~脚部 29
24	土師 土師 底 33.1 高 19.2 厚 13.8	底 33.1 高 19.2 厚 13.8	河原石、珪に加工の扁鏡片。重量 12.4g。	5Y7/2 灰白 や今穀い、 破片	南東部床土直上 13



第 298 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-11 (2) 遺物

SG5 区 SI-12 (第 299 図、写真図版 29・179)

【位置】 SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッド。西半は調査区外。古墳中期末～後期初めの SI-9 が北東に

近接し、古墳後期後半のSI-8に北辺を切られる。

〔規模と形状〕西半は調査区外で、北側をSI-8に切られて明確ではないが、ほぼ方形と予想される。中軸線はN-8°-W。P1～北壁間とP2～南壁間をともに1.3mと仮定すると、南北推定長は約4.8m。調査範囲で東西長2.51m以上、南北残長3.51m、残存壁高2～6cm。床面はほぼ平坦で傾斜しない。カマド左右の北東隅及び東隅を除き、硬化が著しい。カマド左右の北東隅及び南東隅の床面は、現地調査時の図・写真を見ると窪んでいるが、誤って掘りすぎた部分と考えられる。掘方は床面から厚さ5～30cmで底面に凹凸があり、ローム粒・塊の多い5～8層で全体に貼床を施す。カマド北袖下に100×50cmのダルマ形の浅い窪みが、竪穴中央に128×92cmの不整形で掘方底面から最深42cmの掘り込みが認められた。

方形の建物ならば、調査区外に西側の2本が存在し、4本主柱の可能性が高い。掘方で確認したP1とP2が東側主柱穴と推定される。P1は径33×35×掘方から深さ29cm(床から推定深さ46cm)、P2は径29×31×掘方から深さ45cm(床から推定73cm)で、南側のP2が深い。P1-P2間は2.15m。P1・P2は貼床下で確認したため調査時に主柱穴と断定していないが、床面の写真でP2を確認できる。P1はSI-8に切れ、写真の撮影角度も悪いので床面での掘り込みは不詳だが、位置関係から北東主柱穴と判断した。

掘方で調査区境北側にP4(径22×35×深さ26cm)、貯蔵穴北西にP5(径48×60×深さ26cm)を確認した。

南東隅にある貯蔵穴P3は長軸が南壁とほぼ平行する隅丸長方形で、71×92cm×床面から深さ49cm。ほぼ平底で、壁は垂直気味。P3覆土の最上層に焼土・炭粒と遺物が多い。

〔カマド〕東壁南部にある。両袖幅93cm、煙道先端から焚口まで100cm。掘方を埋めた12・13層と貼床11層上に、厚さ約10cmでローム粒と粘土塊を少量含む10層を袖基部とし、ロームの混じる9層を載せて作る。両袖先端に9と13の裏を倒立する。燃焼部は床より少し低い。煙道は東壁より15cmほどU字状に掘り、掘方埋土と同じ13層で周囲を補強する。天井と内壁が崩れた1・2層は焼土と粘土が主体。

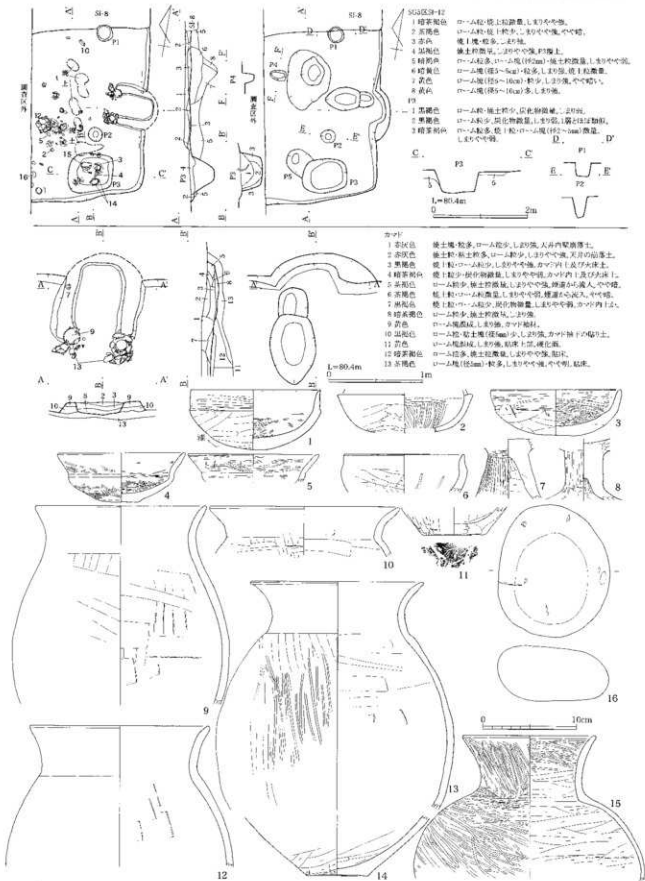
〔覆土〕1～4層はいずれも焼土を含む。特に中央の床面直上の3層は焼土粒・塊が多い。

〔遺物出土状況〕貯蔵穴とその北西に遺物が多い。中央部では12の裏が潰れる。建物入口が推定される南側に完形の杯と窪んだ罫がある(1・16)。残存度の高い杯3・4と大形壺15は貯蔵穴上層にある(断面B-B')。

〔出土遺物〕遺物はやや少なめで、壺類と杯が多く、高杯は少ない。中期末の短脚高杯(8)と、少し脚が伸びた高杯(7)がある。図示以外に、9・13・15と同個体の可能性もある壺または壺の底部があるが、接合できない。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計255片・1,525gで、内訳は杯43片・241g、高杯5片・93g、壺類204片・1,174g、焼粘土塊3点・17g。微破片は確認できなかった。

第170表 権現山遺跡SG5区SI-12 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.6 高 6.3 最大 13.8	丸底。外面体一底部ケズリのちり率なミガキ。口縁部ヨコナデのちり方向のミガキ。内面体一底部は円筒状を基本とする密なミガキ。内面はクレタータ-杯の剥落が著しく、調整不明確なところ多い。外面底部付近を除くほぼ全面が漆仕上げ。漆仕上げの古い例の一つ。	7.5YR6/6 粉 胎土 白・黒炭粒少 や中硬質	南壁際床土2cm ほぼ完形 18
2 土師器 杯	高 残 4.0 最大 復 14.1	外面口縁部ヨコナデのちり率なミガキ。体部上平ナデ・体部全 体ナデ。内面体部ナデの放射状のやや密なミガキ。体部上端に横方向の ミガキあり。	10YR7/4 白に黄褐色 や中硬質 白・黒炭粒少 硬質	中央部南寄り床土3cm 体1/6層 明確な少 24
3 土師器 杯	口 復 13.7 高 4.9 底 4.5～4.9	外面口縁部ヨコナデのちり率なミガキ。体部上平ナデ・体部下平一底部ケズ リのちり率なミガキ。体部上平ナデ・体部下平一底部ケズ リによって作るため、不整形。内面ヨコナデ後。円筒方向の密なミガキ。 わずかにクレタータ-状に剥落。	10YR6/6 明黄褐色 や中硬質 白・黒・砂粒少 や中硬質	P3底土32cm 口1/3層、体一底完存 36
4 土師器 杯	口 13.5 高 5.2 底 4.1	外面口縁部ヨコナデのちり率なミガキ。体一底部ナデのちり率なミガキ ナデ。体部は総輪の西内を欠す。ひびつな平底。内面ヨコナデ後円筒方向の ミガキ。上縁部はわずかに、底部は密に塗き付く。	5YR6/6 粉 や中硬質 白・黒・赤・砂粒～ 粗粒少 や中硬質	P3底土25cm 完形 37
5 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 3.0	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのちり率なミガキ。体部上平ナデ・体部下平一底部ケズ リのちり率なミガキ。内面口縁部ヨコナデのちり率なミガキ。	2.5YR6/8 粉 や中硬質 赤黒～細粒少 硬質	中央部床土6cm 口1/5層 29
6 土師器 杯	口 復 12.7 高 残 4.0 最大 復 13.2	外面口縁部ヨコナデのちり率なミガキ。内面口縁部ヨコナデのちり率な 放射状のミガキ。ミガキの調子は25°くらいであるため、全周では14～ 15本のミガキが集まっていたと見られる。	2.5Y5/2 暗灰黄 胎土 白・透明・砂粒少 や中硬質	口一体1/6層



第299図 権現山遺跡SG5区SI-12遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

7 土師器 高杯	高 残 6.3	外面胴部上平下方のケズリのち縦方向の密なミガキ、胴部上下にわずかに横方向のミガキあり。内面胴部底部ミガキ、胴部上平下のちケズリ、上部に粘土の塊残る。	5YR6/6 明赤褐色 やや締密 赤銅粉多、黒銅粉少 やや軟質	カマド北端底上 8cm 片状で上半完存 41
8 土師器 高杯	高 残 6.4	外面胴部縦方向のケズリ、胴部上平下のち胴柱部へ下縦方向のミガキ、内面胴部上平下のち密なミガキで、平周に仕上げられる。胴柱部はナデで、粘土の塊あり。下平は表面割れのため不明。	5YR6/8 橙 やや締密 赤銅～黒銅粉少 やや軟質	胴柱完存、胴下半一部 K
9 土師器 高杯	口 18.2 高 残 20.8 最大 23.0	砂質の粘土のため表面の磨減著しく、調整が確認しにくい。接合も困難。外面胴部やナデ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面へナデナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや軟い、白・黒銅～黒銅粉多、 砂鉄少、やや軟質	北端底上 3～5cm 口へ胴上半 1/2 周 K, K43
10 土師器 壺	口 径 20.0 高 残 5.3	外面胴部上平下方のケズリのち横方向のナデ、口縁部ヨコナデ、内面胴部へナデナデ、口縁部へナデナデのちヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや軟い、白・黒銅～黒銅粉多、 白鉄粉少 硬質	北端底上 7cm 口へ胴上半 1/4 周 21
11 土師器 壺	高 残 3.0 底 径 6.4	外面胴部下縁軽いナデのち縦方向のケズリ、底部本底版で、粘土接合部が顕著。内面底部へナデナデ。外面は焼熱により赤変しており、僅かも付着する。	7.5YR7/6 橙 やや軟い、砂銅粉多、平透明細 粒少 硬質	胴下半へ底 1/3 周
12 土師器 壺	口 径 19.1 高 残 14.8 最大 残 24.1	砂質の粘土のために表面の磨減著しく、調整不明なところ多い。外面胴部ナデ、ミガキの可能性あり、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部へナデナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや軟い、砂銅～黒銅粉多、白・ 黒銅粉少、白鐵粉量 やや軟質	中央部底上 8～29cm 口 3/4 周、胴上半 1/4 周 26, 31, 38, K
13 土師器 壺	口 18.3 高 残 24.1 最大 25.2	砂質の粘土のために表面がやや磨減しており、調整が不明確なところがある。外面胴部へナデのち縦方向のミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、口縁部内面一部僅が付着。12から13の底部の可能性あり。	7.5YR7/6 橙 やや締密 黒銅粉と白鉄粉と砂多、白鐵粉～ 黒銅粉多、白鐵粉量 やや軟質	カマド南端表面へ 5cm と 北端底上 3～5cm 口へ 胴上半はほぼ完存、胴下半 1/6 周 注記見5層
14 土師器 壺	高 残 6.4 底 6.3	砂質の粘土のために表面が磨減し、調整が不明確な部分あり。外面胴部上平ナデ、胴部下縁一部ケズリ。底部は平底で、外周を除く全体がわずかに凸む。内面へナデナデ。外面胴部～底部は焼熱により赤変し、白色粘土が付着。12から13の底部の可能性あり。	2.5YR5/6 明赤褐色 やや締密 砂銅～黒銅粉少、砂鉄 やや軟質	P3 底上 1cm 胴下半へ底完存 12
15 土師器 大形壺	口 14.1 高 残 15.3 最大 24.4	単口縁。外面1縁部上平下方のケズリ・胴部上平上方のケズリのち口縁部上平ヨコナデ・胴部のみ横方向の軽いナデのち口縁部縦方向のミガキのち胴部上平斜め方向のミガキ。内面口縁部上平ヨコナデ、口縁部上平下のち横方向のミガキ、胴部上平上方のケズリ。胴部上平内面は、クレータースの痕跡著しい。	10YR7/6 明赤褐色 やや締密 砂銅粉多、白銅粉 少、白鐵と黒銅粉量 やや軟質	P3 底上 4cm 口へ胴上半完存 14
16 土師器 壺	口 径 14.0 高 残 11.7 厚 5.8	多孔質の火山岩質層の河原石。加工痕跡がないが、表面は面的にくぼんでおり、石皿のようにも見え。裏側および上部に、淡赤褐色土が入り込んでいる。一部に黒色物質付着。重量 875.2g。	2.5Y5/1 黄灰 やや締密 灰白質質層	南西面底上 9cm 完形 20

SG5 区 SI-13 (第300 図、写真図版 29・179)

【位置】SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッドに所在する。同じく古墳中期の建物は北と南に SI-12・16 がある。調査区西壁断面 A-A' で SI-13 を切る「掘削」が SD-148 かと推定されるので、時期不明の SD-148 に切られる可能性がある。

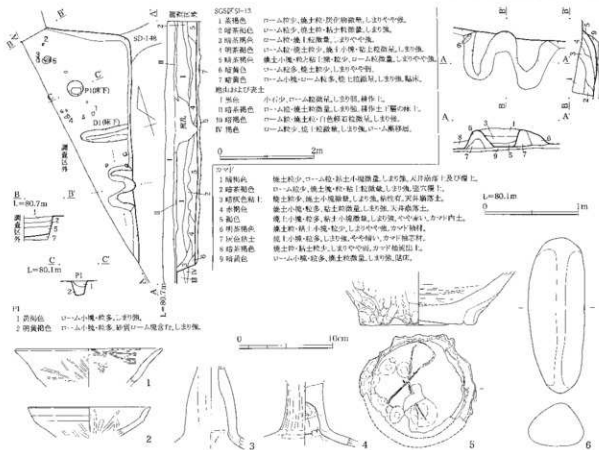
【規模と形状】建物の北東部だけを確認し、大部分は調査区外のため不明だが、ほぼ方形と推定される。南北の中軸線は N-24°-E。調査した部分で、南北長 4.96m 以上、東西長 2.34m 以上。壁は外傾し、残存高は 37cm 前後。床はほぼ平坦で、硬化面は特にならない。北東主柱穴と推定される P1 (径 33 × 34cm、床面から深さ 41cm) は貼床除去後に確認したので、断面図 C-C' では柱穴の深さが約 30cm になっている。床面の写真をもとめるとわずかに黒いので、本来は床面に開口していたとも考えられる。カマド北側壁に直交して貼床下で確認した間仕切溝 D1 は長 102 × 幅 20 ～ 30cm で、深さは記録されていないが写真から判断すると掘方底から深さ 10cm 未満と見られる。貯蔵穴は確認できず、調査区外にあるとみられる。

【カマド】東壁ほぼ中央に位置し、貼床整形後に構築されている。両軸幅 98cm、煙道先端から焚口部まで 57cm。灰褐色粘土主体の 6・7 層で袖を構築する。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。然焼部に流入した 5 層の上に天井が崩れた 1・3・4 層が堆積する。煙道先端は東壁から僅かに突出し、なだらかに上がる。

【覆土】自然埋没状で、下部の 4 ～ 6 層に焼土粒がやや多い。

【遺物出土状況】カマドの北側と北東主柱穴 P1 周辺で、床面より少し浮いたレベルで少量の土師器杯・高杯・壺甕類が出土した。

【出土遺物】内外面をよく磨く薄手の杯破片がある (1・2)。1 は内斜口縁椀形杯の口縁部が外に開いて浅身になったものか、または高杯の杯部かもしれない。明確な模倣杯・漆仕上げ杯や大形壺の破片は見られない。高杯の脚部はすべて柱状脚で、長い 3 と短縮化した 4 がある。大形壺 (5) は指頭瓦痕・植物繊維瓦痕がある。図示以外の遺物は土師器破片と焼粘土塊が合計 77 片・951g で、内訳は杯 21 片・196g、高杯 14 片・195g、壺甕類 40 片・548g、焼粘土塊 2 点・12g。



第300図 権現山遺跡 SG5区 SI-13 遺構・遺物

第171表 権現山遺跡 SG5区 SI-13 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 15.6 高 残 3.7	高杯形部の可能性あり。外面口縁部ヨコナデ・体部ケズリのちぎらなミガキ。内面ヨコナデのちぎらなミガキ。	5YR6/6 橙 磁赤 赤紅粒微量 やや破損	中央部床土10cm I-1体1/6期 6
2 土師器 杯	口 径 13.0 高 残 3.5	外面口縁部ヨコナデ。中央にわずかな段差があり、下平は平截竹筒の沈めのように丸くくぼむ。体部ナデのちぎらなミガキ。内面ヨコナデのちぎらなミガキ。	10YR7/4 に近い黄橙 やや破損 赤粒粘土、平透肌 粒微量 やや破損	北部床土16cm I-1体1/6期 1
3 土師器 高杯	高 残 8.8	内外面ともに表面の磨滅が著しく、調整痕不明瞭。外面脚柱部ナデ、脚部下平横方向のナデ、内面脚柱部ナデ、下平貼り付け後へラナデ。接合痕あり。	7.5YR7/6 橙 やや破損 赤粒粘土と白細粒微量 やや破損	北部床土21cm 脚土上1/3期 2
4 土師器 高杯	高 残 5.5	外面脚柱部横方向のナデ、下部底部は横方向のナデ。内面脚柱部上平ナデのちぎらなミガキ。脚柱部調整痕に脚部下平を貼り付け、へラナデで調整する。接合痕あり。	10YR6/4 に近い黄橙 やや破損 白・黒・砂粒粘土、 白・黒・赤細粒微量 やや破損	中央部床土3cm 脚土上1/3期 8
5 土師器 大型皿	高 残 5.6 底 径 12.2	平底の底部で、底部外周に黒く粘土を貼り付けている。外面側部下平削りナデのちぎらなミガキ。指の痕跡あり。底部ナデで、指頭直前・植物繊維の圧痕あり。内面ナデ。内面底部中央割線あり。	7.5YR6/6 橙 やや破損、白・黒・砂粒～細粒 と白・黒粒粘土、白砂少 やや破損	北部床土23cm 割下層一底一穴 3、床下
6 石器 磨物石	長 10.4 幅 6.0 厚 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量744.9g。	2.5Y7/3 浅黄 磨物 安山岩	方マ下北部床土5cm 定形 13、K

SG5区 SI-14 (第301・302図、写真図版29・30・179)

【位置】SG5区中央部北寄りの15-16グリッド。西に古墳後期のSI-12・16がある。同じ古墳後期末のSI-15に北東部を、時期不明のSK-87・88・131・132に東部を切られ、SI-14→SK-132→SK-131の順になる。南端が試掘トレンチに切られる。時期不明のSD-148とは、重複部が僅かなため前後関係が不明。
 【規模と形状】東西6.91×南北6.95mの方形で、中軸線はN-3°-W、残存壁高3～13cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。床面下2～10cmの掘方底に緩い凹凸があり、ローム小塊・粒を含む暗黄褐色土で全体を

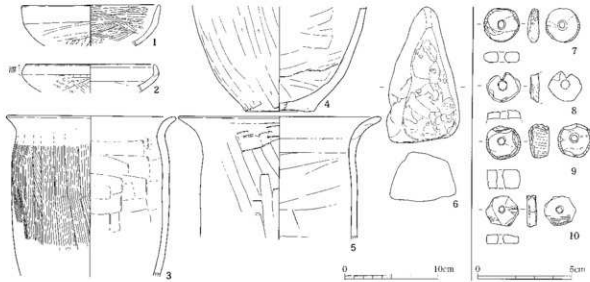
深い。柱間はP1-P2間が4.73m、P3-P4間が4.65m、P1-P4間が4.88m、P2-P3間が4.66mで、ほぼ方形に配置する。

北東隅にある貯蔵穴P5は東西軸の長方形で、南東部でP1と連接する。南北64×東西108×床面から深さ30cm。平底で壁が外傾し、東側は底面から8cmほど上に段を持つ。この段の部分の覆土である3層にローム粒が多く、ローム塊を少量含む締まりの弱い暗黄褐色土であることから、壁の崩落とも考えられる。**【カマド】**北壁中央から少し東に寄る。両袖幅115cm、煙道先端から焚口まで132cm。貼床整形後に、ローム主体の暗黄褐色土である9層を固めて袖の心とし、灰褐色粘土の10層で覆う。西袖先端は土師器裏破片(3)で補強し、東袖の南東側にも裏破片がある(4・5)。袖撤去後に東袖先端下で認められた径25×深さ3cmほどの浅い窪みが、土師器裏を埋めた痕かもしれない。火床はほぼ平坦で、床面より少し下がる。燃焼部には、煙道と架口から流入した4・5層、焚口付近に天井の崩れた6・8層が堆積する。1・3層は焼土化が著しい天井崩落土で、2が架口部の堆積土と想定する。煙道先端は壁から45cm出てなだらかに上がる。

【覆土】最下層の3層にローム粒が多く、ローム塊も少量含む。

【遺物出土状況】南東部に杯(1)がある以外は、カマド周辺にまとまっている。カマド内に自然礫がある(6)。

【出土遺物】遺物は少ない。図示以外の身模倣形土師器杯は口縁部が短く退化している。裏破片は不掲載品もすべて長胴裏で、3はハケ調整。粘板岩製白玉が出土する遺構としては最も新しい時期であろう。SG5区ではSI-6などに粘板岩製品がある。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計156片・1,434gで、内訳は杯28片・139g、高杯20片・238g、壺裏類102片・707g、甌5片・333g、焼粘土塊1点・17g。



第302図 権現山遺跡SG5区SI-14(2)遺物

第172表 権現山遺跡SG5区SI-14出土遺物

番号 種別	大きさ h×φ	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 14.6 高 残 4.3	外面口縁部ヨコナデ。体部上平ナデ。体部下平ヘラナデで、平行する段状縮跡あり。内面ヨコナデのち緩方向主体の赤なミガキ。	10YR8/4 浅黄粉 細赤 赤粗粒と砂粗粒微量 やや軟質	中央東寄り床土2m 口~体1/4周 22
2 土師器 杯	口 径 13.6 高 残 3.0 最大 径 14.4	外面口縁部ヨコナデ。体部わずかなナデのち緩らなミガキ。内面体部ナデのち口縁部ヨコナデ。外面口縁部、内面口縁~体部赤化上行。	10YR7/3 に近い黄粉 細赤 白・半透明明色多、白・ 透明粗粒少、赤粗粒微量 硬質	口~体1/6周
3 土師器 甌	口 径 18.0 高 残 16.8	外面胴部5本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。外面胴部中位縮跡のため赤変。外面口縁~胴部上平わずかに付着。	2.5Y6/3 に近い黄 やや中粒の、白・透明・砂粗粒 多。砂塵と白・黒・灰色粗粒 微量 硬質	カマド西袖床土9cm 口~胴中位1/3周 4
4 土師器 甌	高 残 11.1 底 7.4	外面胴部下平緩方向のヘラケズリ。底部ナデ。底部は丸底の本体にドーナツ状に粘土を貼り付けて作られており、中央の本体部分がぼんぼんしてしまっている。内面ヘラナデで、粘土積み上げ停止による後合痕あり。	10YR5/4 に近い黄粉 やや中粒の、白・砂粒~粗粒少、 白・赤粗粒 やや軟質	カマド南東側床土1~6 cm 胴下平~底1/2周 12, 13, 16, 21, カマド

第8章 権現山遺跡 SG5 区

5 土師器 高	口 径 21.3 高 残 12.8	外面やや斜めとなる強いヘラナデのち口縁部斜いココナデ。内面口縁部ココナデ。縦横あり。胴部上へヘラナデ。内外面ともヘラナデの工具先端が平端でないため、浅いV字ようになっている。	5YR6/6 橙 白・黒・砂粒数少 や今緑灰 や今緑灰 或灰	カマド西側床土 1cm 口～胴上1/5 周 21。表層
6 埴	径 14.2 輪 7.7 厚 5.1	河原石。特に加工の跡跡なし。表面に、わずかに薄く剥落するところあり。重量 692.9g。	2.5Y6/2 灰黄 褐色 ホルンフェルス	カマド東側付近床土 1m 完形 5
7 石製品 白玉	径 1.70～ 1.81 厚 0.60 重 2.40	両面とも磨理に沿った剥離面のままで磨理はないが、わずかに磨滅する。磨理面は表裏とも風化した面である。側面は孔と平行する方向の切磨時の工具痕と、切磨に伴う剥離面が残る。孔径は表側 3.65mm、裏側 4.86mm、中央縦径部 3.19mmで、両面穿孔と見られる。	10G/4/1 暗緑灰 褐色 粘灰	カマド西側床土 7cm 完形 3
8 石製品 白玉	径 残 1.40 ～ 1.77 厚 残 0.45 重 残 1.06	裏面側が磨理面から欠陥する。表側は磨理に沿ったや風化した磨理面が磨滅はなく、わずかに磨滅する。側面は切磨に伴う剥離面が多く、孔と平行する方向の切磨時の工具痕もわずかに見られる。孔径は表側 4.53mm、欠陥部分で 4.33mmで、穿孔方向は不明である。	10G/4/1 暗緑灰 褐色 粘灰	カマド東側床土 7cm 一部欠損 15
9 石製品 白玉	径 1.72～ 1.69 厚 1.00 重 4.05	両面とも磨理に沿った剥離面のままで、磨理なし。表側の磨理面は、やや風化している。側面は切磨に伴う剥離面がほとんどで、わずかに切磨に伴う剥離面が残る。肉の上面には大きな剥離がある。孔径は表側 3.60mm、裏側 4.20mm、中央縦径部は 3.25mmであり、裏側からの穿孔主体の両面穿孔と見られる。	10G/4/1 暗緑灰 褐色 粘灰	カマド西側床土 7cm 完形 1
10 石製品 白玉	径 1.45～ 1.64 厚 0.45 重 1.52	両面とも磨理に沿った剥離面のままで磨理はないが、突出した部分のみわずかに磨滅する。側面は切磨に伴う剥離面がほとんどで、わずかに孔と平行する方向の切磨時の工具痕がある。肉の下面は風化した磨理面がそのまま側面となっている。孔径は表側 3.97mm、裏側 3.80mm、中央縦径部 3.20mmで、両面穿孔と見られる。	10G/4/1 暗緑灰 褐色 粘灰	カマド西側床土 7cm 完形 2

SG5 区 SI-15 (第 303～305 図、写真図版 30・31・179・180)

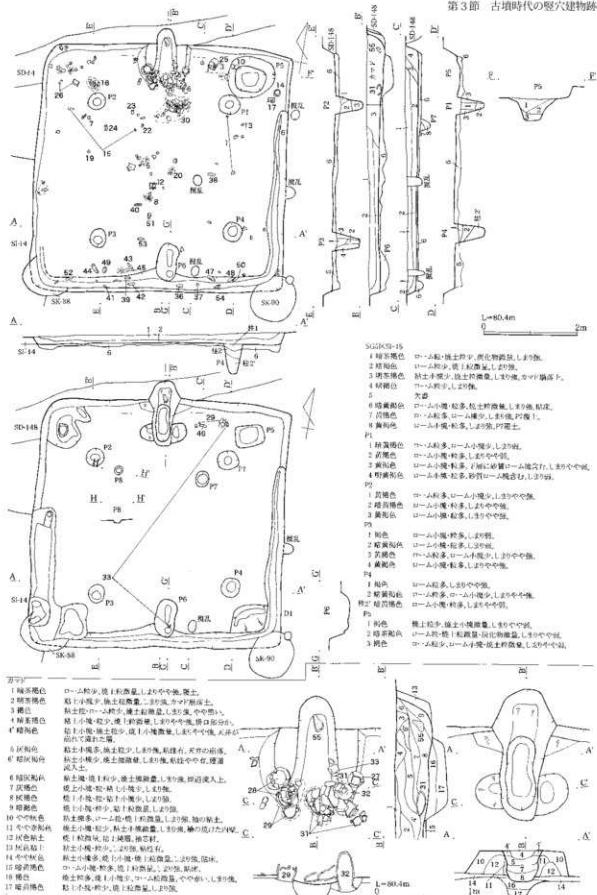
【位置】SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッド。南に時期不明の SB-154 が近接する。同じく古墳後期末の SI-14 を南西部で切る。南西と南東の隅を時期不明の SK-88・90 に切られる。また、北西部で時期不明の SD-148 を切る可能性がある。床はほぼ平坦で、ほとんど傾斜しない。

【規模と形状】東西 5.53 × 南北 5.25m のほぼ方形で、中軸線は N-9°-W。壁は直線的に外傾し、残存高 14～32cm。掘方は床面から深さ 4～15cm で、北東隅を除く三隅が 10～15cm 深い。底面に凹凸が目立ち、ローム塊・粒の多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は 4 本で、P1=径 40 × 45 × 深さ 58cm、P2=36 × 39 × 深さ 58cm、P3=34 × 40 × 深さ 57cm、P4=40 × 42 × 深さ 66cm。他の 3 本より P4 が 8cm ほど深い。P1-P2 間が 2.80m、P3-P4 間が 2.85m、P1-P4 間が 2.66m、P2-P3 間が 2.92m の方形配置で P1-P4 間が少し狭い。北側主柱穴 P1・P2 の内側の掘方底で P7・P8 を確認し、P7=径 24 × 32 × 掘方底面から深さ 23cm、P8=18 × 20 × 掘方底面から深さ 8cm、P7-P8 間 1.80m。

掘方調査時に南壁際中央で検出した南北に長い楕円形の P6 は、入口ピットの可能性がある (41 × 80 × 掘方底面から深さ 19cm)。底面の状況から 2 基のピットが重複したと想定でき、少なくとも 1 基が本来床面に開口した可能性がある。掘方調査時に南壁と東西壁際南半で確認した壁溝は、幅 30～50cm、掘方底面から深さ 3～11cm で、本来は床面に開口した可能性がある。北東隅の貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形で 86 × 100 × 床面から深さ 48cm。平坦な底面から壁が外傾し、床面下 10～15cm で緩くなる。P5 の上層ほど焼土が多い。

【カマド】北壁際中央にある。両袖幅 110cm、煙道先端から焚口部まで 120cm。貼床整形後、両袖の手前側と奥側にそれぞれ土師器甕を立てる。奥の甕は袖内部に埋め込んだと考えられる。西袖は奥の 28 が正立し、手前の 29 が倒立する。東袖は奥の 27 と手前の 32 が倒立する。遺物・石・焼土・ロームなどを含まずしまりが弱い均質な暗褐色土を 32 の中に詰めてから倒立していた。焚口天井に甕 31 を差し渡す。袖は灰色粘土主体の 12 層を心とし、純度の低い灰色粘土の 10・11 層で覆う。11 層は焼土化が著しい。火床はほぼ平坦で、焚口から煙道へ若干傾く。焼土粒・塊を少量含む 8・9 層が煙道～燃焼部に流入・堆積し、天井部が崩れた粘土粒・塊の多い 4～7 層がその上に堆積する。煙道先端は北壁より 80cm ほど U 字状に掘り、粘土主体の 13 層を貼る。貼床除去後、焚口～火床下に 87 × 40 × 掘方から深さ 20cm の楕円形掘り込みを確認した。16・17 層で堅く埋め、貼床 (14 層) とともに粘土や焼土を含むので、カマドを作り替えたと考えられる。



第303図 権現山道跡 SG5 区 SI-15 (1) 遺構

[覆土] カマド崩落土の3層を含め自然埋没状に堆積する。

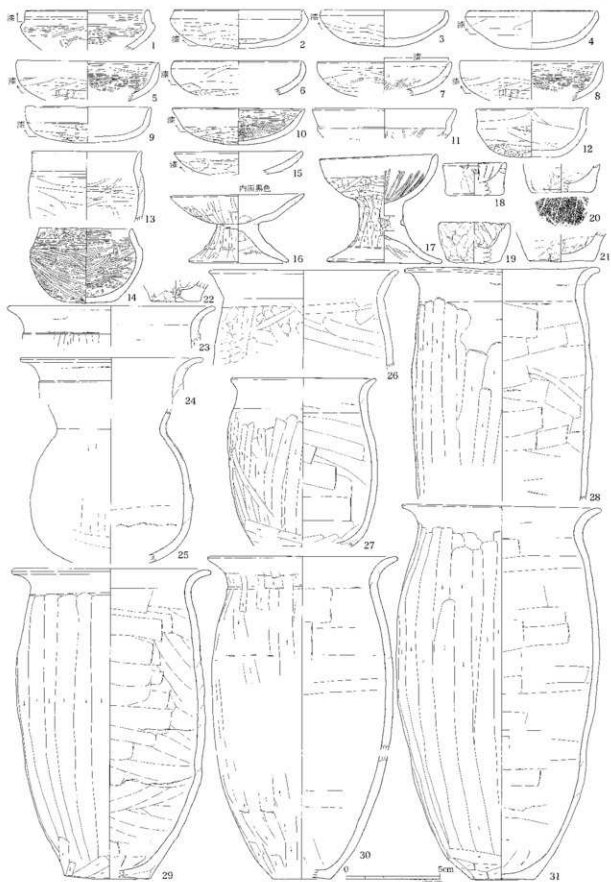
[遺物出土状況] カマド周辺の裏はカマドの項で述べた。床面にカマド南方の裏(30)と、貯蔵穴周辺の杯(3)・高杯(17)・鉢(14)・壺(25)があり、南壁付近に編物石多数・砥石(36)・紡錘車(37)がある。

[出土遺物] 遺物が多く、各器種の破片が混在する。図示以外の土師器と焼結土塊は合計1,353片・11,734gで、内訳は杯292片・1,960g、高杯53片・549g、鉢25片・362g、壺壺類925片・8,016g、甗41片・600g、小形土器13片・202g、焼結土塊4点・45g。この他に須恵器2片・9gがある(杯身片と杯?小片が各1点)。

土師器杯は半球形が主体で、5のように直立口縁の蓋模倣杯も一定量あり、身模倣形杯は僅かである。杯と鉢は漆仕上げが多く、磨かないものが多い。16は内面黒色処理の高杯。内面ミガキ+黒色処理の高杯はSG10区SI-23や高速道路調査A区SI-022(谷中・大島2001)にある。図示以外の鉢は杯身模倣形口縁が1点、内斜口縁2点、椀状の1点がある。古墳後期高杯の非貫通孔(17)は珍しい。中期のSG5区SI-5・116やSG10区SI-25などに少量ある。図化品以外の遺物は裏破片が主体で、底部でみると8個体以上のうち5点前後が長胴裏。甗(22~24)は全形を復原できなかった。図化以外に大形甗1点、単口縁鉢形小形甗2点、ほぼ直立口縁の甗1点がある。カマド支脚は煙道の自然礫55と、出土地点不詳の土製支脚34がある。土製支脚はSG5区SI-9にある。ホルンフェルスの砥石(36)はSG5区ではSI-7などにある。紡錘車はSG5区ではSI-4などにあり、孔外周の接線方向に擦痕がある点も共通する。

第173表 権現山遺跡 SG5 区 SI-15 出土遺物

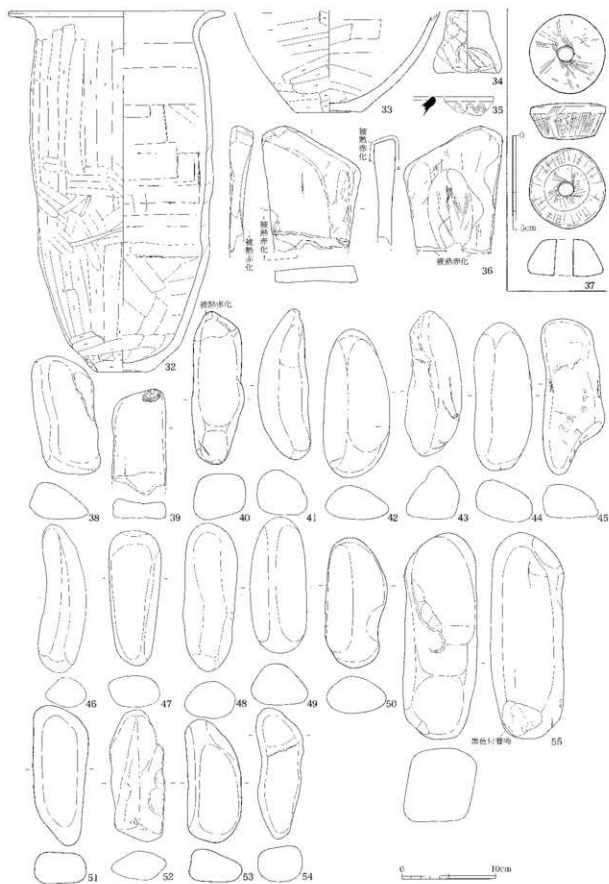
番号 器種 器名	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 現在状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.0 高 径 4.2 最大 径 14.2	外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリのち縁らなミガキ。内面ヨコナデのち口縁縁らなミガキ。体部密なミガキ。口縁部部の磨減著しい。注の赤みあり。	5Y7/3 浅黄 胎密 黒耀少。透明ガラス質 釉・微粒微量 やや硬質	中央部室の床直上→床 直上 9cm 口→体 1/2 周 48、52
2 土師器 杯	口 径 13.7 高 4.1 最大 径 14.6	外面口縁部ヨコナデ。体→底部ケズリのちチナデ。内面底部ヘラナデのち口縁→体部ヨコナデ。内面全体・外面口縁→体部漆仕上げ。	10YR7/3 に近い黄褐色 胎密 白釉・微粒少 やや硬質	口→体 1/3 周
3 土師器 杯	口 径 13.3 高 3.9 最大 径 13.6	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデで、一部無調整部分あり。底部ケズリ。内面ヨコナデ。外面口縁→体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/3 に近い黄褐色 胎密 白釉・微粒微量 やや硬質	北壁直上 口→底 1/2 周 86
4 土師器 杯	口 径 13.5 高 4.0 最大 径 14.0	外面口縁部ヨコナデ。体→底部ケズリのちチナデと見られるが、ほぼ全面が小さいスケラーターに割傷しており、調整不明瞭。内面ヨコナデ。外面口縁→体部・内面全体漆仕上げ。漆は比較的良く残存する。口縁部部磨減著しい。	10YR7/4 に近い黄褐色 胎密 白・黒・赤黒→微粒微量 硬質	ほぼ定形 貯蔵穴
5 土師器 杯	口 径 12.0 高 径 3.5 最大 径 12.5	磨いた胎土で、硬質。外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面ヨコナデのち体部多方向のミガキのち口縁→体部内周方向のミガキ。内面のミガキは1本の幅が狭いもので、密に施されており、表面は極めて平滑。外面口縁部→内面全体漆仕上げ。	10YR6/3 に近い黄褐色 胎密 赤黒微粒 硬質	中央部床直上13cm 口→体 1/6 周 43
6 土師器 杯	口 径 13.4 高 径 3.7 最大 径 14.2	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち体部下平ケズリ。内面ヨコナデ。外面口縁→体部・内面全体漆仕上げ。漆は比較的良く残存する。	10YR8/3 浅黄褐色 胎密 砂粒・微粒微量 やや硬質	東壁直上16cm 口→体 1/4 周 79
7 土師器 杯	口 径 14.2 高 径 3.6	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち口縁→体部ミガキ。磨滅している部分多く、ミガキの残存は不詳。内面は大部分が割傷するが、形状の密なミガキと見られる。内面全体漆仕上げ。漆はわずかに残存するのみ。	10YR8/3 浅黄褐色 胎密 白・透明微粒多 やや硬質	中央部西寄り床直上15cm 口→体 1/4 周 59
8 土師器 杯	口 径 15.0 高 径 4.1	外面口縁部ヨコナデのち体部ナデのち体部下平ケズリ。内面口縁→体部に内周方向主体の密なミガキ。外面口縁→体部・内面全体漆仕上げ。外面口縁部に磨滅部分多い。	2.5Y7/3 浅黄 胎密 砂粒微粒 やや硬質	中央部西寄り床直上20cm 口→体 1/4 周 33
9 土師器 杯	口 径 13.2 高 3.8	外面口縁部ヨコナデ。体→底部丁寧なケズリ。内面底部ナデのち口縁→体部ヨコナデ。外面口縁→体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4 に近い黄褐色 胎密 黒耀少 やや硬質	口1/3周, 体1/4周, 底1/4周 貯蔵穴
10 土師器 杯	口 径 14.0 高 3.9	外面口縁部ヨコナデのち体→底部ケズリ。内面密なミガキ。体→底部は一方方向のミガキ主体。口縁部は内周方向のミガキ。外面口縁→体部・内面全体漆仕上げ。	10YR8/3 に近い黄褐色 胎密 赤・黒耀粒と白微粒少 硬質	P5 付近の床面と同レベル 口→底 1/2 周 83
11 土師器 杯	口 径 15.0 高 径 3.1	外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面ヨコナデのち体部筒状のミガキ。漆仕上げの可能性あり。	10YR5/3 に近い黄褐色 胎密 赤黒粒と白・黒耀粒微量 やや硬質	口1/5周
12 土師器 杯	口 径 12.0 高 5.1 底 5.2	粗練な作りで、全体に赤みあり。外面口縁部ヨコナデ。抜き痕あり。柔軟なつくりで曲されているらしく、凹面となる外面には2~3cmおきに工具を止めた痕跡が明瞭。体→底部ケズリだが、体部は無調整部分多い。底部は丸みを帯びた平底で、大きなケズリにより凸出する。内面底部ヘラナデのち体→口縁部ヨコナデ。口縁部には外面に近い位置に抜き痕あり。外面の工具を止めた痕跡に相当する部分には、工具痕はないが、ヨコナデを止めたわずかな痕跡が見られる。	10YR5/2 灰黄褐色 胎密 白耀粒少。砂粒と赤 釉・微粒微量 やや硬質	中央部床直上18cm 口1/2周, 体一部、 底完存 35



第304図 権現山遺跡SG5区SI-15(2)遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

13	土師器 鉢	口 径 11.7 高 径 7.4 最大 径 12.3	外体外部ケズリのちいれ部ヨコナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部ヘラナデ。体部上には、幅の狭いヘラナゲが多く集される。内面全体黒色処理。	2.5V7/3 浅黄 砂粒～細粒と白・黒 や中硬密 微粒少 や中硬質	北東部床土3cm 口～体1/5周 51
14	土師器 鉢	口 径 9.8 高 径 7.9 底 径 5.8 最大 11.8	外体口縁部ヨコナデ。体～底部ケズリのち全体密なミガキ。底部は未施装付。内面～体部小さなシェラ～状の微粒あり。内面は全体が極めて密なミガキで、口縁部は横方向。体部は横ないし斜め、底部は一方である。内面は黒色となる部分が多い。	10YR7/4 に近い黄褐色 や中硬密 白・赤・黒 黒粒微量 破面	東部築込直上 層部 赤粒と白・赤黒 はほぼ完全 81
15	土師器 高杯	口 径 13.6 高 径 2.4	外体口縁部ヨコナデのち体部密ナナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。外表面口縁～体部・内面全体密ナナデ。	7.5YR6/6 糖 や中硬密 白細粒少、赤黒粒微 量 や中硬質	中央部西寄り床土9 口～体1/4周 53, 62
16	土師器 高杯	口 径 14.0 高 径 7.4 最大 10.5	外体外面口縁部・胴部下平強いヨコナデのち体部体～底部・胴部ケズリ。ヨコナデの縁は段差となるが、ケズリにより失われる部分が多い。内面外口縁～体部ヨコナデ。底部ナデ。胴部下平ヨコナデのち上平ナデのちヘラナデ。胴部内面のみ炭素吸出による黒色処理。	10YR8/4 浅黄糖 や中硬密 赤・黒・灰 色・透明期粒と砂粒少 や中硬質	北西部床土1cm はほぼ完全 66
17	土師器 高杯	口 径 12.4 高 径 11.5 最大 12.1	外体外部口縁部・胴部下平ヨコナデのち体部体横方向のケズリ。胴部中位へのケズリのち縁部密一部と上平へのケズリ。ケズリは炭素支持部分多し。胴部中位に、修整土の削突によると見られる径7～8.5mm、深さ3.5mmの貫通しない孔あり。ケズリの前に穿孔される。内面外部ヨコナデのち炭射装の縁のみミガキ。体部下平ナデのち一部ヘラナデ。下平ヨコナデ。内面に広いミガキ状の縁が最も集される。残存部分は少ないが、ほぼ全面が仕上げられていたと見られる。	2.5YR5/8 明赤褐 や中硬密 黒・赤微粒多 や中硬質	東部築込直上 基部一部欠 90
18	土師器 小形土器	口 径 6.8 高 径 3.4 最大 径 5.7	浅い鉢形。外体口縁～体部密ナナデ。底部は平底で、表面磨削のため調整は不明。内面ヘラナゲ。口縁部には貫通する孔があるが、断面形は直線ではなく断面内でふくらんでおり、意図的に穿れたものかどうか明確には見えない。蓋指が取り付けられたとも見られる。孔径外径30～5.5mm、内径1.5～2.5mm。	10YR7/4 に近い黄褐色 や中硬密 白微～微粒少、赤黒 粒微量 や中硬質	口～体1/6周 破面
19	土師器 小形土器	口 径 7.6 高 径 4.2 最大 径 5.6	浅い鉢形。整形は高い。外体口縁～体部密ナナデ。底部平底ではほぼ無調整であり、植物繊維のような線状の圧痕がわずかに残る。内面口縁～体部密ナナデで、ナデの形状ごとに明確に区別。外体口縁部・内面全体黒色のたか黒褐色を呈する。	5YR6/6 糖 や中硬密 平透明期粒少、白・黒・赤粗粒微量 破面	中央部西寄り床土6cm 口～体1/4周 31
20	土師器 小形土器	高 径 3.1 最大 径 6.5	細頸な作り。外体体部わずかにナデ。粘土の艶あり。底部木炭焼。内面体～底部強ヘラナゲ。	10YR6/6 明黄褐 や中硬密 白細粒少、砂粒と や中硬質	中央部床土12cm 体～底1/2周 38
21	土師器 小形土器	高 径 3.1 最大 径 7.0	精良な胎土だが、調整は粗雑。底部広い鉢形となるものだろう。外体体～底部ナデ。内面体～底部ヘラナゲ。	2.5Y7/4 浅黄 緻密 赤黒微量 や中硬質	中央部北寄り床土15cm 口1/4周 57
22	土師器 小形土器	高 径 2.1 最大 径 5.4	底部1孔で、孔径は1.1cm。外体胴部下端～底部ナデ。内面胴部下端～底部ナデ。孔の周囲は上位および中位がケズリで、下位はナデである。	2.5YR7/6 糖 や中硬密 白細粒少 や中硬質	中央部床土15cm 底1/2周 54
23	土師器 小形土器	口 径 22.0 高 径 4.5	外体口縁部ヨコナデ。胴部上平ナデ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上端ヘラナゲ。	10YR6/4 に近い黄褐色 や中硬密 白・黒・砂粒微少、 黒・砂粗粒微量 や中硬質	中央部北寄り床土15cm 口1/4周 57
24	土師器 小形土器	口 径 19.4 高 径 4.3	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は結構の接合面から欠損する。	10YR6/4 に近い黄褐色 緻密 赤・黒・透明期粒微量 や中硬質	中央部西寄り床土13cm 口1/4周 58
25	土師器 小形土器	高 径 16.1 最大 径 17.2	表面の調整が著しく、調整が不明なところが大部分を占める。外体胴部下平ナデ。表面は平滑であり、ミガキの可能性もある。内面ナデ。胴部下平に接合面あり。	7.5YR7/8 黄褐 や中硬密 白・黒粒と白・黒・赤黒一微粒微量 や中硬質	カマド南の床土上 口下平、胴部欠 86
26	土師器 小形土器	口 径 19.9 高 径 10.5	外体胴部上平縦方向のケズリのち口縁部ヨコナデのち胴部上平ナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部上平ナデ。	10YR6/3 に近い黄褐色 粗い 白・黒・灰色粒と砂粒多 破面	北西部床土8cm 口～体1平1/3周 64, 65
27	土師器 小形土器	口 径 15.4 高 径 17.6 最大 15.6	外体口縁部ヨコナデ。胴部上端には無調整部分が残る。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナゲ。	10YR6/4 に近い黄褐色 や中硬密 白・黒・赤・砂粒粗 多。白・黒・赤・砂粒少、 赤・黒・砂粗粒微量 破面	東部築込直上。床土4cm 口完存、胴部欠 94
28	土師器 小形土器	口 径 20.5 高 径 24.6	外体口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリ。ケズリの上端は一定でおり、胴部上端が無調整のままとなる部分もある。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナゲ。	10YR6/3 に近い黄褐色 粗い 白・黒・赤粗粒多、砂粒 少 や中硬質	西側部に正立。床土5 ～26cm 口～体1平ほぼ完全 91, 92
29	土師器 小形土器	口 径 21.0 高 径 32.8 底 径 9.2	外体口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリのち胴部下端斜め方向のケズリ。底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラナゲ。胴部下平には接合面があり、内面には粘土の曇り目が見られ、ヘラナゲは強く集される。外面には整形の歪みが表れるのみで、調整の変化はない。胴部全体白色に均一～淡褐色粘土付着。	10YR6/4 に近い黄褐色 粗い 白・透明期～細粒多、 赤・黒・平透明期粒多 破面	西側部に倒立。床土7 cm 口完存、底1/2周、胴 土位完存。中位2/3周、 下位1/2周 92, 93, K
30	土師器 小形土器	口 径 20.0 高 径 34.0 (寛 33.5) 底 径 6.0	外体口縁部ヨコナデ・胴部下平縦方向のケズリのち胴部中位～口縁部下平縦方向のケズリ。口縁部と胴部の境にある段差は、ケズリにより失われるところあり。底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ。胴部上平ナデ。	5YR6/6 糖 粗い 砂粒～細粒多、砂粒・赤 粗粒少 や中硬質	中央部北寄り床直上 口～胴2/3周、底一 部欠 88, K
31	土師器 小形土器	口 径 21.0 高 径 39.6 底 径 6.4	外体口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリのち胴部下端横方向のケズリ。底部は一方のケズリで、ほぼ平底。内面口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラナゲ。結構あり。胴部中位～下平外面に褐色粘土がわずかに付着している。 [注記] 97, 98, 99, 100, K, カマド	10YR6/6 黄褐 粗い 砂粒～粗粒多 破面	壁口月井構築材。床土3 ～28cm ほぼ完全 注記5左欄
32	土師器 小形土器	口 径 22.8 高 径 38.0 底 径 5.6	外体口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリのち胴部下平ナデ。胴部下端横方向のケズリ。底部縦方向のケズリ。胴部下平のナデが集される部分は縁部と見られる。胴部上平と、それとは比較して径が小さすぎる胴部下平部を接合させている。内面口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラナゲ。胴部には結構な部分が残る。接合部分は厚く、結構な層がある。外体胴部中位や下に、帯状に白色粘土付着。	5YR7/8 糖 粗い 白・黒・透明期～細粒多、 白・赤黒と赤黒一微粒少 や中硬質	東部先端に倒立。床土7 cm 口完存、底1/2周、胴 土位完存 96



第305図 権現山遺跡SG5区SI-15(3)遺物

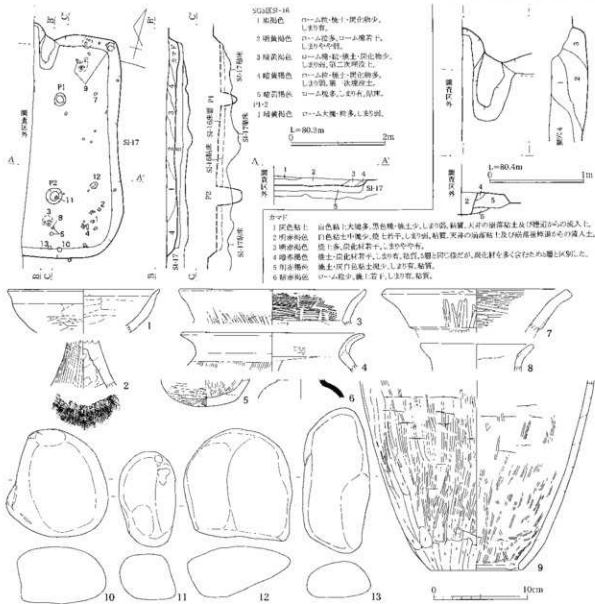
第8章 権現山遺跡SG5区

33 土師器 甕	高 10.6 底 7.0	胴部ト平横方向のケズリ、底部多方向のケズリ、内面胴部ト平～底部へラナズ。	7.5Y7/6 橙 粗い 白・赤・粘粒多、砂質少 硬質	カマド東側床土14～25cm 胴ト平～底ほび充存 94、95、15K、貯蔵穴
34 支脚	高 6.5 土直 4.0 下端 復7.2	調整は高く多岐、粘土の層などが顕著。外面上面および側面粗いナデ。内面は強いナデで、中心から外へと粘土を押し出している。下端はナデの単位ごとに突出するため、花弁状になる。	2.5Y8/8 黒赤褐色 やや細密 白炭粒多、赤粘粒豊富 やや硬質	1/3割
35 須石器 甕	高 9.1 底 7.2	内外面口縁部クロコナデのち外面磨崖状瓦文。軟質のため表面の磨崖滑し。	2.5Y8/3 淡黄褐色 やや細密 灰色粗～細粒少 やや軟質	口一部
36 石 磁石	長 13.2 幅 10.5 厚 2.3 重 413.4	縦長、板状の磁石。表面両面が曲面であり、側面と上面は無調整の切削面のまま、やや磨滅する。表側は全体に平滑で、中央は使用により明確に凹凸が残り、周囲には、切削加工時の刺刺痕がわずかに残る。表面は円の左辺中央が最もくぼんでおり、本来はより大きな磁石であったことがわかる。表裏ともくぼんでいるところが例外加熱により赤変する。	5Y6/2 灰オリーブ 細密 ホルンフェルス	南岸溝底土11cm 一部欠 13
37 石製品 紡錘車	径 4.0～4.2 厚 1.9 重 44.5	上面は凸面で、丁寧な調整のち、軸に巻き付く方向の擦痕が残る。側面は縦色に切削したのち、上端の幅4mmほどの部分と下端の横径はほぼ調整のいは使用のため平滑となっている。側面には、ヘラケズリに似た切削時の工具痕が残る。下面はわずかに凸面で平滑に磨滅されており、上面と同様に巻き付く方向の擦痕が残る。孔径は上面で7.54～8.56cm、下面で7.34～8.25cmであり、明確な赤はない。両面穿孔かどうかは不明。	10Y8/0/3 に近い黄褐色 粗粒 滑石	南岸溝底土28cm 完形 14
38 石器 磨物石	長 12.3 幅 6.3 厚 3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量432.5g。	7.5Y6/1 灰 やや粗い 安山岩	中央部東寄り床直土 完形 46
39 石器 磨物石	長 幅 11.2 幅 5.7 厚 2.1	河原石。上端に割線あり。現存重量87.8g。	5Y6/3 オリーブ質 やや細密 流紋岩	南岸溝底土14cm 一部欠 10
40 石器 磨物石	長 10.0 幅 5.5 厚 5.7	河原石。特に加工の痕跡なし。上端加熱により赤変。重量654.4g。	2.5Y7/3 淡黄 やや細密 流紋岩	南岸溝底直土 完形 29
41 石器 磨物石	長 15.8 幅 5.3 厚 4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量547.2g。	N7/ 灰 細密 安山岩	南岸溝底土14cm 完形 6
42 石器 磨物石	長 15.5 幅 7.1 厚 3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量559.3g。	7.5Y7/2 灰白 やや粗い 安山岩	南岸溝底土15cm 完形 9
43 石器 磨物石	長 15.2 幅 5.4 厚 6.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量600.4g。	N6/ 灰 やや粗い 砂岩	南岸溝底直土 完形 12
44 石器 磨物石	長 15.5 幅 6.2 厚 4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量577.8g。	5Y7/2 灰白 やや粗い 流紋岩	南岸溝底直土 完形 4
45 石器 磨物石	長 16.3 幅 6.5 厚 3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量499.2g。	5Y6/2 灰オリーブ やや細密 安山岩	南岸溝底直土 完形 11
46 石器 磨物石	長 15.6 幅 5.6 厚 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量378.7g。	10Y8/6/6 明黄褐色 やや細密 流紋岩	カマド東側床26cm 完形 9
47 石器 磨物石	長 14.1 幅 6.5 厚 3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量435.0g。	5Y6/3 オリーブ質 細密 安山岩	南岸溝底土33cm 完形 16
48 石器 磨物石	長 10.5 幅 5.7 厚 3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量524.9g。	10Y8/6/6 明黄褐色 やや粗い 流紋岩	南岸溝底土11cm 完形 18
49 石器 磨物石	長 14.2 幅 6.0 厚 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量556.3g。	N6/ 灰 細密 安山岩	南岸溝底直土 完形 5
50 石器 磨物石	長 13.6 幅 6.4 厚 3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量474.4g。	2.5Y7/1 灰白 やや細密 安山岩	南岸溝底土11cm 完形 10
51 石器 磨物石	長 14.7 幅 5.8 厚 3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量453.3g。	2.5Y7/2 淡黄 粗い 輝石	南岸溝底直土 完形 28
52 石器 磨物石	長 13.6 幅 5.7 厚 3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量328.3g。	5B/4/1 暗青灰 細密 ホルンフェルス	南岸溝底土12cm 完形 2
53 石器 磨物石	長 12.9 幅 5.6 厚 3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量384.6g。	5Y6/2 灰オリーブ やや粗い 流紋岩	南岸溝底直土 完形 27
54 石器 磨物石	長 13.7 幅 4.7 厚 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量403.8g。	2.5Y6/1 オリーブ灰 やや粗い 砂岩	南岸溝底土24cm 完形 15
55 石器 カマド支脚	長 21.8 幅 7.8 厚 7.7	河原石。特に加工の痕跡なし。ほぼ全面が加熱により赤変しているが、表面より表面の方がより赤変している。円下端に黒色物質の付着と焼けほじりあり。現存重量878.2g。	2.5Y8/8 黒赤褐色 やや粗い 流紋岩	カマド裡直土8cm 一部欠 80

SG5区 SI-16 (第306図、写真図版31・180)

[位置]SG5区中央部北寄りの15-16グリッド。西半は調査区外。同じく古墳中期の建物は北にSI-13がある。古墳中期のSI-17を切る。

[規模と形状] 南東隅が丸いかほぼ方形と想定され、南北の中軸線はN-13⁺-W。東西長は1.85m以上、南



第306図 権現山遺跡 SG5区 SI-16 遺構・遺物

北長4.71m。壁は外傾し、残存高14～18cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。

SI-17の床面より上方に、ローム粒が多い暗黄褐色土で厚さ4～15cmの貼床を施す。貼床除去中に、東側主柱穴と推定されるP1・P2を検出した。P1は径27×25×床面から深さ34cm、P2は径35×33×床面から深さ46cm。P1-P2の柱間は2.04m。

【カマド】主柱穴の位置などから北壁中央より少し東に位置すると思われる。カマド西半は調査区外。両袖幅は推定80～90cm、煙道先端から焚口部まで100cm。袖は灰褐色粘土主体の4～6層で構築する。火床はほぼ平坦で、床面より少し窪む。煙道～燃焼部に、焼土多量と炭化材若干を含む流入土の3層、その上に天井の崩れた灰褐色粘土塊が多い1・2層が堆積する。煙道先端は北壁より25cm突出し、急に上がる。

【覆土】自然埋没で、各層ともさほど締まらない。初期堆積土の4層にローム・焼土・炭粒が多い。

【遺物出土状況】全域に見られる。床面からかなり浮く破片が主体で、杯(1)・高杯(2)・甕(9)と、礫・編物石(10～13)が床に近い。潰れた大きな土器は甕(9)だけで、他はあまり大きくない破片である。

先行するSI-17の遺物が多く混入している可能性があり、貼床出土遺物は特にその可能性が高い。甕(3)

第8章 権現山遺跡 SG5 区

も SI-17 と遺構間接合しているので混入の疑いがある。

[出土遺物] 遺物は少ない。高杯はハズ状脚部だけが見られた(2)。6 は初期須恵器または古式須恵器の甕。貼付口縁の壺(7)は、SG5 区では SI-100 などにある。大形甕(9)は図示した以外の破片がほとんどない。図示以外の土師器と焼粘土塊は小破片ばかりで合計 360 片・2,500g。その内訳は杯 53 片・272g、高杯 5 片・48g、壺類 295 片・2,138g、甕 3 片・23g、焼粘土塊 4 点・19g。図化以外の遺物では、椀形杯は内堀口縁と内斜口縁の破片が見られ、模倣杯はない。約 3 本/1cm 程度の粗いハケで調整した裏片がある。

第 174 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-16 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または原料)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 径 16.0 高 径 4.6	外面杯口縁部コナデ、体部上半無調整。体部下平は光沢を持つフズリ。内面は口縁部コナデ、体部は強いナデ。	75YR5/4 に近い黄 やや細密 白・赤細粒多、白 ～粗粒微量 やや破片	南東部床土 3cm 杯口～体 1/6 貫 23
2 土師器 高杯	高 径 5.0	外面体部上半縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキのち上端に連続するハケ痕。内面は強いナデで、残存部の下端にヘラナデが見える。	5YR5/6 明赤黄 やや細密 赤・黒細粒微量 やや破片	南東部床土 2cm 脚土上 2/3 貫 20
3 土師器 甕	口 径 19.8 高 径 3.9	外面口縁部 4 本/1cm のハケのちコナデ。内面口縁部 4 本/1cm のハケのち強いコナデ。胴部上端はわずかに残存しており、調整はヘラナデ。外面口縁部保存着。	75YR5/3 に近い黄 やや細密、白細粒多、白～粗 粒少 やや破片	南東部床土 5cm と SI-17 中 部床土寄り床土 17cm 口～頸 1/6 貫 35、87
4 土師器 甕	口 径 19.4 高 径 4.1	外面胴部上端 5 本/1cm のハケのち口縁部コナデ。内面口縁部コナデ、胴部上端へラナデ。	10YR2/1 黄 やや細密 砂粒～細粒と白細粒 少、砂粒微量 やや破片	南東部床土 11cm 口 1/6 貫 25
5 土師器 鉢	高 径 2.9 底 径 6.7	丸底だが、体部との境で角度が変化する。外面体～底部ケズリのち広く太いミガキ。内面へラナデのち密で広く太いミガキ。	10YR8/2 灰黄青 やや細密、白・黒・平透明粗粒多、 多量微量 破片	南部床土直上 体下半 1/2 貫、底完存 32、33
6 須恵器 甕	高 径 2.1	胴部上半内外面ともロククロナ。外面は灰白色の降灰を薄くかぶる。破面は暗赤色。	10Y6/1 灰 緑密 白・黒細粒微量 破片	胴上半一部
7 土師器 壺	口 径 20.0 高 径 4.6	口縁部外面に貼土付付けによる段を持つ複合口縁。外面口縁～胴部コナデのち縦方向のミガキ。内面口縁上端～胴部コナデのち縦方向のミガキ。	10YR6/4 に近い黄青 やや細密 白・赤細粒と黒・ 透明・砂粒微量 やや破片	東部床土 16cm 口 1/8 貫 9
8 土師器 壺	口 径 12.0 高 径 2.8	外面口縁部コナデ。内面胴部ナデのち口縁部コナデ。内面に接合痕あり。	10YR6/3 に近い黄緑 細密 白細粒と赤・黒細粒少 やや破片	南東部床土 口 1/6 貫 33
9 土師器 甕	高 径 20.0 底 径 9.6	無底式。胴部内外面には、縦横みの凹凸が残る。内外面とも、磨滅のため調整不明瞭な部分あり。外面胴部縦方向のケズリのち縦方向のミガキ。内面へラナデのち縦方向の密なミガキ。底部へラナデにより面取りされる。	10YR7/3 に近い黄緑 細密 砂粒～微粒少、赤細粒微 量 やや破片	北東部床土 8cm と北東部 床直上 脚口縁～底 1/5 貫 1、3
10 甕	長 11.3 幅 10.9 厚 6.0	河原石。背に加工の痕跡なし。重量 1098.1g。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンブルス	南部埋埋床土 2cm 完形 30
11 甕	長 10.0 幅 6.0 厚 5.3	河原石。背に加工の痕跡なし。右上に発掘調査時のものと見られる欠損あり。重量 416.6g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 火山片	床面直上 脚口縁～底 1/5 貫 19
12 甕	長 11.5 幅 11.4 厚 5.3	河原石。背に加工の痕跡なし。重量 919.2g。	10YR6/3 に近い黄緑 やや緻密 チャート	東部床土 5cm 完形 16
13 石部 編物石	長 15.2 幅 7.1 厚 3.7	河原石。背に加工の痕跡なし。重量 599.2g。	10YR6/2 灰黄青 緻密 火山片	南部埋埋床土 3cm 完形 31

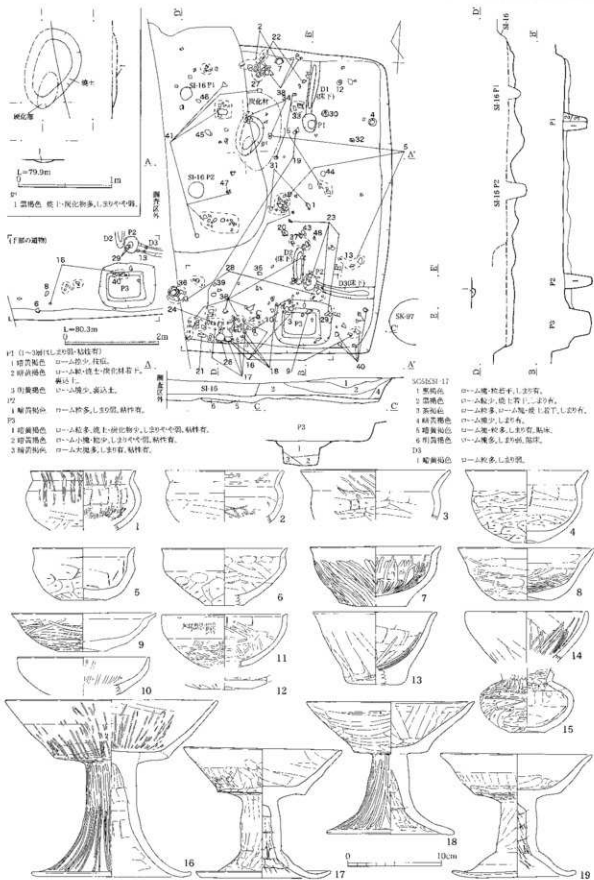
SG5 区 SI-17 (第 307・308 図、写真図版 31・32・180)

[位置] SG5 区中央部北寄りの 14-16、15-16 グリッド。西半は調査区外。同じく古墳中期の建物は北と南に SI-13・116 がある。古墳中期の SI-16 に北側を切られる。

[規模と形状] 方形と想定され、南北の中軸線は N-2°-W。東西長は 4.75m 以上、南北長は 6.47m。壁は外傾し、残存高 20～42cm。床は平坦で、柱穴 P1-P2 ラインよりも西側が踏み固められて特に硬化する。掘方から深さ 6～18cm で底面に緩い凹凸があり、ローム粒・塊の多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

東側主柱穴と推定される P1 は径 39×29×深さ 50cm、P2 は径 34×21×深さ 60cm、P1-P2 の柱間隔は 3.32m。貼床除去後に確認した間仕切溝 D1～D3 は、北壁と P1 を結ぶ D1 が長 110×幅 12～21cm、その延長上で P2 の西にある D2 は長 78×幅 18～21cm、東壁と P2 を結ぶ D3 は長 128×幅 17～26×深さ 9cm。

南東隅の貯蔵穴 P3 は東西軸で 117×94×床から深さ 53cm。開口部は幅 10～20cm で床から約



第307図 権現山遺跡SG5区 SI-17(1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

10cm 浅く掘り、下部は 82 × 61cm で直立壁・平底の長方形。上層に焼土・炭を含み、3層に壁の崩れたローム塊が多い。

[炉] 中央部北側にあり、長径 85 × 短径 56cm。床面からの深さ 5cm で浅く掘り込む。SI-16 の掘形による攪乱は免れたが、北～西部プランは明瞭に把握できなかった。南端の 40 × 20cm の範囲は特に焼土が顕著に堆積して非常に硬化し、北部はあまり焼けていない。が周囲の床面に炭化物が多く堆積していた。

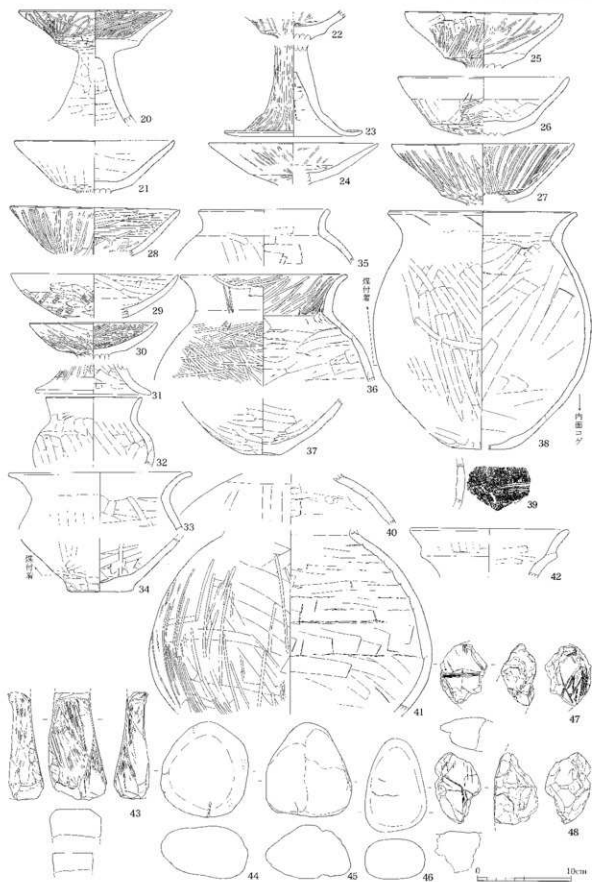
[覆土] 自然埋没で、最下層に焼土が混じる。

[遺物出土状況] 床面近くから上へ 20cm 以上まで、高低差を持って遺物が多く出土した。貯蔵穴西側の竪穴南壁寄りに多い。15・32・41 が床付近にある。P3 付近の遺物は周囲の床面より上方にある。

[出土遺物] 遺物が特に多い。椀形杯と高杯が主体で、浅く開いた椀形杯を含み、模倣椀(10・11)はごく少ない。高杯はやや器高が低いが、短脚高杯はない。小形壺は、偏球(算盤目)形で小さな体部が目立つ。36 は頸部に刻線がある。壺類の破片が中に、胴部が少し伸びた甕(38)はあるが、典型的な長胴甕はない。1cm あたり 3～4本の粗いワケ調整製の破片が少し見られた。大形衝はない。42 は崩れた二重口縁鉢。図示以外の土師器と焼粘土塊合計 1,243 片・11,302g の内訳は杯 541 片・3,169g、高杯 217 片・2,749g、小形壺か鉢 39 片・404g、壺類 443 片・4,941g、焼粘土塊 3 点・39g。図化以外の遺物には、脚柱部や杯底部で見ると高杯が 7 個体、杯・鉢は底部が 9 個体(内訳は上底鉢 6・平底 2・突出する底部 1)、大形壺・甕は底部が 2 個体ある。43 は粘板岩製品の砥石。SG5 区では SI-6 などに粘板岩製品がある。

第 175 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-17 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm × g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.1 底 残 5.3 最大 復 12.2	外面口縁部ヨコナデのち口縁～体部縦方向の線ならミガキ。体部下平クエリ。体部下平表面の前向きとし、調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ。体部縦方向のち口縁～体部縦方向のミガキ。上縁～体部上平は線。体部下平はややゆに施とされる。内面グレータ一状に網流。	5YR6/6 橙 やや暗黒 白・黒・砂粒較少、 黒線～粗粒と赤黒粒微量 やや黄緑	中央部車寄り床土 24cm 口～床 1/5 弱、底定存 90、新破穴
2 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 5.5	外面口縁～体部下平ヨコナデ。体部下平クエリのちナデ。体部中位ヨコナデ下平に無調整部分あり。内面体部ナデのち口縁～体部ヨコナデのち口縁部縦方向。体部縦位の線ならミガキ。内面は外面口縁～体部一部保留。	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗黒 白・半透明細粒多、 苔斑明粒較少、赤黒粒微量 やや黄緑	北明原床土 12～13cm 口～体 1/2 弱 120, 121、新穴
3 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 5.3	外面口縁部ヨコナデ・体部下平なケズリのち口縁～体部斜位の規則的な線ならミガキ。内面口縁部ヨコナデ。体部側へハナナデ。内面体部はヘラツダでさらしヘラツダ工具によりツツつけられたらしく、調整により高くした部分のみ見訳がある。	2.5Y6/3 に近い黄橙 やや暗黒 白・赤・半透明細粒 微量 微量	新破穴床土 73cm 口～胴土 1/6 弱 124
4 土師器 杯	口 13.0 高 7.7 底 3.0	外面口縁部ヨコナデのち体～底部突起を持つケズリ。底部は小さくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。底部ケズリのち体部へハナナデ。体部下平に接合痕あり。	10YR7/6 明赤陶 やや暗黒 赤黒粒多、白・砂粒 較少 やや黄緑	集約原床土 7cm 口～体 1/4 弱 106
5 土師器 杯	口 復 10.7 高 5.4 底 4.8 最大 10.9	器体整形。表面調整とも粗く、小形土器に近い。また、敷貫のため調整が不明瞭な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。底部沖流しているが、ケズリのちナデで見られる。内面口縁部ヨコナデ。体～底部へハナナデ。 [注記] 80, 88, 98, SI-16 ベルト	10YR6/3 に近い黄橙 やや暗黒 白・黒・赤微粒較少、 白・黒黒粒微量 微量	東部床土 13cm と中央部 床土 5～9cm 口～体 1/4 弱、底 3/4 弱 注記は別
6 土師器 杯	口 復 13.2 高 6.0 底 4.0	外面口縁～体部下平ヨコナデ。体部中位ナデのち下平クエリ。底部ケズリのちナデで、くぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部間に、微道直前、後が認められる。	2.5YR5/8 明赤陶 やや暗黒 白濁～微粒多、赤・ 黒線細粒 少 やや黄緑	南部原床土 11cm 口～底 1/4 弱 137
7 土師器 杯	口 13.8 高 6.3 底 7.0	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのちミガキ。底部ケズリのちミガキで、やや凸凹の形を呈。内面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち放射状の線ならミガキ。ミガキは内外面ともない。	7.5YR7/4 に近い黄橙 やや暗黒 白・黒・透明明粒少 少、赤黒～粗粒微量 微量	北明原床土 9cm 口～体 2/3 弱、底定存 117、新破穴
8 土師器 杯	口 14.6 高 5.6 底 5.8	磨練のため、調整不詳のところがある。胎土中に白色土をブロック状に含む。外面口縁部ヨコナデ。体部下平クエリのち体部むろかなナデの線ならミガキ。底部はケズリのちミガキで、大きくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ナデのちミガキ。体部は斜位で線。底部は一方で密に施される。器体の調整が粗く、全体の歪み、表面の凹凸などあり。9 に類似。	5YR6/8 橙 やや暗黒 透明明粒少、赤・黒 線細粒と白微粒 少 やや黄緑	南部床土 9～11cm と新 破穴床土 73cm 口～体 1/3 弱、底定存 45, 50, 51, 124, 135
9 土師器 杯	口 15.2 高 4.1 底 4.6	胎土中に、白色土がマール状ないしブロック状に混じる。調整不詳の部分がある。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち縦方向の太いミガキ。底部ケズリのちミガキで、大きくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。器体の調整が粗く、全体の歪み・表面の凹凸などあり。8 に類似。	7.5YR7/6 橙 やや暗黒 赤黒～細粒と白・ 黒・赤・砂粒微量 少 やや黄緑	新破穴床土 55cm 口～体 1/3 弱 31、新破穴
10 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.0	表面の磨練が悪い。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面ヨコナデ・ナデのち放射状のミガキ。ミガキは本来施に施されていた可能性あり。	5YR7/6 橙 やや暗黒 赤黒粒と砂粒較少 やや黄緑	南部床土 9cm 口～体 1/3 弱 43
11 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 5.5	外面口縁～体部 8 本 1/cm のハケのち口縁～体部上縁部ヨコナデ。体部下平傾いたナデ・体部下平クエリのち体部中位～下平や線ならミガキ。内面口縁部上面の平坦面のみヨコナデ。体～底部へハナナデのちミガキ。内外面ともミガキは見訳を持たず、単位不明瞭。	2.5YR5/8 明赤陶 やや暗黒 白濁～微粒と黒微粒 少 微量	口～体 1/4 弱



第308図 梅現山遺跡SGS区SI-17(2)遺物

第8章 権現山道跡 SG5区

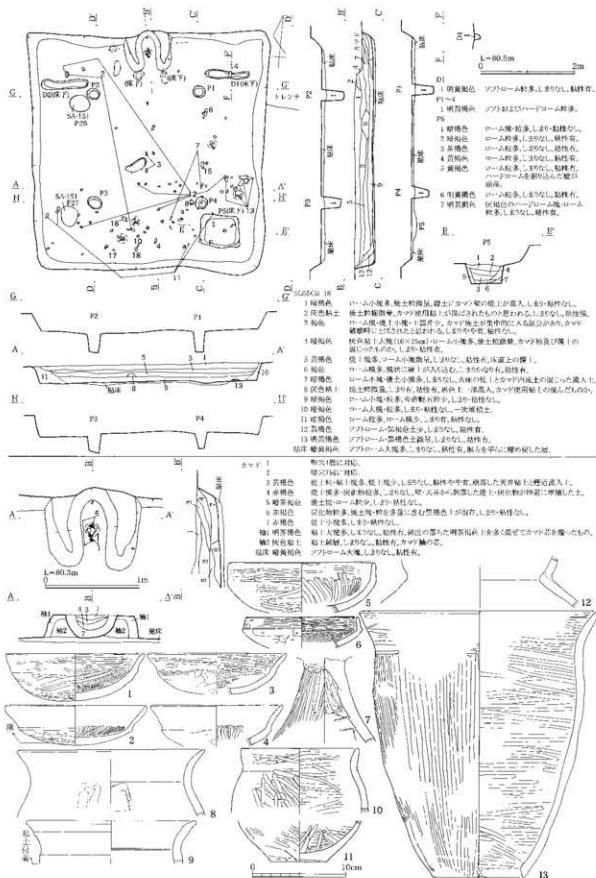
12	土師器 鉢	高 Ⅷ 1.3 底 5.5	外面は表面が磨ishedしているため、調整が不明確なところが多い。外面体部 下平~底部ケズリのちリナデ。底部はくぼみを持ち、中央の径1.2cm位の 部分がさらにくぼむ。内面ケズリの丸光沢を持つナデ。円錐状に底辺のみ が突出しており、縁内側から欠損したものと見られる。	5YR5/6 明赤褐 やや暗い 赤粉少、赤粉粒多、白・砂粒 少、透明微粒量 やや軟質	北東部床土3cm 底完存 109
13	土師器 鉢	口 Ⅷ 13.0 高 7.6 底 6.4	やや粗粒の土質。内面口縁部ヨコナデ。体部はわずかなナデで、細かな私 たがひが残る。底部ナデ。底部の厚部は厚く大きく突出する平底で、中央 がややくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラナデのちい縦線状の ミガキ。	7.5YR7/8 黄褐色 暗赤 赤粉~暗粒と白微粒少 白・黒	東部床土13cmとD3付 近 口~唇2/3周、 杯一部、体1/3周、底 1/2周 80, 129
14	土師器 小形壺	口 Ⅷ 12.8 高 Ⅷ 5.4	外面口縁部上平ヨコナデ・下平ケズリのち丁寧なナデ。ミガキの可能性が あるが、単位はつかない。内面口縁部ヨコナデのち一部ナデの綺麗な ミガキ。	5YR6/6 暗 暗赤 白微~暗粒と黒粒~暗粒 微量 中や硬質	口1/6周
15	土師器 小形壺	高 Ⅷ 6.9 底 2.9~3.7 底 9.8	外面口縁部上平ミガキ。製部上平縦方向のミガキのち製部下部方向の肌質の あるケズリ。底部ケズリで、横円錐にくぼむ。内面口縁部下平ケズリ ミガキ。製部上平軌ナデで、粘土の縦線質、縦線微あり。製部下平~底 部ヘラナデ。	5YR7/8 暗 中や暗赤 黒粒少、白・赤粒 少、黒粉多 やや硬質	中央部床土4~25cm 口下平~底欠 口11, 111, 113, S1-16 部より
16	土師器 高杯	口 22.6 高 18.6 脚 17.0	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデ・体部下端~底部ケズリのち口縁~体 部縁ならぬ方向のナデ。製部上平縦方向の密なミガキ。製部下平ヨコナデ のち縦方向の綺麗なミガキ。内面杯部口縁~底部ヘラナデのち口縁部軌い ヨコナデのち肌質のやや綺麗なミガキ。製部上平ナデ。下平ヘラナデの ちヨコナデ。	7.5YR6/6 暗 中や暗赤 白・黒・赤粒~暗粒 多、砂粒少 やや硬質	南部床土4~13cmと貯 蔵穴上143~55cm 口~唇2/3周 22, 50, 53, 59, 124, 125, 136, 貯蔵穴
17	土師器 高杯	口 16.7 高 13.7 脚 14.3	内面中上、ミガキは使用されない。外面杯部体~底部縦方向のナデのち 口縁部ヨコナデ。体~底部の接合付近ケズリ。体部調整後の根の痕の当り あり。製部縦方向のナデのち脚部ヨコナデ。内面杯部体~底部縦方向 のヘラナデのち口縁部ヨコナデ。製部上平ナデで、縦線微・粘土 のちより肌質。下平ケズリのちヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 平 平透明微粒多、赤粒 少、砂粒少 やや硬質	南部床土9~12cm 口・脚部一部、底 48, 51, 53, 59, 貯蔵 穴
18	土師器 高杯	口 17.4~ 17.7 高 13.9 脚 13.6	杯部はナデのみ調整される。外面杯部口縁部ヨコナデのち体~底部ナデで、 製部下平軌ナデのち製部全体縦方向のミガキ。ミガキは強く磨かれて おり、上平はナデに平で、中央はやや粗となる。内面杯部口縁部軌いヨコナ デのち口縁~底部ナデ。口縁端部は内側に面を持つように調整される。製部 上平縦方向のナデ。下平ヘラナデのちヨコナデ。	5YR6/6 暗 中や暗赤 白・赤粒~暗粒少、 白・赤微粒量 やや硬質	南部床土3~12cm 杯口4.5周、杯体~脚 上平完存、脚上平1/4 周 38, 48, 50, 51, 53, 63, 貯蔵穴
19	土師器 高杯	口 Ⅷ 16.0 高 13.2 脚 13.0	外面杯部体部縦方向のナデ・底部ナデのち口縁部ヨコナデ・体部下平~底部 ケズリのあるケズリ。ケズリは極を明確にするように磨かれており、一部 体部の磨り出し部分にも及ぶ。製部下丁寧なナデのち下平ヨコナデ。内面 杯部口縁~体部ヨコナデのち底部ナデ。製部上平軌ナデで、縦線微・し ぼり肌質。製部下平ヘラナデのちヨコナデ。	2.5YR5/4 暗 中や暗赤 砂粒~暗粒少、白・ 赤微粒微量 微質	南部床土7cmと北東部土 5cmとS1-16の両片が 杯口~体1/2周、底~ 脚上平完存、脚上平2/3 周 60, 97, 貯蔵、S1-16覆土
20	土師器 高杯	口 Ⅷ 16.2 高 Ⅷ 11.9	外面杯部体部縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ・体部下平~底部ケズリ のち口縁~体部縁ならぬ方向のミガキ。製部上平ナデ。内面口縁~体部ヨ コナデのち口縁~底部ミガキ。口縁~体部は斜め。底部は一方のミガキ。 外面全体、杯部内面に磨付。	2.5YR5/4 暗 暗赤 白微粒少、白微~暗粒 少、黒・黒粉微粒量 微質	中央部床土7cm 杯口~体1/3周、底~ 脚上平完存 84, S1-16 No.22
21	土師器 高杯	口 Ⅷ 17.0 高 Ⅷ 5.6	杯部口縁~体部の調整されない。外面体部縦方向のナデ。口縁部ヨコナデ。 底部縦方向の丁寧なケズリのち縁付付に横方向のケズリ。内面体~底部ヘ ラナデ。口縁部ヨコナデ。	10YR5/4 浅黄橙 中や暗赤 白微粒少、赤粒~暗 粒と黒微粒量 微質	南部床土11cm 杯口~体1/4周、底1/2 周 56
22	土師器 高杯	高 Ⅷ 3.2	杯部内面磨減著しく、調整不明確。外面杯部体部ナデのち縦方向の綺麗な ミガキ。底部縦方向のナデのち横方向のナデのち一部体部から続くミガキ。 内面ヘラナデのちミガキ。密なミガキと思われるが、不明瞭。	5YR6/8 暗 中や暗い 黒微粒と白微~微粒 多 やや硬質	北部床土11~12cm 杯体下平3/4周、底完 存 113, 121, 貯蔵穴
23	土師器 高杯	高 Ⅷ 9.6 脚 Ⅷ 14.5	外面製部下平ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミガキは上平~中位は密で、 下平はやや緩くなる。内面杯部上平ケズリ、下平ヨコナデ。上平のケズ リは、上縁にまで達する。	7.5YR7/6 暗 中や暗赤 白・黒・砂粒微少、 白・黒・赤微粒量 中や軟質	D3付近床土10cm、貯蔵 穴上162cmが埋合、P2 付近床土10cmと中央部 床土18cm 脚1/3周 29, 34, 75, 85
24	土師器 高杯	口 Ⅷ 17.9 高 Ⅷ 4.5	杯部内外面とも表面の磨減著しい。外面体~底部ナデ。口縁~体部上平ヨ コナデのち口縁~底部ミガキ。口縁~体部は縁。底部は中や中平と見られ る。内面口縁~体部ヨコナデ。底部ヘラナデのちミガキ。ミガキはむか しお認められないが、本来は密に磨かれていたものと推測される。	7.5YR6/6 浅黄橙 中や暗赤 赤微粒と砂粒~暗粒 少、白・黒微粒微量 軟質	南部床土9cm 杯口~体1/4周、 59, 貯蔵穴
25	土師器 高杯	口 Ⅷ 16.6 高 Ⅷ 5.8	内面口縁部ヨコナデのち体~底部縦方向上体のケズリのみミガキ。内面口 縁部ヨコナデ。体~底部ヘラナデのち縦方向上体のやや緩やかなミガキ。ミ ガキは微粒状主体で、底部は密に磨かれる。	5YR6/8 暗 中や暗い 砂粒微少、白・赤粒 少~微粒状主体 やや硬質	杯口~体一部、底1/2 周 脚体
26	土師器 高杯	口 18.0 高 Ⅷ 6.2	外面杯部口縁~底部縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ・底部外側の縁付付近 を中心に横方向のケズリ。体部のごく一部にケズリあり。底部の磨土は他の 部分よりも白いものであり、杯部と脚部で異なる磨土としての可能性が ある。内面杯部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。全体に作りは密で、密あり。 口縁部はわずかに内磨する。	5YR7/8 暗 中や暗赤 赤微粒と白微粒少、 砂粒微量 中や硬質	南部床土15cm 杯部一部欠 54
27	土師器 高杯	口 19.2 高 Ⅷ 6.5	外面杯部口縁部ヨコナデのち体~底部ケズリのち体部縁ならぬミガキ。ケズ リは体部は縁、底部は丁寧に磨かれる。内面体~底部ヘラナデのち口縁 ~体部ヨコナデのち口縁~体部中や緩やかな縦方向~底部密な1方向のミガ キ。	5YR5/6 明赤褐 中や暗い 赤微~暗粒多、白微 粒少 中や軟質	北東部土8cm 杯一部欠 118
28	土師器 高杯	口 Ⅷ 17.8 高 Ⅷ 5.0	外面杯部口縁部ヨコナデ。体部下平ヘラナデのち口縁~体部縦方向の綺麗な ミガキ。内面杯部口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデのち口縁~体部上平横 方向のミガキ。体部下平縁ならぬ多方向のミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 暗赤 赤微粒と白微粒微量 微質	D3付近床土10cmと南部 床土12cm 杯口~体1/4周 34, 67, 脚体
29	土師器 高杯	口 17.6 高 Ⅷ 4.6	内面口縁部ヨコナデのち体~底部丁寧なケズリ。クロウラー痕あり。内 面口縁部上平ナデ。口縁部付近はヨコナデがあったと思われるが、ヘラ ナデにより全く確認できない。	10YR7/7 に近い黄赤 暗赤 黒微~微粒少、赤微粒 微量	南部床土62cmとP2上 の杯付近土灰床土 口~体4/5周 29, 131, 142, 貯蔵穴
30	土師器 高杯	口 13.4 高 Ⅷ 3.9	破片・磨損顕著の高杯。外面口縁部ヨコナデのち体~底部丁寧なケズリ のち縁ならぬミガキ。内面口縁部ヨコナデ。体~底部ナデのち口縁~体部横 方向、底部一方のミガキ。ミガキは密だが、微粒がわずかなため密付 がゆい。	10YR7/4 に近い黄赤 暗赤 白・赤微粒微量 微質	北東部床土1cm 杯部一部欠 103

31 土師器 高杯	高 残 3.2 脚 12.0	外面胴部下半強いヘラナデのち下半コナデのち緩らな履方向のミガキ。内面 脚部下半強いヘラナデのち下半コナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐色 やや細粒 砂粒・細粒少。黒粒 と白・赤粒数量 やや散見	中央部床土 17～24cm 脚下半平足存
32 土師器 小形甕	口 残 10.2 高 残 7.4 最大 残 12.8	胴体のあみが目立つ。外面口縁～胴部上半ヘラナデのち口縁部コナデ。 内面口縁部コナデ。胴部上半ナデで、粘土の膜あり。外面口縁～胴部上 半・内面口縁部上半平足存。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粒・細粒と白細粒 少。砂粒数量 やや散見	東部床土 4cm 口～胴上半 1/4 周 105
33 土師器 甕	口 残 19.4 高 残 6.2	外面口縁部コナデ。胴部上履方向の丁寧なヘラナデ。内面口縁部コナ デのち胴部上半強いヘラナデ。外面口縁～胴部上半平足存は残るほか、表面 に細かなヒビが入っている。	10YR6/4 にぶい黄褐色 やや粗い 白細粒多。白粒～粗 粒数量 散見	北西部床土 26cm 口～胴上半 1/6 周 102
34 土師器 甕	高 残 5.7 底 7.0	外面胴部下半ナデ。底部ケズリで、突出する平底。内面胴部下半～底部 ヘラナデのち一部分ナ。外面胴部下半には膜が付着するほか、表面に細かな ヒビが入っている。表面の特徴は、33の型に類似しており、同一個体の可 能性がある。内面胴部下半～底部薄くコゲ付。	10YR5/3 にぶい黄褐色 やや粗い 白・透明・細粒と黒 粒～細粒少 やや散見	伊予志床土 5cmと伊東岡 の床土 5cm 胴下半平足存 98, 101
35 土師器 甕	口 残 13.8 高 残 5.9	外面胴部上半履方向のナデのち口縁部コナデ。内面口縁部ヘラナデのち コナデ。胴部上半強いヘラナデ。外面口縁～胴部上半平足存。	5YR5/6 明赤褐色 細粒 赤粒粗と白細粒数量 散見	中央部南寄り床土 15cm 口～胴上半一部 70
36 土師器 甕	口 残 17.6 高 残 11.3	内面口縁部上半コナデ。下半強いコナデ。胴部上半ナデのちミガキ。 口部には、3本の線刻がある。上から下へ工具を動かしたらしく、胴部 にわずかな線刻が付けられている。内面口縁部ヘラナデのちコナデの ち緩らな履方向のミガキ。胴部上半はケズリで、上端はヘラナデとなる。 胴部には、しぼり目と見られる粘土の膜が目立つ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粒粗。澱と 透明明粒と白・黒・赤粒粗数量 やや散見	南部床土 9cm 口～胴。胴上半 1/2 周 68
37 土師器 甕	高 残 6.0 底 3.8	外面胴部下半強いヘラナデ。底部は小さいけ底で、ナデ。内面胴部下半 ～底部ヘラナデ。外面胴部下半～底部平足存。内面胴部下半～底部コゲ付。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 白・透明・砂粒粗数 量	中央部床土 24cm 胴下半平足存 82, 84, 106, 306
38 土師器 甕	口 20.0 高 24.9 最大 23.0	内面口縁部コナデで、ミガキのような工具面 2本あり。胴部丁寧なナデ。 底面はケズリで、丸味を持つ平底。底面付着は地熱のためか著減著しい。 内面口縁部コナデで、整形時に底面に置いていたためか、底部は平坦面 となっている。口縁部下半には緩やかな段あり。胴～底部は強いヘラナデ で、下層ほど強く密着する。底部薄い。胴部下半には接合膜があるが、 胴部と外面のわずかな線目としてのみ表れている。外面全体膜付着。内 面胴下半～底部コゲ付。	10YR7/6 明黄褐色 やや粗い 白・黒・砂粒粗数 量	中央部床土 4～17cm。 南部床土 2～22cmと北 西部床土 8～13cm 口～底。胴～底 1/2 周 42, 43, 50, 55, 58, 61, 62, 78, 87, 115, 119, 141
39 土師器 厚	長 残 6.6 幅 4.5 厚 0.8	腰胴部片を研削面に転用したもの。表側に一方の押痕あり。左端は欠損 していると思われる。残存重量 26.3g。	7.5YR4/3 暗 やや細粒 白・透明細粒数 量	南部床土 9cm 一部欠 65
40 土師器 大形甕	高 残 5.2	外面胴部上半履方向のナデのち上半コナデ。内面胴部上半ナデのち一部 ヘラナデ。結構膜着。外面はミガキの可能性あるが、全体に剥落している ため不詳。	10YR7/2 にぶい黄褐色 やや粗い 赤・黒粒粗多。半透 明細粒と澱少 やや散見	南東部床土 4～11cmと 伊予志床土 43cm 胴上半平足存。胴中位～下 半 21, 22, 23, 24, 25, 125, 甕残穴
41 土師器 大形甕	高 残 19.0 最大 残 30.0	外面胴部カラナデ・ナデの履方向の緩らなミガキ。内面ヘラナデで、中 位に接合膜あり。接合痕より下は平坦だが、上は結構粗が顕著に残る。	7.5YR6/6 橙 やや細粒 白細粒～粗粒少。赤粒 と白細粒数量 やや散見	SI-16内と北西部床土 2cm が接合 割 1/4 周 1, 2, 3, 10, 17, 122, 飯丸, 床直
42 土師器 大形甕	口 残 16.8 高 残 5.2	二重口縁。外口縁部上半履方向のナデのち軽いコナデ。下半コナデ。 内面ヘラナデのち軽いコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや細粒 白細粒少。透明明粒 と砂粒数量 散見	口一部 飯丸
43 石器 砥石	長 残 11.3 幅 残 5.5 厚 残 2.9	角柱状の砥石と見られる。表・両側面が使用により平坦になっており、長 軸方向の押痕が多い。表面左下には、切削時の加工痕が残る。下端は割れ 面がまま。残存重量 302.0g。	N4 灰 褐色 砥石質	中央部床土 7cm 飯丸
44 土師器 甕	長 10.0 幅 9.3 厚 5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。表面に鉄分による赤すと見られる褐色の付 着物あり。重量 608.3g。	2.5Y6/2 灰黄 やや細粒 安山岩	中央部床土 26cm 完形 94
45 土師器 甕	長 9.8 幅 9.0 厚 5.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 621.6g。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや細粒 チャート	中央部 (SI-16 内) 完形 7
46 土師器 甕	長 9.7 幅 6.3 厚 4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 446.8g。	2.5Y7/2 灰黄 褐色 安山岩	中央部 (SI-16 内) 完形 11
47 土師器 埴輪土埴 埴輪土埴	長 残 6.3 幅 残 4.9 厚 残 3.7	大きな粘土塊の破片。48と同一個体の可能性あり。左側左側に縁辺が現 れ、表・裏・側面とも表面には草木の圧痕がある。裏面に顕著。残存重量 60.4g。	10YR7/3 にぶい黄褐色 やや細粒 白・赤粒粗少。白・ 赤粒粗数量 やや散見	中央部 (SI-16 内) 破片 20
48 土師器 埴輪土埴	長 残 7.6 幅 残 4.8 厚 残 4.4	大きな粘土塊の破片。左側の平坦面が残る表面で、草木の圧痕がある。 他はすべて欠損面。残存重量 84.5g。	10YR8/4 灰黄褐色 やや細粒 赤粒～細粒と白細粒 少 やや散見	中央部床土直上 破片 81

SG5区 SI-18 (第309・310図、写真図版32)

【位置】SG5区中央の14-17、15-17グリッド。同じく古墳後期の建物は南西にSI-19がある。北辺が確認調査時のトレンチに切られる。古墳中期の柵列SA-151を切る。SI-18の貼床を除去した後にSA-151のP-26・27を確認したので、SA-151がSI-18より古いことは、ほぼ確実である。

【規模と形状】ほぼ方形で中軸はN-12'-W。東西4.71m、南北4.65m。壁は直線的に外傾し、残存高22～42cm。床面はほぼ平坦で傾斜しない。床面から2～4cmの厚さで、ほぼ全体に貼床を施す。



第309図 権現山遺跡SG5区 SI-18(1) 遺構・遺物

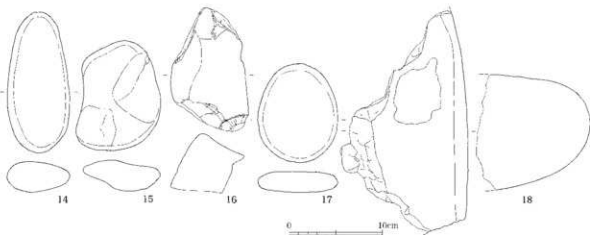
主柱穴4本はほぼ同大で、P1=径24×25×深さ45cm、P2=24×27×深さ49cm、P3=27×32×深さ42cm、P4=26×27×深さ37cm。柱柱間はP1-P2間が2.23m、P3-P4間が2.28m、P1-P4間が2.36m、P2-P3間が2.30mで方形に配置する。貼床を除去してから確認した間仕切溝D1とD2は深さ8～16cmで、東壁とP1を結ぶD1が長93×幅12～19cm、延長上でP2の西にあるD2は長98×幅16～21cm。南東隅にある貯蔵穴P5は東西軸の長方形で、63×83×床面から深さ42cm。ほぼ平底で、壁は急角度で直線的。調査時の所見では貼床下でP5を検出したが(断面図C-C')、埋め戻したのではなく自然埋没と思われる(断面図E-E')。自然埋没後に上に貼床で覆ったか、または床面で見つけにくい状況だったので貼床除去時まで確認できなかったのだろう。

【カマド】北壁際中央にある。両袖幅102cm、煙道先端から焚口部まで86cm。煙道先端は、北壁ラインより僅かに突出し、急傾斜で上がる。カマド掘方は竪穴部の掘方にくらべて平坦である。貼床整形後、袖部は灰色粘土を心とし、純度の低い灰色粘土で覆う。火床は床面とほぼ同じ高さでほぼ平坦。焼土塊と炭化材の多い4層が煙道から、2層が焚口からの流入土。粘土塊が多い3層は天井が崩れた土で、燃焼部壁が崩れた7層が火床面に堆積したと考えられる。6・7層上面を新期の火床面にした可能性もある。カマド袖先端の床下で竪穴掘方がくぼむので、土器や粘土を設置して焚口を補強した時期があったことも想定できる。

【覆土】壁が崩落した三角堆積土が明瞭で、ローム塊・粒が多い。5・7層にカマド関連の焼土が多い。

【遺物出土状況】南半に多く、また東半で目立つ。カマド内には少ない(1・5)。1と13は残存度の高い破片が床付近にある。礫のうち15・17・18が東部と南部の床面にある。

【出土遺物】遺物は少なく、裏片が主体で杯・鉢などが混じり、高杯・甕も少量ある。身模倣形の杯は6だけである。杯類は外傾口縁・蓋模倣形・身模倣形ともに外面や口縁までよく磨く。口縁部のミガキを省略した2と4は、古墳後期後葉の混入遺物であろう。長胴甕は破片だけ出土し(8・9)、ハケ調整裏片もある。(同一個体の可能性がある鉢10・11や大形甕13も、外面口縁部までよく磨く。図示以外の土器と焼粘土塊は合計474片・3.661gで、内訳は杯141片・875g、高杯15片・314g、壺甕類315片・2.446g、焼粘土塊3点・26g。縄文・弥生土器片も多く混入している(『東谷・中島地区遺跡群』10, pp.69,88)。



第310図 権現山遺跡SG5区SI-18(2)遺物

第176表 権現山遺跡SG5区SI-18 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 5.0	外面口縁部コナデのち緩らかな横方向のミガキ。体部ナデ。底部ケズリの ち体～底部横方向のやや緩らかなミガキ。内面口縁部コナデ・体～底部ナ デのち断なミガキ。ミガキは口縁部横方向。体部内形状。底部一方向。	7.5YR6/6 赭 褐色 白・赤細粒微量 やや硬質	カマド内7層上面 口1/2割。体～底3/4割 3, 4, 9B, 裏方方

第8章 権現山遺跡 SG5 区

2	土師器 杯	口 径 15.0 高 4.2	白色土と明褐色土がマープル状に混じる粘土。内外面とも丁寧な調整が施されている。外面口縁部ヨコナデ、体-底部光沢のある丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体-底部密な放射状のミガキ。内面全体、外面口縁-体部漆仕仕上げ。内面の漆は強く残るが、外面はわずかな。	7.5Y8/6/4 に近い橙褐色 黒紺～黒粒と赤銅粒とやがね質	北西面床土 12cmと南部床土 17cm 口一部、体-底 1/2 周 66, 96
3	土師器 杯	口 径 14.6 高 残 4.3	外面口縁部ヨコナデのち横方向の疎かなミガキ。体-底部光沢を持つナデ。内面口縁部ヨコナデ、体-底部ナデのち口縁-底部密なミガキ。体-底部は横方向、底部は一方のミガキと見られる。	10Y87/4 に近い黄褐色 密赤 赤銅粒	中央床土 18～19cm 口 1/3 周、体 1/2 周 79, 89
4	土師器 杯	口 径 14.0 高 残 4.3	白色土と明褐色土がマープル状に混じる粘土。外面口縁部ヨコナデ、体部光沢のある丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部放射状の密なミガキ。内外面口縁-体部漆仕仕上げ。口縁部は、大部分が欠損している。	7.5Y8/3/3 浅黄褐色 密赤 黒粒少、白銅粒	南部床土 5cm 口-体 1/6 周 51
5	土師器 杯	口 径 15.4 高 残 5.3 最大 径 15.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのち口縁-体部横方向の疎かなミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち口縁部疎な横方向のミガキ。体部放射状の密なミガキ。体部のミガキは強く残るため、端部で粘土が盛り上がる。	5Y8/8/8 密赤 赤銅粒と白銅粒	カマド内 7 期 上層 口 1/4 周、体 1/3 周 2, 4
6	土師器 杯	口 径 11.8 高 残 3.2 最大 径 12.6	褐色土と白色土がマープル状に混じる粘土。外面口縁部ヨコナデのち横方向の密なミガキ。体部光沢のあるケズリ。内面口縁-体部ヨコナデのち体部やや斜め方向となる放射状の密なミガキのち口縁部密な横方向のミガキ。内外面ともミガキは強い。内面全体黒色処理。	2.5Y5/3 黄褐色 密赤 黒粒と白銅粒と赤銅粒	東部床土 19cm 口-体 1/3 周 39, 78 15
7	土師器 高杯	高 残 9.0	外面部上半径方向のケズリのち横方向の密なミガキ。内面部上半径で、しばしばと見られる縦方向の粘土の継ぎ。中位はヘラナデで、結構粗雑。	7.5Y8/6/6 橙赤 中細密 赤銅粒多、白・黒・半透明粗粒とやがね質	中央部南寄り床土 19～20cm 口-体 上 2/3 周 29, 48, 49
8	土師器 甕	口 径 19.7 高 残 7.0	内外面とも、表面の磨減のため、調整不明瞭なところ多い。外面側部上端方向のやがね、口縁部内外面ヨコナデ。内面側部上端ヘラナデ。	10Y87/3 に近い黄褐色 やや粗粒、透明粗粒と白銅粒多、白銅粒	南東部床土 7cm 口-側上端 1/6 周 20
9	土師器 甕	口 径 18.0 高 残 4.6	外面部上端ヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部上下には、ヨコナデによる凹凸が多い。口縁部は両方へ向き出ているため、突出する。内面部は左側はヨコナデによるものであり、意図して施されたものではないと見られる。内外面全体各部に、カマドに使用されたと見られる淡褐色粘土が付着する。	7.5Y8/6/6 橙赤 中細密、白・黒銅多、白・黒銅少	口 1/8 周
10	土師器 鉢	口 径 12.4 高 残 7.0	11 と同一個体の可能性あり。外面部ナデ。口縁部ヨコナデのちやや密なミガキ。口縁部は横方向。体部は斜め方向のミガキ。内面体部横方向のナデ。口縁部ヨコナデのち口縁-体部横方向のやや密なミガキ。	5Y8/6/6 橙赤 中細密 砂粒～細粒少、砂粒	南部床土 15cm 口-体 1/3 周 65
11	土師器 鉢	口 径 14.4 底 5.8	10 と同一個体の可能性あり。外面部下端光沢のあるケズリのち疎かなミガキ。底部一方のケズリで、中央深くくぼむ。内面体-底部ナデのちやや疎かなミガキ。	5Y8/8/8 明赤褐色 中細密 白・黒銅粒少、透明粗粒と赤銅粒	南部床土 4～23cm 体-底 3/4 周 11, 15, 93, 94
12	土師器 大形甕	高 残 5.5	内外面とも表面の剥離が著しく調整不明。口縁部は内彎する。同一個体と見られる口縁部片から、二重口縁となる可能性が高い。 注記 127, 53, 72, 87, 97, 床下、一括	5Y8/6/6 橙赤 中細密、白・黒銅～黒粒少、赤・透明粗粒と透明粗粒	南部床土 3cm、中央部床土 13～20cm 口一部、側～側上端 1/2 やがね質
13	土師器 甕	口 径 25.2 高 28.1 底 9.6	無式。精良な粘土。外面側部ナデ・口縁部ヨコナデのち側部横方向の密なミガキのち口縁部横方向のやや密なミガキ。側部には、組織に由来する凹凸や凹凸が見られる。内面側部ナデ。口縁部ヨコナデのち口縁-側部横方向の密なミガキ。底部ケズリのナデ。	5Y8/6/8 密赤 白・赤銅～細粒	東部床土 4～12cm 口一部、側～側 1/3 周 104
14	石器 磨物石	長 14.8 幅 6.6 厚 3.2	河原石。磨に加工の痕跡なし。表面、小さなスケラレータの部分が数多くあり、その中に長方形化によると見られる赤褐色土が入り込んでいる。重量 378.1g。	2.5Y6/2 灰黄 中細密	D1 床土 13cm 完形 98
15	石器 磨物石	長 11.5 幅 8.8 厚 3.0	河原石。磨に加工の痕跡なし。重量 475.9g。	2.5Y7/4 灰黄 密赤 砂粒	東部床直土 完形 32
16	石器 磨物石	長 残 13.0 幅 残 8.3 厚 残 6.2 重 残 707.7	河原石。裏面を中心に大きく欠損しており、形状は不明。各欠損面は打撃による割傷のように見えるが、割傷にしては不自然なところが多く、接合はしげなど、割傷以外の原因によって欠損したものと想定される。	5Y6/2 灰オリーブ 密赤 ホソナフェルス	南部床土 19cm 破片 73
17	石器 磨物石	長 10.4 幅 8.4 厚 2.3	河原石。磨に加工・使用の痕跡なし。重量 262.3g。	N5/ 灰 中細密 多孔質火山灰	南部床直土 完形 73
18	石器 磨物石	長 残 23.2 幅 残 13.4 厚 残 11.2	大形の河原石と見られる。左側は大きく欠損しており、形状は不明。表面が割傷する部分は、焼裂による可能性がある。残存重量 4250.9g。	2.5Y6/2 灰黄 中細密	南部床直土 破片 64

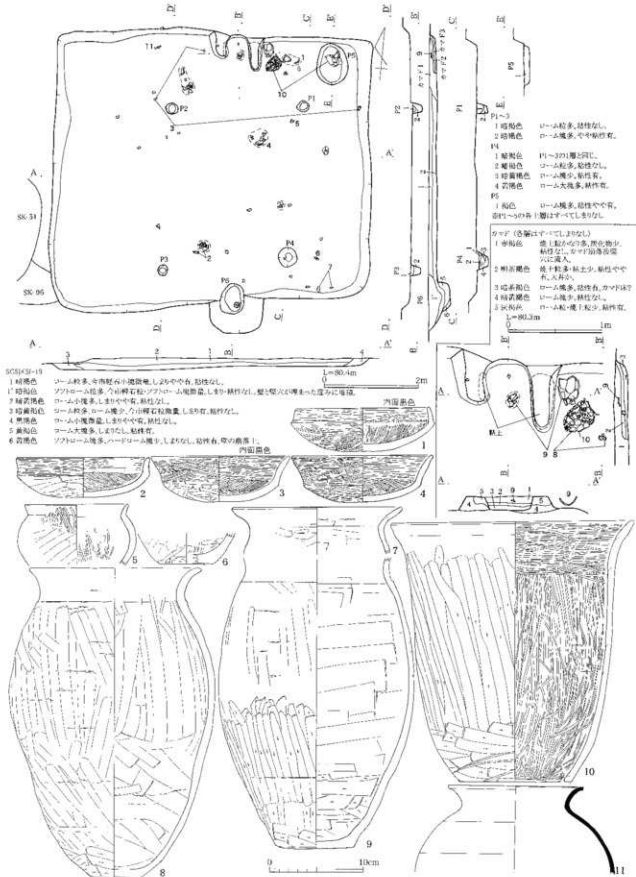
SG5 区 SI-19 (第 311 図、写真図版 33・180・181・183)

【位置】SG5 区中央の 14-16・17 グリッド。同じ古墳後期の SI-18・137 が北東と南にある。南西隅にある古墳時代の SK-96 を SI-19 調査後に調査しているため、SK-96 が古いと思われるが、断定はできない。

【規模と形状】東西に長い方形で東西 6.83 × 南北 6.04m、中軸線は N-5° -W。壁はなだらかで残存高 12～27cm。床は平坦で、傾斜しない。地山ロームを平坦にして床面とし、掘方・貼床はないと記録されている。しかし、写真では東側と西壁際の床に黒いシミが見られ、掘方や貼床があったのではないかとと思われる。

主柱穴 4 本は、P1 が径 24 × 26 × 深さ 25cm、P2 は径 25 × 26 × 深さ 25cm、P3 は径 20 × 23 × 深さ 23cm、P4 は径 39 × 40 × 深さ 25cm。柱間には P1-P2 間が 2.78m、P3-P4 間が 2.60m、P1-P4 間が 3.21m、P2-P3 間が 3.42m。南北間が東西間より広く、若干歪んだ方形である。

南壁中央の東寄りにある P6 は、形・大きさ・深さが定型的な張出ビットと少し異なるが、カマドに相対



第311図 権現山遺跡SG5区SI-19 遺構・遺物

11は第320図2を再掲載

第8章 権現山遺跡 SG5 区

する位置にあるので、本建物の張出ピットの可能性が高い。P6の周囲は幅105cm×南壁から約70cmの隅丸方形に張り出し、壁はなだらかである。P6は東西48×南北64×床面から深さ28cmの楕円形で、壁が外傾し、平坦な底面に径10×深さ10cmのピットがある。張出ピットのある建物は、SG5区SI-4などがある。

北東隅の貯蔵穴P5は東西65×南北89×床面から深さ12cmの楕円形・平底で、壁が直線的に外傾し、覆土はローム塊の多い単層である。貯蔵穴(張出ピットを含む)が2箇所の建物は、SG5区SI-11などがある。**[カマド]**北壁の東寄りにある。両袖幅125cm、煙道先端から焚口まで78cm。灰褐色粘土にロームを少量含む4・5層で袖を作る。灰褐色粘土(5層)の範囲を平面図に破線で示した。火床は床面とほぼ同じ高さで平坦。天井内壁に関連する粘土・焼土が1・2層に多い。煙道先端は北壁と一致し、奥壁は急傾斜である。**[覆土]**1'層は張出ピット上方の窪みに堆積した最終埋没土である。焼土・炭化物を多く含むカマド1層が、カマドから南側へ流出している。

[遺物出土状況]ほぼ完形の土師器甕(8)がカマド東側の床面にある。もう一つの甕(9)はカマド東側床面とカマド内に分かれて出土した。北東隅貯蔵穴P5の底面にある甕(10)も、カマド東側の破片と接合している。カマド東側の杯(1)は上向きで、床から少し浮く。

[出土遺物]遺物は少なく、接合・図示した杯・甕・甕など以外の破片はわずかである。杯と鉢は外面までよく磨き、1と3の内面は炭素吸着の黒色処理。図示した以外に形のわかる杯片はほとんどなく、小破片ばかりである。内斜口縁杯(5)と陶質土器(11)は古墳中期の混入遺物。11は肩部1片がSI-19で出土し、同一個体と考えられる格子叩き調整の胴部下半がSI-22などにある。図示以外の土師器は合計151片・1.135gで、内訳は杯15片・67g、高杯5片・73g、小形壺2片・10g、壺甕類129片・985g。

第177表 権現山遺跡 SG5 区 SI-19 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 埋土
1 土師器 杯	口 14.0 高 4.6 最大 15.1	飲み口少なく、細線な作りで、全体にミガキが密に施される。外面口縁部ヨコナダのちミガキ。体～底部ケズリのちミガキ。体～底部のミガキは、体部上半に多角形状に施されたもの。底部中心に一方のミガキ。図には表れないが、底部中央付近に径約1.5cmの浅くぼみあり。内面口縁部ヨコナダのち横方向のミガキのち体～底部放射状の密なミガキ。内面全体黒色処理。	2.5YR/3 黄灰 中～細砂 黒細砂 中～硬質	カマド東側の床土8cm ほぼ完形 30
2 土師器 杯	口 14.1 高 4.2	外面口縁部ヨコナダのちミガキ。体～底部ケズリのち光沢のあるミガキ。ケズリは1色ほど多く施される。内面口縁部ヨコナダのちミガキ。体～底部ヘラナダのちミガキ。底部は一方、体部は円筒方向の斜めのミガキ。	7.5YR/6 橙 中～細砂 白粗粒と白・黒細粒 少、砂礫微量 中～硬質	南東床土11～14cm 口～底 3/4 8、9
3 土師器 杯	口 14.8 高 4.8	4に形能が類似する。ミガキは外面体～底部を除き、密に施される。外面口縁部ヨコナダのち横方向のミガキ。体～底部光沢を持つケズリ。内面口縁部ヨコナダ・体～底部ヘラナダのち口縁部横方向、体部斜め方向、底部一方のそれぞれミガキ。内面全体黒色処理。	5YR/8 橙 中～細砂 黒細粒と白粗粒 少、赤細粒微量 中～硬質	南東床土7cmと中央部 床土3cmとカマド西側の 床土7cm ほぼ完形 22、23、28、人口P
4 土師器 杯	口 14.8 高 4.9	形能は3に類似するが、黒色処理は施されない。ミガキは全体に密に施される。外面口縁部ヨコナダのちミガキ。体～底部ケズリのちないミガキ。体部のミガキは横方向。底部は一方。内面口縁部ヨコナダのちミガキ。体～底部ヘラナダのちミガキ。体部のミガキはやや斜めな横方向。底部は一方。	10YR7/4 に近い黄緑 中～細砂 白・黒・透明粗粒と 白・黒・透明粗粒多 破片	中央部床土5cm 口～底 5/6 厚 17
5 土師器 鉢	口 径 11.0 高 径 4.4 最大 径 12.4	外面口縁部ヨコナダ・体部ナダのち口縁部～体部縦方向の線なミガキ。内面は表面の磨減痕あり。口縁部ヨコナダ、体部ナダのち放射状のミガキ。磨減のたため線は不明だが、少くとも体部下半以下は密に施されていると見られる。内面は平滑。外面体部下・口縁部上半度付着。	7.5YR7/6 橙 中～細砂 赤褐色～微粒と黒細粒 と白・透明粗粒微量 中～硬質	中央部床土8cm 口～体 1/5 厚 16
6 土師器 鉢	高 径 3.3 底 径 5.6	外面胴部下半ナ。胴部下端～底部ケズリ。底部は平底で、わずかにくぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナダのち線なミガキ。内面は平滑に仕上げられる。外面胴部下半一部度付着。	10YR7/3 に近い黄緑 中～細砂 白粗粒少、砂礫と赤 黒粗粒微量 硬質	南東床土11cm 胴下半～底 1/3 厚 6
7 土師器 甕	口 径 18.0 高 径 4.9	外面胴部上半ナ。口縁部ヨコナダ、内面胴部上半ヘラナダのちナダ、口縁部ヘラナダのちヨコナダ。	7.5YR7/6 橙 中～細砂 白粗粒少、砂礫微量 破片	南東床土8～14cm 口～胴土厚 1/4 厚 1、2
8 土師器 甕	口 18.2 高 33.0 底 5.0 最大 21.8	外面胴部ヘラナダのち下端ケズリ。底部より約10cm上に積み上げ体土による接合面があり、部分的にケズリが施される。上下の積が合わないため、部体は接合面付近で歪む。底部はケズリで、中央がややゆたむ平底である。内面口縁部ヨコナダのち胴部～底部ヘラナダ。胴部下半の接合面はケズリとなるところあり。ヘラナダは胴部上半が縦方向、下半が横方向上土。胴部下半内面度付着。片面焼熱によりやや赤化。	7.5YR/8 橙 中～細砂 白・黒・透明粗粒～微 粒多、白硬～粗粒少 破片	カマド東側の床土上 胴一部欠 33、34、36

9 土師器 Ⅱ	高 30.8 底 8.0 最大 20.6	外面口縁部下コナデ、胴部上平軽いなデのち胴部下縦方向のケズリのうち下縦横方向のケズリ。胴部下平には離れ上り休止による接合面があり、外面には段差として残る。底部ケズリで、平底。内面口縁部下コナデ、胴部一底部ヘラナデ。胴部下の接合面付近のみ厚くなっており、ケズリが露される。外面胴部下縦横により赤変。下位ほど度合いは大きく、胴部下では面が剥落する部分も目立つ。	IOYR7/3 に濃い赤褐色 やや粗い 白・砂微粒少、白輝 ～粗粒と黒・砂粗粒微量 破瓦	カマド東側の床直上とカマド下火床1.8m 胴部～胴1/3間、底定 32、33、K
10 土師器 Ⅱ	口 25.6 高 27.6 底 11.7	外面口縁部コナデのち胴部カタケズリのうち下縦コナデ、内面口縁部コナデ、胴部縦方向のヘラナデのち胴部縦方向のミガキ。ミガキは密だが、胴部にわずかに縦横が残る。底部はケズリのちナデで、丁寧に面取りされている。	IOYR7/4 に濃い赤褐色 やや粗い 砂粒～細粒少、白・ 黒・透明粗粒微量 やや破瓦	P5 底直上とカマド東側の床直上 ほぼ定形 34、40
11 陶瓦土器 Ⅱ	口 径 14.3 高 9.1 最大 径 21.0	内外面口縁部ナデ。薄く、破瓦で、断面は赤灰色。55.20×22.24×SK-106 出土の下部と同一個体と考えられるが接合できない。古墳中期の遺物が入る。	N5/7 灰 やや粗粒 白輝～微粒少、白輝 粗粒微量 破瓦	北部床1.0cm、低地土 の4片およびSI-24の 1片と接 口1/8間、胴1/4間 28

SG5区 SI-20 (第312・313図、写真図版33・34・181)

【位置】SG5区中央の14-17・18グリッド。同じく古墳後期のSI-107・21が南にあり、中期のSI-22も近接する。東側は低地へと傾斜しはじめる。古墳時代のSK-106とSD-101を、南東隅と南西隅で切る。

【規模と形状】周溝を含む床面部分では東西4.25×南北4.20mのほぼ方形。上端での平面形は、西壁の崩れにより若干東西が長い東西5.15×南北4.43mの方形に見える。中軸線はN-10°-W。残存壁高は23～27cmで、西壁は崩落して緩く傾斜し、南北壁はほぼ垂直。床はほぼ平坦で傾斜しない。ローム粒が多い暗黒褐色土で、ほぼ床全体を2～4cmの厚さで貼床する。

主柱穴4本は、P1が径28×31×深さ54cm、P2は径25×32×深さ35cm、P3は径29×38×深さ60cm、P4は径27×32×深さ41cm。P1・P3がP2・P4より15～20cm深い。P1-P2間が1.90m、P3-P4間が1.94m、P1-P4間が1.85m、P2-P3間が1.87mで、ほぼ方形に配置する。南西隅のP6と、西側主柱間の東寄りのP7はともに不整形の小穴で、貼床除去後に確認した。ただしP6がP1～P4と同じ覆土なので、貼床で埋めたのではなくて調査時に床面で見落としたものと推定される。P6は径42×45×深さ54cm、P7は径35×42×深さ24cm。

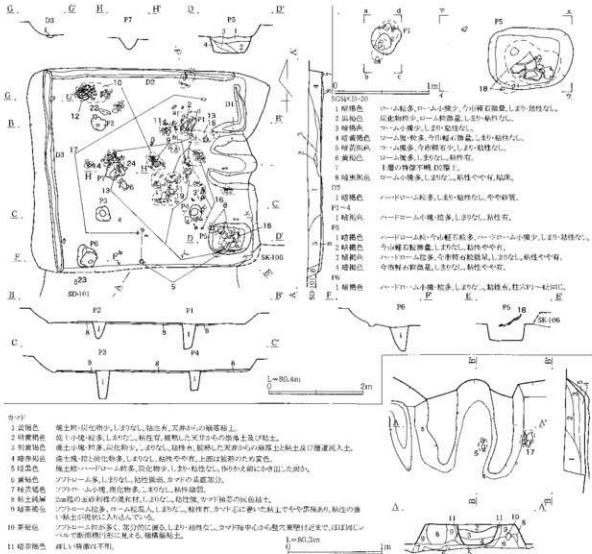
カマド北側(D1)と西・北壁際(D2・D3)にある壁溝は幅15～20×深さ2～5cm。D1はカマド北側で北東主柱穴P1方向に折れ、間仕切溝の可能性がある。南東隅の貯蔵穴P5は東西軸の隅丸長方形(63×91×深さ37cm)で、ほぼ平底で壁が急傾斜。西から流入した自然堆積状で(D・D')、上方に甌も流れ込んでいる(E・E')。

【カマド】東壁中央にある。両袖幅115cm、煙道先端から焚口部まで105cm。掘方上に、ロームを主体とした6層を基礎として、粘土主体にロームが混入した8～11層で覆って袖部を作る。左袖は6層と8～11層の間にローム小塊と粘土の混じる7層を挟む。掘方を暗黒褐色土の5層で床面とほぼ同じ高さで平坦に埋め戻している。5層に焼土と炭を含むので、旧期カマドから作り替えたことも想定できる。11層は焼土化が著しい内壁部。焼土塊と炭化粒が多い4・3層が流入土及び天井内壁に関連する層で、煙道～燃焼部に堆積する。ただし、調査時の所見では、被熱変色して見える4層上面を火床と判断している。粘土が多い1・2層は天井崩落土であろう。煙道先端は、東壁から僅かに突出する程度で、奥壁はなだらかに上がる。

カマド図は、写真を参考に、現地作成図を若干修正した。6層は地山削り出しかもしれず、仮にそうであれば5層で窪みを埋めたものと解釈できる。右袖は9層が床下まで達するので、カマド袖の後に貼床を構築したことになる。左袖は7層が貼床の可能性もあるが、貼床とは別の層として判断した。断面写真(図版34)ではすでに貼床をはずしているため関係が不明だが、7層の上端線が貼床より少し上にあると判断されたからである。

【覆土】レンズ状の自然堆積で4～6層はローム塊・粒が多い。中央部南半にある1層がやや不自然なので、SD-101がSI-20を切っているのではないかと疑われるが、SI-20が新しいという現地所見を尊重した(この点についてはSD-101の項で説明する)。

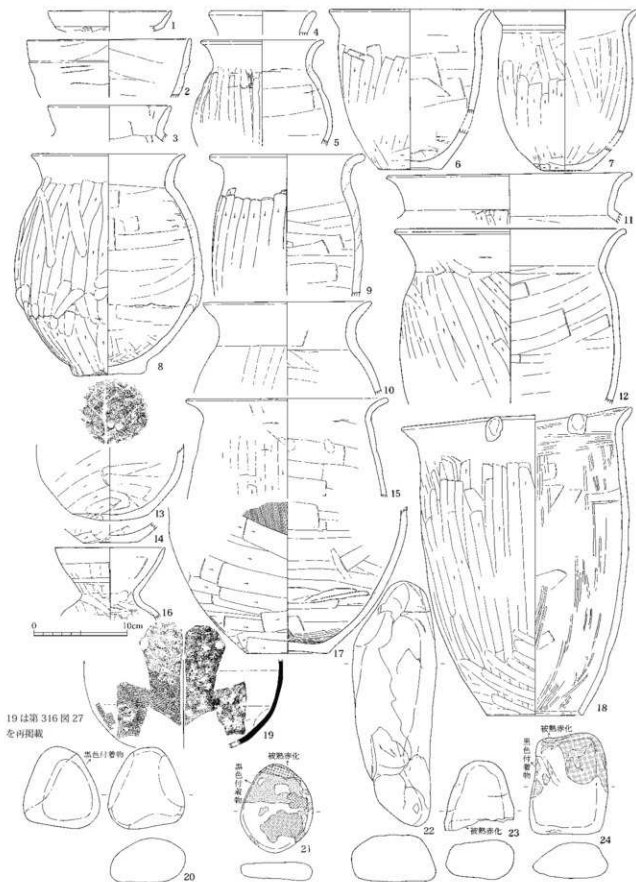
第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 312 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-20 (I) 遺構

〔遺物出土状況〕 北半部で床から 10cm 以上浮いた遺物が多い。床面近くで出土した 17 は各破片の位置が離れていて、カマド拡大図に示したとおり袖南側の床面にもある。貯蔵穴埋土の上にも瓶 (18) と複数個体の小形壺 (5・8・13) の破片がある。

〔出土遺物〕 比較的多い。杯・高杯はほとんどなく、1 は口縁部 1/8 周の小片なので確実に伴うとは言い切れない。土師器甕が最も多く、少し長胴の甕が多い。大形壺・瓶 (18) ・鉢 (2) も少量ある。口径より胴径が大きい後期前葉的な甕と、口径と胴径がほぼ同じ後期中葉的な甕がある。大形壺 (18) にある不自然な粘土貼り付けは、焼成前の補修痕かもしれないが詳細不明。補修痕のある土師器は、SG5 では SI-21 など、SG10 区では SI-6 などにある。図化品以外は、個体数を推定できる破片がほとんど無く、図示した土器の破片とみられるものが多い。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計 351 片・4.449g で、内訳は杯 12 片・123g、高杯 2 片・60g、小形壺 3 片・24g、壺・甕類 331 片・4.181g、瓶 2 片・39g、焼粘土塊 1 点・22g。振格子ではない格子甲子調整の陶質土器 (19) は、SI-22・24 など同一個体の下半部および上半部破片がある。SI-22 と同じく下半部の破片が出土した。土師器小形壺 (16) とともに、古墳中期の混入遺物であろう。縄文早期のスタンプ形石器 2 点と礫器 1 点も混入していた (第 1 分冊の第 10 図 5・6・9)。



第313図 権現山遺跡 SGS区 SI-20(2) 遺物

第178表 権現山遺跡 SG5 区 SI-20 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 13.0 高 径 2.2	外面体部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。内面黒色を呈する。	10YR5/2 灰青褐色 赤鉄粉微量	中央部底上 16cm 口 1/8 周 25
2 土師器 鉢	口 径 17.4 高 径 6.2	外面口縁部ヨコナデ。胴部上半斜いナデで、総輪彫れる。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面口縁～胴部上半黒色処理。	10YR6/2 灰青褐色 赤鉄粉少、白・黒、赤鉄粉微量 やや硬質	P1 底上 50～68cm 口～胴上平 1/6 周 46
3 土師器 小形甕	口 径 13.0 高 径 3.8	外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部上端強いヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや硬質、白鐵粉少、白鐵～黒鉄と赤鉄粉微量 やや硬質	中央部底上 19cm 口 1/4 周 23、27
4 土師器 小形甕	口 径 11.4 高 径 2.5	口縁部内外面ヨコナデ。赤みあり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや軽い、赤・砂鉄粒と白・黒・赤・透明・砂鉄粉少、赤・透明微量微量	P4 付近底上 8cm 口 1/3 周 10, 54
5 土師器 小形甕	口 径 12.9 高 径 11.2 最大 径 14.8	縁部、外面口縁部ヨコナデ。胴部タケワケのケズリのうちタケワケ方向のナデ。ケズリは下に重点的に集り、胴部上半は総輪による凹凸がある。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。外面口縁部～胴部下半スス付着。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや軽い、白鐵粉多、赤・砂鉄粉少、黒鉄粉微量 やや硬質	南部底上 1～14cmとP5 底上 48cmと下方下口 1/4 周、胴 1/2 周 5, 7, 16, 61
6 土師器 小形甕	口 径 17.2 高 径 16.5 高 径 15.0 底 6.4	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリ。底部一方のケズリで、広くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。内外面とも表面はほぼ全面が黒褐色。	2.5Y3/1 黒褐色 粗い、赤鐵～粗粒多、砂鐵～粗粒少	中央部底上 23cm 口～胴上、胴 1/2 周 31
7 土師器 小形甕	口 径 15.2 高 径 17.0 高 径 15.4 底 4.8	丁寧な調整。外面口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデのち胴部中位～下半ケズリ。底部タケワケで、中央ややくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。	5YR6/8 橙 やや軽い、黒鉄粒と白鐵粒と砂鐵～粗粒多 やや硬質	中央部底上 16～22cm 口～胴 1/4 周、底 1/2 周 26, 28, 29
8 土師器 小形甕	口 径 16.2 高 径 23.5 最大 径 19.8	胴部下半に積み上げ停止による接合面があり、内外両面に段差。粘土の継ぎ目などとして段差に突る。外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向の低いケズリのち接合面ナデ。底部は突出する平底で、水色黒っぽい。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデのち底部ナデ。外面口縁部～胴部上半一部接合面。外面胴部下半～底部縁部により赤化している部分多い。	10YR5/4 にぶい黄褐色 粗い、白・赤・灰褐色と白・灰褐色微量、砂鐵～粗粒少 やや硬質	P5 底上 32～34cm 口 3/4 周、胴 1/2 周、底 1/3 周 17, 18, 62
9 土師器 甕	口 径 16.4 高 径 15.0	外面口縁部ヨコナデのち胴部下半縦方向のケズリ。内面口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。全体に赤みが大きく、口縁部よりも胴部が突出する部分もある。	7.5YR7/6 橙 粗い、砂鐵～粗粒多、白・赤・透明・砂鐵と白鐵粒少	中央部底上 11～16cm 口 3/4 周、胴 1/2 周 25, 30, 46, 47
10 土師器 甕	口 径 17.7 高 径 9.9	外面胴部上半ナデのち口縁部ヨコナデ。外面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部上半ヘラナデ。最大径は胴部にあると見られる。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや軽い、透明微量多、黒鉄粒少、白鐵～粗粒と砂鐵粒微量 やや硬質	北部底上 20cmと中央部 底上 11cm 口～胴上平 1/4 周 30.1, 41, 41 方
11 土師器 甕	口 径 25.8 高 径 5.3	外面胴部上端ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。内外面口縁部一部黒色物も付着。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや軽い、白・黒・赤・砂鐵と白・黒・砂鐵～粗粒少	中央部底上 9cm 口 1/6 周 44
12 土師器 甕	口 径 24.4 高 径 18.5	胎土に砂を多く含むためか、内外面とも表面が磨滅している部分が多い。外面口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄褐色 粗い、砂鐵～粗粒と白鐵粒多、白鐵～粗粒と赤・透明微量微量 やや硬質	北部底上 20cm 口 1/6 周、胴上平～中位 1/4 周 41, 41 方
13 土師器 甕	高 径 8.1 底 8.0	外面磨滅のため調整不明瞭。胴部～底部ケズリ。底部は丸味を持ち、胴部との境は緩となる。内面胴部下半～底部ヘラナデ。胴部内外面は後述のように赤化が強い。外面胴部下半一部接合面。内面底部中央は黒褐色で、その周囲に黒色物も付着。さらにその上には、粘土のような白色土が付着する。位置は内面底部上 2.5～5.2cmの帯状の部分。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや軽い、白・赤・透明微量多、砂鐵～粗粒少、黒鉄粒微量 硬質	P7 付近底上 19cmと東部 底上 18～19cmとP5 底上 48cm 胴上平 1/4 周、底 1/6 周 16, 28, 33, 48
14 土師器 甕	高 径 2.0 底 5.8	砂っぽい胎土のため、表面はやや磨滅する。外面胴部下端ケズリのちナデ、ミガキの可能性もあり。底部丁寧なナデで、平底。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐色 やや軽い、砂鐵～粗粒多、白・黒・赤・透明・砂鉄粉少 やや硬質	西部底上 6cm 胴上平～底 1/6 周 35
15 土師器 甕	口 径 21.2 高 径 10.3	外面口縁部ヨコナデ。胴部下半縦方向のケズリのち横方向のナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄褐色 やや軽い、白・黒・赤・砂鐵～粗粒と白・砂鉄粉少	南部底上 19cm 口～胴上平 1/5 周 48
16 土師器 小形甕	口 径 11.6 高 径 7.6	外面口縁部縦方向の低いナデのち胴部ヘラナデ・口縁部上半ヨコナデ。口縁部下半には、しぼり目と見られる縦方向の低い粘土の帯が多く見られる。胴部上半ナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部上半斜いナデのち胴部縦方向のナデ。胴部下半内面には総輪彫と指痕正面が見える。古墳時代中期の遺物が混入。	10YR6/3 にぶい黄褐色 やや硬質、白・黒・砂鉄粉少 やや硬質、白・黒・赤鉄粉微量 やや硬質	東部底上 5～19cm 口～胴上平 1/3 周 12, 20, 23, 29, K
17 土師器 甕か甕	高 径 15.6 底 8.5	外面胴部中位 8 本 / 1cmのハケのち胴部下半縦方向のケズリ。底部多方向のケズリで、全体くぼむ。内面胴部下半ヘラナデで、底部より上 7cm付近に積み上げ停止による接合面があり、内面にわずかな段差と近いナデ調整面として残る。胴部下端～底部 3～5 本 / 1cmのハケのち底部中央のみナデ。	10YR3/1 黒褐色 やや軽い、白・透明微量多、黒鉄と赤鉄粉微量 やや硬質	南方木南側の床直上と南部 底上 1cmと北部底上 4 cm 底上はほぼ完全、胴下半 1/5 周 6, 49, 60
18 土師器 甕	口 径 23.5～ 26.0 高 30.4～ 32.5 底 10.0～ 11.0	無式化。赤みあり。外面口縁部ヨコナデ。胴部ケズリのち下半ナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデのち胴部縦方向のミガキ。口縁部縦方向のミガキ。胴部下端はケズリのちミガキ。口縁部に対する 2ヶ所に粘土が粘り付くあり。外面に展示したものは外面主体、もう 1つの内面に展示した方は内面主体に粘土が付。厚みは最大 3.5mm。用途不明。外面胴部縦方向に付着。	10YR7/3 にぶい黄褐色 やや軽い、白鐵～粗粒多、白・赤・透明、白鐵粉少 やや硬質	P5 底上 32cmとP5 付近 底上 8cm 口～胴上平 2/3 周、胴 下半～底はほぼ完全 18, 53

19 陶質土師 甕	高 残 9.1	胴部下～底部の破片。外面は下平部格子目タタキ、上半部口クロナデ。外面には、焼成時のものと見られる1.5×1cmの黒色物質が付着。内面ナナデで、凹凸著しい。内面に、わずかに褐色の自然釉付着。外面四左の1片がSI20出土で、他の3片はSI22とSK106で出土。古墳中期の遺物が混入。器19～24や低地グラッド出土の上半部と同一個体と考えられるが検定できない。	N5(内) 灰 織物 白練～細粒少 破片	SI20の中央部床上16cmとSI22の2片とSK106の1片が接合 胴下平～底部片一部 26
20 甕	長 8.3 幅 8.1 厚 4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。表面に黒色物質付着。重量471.1g。	2.5Y7/3 浅黄 やや織物 灰(山付)	定形
21 甕	長 9.4 幅 7.6 厚 2.1	河原石。特に加工の痕跡なし。全面に塊状に黒色物質の付着と焼熱による赤変あり。重量208.1g。	2.5Y4/1 黄灰 織物 灰(山付)	定形
22 甕	長 25.9 幅 8.9 厚 16.0	河原石。特に加工の痕跡なし。ほぼ全面が焼熱により赤変している。重量1996.5g。	5YR6/2 灰黄 織物 ホルンシユルス	北部床上8cm 定形 38
23 甕	長 残 6.5 幅 7.2 厚 4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。下平は欠損している。SI20からはスタンピング形石器が出ているが、この甕の下面は欠損によるものと判断した。ごく一部にわずかに焼熱による赤変あり。現存重量266.7g。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 流紋石	SI20の南側の床上26cm 破片 1
24 甕	長 10.6 幅 8.4 厚 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。焼熱により赤変する部分、黒色物質が付着する部分あり。重量551.5g。	5Y7/3 浅黄 やや織物 山付	中央部床上12cm 定形 52

SG5区 SI-21 (第314・315図、写真図版34・35・181・182)

【位置】SG5区中央の13-17、14-17グリッド。同じく古墳後期の竪穴建物は東と西にSI-107・137があり、東と南に中期のSI-22・24、南西に詳細時期不明のSI-155がある。南側は低地へと傾斜し始めている。北壁から西壁に向かう古墳時代のSD-101を切る。中央部の不自然な土層をみると、SD-101がSI-21を切っているのではないかも疑われるが、SI-21が新しいという現地所見を尊重した（この点についてはSD-101の項で説明する）。南壁中央上部を切る落ち込みが「断面図B-B'」にあるが、遺構名・平面図・遺物の記録はなく、攪乱と判断した。北半は試掘トレンチに切られる。

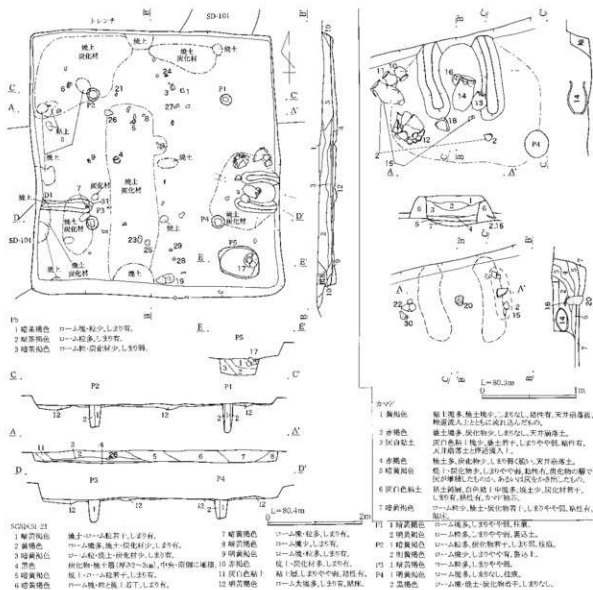
【規模と形状】南北が若干長いほぼ方形で東西5.23×南北5.28m、中軸線はN-3°-E。壁は直線的に外傾し、残存高12～33cm。床は平坦で傾斜しない。掘方は床面から深さ2～10cmで底面に緩い凹凸があり、ローム塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴4本は、P1が径23×22×深さ62cm、P2は径27×25×深さ47cm、P3は径26×23×深さ62cm、P4は径28×25×深さ41cm。柱間はP1-P2間2.80m、P3-P4間2.68m、P1-P4間2.68m、P2-P3間2.71mで、ほぼ方形配置。南東隅の貯蔵穴P5は東西軸の隅丸長方形で84×66×深さ34cm、平底で壁がほぼ垂直。P5覆土は西から自然流入し、最上層に大形壺の上半部(17)が入る。南西柱穴P3の北西側にある間仕切溝D1は長さ108×幅19～30×深さ7～9cmで、貼床除去後に確認したが、単に床面で見落としていた可能性も高い。

【カマド】東壁中央にあり、比較的良く残る。両袖幅88cm、煙道先端から焚口部まで93cm。灰白色粘土で袖を作る。調査時の写真では、袖が竪穴壁からわずかに離れてU字形に連結するようにも見える。しかし、土層断面を検討すると、U字形ではなくて煙道と袖が竪穴壁に連結する通常のカマドである。平面図は大幅に修正したため、写真と形状が合わない部分もある。焼土と炭化物を少量含む5層、天井が崩れた灰白色粘土を含む2～4層、崩落後に流入した1層が燃焼部に堆積する。天井崩壊土のうち2・4層には天井内壁に関連すると考えられる焼土塊が顕著である。煙道は壁外に突出しないで、先端が垂直気味である。

火床はほぼ平坦で、長さ18cmの河原石の支脚(20)を立て、その上に大形壺の底部(16)を置く。架口に架けた土師器甕13・14が壁側からの土圧で落ちたと思われる。カマド北側の床付近に残存度の高い土師器がある。調査時の所見では、14と13は建物廃絶時にカマド祭祀を行った遺物で、北側の土器群は棚などに置いた土器が落下したものと解釈している。両袖下に15など土師器壺類破片と礫22・30がある(袖下層平面図と断面図A-A')。カマド内や北側の甕(15)破片は、袖構築材の一部が流出したのだろうか。

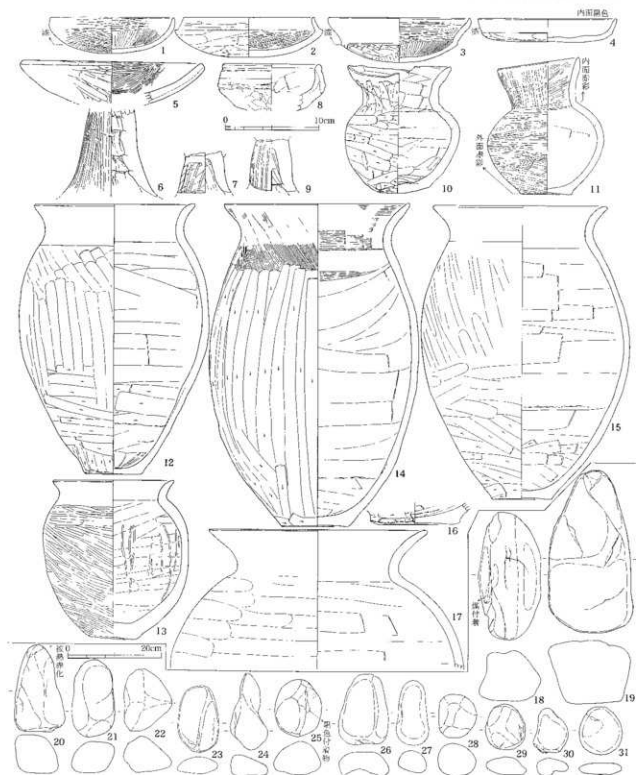
【覆土】全体にローム塊・粒が多く混入する。南・北の壁際には炭化物の多い焼土(10層)、西壁際には粘土(11層)がある。中央から南西の床面直上に厚さ2～3cmの炭化物・焼土混層が薄く堆積している。



〔遺物出土状況〕 主な遺物の出土状況はカマドの項で述べた。P5の最上層に大形壺の上半部が流れ込んでいる（17）。10の壺内部土中から焼粘土塊が1点と、13の小形甕内から小さな焼粘土塊6点が出土した。

〔出土遺物〕 4は栃木県城南西部の杯に似た低く扁平な杯で、炭素吸着と漆仕上げの両方を施した可能性がある。11は赤彩する壺で、本遺跡北部SG1区SI-3や南部SG2区遺構外A区の類例は赤彩していない。11と大形の高杯（6）は灰白色の異質な胎土を使う。8と10は粗製の土器。壺（10）には孔を粘土で埋めた補修痕、高杯（5）にはやや厚く粘土を貼った補修痕が認められる。補修痕のある土器器は、SG5区ではSI-20の大形甕や古墳時代土坑SK-205の甕があり、SG10区SI-6やSG2区流路2などにもある。また、磯岡遺跡SG9区SI-49aにもある（第11章）。14は外面ハケ調整の大半を削って消した甕。

遺物は多い。杯は少なく、図化した以外の杯は小片ばかりで、身模倣形・半球形・外縁口線があり、内面を赤彩する白色胎土の杯体～底部片も見られた。7・9と不掲載高杯破片の大半は古墳中期の混入品であろう。甕や大・小形の壺類も多く、口縁部「く」の字の甕破片も3個体分程度あるが復原図示できなかった。甕はほとんどない。図示以外の土器器と焼粘土塊は合計554片・5.040gで、内訳は杯127片・1.064g、



第315図 権現山遺跡SG5区SI-21(2)遺物

高杯 30片・400g、小形壺 16片・123g、壺類 366片・3,323g、甗 2片・81g、焼粘土塊 13点・49g。
遺物出土状況の項でも触れた焼粘土塊は、SG5区ではSI-21に最も多い。他遺構では多くても3～5点である（SI-12・15～18など）。建物以外では古墳時代土坑SK-210に焼粘土塊が1点ある。礫は多いが編物石風ではない。

第 179 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-21 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師 杯	口 復 13.3 高 3.8	筒直な胎土。外面口縁部ヨコナデ・体・底部ケズリの内口縁・底部ミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体・底部ケズリの内口縁・底部ミガキ。ミガキは内面体・底部は放射状で焼。口縁部内外面は焼方向や中乾。外面体部は多角形状。底部は一方方向と見られ、ともにやや乾。外面口縁・体部・内面全体漆仕上り。	5YR7/6 橙 白微粉少	中央部床土 13cm 口・底 1/5 腐 34
2 土師 高杯	口 復 13.6 高 4.2 最大 復 15.6	外面口縁部ヨコナデのち線ならミガキ。体・底部ケズリのみナデ。内面口縁部ヨコナデ。体・底部密なミガキ。ミガキは体部多角形状。底部は一方方向。内面は黒色胎だが、表面部等は白と見られる。	5Y4/2 暗灰青 やや微粉 白・黒・赤微粉少 やや乾	カマド西側と北側の床面より若干浮く。カマド南端床土 口・底 1/4 腐 注記は左欄
3 土師 杯	口 15.0 高 4.7	筒直で胎土と白土がマーブル状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデ。体・底部ケズリ。内面口縁・体部ヨコナデの内口縁部横方向の密なミガキのち体・底部放射状の密なミガキ。外面口縁部。内面全体漆仕上り。	5Y8/8 橙 微粉 白微粉少。赤微粉と透明 粒微粉量 やや乾	中央部床土 10cm 口・底 1/2 腐 35
4 土師 杯	口 14.6 高 2.5	器高が低く扁平な地盤(安藤・足利地域)の影響。外面体・底部ケズリのち斜いナデ。内面底部ヘラナデのち外面口縁部。内面口縁・体部ヨコナデ。胎土は内面全体漆仕上り。内面は土師胎土とともに黒色を呈し、炭素塊等で着色処理した可能性がある。	10Y8/2 灰青 やや微粉 白微粉少。赤微粉と透明 粒微粉量 乾	中央部床土 9cm 口・体 3/4 腐。底乾存 8
5 土師 高杯	口 復 21.0 高 4.3	厚手。外面杯脚1部・体部ケズリのち斜いナデ。底部はケズリにより面取される。内面ケズの密なミガキ。欠損した断面の観察から縦方向に接合面があり、この部分のみ厚みが 3mm 程度厚くなっていることがわかる。盛り上がり内外面とも認められるが、内面で顕著であり、現存で幅 1.2cm の部分が残存をもっており盛り上がる。欠損下面も外側部分接合面あり。	10YR7/4 に近い黄緑 やや微粉 白・青透明粒微粉少 白・透明粒微粉多。赤微粉少 やや乾	中央部床土 8cm 杯口・体 1/6 腐 27
6 土師 高杯	高 残 9.2	11 の邊と類似する灰白色土で作成された土器。外面部上下縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキ。上側にヘラ復わづかにあり。内面部密な平軒いナデで、総横面は極めて明瞭に残る。下端は総横の接合面からの欠損。	10Y8/2 灰白 微粉 赤・黒微粉微量 やや乾	北西側床土 3cm 口・体 1/2 腐 2
7 土師 高杯	高 残 4.4	短い柱状部。外面部上下縦方向のヘラナデのち斜め方向のナデのち線なら縦方向のミガキ。ミガキは規則的に施される。内面部上下縦方向のナデのナデ。上面の欠損面は白土混入があるがやや微粉を呈すほか、下面の欠損面はほぼ平土となるように人為的に細かく打ち割られたと見られる。これらのことから、現存する現存の状態でも何らかの用途に使用したと考える。1部中の遺物が混入。	10Y8/6 に近い黄緑 やや微粉 赤微粉と白微粉少 やや乾	D1 直上 25cm 口・体 1/4 腐 11
8 土師 小形土器	口 復 10.4 高 残 4.9 最大 復 11.4	筒形。赤みあり。褐色土・灰白色土・白色土がマーブル状に混じる胎土。口縁部は丸く肥厚しており、外面に内口縁が形成される。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデで、胎土は内面。内面口縁部ヨコナデの体部ナデ。	10Y8/6 に近い黄緑 やや微粉 白・青透明粒微粉多。赤微粉微量 やや乾	中央部床土 7cm 口・体 1/4 腐 30
9 土師 高杯	高 残 5.6	短い柱状部。外面部上下縦方向のナデのち線なら縦方向のミガキ。内面部上下縦方向のナデ。現存下部に明瞭な接合面あり。上面はほぼ平土な上面で、全体に磨滅している。また、下端面は上部の水平をとるよう人為的に細かく打ち割られたと見られるため、ほぼ現存の状態のまま何らかの用途に使用された可能性がある。古墳中身の遺物が混入。	10Y8/6 に近い黄緑 白微粉 白・黒・赤微粉少。赤微粉と白微粉 やや乾	中央部床土 2cm 口・体 1/4 腐 9
10 土師 盥	口 11.0 高 13.4 底 5.3 最大 12.0	粗面作。整形が充分でないため全体に赤みあり。胴部下平には、貫通してしまつた穴で内外面から粘土で埋めたあとが明瞭に残る。外口ケズリで、底部はケズリのち斜いナデで、突出したいびつね状となっている。口縁部上端は内外面ともわずかにヨコナデ。内面ナデ・ヘラナデで、総横面が部分的に面取に残る。ヘラナデは底部と胴部中に施される。	10YR7/6 明黄緑 やや微粉 白・黒・赤微粉少。白微粉と赤・黒微粉微量 やや乾	カマド北側の床面より若干浮いた状態。口縁部を南側に傾いた状態(腐存 40%)
11 土師 盥	口 8.7 高 14.5 底 5.6 最大 12.2	灰白色土を使用した。質変土層。内外面とも表面全面が細かく磨滅しているため、調整が不明瞭な部分が多い。外面口縁部縦方向のミガキ。胴部ナデのち横方向のミガキ。底部ケズリのちナデで、わずかにくぼむ。内面口縁部斜めない一方方向のミガキ。胴・底部ケズリナデ・ナデ。ミガキは基本的に密に施す。外面全周・内面口縁部赤彩。	10Y8/2 灰白 やや微粉 やや乾	口縁部を北側に傾いた状態。カマド北側の床面より若干浮く。穴はほぼ完形。一部穴縁あり 50
12 土師 盥	口 17.0 高 28.6 底 6.1 最大 20.0	砂面の胎土であり、表面が磨滅している部分もある。外面部上下ケズリの内口縁部上中位ヘラナデ。底部は凹間方向主体のケズリで、平乾。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴・底部ヘラナデ。底部上 9cm 付近には積み上げ体止となる接合面があり、内面ではこの部分のみ厚く、ケズリが施される。外面部上下・底部磨滅により赤変。	10Y8/4 浅黄緑 やや微粉 白・黒・赤微粉少。赤微粉量 やや乾	カマド北側の床面より若干浮いた状態 53、53K
13 土師 小形盥	口 12.8 高 16.7 底 5.4 最大 15.5	外面部強く磨滅しており、外面は赤変のうす黄緑が顕著。内面も表面部の新黄が著しい。外面胴部一部に磨滅による赤変あり。外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデのちやや密なミガキ。底部ナデで、わずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。胴部横方向のナデのち縦方向の線ならミガキ。底部は不詳だが、胴部と同じくナデのちナデになると見られる。	10YR7/4 に近い黄緑 やや微粉 白・赤・赤微粉微量 やや乾	カマド南端。床面より若干浮いた状態 ほぼ完形 52(K)
14 土師 盥	口 19.6 高 34.1 底 6.8 最大 22.1	外面胴部上下平 9.7cm のハウの口縁部ヨコナデ・胴部ケズリで、底部ケズリのみナデで、わずかにくぼむ。外面口縁部 6.8 / 1cm のハウのちヨコナデ。胴・底部ヘラナデで、胴部上下一部に口縁部と同様のハウあり。外面胴部(底部より上 28cm くらいまで)全体的にカマドに使用したと見られる赤褐色土が付着するとともに、部分的に黒色物質が付着。内面部胴部ナデ上 18 ~ 30cm 付近。底部より上 6cm 付近に積み上げ体止とする接合面があり、外面には磨滅の痕り用として、内面には粘土の粘り目と見られる。	7.5Y8/8 橙 粗い 白・赤微粉と微粉多 やや乾	カマド内床土 4cm。口縁部を北側に傾いた状態。土器のくぼむ下の穴床 ほぼ完形 45、カマド
15 土師 盥	口 18.4 高 31.0 底 6.1 最大 21.9	外面部上下ケズリの内口縁部上中位ヘラナデ。底部は凹間方向主体のケズリで、わずかにくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴・底部ヘラナデ。底部上 6cm 付近に積み上げ体止となる接合面があり、内面ではこの部分のみケズリが施される。内面胴部上下一部コテ付着。	7.5YR7/6 橙 やや微粉 砂粒・細粒少。白・赤微粉と砂微粉量 やや乾	カマド北側とカマド内床面より若干浮いた状態。カマド下層底土 7cm 口・胴 1/3 腐。底乾存 85J、55K、61(K)
16 土師 大形盥	高 残 2.2 底 9.6	外面底部ナデで、わずかにくぼむ。胴部下端ケズリで、底部からの粘土のめくれが著しい。内面底部ヘラナデ。	2.5Y7/3 浅黄 やや微粉 白・透明・砂微粉少。白・砂微粉微量 やや乾	カマド内、支脚の上方から逆ばり出土 底乾存 48、カクラン

17 土師器 大形壺	口 復 23.0 高 残 14.7 最大 復 31.0	白色土と赤褐色土がマゼル状に混じる砂質の粘土。表面の磨減著しい。外面胴部上平ナデと見られるが、ミガキの可能性あり。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上平ヘラナデ。	7.5Y8R/6 浅黄緑 やや暗い 透明薄粒と白 濁、透明薄粒多、白磁少 やや軟質	P5 底土 15cm 口 1/6 残、胴上平 3/4 残 44、貯蔵穴
18 罐	長 26.7 幅 13.1 厚 11.2	河原石。特に加工の痕跡なし。一部保付器。重量 4450.0g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや暗い 磨研 磨研 流紋質	カマド内床土 25cm 完形 54
19 罐	長 34.1 幅 17.8 厚 13.8	河原石。特に加工の痕跡なし。右側面は表面が褐色がかかった色になっており、この面のみ被焼している可能性がある。重量 10150.0g。	2.5Y7/2 浅黄 やや暗い 磨研 流紋質	南野塚直土 完形 21
20 支脚	長 18.1 幅 10.8 厚 8.6	河原石。特に加工の痕跡なし。上端は丸味を持ちつつ走っており、被焼している。重量 2289.7g。	5Y7/2 灰白 やや暗い 磨研 流紋質	カマド内床土 21cm 完形 K、5S、支脚
21 罐	長 16.1 幅 9.0 厚 6.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1356.6g。	2.5Y8/3 浅黄 やや暗い 磨研 流紋質	中央部床直土 完形 6
22 罐	長 13.0 幅 10.2 厚 7.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1010.1g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや暗い 磨研 磨研	カマド北側床直土 完形 58
23 罐	長 13.9 幅 8.6 厚 3.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 570.1g。	N6/ 灰 磨研 安山質	南野塚直土 完形 16
24 罐	長 16.0 幅 7.8 厚 5.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 707.8g。	5Y7/2 灰白 磨研 磨研 磨研	北部床直土 完形 28
25 罐	長 12.0 幅 9.8 厚 6.9	河原石。特に加工の痕跡なし。一部、黒色物質（燻か）付着。重量 1012.6g。	N5/ 灰 磨研 安山質	南野塚直土 完形 17
26 罐	長 14.8 幅 10.5 厚 残 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。黄褐色は欠損する。残存重量 943.8g。	10Y7/2 灰白 やや暗い 磨研 磨研	中央部床土 8cm 一部欠 7
27 罐	長 13.6 幅 6.9 厚 4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 599.9g。	5Y7/1 明細灰 やや暗い 安山質	中央部床直土 完形 32
28 罐	長 9.0 幅 8.0 厚 7.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 697.2g。	2.5Y7/3 浅黄 やや暗い 磨研 流紋質	南野塚直土 完形 19
29 罐	長 9.5 幅 8.3 厚 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 360.6g。	7.5Y7/2 灰白 磨研 磨研 安山質	南野塚直土 完形 18
30 罐	長 9.2 幅 7.0 厚 4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 325.4g。	2.5Y8/3 浅黄 やや暗い 磨研 磨研 磨研	カマド北側の床直土 完形 59
31 罐	長 10.1 幅 9.1 厚 2.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 276.8g。	2.5Y7/3 浅黄 やや暗い 安山質	D1 付添床土 10cm 完形 10

SG5 区 SI-22 (第 316・317 図、写真図版 35・182・183)

【位置】 SG5 区中央の 14-17・18 グリッド。東側は低地へ傾斜する。同じく古墳中期の SI-24 が南西 3m に、後期の SI-20・21・107 が北と西にある。北部を後期の SI-107 に、中央を試掘トレンチに切られる。

【規模と形状】 北東-南西に長い長方形で、東西 4.35 × 南北 5.84m、中軸線は N-50° -E。壁は緩く外傾し、残存高 4 ~ 29cm。床面は平坦で、東に若干傾斜する。南隅の貯蔵穴を 8 字状に囲み、東西 130 ~ 150 × 南北 270cm の範囲に幅 28 ~ 45cm、高さ 2 ~ 3cm のロームを突き固めた土手状高まりがある。西側部の床面直上で、ハードルーム塊と、140 × 60cm の範囲に多量の灰と炭化物に焼土を少量含む厚さ 2 ~ 4cm の層がある(断面図 E-E')。掘方底はほぼ平坦で、ローム粒・塊が多い黄褐色土の貼土を 2 ~ 5cm の厚さでほぼ全体に施す。

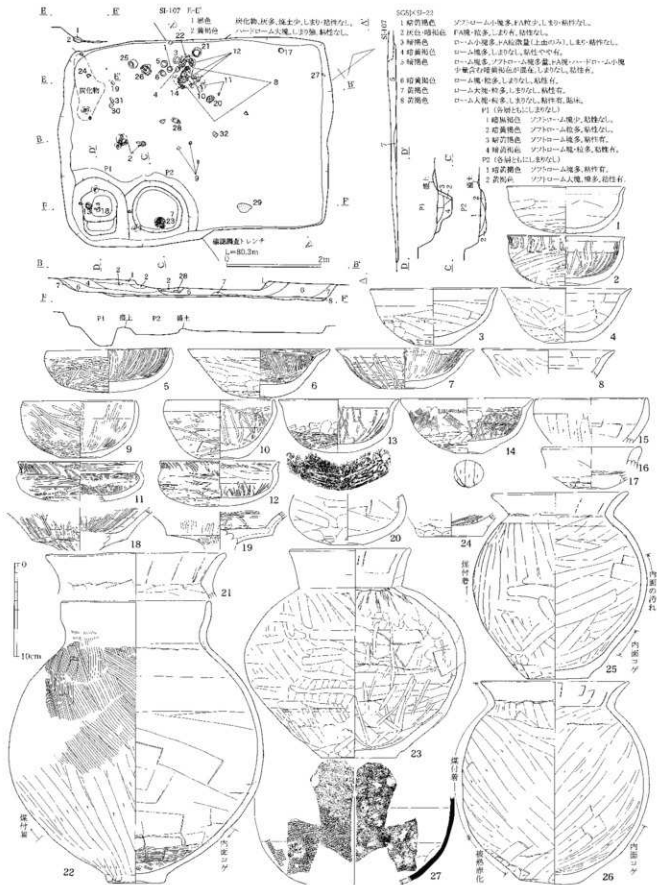
南隅にある貯蔵穴 P1 は東西に長い長方形で、東辺と南辺は壁に接し、西及び北側に土手状の盛土が巡る。P1 は 72 × 95 × 深さ 39cm であるが、70 × 75cm の隅丸方形貯蔵穴の東側に幅 20cm・床から深さ 6 ~ 10cm のテラスが付く。P1 底面は 40 × 40cm の隅丸方形で、壁は直線的に外傾する。P1 の一次堆積土 3・4 層にローム塊が多い。P1 の北東にある皿状の掘り込み P2 は、94 × 107 × 床から深さ 13cm の浅い楕円形で、覆土 1・2 層にロームが多く、土手状盛土が周囲に巡る。P2 は貯蔵穴と考えるには浅く、入口施設に係わる可能性が高い。

【火処】 認められなかった。

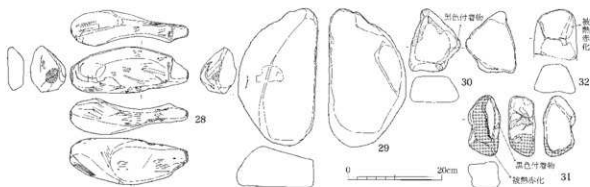
【覆土】 自然埋没途中の 2 層が古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラ塊で、1・3 層にも FA 粒を少量含む。

【遺物出土状況】 残存度の高い土師器(横倒しの糞類と上向きの杯類)が北西部にまとまり、床面直上のものから数 cm 浮いたものまでである。P2 (入口施設?) 内に、底面から 9cm 浮いた壺 (23) がある。

第8章 権現山遺跡SG5区



第316図 権現山遺跡SG5区 SI-22(1) 遺構・遺物



第317図 権現山遺跡SG5区SI-22(2)遺物

〔出土遺物〕遺物はやや多い。土師器杯類は小破片以外を全て図化した（ただし、混入品と考えられた外傾口縁の杯1個は図示していない）。初期的なもの（5）以外の模倣杯はなく、内斜口縁の椀形杯が多い。4・7・8・14は内彎気味の口縁部、外面口縁部のわずかなナデ調整、体部の軽いナデ調整、底部はケズりで段差を残す部分がある、内面の調整が雑—などの諸点が類似する。高杯・壺・小形壺が少しずつ混じる。繋が多く、長胴壺・甕はない。図示した以外に大形壺・甕は底部で数えて3個体分がある。

格子叩き調整の壺下半部（27）は加耶陶質土器で、SI-24の第320図27が同一個体の上半部とみられるが、中間部の破片が不足して接合できない。この壺はSI-22に同一個体6片（叩き調整部2片と無文部4片で計58.7g）、SG5区SI-19・20・22・24、SK-106、SD-101、低地部古墳時代包含層（第357図7・11・27・28グリッドと低地北部）に同一個体が計18片ある。SI-22の2片とSI-20・SK-106の各1片が遺構間接合した嗣下半部が27である。また、北側のSG10区SD-43（SG5区区館の北側区画溝）にもこの陶質土器の肩部小破片1点がある（出土状況図は第405図）。

ホルンフェルスの底石（28）はSG5区SI-7他にある。図示以外の土師器など430片・3.729gの内訳は杯164片・1.027g、高杯22片・231g、壺甕類243片・2.467g、焼粘土塊1点・4g（他に須重器甕5片・46.4g）。

第180表 権現山遺跡SG5区SI-22 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・釉或 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.5 高 5.0	赤みあるが、軽く薄土な土質。内傾口縁で丸底。外面口縁部ヨコナデ。体部軽いナデのち底部ケズリのち体部下平ヘコナデ。内面口縁部ヨコナデ。体—底部ヘコナデ。内面は磨滅している部分多い。	10YR7/4 赤い—黄褐色 やや暗褐色 赤黒—黒粒少、白磁 —細粒微量 中や微量	北西部床直上2cm正位 定形 36
2 土師器 杯	口 12.4 高 5.3 底 4.0	内傾口縁。底部ほぼ丸。外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリのち対部丁寧なヘコナデのち口縁部前方の緩らなミガキ。ミガキ下縁にヘコの当たりあり。底部ケズリのちミガキ。内面体部下平—底部ナデ。口縁—体部上平ヨコナデのち体—底部やや緩らな放射状のミガキ。内面口縁—体部一部ターンの黒色物質付着。	10YR6/4 赤い—黄褐色 やや暗褐色 白・透明微粒少、白磁 —細粒微量 中や微量	中央部床直上—床土5cm 口—体2/3期。底定存 10、44
3 土師器 杯	口 13.4 高 6.1 底 3.4～4.0	内傾口縁。外面体部軽いナデのち口縁部ヨコナデ。体部下平—底部ケズリ。底部はびつぱら平底。体部わずかに層方向の粘土の継残る。内面口縁部ヨコナデ。体—底部ヘコナデ。内外面とも、被熱のためか、部分的に表面が赤変している。内面よりも外面が著しい。	2.5YR6/8 橙 暗赤 白・黒粒—微粒と透明細 粒微量 中や微量	北西部床直上正位 34
4 土師器 杯	口 13.8 高 5.8 底 4.2	内傾口縁。外面体部軽いナデのち口縁部わずかにヨコナデ・体部下平—底部ケズリ。底部は数回同一方向のケズリで中や西凸のある平底。内面口縁部ヨコナデ。体—底部ヘコナデ。内面体—底部表面はクーター状に削落するため、調整不明確な部分多い。内面口縁—体部一部黒色物質付着。	5YR6/6 橙 中や暗褐色 赤黒—細粒と白微粒 少、透明微粒微量 微量	北西部床直上正位 ほぼ定形 35
5 土師器 杯	口 12.2～ 13.2 高 4.6 最大 13.6	赤みあり。底部は厚く、内面に凹凸が残る。外面体部軽いナデのち口縁部ヨコナデ・体部下平—底部ケズリのち体—底部緩らなミガキ。ミガキは底部付近の一方のもの。体部に塗される。底部を上にした状態で見て四角形状のもの後、体部上平に円筒方向のものが塗される。内面口縁—体部ヨコナデのち口縁—体部放射状のミガキのち底部1方向の密なミガキ。	10YR8/4 浅黄褐色 中や暗褐色 赤黒—細粒少、白磁 と白磁—細粒微量 中や微量	北西部床直上正位 ほぼ定形 38
6 土師器 杯	口 14.0 高 5.2 底 2.4	台盤に赤みあり。内傾口縁。外面体部軽いナデのち口縁部わずかにヨコナデ・体部下平ケズリ。底部はナデのみで小さくほとんど平。体部下平は段差をなくすようにケズリが磨かれるが、外面に示すように全体の半分ほどで、段差が残ってしまっている。内面口縁—体部10本/1cmのハケのち底部5本/1cmのハケを使用した丸底なハケのちナデ。	10YR7/4 赤い—黄褐色 中や暗褐色 赤黒—細粒少、白磁 と白・砂粒微量 微量	北西部床直上正位 定形 37

第8章 権現山遊路SG5区

7	土師窯 杯	口 14.6 高 4.2 底 4.8	内面口縁、外面口縁部コナデ・体部ケズリのうち一部ナデのち口縁→体部 縦方向の織りなミガキ。底部ケズリのち密なミガキで、全体が狭くくぼむ。 内面口縁部コナデ・体→底部ナデのち口縁→底部放射状の織りなミガキ。 内面体→底部表面の割溝が深い。	5YR6/6 橙 やや暗赤 赤黒→細粒少。白・ や暗褐色 赤黒→細粒少 破綻	P2 底上 9cm 口1/体一部欠 7、床下
8	土師窯 杯	口 復 14.0 高 復 2.9	内面口縁、口縁部ミガキあり。外面口縁部コナデ・体部ナデ。体部に縦方向 の細かな斜土の織あり。内面口縁部ヘラナデのちコナデ。体部ヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや暗赤 赤黒→細粒少 破綻	北西部床直上→床土 12 cm 口→体 1/4 周 30、32
9	土師窯 杯	口 復 11.8 高 6.0 底 4.0 最大 復 12.5	薄く、精緻な作り。外面口縁部コナデ・体部下→底部ケズリのち口縁→ 底部ミガキ。口縁→体部のミガキは横なし斜め方向で上半は2センチ目 が目立つ。底部のミガキは丁家で、全体的に狭くくぼむ。内面口縁部コ ナデ・体→底部ナデの織りな放射状のミガキ。	2YR5/6 明赤陶 明赤・白・黒・透明明細少。白 陶→細粒数値 破綻	中央部床直上→床土 2cm 口→体 1/2 周、底 3/4 周 21、22、23、22 覆土
10	土師窯 杯	口 11.6 高 6.2 底 4.0 最大 12.0	作りが良く、小形土師窯。外面口縁部コナデ。体部割ナデのち下平ケズ リのち織りな横方向のミガキ。底部丁家なナデのちミガキで、狭くく ぼむ。内面体部下→底部ケズリのち口縁→体部下平コナデのち口縁→ 底部放射状を基調とする織りなや暗赤ミガキ。	7.5YR5/8 黄赤 やや暗赤 黒細粒少。砂礫と白 陶→細粒数値 や暗赤	北西部床上正位 口→体 3/4 周、底定存 31、32、
11	土師窯 杯	口 復 13.2 高 5.8 底 4.2 最大 復 13.4	12に類似する内面口縁の杯。丸底になるものと想定される。外面口縁部コ ナデ。体部下平ケズリのち口縁部斜位のミガキのち体部横方向のミガキ。 内面口縁部コナデのち横方向のミガキ。体部 10 cm/1cmのハケのちナ デのち放射状のミガキ。内外面ともミガキは 12 より太く、また、より密に 施される。	2YR5/8 明赤陶 やや暗赤 白細粒と赤黒→細粒 少。白・赤細粒数値 破綻	北西部床土 1→4cm 口→体 1/5 周 28、29
12	土師窯 杯	口 12.5 高 4.8 底 4.8 最大 12.8	内面口縁、丸底。外面体部割ナデのち体→底部ケズリ・口縁部コナデの ち口縁部斜位のミガキのち体部横方向のミガキ。ミガキは織りな織りな で、口縁部の場合工具の角度で直でないためか、扇状に表面をへこませ ているところもある。内面口縁部コナデのち横なし斜め方向の織りなミ ガキ。体部ヘラナデのち体→底部や暗赤放射状のミガキ。内面ミガ キも織りな織りなものである。	2YR5/6 明赤陶 やや暗赤 赤黒→細粒少。砂礫 と白陶→細粒数値 や暗赤	北西部床直上→床土 12 cm 口→体 SI-107 体一部欠 29、30、32、SI-107 覆 土
13	土師窯 杯	口 12.8 高 5.7	内面口縁、外面体部上平割ナデのち体部下平→底部ケズリ。底部は丸底。 口縁部や内面コナデ。内面体→底部ヘラナデのち体→底部放射状の織り なミガキ。外面口縁部一部磨着。体部下平の 1/3 ほどが放射状のためか 表面割溝。体部下平の 1/3 周ほどは凸面が集中しており、磨着具に転用 されたと思われる。	7.5YR6/6 橙 やや暗赤 赤黒→微粒少。赤黒 と白→赤細粒数値 破綻	P1 底直上。やや斜めの 状態 ほぼ正位 2
14	土師窯 杯	口 14.0 高 5.8 底 2.8→3.3	内面口縁、外面口縁部コナデ・体部割ナデのち体部上平→部 10 cm/1 cmのハケ。体部下平→底部ケズリ。体部下平には、段差が浅い。底部ケ ズリは一方が直線、わずかにくぼむ。内面口縁部コナデ・体→底部 10 cm/1cmのハケのち強いわずかの織りなミガキ。ミガキは放射状を基調とし ては、丸底。	5YR6/8 橙 やや暗赤 白・赤微粒多。赤黒 と少 破綻	北西部床土 12cmと SI- 107 口→体一部欠 30、SI-107(直上)
15	小形土師 窯	口 復 11.6 高 4.8 底 4.8 最大 復 12.2	粗雑な作り。外面体部ケズリのち口縁部コナデ。内面体部ヘラナデのち 口縁部コナデ。	10YR5/4 に近い黄赤 やや暗赤 粗粒少→粗粒少。 砂礫と赤細粒数値 や暗赤	口→体一部
16	土師窯 小形土師 窯	口 復 10.6 高 2.3 底 1.7	厚手。内外面口縁部コナデ。外面体部ケズリ。	5YR7/6 橙 やや暗赤 白細粒少。白・黒・ 赤細粒数値 や暗赤	口 1/6 周
17	土師窯 杯	高 復 1.9 底 4.0	外面側部下平→底部ナデのち側部下平→底部外周ケズリ。底部は丸底を持 ち、中央のみくぼむ。内面底部強いヘラナデのち織りなミガキ。	2YR5/8 明赤陶 やや暗赤 赤黒細多。白・赤 細と白→黒細粒数値 や暗赤	北西部床土 19cm 口→体 2→底定存 42
18	土師窯 高杯	高 復 4.6	外面底部縦方向のケズリ・体部斜位の織りなケズリのち縦直位の横方向の ケズリのち体部側面ミガキ。内面体→底部ナデのち放射状の織りなミガ キ。内外面ともミガキは明細。	5YR6/6 橙 明赤と透明明細と白・白 陶→細粒数値 破綻	P1 底上 18cm 杯体→底 1/4 周 3
19	土師窯 高杯	高 復 3.5	外面杯部体部から底部外周コナデ・底部ケズリのち体→底部縦方向のミ ガキ。内面体→底部外周コナデのち体部横方向のミガキ。底部放射状の ミガキ。底部は密なミガキだが、体部はや暗赤であり、ミガキが施されな い部分が目立つ。	5YR6/6 橙 明赤 白・赤→細粒少。白・ 赤細粒数値 破綻	西部床土 13cm 杯体→底 1/4 周 18
20	土師窯 壺	高 復 5.3 底 3.4 最大 12.3	外面側部下平に四角形の多角形状ケズリのち側部中位→下平→底部ナデ。底 部は丸底。内面側部強いヘラナデのちへらなで。内面は黒色帯を引しており、クレータ一 次に表面が割溝する。	10YR7/6 明黄赤 やや暗赤 赤黒→細粒多。白・ 透明明細少 や暗赤	中央部床土 10cm正位 体下平 2/3 周、底定存 27
21	土師窯 高杯	口 19.2 高 復 4.9	外面口縁部コナデのち側部上端ヘラナデ。内面口縁部ヘラナデのちコナ デ。割土上端強いヘラナデ。外面口縁部に多量に磨着。内面口縁部にも 一部磨着。	7.5YR6/8 橙 やや暗赤 白・透明明細→細粒 少。白細粒数値 破綻	北西部床土 16cm近位 口正位 33
22	土師窯 甕	口 復 16.0 高 29.8 底 6.2 最大 26.8	口縁部は内槽する。外面側部上平 4 cm/1cmのハケのち口縁部コナデ・側 部下平ケズリ。底部ケズリのちナデ。底部は突出する平底で、中央はく ぼむ。内面口縁部コナデ。側部ヘラナデ。底部 1.4cmに横み上げ休止による接 合面あり。それより下位は 4 cm/1cmのハケが施される。ハケは接合面の 調整と見られ、接合後のヘラナデにより滑ると考えられる。外面底部 上 8cmまで乾澁により部分的に赤帯。それより上位となる側部中位は磨着 。内面側部下平→底部(底部上約 5cmまで)コナデ付着。	2Y6/3 に近い黄 やや暗赤 白・赤・黒・砂礫多 →細粒少。白・砂礫数値 破綻	北西部床土横直線上部東 の下向き ほぼ正位 32
23	土師窯 壺	口 復 12.9 高 22.1 底 7.9 最大 23.4	厚手。外面口縁部上平は平底に調整されるが、それ以外は調整が高く、 側部下平は成形も不十分。外面口縁部コナデ。側部上平→中位丁家なナ デ。側部下平丸ケズリで、横み上げ休止による接合面は不十分な成形によ り段差と横み目となって残る。底部ケズリのちナデで、平底。内面口縁部 ヘラナデのちコナデ。側部上平→ナデで、断面は斜土の織りなしぼり目 が顕著。側部中位→底部ヘラナデの縦方向の織りなナデ。側部下平→底部 は比較的平滑に仕上げられている。	10YR7/3 に近い黄赤 やや暗赤 白・平透明明細→細粒 と赤細粒少。赤細粒数値 破綻	P2 底上 9cm 口 1/4 周、側上平一部 欠。側下平 3/4 周、底 定存 7.
24	土師窯 甕	高 復 2.5 底 6.8	外面側部下平ナデのち側部下平→底部ケズリ。底部は平底で、中央がわず かにくぼむ。内面底部強いヘラナデのちへらなでとも見られるが、密 なミガキナデのヘラナデ。	2YR5/6 明赤陶 やや暗赤 白細粒→細粒少。白・ 赤細粒数値 破綻	西部床土 4cm 底 1/2 周 15
25	土師窯 甕	口 14.3 高 19.4 底 6.5	外面側部中位→下平多方向のナデのち側部上平縦方向の丁家なナデ・側部 下平→底部ケズリ。底部平底。口縁→側部上平コナデ。内面口縁部ヘ ラナデのちコナデ。側→底部ヘラナデで、一部ケズリ状に強く施される部 分あり。側部上平には、結核帯が残る。外面側部中位→底部乾澁により部 分的に赤帯。外面口縁→側部上平磨着。内面側部→底部、部分的にコナ デ付着。	10YR5/2 明黄赤 やや暗赤 粗粒多。白細粒 少。白細粒数値 破綻	西部床土横直上 ほぼ正位 41

26 土師器 甕	口 15.7 高 21.3 底 6.8 最大径 19.8	やや歪みがあるが、丁寧に成形された土器。外面胴部上へ平ナデのち胴部位～底部ケズリのち軽いつた。底部は丸味を持つ平底。口縁部コゴナテ。内面口縁部へラナデのちコゴナテ。胴～底部丁寧なケズリのち軽いつた。外面底部上7～8cmが焼熱により赤変。それより上の胴部および口縁部に厚く黒付着。内面は、外面の焼熱した範囲とはほぼ同じ位置となる胴部下へ～底部に厚くコゴナテ着。	10YR3/1 黒褐 やや軽い 砂粒～細粒少。砂焼 と白・赤相～細粒塊型 底質	西部床直上～床下7cm。 横位底部西 口・胴一部欠 40、40.1
27 陶瓦土器 甕	高 残9.1	外面縦かな格子のタタキ。内面ナデで、縦やか凸凹凸あり。同一個体と見られる破片は計6点あり、それからすると、胴部下半は外面格子のタタキ、内外面胴部上半は口ケラナテ。内面胴部下半は凹凸が残るナデとなると見られる。外面固有平の上下端にある各1片がSI-22出土で、他の2片はSI-20とSK-106で出土。SI-19・24や低地出土の上半部と同一個体と考えられる可能性がある。	N5/ 灰 やや細密 白焼と白焼～細粒塊 質 底質	北壁床直上7cmが1片と位置不詳が5片。SI-20-SK-106-SD-101の各1片と接合 割破片 43
28 石器 砥石	長 24.9 幅 9.7 厚 7.5 重 1846.8	主要な使用面は裏面と面であり、上下方向では使用面中央が大きくぼつぼつほか、断面図に示すように左右方向で見ても中央がくぼんでいる。表面に見られる左右両側面も使用されたと思われるほか、裏面下半も平滑で磨痕が残っており、砥面として使用されたと考えられる。上下両端は磨打痕が集中する。	SYS/1 灰 磨密 ホルンフェルス	中央部床直上 6cm 20
29 甕	長 28.2 幅 16.1 厚 8.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 5650.0g。	7.5Y6/1 灰 やや軽い 磨打 質	東部床直上 完形 24
30 甕	長 12.8 幅 10.7 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。表面黒色物質が付着。僅か？裏面は、焼熱のためか表面が黄色がかる。重量 1051.5g。	2.5Y7/4 浅黄 やや軽い 流紋質	南西部床直上 完形 13
31 甕	長 12.5 幅 6.8 厚 5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は焼熱により赤変するほか、僅か？見られる黒色物質が付着する部分あり。重量 718.5g。	2.5Y6/2 灰黄 やや軽い 流紋質	南西部床直上 完形 14
32 甕	長 残 10.5 幅 9.1 厚 6.0	河原石。特に加工の痕跡なし。表面の一面のみ焼熱により赤変。残存重量 696.3g。	2.5GY/4 やや細密 磨打	中央部床直上 破片 25

SG5区 SI-23 (第318図、写真図版 35・36・173)

【位置】SG5区中央の13-16・17グリッド。同じく古墳中期の建物は南にSI-26があり、詳細時期不明のSI-99・155が南と北東にある。同じく古墳中期末葉のSI-25を切り、古墳時代のSK-110と南側の確認調査トレンチに切られる。

【規模と形状】ほぼ方形で東西5.90×南北5.61m、中軸線はN-23°E。残存壁高は2～6cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方の深さは床面から4～12cmで、ローム塊を少量含む暗黄褐色土でほぼ全面に貼床を施すが、地山ロームのまま床とする部分もある。

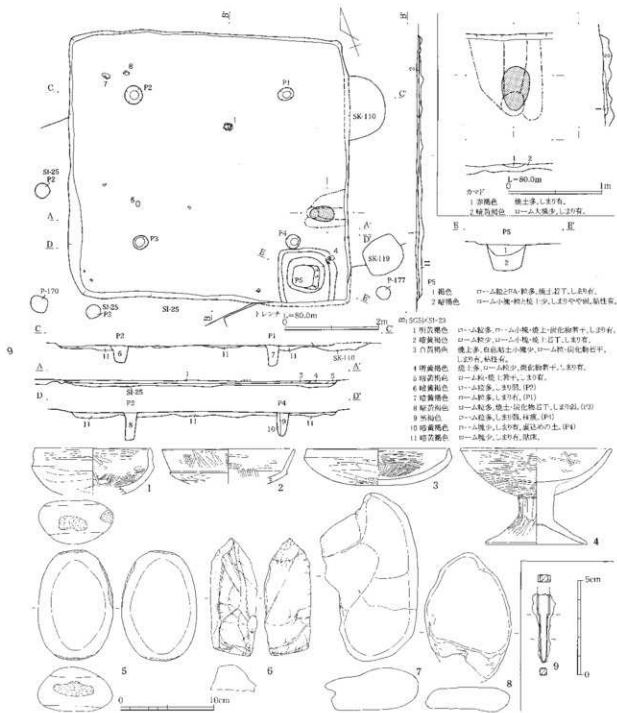
主柱穴4本は、P1が径32×26×深さ45cm、P2は径41×39×深さ36cm、P3は径31×30×深さ58cm、P4は径30×29×深さ50cm。柱間はP1-P2間が3.23m、P3-P4間が3.26m、P1-P4間が3.01m、P2-P3間が3.09mで、東西より南北方向の柱間がやや狭い方形に配置する。

南東隅にある貯蔵穴P5は78×74×床から深さ54cmの隅丸方形。周囲は幅20～25cm・床から3～5cmの深さで浅い平坦面を設け、両側は壁面に接する。平底で東端が少し高く、直線的に立ち上がる壁面に掘削工具の凹凸痕が残る。貯蔵穴P5の西側と北側は、調査時の写真によると周囲よりも床面が少し高く見える。この高い部分は図示されていないが、写真を見るとP5の西側に入口の窪みがあり、その周囲がわずかに高いように観察される。P5の覆土上層にはローム粒と古墳後期初頭に降下したFAテフラ粒が多い。

【カマド】東壁の南部にある。東壁に接する床面の南北75×東西86cmの範囲に焼土・粘土粒・炭化物が付着し、断面図A-A'の3～5層がカマド崩落土と考えた。袖やカマドの構造は不明確だが、白色粘土を構築主材とし、煙道が壁外に出ない。50×52cmの範囲で床面が焼けた部分が火床面であろう。

【覆土】竪穴部覆土1～5層のうち、3～5層はカマド崩落土と考えられる。3・4層は焼土を多量、3層には白色粘土塊を少量含む。古墳後期初頭に降下したHr-FAと思われるテフラ粒を貯蔵穴P5の上層に含み、覆土の残りが薄い竪穴部ではテフラを確認できない。

【遺物出土状況】竪穴の残りが浅いので、貯蔵穴上部にある高杯(4)以外の遺物は床面付近にある。ただし、杯の小破片(2と3)は混入する可能性もあるので、残存度の高い杯(1)がこの建物に伴うと考えられる。



第318図 権現山遺跡SG5区 SI-23 遺構・遺物

〔出土遺物〕古墳中期末の建物だが、後期後半の土師器（3）も混入している。遺物はごくわずかで杯片が多く、ほとんどは1のような深身の杯で、2のような外傾口縁の杯片がわずかにある。土師器壺甕類が混じり、傾はない。図示以外の土師器は合計144片・913gで、内訳は杯44片・252g、高杯1片・20g、小形壺3片・20g、壺甕類96片・621g。鉄製の琺瑯被関部（9）は角間なので古墳中期中葉的であるが、短脚高杯（4）は中期末である。中期末葉（本遺跡編年の4段階古相）のSI-25を切ることからみても中期末（4段階新相）の建物であろう。

第181表 権現山遺跡 SG5区 SI-23 出土遺物

番号 種類	大きさ 単位	特徴	色調 土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 土瓶	口 径 12.2 高 残 5.0 最大 径 13.0	散置のため、表面が磨滅している部分が多い。外面口縁部ヨコナデのちの線ならミガキ。体部ケズリのちノ率なナデ。内面口縁部ヨコナデのちの線なら横方向のミガキ。体部 4cm/1cmのハケと7本/1cmのハケのちノナデの放射状を基調とする線ならミガキ。内外面ともミガキは太め。外面体部ケール状の黒色物質が付着。	SYR5/8 明赤釉 面滑 白・黒釉と白磁粒微量 やや軟質	中央部底上 3cm 口1/6 残、体2/3 残 2
2 土師器 土瓶	口 径 14.0 高 残 3.7	赤褐色の磨滅なナデ。外面口縁部ヨコナデのちの線方向土のミガキ。体部ケズリ。内面口縁部ヨコナデのちの線方向のミガキ。内面口縁部は表面の黒色が裏ししたため、ミガキの疎密などは不明。体部放射状のミガキ。	2.5YR5/8 明赤釉 面滑 白・黒釉と白磁粒微量 やや軟質	口〜体1/6 残
3 土師器 土瓶	口 径 15.0 高 3.9 最大 径 15.6	外面口縁部ヨコナデ。体〜底部ナデのちケズリで、体部にケズリが施されていない部分あり。内面口縁部ヨコナデのち体〜底部放射状の密なミガキのち口縁〜体部横方向の線ならミガキ。古墳後期後葉の遺物が入る。	SYR5/4 に近い赤釉 やや軟質 粗砂粒少、赤釉粒と透射眼〜粗砂粒微量	口〜底1/6 残
4 土師器 高杯	口 径 16.0 高 10.1 脚 10.8	短脚の高杯。散置のため特に杯部に表面が磨滅する。外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデのちノ率〜体部横方向のミガキ。磨滅により明確には見えませんが、比較的に磨滅していたと見られる。脚部下平ヨコナデのちノ率〜中位密なミガキ。内面杯部は磨滅激しいが、密にミガキが施されていたと見られる。脚部ヨコナデ。	2.5YR6/8 磨 面滑 白粗粒少、赤粗粒と透明 微粒微量 やや軟質	P5付近底上 68cm 杯口〜底1/5 残、脚上 半1/2 残、脚下半残存 8
5 石器 磨石	長 11.6 幅 7.9 厚 4.6 重 488.1	縄文石器の可能性あり。河原石。上下両端と右側面に敲打痕あり。表裏面とも中央付近が平滑になっているが、磨削によるものとは見られない。表面の小きなくぼみの中には、鉄分酸化によると見られる赤褐色土が入り込んでいる。	2.5Y5/1 黄灰 やや軟い 多孔質仏山岩	中央部床土 3cm 底面 4
6 石器 削片	長 12.3 幅 5.0 厚 2.8	原形起源と見られる磨滅なホルンフェルス製の破片。下端および左側面に原表面を残す。砥石の素材とも見られるが、縄文石器の可能性もあり。重量 224.7g。	7.5Y6/1 灰 緑磨 ホルンフェルス	破片 K、掘り方
7 埴 輪	長 17.7 幅 9.8 厚 4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 920.3g。	5Y6/1 灰 緑磨 仏山岩	北部床土上 底面 1
8 埴 輪	長 残 13.2 幅 9.2 厚 2.5	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 324.4g。	5YR7 磨 面滑 白 流紋岩	北部床土上 一部欠 10
9 鉄製品 鉄鏝	長 残 3.6 幅 0.7 厚 2.5	鉄鏝の下部下端から草部の破片と見られる。X線写真から見て鎌刃や台形刃ではなく直内刃。草柄の上下面には段がなく、左右側面を段にする。現状で木肌や有機質は見られない。		下部埋

SG5区 SI-24 (第319・320図、写真図版 36・37・173-183)

【位置】 SG5区中央西寄りの13-17・18グリッド。南東部は低地へ傾斜する。同じく中期のSI-22が北東にある。北に後期のSI-21、西に時期不詳のSI-155が近接する。時期不明のSD-108に北東部を切られる。

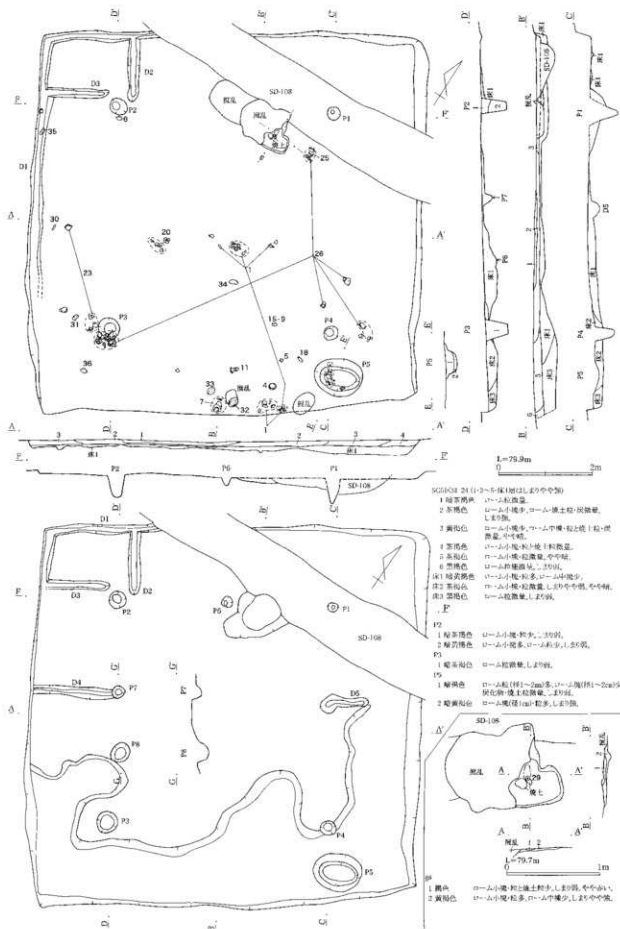
【規模と形状】 ほぼ方形で、東西8.57×南北8.01m、中軸はN-33°-W。南壁はほぼ直立で、他の壁は直線的に傾き、残存高は2〜43cm。床はほぼ平坦で北東と南東が少し低い。掘方は床から深さ2〜20cmで南半の外区が深く、底面に細かな凹凸が目立ち、主にローム粒・塊が多い暗黄褐色土で貼床する。

主柱穴4本は、P1が径28×29cmでSD-108底面から深さ39cm(床面から推定62cm)、P2は径32×39×深さ53cm、P3は径44×45×深さ48cm、P4は径29×33×深さ42cmである。径はほぼ同じだが、北側に比べ南側はやや深い。柱間はP1-P2間が4.60m、P3-P4間が4.65m、P1-P4間が4.65m、P2-P3間が4.71mで、ほぼ等間隔の方形に配置する。P1-P2の間で1本(P6)、P2-P3のラインを3等分するように2本の補助柱穴と考えられるビット(P7・P8)を、いずれも掘方底面で確認した。P6が径22×24cmで掘方底面から深さ8cm、P7が径25×29cmで掘方底面から深さ20cm、P8が径38×44cmで掘方底面からの深さ24cmである。

西壁北側と北壁西側で検出した壁溝D1は断面U字状で幅18〜28×深さ2〜3cm。北壁際でD2、西壁際でD3・D4、東壁際でD5の4本の間仕切溝は断面U字状で長130〜150×幅15〜36cm、掘方底面から深さ10〜20cm。D2・D3は床面で確認し、北・西壁溝とP2を矩形に結ぶ。D4・D5は掘方底で確認し、D4はP7と西壁溝を連結し、D5はD4の延長上にある。東壁際は掘方が深いためD5が途切れる。

南東部にある貯蔵穴P5は、長軸が南壁に対し12°北に振れる楕円形で、径100×80×深さ29cm、P5底面内側の楕円状掘り込みは径82×50cm。P5は平面楕円形の鍋底状底面から壁が垂直気味に上がった後に、幅7〜18×深さ5cmほど緩く上がり床に至る。P5の覆土上層に微量の炭化物・焼土粒を含む。

【炉】 中央部の北東寄りで地床炉を確認した。攪乱を受け全体形は不明確だが、東西58×南北50cmの範囲で床面から2〜3cmくぼむ。底面は被熱により硬化し、中央に焼土塊が認められた。



第319図 権現山遺跡 SG5区 SI-24(1) 遺構

【覆土】1～6層は自然堆積である。

【遺物出土状況】南半部と貯蔵穴付近で、少し浮いたレベル（床から10cm以内）に遺物が多い。南壁付近に大形の礫と完形の杯（4）、貯蔵穴P5内にも大形の自然礫がある。紡錘車状土製品（29）の出土番号が図に記録されていなかったが、写真と断面図から判断して炉の焼土上から出土したと考えられる。

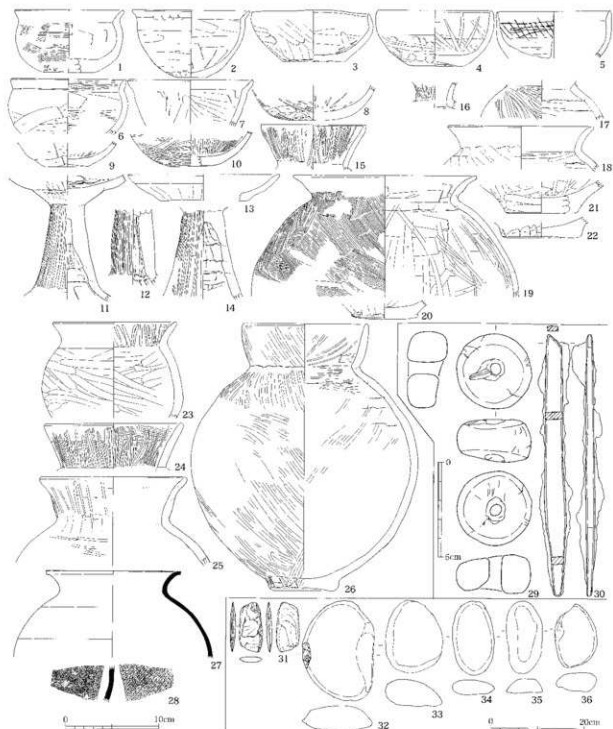
【出土遺物】遺物は比較的多く、杯と壺類が主体で高杯も多い。半球状（3・4）や口が開く内斜口縁（2・7）の杯があり、確実な横楕杯はない。12のように雲母を含む土師器は茨城県域の製品とみられ、SG5区ではこれ1点だが、隣接するSG10区ではSI-12などに事例がある。格子目調整の加那陶質土器は、同一個体と見られる2片が出土し（27・28）、SI-19・22・106・低地包含層に同一個体の上半部破片、SI-22などに下半部破片がある（各遺構への分布状況はSI-22および第405図を参照）。29は紡錘車に似るが、孔が中心にく、厚さも一定しないで重心が偏るので紡錘車状土製品と比べ。紡錘車はSG5区SI-4などになる。

キサゲ状工具は、千葉縣稲荷台1号墳出土例（田中1988）に比べると先端の角度が緩くて身部が薄く、長野県鳥羽山洞窟・安坂將軍塚1号墳例に近い（関・永峯2000、大場他1964）。

図示した以外に、杯鉢類は上げ底状1点・平底3点・丸底3点があり、高杯は杯底部で数えて2個、大形壺・甕は底部で数えて4個あり、1cmあたり5本程度の粗いハケ調整襖もある。長胴甕・甕はなく、厚手の大形壺胴部片を1辺6cm位の方形に割ったものがある。図示以外の土師器は合計635片・6.491gで、内訳は杯296片・1.970g、高杯46片・682g、壺類293片・3.839g。

第182表 権現山遺跡SG5区 SI-24 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・釉薬 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 6.6 底 残 5.6	内斜口縁。外面口縁部斜削。口コナデ。体部8本/1cmのハケ。底部は丁寧なナデで、平底だが、小載土層2コが貼り付いている。内面口縁部コナデ。体一底部ヘラナデ。内面は、表面が剥落している部分が多い。外面体部口縁部コナデの一部分に炭付着。火にかかれた可能性あり。内面体部下平一底部の表面剥落著しい。	5YR6/4 高い糖 やや粗い。赤黒一細粒少。白濁 粘土砂礫量 少	南東部塚上3～4cm 口一底1/3層 11, 12
2 土師器 杯	口 復 12.4 高 7.0 底 3.0	内斜口縁。薄手な作り。外面体部斜削。ナデの口縁一底部コナデ・体部下平一底部ケズリ。口縁部には、微細な面が残る。底部は平底。内面口縁部コナデ。体一底部ヘラナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや細滑 白濁粒少。白濁粒 少。砂礫微量 中やや微	口一体上半1/4層。体 下半一底完存
3 土師器 杯	口 12.4 高 5.0～5.5 底 6.3 最大 12.8	口縁部内側。甕形は体部下平一底部は丁寧だが、口縁一体部上半は甕形が びく、歪みがある。甕形時の側面1組が体部全体に見える。底部はナデのケズ リで、中央が大きくくぼむ。内面口縁一外部上平コナデ。体部下平一底 部ヘラナデの口縁一底部縁ならぬナデ。内面底部は表面の剥落著しい。	5YR6/5 糖 やや細滑 赤黒一細粒と白濁粒 少。白濁と透明一粗粒微量 やや微	口一体2/3層。底完存
4 土師器 杯	口 12.5 高 5.8 底 5.0	半球状。外面口縁部コナデ。体部一部縦方向の光沢を持つナデ。ナデは わずかであり、甕形時の側面1組が体部全体に見える。底部はナデのケズ リで、中央が大きくくぼむ。内面口縁一外部上平コナデ。体部下平一底 部ヘラナデの口縁一底部縁ならぬナデ。内面底部は表面の剥落著しい。	5YR6/5 糖 やや細滑 白・透明微粒少。 白・赤黒一粗粒微量 やや微	南東部塚上11cm正位 ほぼ正位 10
5 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.9	内斜口縁。硬質。薄手な作り。体部ナデの口縁部コナデ・体部下平ケ ズリ。内面口縁部コナデ。体部は被熱のため剥落が著しく、調整不明。 体部外面に斜格子状の剥落あり。縦方向5本。縦方向10本が確認できる。 縦向きは縦が先頭の中や丸味を持つと思われる。体部上半に密な網目集ま る。最上位の縦線1本が最も深く、その下は縦線の間が縦線よりも深い。 粘りが強いではない。調整不明な部分が多い。	2.5YR5/8 明赤褐 やや中細滑 白濁粒少。赤黒一粗 粒と白・黒粗粒微量 微	南東部塚上7cm 口一底1/6層 9
6 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 5.8 底 最大 復 12.6	内斜口縁。やや厚手だが、密な網目集まった作り。外面体部ナデの中部中 位一下平ケズリ。口縁部コナデ。口縁部下端は、わずかな段となる。内 面口縁部コナデのやや中平ならぬ縦方向のミガキ。体部ヘラナデの中部中 位一下平や縁ならぬ縦方向のミガキ。	7.5YR6/6 糖 やや中粗い。赤黒一粗粒と 砂礫微量。砂礫微量 微	西部塚上2cm 口一底1/6層 1
7 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 5.0	内斜口縁。外面口縁部コナデ。体部縦方向のナデ。内面口縁部コナデ。 体部やや中平ならぬヘラナデ。外面体部には、粘土の層が厚い。	10YR7/4 非常に赤粉 やや中粗い。赤黒粒多。白濁粒 粒微量 中やや微	南東部塚上6cm 口一底1/6層 14
8 土師器 鉢	高 残 3.7	丸底。外面体一底部ケズリのち縁ならぬミガキ。縦方向（内面方向）のミガ キはほとんどなく、一方に密く、内面一底部コナデの縁ならぬ放射 状のミガキ。内外面ともミガキは細い。内面は剥落著しく、調整不明な部分 が多い。	7.5YR6/6 糖 やや中粗い。赤黒粒と粗粒少。 白濁一粗粒と微粒砂礫量 中やや微	体一底。底完存
9 土師器 杯	高 残 2.7 底 残 4.6	外面体部下平一底部ケズリ。底部くぼむ。内面体部下平一底部縁ならぬ放射 状のミガキ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。	5YR6/8 糖 やや中粗い。赤黒粒多。白濁粒 と赤黒。透明微粒少 やや微	中央部塚上7cm 体下半1/2層。底完存 確認 17
10 土師器 杯	高 残 3.7 底 復 4.4	外面体部下平ケズリのち体部ミガキで、下寄りほど密に集まる。底部ケ ズリで、浅くくぼむ。内面体一底部放射状の密なミガキ。	10YR8/3 浅黄褐 細滑 砂礫一微粒少 やや微	体一底1/2層
11 土師器 高杯	高 残 13.3	外面杯部体部ヘラナデ。底部ナデ。体部下平縦方向の密なミガキ。体部下 平コナデ。内面杯部体一底部ヘラナデの縁ならぬミガキ。調整上層位135 cmの円筒状で土質は均一な作りで、厚1.5cmない。それ以外の任意 の工具により調整されたと思われる。これ以下はヘラナデで、組織が不明 に見える。	7.5YR7/6 糖 やや中粗い。白・半透明細粒少。 赤黒一細粒少 やや微	南東部塚上5cm 杯一底一部。調整完存 16



27・28は第316図27と同一個体

第320図 権現山遺跡SG5区SI-24(2)遺物

12 土師器 高杯	高 残 8.0	外面脚部上平ナデのちミガキ。ミガキは密だが、隙間もあり。内面脚部上平縦方向のしぼり目が顕著。下平ヘラナデで、縦横残る。	5YR5/6 粗 やや細密 粉と金色赤母粒微量 中々散在	P5 脚上平 1/2 割 K・K 粉 1
13 土師器 高杯	口 径 16.0 高 残 2.8	深い林部と見られる。外面杯部体部ナデないヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面杯部口縁一体部ヨコナデ。内外面とも表面が磨滅している部分が多く、調整は不平等。	7.5YR5/4 浅黄粉 やや細密 赤粒少、赤粉微量 散在	杯口一体 1/3 割
14 土師器 高杯	高 残 0.3	外面脚部ナデのち上平ケズリのちやや緩らかなミガキ。内面脚部上平ナデ。下平ヘラナデで、縦横縦面に残る。	5YR7/6 粗 やや細密 白微粒少、白粉微量 中々散在	脚柱 1/3 割
15 土師器 小形壺	口 径 11.0 高 残 4.8	口縁部は直線的に開き、端部で内向きに角度を変えて直立気味となる。外面口縁部上平ヨコナデのち口縁部縦方向のヘラナデのちやや緩らかな縦方向のミガキ。内面口縁部上平ヨコナデのち口縁部斜め方向のケズリのちやや緩らかな縦方向のミガキ。	7.5YR4/4 粗 細密 赤・黒細粒と白微・微粒 微量 散在	中央部深上7cm 口 1/4 割 17

16 土師器 小形甕	高 残 2.8	小形、胴部ヨコナデのち履方向の縦らなミガキ、内面胴部ヨコナデ、胴部上縁削りナデ。	5YR6/6 橙 やや暗赤 黒・透明緑と白・黒 赤・赤・砂鉄粒微量 やや軟質	胴 1/2 周
17 土師器 小形甕	高 残 4.2	外面胴部上平ナデのちミガキ、内面口縁部下端ナデ、胴部上平削りナデで、組織が残る。	5YR3/6 橙 やや暗赤 白顔料少、白・黒粒 粒微量 硬質	口1部、胴上平1/3周
18 土師器 甕	口 残 15.5 高 残 4.8	外面胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデで組織が残る。	7.5YR7/6 橙 やや暗い 白顔料少、白顔～黒 粒と赤～黒粒と透明緑粒微量 硬質	南東部床土 4cm 口2/3周 8
19 土師器 甕	口 残 19.4 高 残 12.7 最大 残 28.4	外面胴部上平 10 本/1cmのハケのち一部ナデ、口縁部ヨコナデ。ハケは、上端のちたなり方によりヤケが出ない部分もある。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上平削りヘラナデのち履方向の縦らなミガキを付し削りナデ。胴部上端には、組織が残る。外面胴部中位・口縁部削りナデ。	5YR3/6 橙 やや暗赤 白顔～黒粒多、白・透明緑と赤・黒・透明緑粒微量 硬質	南東部床土 4cmと中央部床土 1～3cm 口～胴上平1/3周 12、19、20、21
20 土師器 やや粗い 甕	高 残 2.0 底 残 6.8	19と同じ個体の可能性あり。外面胴部下端ヘラナデ、底部ケズリで、突出した平底のように作られるが、外周が強く削られたため丸味を持つ。内面底部削りナデ。	10YR7/4 に近い黄橙 やや暗い 白・半透明緑粒多、赤黒粒少 硬質	中央部床土 1cm 底面 25
21 土師器 甕	高 残 3.5 底 残 7.4	外面胴部下端ナデ、底部ケズリで、平底。内面底部ヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗赤 白・黒・赤・砂鉄粒 微量 白・黒・赤・砂鉄粒 硬質	胴下縁～底1/2周
22 土師器 甕	高 残 2.2 底 残 8.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部は突出し、中央が浅くくぼむ。内面底部はほぼ全面で表面が剥落しているため、調整不明。	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗赤 赤黒～黒粒と白・半透明緑粒少 やや硬質	底2/3周
23 土師器 甕	口 残 13.2 高 残 1.01 最大 残 15.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部上平横方向のナデ、内面口縁部ヨコナデのち履方向の縦らなミガキ。胴部上平横方向の体の狭い帯なヘラナデ。外面口縁部・胴部中位削りナデ。	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗赤 白・黒・赤・砂鉄粒 少、白・黒・砂鉄と赤・黒粒粒 微量 やや硬質	西部床土 6～7cm 口1/2周、胴上平2/3 底 27、32
24 土師器 甕	口 残 15.0 高 残 4.7	外面口縁部 6 本/1cmのハケのち上平ヨコナデのち履方向のミガキ。口縁部は斜めの平面となる。内面 6 本/1cmのハケのち履方向のミガキ。	10YR7/4 に近い黄橙 やや暗赤 砂鉄と白・透明緑粒 微量 やや硬質	口1/3周
25 土師器 甕	口 残 15.4 高 残 9.4	外面口縁部削りナデのち履方向の縦らなミガキ。胴部上平ヘラナデのちたなり方から横方向のミガキ、内面口縁部削りナデ。口縁部はわずかに内巻する。胴部上平ナデ。表面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。	10YR7/4 に近い黄橙 やや暗赤 白・赤・半透明緑粒 多、赤鉄微量 やや硬質	北部床直土 口～胴上平1/3周 3、横底面
26 土師器 甕	口 残 13.4 高 残 28.0 底 残 7.4 最大 残 24.0	外面口縁部上平ヨコナデのち口縁部やや斜め方向のミガキ。口縁部内縁、胴部ナデ・ヘラナデのち密なミガキ。胴部増減する部分多い。底部ケズリのち履方向の縦らなミガキ。胴～底部ナデないヘラナデのちミガキ。胴部上平組織が残る。ミガキは密に巻かれると思われるが、胴部中位以下は表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。	10YR7/4 に近い黄橙 やや暗い 砂鉄～黒粒と赤～黒粒少、赤鉄微量 やや硬質	P3付直床土 4cm、東部床直土に深さ 3cm、北部床直土に深さ 1.5cm、胴一部欠、底面存 3、4、5、7、28、S124 横底面
27 内面土器 甕	口 残 14.3 高 残 9.1 最大 残 21.0	内外面とも青灰色で、断面は赤灰色。内外面胴部ロウロナデ。28およびS120-22やSK106出土の下部と同一個体と考えられるが接合できない。	5PB6/1 青灰 やや暗赤 白顔～黒顔粒微量 硬質	低地土直の4片およびS19の1片と接合 口1/8周、胴1/4周
28 内面土器 甕		内外面とも青灰色で、断面は赤灰色。外面胴部縦かな格子目タナキのちわずかにナデ。内面胴部ナデ。内面に、わずかに自然剥落する。27およびS120-22やSK106出土の下部と同一個体と考えられるが接合できない。	5PB6/1 青灰 やや暗赤 白顔～黒顔粒微量 硬質	胴部下平削り
29 土製品 結核車状 土製品	径 3.86～ 3.97 厚 1.58～ 2.19 重 24.15	外面はナデで整形され、外周にわずかに粘土の層が見える。孔径は 6.0～6.8mmで、外周の円の中心を外れているほか、厚厚も 1.5～2.1cmと幅広く、整形はやや雑と言える。外面には、部分的に淡褐色土が付着する。化粧土？孔径の大きさからみると土玉より結核車に近いが、重心が偏っているのか、確認できずとも孔は認められない。	7.5YR7/4 に近い黄橙 暗赤 赤黒～黒粒少、黒鉄粒微量 やや軟質	口1部上面 底面
30 鉄製品 キザギ工具	長 13.7 幅 1.1 厚 0.5 重 20.59	平面部は断面が不明瞭で、表面は丸く仕上げ、断面は側面付近が最も厚く 4.7mmで、先端部と後端部では厚さ 2.8～2.9mmで少しづつ薄くなる。筋先端だけは側面を示したように急に薄く尖り気味になる。有機質は微量には見られないが、手に水気がわずかに残存しているかもしれない。X線写真でも孔は認められない。	2.5C5/1 オリーブ灰 硬質 断面片 硬質	西部床直土 表面 35
31 土師器 甕	長 残 10.3 幅 残 4.9 厚 残 1.0	瓶状の雲母片内周、瓶片と見たが、残存する形に違いで形面となる方向なしは製造上の可能性もあるだろう。残存重量 71.7g。	2.5C5/1 オリーブ灰 硬質 断面片 硬質	南部床土 4cm 底面 29
32 土師器 甕	長 20.9 幅 15.0 厚 5.2	河原石。加工の痕跡はなく、左側に 2 面の斜断面があるのみ。重量 2291.1g。	5Y7/1 灰白 やや暗赤 灰山片	南東部ピット直土 11cm 底面 13
33 土師器 甕	長 15.0 幅 11.8 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1313.1g。	2.5Y7/2 灰黄 やや暗赤 灰山片	南東部床土 12cm 底面 15
34 土師器 甕	長 15.4 幅 8.7 厚 3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 566.8g。	5Y7/2 灰白 粗い(やや多孔質) 灰山片	中央部床直土 底面 23
35 土師器 甕	長 15.0 幅 7.5 厚 2.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 498.2g。	10YR7/6 明黄緑 やや暗い 灰山片	西岸直床土 3cm 底面 33
36 土師器 甕	長 12.8 幅 8.2 厚 9.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 572.2g。	N6/ 灰 やや暗い 灰山片	西部床土 1cm 底面 31

SG5 区 SI-25 (第321図、写真図版37・183)

【位置】 SG5 区中央西寄りの 13-16 グリッド。同じく古墳中期末の SI-26 が南に近接し、やはり中期末の SI-23 に東北部を切られる。西部に重複する時期不明の P-170 は、写真で西側に見える浅い攪乱溝と関わる可能性がある。

【規模と形状】 東壁が明確ではないが、ほぼ方形であろう。東西推定長 5.09m、南北長 5.18m。中軸線は N-2°-W。確認面が低いため、残存壁高は 2~9cm。床は緩い凹凸があるが、ほぼ平坦である。掘方は床面から深さ 2~14cm で底面に緩い凹凸があり、ローム塊を少量含む明黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

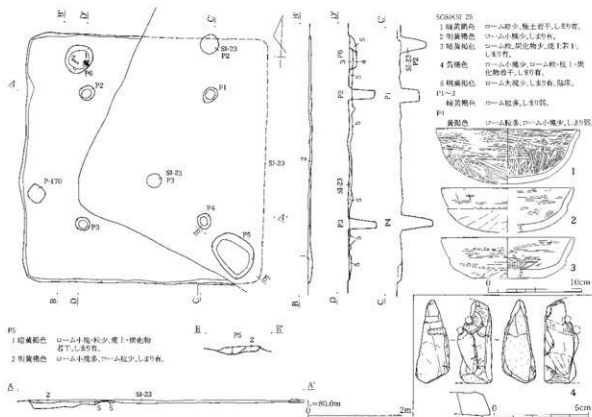
主柱穴 4 本のうち P1・P4 は SI-23 の床下で確認した。P1 は径 35 × 26cm × 推定床から深さ 41cm (SI-23 掘方底から 40cm)、P2 は径 32 × 31 × 深さ 56cm、P3 は径 31 × 28 × 深さ 61cm、P4 は径 33 × 29cm × 推定床から深さ 72cm (SI-23 掘方底から深さ 40cm)。柱間は P1-P2 間が 2.61m、P3-P4 間が 2.55m、P1-P4 間が 2.67m、P2-P3 間が 2.75m でほぼ同様である。

南東隅の P5 と北西隅の P6 が貯蔵穴の可能性はある。P5 は径 96 × 74 × 深さ 15cm の楕円形で、南壁に対し約 45° 斜行する。P6 は 60 × 58 × 深さ 18cm の円形。P5・P6 はほぼ平底で壁は緩く外傾し、覆土に焼土・炭を含む。貯蔵穴が 2 箇所の建物は、SG5 区 SI-11 などがある。調査時には P5 だけを「貯蔵穴」と呼んでいるので、P6 は SI-25 より新しいと考えた可能性もあるが、遺物の時期から P6 が SI-25 に伴うと判断した。

【火処】 確認されなかった。SI-23 に破壊されたと思われる。中期末の建物の通例として、東壁または北壁にカマドを持っていたことが想定される。

【覆土】 土層の残りが薄いので、白色テフラ粒などの有無は不明。南半に 2 層が見られる。

【遺物出土状況】 竪穴の残りが悪いので、遺物はビット内のものである。P6 で、1・2 の他に土師器(裏蓋類胴部と杯体部が各 1 片)が出土した。3 は貯蔵穴出土と注記され、調査時の図面では P6 ではなく P5 を「貯



第321図 権現山遺跡 SG5 区 SI-25 遺構・遺物

破穴」)と記しているので、P5から出土している。

【出土遺物】 平底の杯は3以外にも破片がある。甕はない。同じく中期末のSI-23に切られるのでそれより古く、中期末(本遺跡跡年の4段階)の古相と考える。4は穿孔した粘板岩製模造品で、穿孔時に破損した製作失敗品であろうか。後期に多い粘板岩製模造品が中期末に出現する事例かもしれないが、粘板岩破片はこの1点だけで、出土状況も不明なので、後期の混入遺物の可能性も残る。SG5区SI-6(白玉・剥片)などに粘板岩製品があり、粘板岩製模造品はSG10区SI-47などにある。

遺物はごくわずかで、杯(高杯?)・小形壺・甕・甕が同量程度ずつある。図示以外の土師器は合計160片・1,195gで、内訳は杯66片・424g、甕壺類94片・771g。

第183表 権現山遺跡SG5区SI-25 出土遺物

番号 種類 遺物	大きさ cm・形	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 15.2 高 5.8	外面口縁部ヨコナデ・体~底部ヘラナデのち口縁~底部ミガキ。口縁~体部横方向のミガキのち体~底部一方のミガキで、体~底部のミガキは一端が1点に収束するよう向きに急される。内面ヨコナデのち口縁~体部横方向のミガキのち体~底部放射状のミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐色 赤相~細粒少 やや微質	P6 底上2cmとSI-23覆土が重合 口~体2/5弱。底完成 上、SI-23覆土
2 土師器 杯	口 径 14.0 高 4.7	外面口縁部ヨコナデのち縁なら横方向のミガキ。体~底部ケズリのちナデ。内面口縁~体部ヨコナデのち口縁~底部ミガキ。口縁~体部は縁なら横方向、体~底部は放射状と見られるが、体~底部は表面の磨滅が著しく、調整不明瞭。	5YR5/8 明赤褐色 やや微質 赤相~細粒少、白微 粒微質 やや微質	P6 底上13cm 口~底1/4弱 4、粘
3 土師器 杯	口 径 14.2 高 4.3 底 径 7.4	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ・底部ケズリのち口縁~底部充肉のあるナデ。底部は平底で、わずかに浅くくまむ。内面口縁部ヨコナデ・体~底部ナデのち体~底部やや縁なら放射状のミガキのち口縁~体部縁なら放射状のミガキ。	5YR5/6 明赤褐色 やや微質 白・黒・赤・砂微粒 少、白・赤微~粗粒微質 やや微質	口~底1/6弱 貯成穴
4 石製模造品 不明	長 径 4.3 幅 径 1.8 厚 径 1.7 重 径 13.5	縦状に残存する粘板岩片。土上には貫通する孔と貫通しない孔があり、いずれかの穿孔により充塞して加工を停止してしまったものと見られる。貫通する孔は表側から穿孔されていると思われる。径は3.0~3.3mm。壁面はやや平滑である。貫通しない孔は径3.1~3.3mmで、壁面は穿孔時の工具面と見られる円筒方向の凹凸が明確。右側面と下面は彫削面。下面は裏面と下方からの上る彫削面が大きく残る。表面は土に左方向からの削削面が認められるほか、孔の周囲は穿孔に伴って円形に剥離している。左側の欠損面も含め、突出した部分がやや磨滅している。	7.5YR3/1 黒褐色 微質 粘板岩	破片

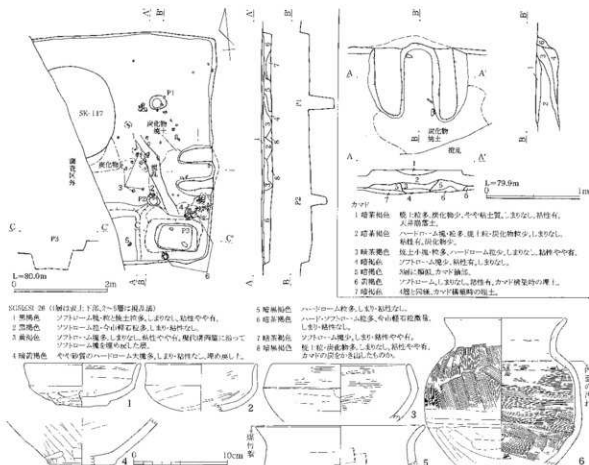
SG5区SI-26 (第322図、写真図版37・38)

【位置】 SG5区中央の12-16、13-16グリッド。同じく古墳中期のSI-25が北側に、時期不詳のSI-99が東に近接する。西半は調査区外。中央北側を時期不明のSK-117に切られる。

【規模と形状】 ほぼ方形と推定され、中軸線はN-4°-E、南北長4.88m。東西長は調査部分からみて3.91m以上で、本来は南北長とほぼ同様と思われる。壁は外傾し、残存高16~21cm。掘方の図や写真はないが、貼床を施していたことが、掘方完掘写真から判断できる。床はほぼ平坦で傾斜しない。南壁に接して東西90cm以上×南北125cmの方形に巡る帯状の高まりが、南東主柱穴P2へ延びる。幅20~35×高さ約3cmのわずかな高まりで、ロームを主とした土である(現地記録した図に不明な点が多いため、写真から判断した)。

主柱穴は東側の2本を確認し、本来は4本主柱と考えられる。P1は径30×35×深さ54cm、P2は径24×28×深さ34cmで、P2はやや浅い。P1-P2間は2.06m。南東隅の貯蔵穴P3は東西軸の長方形で89×51cm。P3の深さは現地計測値に誤りがあるので不明だが、写真から推測すると床面から深さ30cm程度。P3の底面レベル値がちょうど30cm誤っていると推定して断面図C-C'を作成した。写真からP3周囲の傾斜を判断すると、P3の周囲は南東部を除き10~20cmの幅で、床面から3~5cmの深さでただらかに浅くなる。

【カマド】 東壁中央南寄りにある。天井は崩れ、残りは悪い。両袖幅105cm、煙道先端から焚口まで82cm。カマド部の掘方をさらに5cmほど掘り窪め、黄褐色・暗黄褐色の6・7層を埋め戻した上に、暗褐色土の袖基部が5~10cm残る。焼土も目立つ。火床はほぼ平坦で、奥壁寄りに炭や焼土を含まない4層、天井内壁に関わる焼土塊が多い3層、天井が流れた1・2層が堆積する。煙道は壁外に出ないで、先端は垂



第 322 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-26 遺構・遺物

直気味。

現地調査時の図面では5層より上に袖が残っていると観察・図化した。しかし、カマドの流れた覆土(2層)に過ぎないとカラー写真から判断して、写真を参考に横断面図と平面図を大幅に修正した。

【覆土】1～5層は表土と攪乱で、6・7層が覆土である。中央床面直上に焼土・炭化物の多い8層が堆積する。カマド前面に焼土・炭化物を多く含む範囲が、カマドから流出した土層と推定される。

【遺物出土状況】カマド南側では床付近(4～6)、竪穴中央部では床よりやや浮いた位置に遺物が多い(3)。1は中央部でも床近くで出土した。2は柱穴で出土した。6は南壁のすぐそばで床面に正位で置いてある。

【出土遺物】橙色の緻密な胎土が主体だが、1と5は色調がやや異なる。1は杯底部が削り足りないのが突出底状。裏(5)の外面に付く煤は、カマドよりも炉で使用した場合に多い。6は内面全体に黒色物質が付き、中身の貯蔵物に由来するようと思われる。遺物量は少なく、杯と壺類が主体で、高杯も少し入る。明確に長胴壺や大形胴とわかる破片はない。図示した以外に球胴の裏破片が多くあるが接合・図示できず、4や5の胴部とも思われるが確実ではない。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計158片・2.423gで、内訳は杯40片・215g、高杯2片・63g、壺壺類115片・2.141g、焼粘土塊1点・4g。

第 184 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-26 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1	口 径 12.3	外面白顔部分コナデ、体部分の巾中央付近のみヘラナデ、胴部下面には、指直に出現。底部は鼠歯なケズリであり、突出した平底が凹凸が著しい。内面白顔部分コナデのちねらな順方向のミガキ。体・底部は表面の磨滅が著しいが、おそらくミガキが磨き落されたものと見られる。	10B7中 明黄褐色	中央部床に1～2cm 口・体1/3弱、底一部 欠 14, 15
土師器 杯	径 4.6 底 5.7		暗赤 白～暗赤と赤相～暗赤 微黄 やや軟質	

2 土師器 杯	口 径 12.0 高 残 5.0	内外面とも細かなクレーター状に表面が剥落しているため、調整不明な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、体部丁字ナデ、内面口縁～体部は円筒方向のミガキと見られる。	25YR6/8 橙 微塵質・白・赤～細粒微塵質 やや軟質	P2 底土 13cm 底位 口～体 1/3 周 8
3 土師器 杯	口 径 14.6 高 残 6.1 最大 16.2	深部・大形。外面口縁部ヨコナデ、体部丁字ナデ。外面口縁～体部ヨコナデの横方向のミガキ、内面は細かなクレーター状に剥落しているため、調整不明な部分も多い。	5YR5/8 明赤褐 微塵質・赤細粒と白・黒微粒少 やや軟質	中央部床土 2～19cm 口～体 1/3 周 9、10、11、14
4 土師器 盥	口 径 7.4	外面製部～端下ナデ、底部ケズリで、突出した平底だが、甕土中の礫に当たって、平坦にしきれない部分あり。内面製部下端～底部ナデ。内面クレーター状の剥落が著しい。	7.5YR7/6 橙 微塵質 やや軟質	製部床土 4cm 製部下端～底 1/3 周 4、8
5 土師器 盥	口 径 17.8 高 残 4.5	外面口縁～製部上端ヨコナデ、内面製部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ、外面口縁～製部上端付着。	10YR8/2 灰白 やや微塵質・黒細粒少、白・黒細粒と白細粒微塵質 やや軟質	南部床直土 口 1/3 周 30
6 土師器 盥	口 径 13.0 高 残 15.5 最大 16.6	橙色。微塵質と粘土。外面製部土厚 10本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・製部下ナデ。製部下には積み上げ休止による接合面があり、外面ではわずかな段差と顔面の角度の変化として現る。内面口縁部ヨコナデ、製部 10本/1cmのハケ。製部下の接合面は粘土の接ぎ目として現る。製部上平縁細粒あり。製部の面全体に灰色物質付着。	5YR7/8 橙 やや微塵質・赤～細粒少、白・黒・砂細粒微塵質 やや軟質	南部床 6cmと東部床土 4cm 口 1/2 周、製部は存在 1、4

SG5 区 SI-28 (第323図、写真図版38)

【位置】SG5 区中央南寄りの 12-16・17 グリッド。SI-29 とともに最も南に位置する竪穴建物である。北東隅が古墳中期の SI-29 の北西隅を切る。時期不明の SB-159 と重複する。SI-28 の貼床層に SB-159 柱穴が覆われていないので、SB-159 が SI-28 を切る可能性が高い。

【規模と形状】ほぼ方形と推定され、東西 6.25×南北 6.00m、中軸線は N-18°-E。残存壁高は 7～10cm である。床面は平坦で、傾斜しない。掘方は床面から深さ 2～12cm で、底面に緩い凹凸があり、ローム粒・塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は P1～P3 以外に南西にも推定され、4 本主柱と考えられる。P1 は径 36×40×深さ 63cm、P2 は径 34×37×深さ 61cm、P3 は径 32×36×深さ 49cm。なお、貼床下で P3 の東側に重複するように径約 30cm、深さ不明のピットを確認した。柱間は P1-P2 間が 3.66m、P1-P3 間が 3.61m で、方形配置と考えられる。

北東隅の貯蔵穴 P4 は東西軸の楕円形で 42×88×床面から深さ 23cm。平底で、壁がゆるく上がる。P4 の覆土各層に炭・焼土を含み、1 層にカマド側から粘土も流入している。P4 の底面中央に柱状の掘り込みが附属する。調査時には時期不明遺構「SB-158」のピットと考えたが、土層からみて SI-28 貯蔵穴に伴うと判断できる。調査時に SB-158 南辺柱穴とされた柱穴は、SI-28・29 の柱穴と考えて帰属を変更した。

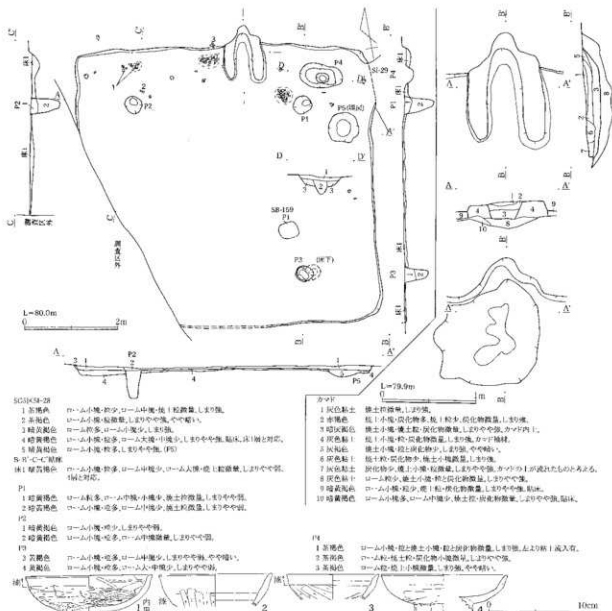
貼床除去後に確認した北東部の P5 は、南北にやや長い楕円形で 65×89×床面から深さ 12cm。床面に開口していた穴を、ローム塊の多い貼床で埋め戻したと考えられる(断面図 A-A')。P5 を旧期貯蔵穴とみるには、やや浅くて位置が不自然な点に疑問もある。貯蔵穴を 2 箇所持つ貯蔵穴は、SG5 区 SI-11 などがある。

【カマド】北壁中央の東寄りにある。両袖幅 88cm、煙道先端から焚口まで 123cm。灰色粘土主体の 4 層で袖を作る。火床面から煙道部は掘方に灰色粘土を貼る。火床上には、炭多量と焼土少量を含む流入土 3 層の上に、天井が崩れた粘土塊が多い 1～2 層が堆積する。煙道先端は、北壁より 25cm ならだかに突出する。

【覆土】大半は 1 層で、P2 上方に 2 層がある(断面図 A-A')。西壁近くの 3 層はロームが多い壁崩落土。

【遺物出土状況】主に北部で出土した。カマド西側の床付近と、北東主柱穴 P1 の北西側貼床中で、それぞれ長胴甕が破片化しているが、復原・図示できなかった。

【出土遺物】遺物は少ない。図化した遺物以外は小破片である。甕が主体で、長胴甕片が比較的多く、1～2 個体分とみられるが、接合・復原できなかった。杯も多く、半球形杯が主体で漆仕上げと炭素吸着黒色処理の両者がある。1 は内面黒色処理と漆仕上げの両方を用いた可能性がある。小さな杯(2・3)を含む点からは古墳時代終末期と考えられるが、1 はやや深身で、また黒色処理+磨き調整の少し変わった杯で、4 の高杯もまだ小型化していないので、古墳後期末の可能性もある。中期後葉～末の遺物も混入している。図示以外の土師器は合計 278 片・2.610g で、内訳は杯 69 片・485g、鉢 9 片・289g、壺甕類 200 片・1,836g。



第 323 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-28 遺構・遺物

第 185 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-28 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.4 高 径 3.9	外面口縁部ヨコナデのち体~底部ケズリ。底部のケズリではクローラー状に段差が生じている。内面口縁部ヨコナデのち体~底部ナデのちヨコナデ。口縁部はやや縮んで、基本的に口唇方向に集まれる。内面全体黒色処理だが、外面口縁部と内面の一部に黒色の塗膜状のものが認められるため、漆仕上げの可能性もある。	2.5Y7/1 黄灰 胎赤・赤・赤褐色 中~軟質	北厚部 13 ~ 14cm 口~体 1/4 周、底完存 20, 22
2 土師器 杯	口 径 12.0 高 径 3.4	精良な胎土。外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ。内面口縁~体部ヨコナデ。内外口縁部~体部漆仕上げ(残存部全体)。	5YR7/6 橙 胎赤・赤褐色と白褐色 中~軟質	P2 周辺床直上 口~体 1/4 周 5
3 土師器 杯	口 径 9.8 高 径 2.7	外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ。内面口縁~体部ヘラナデのちヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。漆は口縁部内外面に良く残る。漆仕上げの可能性あり。	7.5YR7/6 橙 胎赤・赤褐色と白褐色 中~軟質	北厚部 10cm 口~体 1/4 周 24
4 土師器 高杯	口 径 13.4 高 径 4.0	短頸高杯。外面杯部1縁部ヨコナデ。体部ナデ。頸部上部ヘラナデ。内面口縁~体部丁寧なヨコナデ。体~底部表面割割のため不明。内面ミヤキの可能性あり。口縁部内面一部に黒色物質付着。漆仕上げの可能性あり。	10YR7/4 紅 胎赤・赤褐色と砂紅 中~軟質	杯口~底 1/6 周

SG5区 SI-29a・29b (第324・325図、写真図版39・183・184)

【位置】 SG5区中央南寄りの12-17グリッドにあり、SI-28とともに最も南に位置する竪穴建物。P-255→SI-29(b→a)→SI-28・(SB-159)の順で、東辺で時期不明のP-255を切り、古墳後期末のSI-28に北西隅が切られる。時期不明のSB-159柱穴が(SI-29a・bの貼床に覆われないので)SI-29を切る可能性が高い。現地調査時名称はSI-29で、新建物にSI-29a・旧建物にSI-29bの名称を整理作業時に与えた。

【規模と形状】 a・bともに方形で南北5.63×東西5.53m、中軸線はN-25°-W。壁は外傾し、残存高8～20cm。床はほぼ平坦で東部が少し低い。掘方平面図はないが、断面A-A'と掘方写真からみて貼床を施している。

主柱穴P1～P4に旧(b期)と新(a期)があり計8本。P4旧は床下で確認した。

P1旧=径25×32×深さ34cm、P1新=径31×33×深さ27cm。P2旧=径32×36×深さ51cm、P2新=径25×27×深さ42cm。P3旧=径28×34×深さ40cm、P3新=径35×43×深さ60cm。P4旧=径27×32×深さ34cm、P4新=径20×23×深さ37cm。

柱間は旧期(b期)でP1-P2間が2.06m、P3-P4間が2.10m、P1-P4間が2.33m、P2-P3間が2.32m

新期(a期)でP1-P2間が2.66m、P3-P4間が2.61m、P1-P4間が2.80m、P2-P3間が2.69m

である。貯蔵穴に新旧があり、P3の新旧柱穴が重複することから、旧建物SI-29b(柱間東西2.1×南北2.3m)から新建物SI-29a(柱間東西2.6×南北2.7～2.8m)へ拡張したと推定できる。

床面が高い西壁及び南壁際で確認した壁溝D1は、幅19～20cm・深さ8～10cmの断面U字状である。床下で確認した間仕切溝2本は、西側のD2と南側のD3である。P3(新・旧)と西壁溝に繋がるD2は長108×幅13～19cm、掘方底面での深さ10cm。南壁溝に繋がるD3は長110×幅14～28cm、掘方底面での深さ10cm。

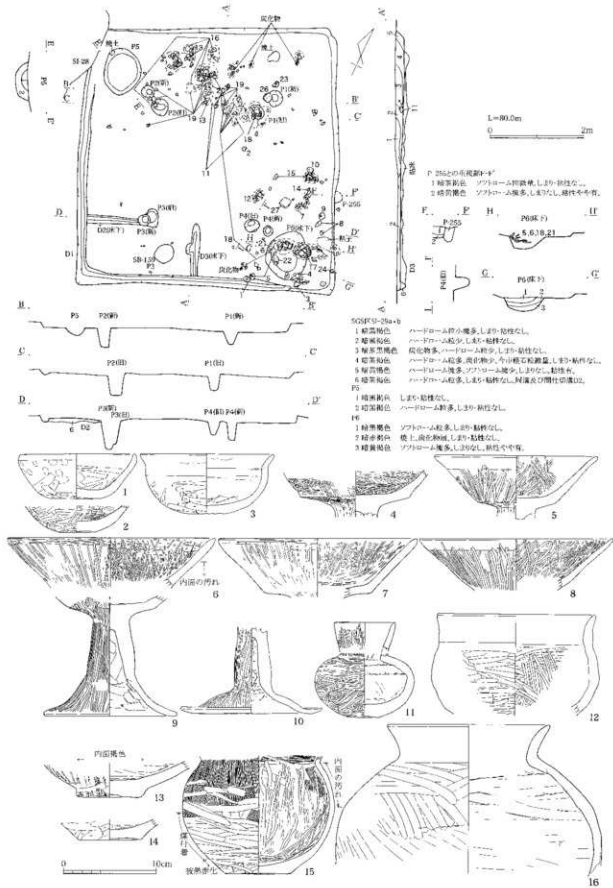
貯蔵穴は、北西隅のP5と南東隅のP6を確認した。いずれも覆土のしまりが弱い。床面で確認したP5は76×98×床面から深さ28cmの南北に長い楕円形で、やや丸底気味で壁が緩く、周辺に遺物がない。P6は南北にやや長い円形で85×99×床レベルから深さ32cm(床下から深さ28cm)。貼床除去後に確認したP6は調査時に旧期(SI-29b)の貯蔵穴と考えたが、P6外側周辺の破片と接合する5・18などの流入遺物があり、覆土がレンズ状自然堆積で竪穴覆土3・4層と同じ焼土・炭を含み、写真でも床面にP6の黒色覆土を確認できるので、新期(SI-29a)の貯蔵穴に用いたであろう。a・b期ともに2基の貯蔵穴を持つが、P5が旧期(b期)でP6が新期(a期)の可能性もある。貯蔵穴を2箇所持つ竪穴は、SG5区ではSI-11などがある。

【火処】 確認されなかった。

【覆土】 確認できるのはSI-29aの覆土で、北側からの流れ込みが観察される。3層に炭化物が多い。

【遺物出土状況】 建物北部では床よりやや浮いたレベルに遺物が多く、南東部貯蔵穴P6周辺では床面付近に多い。貯蔵穴P6埋土上面に残存度の高い甕(17)、貯蔵穴内に砥石(22)がある。貯蔵穴P6の北東側に白色粘土があり、貯蔵穴内で出土した高杯杯部(6)の外面上にも粘土が付着している。貯蔵穴P6南東の床面では高杯杯部と杯が上を向く(3・4)。P6の北側では口縁部を欠損した小形甕(15)が正位で床付近にあり、その北側で高杯脚部が横転している(10)。南壁近くに逆位の杯(1)と高杯杯部(5)が並び、5破片は貯蔵穴付近にも分布する。北東主柱穴P1の南側で、P1旧期柱穴の跡地が窪んだ部分に粘土と壺(18)の底部を入れて据え置き、壺の上部が破片化して周囲に広がっていた。P1-P2間の北側にも大形壺(19・20)があり、19の胴部は接合図示できなかった。

【出土遺物】 遺物はSI-29aに伴う。量が多く壺甕類が主体で杯・高杯も多い。図示以外の高杯は小破片ばかりである。6は杯部内面中央に黒色物質が均一に着く。15は被熱使用痕のある小形甕。17は丸底状に削る。底が凸面状の甕はSG10区SI-16他にある。17には繊維痕があり、胴部を布ナデ調整したと考えられ



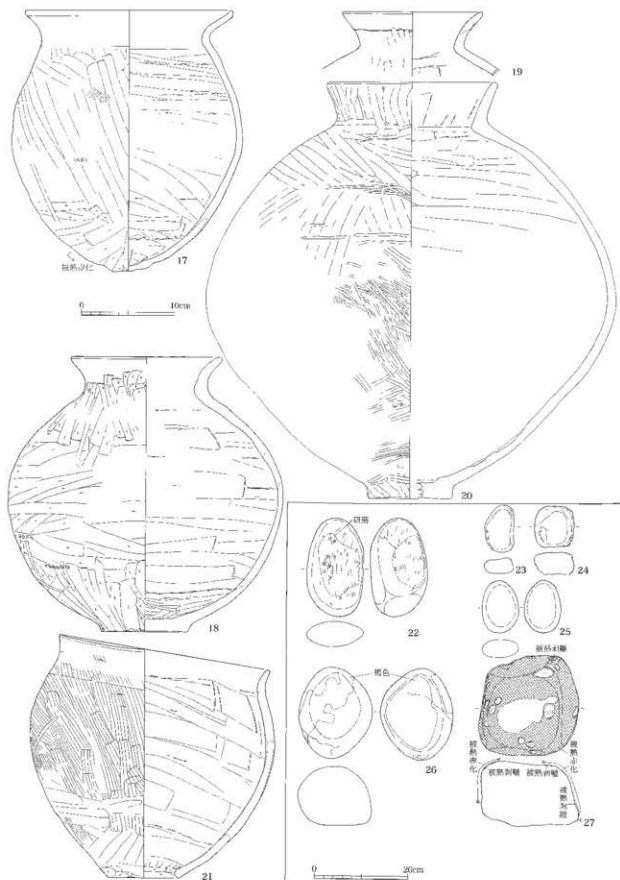
第 324 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-29a・b(1) 遺構・a期遺物

る。17や壺胴部下半に縄圧痕がある甕(18)はSG10区SI-47など、貼付口縁の壺(19)は5区SI-100などにある。21は出現期の大形甕で、大形甕のハケ調整はめざらしい。ホルンフェルスの砥石(22)は、SG5区ではSI-7などにある。27は被熱して表面が浅く剝離した碟で、鉄銹や鍛造剥片がないので、SG10区SI-36・106にあるような金床石ではない。

図示以外の土師器と焼粘土塊は合計198片・2.836gで、内訳は杯30片・253g、高杯13片・172g、壺甕類154片・2.401g、焼粘土塊1点・10g。古墳中期後～末葉の土器も少し混入している。

第186表 権現山遺跡SG5区SI-29a出土遺物

番号 種類 名称	大きさ mm・g	特徴	色調 粘土・灰成 (または原料)	出土状態 或存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.2 高 4.7 底 5.5 最大 12.6	整形が良く、赤みあり。外面口縁部軽いヨコナデ。体部無調整で、整形時の軽いナデと面指し痕が残る。体部下端光沢を持つケズリ。底部軽いケズリが磨かれるのみであり、縦かな粘土の織が残る。平底で、わずかに中央がくぼむ。内面口縁-体部ヨコナデのち体-底部光沢を持つケズリ。	IOYR7/4 ぶい-黄褐色 やや凝縮 赤黒粒少、白細粒多	高野塚直土上 底面 1
2 土師器 杯	高 2.8 底 1.8	外面体部ナデの密なミガキ。底部ケズリのちわずかにミガキであり、全体が浅くくぼむ。内面体-底部部が多方向のミガキ。ミガキは体部のうち上部。	5YR6/6 橙 微塵 白微粒少、赤・灰色微塵	床土5cm 体-底1/2周 6
3 土師器 杯	口 径 14.1 高 6.3 底 4.0	外面口縁部ヨコナデ。体-底部端部が丸れたヘラによるケズリであり、口の軽いケズリのようにも見え。底部はケズリが四方に集まるため方形の平底となる。体部無調整。内面口縁部ヨコナデ。体部ナデ方向のナデより底部ヘラナデ。口縁部内面の下側に粘土接合痕を残す部分あり。	IOYR7/8 黄褐色 やや凝縮 白微粒少、白細粒多	高野塚直土上 口-体3/5周、底面存 3
4 土師器 高杯	高 残 4.9	外面杯部体-底部5本/1cmのハケのち底部-脚部縦方向のケズリのち体-底部縦方向の疎かなミガキ。杯部底部は脚部縦方向を持つ。内面杯部体部4本/1cmのハケのち底部ヘラナデのち多角形状の疎かなミガキ。杯部ナデナデ。内面のミガキはやや乱雑。内外面ともミガキがハケを滑せていないところが多い。	IOYR7/4 ぶい-黄褐色 やや凝縮 白・透明明細粒と赤 黒-細粒少、砂礫微塵	野塚穴付直土床土上 杯体-底面存 4
5 土師器 高杯	口 径 17.0 高 残 6.8	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデ・底部-脚部縦方向のケズリのち口縁-底部縦方向のやや疎かなミガキ。底部に及ぶミガキは少ない。内面杯部体部ヨコナデ・体-底部ナデのち口縁-底部ミガキ。ミガキは乱雑で多方向であり、底部は密に集まれる。下部は接合面から欠損しており、その部分から、杯底面部分を生み出すまで調整と検査もなされる。見られる。	IOYR7/4 ぶい-黄褐色 やや凝縮 赤黒-細粒多、白粗粒少 やや軟質	高野塚直土上と野塚穴内と兼用に履片あり 杯口-体1/3周、底面存 2、29
6 土師器 高杯	口 径 22.0 高 残 5.3	外面口縁部縦方向のケズリ・体部縦方向のケズリのち口縁端部縦方向の疎かなミガキ。内面口縁-体部縦方向のケズリのち多方向の乱雑なミガキ。口縁部は、外面端部上・外ともケズリにより面取りされるほか、内面も体部との境にわずかな段差を持つようにケズリが磨かれる。内面底面の上はわずかにくぼむ。外面体部に白色粘土土質付着。内面体部に黑色物質付着。面などに転用あり。	5YR7/8 黄褐色 やや軟質 白・砂粒-細粒多、赤黒-細粒少 やや硬質	野塚穴付直土上 杯口-体1/4周 29
7 土師器 高杯	口 径 21.0 高 残 6.3	外面口縁部縦方向のケズリ・体-底部縦方向のケズリのち口縁端部縦方向のミガキ。口縁-体部縦方向の疎かなミガキ。口縁端部のミガキが磨かれる部分は外向きの平面上に面取りされる。内面口縁-底部縦方向のケズリのちミガキ。ミガキは比較的密で、口縁-体部は乱雑な放射状主体。底部は横方向。	7.5YR7/8 橙 やや凝縮 灰色澤-粗粒と白微塵 -細粒と赤黒-細粒少 やや硬質	壺部床土上 杯口-体1/3周、底-面 9
8 土師器 高杯	口 径 20.3 高 残 5.5	外面口縁部ヨコナデのち口縁-体部縦方向のミガキ。内面体部ケズリのち口縁部ヨコナデのち口縁-体部ミガキ。内面ミガキはやや乱雑だが、おむね放射状。	5YR5/6 明赤褐色 やや凝縮 赤黒-細粒と灰色粗粒 微塵	高野塚直土上6～14cm 杯口-体1/3周 6、7
9 土師器 高杯	高 残 12.7 脚 14.1	外面杯部体部下横方向のケズリ・底部縦方向のケズリのち体-底部縦方向の密なミガキ。脚部下端ヨコナデのち全体縦方向の密なミガキ。内面杯部体-底部は残存部全体の表面が剝離しているため調整不明。脚部上ナデ。下ヘラナデのちヨコナデ。調整方法はやや異なるが、10の高杯と同様に、脚部内面は丁寧に調整される。	5YR6/6 橙 やや凝縮 赤黒-細粒少、砂礫 粒微塵	高野塚直土上8cm 杯体-底-面、底面存 8、表層17.5-12.5
10 土師器 高杯	高 残 9.2 脚 残 15.0	柱状脚。外面脚部体部下横方向のケズリ・下端ヨコナデのち脚柱部-体部下横方向の密なミガキ。内面脚部体部下横ヨコナデのち脚柱部ケズリ。ケズリは脚柱部上端まで丁寧に磨かれる。	10R6/6 赤褐色 やや凝縮 砂粒-細粒多、砂礫 微塵 やや硬質	壺部床土上 柱状存存、脚部下3/4 周 12
11 土師器 小形甕	口 径 6.4 高 残 9.9 底 3.2 最大 10.4	部高は10cmに調整される。外面口縁部ヨコナデのち縦方向のミガキ。体部上ナデのち体部下-底部ケズリのち体-底部密なミガキ。底部はくぼむのみ。全体が浅くくぼむ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。体部上ナデで、粗雑が顕著に残る。体部下ヘラナデ。底部ナデ。内面体-底部は無調整。	IOYR7/4 ぶい-黄褐色 やや凝縮 白・透明明細粒多、黒 粒粗少	中央床土上2～3cm 口1/4周、体-底面存 60、76、77
12 土師器 鉢	口 径 16.7 高 残 10.6 最大 17.6	外面体部ヘラナデのちミガキ。強部無調整。口縁部内面ヨコナデ。内面体部ヘラナデのちミガキ。ヘラナデが結構の前縁を滑せていないためにミガキが磨かれにくい部分あり。	IOYR7/4 ぶい-黄褐色 やや凝縮 赤黒-細粒少、赤礫 微塵	中央床土上7cm 口-体1/4周 32
13 土師器 甕	高 残 3.7 底 6.8	外面脚部ナデ低いナデのち縦方向の軽いヘラナデ。ヘラの端部を当てているためか、深い収斂状になることがある。底部ナデで、中央がくぼむ変形底。内面脚部下平-底部ヘラナデ。底部付着は、脚部との間にわずかな段差を持って一段高くなる。外面底部付着のみ黑色物質付着。内面脚部下平-底部レーマー状の痕跡顕著し。内面脚部下平黒色で、内面底面中央の径7cmの縦溝のみ成成または使用時の被熱が褐色となる。	5YR6/6 橙 やや軟質 白・砂粒粗少、砂礫 -細粒微塵 やや硬質	北西面床土上4～8cm 脚下部-底面存 79、106
14 土師器 甕	高 残 2.2 底 6.6	脚部下端-底部ケズリのち脚部下端-底部ナデ。底部ケズリは基本的に同一方向。底部全体的にくぼむ。内面脚部下端-底部ヘラナデ。内面は、粘土も含め、黒色となっている。	5YR4/8 赤褐色 やや軟質 砂礫粗多、砂粒粗 少、白微塵微塵 硬質	壺部床土3cm 底2/3周 10



第325図 権現山遺跡SG5区 SI-29a・b(2) a期遺物

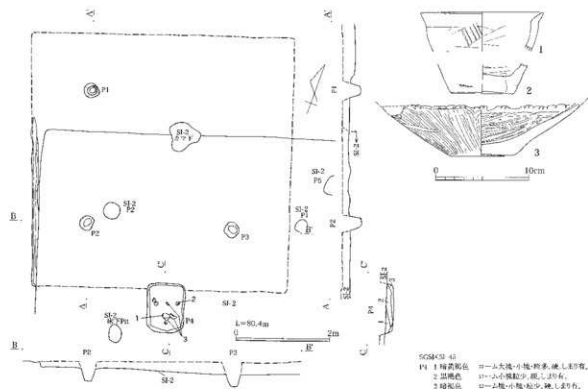
15 土師器 遺	高 12.4 底 7.0 側 16.0	小形・短筒。外面製部上半13本/1cmの細かなハケのち口縁部ヨコナデ・製部中央位〜下平方向のナデのち製部下縁ケズリのち製部下平中心位横方向の中央位ミガキ・底部ケズリのち一部ミガキで、ドーナツ状に細かなのびたぐぼび。内面口縁部13本/1cmのハケのち疎らなミガキ。製部上半横方向のヘラナデのち製部〜底縁部方向のヘラナデのち横方向の疎らなミガキ。縦方向のヘラナデとミガキは斜めに長く敷かれている。ヘラナデの一部は13本/1cmのハケであるように見られるところもあるため、外面のハケと同様の工具での調整の可能性がある。外面製部一部覆付着、外面底部付近焼熟のため赤色。	7.5YR5/3 に近い明 やや暗紺 白微粒多。砂粒一 目	東部床上1cm 削〜底一部穴 34, 11
16 土師器 遺	口 復17.2 高 15.6 最大 復28.2	外面製部上半〜中位ナデ、内外面口縁部ヨコナデ、内面製部強いナデで、上下に磨粒粗面。下縁は積み上げ停止による接合面から欠損している。内面と外面とを区別しより赤変している部分あり。内面は焼熟のためか剥落が激しい。	7.5YR7/6 暗 やや暗紺 白微粒多。白濁と砂 粒多。赤粒〜細粒幾 少	北部床上6〜13cmとP2 層辺床上6cm 口〜製中位1/4厚 80, 81, 82, 83, 84, 92
17 土師器 遺	口 21.9 高 27.6 最大 24.3	細面な胎土。外面製部下半〜底部ケズリのち製部上半〜中位丁寧ナデ、底縁は乱雑なケズリのためびつなれ底状であり、中央にわずかな平凹面がある。製部上位に10本/1cm程度の織物ノミ痕が焼成前に付き、布でナメタシたと考えられる。底部上約12cmの製部には、1段しの織らした織文の印がある。18に見られたものと同一致の可能性あり。口縁部内外面ヨコナデ。磁面はやや内凹し、外面に面があるように整形される。内面製部はヨコヘラナデで、底部上10〜18cm付近で表面の剥落が著しいのは使用によるものか。底部上6cm付近には積み上げ停止による接合面があり、内面で粘土の織ぎ目として剥落が見える。	10YR6/3 に近い暗紺 やや暗紺 白・砂粒少。赤粒 粘粒幾	新緑付近の床直上 ほぼ定形 5
18 土師器 遺	口 16.0 高 29.0 底 9.2 最大 20.0	外面口縁部ヨコナデ・製部中央位〜下平方向の強いケズリ・ち製部中央位横方向の丁寧なミガキのち強面〜製部上半・製部下半平方向の丁寧なケズリ、製部中央位〜下半平は、部分的に2段目の調の印がある。底部はケズリで、外周りに粘土土層によるナデが見える。突出する半環。内面1/3部ヨコナデ・体〜底部ヘラナデ。製部下半に積み上げ停止による接合面あり。外面製部中央位部分的に覆付着。外面製部下半〜底部はおそろく焼成時の焼熟で赤色色を呈する。内面製部〜底部は黒褐色。	7.5YR7/6 暗 やや暗紺 白微粒多。黒・多 透明細粒や 織粒	西部床直上、P6内、中央 部床直上〜2cm、東部 口〜製中位1/6厚 71〜製一部穴。底辺厚 24, 29, 57, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 105
19 土師器 遺	口 復14.8 高 17.5 最大 17.5	外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半〜製部下半平方向のナデ。製部はミガキの可能性あり。口縁部は粘土土層付けによる接合1層。内面口縁部はヨコナデと思われが、全体的に細かなケラーター状に剥落するため調整不良。製部上半強いナデ。胎土は灰白色だが、焼熟のためか内外面の表面は赤変している部分が多い。	10YR8/2 灰白 やや暗紺 赤粗粒と細砂少 少	中央部床上3〜12cm 口〜製上半1/6厚 62, 63, 73, 74, 79, 80, 8 1, 82, 91, 92, 94
20 土師器 遺	口 復17.5 高 43.0 底 19.2	底面は円筒状に15mmほど突出し、外底面を1方向ヘラケズリ。外面製部中央位〜下半平は、製部ナデ付ヘラミガキ。製部ナデ付ヘラミガキ後に下部に製部ナデ付ヘラミガキ。外面に3層部タテヘラナデ後に口〜製部を斜くヨコナデ、内面は製部ヨコナデナデ後に削りナデ。	10YR7/6 明黄緑 やや暗紺 白・透明細粒や 黒・多。透明細粒幾 少	中央部床直上2〜7cm 口穴付。底辺3/5厚 61, 62, 73, 75, 80, 81, 81, 8
21 土師器 遺	口 22.5 高 25.5 底 7.4 最大 25.8	外面製部下半強いナデのち製部3本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・製部下半ナデ・製部下半ケズリ。内面製部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ・底部ケズリ。上半のみが目立つ。積み上げ停止による接合面は底部上約4.5〜7cm、19.5〜21cmの2ヶ所ある。下方は外面に段差となっており、これを消すようにナデが施される。上方のものは表面に剥落が残さないが、これより上では下半の胎土とは異なる黄褐色の強い粘粒が使用されていると見られる。	10YR7/4 に近い暗紺 やや暗紺 白・赤粗粒と細砂少 少	新緑内 ほぼ定形 29
22 石函 破石 遺	長 20.6 幅 11.9 厚 6.2 最大 2074.8	河原石。扁平な楕円形で、研削面の様子から上下両端を除くほぼ全面が使用されたと思われる。このうち表裏両面の比較的平坦な部分が特に研削されている。使用によると思われる細かな凹痕は、特に研削される面を中心に確認できる。方向はほぼ縦石の長軸に平行しており、この方向に使用されたことがわかる。	5Y6/2 灰オリーブ 暗紺 ホルンフェルス	P6内 定形 109
23 埴 埴	長 9.8 幅 6.2 厚 3.4	河原石。特に加工の痕跡なし。土端の表面が荒れているが、縦行によるものとは見られない。重量311.3g。	2.5Y7/2 灰黄 暗紺でチャート起源のホルン フェルス	北部床直上 定形 65
24 埴 埴	長 8.5 幅 8.4 厚 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量615.8g。	10B5/1 青灰 暗紺でチャート起源のホルン フェルス	製部付近床土2cm 定形 16
25 埴 埴	長 11.0 幅 7.7 厚 3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量390.5g。	2.5Y7/3 灰黄 やや暗紺 安山岩	北部床上9cm 定形 48
26 埴 埴	長 19.2 幅 15.4 厚 12.9	河原石。特に加工の痕跡なし。球状で、製部は平坦。表裏面ともに褐色に変化した部分が多いが、焼熟によるものかどうかは判別できない。重量5750.0g。	2.5Y7/3 灰黄 やや暗紺 安山岩	P1(新)付近床土3cm 定形 56
27 埴 埴	長 21.1 幅 20.6 厚 14.0	方形の大型の埴。河原石で、特に加工の痕跡なし。表側と側面は焼熟により赤変しており、「焼けジグ」も見られる。裏側全面と、表側中央部分には焼熟の痕跡がない。重量9890.0g。	5Y6/1 オリーブ灰 暗紺	西部床直上 ほぼ定形 35

SG5区 SI-45 (第326図、写真図版39・184)

【位置】SG5区北部の19・15・16グリッド。周囲に後期のSI-1・3・4があり、東方にはSG10区の建物群がある。土層断面では確認できないが、南半を古墳後期のSI-2に切られる。

【規模と形状】削平を受け不明だが、主柱穴配置からみると平面方形に近い。一辺5.5m前後と推定される。中軸線はN-28°-W。壁・床面・貼床は削平されて残っていない。

主柱穴は3本確認したが、本来は北東にも存在し、4本主柱と推定する。P1は径32×30×深さ22cm(床



第 326 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-45 遺構・遺物

第 187 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-45 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 (粘土・焼成 または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 12.9 高 残 4.1	内斜口縁。外面体部へラナデのち横方向の斜りナデ。ヘラナデによるクローラー痕が見る。口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ナデ。	5YR6/6 橙 中～細密 赤粗～細粒と白微粒 少 中～軟質	P4 底上 2cm 口～体 1/6 周 2
2 土師器 小形土器	高 残 3.3 底 残 6.6	鉢形と見られる。全体に整形が良い。外面体～底部ナデと見られるが、表面磨滅のため不詳。底部は厚くしっかりした平底で、浅くくぼむ。内面体～底部強いナデで、表面にクレーター状の割痕がある。	10YR7/4 白っぽい黄緑 中～細密 白微粒少。赤粗～細粒 中～軟質	P4 底上 5cm 体～底 1/2 周 1
3 土師器 甕	高 残 5.4 底 6.8	胴部下平の接合面から割落するように欠損しており、接合面にはヘラ状工具によるランダムな刻み目が見られる。外面胴部下平方向の密なミガキ。底部ナデで、ミガキの可能性あり。平底で、中央がわずかにくぼむ。内面胴部下平～底部ヘラナデで、接合部のみケズリが施されたもの。胴部下平～底部疎らなミガキ。接合前の胴部下平の調整は横方向のナデと見られる。外面胴部下平。表面の割痕あり。	5YR6/6 橙 中～粗粒 砂粗～細粒多。赤・ 砂粗粒質 中～軟質	P4 底上 1～2cm 胴下平～底 3/4 周 2, 3, 5

面から推定 32cm)、P2 は径 31 × 27 × 深さ 27cm(床面から推定 41cm)、P3 は径 34 × 29 × 深さ 26cm(床面から推定 50cm)。東西間 (P2-P3 間 3.08m) が南北間 (P1-P2 間 2.78m) より若干長い。

南側主柱穴を結ぶラインのほぼ中央から 120cm 南にある張出ビット P4 は南北軸の長方形で 105 × 79cm。確認面から深さ 17cm(推定床面から深さ 30cm)。P4 はほぼ平底で壁が外傾し、覆土 2・3 層には遺物を含み、1 層はローム塊・粒が多い。張出ビットを持つ竪穴建物としては古い時期で、高根沢町砂部遺跡に同時期の例がある(菊井他 1990)。SG5 区では SI-4 などに張出ビットがあり、本例よりも新しい。最も残りの良い西壁南寄りで僅かに確認できた壁溝は幅 13cm、深さ 1～2cm である。

[火処・覆土] 床面から 10～25cm 削平を受けており、覆土も火処も残っていない。

[遺物出土状況] 張出ビット P4 の底面から 5cm 以内のレベルで出土した。

[出土遺物] 極めて少ない。口縁部が開いた古墳中期後葉の碗形杯 (1) を持つので、カマダが一般化する以前と見られる。大形壺の底部 (3) は、接合部の刻みが良くわかる。図示以外の土師器計 16 片・205g の内訳は杯 4 片・53g、壺甕類 12 片・152g。壺甕類のうち、張出ビットに特徴的な黒色の土師器甕が 4 片ある。

SG5区 SI-95 (第327図、写真図版39)

【位置】SG5区北部の17-15・16グリッド。同じく古墳中期の建物は北西にSI-5、南東にSI-100がある。北東部を古墳後期のSI-6に、西壁南側を長方形攪乱土坑に、南壁を試掘トレンチに切られる。

【規模と形状】方形で東西6.42×南北6.12m、南北の中軸線はN-1°-E、壁はほとんど消滅。床はほぼ平坦で北が少し低い。床から深さ2～30cmの掘方底に細かい凹凸があり、ロームが多い土で全体を貼床する。

主柱穴4本はP1が径23×32×床面から推定46cm(SI-6掘方から深さ29cm)、P2は径35×38×深さ37cm、P3は径37×36×深さ35cm、P4は径30×33×深さ45cm。柱間はP1-P2間が3.24m、P3-P4間が3.38m、P1-P4間が3.43m、P2-P3間が3.25mで、ほぼ方形に配置する。

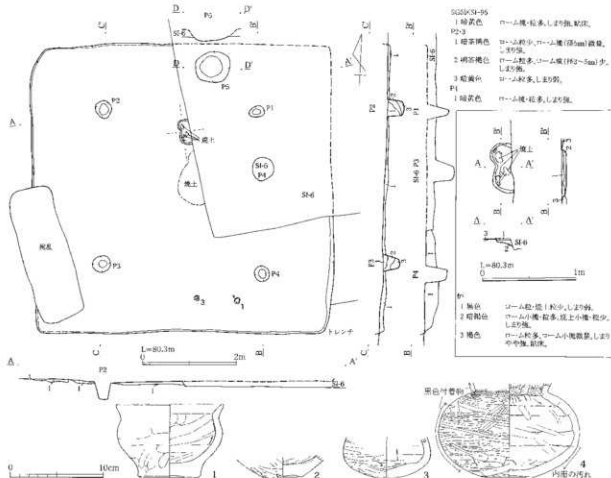
位置的には疑問もあるが、SI-6の床下で確認した窪みP5が本建物の貯蔵穴の可能性があると。62×73cmのほぼ円形で、SI-6掘方から深さ10cm、SI-95床面からの深さは推定23cmで、貯蔵穴としては浅い。

【床】北側主柱穴P1-P2間のやや南寄りで地床を確認した。SI-6に東側が切られるが、南北長53×東西残存幅23cm(推定幅32cm前後)・深さ4～5cmのだるま形で、底面は部分的に焼土化している。

【覆土】覆土はほとんど残っていない。

【遺物出土状況】1と3は床面で出土した。2と小形壺体部(4)は出土地点不明である。

【出土遺物】1は底部を小さく削っていないので鉢としたが、底部外面削りを省略した杯かもしれない。外面を丁寧に磨く小形壺(4)と、胴部が小さくて磨かない中期後葉の小形壺(3)がある。4の外面に付着物(煤?)、内面は内容物の影響で汚れがある。遺物量はきわめて少なく、図示した以外は土師器片のみ12片・84gで、内訳は杯1片・5g、高杯3片・14g、壺甕類8片・65g。



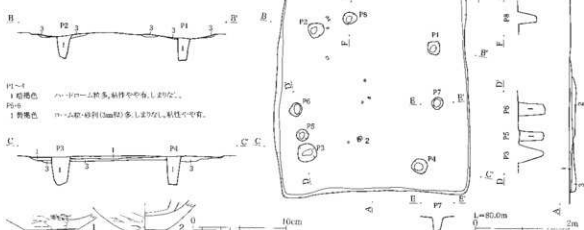
第327図 権現山遺跡SG5区SI-95遺構・遺物

第188表 権現山遺跡SG5区 SI-95 出土遺物

番号 種類 品目	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 日記
1 土師器 土師 底	口 11.4 径 7.7 底 6.5	底部は丁寧に作られるが、口縁～体部の形状は拙く、歪みが残る。外面体部ヘラナデのち口縁部ココナデ。底部は軽いついで、厚く突出する平底。中央に全体が浅くくぼむ。内面口縁部ココナデ、体～底部狭く深いヘラナデであり、腹面の凹凸が立つ。	75YR7/6 粉 やや磁青 白粒較少、白・赤黒 粒較密 やや硬質	南部床面上 口1/4露、体1/2露、 底欠存 1
2 土師器 杯か鉢	高 径 2.4 底 4.2	外面体部下光沢の艶のあるケズリ、底部ナデで、粘土の継が残る。ややびつに全体が浅くくぼむ。内面体部下～底部光沢のあるナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや磁青 赤黒粒と白黒粒少 硬質	体下半～底欠存 表露
3 土師器 小形器	高 径 4.3 底 径 2.6	黒褐色の精良な胎土。外面体～底部ナデの光沢を持つ強いヘラナデ。底部を作出することを意識した特別な調整はないが、中央に直径約2.6cmの平坦な面がある。形状からは平底とできよう。内面体部ヘラナデ、底部ケズリ。底部中央はケズリにより大きくくぼんでいる。	10YR4/1 褐色 磁青 白・透明粒較多 やや硬質	南部床面上 体～底1/3露 3
4 土師器 小形器	高 径 10.0 底 4.5～ 5.1 最大 15.0 腹径 8.2	外面頸部～腹部上平5本/1cmのハケのち口縁部ココナデ・腹部上平横方向のナデのち横方向のミガキ。腹部中央の最大径付近から底部はケズリで、のち体部横方向のミガキ。ミガキは腹部中央付近が断で、上端、下端付近は断らになる。底部は外側のケズリにより作出されるもので、平坦とはいびつな横円形。底面は数回の一方方向のケズリが施され、浅くくぼむ。内面腹部は5本/1cmのハケのち横方向のミガキ。腹部ナデで、上半は結構粗面滑。下半には横み上げ体止による接合面があり、外面は調整により段差はないが、内面では角度の変化と縦き目が明瞭。接合面～底部はヘラナデ。内外面腹部中央保存。内面側～底部クレーター状の剥落層しい。外面腹部中央部に黒色付着物(スス?)内面下部に褐色の汚れあり。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや磁青 白・透明粒較多。 白・黒・赤黒粒 やや硬質	胴～底欠存

SG5区SI-99

- 1 土師器
2 土師器
3 土師器
4 土師器



第328図 権現山遺跡SG5区 SI-99 遺構・遺物

SG5区 SI-99 (第328図、写真図版40)

[位置] SG5区中央部西寄りの12-16・17、13-16・17グリッド。同じく古墳中期の建物跡は北にSI-23・25、西にSI-26、南にSI-29がある。また、後期の建物は南にSI-28がある。重複する遺構はない。

[規模と形状] 床面下まで削平されているため、建物プランは掘方から推定した。南北にやや長い方形で、東西4.14×南北4.62m。中軸線はN-2'・Eである。掘方は、床面からの深さ2～14cm。ローム粒・塊が多い2・3層を埋め戻した後、5cmほどの厚さで1層を入れて、水平に貼床を施す。

対角線上から若干ずれるが、支柱穴と推定されるものはP1～P4の4本である。いずれも掘方で確認した。P1は径33×31×深さ48cm、P2は径34×31×深さ51cm、P3は径42×40×深さ56cm、P4は径33×31×深さ60cm。南側のP3・P4がやや深い。柱間寸法はP1-P2間が2.55m、P3-P4間が2.27m、P1-P4間が2.49m、P2-P3間が2.57m。掘方底面で確認したP5～P8は、本建物に伴わない可能性もある。P5は径25×23cm、掘方底面からの深さ54cm、P6は径29×27cm、掘方底面からの深さ58cm、P7は径24×23cm、掘方底面からの深さ30cm、P8は径29×25cm、掘方底面からの深さ40cmである。[火処および掘土] 不明である。

【遺物および出土状況】遺物はきわめて少ない。図示以外の土師器は合計20片・186gで、内訳は杯14片・77g、壺撰類6片・109g。杯類破片は椀形杯片や高杯片と思われるものなどがあり、内面赤彩の杯片もある。図示した平底の杯(1)は古墳中期末ころと思われる、掘方から出土した赤彩の杯片があることを重視すると後期前葉かもしれないが、確実に伴うかどうか不安なので時期決定が難しい。

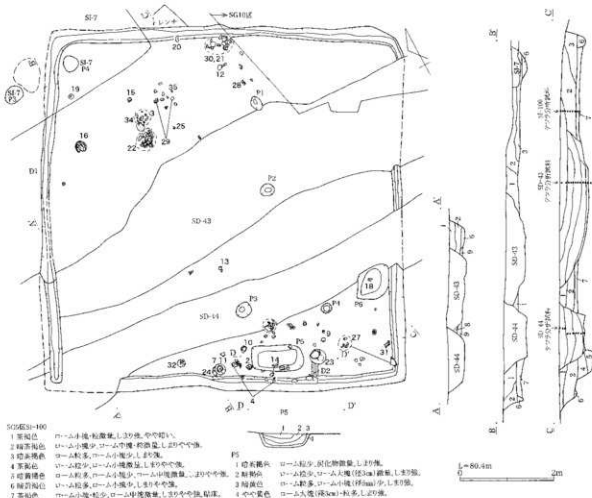
第189表 権現山遺跡 SG5 区 SI-99 出土遺物

番号 追加 図種	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯片鉢	高 残 1.6 底 残 5.0	外面体~底部光沢のあるナデ。底部は平底で、わずかにくぼむ。底部外面は明確な稜となっており、体部と区別される。内面体部横方向、底部一方向の密なミガキ。	2.5YR4/6 赤褐色 磨面 赤彩跡少、白彩跡と砂粒 粒微細 硬質	体下部~底 1/3 残
2 土師器 鉢	高 残 3.1 底 残 4.2	成形がやや甘く、特に外面に赤みあり。外面体部光沢のあるヘラナデ。底部ナデで、ややいびつな平底。内面体~底部ヘラナデ。	2.5YR6/8 赤褐色 磨面 赤彩跡少、白・黒細粒 粒 中や中硬質	高部床上 6cm 体~底完存

SG5 区 SI-100 (第329・330図、写真図版40・174・184)

【位置】SG5区中央部北寄りの16-16、17-16グリッド。北東隅はSG10区で調査を行った。SI-100の中央部を、古墳中期のSD-43と古墳後期のSD-44が切る。また、古墳後期のSI-7に北西部を切られる。

【規模と形状】ほぼ方形で、東西7.63×南北7.67m、中軸線はN-28°Eである。壁は外傾し、残存高は34~43cm。床はほぼ平坦で、北側に若干傾斜する。南壁際と北西隅との比高差は10cmほどである。掘方は床面から深さ8~18cmで、西壁際を除くほぼ全体をローム粒・塊が多い暗黄褐色土の7層で貼床する。



第329図 権現山遺跡 SG5 区 SI-100 (1) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区

柱穴は P1 ～ P4 がある。位置や深さからみて P4 (径 22 × 14 × 深さ 46cm) が 4 本主柱の南東主柱穴の可能性があり、他は溝に切られて確認できなかったと考えられる。P1 ～ P3 は配置が不自然で主柱穴とは見なせない。P1 は径 31 × 21 × 深さ 16cm、P2 は径 29 × 24 × 深さ 10cm、P3 は径 22 × 19 × 深さ 46cm である。

ほぼ全周する壁溝 D1 は断面 U 字状で幅 15 ～ 35cm、深さは床面から 5 ～ 14cm。ただし南壁西側が明確でない。貯蔵穴 P5 の 20cm 東で、南壁溝にほぼ直交して 1 本確認した間仕切溝 D2 は長さ約 50cm、幅 11 ～ 13cm。

貯蔵穴は P5 で、やや不整形であるが P6 もその可能性がある。南壁中央からやや東寄りに位置する貯蔵穴 P5 は、南壁と平行する東西軸の長方形で 109 × 56 × 床から深さ 30cm。ほぼ平底で、壁はなだらかに上がる。炭化粒を僅かに含む P5 の 1 層に土器が流れ込んで出土し、下層の 3・4 層にローム粒・塊が多い。

南東隅の北方 1.5m で東壁溝に接している P6 も貯蔵穴の可能性がある。P6 は SD-44 に切られてやや不整形で、規模は 99 × 65 × 床面から深さ 31cm。貯蔵穴を 2 箇所持つ竪穴は、SG5 区では SI-11 などがある。【火処】確認されなかった。溝によって消滅したと想定される。

【覆土】自然埋没状で、3層にローム粒が多い。SG5 区 SI-100 と、SI-100 を切る SD-43・44 の埋土を採取してテフラ検出分析を実施した(土層断面 C-C' および本章第 2 節)。その結果、SD-43 上層土と SD-44 各層で確認された白色軽石が、古墳後期初頭の Hr-FA テフラの可能性が高いと考えられた。後期中頃の Hr-PP テフラとの区別が難しいが、各遺構出土土器から考古学的に見ると Hr-FA とみて矛盾しない。

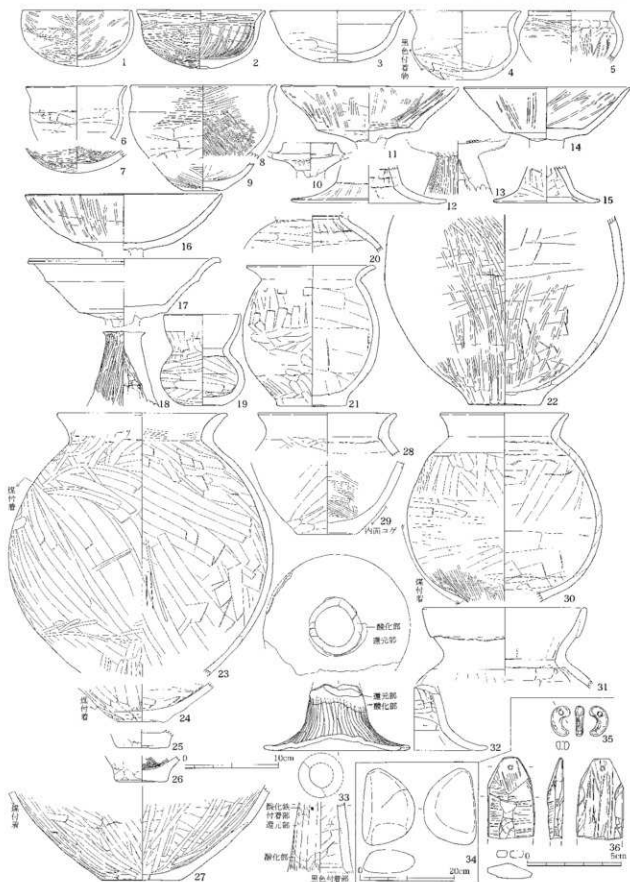
【遺物出土状況】南壁中央付近では 24 の甕底部片の上に杯底部 7、その上に 11 の高杯が伏せてある。貯蔵穴 P5 の東側に逆位の甕(23)がある。北部では床付近に 16 がある。羽口は、床から 30cm 以上浮いた 32 と、重複する SD-43・44 の土層断面記録箇所でも取り上げた 33 で、この建物で使用したとは断定できない。

【出土遺物】遺物は多い。大・中・小の壺甕類が多く、杯・鉢・高杯の個体数も多い。図化できる杯・高杯・鉢などはほぼすべてを図示した。杯は内斜口縁が主体で深い 4・5・6 は古墳中期中葉的、口が開く 2・3 は中期後葉的。高杯は柱状脚の脚柱部が図示以外に 5 個体分ある。10 は異形高杯、13 は大形高杯。甕の内面にコゲが付着し(24・29)、外面の煤も多い。23 は吹きこぼれた水分が垂れた痕が外面肩部の煤に残る。貼付口縁大形壺(31)の例は SG5 区 SI-16・29 と SD-101・227 や、SG10 区 SI-16・50 などにある。図化以外の甕類では、小～中形品底部に平底 5 点と凹底 1 点、ハケ調整片は 3 本/cm と 5 本/cm のハケがある。図示以外の土師器計 685 片・5.746g の内訳は杯 327 片・1.669g、高杯 55 片・497g、壺甕類 303 片・3.580g。

鉄関連遺物では、高杯転用羽口がある(32・33)。この建物が鍛冶遺構である可能性も皆無ではないが、羽口は床面から 30cm 以上浮いて出土し、鍛冶炉・鉄滓・鍛造剥片も確認していない。ただし、床面土の採取・水洗は実施していない。SG5 区では他に SD-42 に鉄滓がある。34 は緻密なホルンフェルスの礫。SG5 区では SI-7 などはこの材質の砥石がある。滑石製模造品は剣形と勾玉形がある(35・36)。SG5 区では SI-8 などに滑石製模造品がある。勾玉形は SG5 区 SX-118、SG9 区中央区南東部低地、SG10 区 SI-64a などにある。

第 190 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-100 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 現存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.5 高 6.0 径 11.8	平床状で、丸底。薄手。表面は細かく剥落しており、特に内面が著しい。外面体～底部ケズリの内縁部コナダのち口縁～体部からなるミガキ。内面口縁部コナダ・体～底部ヘラナダのち口縁～底部斜め方向のミガキ、	5YR5/6 明赤褐色 やや暗い 白・灰色・透明磁粒 少。白粗粒と赤粒～細粒炭質 や中硬質	D2 載上 11cm 口～体 1/6 周、底完存 11
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 6.2 底 2.0	内斜口縁。口縁部コナダ・体～底部ナダ・ケズリのち口縁～体部密なミガキ。底部は丸底なミガキのみで、いひつにくむむ。内面口縁部コナダのち縁方向の疎らなミガキ。体～底部ケズリのち縁射状のや中疎らなミガキ。内面は外面より暗い色に変色している。	5YR4/8 赤褐色 暗赤 白・赤褐色炭質 や中硬質	南内壁際床直上 口～体 1/3 周、体 下半～底完存 21
3 土師器 杯	口 復 14.2 高 5.4 底 3.6	内斜口縁。表面は細かく剥落しており、特に内面が著しい。外面口縁部コナダ・体～底部ナダ・底部上げ縁。内面はミガキの可能性もあるが、表面剥落のため不詳。	5YR7/6 暗 や中硬質 砂礫と赤粗粒と白粗 ～細粒炭質 や中硬質	中央部北寄り床下 13cm 口～体 1/3 周、体 下半～平凹欠、底完存 62



第330図 権現山遺跡SG5区SI-100(2)遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

4	土師器 杯	口 径 11.8 高 7.3 底 4.0	外面口縁～体部上端ヨコナデ、体～底部見沢のあるケズリ。底部平直。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち体部ヘラナデ。外面体部黒色物質(炭)が付着。	7.5YR4/3 紺 赤～黒 少、赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR7/8 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	南西面体直上 3.1cm 口～体 1/3 周、底定存 18、23
5	土師器 杯	口 径 9.2 高 5.4 最大 径 11.0	内面口縁、外面口縁～体部上端ヨコナデのち体部上平直ならぬミガキ。外面体部下位は白く表面が細かく彫刻しており、調整が不明な部分が多い。内面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのち体部上平直ならぬミガキ。体部上端のナデは広く、ナデの単位が明瞭に残る。下平ナデは丁寧。	7.5YR7/8 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	口～体 1/5 周 不明瞭 不明瞭
6	土師器 杯	口 径 10.7 高 5.7	小形・薄手。外面口縁部ヨコナデ、体部側ヘラナデで、粘土の跡が残る。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	7.5YR6/6 赤 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	貯蔵穴 P5 直上 1.8cm 口～体 1/3 周 14
7	土師器 杯	高 径 2.8	丸底。外面体部下平～底部ケズリのち体部下平ミガキ。内面放射状のミガキのち横並びの斜め方向のミガキ。体部下平ターレット状の突起を持つ黒色物質が明瞭に彫て付着。	7.5YR7/6 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	南面体直上 10cm 体下段～底定存 50
8	土師器 鉢	口 径 15.4 高 径 7.8 最大 径 15.6	外面体部ケズリのち口縁～体部上端ミガキ。内面口縁～体部縦方向のミガキのち斜め方向のやや鋭いミガキ。内面には黒色の部分が多い。	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	口～体 1/6 周
9	土師器 鉢	高 径 3.0 底 4.0	外面体～底部ナデで、幅の狭いミガキ状のナデが、体部に斜位に施される。底部は全体が大きくぼむ。内面体～底部ヘラナデ。	5YR5/6 明赤 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	南面体上 2cm 体下平～底定存 7
10	土師器 高杯	高 径 3.6	寛形の高杯。杯部内面に作られた円形の直立する部分と底部のみが残存する。やや軟質なため表面が磨減しており、調整不明な部分が多い。直立する部分の上端径は 5.6cm、深さ 1.6cmで、内外面ともヨコナデ。底部内面ナデと見られるが、ミガキの可能性もある。外面底部はミガキ。下端の欠陥の状況から、脚部との接合は杯部側の突出部を脚部に挿入する形と見られる。底部外縁は意図的に打ち欠かれていると見られるため、この状態で使用されたことがあったと考えられる。	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	南西面体直上 杯口～体定存 25
11	土師器 高杯	口 径 18.7 高 径 5.7	軟質なため表面が磨減しており、調整不明な部分が多い。外面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち体部縦方向の横ならぬミガキ。脚部との接合は、接合部の欠陥状況から、杯部底で粘土塊を脚部に挿入して接合するものと見られる。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部は横並びの斜め方向。底部は外面付着した確認できないが、ほぼ円周方向に施される。底部中央は広くくぼむ。杯部はほぼ全体が焼熟により赤変する。	5YR6/8 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	南面体直上 8cm 杯口～体定存 34
12	土師器 高杯	高 径 4.0 脚 径 16.4	やや軟質な粘土のため、内外面とも表面は磨減しており、調整が不明な部分が多い。外面脚部下ヨコナデのち縦方向の横ならぬミガキ。元来彫られていたミガキと見られる。脚部柱は不明だが、縦方向のミガキが施されていた可能性が高い。脚部柱下端には、へう状工具の当たりのような刻線・沈線の痕跡がある。内面脚部ナデと見られ、結構粗としぼり目が見られ、脚部下平ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR7/6 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	北正面 1.6cm 脚 下平 1/3 周 47
13	土師器 高杯	高 径 5.7	脚部厚く、太形と見られる。外面杯部底部ケズリ。脚部上平縦方向の密なミガキ。杯部は体部の一部が欠けており、体部下端が焼変するものと推定される。内面杯部底部密なミガキ。残存する体部上端は接合面から削れている。脚部上平粗粒と粘土のしぼり目が見える。	7.5YR7/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR7/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	中央部 1.2cm 杯底 1/5 周、脚 上平 1/4 周 38
14	土師器 高杯	口 径 17.5 高 径 5.7	やや軟質なため、表面が磨減しており、調整不明な部分が多い。外面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち口縁～体部縁ならぬ縦方向のミガキ。杯部底部中央の欠陥部分は磨減しており、脚部を欠損した状態で使用されていた可能性もある。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～体部斜め方向のミガキ。口縁部は徐々に薄くなるようにヨコナデされる。底部のミガキは確認できず。杯部全体に焼熟による赤変部分がある。	5YR7/8 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	貯蔵穴 P5 直上 2.3cm 南西面脚部直上 1.6cm 杯～底欠 15、16、貯蔵穴 2
15	土師器 高杯	高 径 4.0 脚 径 11.2	外面脚部下平ヨコナデのち脚部側ヘラナデ・ナデ。内面脚部～脚部下平ヘラナデのち脚部下平ヨコナデ。現存部の内面全体および外面一部が黒褐色を呈する。	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	北面 1.2cm 脚 下平 1/4 周 51
16	土師器 高杯	口 径 20.7 高 径 5.9	全体に表面の彫刻が著しく、調整不明な部分が多い。外面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち体部縦方向の横ならぬミガキ。体部下端は緩やかなたが、内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。ミガキの可能性はあるが、不詳。内外面口縁～体部一部密付着が焼熟による赤変あり。	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	北正面 3cm 杯口～体 1/2 周、底定存 2
17	土師器 高杯	口 径 20.4 高 径 7.3	表面全体磨滅のため調製不詳。成形は丁寧で、赤み少ない。外面杯部口縁部ヨコナデ、体部ナデ。底部ナデと見られる。体部上平に施あり。口縁部は厚厚し、外面底部はヨコナデにより鋭い縦線が作用される。脚部との接合は、杯部底で粘土塊を脚部に挿入することでなされたと推定される。内面杯部ヨコナデ・ナデであろう。内外面とも、ミガキが施されていた可能性あり。	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	10YR8/4 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	杯口～体 1/2 周、底定存 1
18	土師器 高杯	高 径 7.9	外面脚部上平縦方向の密なミガキ。内面脚部上平わずかなナデで、結構粗く縦方向の粘土のしぼり目が見える。上端は凹凸なく欠損しており、接合面に刺刺したものと推定される。脚部上平全体が焼熟により赤変する。	5YR6/8 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR8/6 白 赤～黒 少、赤～黒 少	P6 内周 脚 上平定存 1
19	土師器 小形壺	口 径 8.2 高 9.6 底 3.8 最大 径 9.0	小形。口縁部は磨減が著しく、調整不明な部分が多い。外面口縁～体部上平ヘラナデのち口縁部ヨコナデ・体～底部一部ケズリのちナデ。底部平直で、わずかにくぼむ。内面口縁～脚部上端ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。体部上平粗粒黒あり。	7.5YR7/6 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR7/6 紺 赤～黒 少、赤～黒 少	北西面 1.4cm 口 1/3 周、体～底定存 40
20	土師器 小形壺	高 径 4.1	外面脚部上平縦方向のナデのち強張りミガキ。口縁部はミガキの可能性あり。内面脚部上平ナデで、結構粗としぼり目が見える。脚部は接合面に欠損している。	7.5YR5/6 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	7.5YR5/6 黄緑 赤～黒 少、赤～黒 少	北面脚部 1.1cm 脚～脚上平 1/2 周 49

21 土師器 小形甕	口 復 13.2 高 14.8 底 7.4 最大 復 14.4	小形、外面製部上平ヘラナデのち口縁部～胴部上端ヨコナデ・胴部中位～下平ナデ、底部ナデで、突出する平底であり、ドーナツ状に中央部のみが下平。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデで、底部中央へラナデ加工を突き出したような痕跡がある。外面は口縁～胴部全体が栗色色となっているが、底かどろろは不明。底部のみ褐色の土色か褐色となっている。	IOYR6/2 灰黄緑 やや粘り 白～赤 ～細粒と白～粗粒少量 破片	北野段上 3cm 口～胴 1/4 周、底穴存 48、50-43 覆土
22 土師器 甕	高 残 20.0 底 7.6 最大 復 25.4	比較的浅い高さで、胴部中央部に各方向に開いている。外面製部上平ナデ・中位～下平ナデのち口縁部のみミガネ。ケズリは胴部中位は横に、ヘラナデは縦に、底部ナデで、わずかにぼむ平底。内面胴～底部ヘラナデのち胴部中位～底部方向の疎らなミガネ。底部上 6.5cm 積み上げ跡による接合面がある。外面胴部中位～底部に僅か散見している。	IOYR7/6 明黄緑 やや粘り 白～赤 ～細粒と白～透明細粒少 やや破片	中央部床土 11cm 胴 1/3 周、底穴存 64
23 土師器 甕	口 18.0 高 残 27.6 最大 28.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部ナズリのち胴部ヘラナデ、ケズリは上にはから下へ斜めに施される。ヘラナデは中央～上平直線位に、口縁部下 2.5cm 以上の範囲上へはぼむ接合面より下は縦方向に接合面付は横方向に施される。内面口縁部～部 6 本 / 1cm のハケのちヨコナデ、胴部ヘラナデ、胴部上端のヘラナデは僅く施される。内外面とも成形、調整は丁寧で、胴部下平の接合面も薄く仕上げられる。外面口縁～胴部破片付着で、中位～下平に縦溝、口縁～胴部上平では、吹きこぼれによってスタレ状に一部破片洗い流されている。	7.5YR6/2 灰黒 やや粘り 白～赤 ～細粒少、白～粗粒少 破片	D2 層辺床土 4cm 口～胴はぼ存 36
24 土師器 甕	高 残 4.2 底 4.5	外面胴部上平ナデのち下平ナデ、底部中央は丁寧なナデで、中央がぼむ平底。胴部下平のケズリが乱雑なため、外側は凹凸があり、形も不整。内面は表面が細かく削削している。胴部下平～底部ヘラナデ、外面胴部下平直線位。内面の残存する面はコゲ付。	7.5YR6/4 にぶい青 やや粘り 白～透明 細粒多、白 破片	南西部床直土 胴下平～底穴存 35
25 土師器 甕	高 残 2.0 底 5.6	小形、小形製部上平の可能性がある。胴部上端～底部ナデ、底部は厚く突出する平底で、中央部のみ小さくぼむ。内面底部ナデ。	IOYR8/3 浅黄緑 粘り 白～赤 細粒少量 やや破片	中央部北寄り床土 15cm 底穴存 41
26 土師器 甕	高 残 2.7 底 5.7	小形、小形製部上平の可能性がある。外面胴部上平ナデ、底部はナデで、内面に成形される。胴部厚く突出する平底で、中央がわずかにぼむ。内面胴部上平～底部 10 本 / 1cm のハケ。	IOYR4/2 灰黄緑 やや粘り 赤 細粒多、白～砂 粒少量 破片	胴下平～底穴存 40
27 土師器 甕	高 残 10.0 底 残 8.4	外面胴部下平直位のヘラナデで、底部付近は僅く施される。底部ケズリで、平底。内面胴部上平～底部部方向のヘラナデのち縦方向のヘラナデ、胴部には積み上げ体による接合面があるが、外面の角度と厚みがわずかに変化するためであり、丁寧な調整で消されている。外面胴部上平～底部、底部分全に成形される。	IOYR5/3 にぶい青 やや粘り 白～赤 細粒少、砂粒少量 破片	南西部床土 14cm と南東部 付付近 胴下平～底 1/4 周 4、6
28 土師器 甕	口 復 14.6 高 残 4.5	外面口縁部ヨコナデのち胴部上端ナズリ、内面口縁部ヨコナデ、胴部上端部方向のナデで、粗雑な成形。外面口縁部ヨコナデは僅く施される。	7.5YR6/0 粘 やや粘り 赤～細粒少、白 ～細粒少量 やや破片	中央部床土 4cm 口～胴土 14/4 周 43
29 土師器 甕	高 残 7.8 底 残 6.2	外面胴部上平ナデ、底部深いナデで、わずかにぼむ平底。内面胴部下平 5 本 / 1cm のハケのち底部周辺ナズリ。内面胴部上平～底部わずかにコゲ付。	7.5YR6/0 粘 やや粘り 白～細粒少、白 粗粒と透明細粒少量 破片	中央部北寄り床土 14～ 19cm 胴下平～底 1/4 周 55、58 破片
30 土師器 甕	口 13.6 高 残 19.9 最大 復 20.6	外面胴部上平ナデのち口縁部～胴部上端ヨコナデ・胴部中位～下平直方向の丁寧なケズリの内面胴部下平直方向のやや密なミガネ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデのち一部ケズリ、胴部上平には粗粒粗面。胴部下平には積み上げ体による接合面がある。下平の接合面直位には、ヘラナデ工具による切目目が約 9mm 間隔に施される。切目目の深さは約 2mm。胴部下平ナデ中位～下平直位。	IOYR7/4 にぶい青 やや粘り 白～赤 ～透明細粒少量 やや破片	北野段上 33cm 口～胴 1 平 2/3 周、胴下平 1/3 周 48
31 土師器 甕	口 復 17.3 高 残 8.5	外面胴部上平ナデのち口縁部～胴部上端ヨコナデ、口縁部は粘土貼付けによる度合口縁。内面口縁部ヘラナデのち上平中心にヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部上端直位の継ぎ目が粗雑になる。	IOYR6/4 にぶい青 やや粘り 白～透明細粒少、白 破片	南野段床土 23cm 口～胴 1 平 1/4 周 3
32 土師器 高杯 (転用器口)	高 残 6.4 脚 15.4	高杯胴部直用器口。平面四角直線的に胴部が欠損しており、竪穴使用時にはここが円形床面に接していたと推測される。上端は欠損しており、胴部は残されていない。平面四角直線的に約 1cm の還元部、さらに下には破片 1～2cm の酸化部分があるが胴上方には変色は見られず、胴下方より微く焼けたと見られる。外面胴部下端ヨコナデのち胴部直方向のミガネ。内面胴部中位ナデで、しぼり目あり。胴部下平ナデで、胴部下平ヘラナデのちヨコナデ。竪穴間連通部構成 No. 26。	5YR6/8 粘 やや粘り 白～砂 ～細粒少 破片	南西部床土 32cm 胴中穴存、下平 2/3 周 66
33 土師器 高杯 (転用器口)	高 残 7.5	先端を欠損するため、形状部はない。残存部上端径 4.8cm、約 5cm の還元部があり、先端寄り約 1.5cm は灰白色で、表面に酸化物が付着する。その下は灰色、灰白色と変化しており、その下に約 1cm の還元部を施した酸化部分がある。外面胴部上平ケズリのちミガネである。内面胴部上平ナデで、下寄りにはヘラナデ。内面は 1.3cm が炭褐色、下 2.5cm が褐色に変色する。その下本来の土師の色を示す部分を残して下約 1.5cm には栗色物質が付着する。欠損面に付着している部分もあり、胴下平を除いた後に強引に削いで取り出しと見られる。竪穴間連通部構成 No. 27。	7.5YR6/0 粘 やや粘り 白～透明細粒少、白 粗粒少量 破片	断面 B-F 付 胴上平 1/3 周 UTSC-V 5D-43、44 E
34 石製 鏡	長 15.9 幅 10.9 厚 5.0	河原石。特に加工の痕跡なし。左側縁がやや平直な面となっているが、研削された面とは言えない。鏡石の素材か、重量 1197.3g。	5YR/2 灰オリーブ 磨面 ホルンフェルス	北部床土 6cm 定形 61
35 石製 鏡 勾玉形	長 16.2 幅 1.00 厚 0.47 重 0.95	良質な滑石製。断面は平坦な面を持った楕円形で、比較的丁寧に研削されているが、体面製部成形時の深い条線が残る。また、「J」字に見える部分には比較的初期の研磨面を残すため、平坦面となっている。「C」字に見える部分から穿孔と見られ、孔径は 2.1mm、反斜縁は 1.9mm。	IOYR3/1 暗緑灰 粘り	北部床直土 定形 67
36 石製 鏡 新形	長 残 4.30 幅 2.50 厚 0.78 重 残 12.92	断面を欠損し、表側中央にガタリによる欠損と見られる欠陥がある。表側は 2 次研磨で、やや太い深い条線を残し、各面ともほぼ同一方向に研削される。下層中央は形削時の研磨面である。側面は幅 1.5～4.5cm の平面に加工されて厚く、表側とほぼ同様の条線を持つ。反斜縁を欠損させる。左側縁上平は研磨面の可能性あり。裏側は表側と同様の条線を残し、丁寧に研削される。裏側の右側縁にのみ形削時の新磨面、左右側縁は工具による切削面あり。穿孔は表側からと見られ、孔径は表側で 1.76mm、裏面は 1.63mm で、孔の周囲に穿孔時のものと見られる小さな小室がある。	IOYR5/1 緑灰 粘り片岩	一部欠 床直

SG5区 SI-107 (第331図、写真図版40・41)

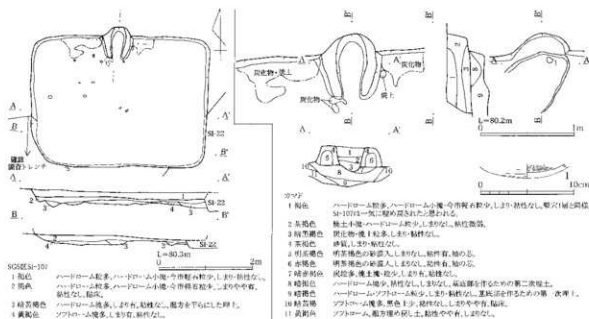
【位置】SG5区中央の14-17・18グリッド。東側は低地に向かって傾斜する。同じく古墳後期のSI-20・21が北と南西に近接する。古墳中期のSI-22を切る。南半の上部を試掘トレンチに切られる。

【規模と形状】東西に長い長方形で、東西3.80×南北2.78m、中軸線はN-2°-E。壁は外傾し、残存高17cm。床は平坦で傾斜しない。南半部の平面図に不備があり、写真を参考に壁下端を破線で示した。床面から深さ4～20cmの掘方底に細かな凹凸があり、ロームが多い3・4層で埋めた上に厚さ4～10cmの2層を貼る。

【カマド】北壁中央にある。両袖幅90cm、煙道先端から焚口まで70cm。貼床整形後、カマド部分を地山まで掘り下げローム塊・粒を少量含む8・9層で埋め戻す。袖部は明茶褐色の砂混じりの5・6層を心とし、砂質茶褐色の4層を被せる。火床には炭化物多量と焼土粒少量を含む3層と、天井が崩れた2層が堆積し、1層で埋め戻される。煙道先端は北壁より20cm出てほぼ垂直に上がる。カマド西側の床面に薄い炭化物と焼土、カマド東側の床面に薄い炭化物、カマド西袖の先端に塊状の炭化物が認められた。

【覆土】ローム粒が多く、ローム塊・今市軽石粒を少し含む褐色土の単層である。カマド1層の説明に記されているとおり、一気に埋め戻したものと観察された。

【遺物および出土状況】遺物はごくわずかな小破片で、横做杯・漆仕上げ杯・長胴甕破片はない。長胴甕片は1片だけある。カマド掘方で出土した杯(1)からみて古墳後期中～後葉の建物と判断される。図示以外の土器は小破片ばかり計44片・265gで、内訳は杯24片・73g、高杯5片・41g、小形壺5片・15g、壺蓋甕類10片・136g。重複する古墳中期のSI-22の遺物が混入していると思われる。



第331図 梅現山遺跡SG5区 SI-107 遺構・遺物

第191表 梅現山遺跡SG5区 SI-107 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (cm×g)	特徴	色調 胎土・積成 (または素材)	出土位置 現存状態 注記
表1 土師器 杯	高 残 1.5	丸底。精良な胎土。外面底部がズリ。内面底部はほぼ一方の隅に密なミガキ。	10YR7/6 明黄褐色 緻密 白微粒微量 微質	カマド掘方直上 23cm 底部のみ残存 11

SG5 区 SI-116 (第 332・333 図、写真図版 41・184・185)

【位置】 SG5 区中央部の 14-16 グリッド。西半は調査区外。同じく古墳中期の SI-17 が北にあり、東に古墳後期の SI-19・137 がある。古墳中期の可能性のある SK-130 と、古墳時代の可能性のある SD-101 に南側を切れ、SI-116 → SK-130 → SD-101 の順になる。SI-116 の中層以下を SK-130 が切り、その埋没後に SI-116 の上層が堆積する。そして、SI-116 埋没後に B 層と C 層が上を覆い、その B 層を SD-101 が切る。この B 層で、12 世紀初頭に降下した As-B テフラが検出された(本章第 2 節)。SD-101 と B 層の前後関係が確定で、またテフラの混入がなければ、SD-101 が 12 世紀以降の溝になる可能性も残されている。ただしその場合は、古墳後期の SI-20・21 が SD-101 を切るという調査所見と矛盾する点に疑問がある。

【規模と形状】 東側しか確認していないが、方形と推定される。南北長 6.85m、東西長 3.20m 以上、中軸線は N-1°-E。壁は外傾し、残存高 42 ~ 56cm。床は平坦で傾斜しない。南北長 142 × 幅 60 × 高さ 6 ~ 10cm の高まりが P2 北西にある。主柱穴より内区は地山ルームを平坦にして床とし、外区は床から深さ 5 ~ 14cm で周溝状に掘り込んだ後にルーム塊が多い黄褐色土で埋め戻して硬くしめる床面とする。

東側の主柱穴を 2 本確認し、P1-P2 間は 3.65m。P1 は径 52 × 55 × 深さ 60cm、P2 は径 56 × 46 × 深さ 59cm で貯蔵穴 P3 に接する。北東隅の掘方底で確認した P4 は径 41 × 30cm で深さは床から 24cm・掘方底から 11cm。

調査部を全周する壁溝 D1 は断面 U 字状で幅 20 ~ 30 × 深さ 3 ~ 11cm。北・東壁際中央で確認した間仕切溝 2 本は壁溝に直交して連結し、D2 は長 118 × 幅 13 ~ 17cm、D3 は長 102 × 幅 12 ~ 15cm。

南東隅の貯蔵穴 P3 は南北軸の隅丸長方形で 111 × 81 × 床面から深さ 42cm。底面は平坦で、壁は直線的に外傾する。P3 の覆土はほぼ水平に堆積し、2 層中から 3 層上面に遺物が多い。

【火処】 不明である。覆土各層に焼土を含む。

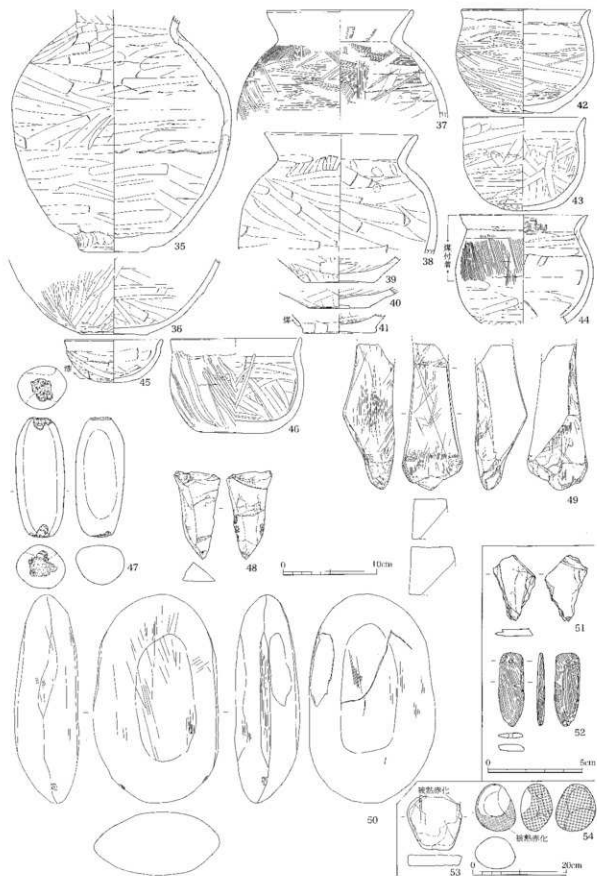
【覆土】 自然埋没で、下層ほどルームの混入が多い。SI-116 中層以下を SK-130 が切り、その後に SI-116 の上層が堆積する。SI-116 埋没後に B 層と C 層が上を覆い、B 層を SD-101 が切る。B 層で 12 世紀初頭の As-B テフラ、埋土上部の 1 層で古墳後期初頭の Hr-FA と推定されるテフラが検出された(本章第 2 節)。

【遺物出土状況】 貯蔵穴内では 2 層中から 3 層上面にかけて遺物が多く、逆位の土師器壺上半(38)、正位の小形壺(32)、砥石 2 点(49・50)や土師器杯(8)などが出土した。貯蔵穴東側にも土師器壺上半(37)が倒立してある。竪穴北東隅付近にも鉢 3 点(42 ~ 44)などの遺物がやや目立つ。

【出土遺物】 遺物数が多い。土師器は杯・鉢と壺類が主体で、小形壺も少し入る。少し口が開く椀形杯が多い。8 は外面に剣線がある。図示以外の椀形杯は底部で約 3 個体ある。脚部に非貫通孔を持つ高杯(29)は、SG5 区 SI-5 や SG10 区 SI-25 などに例がある。高杯は個体数が多いが破片量は少ない。図示以外に高杯脚柱部が 8 片以上あり、1 点は上半部中実の柱状脚。小形壺は中形品もありそうだが、接合・図示できなかった。32 は小形壺に内面から穿孔する。鉢と小形壺は図示以外に各 1 個体ある。大形の壺類は図化品以外に口縁部で 7 ~ 8 個体分、底部で 12 個体分(ドーナツ底 3、突出 2、平底 7)ほどがある。壺の破片は少ない。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計 1,883 片・16,988g で、内訳は杯 535 片・3,259g、高杯 313 片・4,293g、小形壺 10 片・232g、壺類 1,001 片・8,550g、壺 22 片・365g、焼粘土塊 2 点・19g。

薄くて内面のロクロ目が強い須恵器壺(34)は、東側の SK-51 出土破片(第 351 図 SK-51 の 7)と同個体で、SG5 区 SD-42 の陶質土器壺に焼成・色調・胎土がやや似る。47 ~ 50 は砥石と砥石で、48 は砥石に使う凝灰岩質の剥片。52 は滑石製模造品、51 は粘板岩の素材(?)。滑石製模造品は SG5 区 SI-8 など、粘板岩製品は SI-6 などにある。

弥生前期後半~中期前半と思われる条痕文系の弥生土器壺類がややまとまって混入するので(『東谷・中島地区遺跡群 10』p.88)、この建物が弥生時代の遺構が包含層を壊している可能性がある。流紋岩の石核(前掲書 p.102)や多孔質安山岩片も出土し、弥生時代の石器も含むかもしれない。



第333図 権現山遺跡SG5区SI-116(2)遺物

第192表 権現山遺跡 SG5 区 SI-116 出土遺物

番号 種類 図番	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 現存状態 注記
1 土師器 底	口 12.6 高 7.0 底 3.9	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部下端ケズリのみ体部光沢を持つヘラナデ。底部ナデで、平底であり、中央のみ小さくくぼむ。内面口縁部斜ヨコナデ。体~底部ヘラナデ。	10YR7/6 明黄褐色 やや暗褐色 白・赤・灰色と赤黒～ 黒粒と透明・砂雜～微粒少 破損	北部床土 3cmと床直上 口~体1/3間。底共存 13, 19, 35
2 土師器 杯 最大 復 12.5	口 12.0 高 7.7 底 6.0	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ。体~底部ナデ。底部は丸縁を持つ平底で、ややいびつ。内面口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラナデ。	5YR5/6 緑 やや暗褐色 白・赤黒～微粒幾 破損	北岸階床土 23cm 口~体1/5間 6
3 土師器 杯	口 14.8 高 6.9	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ。体部斜ヘラナデのち底部わずかにケズリのみ体部緑な縦方向のミガキ。底部いびつな丸底。内面口縁部ヨコナデのち縁ならミガキ。体~底部ヘラナデ。ナデのち縁ならミガキ。内面体~底部のミガキには、光沢を持つヘラナデと見えよそな顔立ちもあり。	10YR7/4 に近い黄褐色 暗赤 白・赤・灰色と 透明黒粒少 白・粗粒幾幾 破損	南部床土 1cm正位 口~体1/2間。底共存 60
4 土師器 杯	口 14.2 高 7.4 底 6.0	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち底部ケズリのみ体部緑ならミガキ。ミガキは横ならし斜め方向で、ヘラの先端で引かれるような縦いミガキが斜め方向のものにより見られる。底部は大きく突出する特異的な形式で、厚く歪む。内面口縁部ヨコナデのち縁ならミガキ。体部ヘラナデのち縁ならミガキ。底部も体部と同様と想定されるが、表面磨光のため不明。底部中央にヘラの当たりのみが見える。内外縁口縁~体部一部に腐付。外面底部は焼熱のためか、やや変化する。煮潰用に使用された可能性あり。	7.5YR7/6 緑 やや暗褐色 赤粒多。白粒と砂 粗～微粒幾 やや破損	東部床土 1cm正位 口~体1/3間 47 定
5 土師器 杯 底	口 12.6 高 5.7 底 3.8	内面口縁。薄手な破損。外面口縁部ヨコナデのち体~底部ヘラナデ。底部は全体がくぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラナデ。	7.5YR6/6 緑 やや暗い 砂・透明黒粒少 破損	中央部床土 17cm 口~底1/4間 43
6 土師器 杯	口 13.8 高 7.1 底 6.1	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。体部上半に無調整部分あり。内面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面外にも、フレイター状の割れ目あり。外面口縁~体部は焼熱により赤変している。	7.5YR6/4 に近い緑 やや暗褐色 黒粒～微粒と白・砂 微粒少。黒・砂雜幾幾 やや破損	北東部床土 P3 直直上 口~体1/3間 77
7 土師器 杯	口 12.6 高 6.1 底 2.7	内面口縁。成形・調整とも丁寧だが、外面体部調整のみ乱雑。外面口縁部ヨコナデのち体部黄いナデ。底部ナデで、くぼむ。底部平ら面はいびつな凹面。内面口縁~体部中位ヨコナデ・体部下平~底部ヘラナデのち体~底部の縁ならミガキ。	7.5YR6/6 緑 暗赤 白粒少。赤黒粒と透明 黒粒幾幾 破損	西蔵床土 P3 直上 34cmと P2 直上 79cm 口~体4/5間。底共存 65, 67
8 土師器 杯	口 14.8 高 4.9	外面口縁部ヨコナデ。体~底部やや丸いナデで、体部上半に無調整部分あり。体~底部には、数本一組となる縦い割れ目が3組みられる。輪縁4本の後に、中央部の縦縁4本と右部の縦縁3本を挿す。中央部と右部の縦縁は同の上端で2層へも少しV字形に折り返す。内面口縁~体部ヨコナデ。体~底部ヘラナデ。体~底部はミガキが施されるようには見えないが、フレイター状の割れ目が多く、不詳。外面は焼熱のため赤変している部分が多い。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・赤黒と白・赤 黒粒少 やや破損	北蔵床土 P3 直上 10cm 口~体1/3間 70
9 土師器 杯	口 14.6 高 5.2	口縁部は大きく歪む。外面体部ナデの口縁~体部上半ヨコナデのち口縁~体部縁ならミガキ。外面口縁部ヨコナデ。体部傾いたナデ。外面は腐付層のためか、全体に黒変色。	5YR5/6 明赤褐色 やや暗褐色 白粒少と粗粒と微 砂少。赤黒粒幾幾 破損	北東部床土 11cm 口~体1/4間 11
10 土師器 杯 最大 復 13.4	口 13.0 高 4.6	内面口縁。成形はやや丸い。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部上半に無調整部分あり。内面口縁部ヨコナデのち口縁~体部傾いたナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・赤黒～微粒幾幾 やや破損	口~体1/3間
11 土師器 杯	口 12.6 高 5.9 底 4.2	内面口縁。外面口縁部わずかなヨコナデ・体部ナデのち口縁~体部縁方向の縁ならミガキ。内面口縁部ヨコナデ。体部縁方向の強いヘラナデのち縁方向の縁ならミガキ。外面体部中位に腐付くさうな腐付層。体部下半は焼熱により赤変しており、煮潰用に使用したかもしれない。内面口縁部一部ケラーター状の割れ目あり。	10YR8/4 浅黄褐色 やや暗褐色 赤黒～微粒少。白粒 ～微粒幾幾 やや破損	北東部床土 23cm 口~体1/4間 1
12 土師器 杯	口 11.2 高 4.9	外面口縁部ヨコナデのち体部ナデ。内面口縁~体部ヨコナデのちナデのわずかにミガキ。内外外面部のナデは、細かな装束を伴う。丸れた1具のためか、外面口縁部と胴部下部に部分的にタール色の黒色物質が付着する。	5YR6/6 緑 やや暗褐色 赤黒～微粒少。白粒 ～微粒幾幾 破損	口~体1/4間
13 土師器 杯	口 14.2 高 4.2	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち縁なら縦方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ。体部放射状と見られるようなミガキ。内面口縁部はミガキと思われながら、表面が細かく割れているため不詳。外面体部一部焼熱により赤変。内面体部一部黒色物質(腐付)層付着。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗褐色 赤黒～微粒と白・透 明細粒少 やや破損	東部床土 4cm 口~体1/3間 38
14 土師器 杯 底	口 13.8 高 3.9 底 3.2	歪みあり。口縁部やや外反する。外面口縁部ヨコナデ。体~底部ケズリのみ体部ナデのちわずかにミガキ。底部はいびつな平底と見られる。内面口縁~体部ヨコナデのち体~底部傾いたナデのち縁なら装束状のミガキ。	7.5YR7/6 緑 やや暗褐色 白・赤黒～微粒少 白粒幾幾 破損	口~底1/6間 脇床
15 土師器 杯	口 14.4 高 3.6	浅平半球状。外面口縁部ヨコナデ。体部強いナデのち光沢を持つナデがわずかに施される。体部上部無調整。内面口縁~体部ヨコナデのち体部強いナデのち光沢を持つナデ。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや暗褐色 白・赤・透明黒粒少 白粗粒幾幾 やや破損	東岸階床土 20cm 口~体1/4間 53
16 土師器 杯	口 13.2 高 4.5 底 5.8	体部は直線的に開き、9世紀代の直造器杯のような形状となる。口縁部はやや内彎する。表面全体が磨光し、内面はさらにフレイター状に割れるため、調整不明な面が多い。外面口縁部ヨコナデ・体部縁方向の強い口縁~体部縁方向の縁ならミガキ。底部ケズリのみナデで、丁寧に磨光に仕上げられる。内面ヨコナデおよびナデと思われるが、不詳。ミガキの可視性あり。内外外面部の赤みが強く焼成されている。	5YR6/8 白 白・赤・半透明黒粒少 微粒 やや破損	中央部床土 口~体1/6間。底1/2 間 46
17 土師器 杯	口 15.5 高 4.7 底 5.8	16に類似する。9世紀代の直造器杯のような形状。外面調整は高いが、内面は比較的丁寧に仕上げられる。外面口縁部ヨコナデ。体部斜いたナデで、上半には粘土の層が薄く、裏の裏のところだけに強い黄いナデが集中する。修正しようとしたのか、底部ナデで、平底。内面口縁部ヨコナデ。体~底部ヘラナデのちナデ。口縁部は幅1.5cmほどの面となる。内外面口縁~体部一部に黒色物質(腐付)層付着。	7.5YR7/6 緑 やや暗褐色 白・赤・砂・微粒少 白・黒・赤黒～粗粒と砂雜 微粒 破損	北岸階床土 15cm 口~体1/4間。底共存 18
18 土師器 杯	高 3.9 底 4.2	外面体部上半ナデのち下半ケズリのち縁なら太いミガキ。底部ケズリのみ縁なら太いミガキで、全体に浅くくぼむ。内面体~底部ヘラナデのち縁なら放射状の太いミガキ。内面ヘラナデは工具痕跡が現れているためかハケで見えたとあるが、ミガキは約90°傾いたヨコ4本でやや丸い。	7.5YR6/6 緑 やや暗褐色 白・赤黒～微粒少 透明黒粒幾幾 やや破損	体1/6間。底共存

19	高 残 3.0 底 3.5	内外面とも調整は無い。小形竈の可能性もあろう。外面部ケズリ、底部ナデで、平底。内面体~底部はいっぺらナデ。	7.5YR7/6 橙 やや暗い 赤黒~暗緑多、白輝 ~暗緑と透明細粒燐 やや軟質	東面中央直上 体下平~底完存 52
20	高 残 4.2 底 4.6	外面体一端~底部ケズリは体部ナデ。体部上位には、幅広いミガキが線状に露出される。底部は大きくくぼむ。内面体~底部ヘラナデのちねむりな状態とならぬ。中絶したミガキ。	10YR7/4 白~赤黄 やや暗緑 白・赤黒~暗緑少 やや軟質	東面中央上 26cm 体1/5現、底完存 14
21	口 残 9.4 小形 高 4.0	断面、外周口縁~体部わずかなナデとヘラナデ。底部ケズリは、底部のケズリは高く、粘土のため色が異なる。突った工具を刺した痕跡あり。内周口縁~底部はいっぺらナデ。内面黒褐色。	10YR7/4 白~赤黄 やや暗い 白・透明細粒~暗緑 少、白粒燐燐燐 やや軟質	口1/6現、体~底部一 部
22	口 残 16.8 高 残 5.5	外面体口縁部ヨコナデのち線ならミガキ。体部ケズリのちナデのち線ならミガキ。底部ケズリ、ミガキは縦~横の順に露出される。内周口縁~体部ヨコナデのち線~底部ケズリのち線~底部線ならミガキ。ミガキは縦~横の順に露出される。杯部体内外面の一部に僅かな黄色土質物散在。杯部底部径 6cm。	7.5YR7/4 白~赤 やや暗緑 砂黒~暗緑少、白輝 ~暗緑 軟質	P1付近直上 杯口~底1/6現 30
23	高 残 3.5	外面体~底部丁寧なナデのち体部縦方向の線ならミガキ。横部分の径は6.2cm。底部欠損は脚部との接合面と見られる。内面体~底部ナデのち線なら放射状と見られるミガキ。内面は縦熟のためか表面の剥落が著しい。	5YR6/8 橙 やや暗い 白・半透明暗緑多、 砂鉄・黒粒粗少	野蔵穴P3直上 杯体~底1/2現 74, 16現
24	口 残 19.8 高 残 3.2	杯部二重口縁。外面杯部口縁~体部ヨコナデのちミガキ。ミガキは上に縦方向で、残存下部に横方向のミガキが見られる。体部杯部口縁~体部ヨコナデのちミガキ。	10YR7/6 明赤黄 やや暗緑 白・黒・赤・砂鉄粗 多、赤鉄少、赤粒燐燐燐 硬質	北部中央上 9cm 杯部口~体1/5現 16
25	口 残 19.0 高 残 4.8	外面杯部口縁~体部ヨコナデのち線なら縦方向のミガキ。底部ケズリのち線方向の線ならミガキ。内面杯部体~底部ヘラナデのち口縁~体部ヨコナデのち線~底部やや暗なミガキ。ミガキは縦~横の順に露出される。杯部は、口縁部の内周口縁~体部をのけて作られる。	10R5/8 赤 やや暗い 白・赤黒粗少、透明 細粒燐燐燐	D2 直上 39cm 杯口~底1/4現 20
26	口 残 21.0 高 残 7.2	外面杯部の成形が、組織が見える。外面杯部体~底部5cm/1cmのハケのち線露出ヨコナデ。内周口縁~底部5cm/1cmのハケのちナデ、ヨコナデのち線露出ならミガキ。焼熱により内外面とも表面の色が赤変・濃減する。	5YR6/8 橙 やや暗緑 白・透明細粒~暗緑 少	北部中央上 9~15cm 杯口~底1/3現 9, 28
27	高 残 6.2	外面脚部上平履の密なミガキ。内面脚部上端ナデ。上平ケズリ。内面のケズリにより強弱が強く上げられる。上端には附れなかった組織面が見える。下端欠損面はやや濃減しており、脚部下平を人為的に打ち欠いた状態と推定される可能性もある。下端も人為的な欠損かもしれない。残存部上端径 3.7cm。	7.5YR6/6 橙 やや暗緑 赤黒~暗緑・黒黒 ~暗緑と砂鉄~暗緑と白粒粗多	北部中央上 1cm 脚上平完存 29
28	高 残 8.5	外面脚部上平ケズリの線ならミガキ。上端には、ヘラの当たりのような痕跡が色に付けられる。残存部下端にも一部にあり。内面脚部上平組織面をそのまま残す。上端欠損面はやや濃減しており、杯部を欠損した状態と推定される可能性がある。下端も人為的な欠損かもしれない。残存部上端径 3.7cm。	7.5YR7/6 橙 やや暗緑 白・赤黒~暗緑粗燐 燐燐	中央床直上 3cm 脚上平完存 40
29	高 残 7.5	柱石状。外面脚部上平幅広い強いミガキ。上端には段部が作出されている。柱石部は中央部に孔あり。径 3.1 x 3.3cm。深さ 1.7cm。内面脚部上平ナデで、しぼり目が見える。脚部上平の欠損は人為によるもの可能性あり。	7.5YR6/6 橙 やや暗緑 黒粒粗と白粒~暗緑 少 白・赤粒粗燐燐 硬質	脚上平1/2現
30	高 残 7.7	外面脚部上平ナデの縦方向のやや密なミガキ。内面杯部底部ミガキ。脚部上平後半ナデで、丁寧に大きな組織面を残す。上端は杯部との接合面の欠損。下端は外面からの大気的な打ち欠きによる欠損の可能性あり。脚部上端欠損径は 4.0cm。	10YR4/2 灰黄 やや暗緑 白粒粗少、白・赤 粒粗燐燐	北部中央上 5cm 脚上平 2/3現 22
31	高 残 5.1 底 4.0 小形 高 8.0	小形。体部は調整により八角形状を呈する。外面体部上平ナデ後半方向の太いミガキ。体部下平ケズリ後体部中位~下平履方向の太いミガキ。底部ナデで、平底。内面体部ナデ。底部はいっぺらナデ。	2.5YR5/8 明赤黒 暗赤 白・赤黒~暗緑燐燐 燐燐	D2 直上 9cm現 体1/4現、底完存 21
32	口 6.6 高 6.8 底 2.5 小形 底 7.9	小形。散熱のため表面がやや軟質している。外面口縁部ヨコナデの縦方向の線ならミガキ。体部ナデの中位~下平ケズリのち上平~中位に線ならミガキ。底部はナデで、くぼむ。内周口縁部ヘラナデのちヨコナデのちねむりな状態の強いミガキ。体部上平ナデ。体部下平~底部ヘラナデ。口縁部上端はほとんど欠損ないしは磨滅により失われている。体部下平には 1.5 x 2.1cmの孔があり、内側からの刺突による人為的穿孔と見られる。	5YR5/8 明赤黒 やや暗い 白・赤・透明細粒~暗 緑	野蔵穴P3直上 18cm はほぼ正円 72
33	高 残 3.0 底 7.0	底部中央1孔。外面体部下端~底部ナデ。内面底部ヘラナデ。孔内面はケズリ。	5YR6/8 橙 暗赤 白粒粗と透明細粒燐燐 やや軟質	底1/2現
34	高 残 4.2	薄手。外面脚部下平丁寧なナデのち一部分ナデ。内面脚部下平密な組織ヨコナデにより、ロケロが明確に残る。内面脚部下平わずかに自然剥落。露の可能性もある。縦面は灰赤色 (10R5/2)。SK 51 出土破片1個あり。	5Y5/1 灰 暗赤 白粒粗~暗緑燐燐 硬質	脚部下平1/6現
35	高 残 25.7 底 7.5 最大 残 23.3	底部上12cm付近に横上げ体止による接合面が見られ、これより下は丁寧に、には組織面調整となっている。外面脚部中位ケズリのち杯部~脚部上平ヘラナデ~脚部下平ナデ。底部は平底。内面脚部ヨコナデ。脚部上平~中位に強いナデで、上平には組織面が見える。残存面は、縦方向と露滅の変化が顕著。脚部下平~底部ヘラナデで、底部中央がややくぼむ。外面脚部中位~下平に僅かな量付着するが、意図的に用いたと考えられるほどではない。	7.5YR6/4 白~赤 やや暗い 赤黒~暗緑少、白粒 ~暗緑と砂鉄燐燐燐 やや軟質	東面中央上 1~20cm 脚~底部一 部 50, 53, 56, 61, 62, 63, 65, 68現
36	高 残 8.1 底 7.1	薄手~硬質。底部上約 5cmに横み上げ体止による接合面があり、外面に段差として残る。外面脚部下平~底部ケズリ。ケズリは縁が鋭く、光沢を持つ。内面は中位ナデに突く平底。内面脚部下平~底部ヘラナデ。縦断面の熱等により、色調の異なる破片が接合する。	7.5YR6/4 白~赤 やや暗緑 白粒粗少、白輝 硬質	脚部下平~底1/3現
37	口 残 15.4 高 残 11.6	口縁部上端は、受け口状にわずかに内彎する。口縁部ヨコナデのち線露出上平 6cm/1cmのハケのち線ならミガキ。内周口縁部 6cm/1cmのハケのちヨコナデ。脚部上平 6cm/1cmのハケで、一部にナデあり。組織面顕著。	7.5YR7/8 黄 やや暗緑 白粒粗と赤黒~暗緑 と黒・透明細粒少、白粒燐燐 やや軟質	東面中央上 2~5cm 口~脚上平一部 58, 61
38	口 残 16.3 高 残 12.5 最大 21.0	外面口縁部ヨコナデ。脚部上端縦方向のナデのち脚部上平履方向の強いナデ。内面は中位ナデに突く平底。内面脚部下平。脚部中位の欠損面はほぼ平明で、端部はやや濃減しており、脚部下平を欠損した状態と推定されている可能性がある。	10YR6/4 白~赤黄 やや暗い 白粒粗多、白・砂鉄 粗燐燐燐 やや軟質	野蔵穴P3直上 4cm 口1/2現、脚上平完存 71

第8章 権現山遺跡 SG5 区

39	土師器 磁か	高 Ⅷ 2.8 底 Ⅶ 7.3	外面胴部下端～底部ケズリのうち一部ナデ。底部は平底で、全体にわずかにくぼむ。内面底部4cm/1cmのハケのちハラナデ。	10YR6/3 に近い青釉 やや暗い、白・透明細粒多。 白・半透明細粒少。黒細粒微量 微質	底はほぼ完存
40	土師器 甕	高 Ⅷ 2.1 底 Ⅷ 6.6	外面胴部下端～底部斜いナデ。底部は平底でドーナツ状に外面が高くくなっており、内面・外縁は確認は粘土がめくれた状態になっている。内面底部ナデで、中央がくぼむ。	10YR6/4 に近い青釉 やや暗い、白・赤微粒少。白微粒 微量 微質	胴～底1/3 周 底はほぼ完存
41	土師器 甕	高 Ⅷ 2.0 底 Ⅶ 7.8	外面胴部下端～底部ナデ。底部は突出する平底で、外面高さがドーナツ状に高く、中央がくぼむ。内面底部ハラナデ。外面胴部下端保存済。	7.5YR5/4 に近い暗 褐色 白微～黒粒少 微質	高さ不明底上5cm 底完存
42	土師器 甕	口 Ⅷ 14.2 高 Ⅷ 10.9 底 Ⅷ 6.5	小形。外面胴部上半ハラナデ・胴部下端～底部ケズリのうち胴部ヨコナデ・胴部縦ならミガキ。底部はほぼ平底で、中央のみ深くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ・胴部ハラナデ・底部ケズリのうち胴部中位と底部付近に縦ならミガキ等。外面胴部中位～ドナツが少し黒色染を持つ。発色??	10YR4/1 褐色 やや暗赤 白・赤微～黒粒少 白・赤微粒量 やや微質	P1付近床土5～9cm 口～胴2/3 周、底はほぼ 完存
43	土師器 甕	口 Ⅷ 13.0 高 Ⅷ 10.0 底 Ⅷ 4.5	小形。42に類似。外面口縁部ヨコナデのち胴部ナデのち胴部下端～底部ケズリのうち胴部下半縦ならミガキ。ミガキは乱暴で底部も明確ではないが、ここでは中央の比較的平坦に見られる部分を底部とした。その周囲のケズリを含めると、底径は約8cmになる。底部は灰い泥質に加え、炭粒の付着による影響により安定しない。内面口縁部ヨコナデ。胴～底部ナデのち底部中央とした発色状況のやや暗赤染輸出のミガキ。	2.5Y7/4 浅黄 やや暗赤 赤微～黒粒と白微～ 黒粒少。白微～黒細粒微量 やや硬質	P1付近床土5～9cm 口～胴1/2 周、底はほぼ 完存
44	土師器 甕	口 Ⅷ 13.6 高 Ⅷ 11.5 最大 Ⅷ 14.6	小形。42・43に類似するが、胎土・調整ともより直質。外面胴部上半6cm/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下半ナデ。胴部下半はその後ケズリ。内面口縁部6cm/1cmのハケのちヨコナデ。胴部上半ナデで、縦筋面側著しく異なり。胴部中央～ドーナツナデ。外面口縁部および胴部中位保存済。	10YR7/3 に近い青釉 やや暗赤 白・半透明細粒多。 赤微～黒細粒微量 微質	北東部床土5～9cmと貯 蔵穴P3直上34cm 口～胴1/2 周 31, 36, 37, 66
45	土師器 杯	口 Ⅷ 10.4 高 Ⅷ 4.6	外面口縁部ヨコナデ・体部下～胴部ケズリのうち胴部ナデ。底部は丸で、体部との接目は縦やかな様となる。内面体～底部ハラナデのち口縁～底部ヨコナデ。内面全体・外面口縁～体部塗仕上げ。古墳終末期中葉の遺物が入る。	10YR7/6 明黄赤 やや暗赤 白・半透明細粒多。 赤微～黒細粒微量 やや硬質	口～底1/3 周
46	土師器 鉢	口 Ⅷ 13.9 高 Ⅷ 10.0 最大 Ⅷ 14.2	外面口縁部ヨコナデ。体から底部ナデのち体部縦ならミガキ。底部は厚い平底で、植物の繊維と見られる圧痕がある。内面口縁部ヨコナデ。外面口縁部と内面体部1位の一部分に保存済。全体が漆仕上げされた状況ではない。古墳後期遺物の混入の可能性あり。	5YR7/6 暗 赤 白・黒・赤細粒微量 微質	貯蔵穴P3直上23cm 口～体1/4 周、底完存 81
47	石器 磨石	長 Ⅻ 12.5 幅 Ⅴ 5.1 重 Ⅻ 22.0	棒状の河原石を素材とする。上下両端がほぼ平坦な磨石面となっており、磨石に伴う小さな剥離が周囲にある。	10YR7/2 に近い青釉 やや暗赤 安山岩	東部床直上 完形 49
48	石器 剥片	長 Ⅸ 9.1 幅 Ⅳ 4.7 厚 Ⅷ 2.4 重 Ⅶ 70.3	1等辺三角形形状の厚手な縦長の剥片。表面は右からの剥離面。左は遠い方向からの横方向の剥離である。裏面は一回の剥離面ではなく、上端のみ選択的な剥離による剥離面と見られる。右側から軟質な砥石との関連想定される。	2.5Y8/3 淡黄 褐色 白色灰質片	中央部北寄り8cm 完形 26
49	石器 砥石	長 Ⅷ 15.2 幅 Ⅵ 6.3 厚 Ⅷ 5.2 重 Ⅷ 495.7	四角柱状。四面ともほぼ同様に使用されており、砥石長軸方向ないし斜位の微傷が見える。表面および左側の中央部は、ごく深い溝状にくぼむ。裏面に剥離する断面で使用され、多数の条線と、7mm程度の溝および剥離面が見える。石器下部は埋面および磨石時の剥離・磨石面である。右側面～裏面の欠損の両側には深く割れた断面があり、摺り切りにより分割された可能性がある。上端の欠損部縁辺はやや磨滅しているため、欠損後も砥石として使用されたかもしれない。	7.5Y4/1 灰 褐色 泥質	貯蔵穴P3直上1 一部欠 73
50	石器 砥石	長 Ⅻ 21.8 幅 Ⅻ 13.1 厚 Ⅵ 6.7 重 Ⅸ 2840.0	河原石を素材とする大型の砥石。上下両端付近を除きほぼ全面が使用により磨滅され、わずかに磨滅が見える。表裏両面の中央付近が最も磨滅されている。左右両側縁は研削により平坦面となる。	2.5G6/1 オリーブ灰 褐色 ホルンフェルス	新設穴P3直上6cm 完形 78
51	石器 剥片	長 Ⅻ 3.5 幅 Ⅱ 2.2 厚 Ⅶ 0.37	ほぼ正方形の剥片。右上の側面は石の表面と見られる。表裏面は板状に剥離する断面で割れており、右上を除く側面は磨石のための打ち欠かれた可能性がある。石製物品の素材か。重量3.2g。	5B2/1 青黒 褐色 粘板岩	完形
52	石製物品 剥片	長 Ⅻ 3.8 幅 Ⅲ 1.3 厚 Ⅶ 0.4 重 Ⅲ 3.7	表裏面上と右側縁および右下の側面に折角時の剥離面を残す。表割中央に溝があり、研削面は欠損の強い突状で、表裏面とも大きく平坦に研削するほか、上端と右側縁のみ少し向きを変え、面取り状に研削する。表裏面は、長軸および短軸方向にわずかに彎曲する。上端の面は孔と平行に、両側面は長軸と平行に研削。穿孔は表割からと見られ、孔径は表割1.76mm、裏割1.66mmで、裏割の孔径間は小さく剥離する。	2.5G5/1 オリーブ灰 褐色 磨石	完形
53	石 鏝	長 Ⅻ 11.0 幅 Ⅴ 11.5 厚 Ⅱ 2.5	河原石。特に加工の痕跡なし。板状で、表面とも両側縁部が微熱により赤変しており、中央部は変色しない。微熱による熱けハジケのためか、表面の一部が欠損する。残存重量507.3g。	5Y6/2 灰オリーブ やや暗い 灰板岩	中央部床土36cm 一部欠 41
54	石 鏝	長 Ⅸ 9.8 幅 Ⅷ 8.4 厚 Ⅵ 6.7 重 Ⅷ 726.7	河原石。特に加工の痕跡はないが、上下両端付近は表面が平滑となっており、磨石の可能性も考えられる。右および左下の両側縁部には、縦向き工具による見られる欠損がある。発掘時の欠損であろう。	5Y6/2 灰オリーブ やや暗赤 安山岩	貯蔵穴P3直上50cm ほぼ完形 75

SG5区 SI-137 (第334図、写真図版42)

【位置】SG5区中央の13-17、14-17グリッド。東側は低地に向かって傾斜する。同じく古墳後期のSI-19・21が北と東に近接する。古墳中期の方形柵列SA-151の南辺を切る。中央が確認調査時のトレンチで切られるので、SA-151との新旧がやや不確実だが、同じく古墳後期前葉のSI-18がSA-151を切るので妥当と思われる。

【規模と形状】方形で、東西6.10×南北6.05m、中軸線はN-1°E、残存壁高は10～30cm。南壁の方が高くややなだらかに外傾する。床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方は床面から深さ4～12cmで、底面に細かな凹凸があり、ローム粒多量・ローム塊少量と、焼土・炭を含む黄褐色土の5層で貼床する。

主柱穴4本はP1が径24×30×深さ35cm、P2は径34×38×深さ31cm、P3は径32×35×深さ31cm、P4は径24×28×深さ35cm。P1-P2間が2.35m、P3-P4間が2.31m、P1-P4間が2.17m、P2-P3間が2.21mで、東西が南北より若干短い。

南東隅と南西隅で、貯蔵穴P5とP6を確認した。どちらも東西軸の長方形である。P5は58×113×深さ29cmで、底面も長方形で壁は直線的で、覆土1～2層にしまりが無い。P6は72×97×深さ23cmで、底面は丸みがあって壁が緩く、覆土1～3層は自然堆積状だが1・2層にロームが多くてP5より覆土がしまるので、建物廃絶時に埋め戻されたかもしれない。貯蔵穴が2箇所の建物はSG5区SI-11などがある。

【カマド】東壁中央の南寄りにある。両袖幅95cm、煙道先端から焚口まで95cm。貼床上に灰色粘土主体の6・7層で袖を作る。火床上に4層の灰が薄く堆積し、それで焼土多量・粘土少量を含む2層は天井内壁が崩れたと思われる。煙道先端は東壁部で緩く上がる。縦位で出土した土師器甕(13)の破片は、南袖の焚口を補強する位置にある。北側で出土した大形の自然礫(17)を支脚に使ったとも考えられる。

【覆土】レンズ状の自然堆積で、1層に焼土粒を若干含む。

【遺物出土状況】土師器甕3点(11～13)はカマド周辺にあり、14だけは南部にも破片がある。7の杯は、埋め戻されていた可能性のある貯蔵穴P6内ではなくて、P6開口部上方で出土した。

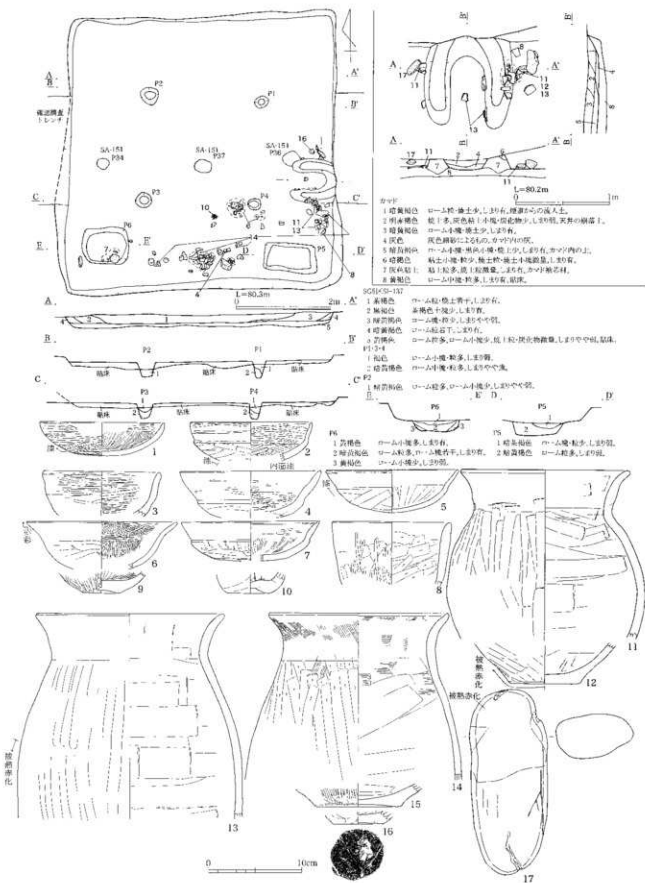
【出土遺物】少なめである。土師器は甕が主体で杯もやや多い。杯は個体数が多く、半球状と外反口縁の杯が主体で、身模倣形・蓋模倣形・外傾口縁の杯は少ない。1・2・5は漆仕上げで、4も可能性がある。3・7は漆不使用のミガキ仕上げ、6は赤彩。甕は図示した3点の形が似ている。この3個体の甕破片は多いが、接合できなかったものが多い。11と12は同一個体の可能性もある。14はハケ調整の長莖。

図示以外の土師器と焼粘土塊は合計543片・5,548gで、内訳は杯145片・650g、高杯21片・379g、鉢7片・181g、壺甕類368片・4,324g、焼粘土塊2点・14g。身模倣形の杯破片も少しある。高杯や椀形杯は小片で、そのほとんどは先行する時期の混入遺物と見られる。粘板岩のような石の小破片も見られた。

大小様々な形も色々な礫が多く、大きさは大(長径20～30cm)・中(長径14～20cm)・小(長径7～14cm)に大別できる。形は厚みがある不整三角形、薄い楕円形、棒状がある。明確な加工はなく、剥離がある礫が少しみられる。安山岩・流紋岩が主体で、鬼怒川の石と見られる。

第193表 権現山遺跡SG5区 SI-137 出土遺物

番号 種別 器種	大きさ 径・高・厚	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 現存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.2 高 3.5	薄手。外面底部ケズリのち口縁～底部密なミガキ。体部下平～底部は一方 向。口縁～体部上半は門扉方向のミガキ。内面口縁～底部密なミガキ。外 面中位以上と内面漆仕上げ。	10YR6/3 赤彩 微密 砂・赤彩粒微量	口一休1/4周
2 土師器 杯	口 径 13.0 高 4.1	薄手。外面口縁部ヨコナデのちヨコ方向の緩らなミガキ。体部ナデで、 部光沢あり。内面口縁部ヨコナデのち口縁～体部ミガキ。口縁部はヨコ方 向でやや緩ら。体部は大きく多角形に密にミガキが施される。内外面でも 表面にドット状に黒色物質が付着する。漆仕上げの可能性ある。	2.5YR7/8 糖 微密 白微粉少、赤彩粒微量 やや破片	口一休1/4周
3 土師器 杯	口 径 12.6 高 4.7	椀形厚手。外面口縁部ヨコナデのちヨコ方向のミガキ。体部下平なナデの ちわずかにミガキ。内面口縁部ヨコナデのち口縁～体部ヨコ方向の密なミ ガキ。	5YR6/6 糖 やや微密 赤彩粒と白微粉少 微密	口一休1/4周 貯蔵穴



第334図 権現山遺跡 SG5 区 SI-137 遺構・遺物

4 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 4.9	軟質で厚い。内外面とも表面の剥落が著しく、調整不明瞭。口縁部は細かく彫削している部分が多い。外面口縁部ヨコナデのちわずかにミガキ、体部ナデ。内面口縁部ヨコナデのちヨコ方向のミガキ。体部ヨコ方向のミガキ。内面口縁部一帯一部紫色物質付着。漆仕上げの可能性もある。	5YR6/6 橙 7.5YR5/4 白 やや硬質 赤磁粒多、赤磁粒少、白磁粒微量 やや軟質	南部床土 13cm 口一帯 1/2 厚 24
5 土師器 杯	口 復 14.0 高 4.5	薄手。硬質。外面口縁部ヨコナデで、底部は丸くややふくらむ。体一帯部ナデのち丁字ナデで、口縁部との境は段になる。内面体一帯部丁字ナデ放射状のナデのち口縁部ヨコナデ。外面口縁部一帯部、内面全体漆仕上げ。	5YR5/6 白 硬質 赤磁と透明磁粒と白磁粒微量 やや軟質	口一帯 1/5 厚
6 土師器 杯	口 復 16.0 高 残 5.0	外面口縁部ヨコナデ。体部欠片のあるナデ。内面口縁部一帯部ヨコナデのち断面ナデ。ミガキは口縁部はヨコ方向主体。体部は放射状。外面口縁部上端・内面全体赤磁。	2.5YR4/8 赤褐色 硬質 白磁と黒磁粒と白磁粒微量 やや軟質	南部床土 5～10cm 口一帯 1/2 厚 15, 18
7 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 4.1	表面が磨耗。剥落している部分が多く調整が不明瞭。外面口縁部ヨコナデ。体部で丸いナデで、上平は無調整であり、粘土のシウが顕著に見える。内面口縁部ヨコナデのちヨコ方向のミガキで、口縁部内側に浅く化粧が施される。体部放射状のミガキ。内面のミガキは多少ほど密にならないと見られる。	5YR5/6 明赤褐色 やや軟い 白・赤磁粒少、赤磁粒微量 やや軟質	貯蔵穴P6 深さ 31cm 口一帯 1/4 厚 42, 貯穴
8 土師器 鉢	口 復 12.6 高 残 6.6	外面口縁部ヨコナデのち体部縦帯のち体部縦帯ナテ方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデのち体部縦帯ナテ。	5YR6/6 橙 やや硬質 赤磁と磁粒と白磁粒微量 やや軟質	カマド南側床土 3～10cm 口一帯 1/3 厚 45, 10
9 土師器 鉢	高 残 2.3 底 残 3.8	外面体一帯部ナデのち体部縦帯ナテ方向のミガキ。底部は全体的にくぼむ。内面体部ナテ一帯部放射状の強いミガキ。	5YR6/8 橙 やや硬質 赤磁と磁粒と白磁粒微量 硬質	体下部 1/3 厚。底一帯 欠
10 土師器 鉢か	高 残 2.3 底 4.4	内外面とも表面の磨耗著しい。外面体部ナテ一帯部ナデと見られる。底部は中央が丸く大きくくぼむ。内面体部ナテ一帯部ヘラナデで、ヘラの当たりが明確に見える。	7.5YR7/6 橙 やや軟い 白・赤・半透明磁粒多、黒磁粒微量 やや軟質	南部床土 13cm 底部 20
11 土師器 甕	口 8.6 高 残 17.8 最大 復 21.0	外面胴部上平・中位丁字ナヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部一帯部中位部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。外面中位以下のナデは丁字ナデ。11と12同製体の可能性あり。	10YR7/6 明黄褐色 やや硬質 白磁粒と赤透明磁粒少、白磁粒微量 やや軟質	カマド南側の床土 5cmと カマド北側付添床土 1cm 口 5/6 厚。胴上 1/2 厚。 胴中一帯 5, 0, 47, 8
12 土師器 甕	高 残 4.4 底 復 7.4	外面胴部下端丁字ナヘラナデ。底部はケズリと見られるが、焼熟のため表面の剥落が著しく不明瞭。内面胴部下端一帯部ヘラナデ。11と同製体の可能性あり。	10YR4/1 黒 粗い。赤磁と磁粒多、白磁粒少、赤透明磁粒微量 やや軟質	カマド南側の床土 5cm 胴下一帯 1/2 厚 5, 9
13 土師器 甕	口 復 20.0 高 残 21.6 最大 23.8	長製。外面口縁部ヨコナデ。胴部上平ナデ。内面口縁部一帯部中位ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。外面胴部中位焼熟により赤変。	10YR7/11 に近い黄褐色 粗い。白磁と砂粒と磁粒と白磁粒微量 やや軟質	カマド南側の床土 5cmと カマド内床土 8cmとカマド南側床土 2cm 注記を参照
14 土師器 甕	口 19.0 高 残 17.5 最大 復 22.9	長製。外面口縁部一帯部上平 1cm 当たり 7 本のハケのち胴部上平削りのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部一帯部上平外面と同様のハケのち口縁部ヨコナデ。胴部上平ヘラナデ。口縁部は底部のみ内磨し、内側に浅い沈線があるような形になる。	7.5YR7/6 橙 粗い 白磁と磁粒多、白・赤磁と赤磁粒と透明・砂磁粒少 やや軟質	東側床土 9cmと南部床土 2～11cm 口一帯上平は圧縮 2, 23, 31, 37
15 土師器 甕	高 残 2.4 底 復 9.0	胴部がかなり強くとと思われる。胴部下端ナデのちミガキ。底部ナデ。底部は突出する平底で、全体にくぼむ。内面底部ヘラナデ。	2.5Y6/3 に近い黄 やや硬質 白・半透明磁粒微量 硬質	胴下一帯部 1/2
16 土師器 高 底	高 1.3 底 5.2	外面胴部下端で丸いナデ。底部本葉部で平底。内面底部ヘラナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや硬質 透明磁粒少、白磁粒微量 硬質	東部床土上 底部 20 12
17 土師器 甕	長 19.5 幅 8.1 厚 4.7	河原石。筒に加工の痕跡はないが、上平 1/3 ほどが焼熟により赤変している。カマド支脚として使用された可能性がある。重量 1242.5g。	5Y5/1 灰 やや硬質 赤レンガ 赤レンガ	カマド北側の床土 3cm 46

SG5 区 SI-155 (第 335 図、写真図版 42)

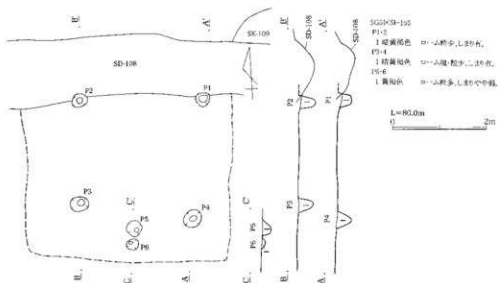
【位置】SG5 区中央の 13-17 グリッドに所在する。すでに床面は消滅していたので、主柱穴と思われるピットの配置から竪穴建物跡と判断した。東に古墳中期の SI-24、北に古墳後期の SI-21・137 がある。土層断面図はないが、時期不明の SD-108 に北壁を切られると思われる。

【規模と形状】ほぼ方形で、東西長推定 4.33m、南北長は 3.57m 以上。中軸線は N-3'-E、4 本の柱穴と入口ピットだけしかなく、建物の範囲は一点線線で示されているが、掘方まで削平されているため、あまり明確ではない。覆土・壁・床面・貼床は削平されて消滅している。

主柱穴と推定される 4 本は、P1 が径 29 × 28 × 深さ 25cm、P2 は径 34 × 27 × 深さ 31cm、P3 は径 39 × 30 × 深さ 31cm、P4 は径 40 × 36 × 深さ 32cm である。柱間は P1-P2 間が 2.62m、P3-P4 間が 2.41m、P1-P4 間が 2.53m、P2-P3 間が 2.15m で、ほぼ方形に配置される。南壁際中央から 20～30cm 北にある P5 と P6 が入口ピットと思われる。P5 は径 34 × 32 × 深さ 19cm、P6 は径 27 × 23 × 深さ 9cm。

【火処】不明である。

【出土遺物】遺物は出土しなかったため、詳しい時期は不明である。古墳時代集落内にあるので、古墳時代の建物と考えられる。



第335図 権現山遺跡SG5区 SI-155 遺構

第4節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）

SG5区 SX-118（第336・337図、写真図版44・173・185）

【位置】SG5区南部の台地平坦面上で、10-17グリッドにある。周囲に分布する溝・土坑・井戸はいずれも時期不明の遺構である。北側を時期不明のSD-133に切られる。

【規模と形状】人為的な掘り込みではなく緩い窪地で、平面形は隅丸方形。東西2.35×南北推定2.26mの範囲が窪み、確認面からの深さは5～13cm。暗色土層中で、明確な掘り込みが認められず、平坦な床面や明確に立ち上がる壁もない。したがって、遺物出土状況および土層断面から遺構の上・下端を推定・記入した。調査時に地山を掘りすぎてしまった部分は、推定復原範囲を破線で示した。

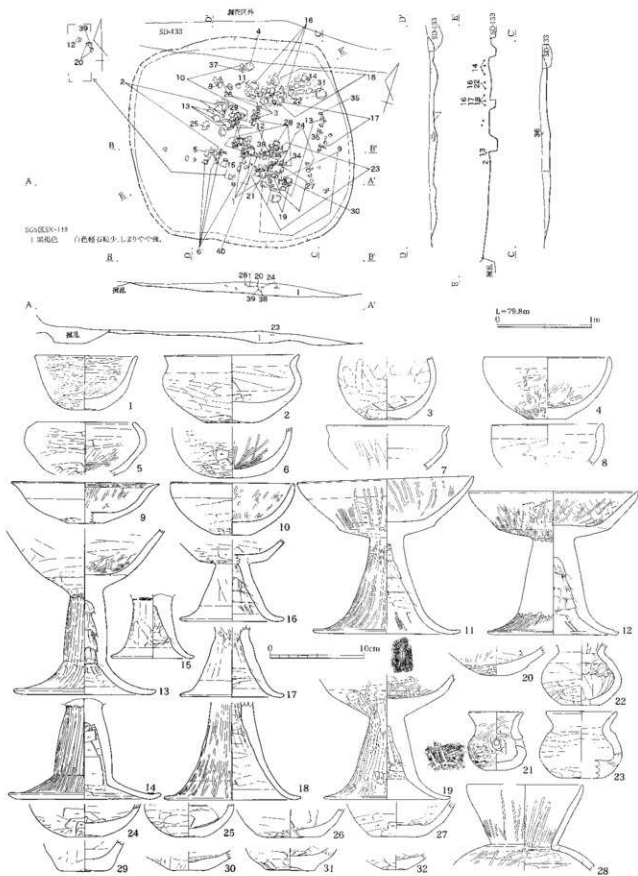
【覆土】自然堆積と見られる黒褐色の単層である。覆土中に含む白色軽石粒は、古墳時代テフラ（前期のAs-C）の可能性もあるが、分析は実施していない。

【遺物出土状況】遺物は、確認面から10cmほどの落ち込んだ範囲を覆う土層中から出土している。中央部に径約1.8mの範囲で土師器が集中し、同じ範囲内に石製模造品7点が散在する。

同様の遺構として、北に隣接する立野遺跡5区の遺物集積遺構SX-19・SX-178がある（『東谷・中島地区遺跡群』5pp.399-405）。土師器の各個体とその場所で潰れている立野5区SX-19よりも、複数個体を壊して捨てた立野5区SX-178のほうが、本遺構に類似する。立野遺跡の両遺構は火を焚いた上および周囲に土器を集積しているのに対して、本遺構には焼土がみられない。

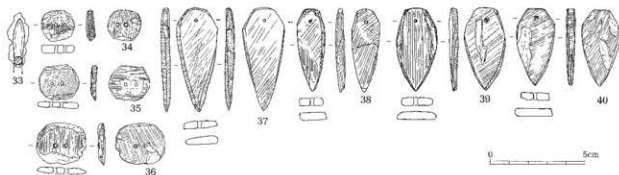
【出土遺物】土師器は、口縁部が開いて浅くなった椀形杯（9）を含む。高杯のうち11は脚内面に焼成前の刻線がある。14は被熱しているのでカマドの支脚などに転用していた可能性もあるが、この土器が示す本遺跡編年3段階にはまだカマドを持つ建物が少なく、SG5区ではSI-13にある。土師器の甕（21）はSG5区SD-227などに事例がある。21は外面を研磨具などに転用したような痕跡がある。鉄製品は末端が尖る棒状破片（33）。

石製模造品は剣形品4点と有孔円板3点がある。滑石製模造品はSG5区SI-8、絹雲母片岩製模造品はSG10区SI-101などにある。石製模造品のまとまった出土例は、権現山遺跡調査区外の東谷神社付近（谷中・大島編2001、写真図版101）や、杉村遺跡の北関東自動車道調査区92号住居跡（有孔円板7・剣形18・勾玉形1・白玉40点、藤田・安藤編2000,p.160）がある。図示以外の土師器は合計563片・3.191gで、内訳は杯300片・1.117g、高杯80片・586g、小形壺70片・560g、壺頸類113片・928g。



第336図 権現山遺跡 SG5区 SX-118(1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第337図 権現山遺跡 SG5 区 SX-118 (2) 遺物

第194表 権現山遺跡 SG5 区 SX-118 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 10.8 高 5.7 底 3.2	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ・体部下端～底部ケズリのち口縁～底部ミガキ。底部は平底で、全体にくぼむ。内面口縁～体部縦方向主体のミガキ、底部→方向主体のミガキ。外面体～底部一部残存。	2.5Y4/1 黄灰 や中硬質 白・赤黒～細粒微量 や中硬質	底上 3～5cm 口～体 1/4 周。底定存 60, 66, 67, 146, 147, 148
2 土師器 杯	口 復 14.2 高 7.1 底 5.4 最大 14.6	内面口縁。外面体～底部ナデのち体部下端一部ケズリ。底部は丸味を持つ平底で、中央が不整形にくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ。体～底部ヘラナデで、底部は丁寧に磨かれる。	10YR7/3 に近い黄緑 や中硬質 白・赤黒～細粒と透明 ・砂粒微量 や中硬質	底直上～底上 5cm 口～体 1/3 周。底定存 97, 98, 103
3 土師器 土師杯	高 復 6.7 底 復 4.2	内面口縁と見られる。外面体部ナデ。体部下端～底部広いケズリ。底部は平底で全体にくぼんでいる。内面体部ナデ。底部ヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 や中硬質。白・赤・砂粒～細粒少 や中硬質	底上 5～13cm 口～体 1/5 周。底 1/2 周。110, 122, 127
4 土師器 土師杯	口 復 13.2 高 6.5 底 4.0 最大 13.6	外面口縁部ヨコナデ。体～底部ケズリのち線ならミガキ。底部は平底で、形状はひびつ。内面口縁～体上半ヨコナデ。体部下半～底部ヘラナデ・ナデのち線ならミガキ。ミガキは体部斜上主体。底部→方向主体。	5YR5/8 明赤黒 や中硬質 赤黒～細粒多。白粒～ 細粒少。透明・砂粒～細粒微 量。硬質	底上 3cm 口～体上半部。体下半 ～底定存
5 土師器 杯	口 復 9.8 高 復 5.6 最大 復 12.8	体部上半～口縁部は内磨き。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち体部上半平直なミガキ・体部下半ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデのち体部ミガキ。ミガキは主に斜上で、下半は→方向に磨かれる。	10YR6/4 に近い黄緑 や中硬質 白・砂粒と赤黒～ 細粒少 硬質	底上 1cm 口～体 1/4 周 92
6 土師器 杯	高 復 5.4 底 3.4	外面体部1單なケズリ。底部は斜ナデで、体部のケズリが及びなかった部分がか不整形な平坦面となって残ったもの。内面体～底部ナデのち放射射の線ならミガキ。	10YR7/4 に近い黄緑 や中硬質 白・赤黒～細粒と白粒微 少。白粒微量 硬質	底上 3～7cm 口～体一部。底定存 82, 91
7 土師器 土師杯	口 復 11.6 高 復 4.7	内面口縁。外面口縁部ヨコナデのち体部ナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部斜ナデ。	5YR6/8 橙 や中硬質 白・赤・砂粒～細粒 微量 硬質	口～体 1/4 周
8 土師器 杯	口 復 11.8 高 復 4.4 最大 復 12.0	外面口縁部ヨコナデ。体部ナデで、上半無調整部分あり。体部に粘土の跡残る。内面口縁～体部ヨコナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 や中硬質。砂粒～細粒多。 白粒～細粒微量 硬質	底上 7cm 口～体 1/6 周 119
9 土師器 杯	口 復 15.6 高 4.2 底 復 3.6	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部下半～底部ケズリ。底部平直で、全体にくぼむと見られる。内面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。体～底部ナデのち放射射状主体のミガキ。内外面とも体～底部はクレター状の剥落著しい。	2.5YR5/8 暗赤黒 や中硬質 赤黒～細粒と白粒微 少。砂粒～細粒微量 や中硬質	底直上～底上 5cm 口～体 1/5 周 102
10 土師器 杯	口 復 13.2 高 3.4 底 3.8	平底状。表面は磨滅しているため、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部下端ケズリ。底部ナデ。底部は平底。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～体部縦方向主体のミガキ・底部→方向主体のミガキ。	10YR8/2 灰白 や中硬質 白・黒細粒と赤・砂 粒～細粒微量 硬質	底上 2～4cm 口～体 1/5 周。底定存 29, 32
11 土師器 高杯	口 復 18.6 高 16.6 脚盤 15.6	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部一部ケズリのち口縁～体部線なら縦方向のミガキ。ミガキは数本ずつ束になるように磨かれる。底部1單なケズリ。脚部ナデのち下端ヨコナデのち縦方向の線ならミガキ。内面杯部口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部放射射状の線ならミガキ。脚部上端無調整で、直下はケズリ。脚部上平ナデで、結構粗むずかに残る。脚部下半ヘラナデのちヨコナデのちへつ状工具による磨削。内面杯部クレター状の剥落著しい。	2.5YR6/8 橙 や中硬質 赤黒～細粒少。白粒 微量 硬質	杯部底 1/3 周。杯口 底直上～底 1/4 周 111, 116
12 土師器 高杯	口 復 18.0 高 15.0 脚盤 復 13.8	外面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち体～底部線ならミガキ。脚部1單なナデ。脚部下半ヨコナデのちミガキ。ミガキの上端は工具が表面に強く押しつけられるために明瞭。下端上面は沈線状にくぼむ。内面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ヘラナデのち口縁～底部放射射状主体の線ならミガキ。脚部上平細粒状と仕上げり目も残る。磨削は、下から見て時計回りに磨き上げている。上半ヘラナデのち直下ヨコナデ。	5YR6/4 に近い黄 や中硬質 赤黒～細粒多。白 や中硬質 赤黒～細粒と砂粒微 少。砂粒と白粒微量 硬質	底上 1～4cm 杯口部。体～底 1/3 周。脚上平 1/2 周。下 平 1/4 周 47, 50, 59, 74, 75, 100, 101, 104
13 土師器 高杯	高 復 17.4 脚盤 復 15.0	柱状器。外面杯部体～底部ケズリのちナデ。円盤状の底部に体部を積み上げて作っており、体部下端の接合面は、わずかなたとなって残存する。底部縦方向のケズリ・ドコヨコナデのち脚部ミガキ。脚部上端には、円形の工具の当たりがある。内面杯部体～底部ナデのち線ならミガキ。脚部上平磨削面磨きで、仕上げり目も残る。磨削は、下から見て時計回りに磨き上げている。上半ヘラナデのち直下ヨコナデ。	5YR6/6 橙 や中硬質 赤黒～細粒と砂粒微 少。砂粒と白粒微量 硬質	底上 1～6cm 杯口部底 1/4 周。脚上 平定存。脚下半 1/5 周 23, 25, 94, 95, 96
14 土師器 高杯	高 復 10.5 脚盤 16.1	柱状器。脚部上端の穴頭部は、丸く磨滅している上、赤褐色に変色しており、カマドの支脚等に転用された可能性がある。外面杯部ナデ。下端ヨコナデのち赤黒～微粒微量。上端および前面部のミガキを磨き出す工具の当たりが顕著。内面脚部上平ケズリ。下ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 や中硬質 砂粒～微粒多。白 や中硬質 微粒微量 硬質	底上 4cm 脚部底定存 106

第4節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）

15	高 残 6.7 土師器 高杯	外面彫部ナデのち下ヨコナデ。彫部上端には、へう状工具を圧着させたような圧痕あり。内面彫部上平→中位ナデで、上平→中位と下平との接合痕が残る。下ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐色 中～細粒 白・赤粒→細粒少、赤・透明粒→細粒数個 破瓦	底直上 脚上平完存、下平 1/6 高 80
16	高 残 8.7 土師器 高杯	外面杯部体→底直上平なケズリ。彫部ナデのち下ヨコナデ。内面杯部体→底部ヘラナデ。彫部上平ヘラナデ・ナデで、組織粗粒残。彫部下ヨコナデ。杯部内面の赤褐色(5YR6/6)の粘土を使用。	10YR7/4 に近い黄褐色 中～細粒 白・赤粒→細粒多、赤粒と透明粒と白粒→細粒数個 中～や破瓦	底上 4～6cm 杯体→底 1/3 高、脚上平 1/2 高、下平一部欠 107, 108, 109
17	高 残 7.7 土師器 高杯	外面彫部ナデの上端ケズリ・下端ヨコナデ。内面彫部上平軽いなデで、しぼり目組織・上平と下平の接合面をわずかに残す。下ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 中～細粒 白・赤粒→細粒多、白・赤粒→細粒数個 中～や破瓦	底上 4～8cm 脚上平 1/5 高、脚上平 1/3 高 12, 109, 124 高 169
18	高 残 10.3 土師器 高杯	外面彫部ナデのち下ヨコナデのち彫部縦方向のやや緩らなミガキ。内面彫部上平→中位ヘラナデ・ナデで、しぼり目残る。下ヨコナデ。	2.5YR5/2 灰白 中～細粒 赤・白・赤粒→細粒数個 中～や破瓦	底上 4～6cm 脚 1/3 高 108, 109
19	高 残 13.2 土師器 高杯	外面杯部体縦方向のケズリのち体→底部光沢のあるケズリ。彫部下ヨコナデのち彫部縦方向の光沢のあるケズリ。内面杯部体→底部ナデのち多方向の緩らなミガキ。彫部上端ケズリ、上平ナデで、しぼり目粗面。中位と横方向の丁寧なケズリで、脚部上平と下平の接合痕が残る。彫部下ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 中～細粒 白・赤・砂粒→細粒少 や破瓦	底上 4～7cm 杯体→底 1/3 高、脚上平 1/2 高、脚上平 1/4 高 24, 27
20	高 残 3.1	外面彫部下平一部ケズリ、底部丸底で、帯な光沢のあるケズリ。内面体部下平→底部ヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い橙 細粒 赤・砂粒→細粒数個 破瓦	底上 2～7cm 体部下平→底部一次 138, 140
21	土師器 造	小形。外面口縁軽いなデ・体部一部ケズリのち口縁一部ケズリに歪いミガキ。底部ナデで、平底。体部には、やや上向きの孔があり、孔径は約 7mm 程度。外面側で 2mm 程度の孔で透り、外面の孔の周囲にケズリに近いミガキで調整される。内面口縁部ナデの縦方向の緩らなミガキ。体→底部軽いなデで、組織粗粒や粘土の顕微鏡。孔の周囲には粘土のめくれがそのまま残る。体部外面には、研削具に転用されたと見られる面跡が、多数の条痕として残る。	7.5YR7/4 に近い黄褐色 中～細粒 白・砂粒→細粒多、砂粒と赤粒数個 中～や破瓦	底上 1cm 口一部、体→底完存 42
22	高 残 6.9 土師器 小形壺	縁部のような粘土。外面口縁→側部上端ヨコナデ・側部上平横方向のナデ。脚部下平ケズリ。底部ナデで、平底。内面口縁部上平ヘラナデ。脚部上平→底部ヘラナデのち彫部上平軽いなデ。脚部上平粗粒面顕著で、粘土の塊も残る。	5YR5/6 明赤褐色 中～細粒 白粒多、白粒→細粒少、赤・砂粒→細粒数個 破瓦	底上 6cm 口下平→側 1/3 高、底 2/3 高 107
23	口 残 7.6 土師器 小形壺	口 残 6.2 底 残 2.8	5YR6/6 橙 中～細粒 赤粒→細粒少、白・赤粒→細粒数個 中～や破瓦	底上 1～4cm 口一部、側 1/2 高、底 1/3 高 45, 135
24	高 残 3.5 土師器 小形壺	外面側部下平ケズリ。底部ナデで、全体が浅くくぼむ。内面側部下平→底部ヘラナデ。脚部の一部に明赤褐色(5YR5/6)の粘土あり。	10YR7/4 に近い黄褐色 中～細粒 白・赤粒→細粒少、白粒数個 破瓦	底上 3～6cm 脚上平一部欠、底完存 18, 39, 51, 54
25	高 残 3.5 土師器 小形壺	丁寧な作り。外面側部下平光沢のあるナデ。底部ナデで、浅くくぼむ。内面側部下平→底部ヘラナデ。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 中～細粒 砂粒少、白粒→細粒と赤粒数個 破瓦	底直上 脚上平→底完存 93
26	高 残 3.0 土師器 小形壺	外面側部下平丁寧なナデ。底部ケズリ。底部は丸味を持つ平底で、ケズリの部分の径は 7.4cm。内面側部下平→底部ヘラナデ。	5YR6/6 橙 中～細粒 赤粒→細粒少、白・黒、赤粒→細粒数個 中～や破瓦	底上 4～5cm 脚上平→底 1/3 高、脚上平 1/2 高、脚上平 1/2 高 120, 123, 124
27	高 残 3.9 土師器 小形壺	外面側部下端軽いなデ。底部ナデで、平底。内面側部下端→底部ナデ。	5YR6/6 橙 中～細粒 白・赤粒→細粒と白粒→細粒少、白・赤粒数個 中～や破瓦	底上 4～8cm 脚上平→底完存 35, 38, 44
28	口 残 12.3 土師器 小形壺	外面口縁部→側部上端ヨコナデのち口縁縦方向の緩らなミガキ。脚部上平横方向のナデのち縦方向の緩らなミガキ。内面口縁部ヨコナデのち縦方向の緩らなミガキ。脚部上平部分に強いナデで、指印正面と組織粗粒残る。	10YR6/4 に近い黄褐色 細粒 赤・黒・砂粒→細粒少 中～や破瓦	底上 2～6cm 口 1/3 高、脚上平 1/4 高 48, 52, 131, 141
29	高 残 3.3 土師器 小形壺	外面側部下端→底部ナデ。底部は丸味を持つ平底。内面側部下端→底部ナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 中～細粒 白・赤粒→細粒少 破瓦	底上 1cm 脚上平一部、底 3/4 高 99
30	高 残 2.1 土師器 小形壺	外面側部下端ナデのち一部ケズリ。底部ナデで、平底。内面側部下端→底部ヘラナデで、中央は指で押されたようにくぼむ。	2.5YR6/8 橙 中～細粒 白・赤粒→細粒少 中～や破瓦	底上 6cm 脚上平→底完存 28
31	高 残 2.5 土師器 小形壺	外面側部下平ヘラナデのちナデで、粘土の緩らなミガキ。底部は外面ケズリ、中央ナデ。突出する平底で、中央はくぼむ。内面側部下平→底部ヘラナデ。	2.5Y/2 暗灰黄 細粒 白粒と赤粒→細粒と白粒→細粒数個 破瓦	底上 7cm 脚上平→底完存 1
32	高 残 1.7 土師器 小形壺	外面側部下端→底部丁寧なナデ。底部は小さく、浅くくぼむ。内面底部やや軽いなデ。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 中～細粒 砂粒少、白・赤粒→細粒数個 破瓦	脚上平→底完存 1
33	長 残 2.6 土師器 棒状灰製品	径約 4～5mm の断面円形または不整形円形で、端部近くは径約 6mm まで一度太くなってから末端に至り、先端が尖る。両側縁に対面は見られない。有機質は見られない。	10Y4/3 灰 滑石	底上 6cm 完形 40
34	長 1.76 土師器 有孔円形 厚 0.41 重 1.82	35, 36 より厚く、入念に研削される。表裏面とも方向を変えて数回ずつ人工的に研削している。側面部を残す部分もあり。側面は穿孔と同一方向に人工的に研削される。孔とも表側からの穿孔と見られる。裏側の孔周囲には浅く研削が見られ、穿孔孔の裏側の条痕も浅いが、範囲は広い。孔直径 1.68～1.70mm、厚 1.50～1.60mm。	10Y5/2 オリーブ灰 滑石	底直上 成形 2
35	長 2.13 土師器 有孔円形 厚 1.74 厚 0.30 重 1.88	表裏面とも一方の研削。特に表側に側面部を多く残すが、表側下縁は研削により側面部を平削にしようとしている。側面は穿孔と同方向の研削。孔とも表側からの穿孔と見られるが、表側の孔周囲には浅く研削が見られ、穿孔孔の裏側の条痕も浅いが、範囲は広い。孔直径 1.41～1.50mm、厚 1.37～1.46mm。	10Y5/2 オリーブ灰 滑石	底直上 成形 2

第8章 権現山遺跡 SG5 区

36 石製模造品 有孔円板	長 2.56 幅 2.12 厚 0.33 重 2.85	表裏面とも一方向に研磨されるが、割離面を残す部分も多い。側面は穿孔と同一方向に研磨される。二孔とも穿孔は表側からで、ともに表側が右に傾く。裏側には、孔の周囲に穿孔時の剝離が残る。孔径表側 1.45～1.50mm、裏側 1.39～1.46mm。	10Y3/1 オリーブ黒 緻密 滑石	底上 6cm 完形 7
37 石製模造品 刺形	長 5.42 幅 2.17 厚 0.40 重 6.80	表裏面とも平坦で、高い研磨のため条線状の擦痕が残る。上半はやや丸味を持つ三角形で、側面は穿孔と同一方向に平坦に研磨される。中位～下半の三角形部分の側面は裏面側からやや斜位に研磨され、鋭角が作出される。孔は裏面側からの穿孔と見られる。孔径表側 1.74mm、裏側 1.58mm。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 滑石	底上 4cm 完形 115
38 石製模造品 刺形	長 4.32 幅 1.44 厚 0.44 重 4.7	表裏面とも平坦で、それぞれ大きく2面に分けて鋭く研磨されており、条線状の擦痕が残る。上半は台形、中位～下半は三角形に丸味を持つように整形され、側面は斜位の研磨によりほぼ平坦面となる。孔は裏面側からの穿孔と見られ、表側は周囲に穿孔に伴う剝離が残る。孔径表側 1.76mm、裏側 1.66mm。	7.5Y6/1 灰 緻密 絹雲母片岩	中央部底上 4cm 完形 62
39 石製模造品 刺形	長 4.33 幅 2.11 厚 0.43 重 6.3	表裏面とも平坦で、それぞれ一方向に研磨され、一部に剝離面を残す。上端は丸味を持つ直線で、側面は上半～下端まで段差なく研磨され、全体は木彫りとなる。側面は穿孔と同一方向ないしやや斜位の研磨で、上端～右端はほぼ平坦に、それ以外は表裏面切りが面取りされる。穿孔は表裏側からで、裏面側の孔周囲には剝離が残る。孔径表側 1.45mm、裏側 1.38mm。	7.5Y5/2 灰オリーブ 緻密 滑石片岩	中央部底上 5cm 完形 61
40 石製模造品 刺形	長 4.02 幅 2.01 厚 0.40 重 5.3	表裏面とも平坦で、一部に剝離面を残してほぼ一方向に数回にわたって研磨される。上半は整った台形で、側面は穿孔と同一方向に平坦に研磨される。中位～下半は丸味を持つ三角形で、側面は面取りするような研磨もあるため、平坦な部分や丸味を持つ部分、鋭角が形成される部分などあり、表裏側からの穿孔と見られ、孔径表側 1.83mm、裏側 1.52mm。	7.5Y5/2 灰オリーブ 緻密 滑石片岩	底上 3cm 完形 58

第5節 古墳時代の性格不明遺構

SG5 区 SX-129 (第338図)

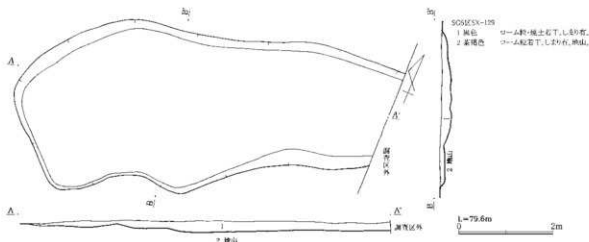
古墳時代と推定される不整形掘込遺構である。

【位置】SG5 区南部の台地平坦面で、東側の谷部に近い 8-18 グリッドにある。東側は調査区外に続く。周囲に分布する溝・土坑・井戸はいずれも時期不明の遺構である。古墳時代と平安時代の SK-120・121 が 11～15m 北方にある。重複する遺構はない。

【規模と形状】不整形の浅い大きな遺構で、周囲がゆるやかに立ち上がる。自然地形かとも考えられる。遺構確認面・遺構底面ともに東西方向には傾斜を持たず、確認面のレベルは遺構南側よりも遺構北側の方が 2～4cm ほど低い。規模は長径 8.26m 以上、短径 3.64m、遺構南側上端から計測した深さは 13～28cm。

【覆土】黒色土の単層で、焼土も含む。白色テフラ粒などは見られない。

【出土遺物】遺物は少ない。土師器は小破片ばかりで、図示できる遺物はない。壺・甕類の胴部片を主として杯や小形壺の体部片があり、時期は特定しにくい。古墳中期中葉～後葉ころの可能性がある。土師器小破片の他に、縄文中～後期土器(加曾利 E 式と加曾利 B～曾谷式:『東谷・中島地区遺跡群 10』第 39～40 図 234・258)、縄文時代石畿(前掲書第 45 図 8)、弥生中期土器(前掲書第 42 図 16)が出土した。



第338図 権現山遺跡 SG5 区 SX-129 遺構

第6節 古墳時代の溝

SG5区SD-41 (第339・340図、写真図版43・185) (SG10区SD-41と連続する溝)

【位置】SG5区中央を南西から北東方向に延びる。13～15-16、15-16・17、16-17グリッドに位置する。南西は調査区外へ、北東はSG10区SD-41・42へ続く。SG5区SD-41とSG10区SD-41・42をつなげた全体を第339図左端に示した。

古墳中期後葉のSI-11と中期末葉のSD-42を切る。土層や遺物からみてSI-11→SD-42→SD-41の順序になる。古墳中期のSD-42に合流して掘り直すように古墳後期のSD-41を掘る。合流部では古いSD-42のカーブがSD-41底面に現れている。かつてSD-42が北東へカーブしていた跡地にかぶさるように、SD-41を新たに掘ったので、下部のSD-42埋土を掘り返してその形状が再び現れたものと思われる。古墳時代ⅡのSD-101と重複するが新旧不明。

古墳中期居館の方形柵列SA-151の柱穴(P20・P21・P43)との重複関係を示す情報はないが、古墳後期のSD-41が中期のSA-151を切るものと推定している。北側に隣接するSG10区に続く溝(SG10区SD-41・42)も、SG5区居館の北側区画溝を切っている。SG10区SD-41・42は、この他に古墳中期の竪穴建物・溝・土坑を切り、中世の溝に切られている。

【規模と形状】南西から北東に直線的に続き、中軸線はN-23°E。長さはSG5区で54.3m、SG10区まで含めると101.3mである。断面は浅い皿状ないしは逆台形で、一部は崩れた葉研状になる。底面は平坦な部分が多い。幅は0.96～1.80m、底面の幅は0.44～1.57m、深さは40～55cmである。

【覆土】4～6層に分けられ、レンズ状の自然堆積である。最上層には微量ではあるが白色ハミスを含み、下層に行くほどロームの混入が多くなる。

【遺物出土状況】3・5・12はSD-42およびSI-11との重複地点で出土した(遺物注記番号が1～33)。4・14はこの重複部よりも南側で出土した(遺物注記番号が1B～23B)。2の杯はSG5区内の北端部で出土した(遺物注記番号が100番台)。遺構重複地点以外で出土した遺物の場合でも、他時代の混入品を含むとみられる。遺物出土位置をグリッド名で記録して取り上げた遺物は、規則では「Xグリッド座標-Yグリッド座標」として記録すべきものを「Yグリッド座標-Xグリッド座標」と注記している(例:注記「17.5-15.5」の遺物3は、実際には「15.5-17.5」グリッドから出土した)。

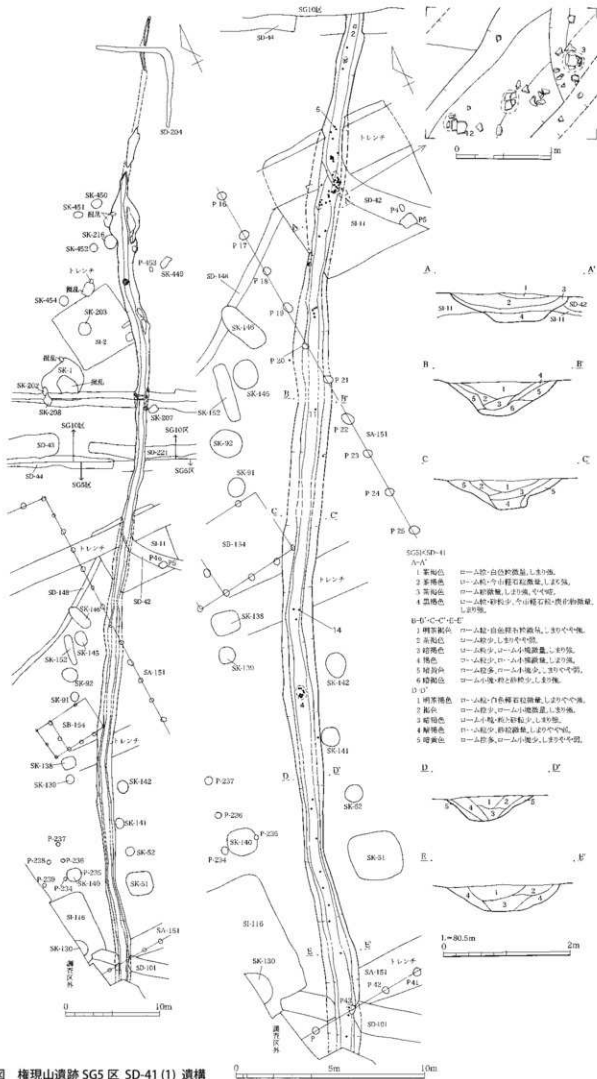
【出土遺物】古墳後期後葉の土師器が中心である。図化以外に杯・高杯・小形土器・壺類があり、小形土器は少ない。2は内面炭素吸着。長胴の壺(3)はあまり見ない器種である。やや類似した壺はSG5区SI-21に2点と、本遺跡西部(北関東自動車道路調査A区SI-018,065,098,116a:谷中・大島編2001)に後期中葉の例がある。片口付鉢(4)はSG10区SI-2に類例がある。

口径10.8cmの須恵器杯身(14)は古墳終末期中葉の遺物で、溝の継続年代がやや長いことを示す上層遺物と考えられる。小形土器(7～9)は、SD-42へ混入した小形土器と同じく、SK-98と関係がある混入品かもしれない。

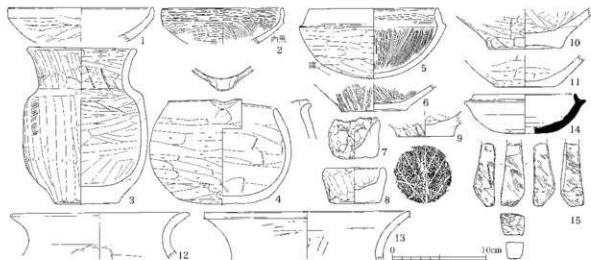
古い時代の土器が混じっているのは、SI-11やSD-42からの混入であろう。高杯はほぼ全てSI-11などからの混入と考えられる。図示以外の土師器は合計1,155片・11,460gで、内訳は杯415片・3,307g、高杯170片・2,309g、壺類551片・5,411g、轆3片・106g、小形土器16片・327g。

第195表 権現山遺跡SG5区SD-41出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 黄土・焼成 (または素焼)	出土状況 現在位置 注記
1 土師器 杯	口径 15.5 高 残 3.6	口径部は直立する。外面口径部ヨコナデのち体部光沢のあるナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。	7.5YR7/6 赭 緻密白・透明機粒少 やや破損	口一休1/5 周



第339図 権現山遺跡SG5区SD-41(1)遺構



第340図 権現山遺跡SG5区SD-41(2)遺物

2 土師器 杯	口 径 12.8 高 残 3.8	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体部横方向のミガキ。内面体部放射状のち口縁部横方向の、ともに密なミガキ。内面口縁～体部黒色地肌。	7.5YR6/6 糖 白・透明細粒少、黒粗粒 微量 破瓦	底上 7cm 口～体 1/6 周 104
3 土師器 甕	口 径 11.6 高 16.5 底 7.1 最大 13.2	小形・異形。外面口縁～側部縦方向の丁寧なケズリのち側部横方向のナデ。胴は明瞭に張る。胴部一部にクローラー痕あり。底部はナデで、厚手な突出する平底。内面口縁部横方向の丁寧なケズリ。胴～底部迄のちあるナデ。胴部上半はやや調整が成い。口縁部には、胴部調整工具によってつづけたと見られるへう痕がある。	5YR6/6 糖 やや粗い、砂粗～細粒多、砂粗 と白・赤粗～細粒微量 破瓦	15.5-17.5 グリッド 口～胴上半完存、胴下半 ～底 3/4 周 2、SD-42 17.5-15.5 (15.5-17.5)
4 土師器 鉢	口 径 11.4 高 10.8 底 9.5 最大 14.8	片口、球胴。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。体部下平でケズリの方向が変化する。底部は丸底で、体部との境は緩やかな境となる。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。口縁部は、ヨコナデのち作直される。外面片口部下には口部のナデがあり、体部ケズリに切られる。内面体部底面磨きのためか黒褐色を呈する。	10YR7/6 明黄褐色 やや細密 白・砂粗粒少、赤粗 粒少、砂粗～細粒微量 破瓦	底上 38cm ほぼ完形 11B
5 土師器 鉢	口 径 13.4 高 7.4 最大 15.4	丁寧なケズリ。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデで、無調整部分あり。底部丁寧なケズリで、丸底。内面口縁部～体部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち口縁部横方向、体～底部放射状のミガキ。内面全体・外面口縁～体部底面仕上げ。口縁部分の磨滅が著しい。	10YR3/1 黒濁 やや細密 白・砂粗粒少、赤粗 粒少、砂粗～細粒微量 やや破瓦	底上 2cm ほぼ完形 1
6 土師器 鉢	高 残 2.9 底 6.8 最大 8.4	精良な胎土で、丁寧な作り。外面体部下丁寧なナデのち縦方向の細かなミガキ。底部ケズリ外のちミガキで、突出する平底であり、全体が浅くくばむ。内面体部下～底部ナデのち密なミガキ。体部は斜め方向、底部は体部から緩くミガキのため、多方向となる。	5YR5/6 明黄褐色 細密 白・透明細粒少、赤粗粒 微量 やや破瓦	体部下～底 3/4 周 104
7 土師器 小形土師 器	口 径 4.8 高 4.3 底 4.6 最大 5.3	鉢形。極めて深い作りであり、全体が深いナデで作られる。胴部上面磨き、いびつな平底。	7.5YR6/6 糖 やや細密 白・黒・赤粗粒微量 破瓦	完形
8 土師器 小形土師 器	口 径 6.8 高 3.8 底 5.4	鉢形。外面口縁部～体部ナデ、底部ナデで、厚い平底。内面口縁～底部ヘラナデ。全体に調整は成い否、内面の方がより反薄。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや細密 白濁～微粒少、赤粗 粒微量 やや破瓦	口～体 1/3 周、底完存
9 土師器 小形土師 器	高 残 2.7 底 6.0	外面体部下平たいナデ。底部突出する平底で、木葉前。木葉以外の細い棒状の土溜り本あり。内面体部下～底部深いヘラナデ。内面黒褐色。	7.5YR7/6 糖 細密 白・赤粗粒微量 やや破瓦	体部下～底完存
10 土師器 甕	高 残 4.2 底 7.4 最大 14.4	外面胴部下～底部ケズリ。底部は突出し、底部全体がくぼむもので、丁寧に磨きされている。内面胴部下～底部ヘラナデ。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 やや細密 白・黒・灰色粗～細 粒多、白微粒 破瓦	S4116の東方 胴下部～底完存 16.5-14
11 土師器 甕	高 残 3.4 底 6.4	外面胴部下～底部ケズリ。底部平底。内面胴部下～底部丁寧なヘラナデ。	7.5YR7/6 糖 粗い 白・黒・赤・砂粗粒多、 白・黒・赤・砂粗少 破瓦	体部下～底一次 部B 両側
12 土師器 甕	口 径 19.0 高 残 5.0	外面胴部上端ヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデ。	7.5YR7/6 糖 やや細密 白・透明、砂粗粒少、 白濁～粗粒微量 破瓦	底上 51cm 口 1/6 周 27
13 土師器 甕	口 径 21.8 高 残 5.2	口縁部端は粘土付付により垂直な平坦面となる。外面口縁部縦方向のヘラナデのちヨコナデ。内面口縁部横方向のヘラナデのちヨコナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや細密 白濁～微粒少、白・ 砂粗粒微量 やや破瓦	口 1/4 周
14 土師器 甕	口 径 10.8 高 4.1 最大 12.8	口縁部立ち上がりは短く内傾する。底部は丸い否、外寄りはやや高気味となる。胴部中央ナデのち緩くかたに傾斜ケズリ。内面口縁部ナデのち底部多方向ナデ。底部のナデはごく軽いものであり、ロクロ目を消せるものではない。	5Y5/1 灰 粗密 白濁～細粒と黒粗～微粒 微量 破瓦	底上 30cm 口～底 1/2 周 8B
15 石器 砥石	長 残 6.7 幅 2.5 厚 2.3 最大 残 44.9	小形、四角状。四面ともよく研磨されており、使用に伴うと見られる斜位の磨面が明瞭に残る。下端には製作時の砥石痕や筋面がわずかに残る。上面は右側の欠損はガシリと見られる。欠損面も含め、表面には黄褐色に黒色物質が付着する。	10YR6/4 に近い黄褐色 破瓦	一部欠

SG5区SD-42 (第341図、写真図版43・174・185) (SG10区SD-42と連続する溝)

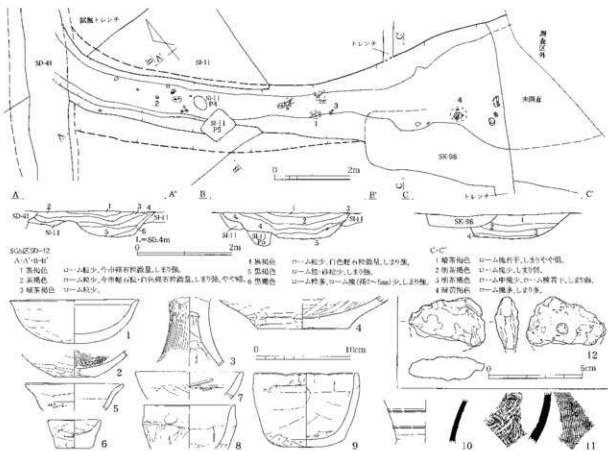
[位置]SG5区中央北寄りの15-17・18,16-17グリッド。東側は低地に面する。古墳中期後葉のSI-11を切り、古墳後期のSD-41・SK-98に切られる。古墳中期の溝SD-42が西端で北へカーブした付近より北側が古墳後期のSD-41に切れ、SD-42の跡を掘り直した溝がSD-41と考えられる。SD-41とSD-42の合流点付近は上部を試掘トレンチで削られている。

[規模と形状]北西から南東方向にはほぼ直線的に延びる溝で、中軸線はN-37°-W。古墳後期のSD-41によって西側は合流するように掘り返しが行われる。古墳中期のSD-42もここから北側に延びていたと考えられる。東は低地に向かって大きく開く。長さは確認できる部分で11.20mである。断面形は崩れた浅い逆台形で、底面はほぼ平坦である。西部の南側法面に段を認つ。幅は1.26～3.76m、底面の幅は0.56～3.35m、深さは52～55cmである。

[覆土]レンズ状の自然堆積である。2層と3層に白色軽石粒を含むが、古墳時代のテフラかどうかは不明である。縄文草創期の今市軽石粒(橙色)も二次流入しているので、同じく草創期の七本椀軽石粒(白色)の可能性も考えられる。

[遺物出土状況]SI-11やSK-98から混入した遺物を含む可能性がある。出土位置が図面に記録されている遺物は、SI-11重複部付近、調査区東端部付近、両者の中間付近にみられる。出土位置をグリッド名で記録して取り上げた遺物は、規則では「Xグリッド座標-Yグリッド座標」として記録すべきものを「Yグリッド座標-Xグリッド座標」と注記している(例:注記「17.5-15.5」の遺物1は、実際には「15.5-17.5」グリッドから出土した。遺物5～10も同様である)。

[出土遺物]土師器は壺類が主体で、杯・鉢・高杯などが少量混じる。口縁部が開く椀形杯(1)や高杯(3)などは古墳中期後葉のSI-11から混入した可能性がある。図示した以外の土師器は壺類の破片が多い。長



第341図 権現山遺跡SG5区SD-42 遺構・遺物

胴裏はなく、球胴状の大形鉢がほとんどである。丸底の大形鉢と見られる破片もある。図示以外の土師器は合計 892 片・8.104g で、内訳は杯 157 片・1.084g、高杯 92 片・664g、鉢 52 片・778g、壺類 586 片・5,422g、甗 5 片・156g。

10 は突線区画を持つ陶質土器壺で、SG5 区 SI-116 の須恵器壺底部片に色調や胎土が類似している。関連資料としては、古墳中期の SI-22 などに格子印き調整の陶質土器がある。周辺地域では、上三川町観山遺跡 KT-121 の突線を持つ小形平底壺（大川他 1995）が、加耶土器と考えられている（定森 1999,p.22）。SG5 区 SI-11 の壺（23）にも突線がある。鉄関連遺物では、小形不定形の鍛冶滓が 1 点見られる（12）。この溝から北に連続する SG10 区 SD-41・42 に木形鍛冶滓が 3 点ある。また SG5 区では SI-100 で高杯転用羽口が出土している。

SI-11 や SK-98 から混入した遺物を含む可能性がある。粗製の鉢と小形土器（5～9）は、図示した以外の破片もすべて SK-98 から混入したと考えられる。杯には古墳後期中～後葉の模倣杯をわずかに含み、これも SK-98 などの周辺遺構から混入したと考えられる。

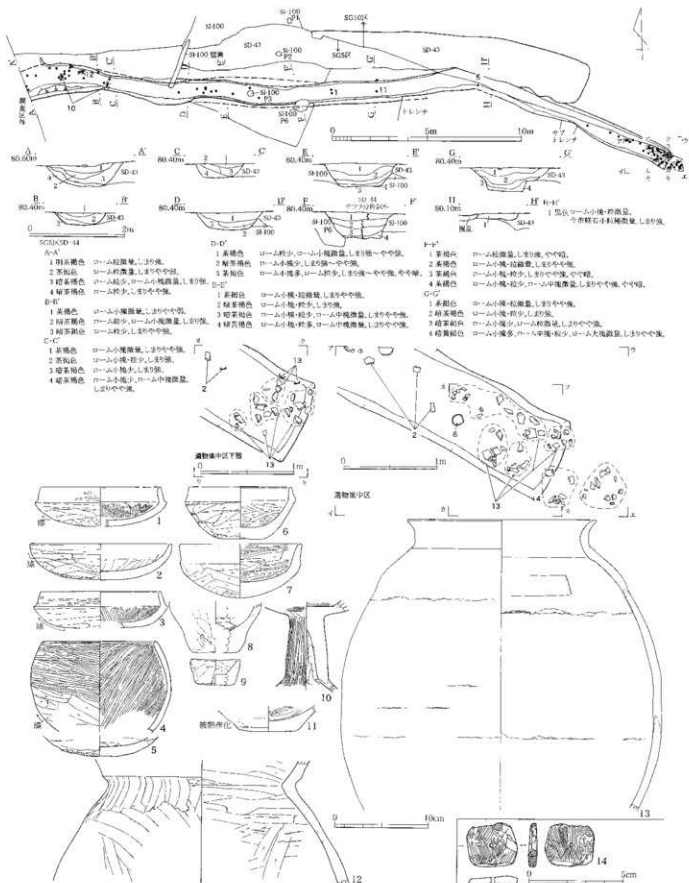
第 196 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-42 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ h×φ	特 徴	色調 胎土・釉薬 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.6 高 4.6	内口縁部、内面主体に表面の剥離・着脱が著しく、調整不明な部分が多い。外口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリで、丸底。内面ヨコナデおよびナデと思われるが、不詳。ミガサの可能性あり。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 白・赤・砂粒稀少 砂質微塵 やや硬質	底上 1cm、15.5-17.5 グリッド 口～底 1/4 間、底付近 7B、17.5-15.5
2 土師器 杯	高 残 2.9 底 復 4.2	外面体部ヘラナデ、底部ナデで、くぼむ。内面体～底部多方向の密なミガサキ。	5YR6/6 橙 暗赤 赤・砂粒微塵 やや軟質	底上 体～底 1/3 間 4
3 土師器 高杯	高 残 7.3	外面胴部上半部方向の密なミガサキ。内面胴部上端ナデ、上半ヘラナデで、縦線彫刻。上半の丸底部は細かな丸底の遺構である上、磨滅しているように見えることから、人為的に打ち欠かれて転用された可能性がある。	7.5YR7/4 に近い黄橙 やや暗褐色 白・赤・砂粒稀少 赤・砂粒微塵 やや硬質	底直上 胴上半部存 8B
4 土師器 甗	高 残 3.5 底 9.5	大形、球胴。外面胴部下端ケズリのちナデ、底部ケズリで、突出する平底。内面胴部ナデ～底部ヘラナデのちナデ。内面は丁寧に調整される。	10YR7/3 に近い黄橙 やや暗褐色 白・黒・赤・砂粒稀少 白・砂粒稀少、赤褐色と砂質微塵 やや軟質	東部底直上 胴下端～底 3/4 間 3B
5 土師器 小形土器	口 10.4 高 残 2.9	外面体部斜リナデで、粘土の艶が顕著。内外口縁部ヨコナデ、内面体部ナデ。内口縁部の輪郭の可能性あり。古墳後～終末期の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 白・透明細粒少 やや硬質	15.5-17.5 グリッド 口～体 1/6 間 17.5-15.5
6 土師器 小形土器	口 復 5.6 高 3.0 底 4.0	鉢形、小形。内口縁～底部ナデ。口縁～体部粘土の艶が顕著。底部は厚みを増やして2層のように見える。外口縁部および内面全体要素残のためか黒褐色となる。古墳後～終末期の遺物が混入。	7.5YR6/6 橙 暗赤 白・砂粒稀少、赤粒と白粒微塵 やや硬質	15.5-17.5 グリッド 口～体 3/3 間、底 2/3 間 17.5-15.5
7 土師器 船形鉢	口 復 11.4 高 残 2.6	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。内口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデ。内面置の当たりが明瞭に残る。古墳後～終末期の遺物が混入。	10YR7/3 に近い黄橙 やや暗褐色 赤褐色と白粒と白・黒粒微塵 やや硬質	15.5-17.5 グリッド、 15.6-17.5 グリッド 口～体 1/4 間 17.5-15.5、17.5-15.6
8 土師器 船形鉢	口 復 9.4 高 残 4.6 最大 復 9.9	鉢形、外面体部斜リナデで、粘土の艶が顕著に残る。内外口縁部ヨコナデのち内面体部ヘラナデ。古墳後～終末期の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや暗褐色 砂粒～細粒と赤粒少 微塵 やや軟質	15.5-17.5 グリッド 口～体 1/4 間 17.5-15.5
9 土師器 船形鉢	口 11.0 高 7.9 底 7.5 最大 11.2	鉢形。口縁部は体部から屈曲なく立ち上り、ヨコナデは薄さでない。このため、特に外面口縁部および上部に粘土の艶や赤みが残る。外口縁部～体部斜リナデ、底部ケズリで、丸底であり、体部の土はややざんじりとなる。内面口縁～底部丁寧なヘラナデ。古墳後～終末期の遺物が混入。	7.5YR7/6 橙 やや暗褐色 白・砂粒～細粒少 白粒微塵 やや硬質	15.5-17.5 グリッド 口～体 1/4 間、底付近 17.5-15.5
10 陶質土器 壺	高 残 4.7	胴部内外面口ヨコナデで、外面に2条の縦い突線あり。上方のものは中央をくぼませて2層のように見える。頸部径は6.2cm、内面に自然ゆるわがかりに付着。外面黒褐色。	5G7/4 1 灰 黒オリーブ灰 暗赤 白粒微塵 硬質	15.5-17.5 グリッド 1/2 間 17.5-15.5
11 遺物類 遺	高 残 5.6	外面胴部平行タタキのちカキム。内面青褐色文。	7.5Y/5 1 灰 暗赤 白粒微塵 硬質	胴一部
12 模形鍛冶滓 (極小)	長 4.1 幅 2.6 厚 1.3 重 14.5	下半部胴部が断面となった厚さ 1cm 程度の扁平な極小の輪郭形鍛冶滓破片。胴部残りの破片で上面は中央部がやや小さい。浅い皿状の下面には砂土の面跡あり。鍛冶滓産物構成 No. 28。	底直上 3 メタル 度 なし	15.5-17.5 グリッド 1/2 間 15.5-17.5、080513

SG5 区 SD-43 → 古墳時代居館（本章第1節）を参照

SG5 区 SD-44（第 342 図、写真図版 43・44・185）（SG10 区 SD-44 と連続する溝）

【位置】SG5 区北部と SG10 区南端部にまたがって、16・16・17 グリッドで調査を行った。東端部は調査時



第 342 図 権現山遺跡 SG5 区 SD-44 遺構・遺物

に竪穴建物と判断して「SG5区SI-102」の名称を与えたが、SG10区の調査によりSD-44の一部であることが判明して、SD-44に統合された。古墳中期の遺構SI-100と、同じく中期の居館北側区画溝SD-43を切る。**【規模と形状】**ほぼ東西に直線的に続き、SG10区との境界で南東に折れて、東側は角端状に終わる。溝の中軸線は東側でN-58°-Wである。長さはSG5区で32.9m、SG10区を含めた全体で34.0mである。断面は逆台形で、底面は平坦な部分が多い。幅は0.96～1.70m、底面の幅は0.50～1.00m、深さは27～57cmである。

【覆土】レンズ状の自然堆積である。SD-44の覆土(断面図F-F')と、先行する古墳中期のSI-100とSD-43の埋土(SI-100の第329図C-C')を採取して、テフラ検出分析を実施した(本章第2節)。その結果、SD-44の各層で確認された白色軽石が、古墳後期初頭の榛名二ツ岳沙川テフラ(Hr-FA)である可能性が高い。**【遺物出土状況】**SD-44の遺物の注記には「SD-44」と「SI-102」があり、SG5区内で「SD-44」は西部、「SI-102」はSD-44の東部を示す。「SI-102」と注記されている東端部出土遺物が多い。G-G'ラインの東1.5m付近よりも東側はSG5区調査時の遺構確認面が一段低く、溝の深さは0.1～0.2m程度まで浅くなる。この部分では、遺構確認面より上部や、溝の東外側でも遺物が出土した(集中区拡大図の遺物4・13など)。

【出土遺物】溝としては遺物が多い。古墳後期前葉～中葉の遺物が主体である。杯類では身模倣形(1・3)と半球形(2)の漆仕上げ杯が主体である。4は丁寧に磨く鉢。粗製の杯(6・7)および小形土器(8・9)を少し含む。壺養類は破片が多いが、接合・復原できるものは少ない(13)。図化品以外に、身模倣形杯と半球形杯が各2個体程度と、大形の壺養類4～5個体分がある。SD-43から混入したと見られる古墳中期後葉頃の土師器(10・12)や石製模造品(14)が混じる。石製模造品は、SG5区ではSI-8などにある。12は外面が二重口縁状。中期の椀形杯も多く混入している。図示以外の土師器は合計94片・9.220gで、内訳は杯218片・1.105g、高杯70片・733g、鉢65片・840g、壺養類586片・6.530g、小形土器1片・12g。

第197表 梅原山遺跡SG5区SD-44出土遺物

番号 種類	大きさ mm・g	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状況 現存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 12.8 高 残 4.2 最大 径 14.3	外面口縁部ヨコナデのち縁らな横方向のミガキ。底部ケズリのち体部ナデ。体部には組織残る。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキ。内外面口縁～底部の残存部全体と外面中位以上が漆仕上げ。	7.5YR5/1 黒肌 やや暗黒 白・赤褐～組織残量 微量	底上18～29cm 口一部、体～底1/4埋 30、33B
2 土師器 杯	口 径 15.0 高 3.8	平縁状。外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部ヘナデ。放射状に施されるヘラナデあり。内外面全体と外面上半部仕上げ。	2.5Y5/1 黄灰 微黄 白・透明細～組織少 やや暗	底直上～底上7cm 口～底1/2埋 SI102 No.8、9、11、 26、31
3 土師器 杯	口 径 12.8 高 残 3.8	外面口縁部ヨコナデのち縁らな横方向のミガキ。体部ナデで、組織痕や調整部分あり。内面口縁～体部ヨコナデのち体部放射状のミガキ。外面部以外と内面の全体が漆仕上げ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白微粉多。白・赤褐 ～組織少。赤褐色 微量	口～体1/3埋 SI102
4 土師器 鉢	口 径 11.9 高 残 9.6 最大 径 14.7	縁面を有り。外面体部(部分)ケズリのち口縁～体部密なミガキ。内面口縁部～体部ヨコナデおよび縁方向のナデのち斜位の密なミガキ。外面の体部以上と内面の残存部全体が漆仕上げ。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや暗黒 白～赤褐～組織微量 微量	底上10cmと内面底上31cm 口～体2/3埋 SI102 No.7
5 土師器 鉢か	高 残 2.2 径 8.0	赤みあり。外面体部削いナデで、組織痕が残る。底部ケズりで丸底だが、ケズリの縁辺である体部との境はわずかに稜をなす。内面体～底部ヘナデ。	2.5YR6/8 橙 やや暗い。赤褐～組織多。白微粉 粒量多。やや暗	底上36cm 体下半～底底存 34
6 土師器 煎製杯	口 径 10.8 高 残 5.5 最大 径 11.6	鉢形で、杯身煎製杯のように口縁部内縮する。調整は黄いが、赤みは少ない。外面口縁部ヨコナデ。体～底部ケズリで、体部上半無調整部分あり。体部に組織痕面影に残る。底部は丸底を持つ平底で、中央が小さくくぼむ。内面口縁～体部上端ヨコナデ。体～底部ケズリのち縁らで多方向の太いミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや暗黒 白・透明微少。赤 褐～組織と白微～組織微量 微量	底上21cm 口一部欠 SI102 No.1
7 土師器 煎製杯	口 径 13.0 高 5.7	丸底。椀形。外面口縁部ヨコナデで、直下に無調整部分あり。体～底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち口縁～底部ヘナデのち口縁～底部縁らなミガキ。口縁～体部には、ミガキが僅く僅く残る。	5YR5/8 赤褐色 やや暗黒 白・赤褐～微粉少。 白・赤褐～組織微量 やや暗	口1/8埋。体1/4埋。 SI102
8 土師器 小形土器	高 残 5.3 径 4.8	鉢形だろう。外面体～底部ナデ。体部には粘土の微塵。底部削い平底。内面体～底部ヘナデのちわずかにミガキ。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや暗い。白・赤微粉少。黒微 と赤微粉微量 微量	体～底1/3埋 SI102
9 土師器 小形土器	口 径 5.2 高 2.7 径 4.0	小形。鉢形。内外面ともナデで調整される。外面口縁～体部粘土の微塵。平底。	7.5YR6/6 橙 やや暗黒。赤微粉少。黒微粉微 量。やや暗	口1/6埋。底1/3埋

第8章 権現山遺跡 SG5 区

10 土師器 高杯	高 9.6 土厚	内外面底部部分のちぎれ方向のミガキ。胴部縦断方向の密なミガキで、さらに胴部下平から下へと細いミガキが施される。細いミガキは僅く断面に土具を押し当てるためか、円形ないし直線状の土具痕が明瞭に見える。内外面底部部分のちぎれ方向のミガキ、胴部縦断方向で、わずかにしぼり目が見える。胴部上平のチナガのちぎれ方。古墳中層の遺物が混入。	2.5YR6/8 橙 や砂肌、赤肌～細粒多、白 や砂肌、赤肌～細粒多 や砂肌	底上11～55cm 杯底一部、脚上平完存 8, 20
11 土師器 土甕	高 2.8 底 6.8	内外面底部2層6本/1cmのハケのちぎれ。底部チナ。底部は今や突出する平底で、丸味を持つ。径3m、深さ1～2m程の円形のぼみ数が数ヶ所あり、縁の結節部分などの圧痕が、内面底部6本/1cmのハケのちぎれ。外面底部焼熱のため割落部分多し。	2.5YR6/6 橙 や砂肌、白・砂肌多、白 や砂肌、赤肌～細粒多 や砂肌	底上46cm 脚上平～底完存 32
12 土師器 甕	高 13.0	大形。内外面下半斜打のチナで内外面～胴部上縦断方向のチナの口縁部上平チナ。内面口縁部下平縦断方向のチナ、胴部上平横断方向のチナの裏から縦断方向のチナ。古墳中層の遺物が混入。	10YR7/3 に近い黄橙 や砂肌、白肌～細粒と灰色礫 と砂肌少量 や砂肌	底上6～28cm 口下平～脚上平1/4現 16, 63B, SD-43・44
13 土師器 甕	口 20.0 高 30.8 最大 34.0	大形。内外面ともほぼ全面で表面が剥落しており、調整不良。胴部上平と下平に粘土積み上げ体による接合面があり、内外面に粘土の層が目が見える。[注記] SI-102 No.2, 3, 4, 5, 24, 27, 28, 29, 30, 34, 36, 37	5YR5/8 明赤 や砂肌、白・赤 や砂肌、白・赤 や砂肌	底上10～40cm 口一部欠。胴2/3現 注記は左欄
14 石製焼造品 有孔円板	径 2.30 厚 2.55 縦 0.44 横 4.48	表裏とも一部に切欠加工時の剥離面を残し、主に縦および斜め方向に広く研削される。外周寄りの一部には面取されるような研削が見られる。側面は各辺と平行ないし斜め方向に研削されるが、切欠時の剥離面をそのまま残す部分もある。表裏からの穿孔と見られ、穿孔の孔間はほぼ等間隔が生じている。孔径は表側1.90mm、裏側1.82mmである。古墳中層の遺物が混入。	10B2/1 青黒 磨面 雨石や岩	完形

SG5 区 SD-101 (第343・344 図、写真図版 44・186)

【位置】SG5 区中央の台地平坦面で、13-16・17、14-16・17 グリッド所在。西側は調査区外へ延びる。古墳後期の SI-20・21 よりも東側は黒色土のため、低地まで延びるかは不明である。試掘トレンチで削られる部分がある。

【重複関係】古墳中期中～後葉の SD-227 を、古墳中期後葉以降の SD-101 が合流するように切り、東側部分では SD-101 が SD-227 を掘り直すように切っている (断面 C-C')。古墳中期の SA-151、後期の SD-41、時期不明の SD-108 と重複するが、新旧関係は不明。試掘トレンチで削られる部分がある。

古墳中期の SK-130・SI-116 を切り、古墳後期の SI-20・21 に切られる。SI-116 の中層以下を切って SK-130 を掘り、その埋没後に SI-116 の上層が堆積する (第332 図の調査区西壁土層断面)。そして、SI-116 の埋土上部を覆った B 層を SD-101 が切る (断面 A-A')。この B 層には、12 世紀初頭に降下した As-B テフラが輸出されている (本章第2 節)。SD-101 と B 層の前後関係が確実で、またテフラの混入がなければ、SD-101 が 12 世紀以降の溝になる可能性も残されている。ただしその場合には、古墳後期の SI-20・21 が SD-101 を切るという調査所見と矛盾する点に問題がある。古墳後期の SI-20・21 を SD-101 が切ると解釈する (SI-20・21 の断面図中に SD-101 を読み取る) ことも可能かもしれないが、現地所見を尊重して SD-101 を古墳時代の溝と判断した。古墳時代の溝に後世 (12 世紀以後?) の遺構が重複していたと考える余地も残る。

【規模と形状】南側に彎曲しながら東西に延びる U 字状の溝である。西側の北西方向に続く部分の中軸線は N-50°-W、東側の北東方向に続く部分の中軸線は N-30°-E。確認できる部分の長さは 36.2m である。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。幅は 1.06～1.76m、底面の幅は 0.48～1.28m、深さは 43～53cm である。

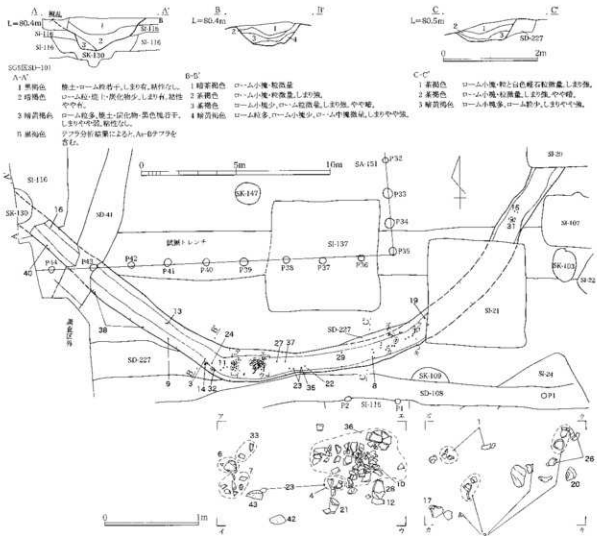
【覆土】3 層ないしは 4 層に分層される。レンズ状の自然堆積で、断面 C-C' の最上層に微量だが火山灰と思われる白色軽石粒を含む。

【遺物出土状況】SD-227 から流入した土師器を含むとも考えられるが、遺構間での接合例はほとんどない。浅身の椀形杯が多い SD-101 は SD-227 より少し新しい特徴を示すようにも見える。壺・小形壺・高杯が主体の SD-227 に対し、SD-101 は小形壺が少なく、椀形杯・高杯・壺・甕が同量ずつある。古墳中期中葉～後葉の遺物が主体で、中期末葉の土器はほとんどない。SI-116 (古墳中期後葉) と SD-227 (中期中葉～後葉) → SD-101 (中期後葉?) → SI-20 (後期初頭) の順になる。

【出土遺物】溝としては遺物が多い。SG5 区中央でカーブする部分にまとまっている。土師器の器種は杯・高杯・鉢・小形壺・壺・大形壺甕類が主体で、高杯と壺の多さが目立つ。椀形杯 (1～3・8・10) と壺 (28) は外面に煤が付着している。底部に被熱痕跡があるのは 1 だけで、煤の付着が少なく不規則なものもあり (10)、

火災などで二次的に煤が付着した可能性がある。貼付口縁の壺(36)は、SG5区ではSI-100などにある。図示以外の土師器は合計706片・7.215gで、内訳は杯267片・1.689g、高杯79片・1.353g、鉢1片・69g、小形壺10片・86g、壺甕類349片・4.018g。図化以外に、高杯は即上半でみると5~6個体、杯・鉢は底部で見ると3個体くらいある。擬格子ではない格子印き調整の陶質土器(39)は、SI-22などに同一個体の破片がある。軽石質・砂岩質・ホルンフェルスの砥石がある(41~43)。軽石質の砥石はSG10区SI-16などで、ホルンフェルスの砥石はSG5区SI-7などで出土している。

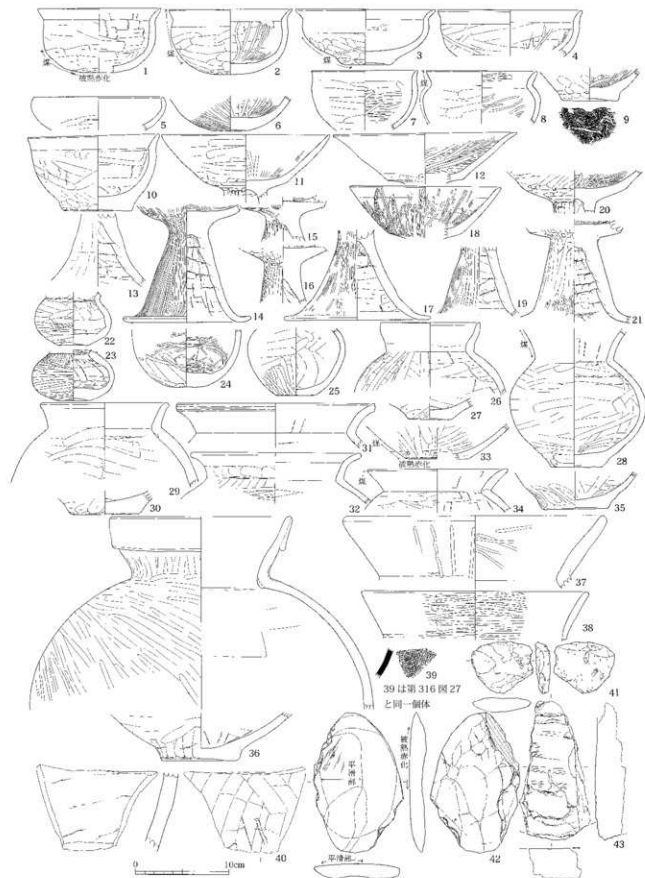
古墳時代以後の遺物は、内面漆仕上げで白色気味の胎土の奈良時代杯1片、古代の常総型甕破片、中世以後の常滑産甕1片(40)が混入している。重複関係について上で触れたように、SD-101に後世(12世紀以後?)の遺構が重複していた可能性も考えさせる資料である。



第343図 権現山遺跡SG5区SD-101(1)遺構

第198表 権現山遺跡SG5区SD-101出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径13.0 高 6.8	内側口縁で丸底。高い調整。外面口縁部軽いヨコナデ。体部上半ナデ、体部下半~底部ケズリ。内面口縁部へウナデのちヨコナデ。体~底部部いへッナデ。外面体部厚目益。底部焼熱による赤変著しい。火に当たったものたろう。	色調 10YR7/4 中~粗粒 白・赤粒~細粒少 白・赤粒質 中~軟質	底上14~17cm 口~体2/3弱。底一部 欠 49, 50, C区



第344図 権現山遺跡 SG5 区 SD-101 (2) 遺物

2	土師器 土師杯	口 復 13.0 底 6.8	内面口縁、口縁部ヨコナデ、体部下～底部ケズリのち体部ナデ。体部上端調整線あり。底部丸底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち放射状の線らなミガキ。内面底部は比較的平坦になっている。外面口縁～体部保留付。	5YR78 橙 やや暗赤 白・赤粒～細粒少、砂粒～粗粒散り やや硬質	底上7～11cm 口～体1/2周。底完存 46, 47, 52, 56
3	土師器 土師杯	口 14.8 高 5.8 底 5.0	内面口縁。外面口縁～体部上平口ヨコナデ、体部下～底部ナデのち体部外周ケズリ。底部は突出する平底で、中央はくぼむ。ケズリは丸底。内面口縁～体部ヨコナデで、体部一部に放射状の線らなミガキがあるが、体～底部は表面の割れが著しく、調整が不詳。外面体部～底部一部保留付。全体に焼けた可能性あり。	5YR6 6 橙 やや暗赤 白・赤粒少、白濁～粗粒少、透明粗粒散り やや硬質	底上10cm 口～体1/2周。底完存 60
4	土師器 土師杯	口 復 15.2 高 残 4.9	内面口縁。外面体部ナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのち線らな縦方向のミガキ。内面ヘラナデの工具痕跡が高れているため、ヘラナデが端かハケのようにも見える。	2.5Y7/3 浅黄 暗赤 白・赤粒～細粒散り やや硬質	底上8cm 口～体1/4周 23
5	土師器 土師杯	口 復 13.5 高 残 3.5 底 復 14.2	口縁部は大きく内湾する。表面磨滅のため調整が不明確な部分が多い。外面口縁～体部ヨコナデ、体部下平口沢のあるナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ナ	10YR74 白・赤 やや硬質	口～体1/6周
6	土師器 土師杯	高 残 3.7 底 3.6	精良な胎土で、厚手。外面体～底部ケズリのちミガキ。ミガキは太く、体部には斜め方向に強く密に施される。底部はいびつで、全体にくぼむ。内面体～底部ナデのち放射状の太いミガキ。	7.5YR7/4 に近い黄 暗赤 白・赤粒～細粒散り やや硬質	底上23cm 体～底一部欠 15
7	土師器 土師杯	口 復 11.1 高 残 6.4	硬質で精緻な作り。内面口縁。外面口縁部ヨコナデ～体部ケズリのち体部ナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部横方向の密なミガキ。	2.5YR7/8 橙 暗赤 白・赤・砂粒少 硬質	底上12cm 口～体1/4周
8	土師器 土師杯	口 復 11.7 高 残 5.5 底 復 12.4	外面口縁部ヨコナデのち体部側面丸底のあるナデ。内面口縁部ヨコナデ～体部ヘラナデのち口縁～体部線らなミガキ。外面口縁～体部保留付。火に焼けていたものも。	10YR6/4 に近い黄 暗赤 白・赤粒～細粒少、白・砂粒散り やや硬質	底上22cm 口～体1/6周 38
9	土師器 土師杯	高 残 3.4 底 6.4	外面体～底部ナデ。底部は突出する平底で、中央がくぼむ。内面体～底部ナデのち放射状に近いミガキ。外面底部に長さ約3cmの埋成面の細粒あり。埋成面内面には突起があり、工具を押し上げて痕跡を残したとされる。埋成面には、粘土の層ととも、細く短い埴輪のような線が数本ある。	7.5YR7/6 橙 やや暗赤 白・黒・透明粗粒少、白・赤粒散り やや硬質	底上39cm 体1/3周。底1/2周 7
10	土師器 土師杯	口 14.0 高 8.1 底 7.2	内面口縁部ヨコナデ。体部斜ナデで、断面直線や粘土の層が残る。底部1車なナデで、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部平口ヘラナデで、体部上端に粘土のめくれあり。外面口縁～体部にごく少量の埋成面。内面底部ケレータの痕跡あり。	10YR7/3 に近い黄 暗赤 白・赤粒～細粒少、白・赤粒散り やや硬質	底上26cm 口～体3/4周。底完存 31
11	土師器 高杯	口 復 17.8 高 残 7.3	外面杯部口縁部ヨコナデ、体部ナデのち口縁～体部先沢のあるナデ。体部下端～底部ナデの先沢のあけケズリ。断面は上端方向の密なミガキ。内面杯部は北面の磨滅が著しいが、放射状のミガキが施されていることは確認できる。断面上端ナデ。	2.5YR5/8 明赤 やや暗赤 白粒～細粒と砂粒散り やや硬質	底上18cm 杯口～体1/6周。底1/3周 13
12	土師器 高杯	口 復 19.4 高 残 5.3	杯部外面は北面の磨滅が著しく、調整不明確。杯部体部下端～底部はケズリ。内面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち口縁～底部太いミガキ。杯部口縁部は薄くやや反する。	7.5YR6/4 に近い黄 暗赤 白・透明・砂粒～粗粒少、白・透明・砂粒散り やや硬質	底上19cm 杯口～底1/5周 32
13	土師器 高杯	高 残 7.7	外面杯部下～中位縦方向のナデ。ミガキの可能性はあるが、表面の磨滅が著しく、不詳。内面杯部下平口沢ナデで、組織痕をそのまま残す。中位ヘラナデで、組織痕が残る。	10YR7/4 に近い黄 暗赤 白・赤・砂粒～粗粒少、赤・砂粒散り やや硬質	底上10cm 脚上平はび完存 9
14	土師器 高杯	高 残 12.5 脚跡 13.6	外面杯部体部下ナデ～底部ケズリのち縦方向の線らなミガキ。断面は上端方向のケズリ。下平口ヨコナデのち縦方向の密なミガキ。内面杯部底部ヘラナデのち密な放射状のミガキ。ヘラナデの工具の当たりが深く切込まれる。断面上下ナデで、組織痕顕著。下平ヘラナデのち下端ヨコナデ。組織は、上層2段は円形、それ以下は縦線状。	10YR7/4 に近い黄 暗赤 白・赤粒少、黄緑散り やや暗赤 白・赤・透明・砂粒・粗粒少 やや硬質	底上27cm 杯口～脚上平一部欠。脚上平1/2周 10
15	土師器 高杯	高 残 4.7	外面杯部底部下端の端は明瞭で、ケズリのち体部側面のミガキ。底部ナデのち線らなミガキ。断面は上端ミガキ。内面杯部底部多方向の密なミガキ。断面上端ナデで、しぼり目が見える。杯部は径約8.6cmの円盤を底部にして作られている。断面は上端径3.8cm。	7.5YR5/6 明赤 やや暗赤 赤粒～細粒と砂粒散り 白・黒粒～粗粒散り 硬質	底上21cm 杯口2/3周。脚上端完存 28
16	土師器 高杯	高 残 6.1	外面杯部底部～脚部上平ケズリのち断面は上平ミガキ。内面杯部底部ナデのち線らなミガキ。断面は上端ミガキ。杯部は径約9cmの円盤を底部にして作られている。断面は上端径4.0cm。	10YR6/4 に近い黄 暗赤 白・赤・砂粒少、砂粒と白濁～細粒散り 硬質	底上30cm 杯口1/2周。脚上平完存 1
17	土師器 高杯	高 残 9.5 脚跡 復 15.4	外面脚部上平縦方向のナデ～下平口ヨコナデのち縦方向のミガキ。表面の磨滅により調整不明な部分多い。内面脚部上端ナデ。上平～中位ケズリのち下平口ヨコナデ。上平には組織痕が残る。	7.5YR7/8 黄緑 やや暗赤 白・赤・透明・砂粒・粗粒少 やや硬質	底上4cm 脚上完存。下平1/4周 44
18	土師器 高杯	口 復 16.0 高 残 5.5	外面杯部～底部ナデのち口縁部ヨコナデのち口縁～底部やや線らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ～体～底部ヘラナデのち放射状の線らなミガキ。	10YR8/4 浅黄 暗赤 灰黄緑～白・赤粒～細粒散り 硬質	杯口～底1/4周
19	土師器 高杯	高 残 7.5	外面脚部上平縦方向のミガキ。内面脚部上平ナデで、組織痕が残る。下平ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄 暗赤 白・赤・透明・砂粒～粗粒少、白・赤粒散り やや硬質	底上22cm 脚上平はび完存 58
20	土師器 高杯	高 残 4.6	外面杯部～底部ヘラナデ。断面は上端ミガキ。内面杯部～底部多方向の密なミガキ。断面は上端ナデ。断面は径約4.6cm。	5YR5 6 明赤 暗赤 白・赤粒～細粒散り やや硬質	底上17cm 杯口～底1/3周 54
21	土師器 高杯	高 残 10.9	外面杯部体部下～脚部上平ケズリのち断面は上平～中位ナデのち脚部中位～下平縦方向のミガキ。断面は上平には、杯部の調整に関与すると見られる溝の当たりあり。ミガキは強く露面に押し当てたもの下に出ているため、上端が円形にくぼむ。内面杯部体部下平斜め方向。底部～方向の密なミガキ。断面は上平～中位ナデで、組織痕顕著に残る。下平ヘラナデのち下平ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄 暗赤 白・赤・砂粒～細粒少、白・黒粒散り やや硬質	杯口2/6周。脚上平完存 21
22	土師器 小形壺	高 残 5.6 底 3.2 側 8.1	小形。側面1作り。外面頸部縦方向のヘラナデ。断面は上平～底部ケズリのち～底部線らなナデ。底部は平底で外縁が丸味を持ち、中央が浅くくぼむ。内面頸部ヘラナデ。断面は上平ナデでしぼり目と断面直線が残る。断面は上平～底部ヘラナデのちナデ。	7.5YR7/6 橙 やや暗赤 白・赤粒～細粒少 硬質	底上22cm 頸～底完存 35

第8章 権現山道跡 SG5区

23 土師器 小形壺	高 3.4 底 3.5 胴 8.7	小形。胎土精良で、精練な作り。外面腹部中位～底部ケズリのち創～底部密なミガキ。ミガキは口縁部から続くと思われる腹部上平の縦方向のち創。腹部中位～下平方向。底部は多角形状のミガキで、全体がくぼむ。内面腹部ヨコナデのち創方向のミガキ。胴～底部ヘラナデのちナデ。胴部上平はほぼ内面縁線部から平かに見られる。	10YR7/4 に近い黄褐色 赤黒～白磁粉少量 やや硬質	底上7cm～12cm 胴～胴一欠。底完存 19, 23, 33, 34
24 土師器 土師壺	高 6.0 胴 11.4	小形。腹部は丸底だが、中央がくぼみかぼみ。正立させることが可能。内面は中央がやや低い平明面である。外面腹部上平縁線部～胴部上平～底部ヘラナデのち創縁線なミガキ。踵先端が飛び出ているためか、ハケ状に見える部分あり。内面胴～底部ヘラナデのち創縁線なミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや硬質 赤黒～黄緑と白・砂 ～黄緑と白・砂・磁鉄粉少量	底上3cm 胴～1/4。底完存 61
25 土師器 土師壺	高 9.7 底 4.0	小形。胴部上平ナデのち創の狭いヘラナデ。底部ケズリで平底。内面胴部上平ナデ～底部ヘラナデのち創部上平ナデ。	5YR4/6 赤黒 やや硬質 白・砂・磁鉄粉少量	胴～底1/5周
26 土師器 土師壺	口 10.4 高 7.7	外面胴部上平ナデのち創らぬ縦方向のケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部は内面縁線に直立する。内面胴部上平ナデのち創ケズリ。27と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 橙 やや硬質 赤黒～黄緑と白・砂 ～赤黒と白・砂	底上16～18cm 口～胴上平1/3周 55, 57
27 土師器 土師壺	高 2.4 底 4.6	外面胴部下端ケズリ。底部ケズリのちナデ。底部は平底で、中央がわずかくくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。26と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 橙 やや硬質 赤黒～黄緑と白・砂 ～黄緑と白・砂	底上13cm 胴～底完存 28
28 土師器 土師壺	高 14.6 底 5.4 最大 14.3	中形。外面口縁部ヨコナデ。胴部ナデのち創らぬ光沢を持つナデ。胴部下端～底部ケズリ。底部はやや突出する平底で、中央が小さくくぼむ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴～底部ナデのち創部上平～底部縁線な光沢を持つナデ。胴部上平縁線縁線。外面口縁部～胴部に黄が附着するが底部は無熱していないので、黄として使用したものではない。	5YR2/2 オリーブ黒 やや硬質 白・砂・磁鉄粉少量。赤黒～黄緑と黄 破質	底上22cm 口～下平1/2周。胴一部 欠。底完存 27
29 土師器 土師壺	口 13.6 高 9.0	外面胴部上平ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ヘラナデ。胴部上端には、口縁部作出に伴う後縁が残る。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや硬質 白・赤・平部明褐色 磁鉄粉 破質	底上16cm 口～胴上平1/4周 36
30 土師器 土師壺	高 2.5 底 7.0	外面胴部下端～底部ケズリ。底部は平底。内面底部ヘラナデ。内面は表面のクレーター状の網が著しい。	5YR6/4 に近い黄 やや硬質 白質粉少量。砂～粗 粒磁鉄粉 破質	底1/4周
31 土師器 土師壺	口 21.0 高 47.7	外面胴部上端ナデ。口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。外面口ケズリナデ。口縁部は外向きの丸味を持つ面となっており、浅い沈線2本がある。上端は軽くつまみ上げられる。	5YR7/6 橙 やや硬質 黒・透明・砂～粗 粒。白質～黄緑少量	底上21cm 口1/3周 2B, 17.5-14 表採 36
32 土師器 土師壺	口 18.0 高 5.3	外面胴部上端縦方向の強いナデのち創方向のミガキ。口縁部下平1/2ナデのち口縁部上平ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部上端ナデ。	5YR6/6 橙 やや硬質 白・赤・砂～粗粒 少量。白・砂・磁鉄粉少量	底上20cm 口～胴上端1/4周 11
33 土師器 土師壺	高 3.8 底 7.0	薄手。外面胴部下端ケズリのち創部下平ナデ。底部ケズリ。底部は平底で、外面にケズリナデ。底部はやや突出する平底で、中央が小さくくぼむ。外面胴部上平縁線縁線。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや硬質 砂～白磁～黄緑と白・砂 ～黄緑と白・砂	底上17cm 胴～下平1/4周 16
34 土師器 土師壺	口 14.8 高 4.6	外面口縁部ヨコナデ。胴部上端ケズリのちナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部上端ヘラナデ。外面口縁部～胴部縁線縁線。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや硬質 白・砂・磁鉄粉少量。透明 粒磁鉄粉 破質	口～胴上端1/3周
35 土師器 土師壺	高 3.8 底 7.2	外面胴部上端ナデで、底部を上にして見て、底部を右にひねった時に見えるような粘土の網がある。底部ケズリで、突出する平底であり、中央が浅くくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデのち創縁線で丁寧なケズリ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや硬質 赤・砂・磁鉄粉少量 やや硬質	底上12cm 底完存 34
36 土師器 大形壺	口 19.3 高 25.5 底 8.4 最大 36.2	粘土層付による筒状口縁。胴部縦方向のミガキのち創部上平密なミガキ。胴部上平ケズリのちナデ。底部外面ケズリ。中央のみナデ。底部は突出する平底で、中央のナデ部分がくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴～底部ヘラナデ。胴部上平は表面の新痕が著しく調整不明な部分が多いが、粘粉面とんど見していないことには確認できる。内面底部は磁片全体に白色土が付着。外面胴部下端～底部は赤褐色がかっており、赤彩の可能性もある。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや硬質 砂～白磁～黄緑と白・砂 ～黄緑と白・砂	底上26cm 口は底完存。胴上平1/3 周。胴下端～底完存 26, UTN-SG 7X14-17
37 土師器 土師壺	口 28.0 高 9.7	大形。口縁部は厚く、直線的に開く。底部は斜めの平明面となっている。外面口縁部ヨコナデのち創方向の縁線なミガキ。内面口縁部ヨコナデのち創縁線なミガキ。縁線は縦方向の縁線なミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや硬質 赤黒～黄緑と白・砂 ～黄緑と白・砂	底上7cm 口一部 29
38 土師器 土師壺	口 24.0 高 5.2	皿状底。内外面とも口縁部は縦方向のケズリのち創なミガキ。外面口縁部下端は浅く縁線にくぼむ。	7.5YR5/6 黄褐色 やや硬質 白・黒・砂・磁鉄粉多 量	底上30～34cm 口1/6周 4, 6
39 陶瓦土師 器	高 3.2	外面は縁かな格子形。内面ナデ。S122の27番やS24の27・28番と同一個体で、S122出土の1片と統合した。	SB5/1 青灰 やや硬質 白磁～細粒少 量	胴部磁片
40 陶器 土師壺	高 8.5	直筒筒状。内外面ともナデで、内面には粘粉層がわずかに残る。外面は、7.5YR4/3の褐色で、赤褐色色物質が浮出し、径1～0.7mmの点ととなっている。内面は砂と自然粘が付着し、小さな突起の連続と持つ。	2.5Y7/2 灰青 やや硬質 白・黒粒～粗粒少 量	底上35cm 胴部内一部 29
41 軒石	長 5.5 幅 6.3 厚 3.1 厚 1.5	左側の面はゆるい凸凹が多い。右側の面は凸凹状の丸味を持つ。擦痕などは確認できない。目の粗い砥石に使用したとすれば右側の面を用いたと考えられる。	5Y4/1 灰 非常に多孔質でやや軟質な滑石	完形
42 土師器 厚 1.8 厚 1.1 厚 309.1	長 14.7 幅 11.9 厚 1.8 厚 1.1 厚 309.1	河原石を素材とする大形の砥石の破片。残存する表面は丸味を持ち、左端より平坦となり、わずかに凹面が見られる。左下および上端を除く表面が焼熱により変変する。縁辺には縁かな粘粉層があり、やや磨滅している部分もあることから、この状態で使用された可能性もあると見られる。	2.5Y6/3 に近い黄褐色 やや硬質 赤・砂 ホムンブルグス	底上28cm 磁片
43 石器 砥石	長 14.6 幅 7.3 厚 3.2 厚 37.8	使用の跡は少ないが、表側の平明面が砥石面で、わずかな凹凸から、左右方向に使用したものと見られる。縁辺が残るのは胴下縁のみであり、それ以外は裏面も欠け欠損している。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや硬質 砂	底上24cm 磁片 18

第7節 古墳時代の土坑 (第345～355図、写真図版45～53・186・187)

古墳時代の土坑は、SG5区で71基を確認した。

SG5区SK-34・35・47は古墳中期末の円筒形土坑と考えられる(第346図)。円筒形土坑は集落内の一定箇所に存在することが多い。ここではSG5区の北部に3基がまとまっている。SG5区SK-106・110・111も大形円形で平底だが、壁面がかなり外開きになる形状なので、円筒形土坑とはいえない。

SG5区SK-195・196・202・203は円筒形と呼ぶこともできる形状だが、冬季以外には湧水するような低い土地に掘られているので、貯蔵穴と考えられている円筒形土坑にはふさわしくない。むしろ、井戸や低地の水を汲んで利用する作業に関連する土坑であろう。SK-198とその中にあるSK-199・200は、上部が同時に埋没する複合した井戸状の土坑群である。

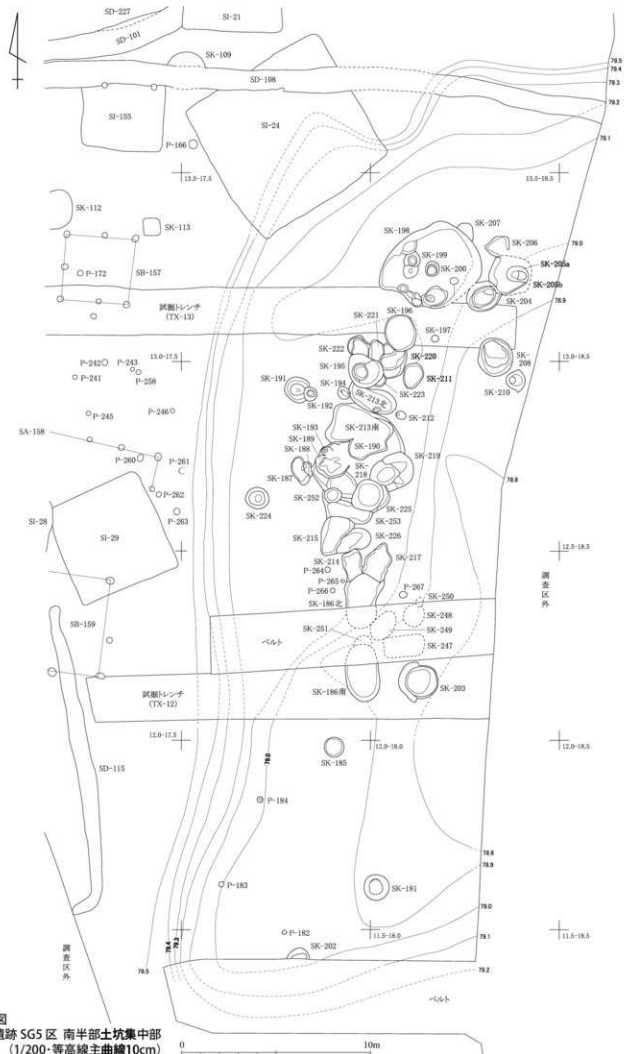
台地端部から低地に群在する土坑群(第345図)は、地山にロームがなく粘土質になる部分に掘るものが目立つ。冬期以外には湧水で水没する地区である。集落が載る台地から東側低地にむかう傾斜面は、地山がローム層直下の礫層になっていて、ここには土坑群を作っていない。それよりも東側の低地に降りた部分では、地山が上層から順に黄色土・灰白色粘土・礫層となっている。この黄色土と灰白色粘土に低地の古墳時代土坑群が集中して掘られていて、深い土坑は底面が礫層に達している。低地面のうちではやや高い、台地側(集落側)に寄った地区に集中している。井戸や粘土採掘坑としての性格が推定される。SK-215とSK-226や、SK-218と219のように、同時に埋没しているとみられる土坑もある。古墳後期初頭のHr-FAテフラが覆土中に堆積・混入する土坑が多いので、主に古墳中期に構築されて自然埋没する途中でテフラが降下したものである。SK-190・191の2基でテフラ検出分析を実施し、白色軽石(Hr-FAまたはHr-FP)と灰白色軽石(As-C)を検出した(本章第2節)。考古学的には、周辺遺跡のテフラ検出状況と出土遺物との関係から、白色軽石を古墳後期初頭のHr-FAと考えることが妥当である。

古墳時代土坑からの出土遺物は、中期後葉～末葉の土師器が目立つ(第351～355図)。SK-31は後期前葉の杯の他に、脚部上端に焼成前穿孔がある高杯片がある(第351図左上隅の2番)。SK-98は古墳終末期前半の土師器を含み、粗製の小形土器が目立つ。SK-98が切る古墳中期の溝SD-42にある小形土器も(第341図)、SK-98の遺物が混在した疑いがある。SK-106にある格子叩き調整の陶質土器2片は、SI-22などに同一個体の破片があり、第351図右下の1は他遺構の破片と接合した図である。関連する遺物としては、古墳中期のSD-42に突線区画を持つ陶質土器の壺がある。SK-190は長胴甕や内面黒色処理の鉢など一定量の遺物があり、後期前～中葉と考えられる。SK-203には白色針状物質(骨針)を含む土師器甕があり、搬入品と考えられる。白色針状物質を含む土師器はSG10区SI-23などにある。SK-204の杯は外面に焼成前刻線がある。SK-204・205aは古墳中期中～後葉の土坑で、上層部に入る古墳時代終末期の杯には底部へラ削りを省略したものを含む。SK-205aの甕は焼成前の亀裂を補修した不良品。SK-210には焼粘土塊があり、土師器生産関連遺物の類例はSG5区SI-21などにある。ホルンフェルスの砥石(SK-218)は、SG5区ではSI-7などにある。有機質の遺物は、井戸状のSK-200に木片がある。

第199表 権現山遺跡 SG5区 古墳時代の土坑

※ SK-34・35・47は円筒形土坑

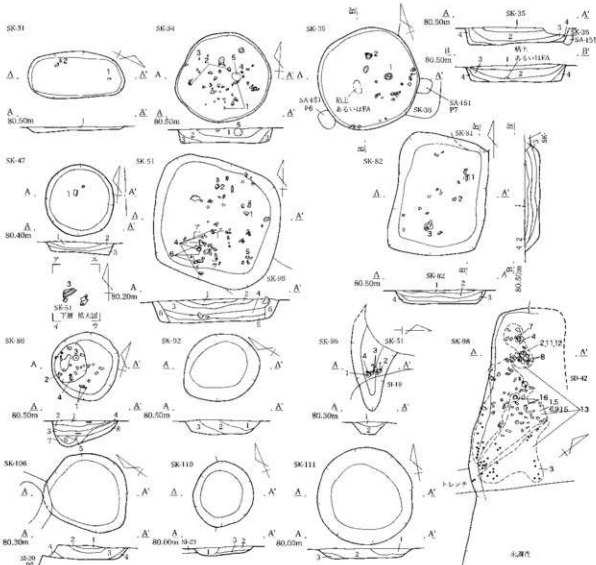
遺構名	グリッド	形状	重層関係	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-31	16.0-16.0	長方形	重層なし	2.03	0.98	0.11	N-27° W	単層
古墳後期前葉の土師器杯破片あり。長方形土坑だが甕土は硬く、近現代の長方形土坑とは異なる。								
SK-34	16.5-16.0	円筒形	重層なし	2.03	1.85	0.32	N-75° E	自然埋没状
わずかに他遺構気味。土坑としては遺物が多そう。土師器杯柄と甕破片が多くて高杯・鉢片と発掘の近い層も含む。古墳中期末と考えられる。								
SK-35	16.0-16.0・16.5、16.5-16.0	円筒形	SA-151のP6→SK-35→SK-36	2.15	2.08	0.35～0.37		自然埋没状
時期不明のSK-36に切られる。古墳時代の方形構物SA-151のP6と重層し、上面の観察からP6を切ると思われる。杯部が完存の高杯と杯片出土。粗い調整の土師器破片も出土。古墳中期末。								
SK-47	17.0-16.0	円筒形	重層なし	1.51	1.44	0.26		自然埋没状
遺物は土師器杯(または鉢)2片と甕破片1片で、古墳中期と思われる。								
SK-51	14.0-16.5	隅丸方形	SK-96より新?	2.72	2.52	0.49	N-22° E	Hr-FAの堆積層有
古墳中期のSK-96と重層し、SK-51を共に調査している。SK-96を切る可能性あり。土坑としては遺物が多く、土師器甕破片の破片が多い。甕破片(または甕)の破片は、西側にあるSI-16で出土した破片と同一個体。土層にFAが入るので古墳中期後葉。								



第 345 図
 権現山遺跡 SG5 区 南半部土坑集中部
 (1/200・等高線主曲線10cm)

SK-82	15.5-16.5, 16.0-16.5	隅丸長方形	SK-81より古	2.57	1.91	0.30	N-15	北	自然埋没状	白色粘石積有
時期不明のSK-81に切られる。古墳時代末頃としては遺物は少なめで、椀形杯がなく土師器高杯と小形甕があることから中期後葉頃。										
SK-86	15.5-16.5	円形	重葺なし	1.45	1.40	0.54	N-15	北	自然埋没状	白色粘石積有
古墳中期のSK-86-92+145は近接し、近い時期かもしれない。底面にピット状の部分あり。最上層はHi-FAテフラ埋積層の可能性もある。土坑としては遺物が多く、横線瓦がなく土師器高杯と小形甕があることから中期後葉頃。										
SK-92	15.5-16.5-17.0	楕円形	重葺なし	1.77	1.41	0.28	N-56	北	自然埋没状	白色粘石積有
古墳中期のSK-86-92+145は近接し、近い時期かもしれない。遺物は少量で、明示した区間に土師器杯・高杯・小形甕・甕蓋類の小破片がある。明示した跡から中期後葉頃と見られる。										
SK-96	14.0-16.5	不整形多角	SI-19-SK-51より古?	2.25	1.00	0.25				
古墳前期のSK-19および古墳中期のSK-51の調査終了後に調査を実施しているので、SK-96が隣古かと推定される。土師器片は大破片が見られ、杯は含まない。古墳中期中～後葉。										
SK-98	15.5-17.5	長方形	SK-42より古	3.89	2.00	0.30	N-55	北	W 単層	
古墳中期のSK-42を切る。机座状にある。遺物量は多いが器入品も含むと見られる。古墳中期後半の杯を含む。小形土師器は4以内、底土層直前3点と底部の調整1点。										
SK-106	14.0-17.5-18.0	楕円形	SK-20より古	1.85	1.56	0.34	N-20	北	Hi-FAの埋積層有	
古墳前期のSK-20に切られる。明示した初期後葉部2片以外には土師器6片(糞5・杯1)だけで時期を決めにくい。上部にFAが入るので古墳中期。										
SK-110	13.0-17.0	楕円形	SK-23より新	1.37	1.20	0.19	N-26	北	自然埋没状	
古墳中期のSK-23を切る。SK-110-111+112は近接し、同時期の可能性もある。土師器小破片があるが、SK-23から器入したものと見られる。										
SK-111	13.0-17.0, 13.5-17.0	円形	重葺なし	2.10	2.03	0.22				粘土有
SK-110-111+112は近接し、同時期の可能性もある。遺物は出土しなかった。										
SK-112	13.0-17.0	楕円形	重葺なし	2.14	1.77	0.07	N-24	北	東土・灰有	
SK-110-111+112は近接し、同時期の可能性もある。土師器磨蝕類と杯・高杯片が出土し、上層底土の底層部から古墳中期の可能性あり。										
SK-121	9.0-18.0, 9.5-18.0	長方形	重葺なし	1.78	0.93	0.28	N-27	北	W 単層	
西側にピット状部分があり、その中に灰化骨が多く含むが、後世のピットと考えられる。遺物は土師器の小破片ばかりで、中期の機軸片と唯一後葉期の小形土師器がある。										
SK-130		円形多角	SK-116→SK-130→SK-101	1.90	1.00	0.69				東土・灰・Hi-FA 可能性有
古墳中期のSK-116を切り、古墳時代の可能性がある遺物は土師器小片でSK-116からの器入がほとんどと思われる。										
SK-140	14.5-16.5	隅丸方形	P-235と重葺	1.45	1.42	1.31	N-75	北	W 単層	
時期不明のP-235と重葺新築不明。丸戸の可能性もある深いピット。両側のピット2本を併せて用戸?となるのかもしれない。土師器破片が少量あり、杯は中期中～後葉頃。										
SK-142	14.5-16.5-17.0	楕円形	重葺なし	1.30	1.09	0.21	N-10	北	自然埋没状	
写真によると、土坑内端部にピットがあるが、その断面図はない。遺物はHi-FA調整土師器磨蝕片があり、堆の状況からカマド出現以前と見られる。										
SK-144	15.0-17.0	円形	重葺なし	0.52	0.47	0.18				自然埋没状
断面図に記入した位置で同一個体の高杯破片が出土した。他の遺物はない。古墳中期後葉頃と見られる。										
SK-145	15.5-17.0	楕円形	重葺なし	1.50	1.34	0.23	N-10	北	自然埋没状	
古墳中期のSK-86-92+145は近接し、近い時期かもしれない。土師器磨蝕の底部3片と磨蝕3片があり、長狭化する以前の古墳中期と考えられることもできる。										
SK-149	15.5-16.0	楕円形	重葺なし	0.43	0.32	0.12				単層
平面図と断面図に記入した遺物。確認範囲が前面までのべらにかけ入る。小形甕断面、高杯断面部、3～4個体の機軸類の側一部破片があり、古墳中期の可能性もある。										
SK-181	11.5-17.5-18.0	円形	重葺なし	1.35	1.32	1.19				自然埋没状
底部にあり、底面は灰白色粘土層中にある。調査時は3月中旬中の雨で凍はしていないが、戸戸の可能性もある。遺物は土師器磨蝕類の側部片と主体で、鉢や小形甕が1～2片見られる。軒石積有Hi-FAテフラであるかどうかは不明。古墳中期の可能性もある。										
SK-183	11.5-17.5+12.0-17.5	円形	重葺なし	1.05	1.03	0.15				自然埋没状
底部にあり、底面は黄色土層中にある。遺物は明示した土師器1片だけだが、周囲の土坑と同じく古墳中期と考えられる。										
SK-186	12.0-17.5-18.0	楕円形多角	SK-251より新	約3.10	1.74	約0.40	N-9	北	W 単層	
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-251を切る。北半部平面図と南半部断面図なし。土師器磨蝕が所在不明のため、写真をトレスして掲載した。遺物は土師器磨蝕片が主体で古墳中期の葎や鉢なども少量見られ、明示した古墳時代の遺物(土師器高杯(口径10～11cm)もある。										
SK-186北	12.0-17.5-18.0	楕円形	SK-214+217より新?	約3.20	2.10	0.35				Hi-FA 覆有
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-214+217を切る可能性が高い。南半部平面図・断面図なし。覆土層にHi-FAテフラ層があるように判断される。古墳中期の内周に土師器杯や古墳前期の高古杯破片類(直径4片)がある。										
SK-187	12.5-17.5	不整形多角	SK-218→SK-188→SK-187	1.55	0.75	0.19	N-15	北	W 単層	白色粘有
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-188を切る。SK-187-188は遺物が区別されていない。土師器磨蝕破片が主体で、長狭化はなく、鉢片も少量あり。古墳中期の可能性あり。										
SK-188	12.5-17.5	楕円形多角	SK-218→SK-188→SK-187	0.90	0.50	0.19				自然埋没状
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期末のSK-218を切り古墳時代のSK-187に切られる。遺物はSK-187を参照。古墳中期の可能性あり。										
SK-189	12.5-17.5	不整形多角	SK-218→SK-189→SK-193	1.82	1.63	0.25	N-50	北	W 単層	白色粘有
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-193-218と重葺し、SK-193に切られる。SK-189を先に調査しているため、SK-218を切るかと考えられる。遺物(明示した2点の他に土師器高杯・甕・杯・小形甕・鉢)があり、古墳中期中～後葉と見られる。										
SK-190	12.5-17.5-18.0	不整形多角	SK-213南・218より新?	2.68	1.84	0.63	N-56	北	自然埋没状	Hi-FA 覆有
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-213南・218より先に調査しているため、SK-213南・218を切るかと考えられる。遺物はかなり厚いついたものが多い。後葉期前後の遺物が一定量あるのでその時期と考えられる。										
SK-191	12.5-17.5	円形	SK-192より古	1.42	1.33	0.83				自然埋没状
底部の円形土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-192に切られる。遺物は上部に多く、古墳中期末～終末期の杯片も含むが、明示した土師器から見て中期中～後葉。										
SK-192	12.5-17.5	円形	SK-191より新	0.75	0.70	1.10				自然埋没状
底部の楕円形土坑。古墳中期のSK-191を切る。SK-192に施された伴う遺物はないが、古墳時代末頃が集中する地区にあるので古墳時代と考えた。										
SK-193	12.5-17.5	楕円形多角	SK-218→SK-189→SK-193	0.65	0.47	0.44				自然埋没状
底部の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-189を切る。古墳中期の土師器高杯磨蝕類が1片だけ出土した。古墳時代末頃が集中する地区にあるので古墳時代と考えた。										
SK-194	12.5-17.5	楕円形	SK-213より新	0.72	0.60	0.38				自然埋没状
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-213北を切る。土師器高杯と甕が8片あり、鉢磨蝕中機軸類はない。古墳時代土坑が集中する地区にあるので古墳時代と考えた。古墳中期の可能性もある。										
SK-195	12.5-17.5	楕円形	SK-213北+221.7+222+223より新	1.20	1.78	1.46	N-45	北	W 単層	Hi-FA 覆有
底部の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳時代のSK-221より先に調査しているため、SK-221を切る可能性が高い。上部に段を持ち、下段が筒状に深くする片形瓦。古墳中期末の機軸類を含む約60片がある。上部にHi-FAテフラがあるのので古墳中期と考えられる。										
SK-196	13.0-18.0	楕円形	SK-220より新?	1.89	1.66	0.40	N-12	北	W 単層	白色粘石積有
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-220より先に調査しているため、SK-220を切る可能性が高い。古墳中期中～後葉の小形甕・杯・鉢・磨蝕あり。										
SK-197	13.0-18.0	円形	重葺なし	0.38	0.35	0.20				単層
底部のピット状土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。土師器が4片だけ出土し、古墳中期中～後葉の可能性もある。										
SK-198	13.0-18.0	不整形多角	SK-204→SK-198→SK-207	5.40	4.18	1.54	N-60	北	自然埋没状	白色粘石積有
SK-199+200と同時期										
底部の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-199+200と重葺し、上部はほぼ円筒状に埋没する。古墳中期のSK-204を切り、古墳中期のSK-207に切られると見られる。覆土と古墳中期中～後葉の土層が重なっており、機軸の遺物も含まないので中期中～後葉と考えられる。										
SK-199	13.0-18.0	不整形多角	SK-198と同底面がある	0.80	0.82	1.74				自然埋没状
底部の円形土坑で、灰白色粘土層を覆いついて覆層下に底面がある。古墳中期のSK-198と重葺し、上部はほぼ円筒状に埋没する。遺物はないが、SK-198と同時期の土坑。										

第8章 権現山遺跡 SG5区

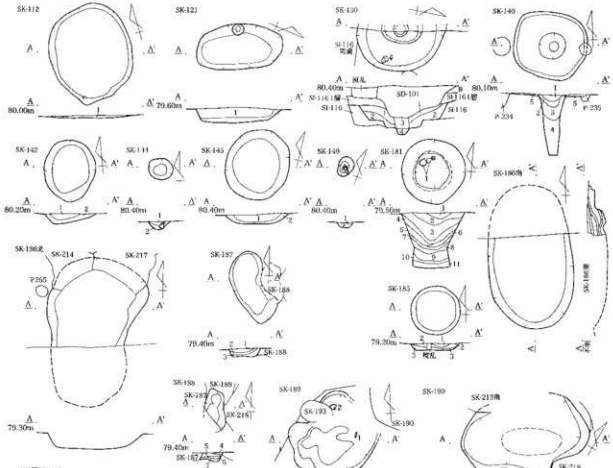


- SG5SK-21
1 緑黄色
①-② 緑少、③-④ 緑(1m)濃色、⑤⑥ 緑。
- SG5SK-24
1 黒色
①-② 緑少、跡土層(10cm)濃色、③④ 中や強。
2 中や強色
①-② 緑少、③④ 中や強。
3 緑茶褐色
①-② 緑多、③-④ 緑(10cm)少、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-25
1 黒褐色
①-② 中や強、赤褐色、③④ 弱、⑤⑥ 弱。
2 黒褐色
①-② 緑少、③-④ 緑(10cm)濃色、⑤⑥ 弱。
3 緑茶褐色
①-② 緑少、③④ 中や強。
4 黒褐色
①-② 緑多、③-④ 緑(10cm)少、⑤⑥ 中や強、⑦⑧ 弱。
- SG5SK-47
1 緑褐色
①-② 緑少、③-④ 緑(10cm)濃色、⑤⑥ 弱。
2 褐色
①-② 緑(10cm)少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
3 緑茶褐色
①-② 緑(10cm)多、③④ 弱。
- SG5SK-91
1 褐色
① 緑多、②③ 緑、④⑤ 弱。
2 褐色
① 緑濃、②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- SG5SK-92
1 褐色
① 緑多、②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- SG5SK-99
1 緑茶褐色
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
2 緑茶褐色
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
3 赤褐色
①-② 緑(10cm)多、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-96
1-2
上層の緑褐色弱。
- SG5SK-98
1 緑茶褐色
①-② 緑中少、③④ 弱、土層面が多。
- SG5SK-106
1 赤褐色
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- SG5SK-110
1 赤褐色
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- SG5SK-111
1 赤褐色
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

- SG5SK-96
①-② 緑少、③④ 緑(10cm)濃色、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-98
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-99
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-106
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-110
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。
- SG5SK-111
①-② 緑少、③④ 中や強、⑤⑥ 弱。

- SG5SK-119
1 緑茶褐色
①-② 緑多、③④ 弱、土層面が多。
2 緑茶褐色
①-② 緑中少、③④ 弱、土層面が多。
3 赤褐色
①-② 緑中少、③④ 弱、土層面が多。
- SG5SK-111
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

第 346 図 権現山遺跡 SG5区 古墳時代の土坑(1) 遺構



SG5区SK-112

1 埋骨褐色

2 埋骨褐色

3 埋骨褐色

4 埋骨褐色

5 埋骨褐色

6 埋骨褐色

7 埋骨褐色

8 埋骨褐色

9 埋骨褐色

10 埋骨褐色

11 埋骨褐色

12 埋骨褐色

13 埋骨褐色

14 埋骨褐色

15 埋骨褐色

16 埋骨褐色

17 埋骨褐色

18 埋骨褐色

19 埋骨褐色

20 埋骨褐色

21 埋骨褐色

22 埋骨褐色

23 埋骨褐色

24 埋骨褐色

25 埋骨褐色

26 埋骨褐色

27 埋骨褐色

28 埋骨褐色

29 埋骨褐色

30 埋骨褐色

31 埋骨褐色

32 埋骨褐色

33 埋骨褐色

34 埋骨褐色

35 埋骨褐色

36 埋骨褐色

37 埋骨褐色

38 埋骨褐色

39 埋骨褐色

40 埋骨褐色

41 埋骨褐色

42 埋骨褐色

43 埋骨褐色

44 埋骨褐色

45 埋骨褐色

46 埋骨褐色

47 埋骨褐色

48 埋骨褐色

SG5区SK-118

1 埋骨褐色

2 埋骨褐色

3 埋骨褐色

4 埋骨褐色

5 埋骨褐色

6 埋骨褐色

7 埋骨褐色

8 埋骨褐色

9 埋骨褐色

10 埋骨褐色

11 埋骨褐色

12 埋骨褐色

13 埋骨褐色

14 埋骨褐色

15 埋骨褐色

16 埋骨褐色

17 埋骨褐色

18 埋骨褐色

19 埋骨褐色

20 埋骨褐色

21 埋骨褐色

22 埋骨褐色

23 埋骨褐色

24 埋骨褐色

25 埋骨褐色

26 埋骨褐色

27 埋骨褐色

28 埋骨褐色

29 埋骨褐色

30 埋骨褐色

31 埋骨褐色

32 埋骨褐色

33 埋骨褐色

34 埋骨褐色

35 埋骨褐色

36 埋骨褐色

37 埋骨褐色

38 埋骨褐色

39 埋骨褐色

40 埋骨褐色

41 埋骨褐色

42 埋骨褐色

43 埋骨褐色

44 埋骨褐色

45 埋骨褐色

46 埋骨褐色

47 埋骨褐色

48 埋骨褐色

SG5区SK-185

1 埋骨褐色

2 埋骨褐色

3 埋骨褐色

4 埋骨褐色

5 埋骨褐色

6 埋骨褐色

7 埋骨褐色

8 埋骨褐色

9 埋骨褐色

10 埋骨褐色

11 埋骨褐色

12 埋骨褐色

13 埋骨褐色

14 埋骨褐色

15 埋骨褐色

16 埋骨褐色

17 埋骨褐色

18 埋骨褐色

19 埋骨褐色

20 埋骨褐色

21 埋骨褐色

22 埋骨褐色

23 埋骨褐色

24 埋骨褐色

25 埋骨褐色

26 埋骨褐色

27 埋骨褐色

28 埋骨褐色

29 埋骨褐色

30 埋骨褐色

31 埋骨褐色

32 埋骨褐色

33 埋骨褐色

34 埋骨褐色

35 埋骨褐色

36 埋骨褐色

37 埋骨褐色

38 埋骨褐色

39 埋骨褐色

40 埋骨褐色

41 埋骨褐色

42 埋骨褐色

43 埋骨褐色

44 埋骨褐色

45 埋骨褐色

46 埋骨褐色

47 埋骨褐色

48 埋骨褐色

第 347 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (2) 遺構

第8章 権現山遺跡 SK5区

SK-200	13.0-18.0	円形	SK-198と同時期	0.78	0.73	1.74	自然埋没状 白磁石皿・灰舟
<p>低地の開口状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて窪中に底部がある。古墳中期のSK-198と重複し、上部はほぼ同時期に埋没する。図示した木片1点以上は古墳期4片(杯・底蓋・香焼類・品形)で、古墳後期のものは存在しない。</p>							
SK-203	11.0-17.0	円形	重複なし	1.20	-	1.80	自然埋没状 白磁石皿
<p>低地の開口状土坑で、底面は黄色土層中にある。南半部はほとんど除去できなかったため、調査しきっていない。遺物は少なく、大・中形器と鏡の破片があり、古墳中期I～後葉。</p>							
SK-203	12.0-18.0	円形	重複なし	2.05	1.74	1.14	自然埋没状 Hr-FA堆積層
<p>低地の土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて窪中に底部がある。遺物は底付近に多く、完整に近い銅鏡が多い。土師器を特徴として、小形器・杯も含む。古墳中期後葉。FAアツバ(47番)より上層に第354段14の土師土器や古墳前期～終末期の土師器がある。</p>							
SK-204	13.0-18.0	楕円形	SK-198-209より古	2.00	1.55	0.60	N62°E 自然埋没状 白磁石
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。各土層の断面図を参照。遺物は多いが層土層に散り込んでいたものばかりで、古墳中期中～後葉の遺物が多く、杯・土師土器・鏡も含む。外周に散らばる土師破片あり。古墳終末期後の遺住上げ平縁杯も1片ある(第354段112)。SK-198より古くは古墳中期I～後葉。</p>							
SK-205a	13.0-18.0	楕円形	SK-205bより新	1.19	0.84	1.06	N90°W 自然埋没状 Hr-FA灰・灰舟
<p>低地の開口状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて窪中に底部がある。古墳中期のSK-205bを切る。土師器は土師器が主体で小形器・鉢・甕も少量あり。鏡破片は見られない。高層土に古墳終末期の杯も1片ある(第354段13)。古墳中期後葉。</p>							
SK-205b	13.0-18.0	不整形円形	SK-204→205b→205a	2.40	2.40	0.48	自然埋没状 Hr-FA灰
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-204を切り、古墳中期のSK-205aに切られる。古墳中期のSK-206と重複するが新日不明。SK-205aより古くは、古墳中期中～後葉と考えられる。</p>							
SK-206	13.0-18.0	不整形分	SK-205bと重複	1.26	-	0.30	自然埋没状 Hr-FA灰
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-206と重複するが新日不明。図示した高杯の他に、内面に黒く内径に縁線が1片あり。中期後葉の可能性もある。</p>							
SK-207	13.0-18.0	楕円形	SK-198より新	1.26	0.95	-	N3°W 自然埋没状 Hr-FA堆積層
<p>低地の土坑。遺物の状況から見ると、古墳中期のSK-198の北東部を切ると思われる。遺物出土状況平断面図の詳細図はなく、写真も無い。図示した土師器と同様の銅鏡片が多く、杯・鉢・小形器・高杯も少量ある。古墳中期後葉。</p>							
SK-208	12.5-18.0/13.0-18.0	楕円形	重複なし	2.08	1.88	1.50	N15°W 自然埋没状 Hr-FA堆積層
<p>低地の開口状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて窪中に底部がある。7・9・11層にHr-FAアツバが入り、それより上層で出土した第355段1の杯は古墳後期の流入品。その他土師器は杯・高杯・小形器・香焼類があり、古墳中期中後葉。</p>							
SK-210	12.5-18.0	円形	重複なし	1.09	0.99	0.66	自然埋没状 Hr-FA堆積層
<p>低地の開口状土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。遺物は図示した他に土師器を特徴とする土師器の破片がある。古墳中期中～後葉。</p>							
SK-211	12.5-18.0	楕円形	重複なし	1.37	1.05	0.51	N25°E 自然埋没状 Hr-FA堆積層
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。遺物は底面からかなり掘り出て出土した土師器を特徴として高杯と内径に縁線が1片あり。鏡破片はない。古墳中期中～後葉よりSK-212</p>							
SK-212	12.5-18.0	楕円形	重複なし	0.54	0.40	0.34	自然埋没状 白磁石
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。遺物は出土しなかったが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので古墳時代の遺構と考えられる。</p>							
SK-213北	12.5-17.5-18.0	楕円形	SK-194・195より古	2.70	1.28	0.45	N64°W 自然埋没状 Hr-FA小形器
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-194と古墳中期のSK-195に切られる。遺物は土師器が主体で平縁杯と高杯が少量あり。鏡破片や長頸瓶はない。古墳中期の可能性もある。</p>							
SK-213南	12.5-17.5-18.0	不整形円形	SK-218→SK-213南→SK-1907	3.60	1.99	0.36	N90°E 土師の特長は不明
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-218を切る。古墳後期のSK-190と重複し新日不明だが、調査時に「SK-190の下のSK」と呼んでいるので、SK-190に切られる可能性が高い。南半は浅く掘込まれ、図示した土師器3点はSK-190の遺物の可能性もある。土師器は土師器が主体で高杯や中形もあり、古墳中期と考えられる。</p>							
SK-214	12.0-17.5	不整形長方形	SK-186北より古、 SK-217・226と重複	1.41	-	0.85	0.37 N22°W 自然埋没状 白磁石
<p>低地の土坑。古墳時代のSK-186北に切られる。古墳中期のSK-217・226と重複するが新日不明。土師器は土師器を特徴として、高杯・片胴罎もあり、中期後葉の可能性もある。</p>							
SK-215	12.0-17.5, 12.5-17.5	不整形円形	SK-226-253と重複	2.30	1.50	0.57	N21°E 自然埋没状 Hr-FA灰
<p>低地の土坑。東側にある古墳中期のSK-226と同様に埋没。古墳時代のSK-253と重複するが新日不明。土師器片があり、図示した以外に大形の香焼類の片も破片で見て4個体は見える。第355段13は中葉末で、それ以降は古墳中期後葉。</p>							
SK-217	12.0-17.5/18.0/13.0-18.0	不整形長方形	SK-186北より古、 SK-214と重複	1.91	1.10	0.45	N27°E 自然埋没状
<p>低地の土坑。古墳時代のSK-186北と重複し新日不明だが、SK-186北に切られる可能性が高い。古墳中期のSK-214と重複し新日不明。遺物は自然埋没破片と土師器を特徴とする土師器が主体である。低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので、古墳時代と考えられる。</p>							
SK-218	12.5-17.5-18.0	不整形円形	SK-189・180/190-213より古、 SK-225-252-253と重複	5.09	3.80	0.54	N65°E 土師入居 Hr-FA残存
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳時代のSK-188と古墳中期のSK-213南に切られる。古墳中期のSK-219と連続する土層で同時埋没。古墳中期のSK-189と後期のSK-190を先に調査しているため、SK-189・190に切られると考えられる。古墳時代のSK-225・252・253と重複するが新日不明。覆土には古墳後期の遺住上げ平縁杯も少量あるが、図示した杯から古墳中期末と考えられる。</p>							
SK-219	12.5-17.5-18.0	楕円形	SK-225より古、 SK-218と同様	2.45	-	1.83	0.78 N40°E 人工埋没
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-225に切られる。古墳時代のSK-218と連続する土層で同時埋没。土師器は土師器が主体で高杯・小形器も少量あり。古墳中期(後葉末)の可能性もある。</p>							
SK-220	12.5-18.0, 13.0-18.0	長方形	SK-221より古、 SK-196より古、 SK-223と重複	1.92	1.21	0.48	自然埋没状 Hr-FA残存
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-221に切られる。古墳時代のSK-196を先に調査しているため、SK-196に切られる可能性が高い。古墳時代のSK-223と重複し新日不明。土師器は土師器が主体で杯・鉢・高杯も少量あり。図示した杯から古墳中期末と考えられる。</p>							
SK-221	12.5-17.5-18.0, 13.0-18.0	不整形長方形	SK-220-222→SK-221 SK-195(7)	1.58	0.80	0.60	自然埋没状
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-220-222を切る。古墳中期のSK-195を先に調査しているため、SK-195に切られる可能性が高い。古墳時代のSK-223と重複し新日不明。遺物は出土しなかったが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので古墳時代の遺構と考えられる。SK-195より古くは古墳中期の遺構といふことになる。</p>							
SK-222	12.5-17.5, 13.0-17.5	長方形	SK-195-221より古	1.41	-	0.82	0.67 自然埋没状
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-195-221に切られる。前面図作成時に崩下部が足りなかった部分の土層の特長が不明。土師器を特徴として、高杯・高杯が少量あり。鏡破片・長頸瓶は見えない。SK-220の第355段1と重合する杯破片も1片ある。古墳中期末と考えられる。</p>							
SK-223	12.5-17.5-18.0	楕円形	SK-195より古、 SK-220・221と重複	1.13	0.85	0.40	N32°W 土師の特長は不明
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-195に切られる。古墳中期のSK-220・221と重複するが新日不明。遺物はないが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので古墳時代と考えられる。</p>							
SK-224	12.5-17.5	楕円形	重複なし	1.24	1.10	0.80	N90°E 土師の特長は不明
<p>低地の土坑。断面図の記録が不明。遺物は少なく、土師器大形香焼片が1片立ち、杯・鉢・甕・大形甕が少量ある。古墳中期後葉～末期の可能性もある。</p>							
SK-225	12.5-17.5-18.0	楕円形	SK-219・253より新、 SK-218と重複	2.12	1.65	0.81	N78°E 自然埋没
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-219・253を切る。古墳中期のSK-218と重複するが新日不明。遺物は少なく土師器を特徴として、大形器・高杯・内径に縁線も含む。古墳中期後葉～末期。</p>							
SK-226	12.0-17.5, 12.5-17.5-18.0	不整形円形	SK-214と重複、 SK-215と同様	2.08	1.08	0.38	N40°E 自然埋没状
<p>低地の土坑。南側にある古墳中期のSK-215と同様に埋没。遺物の図はSK-215と一緒に図解。古墳中期のSK-214と重複するが新日不明。土師器を特徴として、高杯・高杯も少量あり。鏡破片・長頸瓶は多い。杯・高杯が少量見られる。古墳中期中～後葉の可能性もある。</p>							

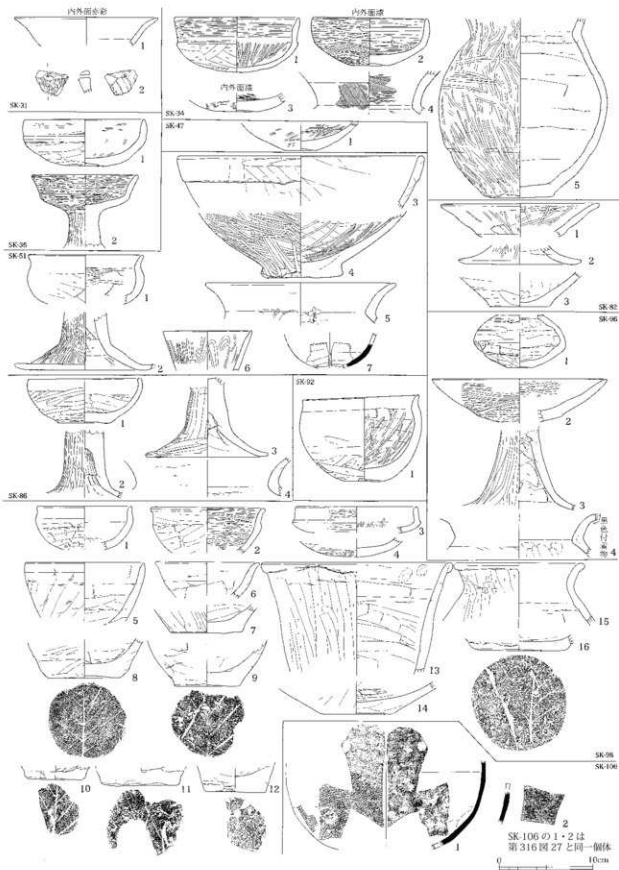
第8章 権現山遺跡 SG5 区

SK-247	楕円長方形	SK-249と重覆	約2.50 約1.50 約0.30	N31°W		
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。東西に長い長方形ないし楕円形で、東半より西半が深くなる。周囲が所在不明。古墳中期のSK-249と重覆し新旧不明。土師器は遺物がない。柱・鉢・高杯が少量見られる。長銀鍔の破片があり、SK-249と後合した。穂状土は含まない。古墳中期後半の可能性あり。</p>						
SK-248	円形	SK-250より古	約1.00	約0.30		
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-250に切られる。周囲が所在不明。土師器遺物が多く、内口に縁杯・高杯を含む中間部～後壁の可能性あり。</p>						
SK-249	不整形円形	SK-186北・247と重覆	約1.50 約1.00 約0.30			
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。底面中央がやや凹む。古墳時代のSK-186北・247と重覆し新旧不明。周囲が所在不明。土師器破片が少量あり、遺物片が主体で高杯が少量見られる。SK-247の頂上で高さ約40cmの遺物層が見られる。古墳中期後半の可能性あり。</p>						
SK-250	円形	SK-248より新	約0.50	約0.50		
<p>低地のピット状土坑で、底面は灰白色土層中にある。古墳中期のSK-248を切る。周囲が所在不明。土師器遺物と白灰土質の土師器片があり、古墳中期と考えられる。</p>						
SK-251	円形か	SK-186南より古	約0.50	約0.30		
<p>低地の土坑。古墳時代のSK-186南面に切られる。周囲が所在不明。土師器遺物少量と小形遺物がわずかにあり、古墳中期(後葉?)の可能性はある。</p>						
SK-252	12.5-17.5	楕円形	SK-218・253と重覆	0.92 0.80 0.45	N90°E	
<p>低地に所在。整理作業時に番号を付けた土坑。古墳中期のSK-218・253と重覆するが新旧不明。遺物はないが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので、古墳時代と考えられる。</p>						
SK-253	12.5-17.5-18.0	楕円形	SK-225より古	2.47 1.45 0.35	N75°W	自然埋没状
<p>低地に所在。整理作業時に番号を付けた土坑。古墳中期のSK-225に切られる。古墳時代のSK-215・218・252と重覆するが新旧不明。掘出した高杯や軒枠から古墳中期後葉。</p>						

第200表 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm)	特 徴	色調 胎土・産成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG5区 SK-31				
1 土師器 杯	口 径 15.2 高 径 3.1	内外面とも口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内外面口縁～体部赤彩。	5YR5/6 橙 胎土・赤・砂粒少量	底上4cm 口～体一部 1
2 土師器 高杯	高 径 2.7	高杯胴部上端の破片。内外面を貫く孔が穿たれており、孔径は外面側0.27mm、内面側0.31mm。外面側は孔の周囲が同心円状に剥落しており、底縁側に内面側から穿孔されたものと見られる。胴部上端の調整は、外面のみナデ。	7.5YR4/6 赤 赤～白～細粒と白～粗 砂～赤～細粒と白～粗 砂	底上4cm 胴上端一部 3
SG5区 SK-34				
1 土師器 杯	口 径 13.2 高 5.8	薄手で精緻な作り。外面～底部丁寧なケズリ。底部丸底。内外面口縁部ヨコナデのみミガキ。外面口縁部ト縁縁あり。口縁部上端は内窪する。内面体部ヨコナデ。底部ナデのち体～底部放射状のやや粗なミガキ。	2.5YR7/8 赤 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上6～22cm 口～底1/3周 14, 32, 36
2 土師器 杯	口 径 12.4 高 5.0 底 4.0	内外面ともほぼ全体が丁寧なミガキ。縦方向(円筒方向)を基本として施される。底部外面のみ一方方向で、浅くくぼむ。外面口縁部ト縁縁はわずかに粗となる。内外面全体仕上げ。	7.5YR7/6 橙 胎土・赤～透明細粒 赤～赤～細粒	底上2～20cm 口～底1/2周 1, 24
3 土師器 杯	高 径 2.0 底 径 4.2	内外面とも表面の剥落が著しい。内外面とも体～底部全体が密なミガキと見られる。体部は内外面方向。内面は一方方向のミガキ。外面底部も一方方向と見られる。浅くくぼむ。残存する体～底部内外面全体仕上げ。2に類似するもの出土。	10YR7/3 に近い黄褐色 胎土 白～微細粒 赤～赤～細粒	底上18cm 体～底1/2周 3
4 土師器 遺物	高 径 4.7	外面口縁部10本1mmのち口縁部上半ヨコナデ。内面口縁部10本1mmのハヤのち口縁部上半ヨコナデ。胴部上端ナデ。	7.5YR5/4 に近い橙 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上27cm 口～体下部 37
5 土師器 高杯	高 径 19.0 底 径 7.1 胴 径 17.8	中形。底面が平く、胴部内外面に縦横の凹凸が表れている。外面口縁部ヨコナデ・胴部上半ナデ・胴部中心～底部ケズリのち口縁～胴部ミガキ。底部突出する平底で、やや丸底を持つ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部のナデで、縦横両方が胴部上半に見られる。底部上5cm付近に積み上げ体による接合面があり、内外面に彫刻の変化として表れる。	5YR7/8 橙 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上12cm 口下～底ほぼ全存 40
SG5区 SK-35				
1 土師器 杯	口 径 13.2 高 4.9 底 4.2	特に内外表面の細かな剥落が著しく、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。口縁部ト縁縁は丸底を持つわずかな粗となる。内面口縁部縦方向。体～底部放射状のミガキと見られる。	10YR8/4 浅黄褐色 胎土 白・赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上7cm ほぼ全存 1
2 土師器 高杯	口 径 11.4 高 径 7.7	外面体部体部～胴部上半密なミガキ。内外面口縁部ヨコナデの密なミガキ。内面体部縦方向。底部一方方向の密なミガキ。内面口縁部はわずかに外反し、外面底部は径5.4cmの部分丸くくぼむ。内外面とも表面の一部に黒色物付着。	10YR7/6 明黄褐色 胎土 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上16cm 杯・胴上半存 2
SG5区 SK-47				
1 土師器 杯か鉢	高 径 3.0 底 径 3.2	内～外面とも表面が細かく剥落しており、特に外面が著しい。外面体部ミガキ。底部ナデで、全体がくぼむ。内面体～底部ミガキで、体部は縦方向。底部付近は放射状と見られる。	5YR8/8 橙 胎土 白・赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上6cm 杯～底全存 1
SG5区 SK-51				
1 土師器 杯	口 径 12.2 高 径 5.2 最大 径 12.3	内口縁。外面体部ケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ヘラナデのちわずかに横方向のミガキ。	10YR7/3 に近い黄褐色 胎土 白・赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上10cm 口～体1/6周 56
2 土師器 高杯	高 径 6.1	柱状筒。外面脚部上半ヘラナデ・下半ヨコナデのち脚部縦方向のミガキ。内面脚部上半横方向の丁寧なケズリ。下半ヘラナデのちヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 胎土 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上28cm 脚1/3周 65
3 土師器 高杯	口 径 26.0 高 径 5.5	口縁部粘土貼付により複合口縁状であり、口縁部上端は平坦。外面口縁～胴部ナデで、細かな粘土の塊が残る。内面口縁～胴部上半ヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐色 胎土 白～赤～細粒 赤～赤～細粒 赤～赤～細粒	底上7cm 口～胴上半1/5周 44

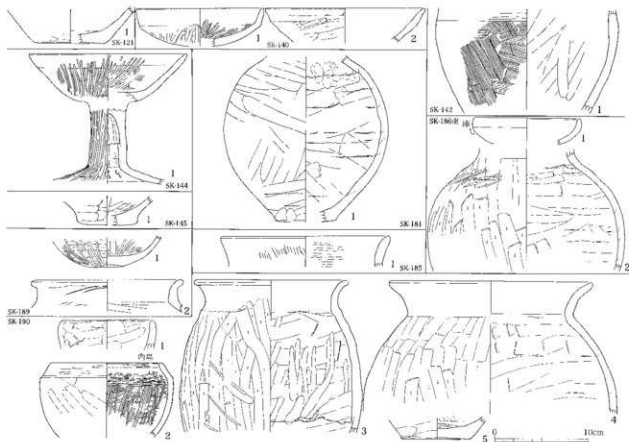
4 土師 甕	高 残 6.9 底 8.6	外面胴部下平緩方向のケズリのちやや練らなミガキ。底部ナデのちミガキ。底面は突出する平底で、外縁がやや浮く。内面胴部下平〜底部ヘラナデのち練らなミガキ。内面胴部下平一部縦付着。外面底部のみ、被熱のため不明瞭となっている。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗い 砂・細粒少、白・赤相〜細粒微量 中〜硬質	底上8〜37cmが統合 製下半〜底共存 1, 4, 7, 8, 41
5 土師 甕	口 復 30.0 高 残 4.3	外面胴部上端ヘラナデ。口縁部内外面ミガキナデ。内面胴部上端ナデで、へつ上土にみよと見られる痕跡・突起あり。残存長1.5cm、深さ0.1〜0.3cm。断面形は先端の丸いU字形で、上平と下平の計2回上具が押し当てられる。	7.5YR5/4 に近い橙 中〜暗黒 白・赤・砂粒少 白〜赤相と赤粒微量 硬質	底上14cm 口一平 22
6 土師 小形甕	口 復 9.4 高 残 4.2	直線的に開き、口縁部上下内面に浅くくぼむ。内外面とも口縁部ココナデの外ちやや練らなミガキ。ミガキは外面が直線的、内面はループ状になる。	5YR5/6 明赤黒 暗赤 白・赤・砂粒少 中〜硬質	底上3〜17cm 口1/2厚 34, 39, 42
7 直土師 甕	高 残 2.5	外面胴部下平はココナデ。内面は強い回転ココナデよりコロコロ目が明確に見える。漆の可能性もある。底面は暗赤色(10R5/3)。SI 116出土土坑片と同一体。	5Y7/1 灰 黒相 白細粒微量 中〜硬質	小破片1点
SG5区SK-82				
1 土師 高杯	口 復 16.7 高 残 3.5	浅い杯形。外面杯部口縁〜体部ココナデのち体部ヘラナデのち緩方向の練らなミガキ。内面口縁〜体部ココナデのち練らなミガキ。口縁部は上端でわずかに外反する。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白・赤・砂粒〜微粒少 中〜硬質	底上11cm 杯口一部 6
2 土師 高杯	高 残 2.0 脚 復 13.0	外面胴部下平ココナデのち緩方向の丁寧なケズリのち練らなミガキ。内面胴部下平ココナデ。	2.5YR6/8 暗 中〜暗黒 黒相〜微粒と赤細粒 と白・透明微粒微量 中〜硬質	底上15cm 脚下半一部 9
3 土師 土甕	高 残 3.7 底 復 6.2	外面胴部下平〜底部ケズリ。底部平直。内面胴部下平〜底部ナデ。	7.5YR5/4 に近い橙 やや暗黒 黒・透明・砂粒〜微 粒少、白・赤相〜細粒と砂粒 微量 硬質	底上3cm 製下半〜底1/3厚 17
SG5区SK-86				
1 土師 杯	口 復 11.8 高 4.7 底 5.4 脚 復 12.2	成形が良く、みみあり。外面口縁部ココナデ・体部ナデのち上端一部ケズリにみよと見られる痕跡・突起あり。内面口縁部ココナデのち体〜底部ケズリのち体〜底部一部ナデ。口縁部上端みよとわずかに平明面となる。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗い 砂粒〜微粒少、白 赤相〜微粒と赤相〜細粒微量 硬質	底上15〜26cm 脚〜底1/4厚、底2/3厚 21, 22
2 土師 高杯	高 残 7.0	柱状腹。外面胴部緩方向の密なミガキ。内面胴部上平〜緩方向のナデで、下平部の接合部が明確に残る。脚部下平ヘラナデのちココナデ。	7.5YR8/6 浅黄緑 暗黒 白・赤相〜細粒少 中〜硬質	底上18cm 脚上平共存 17
3 土師 高杯	高 残 8.4 脚 13.0	柱状腹。外面胴部下平ココナデのち胴部上平〜中色緩方向のヘラナデのち胴部下平緩方向のヘラナデ。内面杯部底部ヘラナデ。胴部上端ナデで、胴部下平の接合部が明確に残る。脚部下平ヘラナデのちココナデ。脚部下端はちやや底打っており、安定させるために小粘土塊が1箇所に貼り付けられる。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗黒 赤相〜細粒少、白・ 黒、砂粒〜微粒微量	底上32cm 脚底存 1
4 土師 甕	高 残 4.1 脚 復 15.0	内外面とも口縁部ココナデ。内面体部ナデ。	7.5YR6/6 暗 中〜暗黒 黒・透明・砂粒〜微 粒少、白相〜細粒微量 硬質	底上28cm 口1/6厚 24
SG5区SK-92				
1 土師 杯	口 復 12.2 高 9.1 底 4.0 最大 12.8	外面体部下平〜底部ケズリのち体部中位わずかにナデ。体部上平は成形のわずかなミガキ。底部ケズリは内側方向。口縁部内外面ココナデ。体〜底部ヘラナデのち練らなミガキ。外面口縁〜体部1/3程に緩方向の強い摺痕があるが、当時のものかどうか確定できず。	10YR7/6 明黄褐色 やや暗い 白細粒と赤相〜細粒 と白・砂粒〜微粒少 中〜硬質	口〜体3/4厚、底共存 西側脚部
SG5区SK-96				
1 土師 小形甕	高 残 5.6 底 2.6 脚 9.6	そばばな玉状の胴部。外面胴部上平緩方向のナデ。一部ヘラナテ工具の当たりによると見られるミガキ状の調整あり。胴部下平〜底部ケズリで、胴部下平に接合部が明確に残る。底部は浅くくぼむ。内面平〜底部ナデで、胴部上平に粗粒相。胴部上端中位に接合部が明確に残る。胴部外径4.8cm。	5YR6/8 赤 中〜暗黒 赤相〜細粒と白相〜 微粒少、透明微粒微量 硬質	底部を上に向けて造形。胴 部中〜下平に露出 脚〜底共存 10
2 土師 高杯	口 復 18.5 高 残 4.6	外面杯部口縁部ココナデ・体部ナデのち口縁〜体部緩方向のミガキ。底部ケズリ。内面口縁〜体部ココナデのち横方向のミガキ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。被熱のためか。	2.5YR6/8 暗 中〜暗黒 白・赤・砂粒〜細粒 少 中〜硬質	底上4cm 杯口一部、体〜底1/3厚 3
3 土師 高杯	高 残 8.5	外面胴部緩方向のミガキ。ミガキは軸正で欠けはあまりない。内面胴部上平丁寧なケズリで、上端は縦筋状の組織相が明確に残る。脚部下平ココナデ。	7.5YR6/6 暗 中〜暗黒 砂粒〜細粒と白細粒 少 硬質	底上2〜3cm。高杯の脚 部の位、リング状で残 存 脚上平共存、脚中位 1/4厚 6, 7
4 土師 甕	高 残 4.6	外面胴部上端ナデ。内外面胴部ココナデ。内面胴部上端ナデ。上端大掛面および肩周には黒色物質が付着する。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや暗い 白・赤相〜微粒少、白・ 砂粒微量 硬質	底上5cm 脚1/4厚 9
SG5区SK-98				
1 土師 杯	口 復 10.0 高 残 4.6 最大 復 10.4	外面口縁部ココナデ。体部丁寧なケズリで、上端は無調整部分あり。上平に粗粒相残る。内面体部ヘラナデのち口縁〜体部ココナデ。内面黒褐色。	10YR7/3 に近い黄褐色 暗赤 白・赤・砂粒〜細粒微量 硬質	口〜体1/6厚 SK-86
2 土師 杯	口 復 12.0 高 残 4.8	成形、調整とも比較的丁寧。外面口縁部ココナデのち一部ナデ。体部丁寧なケズリのち一部ナデ。内面口縁〜体部ココナデのち練らなミガキ。	5YR6/8 赤 暗赤 赤相と砂粒〜細粒と白 相〜微粒微量 硬質	底上22cm 口〜体1/3厚 8
3 土師 杯	口 復 12.8 高 残 2.8 最大 復 13.5	外面口縁部ココナデのち横方向のミガキ。体部ケズリのちナデ。内面口縁〜体部ココナデのち体部放射状のミガキ。	10YR7/4 に近い黄褐色 暗赤 白・赤・砂粒〜微粒少、 黒相微量 硬質	底上23cm 口〜体1/6厚 10
4 土師 杯	高 残 2.0	丸底。外面体部下平〜底部丁寧なケズリ。内面体部下平〜底部ココナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色 中〜暗黒 白・赤・透明微粒少、 褐色微量 中〜硬質	底上3cm 体下半〜底共存 1



第351図 権現山遺跡SG5区 古墳時代の土坑(6) 遺物

5 土師器 小形土器	口 復 12.6 高 残 6.4 最大 復 12.8	内外面とも調整はやや甘く、楕圓面や粘土の層が表面に残る。外面口縁部斜めヨココナデのち唇部斜位のナデ。内面口縁~体部ヘラナデのち口縁部ヨココナデ。	I0YR7/4 に近い黄褐色 磨光 白磁粒少、白・赤磁粒少量 やや破変	底上 22cm 口~体 1/3 周 9、SD-42 15.5-17.5
6 土師器 小形土器	口 復 11.0 高 残 3.8	外面口縁部ヨココナデ。体部斜いなデ。外面の調整は甘く、楕圓面が明確に残る。内面体部ヘラナデのち口縁~体部強いヨココナデ。内面黒褐色。	2.5Y6/4 に近い黄 やや磨光 白磁~微粒少、白磁 粒と赤磁粒少量	底上 22cm 口~体 1/6 周 9
7 土師器 小形土器	高 残 3.0 底 7.4	外面体~底部ケズリのち体部一部ミガキ。底部平底。内面体~底部やや広いヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐色 やや磨光 白磁~微粒少、白・ 赤磁粒少量	底上 14cm 体~底 1/2 周 2
8 土師器 小形土器	高 残 4.1 底 7.6	外面体部斜いなデで、楕圓面残る。底部木葉痕で、平底。内面体~底部ヘラナデ。	7.5YR6/0 暗 やや磨光 白磁と赤・砂粒~粗 粒少量、白磁~微粒少	底上 15~22cm 体下平~底ほぼ充存 4、8
9 土師器 小形土器	高 残 4.8 底 7.0	外面体部斜いなデで、楕圓面残る。底部木葉痕で平底。内面体部ヘラナデ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。	5YR5/6 明赤褐色 やや磨光 白磁~微粒少、白・ 赤・砂粒少量	底上 22cm 体~底 2/3 周 9
10 土師器 小形土器	高 残 1.5 底 残 5.6	外面体部下端ナデ。底部木葉痕で、平底。内面底部ヘラナデ。	7.5YR6/0 暗 磨光 赤磁粒少量 やや破変	底上 22cm 底 1/2 周 9
11 土師器 小形土器	高 残 1.8 底 8.2	外面体部ナデ。底部木葉痕で平底。内面底部ヘラナデで、黒褐色。	2.5Y5/3 黄褐色 やや磨光、白・赤磁~粗粒少量 やや破変	底上 21cm 底 1/2 周 8、SD-42
12 土師器 小形土器	高 残 2.7 底 復 6.4	外面体部強いナデ。底部木葉痕で、平底。内面底部強いナデ。	2.5YR6/0 暗 やや磨光 白・赤磁~粗粒少量 やや破変	底上 15cm 底 1/3 周 9
13 土師器 鉢	口 復 20.2 高 残 11.8	口縁端は外方に張り出してあり、粘土を粘り付けて複合口縁状になるところもある。成用は甘く、赤みあり。外面口縁部斜めヨココナデのち口縁~側部やや光沢のある丁寧ケズリ。内面底部ヘラナデのち口縁部ヨココナデ。内面は部分分厚に楕圓面残る。	5YR6/0 暗 やや磨光 白・赤磁~粗粒少、 白磁~粗粒少量	底上 21~23cm 口~胴 1/6 周 10
14 土師器 土師器	高 残 3.5 底 7.0	外面底部下平~底部丁寧なナデ。ミガキの可能性があるが、表面剥落のため不明。底部は平底で、外縁のみ微粒状になっており、中央は平直に平べんでいる。内面底部下平~底部ヘラナデ。	2.5Y6/3 に近い黄 やや磨光 白・黒・透明・砂粒 粒多、砂粒少量	胴下平 1/5 周、底 1/3 周 9
15 土師器 甕	口 復 13.8 高 残 6.6	外面口縁部ヨココナデのち口縁~側部上平ケズリ。口縁端は厚く、反りすがる。内面口縁部ヨココナデ。胴部上平ヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐色 粗い、白・砂粒~粗粒と黒磁粒 少、赤磁粒と透明粗粒少量	底上 21cm 口~胴上平 1/6 周 9
16 土師器 甕	高 残 1.7 底 残 9.4	外面底部ナデのち木葉痕で、平底。内面底部ナデ。水中にあったため、表面に鉄分が附着している。	I0YR7/4 に近い黄褐色 粗い、砂粒~粗粒多、白磁~粗 粒少、白磁粒少量 やや破変	底上 14~22cm 底 2/3 周 7、9
SG5 区 SK-106				
1 陶器土器 甕	高 残 9.1	外面側面に斜位の細い格子タタキ。内面胴部上平口コナデで下平は無文当具痕の凸凹面。内面一部に自然粘付着。外面右平の中央部に SK-106 出上で、他の破片は SK-20 と 22 で出上。2 と同一個体。	7.5Y5/1 灰 磨光 白磁~粗粒少量 破変	SK-106 の 1 片、SK-20 の 1 片、SK-22 の 2 片が 接合 粗面破片
2 陶器土器 甕	高 残 9.1	外面側面口コナデのち下平。内面側面口コナデ。外面上端にわずかに自然粘付着。内外面とも表面のみ青灰色で、断面は赤灰色。1 や SK-19、20・22・24 などの破と同一個体。	7.5Y5/1 灰 磨光 白磁~粗粒少量 破変	胴部破片
SG5 区 SK-121				
1 土師器 小形土器	高 残 3.9 底 復 7.4	外面体~底部ナデ。体部には粘土の層が残る。底部平底。内面体~底部ナデ。	I0YR7/3 に近い黄褐色 磨光 白磁粒少、白磁~粗粒と 赤磁粒少量 やや破変	体 1/6 周、底 1/4 周
SG5 区 SK-140				
1 土師器 鉢	口 復 13.6 高 残 4.0	外面口縁部ヨココナデ。体部ケズリのち光沢のあるナデ。内面口縁~体部ヨココナデのち体部放射状のミガキ。内面ミガキはやや薄らだが、強く磨き残る。丸底だろう。	I0YR7/4 に近い黄褐色 磨光 白磁粒少、白・赤磁粒 量 やや破変	口 1/4 周、体 2/3 周
2 土師器 高杯	口 復 17.0 高 残 3.6	外面口縁部ヨココナデ。体部ケズリ。内面口縁~体部ヨココナデ。内面は表面の剥落著しい。部仕上げの可能性あり。	5YR5/6 明赤褐色 やや磨光 白・赤・透明粗~粗 粒少、やや破変	口~体 1/6 周
SG5 区 SK-142				
1 土師器 土師器	高 残 11.1 胴 復 19.4	外面口縁部下平コナデのち横方向のミガキ。胴部 8 cm/1cm のハケ。内面口縁部下平~胴部光沢のあるナデ。内面はミガキの可能性もあるが、不十分ではなく磨きの可能性が低く、外面残存部分体保存着。	I0YR5/2 灰黄褐色 粗い 白・透明粗~粗粒少 破変	口下平~胴 1/4 周
SG5 区 SK-144				
1 土師器 高杯	口 復 16.8 高 残 13.1	柱状脚。杯部口縁部ヨココナデのち口縁~底部ミガキ。胴部上平光沢のないミガキ。下端のみ口コナデのち胴部下平残らな光沢のないミガキ。コナデを備す部分の上端はわずかに段差となる。内面杯部口縁部ヨココナデのち口縁~底部やや斜位のミガキ。胴部上平ナデで、中位に接合痕を明確に残す。下平ヘラナデのち下端のみヨココナデ。外面杯部体~底部・内面杯部体部熱熱のため表面が粗く剥落する。	5YR6/0 暗 やや磨光 赤磁~粗粒多、白・ 砂粒~粗粒少量	杯口~底 1/3 周、胴上 平充て、胴下平 1/4 周
SG5 区 SK-145				
1 土師器 壺小甕	高 残 3.1 底 復 6.4	外面側部下端ナデ。底部ナデで突出する平底。内面底部ナデ。	5YR6/0 暗 やや磨光 白・赤磁粒少量、砂 粒~微粒少、やや破変	底 1/3 周

第8章 権現山遺跡SG5区



第352図 権現山遺跡SG5区 古墳時代の土坑(7) 遺物

SG5区 SK-181

1 土師器 甕	高 17.5 底 6.4 胴 17.4	外面製~底部ナデで、胴部下半には曲く働される部分あり。底部は丸味を持つ平底。内面製~底部ヘラナデで、胴部上半~中位に粗粒面明瞭に残る。	10YR7/3 に近い黄緑 や今緑! 白・砂粒微量。白・赤・砂粒~細粒少 や今軟質	底上8cm 製~底1/4周 1-11層, 2-11層
---------------	---------------------------	---	---	----------------------------------

SG5区 SK-185

1 土師器 壺分装	口 復 18.0 高 3.2	外面口縁部縦方向の5本/1cmのハケのちヨコナデ。内面口縁部縦方向の5本/1cmのハケのちヨコナデ。	5YR5/4 に近い赤褐 や今緑密 白・赤褐と白・赤・砂粒微量 硬質	口一部
-----------------	-------------------	--	---------------------------------------	-----

SG5区 SK-186 前

1 土師器 杯	口 復 11.6 高 2.8	白色の粗粒な粘土。内外面とも表面の彫割が著しく、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面口縁~体部ヨコナデ。外面口縁部~内面全体漆仕上げ。	10YR7/3 に近い黄緑 硬質 白粒少 や今軟質	口~体1/5周 面一括
2 土師器 甕	高 12.9 胴 20.8	外面胴部上半縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ・胴部中心縦方向のケズリ。胴部上下には、ミガキ状の細いヘラナデが集中する部分あり。部分的な漆の移正分。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。胴部には部分的に粗粒面が残る。	10YR8/4 浅黄褐 硬質 黒細粒少。赤細粒と白緑 粒微量 や今硬質	胴上半~中位1/3周 面、面一括

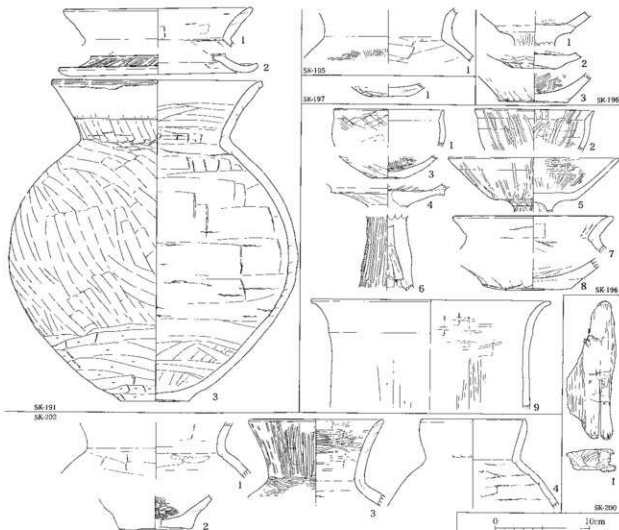
SG5区 SK-189

1 土師器 杯	高 3.2 底 3.2	外面体~底部ケズリのち疎らなミガキ。底部くぼむ。内面体~底部放射状のやや疎らなミガキ。	5YR7/6 橙 や今硬密 赤褐~細粒多。透明 則~細粒と白粒~微粒微量 や今軟質	底上14cm 赤褐~底1/2周 2
2 土師器 甕	口 復 16.2 高 3.4	口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ケズリ。外面口縁部には、縁周状の細い赤線2本あり。意図的に施されたものかどうか判断できない。	5YR7/6 橙 や今硬密 赤褐~細粒少。白・砂粒~細粒微量 硬質	底上21cm 口一部 1

SG5区 SK-190

1 土師器 小形土器	口 復 9.5 高 3.1 最大 復 10.4	内面は丁寧に調整されるが、外面は荒い。外面口縁~体部ナデで、前面正反面や縁部横。粘土の働き顕著。内面口縁~体部ナデ。	10YR6/1 灰灰 硬密 白・赤細粒微量 や今硬質	口~体1/4周
2 土師器 鉢	口 復 11.2 高 7.8 最大 復 14.2	口縁部は内輪し。底部内面は垂直に近い面となる。外面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ。体部光沢のあるナデ。内面口縁~体部ヨコナデのち疎らなミガキ。ミガキは口縁部中心付近を除き、密に施される。ミガキは細く、特に口縁部下端に横方向に施される最後のミガキが細い。内面全体黒色処理。	5YR6/6 橙 や今硬密 砂粒少。白緑~細 粒と赤褐~細粒微量 硬質	口~体1/4周 ドリッド27, 57

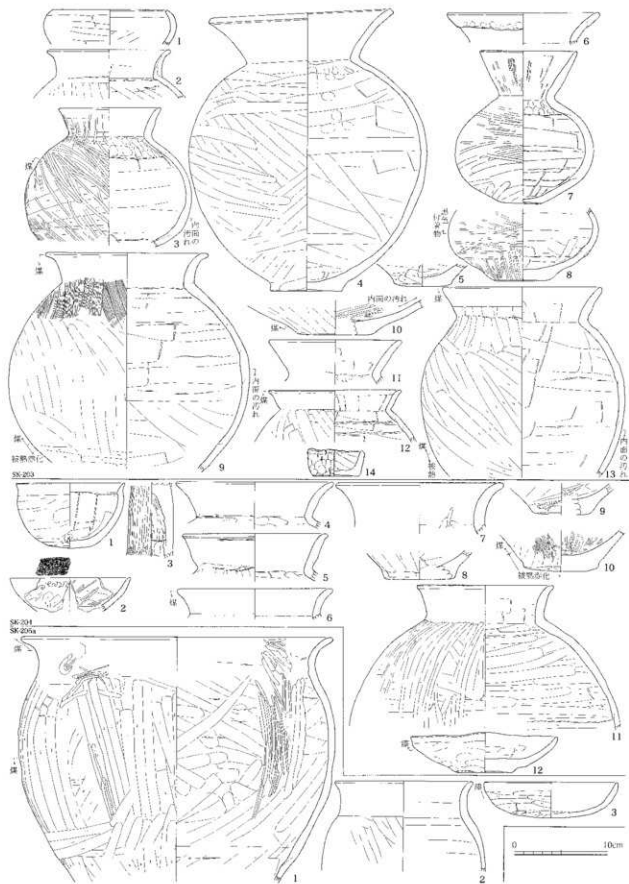
3	土師器 甕	口 径 16.2 高 残 16.1 最大 19.2	外面口縁部ヨコナデのち胴部ケズリ。胴部には、ケズリ後に施されたミガキの土具痕あり。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデのち縦方向の線らなナデ。胴部中央に積み上げ休止による段白痕が明瞭に残る。	2.5V5/4 黄緑 やや粗い 白・砂粒～細粒少、 白濁と赤・黒粒～粗粒微量 破損	口1/3周、胴2/3周 G27.54, グリッド27.54
4	土師器 甕	口 径 21.6 高 残 13.8 底 残 7.2	外面胴部上平ケズリのちヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上平ヘラナデ。口縁部は底気味に立ち上がったのち外反するが、端部はわずかに内彎しており、内彎がわずかにくぼむ。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・砂粒～細粒少、 白濁と赤粒～粗粒微量 やや破損	口～胴上平1/2周 グリッド27.54、G27.54
5	土師器 甕	高 残 2.3	胴部下端～底部ナデで、底部は平底。内面底部強いナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粒～細粒多、白濁 ～細粒少 破損	底3/4周 31 グリッド7
SG5 区 SK-191					
1	土師器 甕	口 径 20.0 高 残 4.2	外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・砂粒～細粒少、 白・砂濁と赤粒粗粒微量 破損	口1/4周
2	土師器 高杯	高 残 2.0 脚 径 21.0	脚部上平の明瞭な段を持ち、端部は面取りされて反り出る。外面脚部下平ヨコナデのち縦方向の線らなミガキ。内面脚部下平ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR6/0 橙 やや粗い 赤粒～細粒少、白濁 ～細粒微量 やや破損	SK 192 底上 10m 脚下平 1/6周 SK 191・192.36 16
3	土師器 甕	口 径 22.4 高 33.9 底 7.2 最大 30.6	外面口縁部縦方向のヘラナデのち上平ヨコナデのち中央に沈線無文。口縁部は面取りされる。胴部ナデのち下ケズリ。底部ケズリのちナデで、やや突出する平底。内面ヘラナデのち上平ヨコナデ。胴～底部ヘラナデで、胴部上平～中央に部分的に積層構造が残る。	10YR5/2 灰黄褐色 粗粒 白・透明細粒～微粒少、 白・赤・砂粒微量 やや破損	底上 10m 口1/3周、胴～底気味 25、グリッド 8、40
SG5 区 SK-195					
1	土師器 甕	高 残 5.7	外面胴部上平6本/10mのハケのち口縁部～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部上端ヘラナデ。口縁部上平は細かく割れており、人為的に打ちかかれた可能性がある。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・砂粒多、白・ 砂濁～粗粒微量 破損	底上 12cm 口下平～胴上平 1/4周 2
SG5 区 SK-196					
1	土師器 高杯	高 残 3.7	全体に表面が平滑しており、調整不明な部分多い。外面杯部体～底部ナデ。土師器高杯。杯部上端ヘラナデ。杯部上端の茶なミガキ。内面杯部体～底部ナデで、ミガキの可能性あり。脚部上端ナデ。脚部上端元径 4.2	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粒～細粒多、白濁 ～細粒少 やや破損	底上 2cm 杯体～底 1/3周 1
2	土師器 土師	高 残 1.8 底 4.6	外面体部下平ケズリのち軽いナデ。底部ナデで、全体がくぼむ。内面底部ヘラナデ。	5YR7/4 に近い緑 やや細密 赤粒～細粒少、砂濁 と白粒粗粒微量 やや破損	体～底 1/2周
3	土師器 甕	高 残 3.2 底 7.3	外面胴～底部ナデ。胴部は表面の割割が著しい。底部は平底で、外周寄りがテーナデ状況となっている。内面胴部下端～底部5本/10mのハケ。外面胴部上端～底部傾斜により赤染している。	7.5YR7/6 橙 やや細密 白・赤・砂粒細粒 やや破損	胴下端～底 1/2周 UTN SG TX13-18
SG5 区 SK-197					
1	土師器 鉢	高 残 1.4 底 4.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部平底。内面底部ナデ。	2.5YR4/6 赤黒 粗い 砂粒～細粒多、白濁～細 粒少、白濁微量 破損	底上 8cm 口1/3周 1
SG5 区 SK-198					
1	土師器 杯	口 径 11.6 高 残 4.0 最大 径 12.0	内面口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部線別。線別は段成層と見られ、積層構造を呈するように多数施される。右半が口縁の方向がより明確。体部下平丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデ。体部ナデと見られるが、表面平滑のため不明。	2.5YR5/8 明赤黒 やや細密 赤粒～細粒と白粒粗 粒少 やや破損	底上 28cm 口～体 1/3周 G41、44
2	土師器 杯	口 径 12.6 高 残 4.4	内面口縁。外面口縁～体部下平ヨコナデ・体部高いナデのち口縁～体部縦方向の線らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部縦方向の線らなミガキ。	5YR6/8 橙 やや細密 赤粒～細粒少、白濁 ～粗粒微量 やや破損	口体 1/5周 G41
3	土師器 杯	高 残 2.5 底 3.2	外面体～底部丁寧なケズリ。底部平底で、全体が浅くくぼむ。内面体～底部ヘラナデのち多方向のやや密なミガキ。	5YR6/6 橙 粗粒 白粒粗少、白粒粗粒 やや破損	底上 32cm 体～底 3/4周 グリッド 37・28
4	土師器 高杯	高 残 2.6	杯部体部下端は明確な線をなす。外面体部下端の積層部ヨコナデ。底部ナデと見られるが、磨滅のため不明。内面底部ナデのち放射状のミガキ。底部中央は積合面から欠損する。杯部底部元径 12.0cm。	7.5YR7/4 に近い緑 やや粗い 赤・砂粒粗多、白・ 黄・透明細粒少、白・赤・砂粒 粗粒多 やや破損	底上 16cm 杯底 1/3周 39
5	土師器 高杯	口 径 18.0 高 残 4.9	内外面と表面が平滑している部分多い。外面杯部口縁部ヨコナデ・体部下平～底部ケズリのち口縁～底部縦方向のミガキ。脚部上端ヘラナデのち縦方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ケズリのち口縁～底部ミガキ。ミガキは体～底部が放射状。口縁部は横方向。脚部上端強いナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤・砂粒粗多、白・ 灰色濁と白粒粗粒多 やや破損	杯口～体 1/3周、底 2/3周 UTN SG TX13-18、TX13-18-2
6	土師器 高杯	高 残 8.0	柱状段。外面脚部上平ミガキ。残存部下部には、下平のミガキの土層が見られる。内面脚部上平ナデ。土層約 2cmの部分は僅 1.3cm程度の円筒状であり、土層中央に粘土の突出部が残ることから、磨のような円筒状工具を使用して成形したと見られる。残存部下平ナデで、接合面が顕著に残る。脚部上端元径 4.0cm。	7.5YR7/6 橙 やや細密 赤粒～細粒多、白濁 ～粗粒微量 やや破損	中央部 脚上平完存 58
7	土師器 甕	口 径 17.0 高 残 3.9	外面口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。胴部上端ナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粒～細粒多、白・砂 濁～細粒と赤粒～細粒微量 やや破損	底上 15cm 口1/3周 79、グリッド 36.1a、 グリッド 37-7
8	土師器 甕	高 残 3.3 底 9.4	外面胴部下端ヘラナデ。底部ケズリ。底部はやや突出する平底で、外周が多量に削られるため丸扁を帯びた形状となる。中央がわずかにくぼむ。内面底部ヘラナデ。	7.5YR7/4 に近い橙 やや細密 白粒～細粒少、白濁 と赤・透明細粒～粗粒微量 やや破損	底上 32cm 底気味 7、80



第 353 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (8) 遺物

9 土師器 甌	口 径 25.3 高 径 11.5	表面の磨滅が著しく、特に内面は磨蝕不明な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ。胴部縦方向のケズリ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち横方向のミガキ。胴部縦方向のミガキ。	7.5YR7/6 橙 赤黒～細粒少。白・ 赤緑と白・砂粗～細粒微量 や軟質	口～胴一部 UT-TN-SG-TX13-18
SG5 区 SK-200				
1 木材 不明	長 径 14.7 幅 径 5.3 厚 径 2.4 重 径 25.6	白炭木。全体に欠け磨滅しており、加工痕は認められない。同一と見られる小枝の根本部分片も出土することから、加工があったとしても切斷・分別される程度であったと想定される。	10YR6/0 明黄褐色	破片
SG5 区 SK-202				
1 土師器 甌	高 径 5.9	外面口縁部下平ヨコナデ。胴部上平ヘラナデ。内面口縁部下平ヘラナデのちヨコナデ。胴部上平ヘラナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 や中硬密 砂粗～微粒少。白・ 赤・砂粗～細粒微量 や中硬質	口下平～胴上端 1/6 周 胴下脚
2 土師器 甌	高 径 3.6 底 径 7.4	外面胴部下端～底部ナデないヘラナデと見られるが、表面剥落のため不明。底部は突出する平底で、全体がくぼむ。内面胴部下端～底部 8 本/1cm のケズリ。	10YR7/2 に近い黄褐色 や中硬密 白・赤細粒微量。砂 粗～微粒少。硬質	胴下端～底 1/3 周 胴～微粒少。硬質
3 土師器 甌	口 径 14.4 高 径 9.1	外面口縁部ヨコナデのちミガキ。胴部上端ミガキ。胴部の横方向のミガキのうち上端の一部は強く集される。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのちや中線なミガキ。胴部上端ナデと見られるが表面の剥落著しく、不明。	7.5YR6/6 橙 や中軟い 砂粗～細粒多。白・ 赤黒～細粒微量 硬質	底上 4.2cm 口一部欠 1
4 土師器 甌	口 径 11.4 高 径 9.5	内外面とも表面磨滅のため調整不明。口縁部内外面のヨコナデ。外面口縁部下平のヘラナデのみ確認できる。内面胴部上平細粒微量。	5YR6/8 橙 や中硬密 白・赤・砂粗～細粒少。 白・赤・砂粗～微粒量 や中硬質	口 3/4 周。胴上平 1/4 周
SG5 区 SK-203				
1 土師器 杯	口 径 11.8 高 径 3.7 最大 径 14.0	口縁部内側。外面体部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部上平ヨコナデ。体部下平ナデ。	5YR5/4 に近い赤褐色 や中硬密 白・赤・砂粗～微粒少 硬質	底上 9cm 口～体一部 3/4

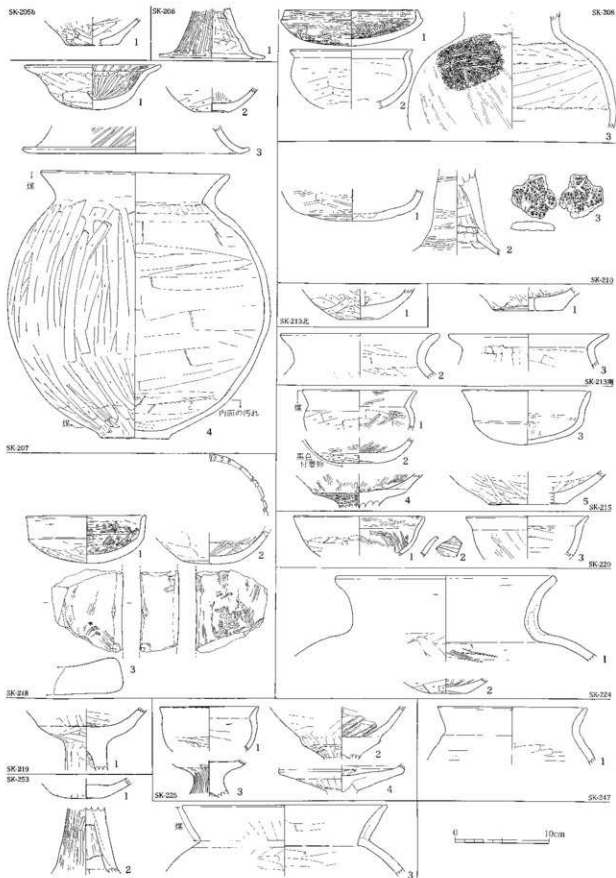
2	土師器 甕	口 14.0 高 残 4.7	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 糖 やや硬質 透明細粒と白顔一微 粒少、白・透明細粒微量 硬質	底上 16 ~ 22cm 口はほぼ完存 32、35
3	土師器 甕	口 10.8 高 残 14.7 最大 17.6	火に掛けられた地跡や埋跡。外面口縁部ヨコナデのち縦方向の線らなミガキ。胴部上半ナデ・下半ケズリ式のち斜位のミガキ。胴部下半には横み上げ 体止による接合面があり、外面には縦線として表れている。内面口縁部ヨ コナデで、表面の割れ跡なし。胴部上端ナデで、断面直上と接合面残る。 胴部ヘラナデで、胴部下半に横み上げ体止による接合面あり。外面胴部下 半平直。内面胴部下半表面細かく割れ跡しており、接合面付近より上位に は平直。	5YR5/6 糖 やや細かい、赤黒～細粒と透明細 粒多、白顔～細粒少、赤微量 硬質	底上 33cm 口～胴完存 4
4	土師器 甕	口 19.5 高 29.9 底 7.8 最大 25.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部下半ケズリのち胴部丁寧ナデ。底部はケズリ で、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ、胴ヘラナデ。口縁部は 直上であり、面の内側は内外面とも溝状にわずかにぼむ。	7.5YR6/6 糖 やや細かい、白・黒・赤・砂微粒 多、白・黒・赤・砂微～細粒少、 白・赤・砂微微量 硬質	底上 1 ~ 20cm ほぼほぼ存 1、6、7、22
5	土師器 小形甕	口 残 2.4 底 6.0	外面胴部上端ナデのちケズリ。底部ケズリで、丸底を持つやや突出する平 底。内面胴部下端～底部ヘラナデで、中央に窪で成形された径約1cm、深 さ2mmの円形のくぼみあり。	2.5YR5/8 明赤 やや細かい、白・赤・砂微～微粒 少、白・砂微～細粒微量 やや硬質	胴下端～底 1/2 周 20
6	土師器 甕	口 残 16.0 高 残 3.4	口縁部は粘土貼り付けによる複合口縁。内外面口縁部ヨコナデ。外面口縁 部上半には、ヨコナデで消えなかった断面直が見える。	10YR7/2 に近い黄褐色 やや硬質 白・赤微～微粒少 やや微量	底上 25cm 口 1/5 周 27
7	土師器 小形甕	口 10.3 高 16.1 底 4.4 最大 14.7	全体に表面がやや磨滅する。外面口縁部ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミ ガキの線が不明。強くミガキを束集したような縦方向の横溝あり。胴部 ナデのち胴部上半～中位ミガキ。底部ケズリで、全体がくぼむ。内面口 縁部上ケズリのちヨコナデ、胴部上端ナデで、断面直前残る。胴～底部ヘ ラナデ。胴部上半、下半に横み上げ体止による接合面があるほか、胴部中 位には縦線がわずかに残る。胴部下半の接合面から下は白色が強い粘土 には色が強い粘土もあり、接合面に埋り土が見える。	2.5YR6/8 糖 やや細かい、白・赤微と白・黒・ 赤・透明細～細粒微量 やや硬質	底上 12 ~ 33cm 口～胴一部欠 14, 20, 21, 31, 33
8	土師器 小形甕	高 残 7.6 底 5.3 最大 残 15.8	内外面とも表面が磨滅している部分が多い。外面胴部上半～中位横方向、 下半縦方向のミガキ。胴部下半には横み上げ体止による接合面があり、 外面には段状として残る。底部ケズリで、突出する平底である。内面胴 部ヘラナデで、胴部下半の接合面が段状などとして残る。外面黒色物質 は透ける。	10YR8/3 浅黄褐色 断面 白顔～微粒と赤細粒微量 軟質	底上 5 ~ 33cm 胴上半～底 1/2 周 4、15、29、37、残ヨ リ上
9	土師器 甕	口 17.2 高 残 23.0 最大 25.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半 8本/1cmのハケ・胴部下半ケズリのち胴部 丁寧ナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデで、胴部上半～中位には 縦線が透ける。外面胴部下半に段付。断面直は被熱のため かかかくレータースに表面が割れする。内面胴部下半ケズリ。	10YR7/6 明黄褐色 やや細かい、白・砂微～細粒少、 白微量 硬質	底上 12cm 口～胴下半ほぼ完存 2、5
10	土師器 甕	高 残 3.7 底 残 8.0	外面胴部上端ナデ。底部は表面が細かく割れ跡しているため調整不明。平底。 内面胴部上端～底部ヘラナデのち縦方向のミガキ。外面胴部上端保付。内 面胴部上端コグ付着。	10YR4/1 灰 やや細かい、透明細～微粒多、白・ 赤微と白・赤・砂微細粒微量 硬質	底上 19cm 胴～底 1/3 周 30
11	土師器 甕	口 残 13.0 高 残 5.2	外面胴部上半ヘラナデのち口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデ のちヨコナデ。胴部上半ナデで、結構残る。胴部と口縁部は色調の異なる 粘土を用い、胴部成形と同時に小さな口縁部を作ったのち、褐色の強い 粘土で口縁部を作っているのがわかる。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや細かい、白・砂微～細粒少、 白・赤・砂微微量 硬質	底上 15 ~ 24cm 口～胴 1/5 周 11、28
12	土師器 甕	口 残 14.0 高 残 5.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半丁寧ヘラナデ。内面口縁部ヘラナデのち ヨコナデ。胴部上半ヘラナデで、結構残るが明瞭に異なる。外面口縁～胴部 に保付。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ナデ。	2.5Y3/1 黒 やや細かい、白顔粒多、白・砂微 粒と赤細粒微量 硬質	底上 16cm 口～胴上半 1/6 周 10
13	土師器 甕	口 16.8 高 残 20.0 最大 21.4	外面口縁部～胴部上半ヘラナデ・胴部下半ケズリのち口縁部上半ヨコナデ・ 胴部中位ケズリ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部 には縦線が透る。外面胴部中位以下保付。下半は被熱により表面割れす る。内面胴部中位以下は表面が細かく割れ跡しており、下半はコグが付着 している。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや細かい、透明細～微粒多、 白・砂微～細粒と白色針状物質 多、白・赤微～細粒微量 硬質	底上 14 ~ 31cm 口～胴一部欠 5、18、26、30
14	土師器 小形土器	口 残 6.0 高 2.9 底 残 4.8	成り目。外面口縁～底部斜ナデで、口縁部に粘土のヒビあり。底部平 底で、わずかにくぼむ。内面口縁～底部ナデ。	7.5YR7/4 に近い黄 やや硬質 白・赤微～微粒少 硬質	口～体 2/3 周、底完存 FAヨリ上
SC5 区 SK 204					
1	土師器 杯	口 11.4 高 6.9	内面口縁。全体的に赤みあり。外面口縁部ヨコナデ。体部下半～底部ヘラ ナデ。体部上半は成形時のナデのみ。底部はひびで、丸底を持つ平底。 内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや硬質 白・砂微粒少、白・ 赤微～細粒微量 硬質	底上 55cm ほぼほぼ存 1
2	土師器 杯	口 残 12.7 高 残 3.6	外面口縁部～体部ヨコナデのち体部ケズリ・口縁部外面に段成りの切跡を先 端が欠いた工具で掘く。右側の横長の線も、左側の溝状の線も、右から 左へと弱っている。内面口縁部～体部ヨコナデのち体部ナデのち斜位の線ら なミガキ。	5YR5/6 明赤 やや硬質 赤微～細粒少、白顔 ～細粒微量	口～体一部 28
3	土師器 高杯	高 残 8.0	柱状線。外面胴部上半縦方向の赤色ミガキ。残存部下端には、胴部下半に 施されると思われるミガキの一端が見られる。内面胴部上半ナデで、腹方 向の粘土の残存。残存部下半には、縦線が明瞭に残る。胴部上端は 4.3 cm。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや硬質 白・砂微粒少、白顔 ～細粒と赤細粒微量 やや硬質	底上 52cm 胴上半完存 28
4	土師器 甕	口 残 16.6 高 残 5.0	内外面口縁部ヨコナデ。胴部上端はわずかに残っており、内外面ともナデ と見られる。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや硬質 砂微粒少、白・赤微 ～細粒微量 半や硬質	底上 57cm 口 1/6 周 2
5	土師器 甕	口 残 15.4 高 残 5.0	外面口縁部～胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。口縁部は丸く厚す る。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。	5YR6/6 糖 やや細かい、白・砂微粒少、砂・ 白微～赤細粒微量 硬質	底上 61cm 口 1/5 周 11
6	土師器 甕	口 残 16.4 高 残 3.4	口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部保付。	10YR7/4 に近い黄褐色 断面 赤・砂微～細粒微量 硬質	底上 56cm 口 1/6 周 14
7	土師器 甕	口 残 17.6 高 残 5.4	内外面口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや細かい、白・赤・砂微粒少、 白微量 硬質	底上 68cm 口 1/6 周 12



第354図 権現山遺跡SG5区 古墳時代の土坑(9) 遺物

8 土師器 甕	高 残 3.0 底 復 7.6	外面胴部へ端ナデ、底部は表面剥落のため不明。底部は突出する平底。内面胴部下縁~底部へラナデ。内面胴部下縁~底部コナデ付着。	5YR5/4 に近い暗 やや暗い、白・砂礫~細粒少、 赤褐色微量 灰質	胴下縁~底 1/4 周 UT:TN 5G TX13 18.2
9 土師器 甕	高 残 3.3 底 復 6.0	外面胴部へ端~底部へラナデ。底部はやや突出する平底で、丸味を持つ。内面胴部下縁~底部へラナデのち多方向の線らなミガキ。	7.5YR6/6 暗 やや暗赤 白粗~細粒少、白粗 と赤褐色微量 灰質	底上 60cm 胴下縁~底 1/4 周 24
10 土師器 甕	高 残 4.4 底 8.0	外面胴部へ端ナデのち縦方向の線らなミガキ。底部ケズリ。底部は突出した平底で、丸味を持つ。内面胴部下縁~底部へラナデのち縦方向の線らなミガキ。へラナデの工具先端は削れており、本銅製な鋳物が見える。外面胴部へ端に付着。外面底部は剥落のためか表面が部分的に赤変している。	10YR6/3 に近い黄緑 やや暗赤 白粗~微粒少、白粗 赤褐色	底上 53~56cm 胴下縁~底迄存 18, 19
11 土師器 甕	口 残 14.4 底 復 15.2 最大 復 28.6	外面口縁部ヨコナデ。口縁端部は肥厚しており、外向きに面取りされる。胴部上へラナデ・中位横方向のケズリのち胴部縦方向のナデ。内面口縁部へラナデのちヨコナデ。胴部上へラナデのち縦方向のナデ。外面胴部中位に付着。	10YR5/4 に近い黄緑 暗い、白・赤・砂礫~細粒少、 白・灰赤・砂礫少	底上 48~52cm 口~胴上 1/3 周 20, 27
12 土師器 杯	口 15.5 高 4.3 底 5.9	全体に赤みあり。外面口縁部ヨコナデ。体部は成形時のナデのみ。底部ナデで、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ。体へ底部へラナデ。口縁~体部の欠損部付近には、内外面と断面ともに黒色物質（漆）が付着。	7.5YR7/6 暗 やや暗赤 白・赤粗~微粒少、 白・赤粗~粗粒微量 やや軟質	底上 59cm 口~体 2/3 周、底迄存 25
SG5 区 SK 205a				
1 土師器 甕	口 残 33.0 高 残 25.8	鉢形。外面胴部ケズリのち下平ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部へラナデ。胴部中央口縁~胴部に大きな隆起部あり。外面は口縁部に粘土層が付いた口縁~胴部一部にミガキ。内面は鉢のみに粘土を塗り、鉢の底にミガキが塗られる。土層全体はこの隆起部分で大きく歪む。外面胴部下平わずかに隆起する。	10YR5/2 灰黄緑 暗い、砂礫~細粒多、砂礫と 白・赤粗~粗粒微量 灰質	底上 25cm 口~胴 1/3 周 5
2 土師器 甕	口 残 14.6 高 残 9.5	外面胴部ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ナデ。	10YR7/6 明黄緑 やや暗赤 白粗~微粒少、白雲 母層~粗粒微量 やや軟質	底上 11cm 口~胴一部 1
3 土師器 杯	口 14.1 高 3.8	外面口縁部ヨコナデのち体へ底部丁寧なケズリ。底部丸底。内面口縁~体部ヨコナデ。底部ナデ。	10YR7/3 に近い黄緑 暗赤赤、白微粒少 やや軟質	口~底 1/2 周 1B
SG5 区 SK 205b				
1 土師器 鉢か	高 残 2.9 底 復 5.6	外面胴部裏より横方向のへラナデ。底部ケズリ。底部は平底で、外周は面取り状に削られている。内面胴部下平~底部へラナデ。	10YR6/4 に近い黄緑 やや暗い、白粗~微粒多、平透明、 砂礫~粗粒微量 灰質	底上 24cm 胴下平~底 1/3 周 8
SG5 区 SK 206				
1 土師器 高杯	高 残 5.3 脚 11.2	小形。外面胴部上平~中位縦方向のナデ・胴部下端ヨコナデのち脚部縦方向のミガキ。胴部上部は平ナデ。内面口縁部下平ナデ。下から見て右回りの螺旋状に施された細線が見える。胴部下端ヨコナデ。	2.5YR8/8 暗 赤赤 赤粗~細粒と白・平透明 微粒少 やや軟質	胴上平~中位迄存、胴下 端 1/2 周 1
SG5 区 SK 207				
1 土師器 杯	口 残 14.4 高 4.7	丸底。外面口縁部ヨコナデ。体部ナデのち体へ底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ。体へ底部ナデのち口縁~底部足縁でよい放射状のミガキ。口縁部に赤みあり。	7.5YR5/4 に近い黄緑 暗い、白・砂礫~細粒多、白・ 砂礫と赤粗~粗粒微量 赤質	口~体 1/4 周、底迄存 2、底地一括B
2 土師器 杯	高 残 2.6 底 復 3.4	外面胴部丁寧なケズリ。底部はケズリで作出されており、いびつにくぼむ。内面体へ底部放射状のミガキ。内面体へ底部は、クレーター状に深さまで剥落してしまった部分が多い。	7.5YR8/3 浅黄緑 暗赤赤、砂礫~細粒少 やや軟質	体~底 1/2 周 9
3 土師器 高杯	脚 復 24.0	丸底。外面胴部下平ヨコナデのち斜位の線らなミガキ。端部は反り返り、わずかに面取りされる。内面胴部下平ヨコナデ。被熱のためか、内外面とも表面が剥落している部分が多い。	5YR7/6 暗 やや暗赤 赤粗~細粒少、赤・ 砂礫と白粗~粗粒微量 やや軟質	胴上 1/8 周 8
4 土師器 甕	口 19.9 高 28.1 底 7.2 最大 27.8	外面口縁部ヨコナデ。胴部下平ケズリのち胴部上平ケズリ。底部ケズリで、突出する平底。内面口縁部へラナデのちヨコナデ。胴~底部へラナデ。胴部上縁部直上縁あり。胴部下平の積み上げ体止による接合痕は、胴部の変色や粘土の層状としてわずかに見える。口縁部中位から約 8cm まではそれぞれ上の部分より赤味の強い粘土を使っている。外面口縁~胴部に少量の付着。	10YR6/3 に近い黄緑 暗い、白粗~微粒と砂礫~微粒 多、白粗と赤粗~粗粒微量 赤質	口全周、底全周 1, 3, 4, 5, 6, 7, 22, G41, SK198
SG5 区 SK 208				
1 土師器 杯	口 残 14.0 高 3.8 最大 15.0	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。口縁部は短く、内傾している。体へ底部ナデのち線らな多方向のミガキ。内面口縁~胴部ヨコナデのち横方向のミガキのち体部斜位のミガキのち底部~内面のミガキ。内面ミガキは比較的均一に塗られる。口縁端部は剥落している部分が多い。内面は炭末吸着による黒色処理の可能性あり。	10YR7/3 に近い黄緑 暗赤 透明微粒多、透明粗粒と 白粗~微粒少 やや軟質	底上 63cm 口~体 2/3 周、底迄存 2
2 土師器 高杯	口 残 13.0 高 残 6.7	内面口縁。内外面とも表面が剥落しており、調整不明な部分が多い。外面体部ケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ナデ。	5YR7/8 暗 やや暗赤 赤粗~細粒少、白・ 砂礫~粗粒微量 やや軟質	口~体 1/4 周
3 土師器 甕	高 残 12.4 脚 復 22.0	外面胴部一部および内面胴部は表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。外面胴部ヨコナデのち横方向のミガキ。胴部斜位のミガキで、胴部上平に調整具痕方として使用した痕跡と見られる条線あり。内面胴部調整不明。胴部上へラナデのち中位ケズリ。上平に粗粒線残る。中位に積み上げ体止による接合痕明瞭に見える。	2.5YR5/8 明赤 やや暗い、赤粗~細粒少、白・ 砂礫~粗粒微量 灰質	底上 74cm 胴~胴中位 1/3 周 1
SG5 区 SK 210				
1 土師器 小形甕	高 残 3.4 底 4.2	内外面とも表面はやや滑潤する。外面体へ底部ナデのち体部ミガキ。体部上縁には接合痕と見られる不整なほみあり。底部は明確には作出されていないが、中央の径 4.2cm の部分がほぼ平坦になっている。内面体部ヨコナデ。底部は剥落のため不明。	10YR8/3 浅黄緑 暗赤 赤粗~細粒と砂礫少、 白粗~粗粒微量 やや軟質	底上 45cm 口~体 1/6 周、底 1/2 周 2

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 355 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (10) 遺物

2	土師器 高杯	高 残 9.1	柱状腹。外面胴部上平~中位丁帯ナデのち横方向の繰らなミガキ。内面胴部上平わずかにヘラナデで、しぼり目跡。中位ナデで、縦横筋者に残る。縦横より下位はヘラナデのちヨコナデ。上端の欠損の状況から、杯底部の突出部を胴部に挿入して適合したものと思われる。	2.5YR5/8 明赤釉 やや暗赤 赤釉~細粒と白微粒 やや細粒	胴上平~中位一部欠
3	土製品 埴土 厚 1.0 重 20.8	長 4.6 幅 4.6 厚 1.0 重 20.8		10YR6/3 に近い濃緑 やや暗い 透孔粒と白・灰色 細~粗粒少、白・透明微粒 微質	成形
SG5 区 SK-213 北					
1	土師器 皿	高 残 3.2 底 残 3.4~4.0	中形。外面胴部下平ケズリ。底部ケズリのちナデで、全盤円形にくぼむ。内面胴部下平~底部ヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや暗赤 白・赤釉~細粒少 やや微質	底上2cm 割3/4周、底完存3
SG5 区 SK-213 南					
1	土師器 皿	高 残 2.5 底 残 7.0	外面胴部下端~底部ケズリで、平底。内面底部ケズリのち一部ナデ。底部中央に縦径1.2cmの孔あり。内面はケズリのちナデ。	5YR5/6 明赤釉 やや暗い 白・赤釉~細粒少、 砂粒と白微粒微量 微質	底1/2周 グリッド27% 63
2	土師器 甕	口 残 16.8 高 残 4.7	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。内面胴部上端ナデ。	7.5YR7/4 に近い橙 微質 白・黒・赤釉~細粒微量 微質	口1/6周 グリッド27% 63
3	土師器 甕	口 残 17.0 高 残 3.7	外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデ。	2.5Y4/1 黄灰 やや暗緑 白・砂粒少、赤釉 粒微量 微質	口一部 グリッド27% 63
SG5 区 SK-215					
1	土師器 杯	口 残 12.0 高 残 4.3	内口内縁、外面体部ケズリのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのち繰らな横方向のミガキ。体部ヘラナデのち繰らな斜位のミガキ。外面口縁~体部微付着。	7.5YR5/4 に近い橙 やや暗赤 白・砂粒少、赤釉 粒微量 微質	口~体1/6周
2	土師器 杯	高 残 2.7 底 残 3.6	外面体部口位ナデのち下平~底部ケズリのち体~底部繰らなミガキ。底部は全体がくぼむ。内面体~底部放射状の帯なミガキ。内面は表面のクレーク~位の微少剥し。外面体部~黒色微質付着。	10YR7/4 に近い濃緑 やや暗赤 白・透明・砂粒~細 粒微量 やや微質	体~底1/2周
3	土師器 杯	口 13.7 高 5.8	内外面とも表面の滑潤滑しく、調整不明。外面口縁部と体部の境に底端一方向のミガキと見られる。	7.5YR7/6 橙 やや暗赤 赤釉~微粒と白微 粒微量 やや微質	口~体3/4周、底完存
4	土師器 高杯	高 残 3.8 底 残 8.0	焼熟のためか表面の一部が磨滅し、赤褐色を呈する。外面体~底部帯なミガキ。体部は縦、底部は横主体。胴部上端縦方向のミガキ。内面体~底部放射状の帯なミガキ。	10YR7/4 に近い濃緑 やや暗赤 赤釉~細粒多、白・ 砂粒~微粒微量 やや微質	底上5.8cm 杯体~底1/6周 990325% 14
5	土師器 甕	高 残 3.5 底 残 8.0	外面胴部下端~底部ケズリのちナデ。底部は平底で、全体に浅くくぼむと見られる。内面胴部下端~底部ヘラナデ。内面黒褐色。	7.5YR5/4 に近い暗 緑い 白釉~細粒多、白微と 赤・砂粒~細粒微量 微質	底上5.4cm 割下端~底1/4周 990325% 11
SG5 区 SK-218(グリッド27)					
1	土師器 杯	口 残 12.7 高 5.0	外面口縁部ヨコナデ、体~底部ナデのち平に一方のケズリ。底部は丸底。外面ヨコナデのちミガキ。ミガキは口縁部縦方向、底部多方向。	5YR6/8 橙 やや暗赤 赤釉~細粒多、白粒 ~細粒少 やや微質	底上2.5cm 口~体1/2周、底完存 グリッド27% 43
2	土師器 皿	高 残 3.3 底 残 5.8	外面胴部下平~底部丁帯ナデ。底部は丸底だが胴部から角度が変化する部分をこらえて底部とした。内面胴部下平~底部ヘラナデのち繰らなミガキ。欠損部は胴口位主体による縦面であり、上に積み上げる粘土との接合を強めるためにへら状工具による柄み目が発せられている。外面胴部下平~底部は表面が剥している部分が多い。	7.5YR6/8 橙 やや暗赤 赤釉~細粒と白微粒 粒微量 微質	底直上 割下平~底完存 グリッド27% 58
3	長 残 8.2 幅 残 7.5 厚 残 4.1 重 40.47	石器 砥石	大型・扁平な砥石の破片。表面面、側面とも平滑で、使用による磨い増傷が見られる。表面は石肌状にくぼみ、わずかに縦筋あり。裏面はほぼ平滑で、磨り損多量あり。欠損部縁辺は磨きこられているように見える部分もあるため、この破片の状態で使用された可能性がある。	5Y4/1 灰 褐色 ホルフェルス	底面付着 破片 グリッド27% 59
SG5 区 SK-219					
1	土師器 高杯	高 残 6.7	内外面ともミガキ調整はなし。外面杯体部~胴部上端ヘラナデ。内面杯体部~底部丁帯ナデケズリ。胴部上端ナデ。胴部上端径4.4cm。	10YR6/4 に近い濃緑 やや暗赤 白・砂粒~微粒と透 明微粒少、赤釉~細粒微量 やや微質	杯体1/4周、杯底~胴 上端完存 グリッド27% 48
SG5 区 SK-220					
1	土師器 杯	口 残 13.9 高 残 4.2	内口内縁、外面口縁~体部ヨコナデのち体部ナデ。内面口縁~体部ヨコナデのち口縁~体部繰らなミガキ。ミガキは口縁部縦方向、体部は斜位で放射状と見られる。	5YR6/6 橙 やや暗赤 白・赤釉~微粒微量 やや微質	底上2.2cm 口~体1/3周 4.5K-222% 4
2	土師器 杯	高 残 2.2	内口内縁の杯と見られる。焼熟のためか、内外面とも赤褐色で表面が磨滅しており、調整は不明。口縁部下平~体部に相当すると見られる破片で、内面に赤色の剥片の残留あり。	5YR6/6 橙 微質 白微粒と赤・黒・砂粒~ 微粒微量 やや微質	口~体部片一 部 微質
3	土師器 杯	口 残 13.0 高 残 4.5	内口内縁、外面口縁部ヨコナデ、体部口位ナデのち一部斜位のミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのち丸底を持つナデ。内面口縁~体部一部黒色微質付着。	7.5YR7/6 橙 微質 白・赤釉~微粒微量 やや微質	底上20cm 口~体1/6周 2
SG5 区 SK-224					
1	土師器 皿	口 残 23.4 高 残 9.1	大形。外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデで、一部にミガキあり。ミガキは胴部の横縁のためか、口縁部中位内側には横上平停止による縦面あり。破片の胴部から接合面には柄み目が発せられていることがわかる。	5YR6/8 橙 やや暗赤 赤釉~細粒多、白・ 赤釉~細粒微量 微質	口1/4周、割上端1/6周 2, 3, 4, 5, 6
2	土師器 杯	高 残 1.7 底 残 4.0	外面体~底部ケズリ。底部は全体にくぼむ。内面体~底部ヘラナデのち放射状の繰らなミガキ。	5YR6/8 橙 やや暗赤 赤釉~細粒多、白微 粒少、白・砂粒微量 微質	体~底1/2周 7

第8章 権現山遺跡 SG5 区

SG5 区 SK-225

1 土師器 杯	口 径 10.4 高 径 4.7	内胴口縁。外面は表面の磨滅著しい。外面体部ミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。体部ナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 や中細密 赤黒～細粒少。砂礫 粒微量 やや軟質	口～体 1/4 周
2 土師器 高杯	高 径 5.6	外面杯部体部ヘラナデのちミガキ。底部ヘラナデのちケズリ。杯部は円盤状の底に粘土を盛り付けて作られる。内面杯部体～底部ヘラナデのち繰らな新台のミガキ。脚部上端ナデ。	5YR5/6 橙 や中細密 白・赤・砂細～微粒少。白・赤・砂礫微量 硬質	底上 22cm 杯体一部。底定存 グリッド 27 № 41
3 土師器 高杯	高 径 4.0	外面杯部底部～脚部上平なミガキ。内面杯部底部放射状のミガキ。脚部上端ナデ。	2.5YR6/8 橙 や中細密 白・赤黒～細粒少。 白微塵量 やや軟質	底上 57cm 杯体一部。脚上平定存 グリッド 27 № 30
4 土師器 高杯	高 径 2.9	外面杯部底部ヘラナデのち上平ヨコナデ。下端はミガキの可能性あり。内面杯部底部ナデのちミガキ。ミガキは繰らで、横方向の放射状のミガキが後される。脚部接合部中央には突出部があり、これを脚部側に挿入して接合したものと見られる。	5YR6/6 橙 や中細密 白微～微粒と砂礫粒 少。赤黒～細粒と砂礫粒微量 硬質	底上 29cm 杯体一部 グリッド 27 № 37

SG5 区 SK-247

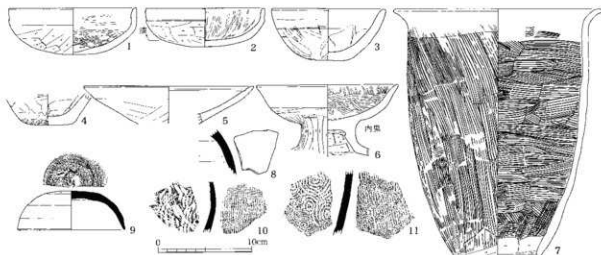
1 土師器 盥	口 径 15.8 高 径 6.1	外面胴部上平ナデのちケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色 細密 砂細粒少。赤黒粒微量 やや軟質	口～胴上 1/6 周 3
---------------	---------------------	------------------------------------	---	-----------------

SG5 区 SK-253

1 土師器 杯	高 径 2.2 底 径 3.4	鉢の可能性もある。内外面とも表面は磨滅しており、調整不明。調整は打く。外面体部には縦方向の粘土の層が残る。底部は平底で、わずかにくぼむ。	7.5YR7/6 橙 や中細密 白・赤黒～細粒少。 透り細粒微量 軟質	体下半～底定存 990325 № 26
2 土師器 高杯	高 径 7.0	ハの字に開く脚部。外面脚部上平縦方向の密なミガキ。残存部中位にミガキの土質の当りによる小さなくぼみあり。内面脚部上平ナデ。中位に足部下平になると見られる粘土が貼り付けられており、接合部が明確に残る。下平の粘土は上平と異なり、白っぽい色調のもの。上端は脚部はやや磨滅しており、杯部久留後に転用された可能性あり。	7.5YR7/6 明黄褐色 や中細密 白微粒多。白微～細粒と黒細粒微量 やや軟質	脚上平一部欠 底地一拵北。990325 № 28
3 土師器 盥	口 径 21.6 高 径 7.5	外面胴部上端ナデ。口縁部内外面ヘラナデのちヨコナデ。内面胴部上端ナデ。外面口縁部付着。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 や中細密 白微～細粒と黒・灰色・透明細粒少。白微塵量 硬質	口 1/12 周。胴 1/9 周 一部 990325 № 31、32

第8節 遺構外出土の古墳時代遺物 (第356図、写真図版187)

低地部の遺物包含層(本章次節)以外で、遺構外から出土した古墳時代遺物がある。1は出土地点不明の中期末の模倣杯、8はSG5区南部の10.5-17.5グリッドで出土した須恵器瓶で古墳時代終末期の可能性がある。この2点以外は、1996年1月・2月に実施した確認調査のトレンチTX15とTX16で出土した。TX15出土の高杯(5)は古墳中期で、それ以外は古墳後期～終末期の土師器・須恵器である。TX16出土遺物のうち粗製杯・高杯・甕(3・6・7)はSI-10に伴う遺物の可能性がある。ただし、TX16には縄文晩期中葉の土製円盤も混在している。6は杯部内面を炭素吸着で黒色処理している。内外面ハケ調整の甕は珍しい(7)。TX15の須恵器杯蓋(9)は低地包含層出土の杯身(第357図9)とよく似た土器で、湖西窯産かもしれないが、確実ではない。



第356図 権現山遺跡 SG5 区 遺構外出土の古墳時代遺物

第201表 権現山遺跡 SG5区 遺構外出土の古墳時代遺物

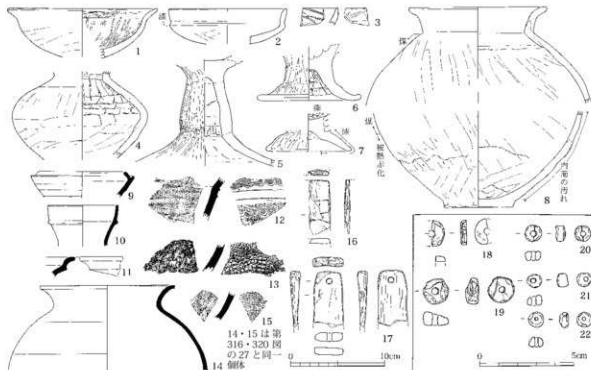
番号 種類	大きさ (縦×横)	特徴	色調 胎土・胎色 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 土師杯	口 13.4 高 4.9	外面口縁部ヨコナデ、体～底部1/3部ナケズリ。底部丸底。内面口縁～体部ヨコナデ。底部ナデのち口縁～底部やや斜らかな傾方向主体のミガサ。底部は陶師の指跡あり。	10YR7/4 やや暗黒 白・黒・赤相～細粒 黄緑 やや軟質	口～底1部欠 不明
2 土師器 土師杯	口 12.6 高 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナケズリ。丸底。内面口縁～体部ヨコナデ。底部ナデのち口縁～底部放射状の疎らなミガサ。内面全体・外面口縁～体部塗仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄緑 やや暗黒 白・黒細粒と砂相～ 細粒黄 やや軟質	口～底部1/3部 TR-15
3 土師器 粗製杯	口 12.0 高 5.5 底 4.4	口縁部ヨコナデ、体～底部は無調整に近い。歪いナデが部分的に集され、粘土の塊が露出。一部に細い植物性痕と見られるものあり。底部はやや丸味を持つ平底。内面体～底部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面は1/3部なげ。	10YR8/6 黄緑 暗赤・白・砂相～細粒黄 やや軟質	口～体3/4部、底完存 TR-16 S外西
4 土師器 粗製杯	口 高 3.3 底 5.0	外面体～底部斜いナデで、植物性痕と見られる浅い沈殿が各所にある。底部は丸味を持つ平底。内面体～底部歪いヘラナデ。	7.5YR8/4 浅黄緑 暗赤 砂相少 やや軟質	SI10の遺物の可能性あり 体～底完存 UT-19 SG TX16-16 S1
5 土師器 高杯	口 復 18.0 高 復 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面表面滑潤より調整不明。口縁部に軽2mm程度の沈殿あり。	5YR6/3 暗 やや暗黒 白・赤相～細粒少 黒相～細粒黄 やや軟質	杯口～体部破片 TR-15 覆土
6 土師器 高杯	口 復 15.0 高 復 7.4	外面口縁部ヨコナデ、杯部底部～膝部上平ケズリ。杯部体部は無調整で、植物性痕を残り。内面杯部口縁～体部ヨコナデのち傾方向および放射状主体のミガサ。底部は表面滑潤のため調整不明。頸部上端ナゲ、上平ケズリ。下平ケズリ。杯部内面は炭素吸着による黒色処理。	5YR6/4 にぶい暗 やや暗黒 白・砂相～細粒と黒 細粒少 硬質	SI10の遺物の可能性あり 杯口～体3/4部、杯底 ～脚上平存 UT-19 SG TX16-16 No.2
7 土師器 瓶	口 復 22.0 高 26.2 底 復 9.0	無底式。胎土は粗く、糞のような胎土。外面頸部6本1/2cmのハケのち口縁部ヨコナデ・頸部下端一部ケズリ。内面頸部6本1/2cmのハケのち口縁部ヨコナデ・頸部下端一部ケズリ。底部はケズリにより面取りされる。	10YR7/4 にぶい黄緑 暗い 砂相～細粒多、砂粒と白 細～細少	SI10の遺物の可能性あり 口～底1/2部 SX16 S1
8 須恵器 瓶	高 残 4.8	内外面口クロナデで、ロクロの回転方向は不詳。90°偏に倒してフラスコ状になる可能性も持つ。外面全体を自然釉が覆い、灰白色にやや汚く染じている。東海地方の可能性あり。	2.5Y6/1 黄灰 暗赤 白細粒少 硬質	製1片
9 須恵器 瓶	口 復 11.4 高 4.1	外面口縁～体部クロナデ。天井部はヘラ切り離し後に外周を回転ヘラケズリしてから軽ケナデ。内面口縁～天井部クロナデ。湖内産産物かもしれないが不確定。	2.5Y6/2 灰黄 暗赤 白相～細粒黄 硬質	口～天井1/2部 TR-15
10 須恵器 甕	高 5.5	外面は縦筋の平行明き目のちにカキメを器面に向かって右から左方向に施す。卑内左下部に不規則なナゲ。内面は同心円当具縁で、器面に沿って左から右方向へ進行する。	5Y5/1 やや暗黒 白相～細粒少 硬質	試掘トレンチ TX16の 16-18グリッド 製部1片 TR16-18
11 須恵器 甕	高 6.7	外面は縦筋の平行明き目のちに縦筋をかけた回転ヨコナデ。内面は同心円文当具縁で、器の上部から下部へ進行する傾向がある。	7.5Y5/1 やや暗い 灰白相～細粒多、赤 細粒黄 硬質	製部1片 TR14～15 55探

第9節 低地部の古墳時代遺物包含層 (第357図、写真図版61-187)

SG5区の東部にある低地部分は古墳時代土坑が集中しているため、低地の全土坑間および低地包含層調査グリッド出土土器との接合関係を確認した。低地包含層の「セクションBライン」で土層中のテフラ検出分析を実施し、下層部から上層部へ順に縄文草創期の男体七本桜軽石、古墳前期の浅間C軽石、古墳後期の榛名ニッ岳浅川テフラまたはニッ岳伊香保テフラ、平安時代の浅間Bテフラ粒子を検出した。また、古墳環境復原のために14C年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析も行った(本章の次節に掲載)。Bラインの位置は図示されていないが、13～16小グリッドおよび33～37小グリッドの北壁付近にそれぞれ東西方向の土層観察面があったので、そのどちらかと考えられる。残念ながら低地包含層の土層断面図は所在不明であるが、土層柱状図で概要が分かる(第358図)。

各グリッド(No.1～50)の遺物全体を確認した結果、土師器は壺・甕・小形甕が主体で、高杯などは少ない。容量が少ない小形甕や杯、鉢などはごくわずかで、全形がわかる遺物は少ない。「水を入れる容器」が低地で多く出土していることがわかる。

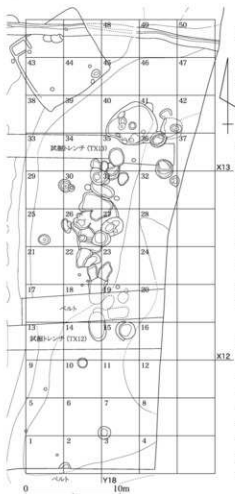
時期幅は、古墳中期中～後葉の遺物が主体である。西側にある首長居館と並行する時期と言える。低地にある土坑群に含まれる土器同士は、接合はできないが同一個体と思われる大形の土師器壺類が複数の土坑に含まれている。全土坑が同時期というわけではないが、中期後葉ころに広い範囲が同時に埋まっている土



14・15は第316・320図の27と同一の14個体

第202表 梅現山遺跡SG5区 低地グリッド 遺物出土状況

グリッド	遺物の状況
6	遺物がごくわずかな破片で、番号を付けて取り上げた遺物はない。
7	番号を付けて取り上げた以外の破片が多い。2-3段目で、焼酎杯・煎茶碗など新しい遺物はない。
8	遺物が多い。2-3段目の遺物が1体で、4段目の破片なりそうなる遺物はない。
10	遺物ごくわずかで土師器6片。高杯・壺・甕などは2-3段目。
11	遺物が多い。壺・煎茶碗が主体で大形煎茶碗の底面5以上。焼酎杯・鉢の底面3以上。高杯少量。2-3段目1体で、4段目のような煎茶碗の極少量。これより新しい遺物はない。
12	遺物が多い。尤もが土師器で、煎茶碗は1片。ほぼ2-3段目で、それより新しい遺物なし。
14	遺物にわずかで焼酎杯3片のみがあり、3段目焼酎杯は確定される。
19	遺物に少なく、番号を付けて取り上げた遺物はない。壺・甕などが多く、2-3段目が主体のようなので、残土層などは少量残る。
21	縄文土器2片。土師器焼酎杯の底面1片。
23	遺物やや少。壺・甕1体で高杯・焼酎杯少量。2-3段目が主体で、確かな4段目の破片はない。
24	遺物やや多。2-3段目が大半で、4段目の煎茶碗を極に含む。煎茶碗1片。縄文・弥生土器極少量。
25	遺物少量。2-3段目ばかりで、新しい遺物はない。
27	遺物やや多。壺・甕1体で焼酎杯・高杯・鉢など少量。2-3段目の1体で、それ以外はほとんどない。
28	遺物多く、土師器小片も多い。壺・甕1体で、高杯・焼酎杯・鉢など少量。2-3段目が主体。内面同心円状の煎茶碗底面のような新しい遺物も少量。煎茶碗脚1個破片あり。
29	番号を付けて取り上げた遺物なし。土師器壺・煎茶碗3片と土師器3点のみ出土。
30	遺物少量。壺・煎茶碗、特に小形壺が多く、高杯も比較的多い。
31	遺物やや少。土師器壺・甕・小形壺が主体で、焼酎杯・鉢・高杯などはわずか。2-3段目の遺物。縄文時代の土器1点以外に器人遺物はない。
32	遺物が多い。壺・甕・小形壺が主体で、焼酎杯・鉢・高杯などがわずかに散見。煎茶碗がわずかにあるが、2-3段目が主体で、4段目の破片の遺物もわずかに散見している。
33	番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器土器2点のみ。縄文土器の土器片散見。
34	2-3段目と思われる焼酎杯があるが、極少量で遺物群。ほぼ前記の遺物に比して下の約1点。
35	遺物少量。番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器壺・甕が主体で、焼酎杯・高杯がわずかに散見する。2-3段目で、4段目の破片の遺物はない。
36	遺物が多い。壺・甕1体で、高杯・焼酎杯などが少量。2-3段目で、新しい遺物はない。
37	遺物少量。壺・甕1体で、高杯・焼酎杯少量。2-3段目で、新しい遺物なし。弥生土器片あり。
38	番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器焼酎杯・高杯片など極少量。煎茶碗などはない。縄文・弥生土器片あり。
39	土師器なし。縄文時代の赤褐色土器2点。定数524に相当する遺物はない。
40	番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器壺・甕・高杯・焼酎杯など極少量。古墳時代の土師器はない。縄文または弥生土器片少量。
41	遺物少量。壺・甕片が主体で、焼酎杯・高杯などが少量。2-3段目と見られる。
42	遺物少量。土師器は2-3段目の煎茶碗・壺・煎茶碗などのほか、7段目の破片が散見する。近頃以降の陶器1枚。定数524に相当する土器もあり、焼酎杯は定まっている。
44	遺物にわずかで、壺・甕・焼酎杯・高杯などが同量程度あり、2-3段目。
45	土師器なし。縄文土器片のみ出土。
47	土師器なし。縄文土器片のみ出土。



第357図 梅現山遺跡SG5区 低地グリッド配置および遺物

坑が多いといえる。

3は内外面に刻線がある杯小破片。10は口縁端部が丸味を持つ初期須恵器の壺。器台(12)は突線が高く、黒色の自然釉がかかる良質の製品で、本遺跡北部のSG1区(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.340)や、北関東自動車道調査A区SI-141(谷中・大島編2001 p.214)、本書146図に掲載したSG10区SI-111などの器台破片とは別個体である。14と15は胴部上半をロクロナデ、下半を細かい格子引きにする陶質土器で、SI-22などにある胴部下半を含めて同一個体と思われる。

古墳中期末葉以降の遺物は稀である。中期末葉の土師器杯、後期末～終末期前半ころの土師器杯・短脚高杯や須恵器杯・瓶が少量ある。低地の使用、ないしは祭祀など何らかの行為があった痕跡であろう。古い遺構の覆土に入り込んだように出土する遺物が多い。中期末葉の土坑はあるかもしれないが、後期末葉頃の遺構はなさそうである。時期不明のSD-108出土破片と同一個体の須恵器瓶が1片ある(第369図)。9は試掘トレンチTX15出土の須恵器杯身(第356図9)と胎土・焼成・口径がよく対応している。13は古墳時代終末期ころの在産須恵器甕で、粗い真格子引き調整を行う。白玉(18・19)は材質が滑石から粘板岩に転換した古墳後期の遺物。土製丸玉(20～22)は漆仕上げをしているので、おそらく後期～終末期のものであろう。

砥石は詳しい時期を決められない。有孔砥石(17)は本遺跡南部のSG10区SI-37にある。また、穿孔が貫通しない砥石は本遺跡北部の4区SI-17・31にある(『東谷・中島地区遺跡群』10)。

第203表 権現山遺跡SG5区 低地部の古墳時代遺物包含層 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 3.7	外面口縁部ヨコナデ。体部下丁字ナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。内面には放射状のミガキが若干繰らに施されているように見えるが、明確ではない。内面全体・外面口縁部仕上げ。	IOYR8/3 浅黄釉 磁質 赤相粒と白磁粒微量 やや硬質	口～体1/4周 低地～橋本
2 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 5.2	内面口縁、外面口縁部ヨコナデ。体部は土直前部により調整ははまりしないが、ヘラナデと見られる。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁部縦方向・体部放射状のミガキ。	IOYR7/8 黄 磁質 白・赤・砂粒～細粒 硬質	口～体1/2周 低地～橋本, 12.5-18表 深
3 土師器 杯	高 残 1.9	平球状の杯口縁部片。内外面とも口縁部ヨコナデのち縦削。外面は削位に施される細かい縦削6本あり、各2本ずつが交わる。左端の2本は横方向のもの。中央と右側のものはそれぞれ右側が先に施される。内面はやや大きい2本一組の削であり、外面の縦削方法は異なる。	SYR5/4 白(赤)赤 やや硬質 白・赤～黄粒少 硬質	口縁部破片
4 土師器 小形甕	高 残 9.3 胴 14.3	胴高は丸味を持ち、ややそろばん玉状にゆる。外面胴部ナデのち上端ヨコナデ・下端ケズリ。内面胴部ヘラナデ。胴部ヘラナデで、上下には縦横削としぼり目が陶質。縁部一段ごとくヘラナデを行っている。胴部下半には横み上げ休止による接合面があるが、縁部はあまり明確ではない。	IOYR7/4 白～浅青 やや硬質 白・砂粒～黄粒少。 赤・黒～黄粒微量 やや硬質	胴一部欠 27, 30, 32, 49, 52, 53, 55, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 6-12
5 土師器 高杯	高 残 11.3	柱状部、外面杯部底面ナデ・胴部上半～中位縦方向のケズリ。内面杯部底面～胴部中位縦方向のミガキ。胴部柱状部下端付近には、ミガキを施す工具の当たりが多少みえる。内面杯部底面ナデと見られるが、ミガキの可能性もあり。杯部は平筒状の底面・胎土を軸み上げて作るもの。胴部上半近いナデ、中位ヘラナデで、柱状部下端に接合面あり。	IOYR8/3 浅黄釉 やや硬質 赤粒～細粒多、黒・砂粒～黄粒少、白磁粒微量 やや硬質	杯底～胴中位一部欠 35
6 土師器 高杯	高 残 5.9 脚 復 11.0	短脚。外面胴部下平ヨコナデのち上半～下平縦方向のケズリ。内面脚部上半ケズリ。下平ヘラナデのちヨコナデで、縦横直削。上端欠損部側面付近は、接合面から欠損している。	IOYR8/2 灰白 磁質 白磁粒少、黒・砂粒微量 やや硬質	脚上下存、下平1/3周 低地～橋本
7 土師器 高杯	高 残 3.9 脚 復 9.0	短脚。外面胴部ヨコナデのち縦方向の丁字ナケズリ。内面杯部底面赤なミガキ。脚部上端ケズリ、中位～下平ヨコナデ。	7SYR7/6 粉 磁質 白・赤・砂粒微量 やや硬質	杯底1/3周、脚1/3周 低地
8 土師器 甕	口 復 14.6 高 残 10.5 底 7.2	外面胴部下半および下端ナデ。胴部下平ケズリ。胴部下平には横み上げ体止による接合面があり、この部分にケズリが施されるが、調整は荒い。底面ナデで、突出した底面であり、外周寄りがトーン状に高くになっている。口縁部内外面ヨコナデで、横み上げ休止による接合面あり。胴～底部ヘラナデで、胴部下平の接合面は丁寧に調整される。外面胴部中位～上半平削する。外面口縁部と底面付近縦削により亦変。	IOYR6/4 白～浅青 磁質 白磁～細粒少、白・赤粒微量 硬質	口～胴1/3周、底一部欠 2, 3, 6, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 26, 37, 38, 39, 41, 42, 44, 45, 63, 64
9 須恵器 杯	口 復 9.0 最大 復 11.0 高 2.7	口縁～体部内外面ロクロナデ。外面残存部下端はケズリおそらく回転へラケズリ。胴内稜産の可能性もある。	SYR5/1 灰 磁質 白磁粒微量 硬質	口～体1/5周 低地
10 須恵器 甕	口 復 7.4 高 4.3	薄手で硬質。口縁部内外面ロクロナデで、外面中位に較り、口縁部上半はやや内削する。断面は赤灰色。内外面の全体に栗色の自然釉が均一に付着する。	N/3 硝灰 やや硬質 白磁～細粒少 硬質	口1/4周 36
11 須恵器 不明	口 復 19.0 高 残 1.6	二重口縁。口縁部内外面ヨコナデで、内面にはわずかに自然釉付着。断面は赤灰色。	N/6 灰 磁質 白磁～細粒微量 硬質	口縁部破片 グリッド37 No.16

第8章 権現山遺跡 SG5 区

12 炭素器 器台	高 残 4.6	杯部(底部)：外面には2本の明確な稜があり、その上下に波状文を施す。内面横方向のナデ。外面全体に均一な黒色の自然釉付着。波状文は幅 1cm 程度で、11本の稜線。	N3/ 陶灰 緻密 白釉-黒粒微量 破片	杯部破片 低地
13 炭素器	高 残 3.0	外面側部格子タタキ。内面側部同心文と具面のちナデで、わずかに当具の痕跡が残る。釉は胎質成に近く、断面には灰白色(Si5N/2)、白色(Si7N6/6)の部分で薄く層状に見られる。	SY5/1 灰 やや緻密 黒粒微量 やや軟質	黒部破片 5
14 陶製土器 壺	口 復 14.3 高 残 9.1 最大 復 21.0	胎質薄く、破面は赤灰色。口縁端面は上下にわずかに拡張した外向きの平坦面となる。内外面口コロナデ。低地遺物包含層の15やSi22-24・SK206出土の胴下部と同一個体と考えられるが適合できない。 [注記]グリッド710、G27、グリッド28、テナー一括に、Si24	SP5/1 陶青灰 やや軟い 白釉-黒粒少 破片	口縁部はG7とG8、胴部はG27。胴部は低地北部とSi19とSi24の各1片が適合 口1/8割、皿1/4割 注記は左欄
15 陶製土器 壺	高 残 3.1	外面側部細かな格子タタキ。内面側部ナデ。当て具の痕跡と見られる凹凸が器口の赤みとして残るが、内面は1帯にナデ消されている。低地遺物包含層の14(上半部)やSi22-24・SK206出土の下半部と同一個体と考えられる。	2.SY5/1 黄灰 やや緻密 白粒少、白釉-黒 粒微量 破片	黒部破片 83
16 石器 砥石	長 残 5.7 幅 残 2.3 厚 残 3.5	表面・右側面・上面の3面が部分的に残存する。残存部はすべて平滑で、磨痕もわずかに確認できる程度。稜状・小形の砥石と見られる。残存重量11.0g。	10G4/1 陶青灰 緻密 粘板質	破片 47
17 石器 砥石	長 残 2.9 幅 3.2 厚 1.0	薄く稜状で、上端に1孔あり、4面とも使用されたと見られ、4面すべてに磨削の痕跡が見える。上端は砥石用のままだが、1帯に灰消されている。孔は両面穿孔と見られ、中央がやや高く削り残される。表裏面は厚さ約6.2mm、中央部5.8mm。上端の面中央と左側面上端には、孔と平行する平坦な稜線あり。紐をかけて吊る際のキズか。残存重量25.5g。	SY8/2 灰白 緻密 黄粒質質硬質	破片 34
18 石製品 白玉	径 1.33 厚 残 0.37 重 残 0.5	表側は節理面からの剥離面そのまま、研磨されていない。側面は切削加工時の痕跡が残る。残存部で見ると、孔径2.8mm。表面はやや磨滅している。	N5/ 灰 緻密 粘板質	破片 低地グリッド出土か
19 石製品 白玉	径 1.37 幅 1.35 厚 0.70 重 1.2	表裏両面とも節理面からの剥離面そのままであり、研磨されていない。側面は切削加工時の痕跡および工具痕をそのまま残す。側面左下・左上には、灰分が沈着した古い節理面あり。厚さは一定しておらず、側面側は厚形を見ず。裏面からの穿孔と見られ、裏面孔径3.1mm。表側孔径2.9mm。表面は全体が磨滅する。	N4/ 灰 緻密 粘板質	完形 低地グリッド出土か
20 土製品 丸玉	径 0.80 厚 0.45 重 0.25	裏面からの焼成前の穿孔と見られ、孔の周囲が裏側でくぼみ、表側では突出する。孔径裏側2.1mm、表側1.9mm。全体塗仕上げ。	10Y86/3 に近い黄緑 緻密 微粒微量 破片	完形 低地グリッド出土か
21 土製品 丸玉	径 0.70 厚 0.52 重 0.23	表側からの焼成前の穿孔と見られる。表側孔径2.3mm、裏側1.9mm。全体塗仕上げ。	7.SY86/6 緑 緻密 微粒微量 破片	完形 低地グリッド出土か
22 土師器 丸玉	径 0.80 厚 0.50 重 0.24	孔径1.5mmで、焼成前の裏側からの穿孔と見られ、孔の周囲が裏側でくぼみ、表側ではやや突出する。全体塗仕上げ。	10Y86/3 に近い黄緑 緻密 砂粒微量 破片	ほぼ完形 低地グリッド出土か

第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テフラと古環境

8.10.1. 分析調査の視点と考古学的評価

SG5区東側の低地部に存在する古墳時代土坑のうちSK-190・191の2基(第347・348図)でテフラ検出分析を実施し、白色軽石(Hr-FAまたはHr-FP)と灰白色軽石(As-C)を検出した。Hr-FAとHr-FPの区別に関しては、杉村遺跡北関東自動車道調査区や立野遺跡5区などの周辺遺跡において古墳中期竪穴建物跡の堆積土上部でテフラ層を検出できる状況から考えて、考古学的には白色軽石を古墳後期初頭のHr-FAと考えることが妥当である。

東部にある低地古墳時代遺物包含層では、「セクションBライン」で土層中のテフラ検出分析を実施し、下層部から上層部へ順に縄文草創期の男体七本桜軽石、古墳前期の浅間C軽石、古墳後期の榛名二ツ岳渋川テフラまたは二ツ岳伊香保テフラ、1108年の浅間Bテフラ粒子を検出した。浅間C軽石と男体七本桜軽石の中間付近に堆積している腐植質土壌で放射性炭素年代測定を実施した結果は、5190±70BPであった。

水田稲作の有無と植生環境を調査する目的で、包含層堆積層の植物珪酸体分析と花粉分析を実施した。浅間C軽石直下層で少量のイネ珪酸体があり、SG5区低地や東方のSG2区・SG9区で少量の弥生後期土器(『東谷・中島地区遺跡群』10の第44図102・105～109)や古墳前期土師器片(本書第6・9章)、北東側台地上にある杉村遺跡の北関東自動車道調査区で古墳前期末の竪穴建物跡3棟が確認されていることの間接が推定される。ネザサ節やメダケ節などの竹笹類が増加していることから低地が乾燥化したと考えられるので、水田はSG5区よりもさらに低地側に想定されるかもしれない。発掘調査では、各時代の水田遺構は確

認識されていない。古墳前期から古墳後期にかけて、ナラ林やカシ林（コナラ亜属やアカガシ亜属）が減少してマツの二次林が増加したことが花粉から推定されることは、古墳中期・後期にこの地域で大きな集落が形成されたこととよく対応している。この大規模集落に対応する時期の層ではイネ珪酸体が検出されていないので、仮に水田が営まれていたとしてもSG5区から少し離れた地点であったことが想定できる。平安時代末の浅間Bテフラ下層には少量のヒエ属型珪酸体があるが、栽培種か野生種かは不明である。浅間Bテフラに対応する12世紀前後の遺構や遺物は、確認されていない。

古環境研究所に委託して実施したテフラ・植物珪酸体・花粉分析と放射性炭素年代測定の結果を以下に掲載する。

8.10.2. 権現山遺跡SG5区低地の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

栃木県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、日光火山群のほか、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層や遺構が検出された権現山遺跡SG5区においても、地質調査を行って土層の層位を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、低地セクションBライン、190号土坑、191号土坑の3地点である。

2. 土層の層序

(1) 低地セクションBライン

低地セクションBラインでは、白色軽石混じり砂礫層（層厚3cm以上、軽石の最大径14mm、礫の最大径112mm）の上位に、下位より砂混じり灰色土（層厚19cm）、暗灰色粘質土（層厚9cm）、暗灰色土（層厚8cm）、黒灰色土（層厚5cm）、灰色土（層厚13cm）、灰色粗粒火山灰混じり若干色調の暗灰色土（層厚10cm）、白色粗粒火山灰に富む黒灰色土（層厚6cm）、礫混じり黄灰色砂礫（層厚3cm）、白色粗粒火山灰や灰色粗粒火山灰を多く含む黒灰色土（層厚8cm）、若干色調が暗灰色土（層厚7cm）、褐色土（層厚29cm）、暗灰色土（層厚10cm）、黄灰色土（層厚21cm）、暗灰褐色土（層厚8cm）が認められる（第358図1）。

(2) 190号土坑〔SG5区SK-190〕

190号土坑の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚9cm）、黒っぽい暗灰色土（層厚7cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚17cm）、暗灰褐色土（層厚16cm）からなる（第358図2）。

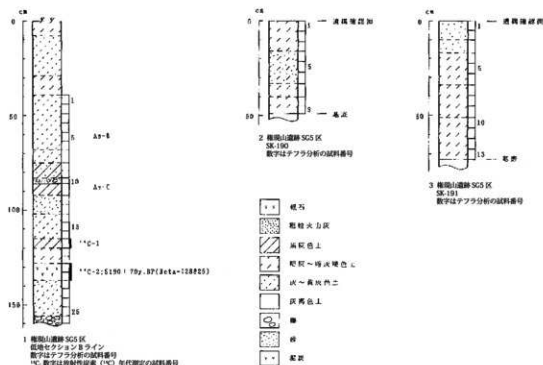
(3) 191号土坑〔SG5区SK-191〕

191号土坑の覆土は、下位より暗灰色土（層厚22cm）、暗灰褐色土（層厚17cm）、暗灰色土（層厚17cm）、白色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚7cm）、白色粗粒火山灰を多く含む灰褐色土（層厚10cm）からなる（第358図3）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

低地セクションBライン、190号土坑、191号土坑の3地点において採取された26点の試料について、指標テフラの降伏層位を求めるためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。



第 358 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部および SK-190・191 の土層柱状図とテフラ分析試料

- 1) 試料 15g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80 ° C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 204 表に示す。低地セクション B ラインでは、試料 26 に白色軽石（最大径 161mm）が少量含まれている。試料 15 には、スポンジ状に良く発泡した白色軽石（最大径 0.9mm）が少量含まれている。試料 11 には、スポンジ状に比較的良好に発泡した灰白色軽石（最大径 1.8mm）が多く含まれている。試料 10 から 3 にかけて、あまり発泡の良くない白色軽石（最大径 3.8mm）が少量ずつ認められる。さらに、試料 7 より上位の試料に、比較的良好に発泡した淡灰褐色軽石（最大径 1.2mm）が比較

的によく含まれている。これらの軽石のうち、あまり発泡の良くない白色軽石については、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められることから、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川

第 204 表 権現山遺跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
低地セクション	1	++	淡灰褐色	1.1
B ライン	3	++	淡灰褐色>白	1.1, 1.3
	5	++	淡灰褐色>白	1.2, 1.3
	7	++	淡灰褐色>白	1.2, 3.8
	9	+	白>灰白	1.3, 1.3
	10	+	白	1.8
	11	+++	灰白	1.8
	13	+	灰白	0.9
	15	+	白	0.9
17	-	-	-	
19	-	-	-	
21	-	-	-	
23	-	-	-	
25	-	-	-	
26	+	白	16.1	
190 号土坑	1	+	白>灰白	2.1, 1.2
	3	+	白>灰白	1.3, 1.0
	5	++	白>灰白	2.3, 1.3
	7	+	白>灰白	1.2, 1.1
	9	+	白>灰白	1.3, 1.0
191 号土坑	1	++	灰白>白	1.3, 1.3
	3	++	白>灰白	2.8, 1.3
	5	+	灰白	1.3
	7	+	灰白>白	1.2, 1.3
	9	++	灰白	2.0
	11	++	白	1.9

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, + : 少ない, - : 認められない, 最大径の単位は, mm.

テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。

190号土坑では、試料9以上の試料にスポンジ状に比較的良好に発泡した灰白色軽石 (最大径1.9mm) と、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径2.3mm) が認められる。これらの軽石のうち、あまり発泡の良くない白色軽石については、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められることから、Hr-FA または Hr-FP に由来すると考えられる。

191号土坑では、試料11にあまり発泡の良くない白色軽石 (最大径1.9mm) が比較的多く認められる。この軽石の斑晶には、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められることから、Hr-FA または Hr-FP に由来する可能性が考えられる。試料9より上位では、Hr-FA に由来する軽石のほかに、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

土層の観察やテフラ検出分析の結果、検出されたテフラ粒子と、指標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) によりテフラ粒子の屈折率測定を行った。測定の対象となった試料は、低地セクションBラインの試料26、11、5および191号土坑の試料11の4点である。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第205表に示す。低地セクションBラインの試料26の火山ガラス(n)の屈折率は、1.501-1.503である。また重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石や角閃石が認められる。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.710-1.713である。この軽石は、その特徴から約1.2~1.3万年前*1に男体火山から噴出した男体七本桜軽石(Nt-S, 原田, 1943, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。

試料11の火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、1.514-1.519と1.706-1.710である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979) に由来すると考えられる。試料5の火山ガラス(n)の屈折率は、1.523-1.530である。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.706-1.710である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979) と考えられる。

191号土坑の試料11に含まれる火山ガラス(n)、斜方輝石(γ)、角閃石(m_2)の屈折率は、順に1.501-1.504、1.706-1.711、1.672-1.678である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは、Hr-FAあるいはHr-FPおよびAs-Cに由来すると考えられる。

以上のことから、190号土坑および191号土坑の年代に関しては、いずれも少なくともHr-FA降灰後の可能性が考えられる。

5. 小結

権現山遺跡SG5区において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より男体七本桜軽石(Nt-S, 約1.2~1.3万年前*1)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)または榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B,

第205表 権現山遺跡SG5区における屈折率測定

地点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)	角閃石(m_2)
低地セクション	5	1.523-1.530	opx-cpx(ho)	1.706-1.710	-
Bライン	11	1.514-1.519	opx-cpx	1.706-1.710	-
	26	1.501-1.503	opx-cpx,ho	1.710-1.713	-
191号土坑	11	1.501-1.504	opx-ho,cpx	1.706-1.711	1.672-1.678

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, 重鉱物の()は、量の少ないことを示す。

第8章 権現山遺跡SG5区

1108年)に由来するテフラ粒子を検出することができた。

*1 放射性炭素(14C)年代

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79。
 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石によるテフラの同定-テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269。
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52。
 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法-研究対象別分析法」, p.138-148。
 原田正夫(1943)関東ロームの生成に就いて。東大土肥教室報告, 3, p.1-140。
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p。
 坂口 一(1986)権名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119。
 早田 勉(1989)6世紀における権名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, P.297-312。
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御居第1テフラより上位のテフラについて、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267。

8.10.3. 権現山遺跡SG5区低地における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料	採取地点	種類	乾燥重量	前処理・調整	測定法
No. 2	低地セクション Bライン	腐植質土壌	368.1g	酸洗浄 (低濃度処理)	β線法

2. 測定結果

試料	¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta-
No. 2	5120 ± 70	-20.7	5190 ± 70	交点: BC3980 2σ: BC4220 ~ 3915, BC3880 ~ 3800 1σ: BC4045 ~ 3955	128825

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5,568年を用いた。

2) δ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

δ¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正¹⁴C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ(68%確率)+2σ(95%確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

8.10.4. 権現山遺跡SG5区低地における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、おもにイネ科植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、低地セクションBラインから採取された試料1～8の計8点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレバート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^3g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヒエ属(ヒエ)は8.40、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チマキザサ節)は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第206表および第359図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B(大型)、Bタイプ

[イネ科・タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

第 206 表 権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

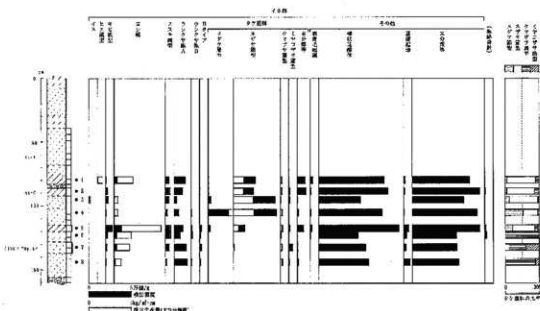
分類群	学名	地点・試料	低地セクションBライン										
			1	2	3	4	5	6	7	8			
イネ科	Gramineae (Grasses)												
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)				7								
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		7										
キビ族型	Panicaceae type		21	7	29	7	80	25	14	7			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		35		7	7	87	32	29	13			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		35	47	36	21	51	51	36	13			
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		132	100	29	57	102	70	144	155			
ウシクサ族B	Andropogoneae B type					7	15	19	7				
Bタイプ	B type			7			22	13	22	13			
タケ部科	Bambusoideae (Bamboo)												
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		7	7	29	241	22						
ネサザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		257	239	491	504	131			7			
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		21	20	7	28	29	13	22	27			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>			13	14		15		43	7			
未分類等	Others		90	100	7	14	73						
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin		28	7		7	22	6					
棒状珪酸体	Rod-shaped		771	818	491	746	943	463	554	587			
茎部起源	Stem origin		14	13		7	58	32	29	74			
未分類等	Others		674	791	606	780	791	520	525	546			
(海綿骨針)	Sponge				7		15	19					
植物珪酸体総数	Total		2091	2168	1754	2408	2437	1244	1431	1464			

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/ha・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)			0.21									
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		0.58										
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		2.19		0.46	0.45	5.49	2.00	1.81	0.85			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		0.43	0.58	0.45	0.26	0.63	0.63	0.45	0.17			
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		0.08	0.08	0.34	2.80	0.25						
ネサザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		1.23	1.15	2.36	2.42	0.63			0.03			
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		0.16	0.15	0.05	0.21	0.22	0.10	0.16	0.20			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>			0.04	0.04		0.04		0.13	0.02			

タケ部科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		5	5	12	52	22						
ネサザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		84	81	84	45	55		11				
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		11	11	2	4	19	100	50	91			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>			3	2		4		40	9			



第 359 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体分析結果

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、莖部起源、未分類等

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) イネ

イネは、As-C直下層(試料3)から検出された。密度は700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを大きく下回っている。ただし、As-C混層(試料2)やその上層(試料1)からはイネがまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) ヒエ属型

ヒエ属型は、As-Bの下層(試料1)から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族B(大型)の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

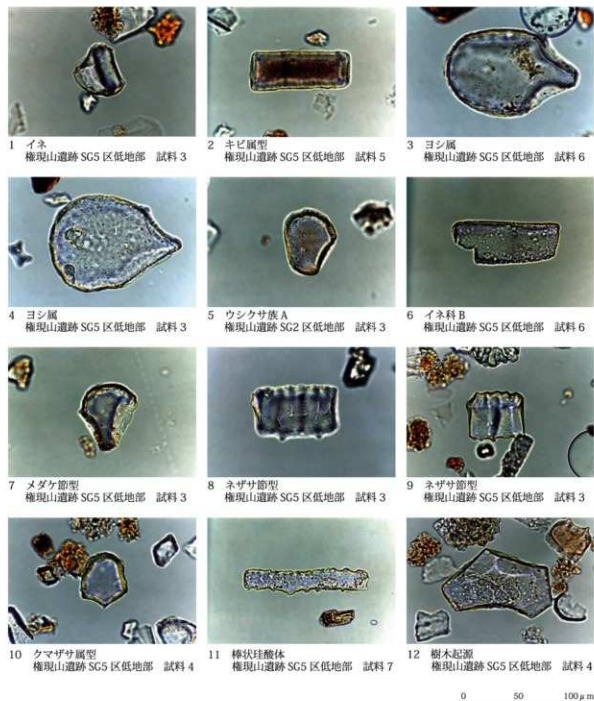
試料8から試料5までの層準では、棒状珪酸体やイネ科(未分類等)が多量に検出され、ウシクサ族Aも比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、イネ科Bタイプ、クマザサ属型なども検出された。試料4ではネザサ節型やメダケ節型が大幅に増加しているが、ヨシ属は減少している。おもな分類群の推定生産量によると、試料5より下位ではヨシ属が優勢であり、試料4より上位ではネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、放射性炭素年代測定で 5190 ± 70 yBP(暦年代でBC3980年頃)の年代値が得られた暗灰色土層およびその上下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の台地部などにはススキ属やチガヤ属などが分布していたと推定される。その後、As-Cの下層の時期には、ヨシ属が減少してネザサ節やメダケ節などの竹笹類が増加したと考えられる。この植生変化は、堆積環境の乾燥化を示しているものと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)直下層からイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、As-Cの上層ではヒエ属(ヒエ)が栽培されていた可能性も認められた。

縄文時代早期頃の調査区は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の台地部などにはススキ属やチガヤ属などが分布していたと推定される。その後、As-Cの下層の時期には、ネザサ節やメダケ節などの竹笹類を主体とする比較的乾燥した堆積環境に移行したものと考えられる。



第 360 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体の顕微鏡写真

文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第 2 号, p.27-37.
 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第 31 号, p.70-83.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追突のための基礎資料として-. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

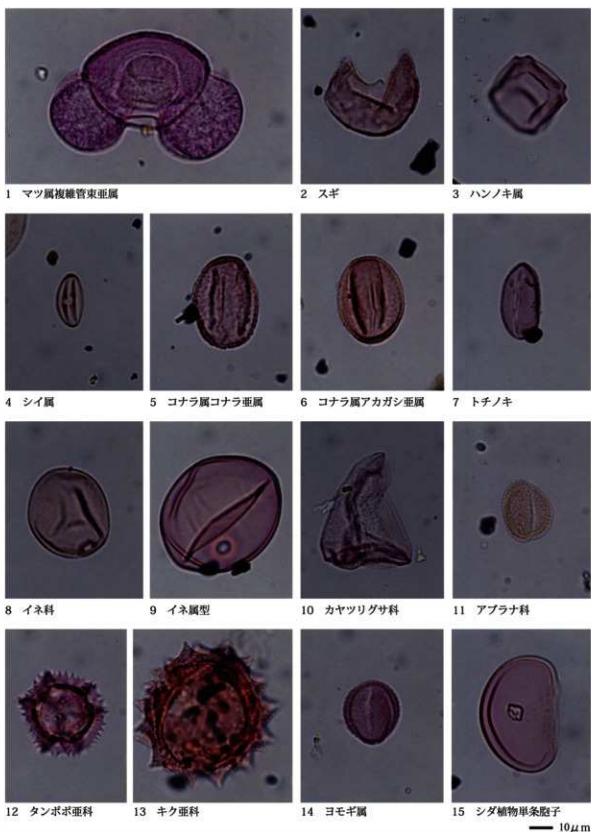
第207表 権現山遺跡SG5区 低地部における花粉分析結果

学名	分類群	和名	低地セクションBライン										
			1	2	3	4	5	6	7	8			
Arboreal pollen		樹木花粉											
<i>Abies</i>		モミ属						3					
<i>Tsuga</i>		ツガ属						1					
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	25	5			1	1				2	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	1	1									
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2										
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	6	2									
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	2										
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2	3									
<i>Castanopsis</i>		シイ属	1	2									
<i>Fagus</i>		ブナ属	1										
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	8	23									1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	6	13									
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ						1					
<i>Acer</i>		カエデ属	1										
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ						4					
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1	3									
Nonarboreal pollen		草本花粉											
Gramineae		イネ科	53	36									
<i>Oryza type</i>		イネ属型	4	1									
Cyperaceae		カヤツリグサ科	11	13									
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	2										
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	2	3									
Cruciferae		アブラナ科						2					
Lactuicoideae		タンポポ科	4	4									
Asteroideae		キク亜科	2	10									
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	57	123					1				
Fern spore		シダ植物胞子											
Monolate type spore		単葉溝胞子	186	287	4	2	1					1	
Trilate type spore		三葉溝胞子	6	8									
Arboreal pollen		樹木花粉	55	58	0	1	1	0	2	1			
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	135	192	0	0	1	0	0	0	0	0	0
Total pollen		花粉総数	191	253	0	1	2	0	2	1			
Unknown pollen		未同定花粉	1	5	0	1		0	0	0			
Fern spore		シダ植物胞子	192	295	4	2	1	0	1	0			
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

の計27である。これらの学名と和名および粒数を第207表に示し、主要な分類群を第362図の写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ



第 362 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部の花粉・胞子遺体

第8章 権現山遺跡SG5区

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

上位の試料1、2からは比較的多くの花粉が検出されたが、下位の試料3～8からは花粉がほとんど検出されなかった。試料1、2では樹木花粉より草本花粉とシダ植物胞子の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科とヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ亜科、アカザ科-ヒユ科が伴われる。試料1ではイネ属型が出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、マツ属複雑管束亜属が優占し、コナラ属アカガシ亜属、ハンノキ属などが伴われる。上位の試料1ではマツ属複雑管束亜属の出現率が高い。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

放射性炭素年代測定で 5190 ± 70 BP (暦年代で BC3980 年頃) の年代値が得られた暗灰色土層の下層から浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉) の下層にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。これは、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境によって、花粉等の有機質遺体が分解されたためと考えられる。

As-C 混層の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科を主にカヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ亜科、アカザ科-ヒユ科などの草本が生育する、比較的乾燥した人里の環境であったと考えられ、周辺には水田が分布していたと推定される。また、周辺地域にはナラ林 (コナラ属コナラ亜属) やカシ林 (コナラ属アカガシ亜属) などの森林が分布していたと考えられる。

As-C の上層の時期には水田が拡大したと考えられ、周辺地域ではナラ林やカシ林が減少して、マツ (マツ属複雑管束亜属) の二次林が増加したと推定される。

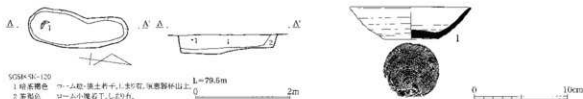
文献

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
中村純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

第11節 平安時代の土坑

SG5区 SK-120 (第363図、写真図版53・187)

SG5区南部の台地平坦面、9.5-17.5×18.0グリッドに位置する。重複する遺構はない。周辺に古代の遺構はない。東2mに古墳時代土坑SK-121と時期不明のSK-122がある。平面形は長楕円形で、ひょうたん形に少しくびれを持つ。中軸線はN-0°-Eで、長径2.09×短径0.55m、深さ0.38mである。底面はほぼ平



第363図 権現山遺跡SG5区 SK-120 遺構-遺物

第208表 権現山遺跡 SG5区 SK-120 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 12.8 高 3.6 底 5.4	外面口縁～体部口クロナデ。底面糸切りで平底。内面口縁～底部口クロナデ。使用のためか、内面は平滑になっている。三義産産。	2.5Y7/2 灰青 やや暗黒 白・灰色塵～細粒と 黒削～細粒微量 やや硬質	底上35cm 口～体1/2割。底完存 I

坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土上層に若干ではあるが焼土を含む。遺物は、栃木県西部の三倉山麓窯跡で生産された9世紀後葉の須恵器杯が1点だけ出土した。この杯は側面を上に向けて遺構確認面に出た状態であり、約半周を欠損して破面が磨滅していないので、埋没時には全周が残っていたのかも知れない。調査時の写真を見ると、径5～10cm前後の礫が覆土中に数個入っている。

第12節 中世～近世の土坑

SG5区 SK-138 (第364図、写真図版53)

SG5区中央の15.0-16.5グリッドに位置する。重複する遺構はない。時期不明の掘立柱建物跡SB-154が北側に、時期不明の土坑SK-139が南に近接してある。平面形は隅丸長方形で、中軸線はN-8°-Eである。規模は長径1.45×短径1.12m、深さ19cmである。底面はほぼ皿状で、壁はなだらかに立ち上がる。覆土はレンズ状の自然堆積で、下層ほどローム粒の混入が顕著である。

遺物は図示した甕頸部片があり、この甕と胎土・焼成がよく類似した大形器種と思われる胴部の小破片も図示以外に10点ある。中世～近世の瓦質土器でも壺や火鉢の内面を磨く場合がある(池田2010, 遺物編p.117)。色調・焼成は土師質に近いが、非常に硬く焼成されていて古墳時代や古代の土師器ではないので、中世から近世の「瓦質土器」としておく。図示以外の混入遺物として、古墳時代中期の可能性が高い土師器片(椀形杯、「ハ」の字形脚部の高杯、胴部の小さな小形壺、壺甕類)も少量含み、模倣杯はない。



第364図 権現山遺跡 SG5区 SK-138 遺構・遺物

第209表 権現山遺跡 SG5区 SK-138 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 瓦質土器 甕	高 規 4.7	外面口縁～頸部横方向のナデで、口縁部は粘土の取付により複合口縁状となる。内面口縁～頸部口コナデの横方向のミガキ。外面頸部底元径17.2cm。	5YR5/4 に近い赤褐色 やや暗い 白・赤・透明期～黒 粒少、白礫と砂粒微量 硬質	口～頸1/6割

第13節 中世～近世の溝状遺構

SG5区 SD-133 (第365図下、写真図版54)

SG5区南部の10.0-17.5・18.0グリッドにあり、東西両側は調査区外へ伸びる。古墳時代の遺物集積地点(祭祀遺構)SX-118の北側を切る。東部は時期不明のSD-134へと合流する関係にあるが、同時存在か、時間差を持って重複するのかわかり不明である。

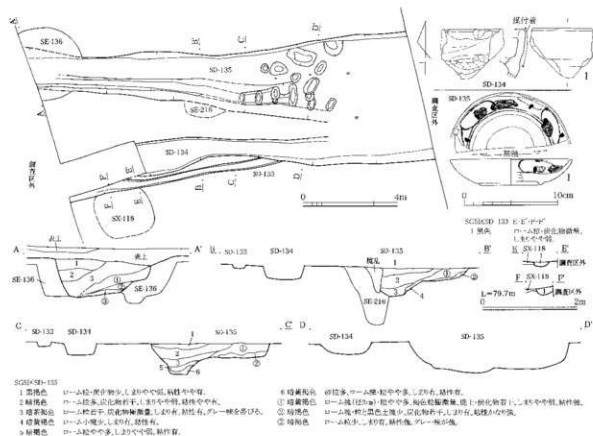
溝幅22～34cm、残存する深さは6～11cmで、底面が西から東へ傾斜し、標高は西端で79.39m、東端で79.29m。覆土は単層で、テフラの層や粒はみられず、炭化物を少し含む。遺物は出土しなかった。重

複する SD-134 では古墳時代土師器の他に中～近世の内耳土器片が出土している。SD-134 との新旧は不明だが、おそらく近い時期、つまり中世～近世の溝であろう。

SG5 区 SD-134 (第 365 図中央)

SG5 区南部の 10.0-17.5・18.0 グリッドにあり、東西両側は調査区外へ伸びる。時期不明の SD-133 の東部が合流している関係にあるが、同時存在か、時間差を持って重複するのかは不明である。西端部分 (E' と F' の北側) は、電柱の補強施設があるので、調査できなかった。溝幅 63 ~ 141cm で、調査区東部では幅 110cm まで広がり、その東側は湧水などのため遺構が確認・記録されていない。残存する深さは 23 ~ 34cm で、底面が調査区中央部 (標高 79.17m) から (西部 79.08m) へ傾斜する。土層断面図の記録がなく、覆土の特徴は不明である。

遺物は古墳時代土師器片と内耳土器片がある。内耳土器片 (SD-134 の 1) からみて中世～近世の溝かと考えられる。古墳時代土師器は杯・甕片などがあり、口径が小さい半球形および口縁外反形の杯が多いので、古墳後期末ころの土師器が混入したものであろう。内耳土器の事例は、北方の立野遺跡 2 区 SD-4 や中島笹塚遺跡 3・7 区 SD-315 に近世焙烙がある (『東谷・中島地区遺跡群』5・9)。



第 365 図 権現山遺跡 SG5 区 SD-133-134-135 遺構 SD-134-135 遺物

第 210 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-134 出土遺物

品目 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 現在位置 注記
土師器 内耳器	高 残 5.2	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデのみ貼付。耳は下面のみ残存しており、上面は貼付部分から剥落している。外面口縁部縦行着。	5R5/6 明赤陶 緻密赤・透明釉面微 破破	口一部

SG5 区 SD-135 (第 365 図上、写真図版 54・187)

SG5 区南部の 10.5-17.5・18.0 グリッドに所在する。東西は調査区外へ伸びる。時期不明の SE-136・216 を切る。

溝幅は 140cm (SE-136 重複部) ~ 322cm (東端) で、東側が広い傾向があり、調査区西壁付近では溝幅 204cm (断面図 A-A')。南よりの部分は、埋没後に幅 169cm (断面図 C-C') ~ 204cm (断面図 A-A') の溝幅で掘り返している。残存する深さは北部の浅いところで 24 ~ 39cm、南部の深く掘り返した部分で 40 ~ 59cm。北部の浅いところは底面が東から西へ傾斜し、標高は東端で 79.14m、西端で 79.00m。南部の深いところは底面にはっきりした傾斜がなく、調査区東部 (湧水で調査できなかった東端を除く) で 78.85m、西端で 78.80m。深い部分の溝底面より 8 ~ 12cm ほど土坑状に深い部分が、約 80cm の間隔で底面に並ぶ。この深い部分に砂質の 6 層が認められる (断面図 C-C')。

覆土は自然埋没だが、途中で掘り返したような状態で、2 時期の溝が重複したとも考えられる。断面図で番号に○印を付けた層が旧期の覆土である。断面図 C-C' で、新期溝の 3 層はグレー味が強く保水力のある特徴的な層で、5・6 層は溝底面が土坑状に窪む部分を埋めている。凹凸状の底面を砂質土で埋め戻すことを重視すると、通路状遺構の可能性もある。権現山遺跡南部で通路状遺構の可能性のある事例は、SG9 区 SX-54 がある (第 9 章第 2 節)。各層ともにテフラの層や粒はない。

肥前系の磁器 (SD-135 の 1) から 18 世紀後半ころの溝と考えられる。他に厚手の土師質土器裏破片や施釉陶器破片があり、古墳後期中葉 ~ 末ころの土師器も混入している。

第 211 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-135 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 磁器	口 縦 12.9 底 2.7 底 6.5	肥前系と見られる。内面底部の集積されたい輪売げ部分や口縁端部の割離 残の欠面は中部にあり、口縁部分わずかに欠けた状態でも使用さ れていたと見られる。内面口縁~体部唐草文。	2.5YR/1 灰白 黄褐色少 黄質	口~底 1/2 割

第 14 節 時期不明の掘立柱建物跡

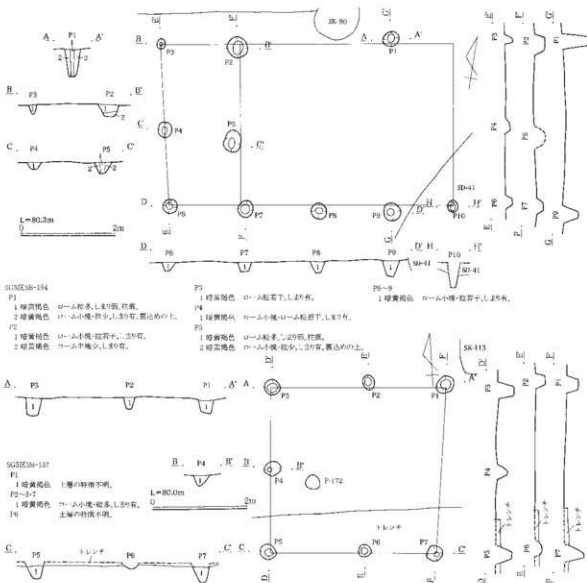
SG5 区 SB-154 (第 366 図上、写真図版 54)

SG5 区中央北寄りの 15-16・17 グリッドに位置する。南東隅の柱穴 P10 が古墳後期の溝 SD-41 と重複するが、新旧関係は不明である。古墳中期の居館跡を構成する櫛列 SA-151 の内部 (東辺中央の西 4m) にあるので、仮にこの建物が古墳中期であれば、居館に関連する建物の可能性もある。しかし、SA-151 と方位が少し異なり、また P1 や P5 の柱痕部はしまりが弱いの、それほど古くまで遡らない建物と考えるのが自然であろう。

桁行 4 間・梁行 2 間と推定される東西棟の側柱建物跡。ただし、P1-P2 間の北辺柱穴や、南東隅柱穴 (P10) 以外の東辺柱穴が確認されていない点に疑問も残る。P1 と P10 は他の柱穴より深い点異なる。P10 は SD-41 の覆土中の地山が不安定なので深く掘ったと考えることもできる。西端部の 1 間分を仕切るように P5 があり、西辺中央柱穴 P4 と対応するように、西へ少し張り出す位置にある。桁行 4 間 (6.00m) × 梁行 2 間 (3.42m)。南北の中軸線は N-13°-W で柱穴は 10 本あり、配置は長方形である。

柱間は桁行 1.31 ~ 1.64m、梁行 1.44 ~ 2.00m である。P1 は 31 × 34 × 深さ 59cm、P2 は 43 × 45 × 深さ 26cm、P3 は 17 × 21 × 深さ 21cm、P4 は 29 × 32 × 深さ 15cm、P5 は 36 × 46 × 深さ 25cm、P6 は 30 × 31 × 深さ 17cm、P7 は 31 × 35 × 深さ 20cm、P8 は 32 × 34 × 深さ 20cm、P9 は 35 × 36 × 深さ 35cm、P10 は 20 × 27 × 深さ 31cm (推定 54cm) である。覆土は、P1 と P5 に柱痕が残る以外は単層である。遺物は出土しなかった。

第8章 権現山遺跡SG5区



第366図 権現山遺跡SG5区 SB-154-157 遺構

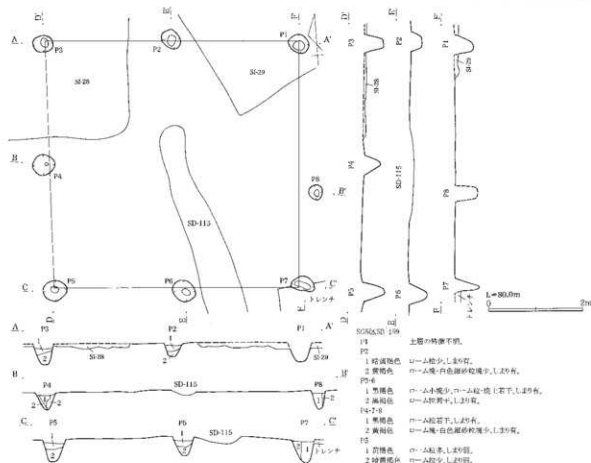
SG5区 SB-157 (第366図下、写真図版54)

SG5区中央の13-17グリッドに位置する。西側3mに古墳時代のSI-23がある。南列は確認調査時のトレンチに削られる。

桁行2間(3.55～3.66m)、梁行2間(3.48m)の側柱建物である。南北の中軸線はN-4°-Eで柱穴は7本あり、配置は方形である。東辺中央の柱穴は確認されなかった。柱間は桁行1.54～2.02m、梁行1.72～1.75mである。P1は33×38×深さ28cm、P2は25×30×深さ25cm、P3は33×35×深さ39cm、P4は30×35×深さ22cm、P5は30×34×深さ29cm(推定36cm)、P6は27×28×深さ10cm(推定15cm)、P7は32×35×深さ35cm(推定43cm)。覆土は単層である。遺物はP5出土の古墳中期末以前とみられる土師器片2点だけで、この遺構の時期を示すものとは思われない。

SG5区 SB-159 (第367図、写真図版54)

SG5区中央南寄りの12-17グリッドに位置する。古墳中期のSI-29および後～終末期のSI-28と重複する。SI-28・29の貼床層にSB-159柱穴が覆われていないことから、SB-159がSI-28・29を切ると考えられる。



第367図 権現山遺跡SG5区SB-159遺構

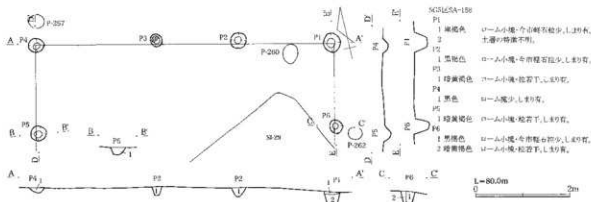
桁行2間(5.27～5.42m)、梁行2間(5.06～5.34m)の側柱建物である。東西側柱のP4・P8は若干外側に逸れる。南北の中軸線はN-8°Eで柱穴は8本あり、配置はほぼ方形である。柱間は桁行2.48～2.79m、梁行2.46～3.14mである。P1は35×42×推定深さ40cm(SI-29床面から深さ29cm)、P2は35×43×深さ22cm、P3は36×41×推定深さ45cm(SI-28床面から深さ40cm)、P4は42×47×深さ36cm、P5は43×50×深さ46cm、P6は42×51×深さ47cm、P7は29×49×深さ50cm、P8は30×32×深さ48cmである。覆土は、P4・P7・P8に柱痕を反映する黒褐色土が見られる。遺物は出土しなかった。

第15節 時期不明の柵列

SG5区SA-158(第368図)

SG5区中央南寄りの12-17グリッドに位置する。当初、2間×3間の掘立柱建物跡と考えて「SB-158」とされていたが、現地調査時には南辺とされた柱穴は古墳時代竪穴建物SI-28・29に伴うものと考えられるので削除し、東西に3間、南に1間のコの字状の柵列としてSA-158に名称を変更した。掘立柱建物跡と考えた場合は、南側はSI-28・29と重複するが明確ではない。

北辺を構成する4本の柱穴(P1～P4)の南側に各1本(P5～P6)を配置し、全体が「コ」の字形になる。東西柵列の中軸線はN-76°Wである。柱穴は調査区内で6本確認した。東西3間(6.23m)、南北1間(西側1.90、東側1.76m)のコの字状の柵列である。東西柱間は1.71～2.56m、各柱穴の規模は、P1は径35×40×深さ31cm、P2は径31×35×深さ20cm、P3は径25×27×深さ19cm、P4は径30



第368図 権現山遺跡 SG5 区 SA-158 遺構

×34×深さ12cm、P5は径32×34×深さ16cm、P6は径26×30×深さ35cmで、深さには若干の深浅がある。このうちP6は柱痕が認められる。遺物は出土しなかった。

第16節 時期不明の溝状遺構

SG5 区 SD-108 (第369図左、写真図版55)

SG5 区中央の13-16～18グリッド。古墳中期のSI-24を切る。古墳時代のSI-155、時期不明のSK-109、古墳時代のSD-101と重複し、土層断面図はないが、各遺構を切ると考えられる。東端は谷部に入り、調査区東側の低地へ続く。古墳時代の土坑群や遺物包含層が形成されている低地部の埋積層上部にこの溝の東端部が掘り込まれているので、古墳時代よりもかなり新しいことがわかる。

若干彎曲するが、ほぼ東西に直線的に続き、中軸線はN-87°-Wである。長さは確認できる部分で41.4mである。断面形は西側は皿状、東側は浅いV字状で、底面の平坦部分は狭い。北側面に比べ南側面の傾斜が緩い。幅は確認面で1.02～2.06m、底面の幅は0.08～0.52m、深さは55～94cmである。覆土は3層または4層の自然堆積で、1層は以外は締まりがなく、下層ほどロームの粒・塊の混入が多い。

遺物はごくわずかである。土師器は高杯・椀形杯・壺・甕など、須恵器は外面カキ目調整の瓶?が1片ある(1)。古墳中期の土師器が中心で、重複する古墳時代の竪穴建物SI-24・155などからの流入・混入と見られる。現地調査時の所見でもかなり新しい時期の溝と判断されている。

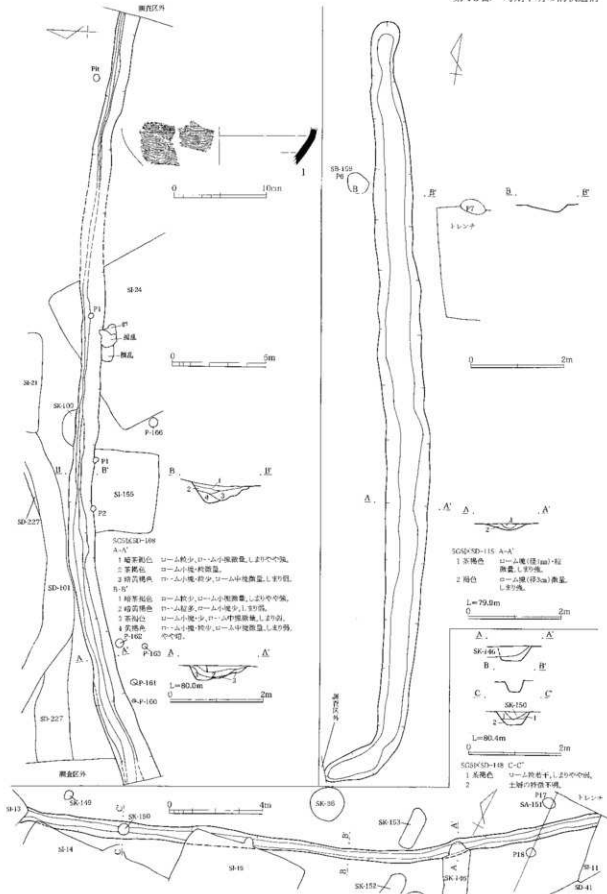
第212表 権現山遺跡 SG5 区 SD-108 出土遺物

番号 種類 品名	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 須恵器 瓶類	最大 径21 高 径4.0	外面割部分キメ、内面割部クロナデ、外面割部には、1位となる部分主体に自然剥付存。2片が同一個体。残存割面が少ないので復原性は参考値。	2.5Y6/3 に近しい黄 黒煎焼土。白磁粒微塵 や今硬質	池地北部とSD-108の各1片が同一個体 割部2片 チイチイ一括。SD-108

SG5 区 SD-115 (第369図右、写真図版55)

SG5 区中央南寄りの11-17、12-17グリッド。北側に古墳後期～終末期のSI-28と中期のSI-29、時期不明のSA-158がある。北端で時期不明の掘立柱建物SB-159のP6とP7の間を通るが、SB-159との新旧関係は不明。

南北に直線的に続き、南端で西側にほぼ直角に折れて調査区外に延びる。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。南北に延びる溝の中軸線はN-20°-W、長さは確認できる部分で16.66m、幅は0.35～0.95m、底面の幅は0.19～0.52m、深さは10～12cmである。覆土は自然埋没状の上下2層で、下層にローム粒・塊が多い。出土遺物はなく、時期不明である。



第369図 権現山遺跡SG5区 SD-108・115・148 遺構 SD-108 遺物

SG5 区 SD-148 (第 369 図下、写真図版 55)

SG5 区中央北寄りを通断する溝で、15-16・17、16-17 グリッドに位置する。現地調査時には SD-156 の名称も用いているが、同一の溝である。時期不明の SK-146・150 に切られる。古墳後期の SI-15 に切られる可能性もあり、それが正しければ古墳時代の溝とも考えられる。古墳中期の SI-11 (図の東端部) および後期の SI-14 とは重複部分が僅少なため新旧は不明。古墳中期の SI-13 を切る可能性がある (図の西端部)。SI-13 の調査区西壁土層断面 (第 300 図) で SI-13 を切る「攪乱」が、SD-148 ではないかと推定されるからである。

南西 - 北東方向にほぼ直線的に続く。中軸線は N-57° - E、長さは確認できる部分で 24.78m である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。幅は 0.38 ~ 0.78m、底面の幅は 0.18 ~ 0.36m、深さは 25 ~ 32cm である。SK-150 に切られる付近で上半部の土層の特徴だけが記録されているが (断面 C-C)、それ以外の部分の状況は不明である。

遺物は古墳時代の土師器小破片だけなので、時期ははっきりしないが、外反口縁の杯などからみて古墳後期後葉 ~ 末頃かと思われる。口縁部が内傾・直立・外傾する杯や半球形の杯は認められない。小形裏の口縁部片などが少量ある。土師器は重複する SI-14・15 などからの混入品とも考えられる。SD-148 には古墳後期の土師器片があるので、重複する中期の SI-11・13 よりも時期が新しい可能性が考えられる。

第 17 節 時期不明の井戸

SG5 区 SE-114 (第 370 図上、写真図版 54)

【位置】 SG5 区中央部西寄りの 12.5-16.5 グリッド。北に SI-26、東に SI-99 の古墳時代中期穴が近接する。西側は調査区外。重複する遺構はない。

【規模と形状】 確認面の平面形はほぼ直径 1.90 m の円形で、深さ 2.80 m である。断面形は漏斗状で、壁は底面から垂直気味に立ち上がったのち 2m ほど上方で外傾する。下方の壁はオーバーハングしているが、これは地山が崩落したためであろう。壁上半の傾斜が変化する部分の平面形は直径 85cm ほどの円形である。破線で図示した底面はほぼ平坦で、上端の円形の中心よりやや南に寄る。

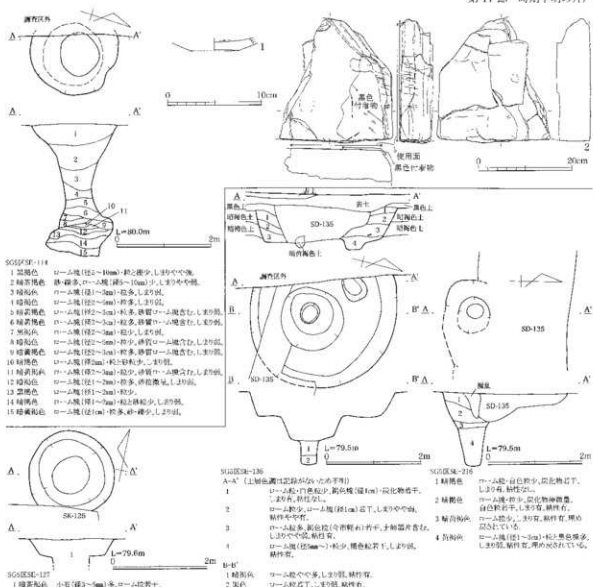
梅雨期 (1998 年 6 月) には 2 層付近まで湧水した。地下水位が低い 99 年 3 月に、周囲の地山を断ち切らないで底面まで調査を行った。

【覆土】 砂・礫がやや多い覆土 2 層や、ローム塊が多い 2 ~ 5 層は人為的に埋め戻した可能性もあるが、確実ではない。6 層以下は地山が崩れながら互層状に自然堆積した薄層群のように見られる。

【出土遺物】 ごくわずかな遺物が出土している。図示した土師器杯 1 片 (1) と砥石 (2) 以外に、土師器高杯片がある。この遺構の確実な時期は不明で、遺物だけで判断すれば平底の土師器杯破片があるので古墳時代中期中葉 ~ 末頃の可能性もあるが、埋土の締まりが弱いので、もっと新しい時期の遺構と考える方が適切であろう。

第 213 表 権現山遺跡 SG5 区 SE-114 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 埋没状態 注記
1 土師器 杯	高 径 1.4 底 径 5.0	内外面とも全体的に表面が磨減しており、調整は不明確。外面体~底部ナデ。底部は全体的に浅くぼむ。内面底部ナデ。	10YR8/4 やや細密 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色	出土状態 埋没状態 注記 体下半~底 1/3 周
2 石器 砥石	長 径 28.1 幅 径 24.2 厚 径 7.1 重 5600.0	大形。板状に割れる砂岩質で、裏面は層理面から欠面する。右側面には、整形時の切削痕が残る。使用面は表面のみで、平滑ではあるが、使用に伴う摩傷・変形はなく、さほど使用されていないと見られる。下端には、刃物が当たった痕跡あり。水中にあったためか、表面には鉄分が異状に付着する。	2.5Y6/3 に深い溝 やや粗い 砂岩	一部欠



第370図 権現山遺跡SG5区 SE-114・127・136・216 遺構 SE-114 遺物

SG5区 SE-127 (第370図下左、写真図版54)

【位置】SG5区南寄りの9.0-18.0グリッドに位置する。時期不明のSK-126に南端を切られる。

【規模・形状・覆土】確認面での平面形は、直径1.80mの円形である。深さ35cmほどの皿状の土坑の中央に0.75×0.82mの円筒状の井筒を掘り込んでいる。調査を実施した1998年6~7月には、確認面から少し掘るとすぐに湧水し、底面までの調査は行わなかった。覆土は最上層だけを確認し、それより下部の状態は不明である。

【出土遺物】遺物は現代の陶器だけである(鉄軸のかかる器種不明の口縁破片と、大裳胴部破片)。現代が、それに近い近代の井戸であろう。

SG5区 SE-136 (第370図下中央、写真図版55)

【位置】SG5区南寄りの10.5-17.5グリッド。西側は調査区外。時期不明のSE-216が東にある。東西に延びる近世のSD-135に切られる。断面A-A'で遺構底面とSD-135の重複部を切る「暗黄褐色土」はローム粒主体でしまりが弱く、柱状土坑が重複している可能性があるが、半分以上が調査区外なので詳細不明。

【規模と形状】有段の井戸である。規模は上段の開口部で口径 3.05m、底径 2.60m、深さ 0.52m、中段で口径 1.38 × 1.28m、底径 0.98 × 0.86m、確認面からの深さ 1.02m(上段底面からの深さ 0.50m) である。下段は口径 0.45 × 0.40m、底径 0.35 × 0.28m、確認面からの深さ 1.54m(中段底面からの深さ 0.52m) で、円筒状の井筒である。調査を実施した 1998 年 7 月中旬には上段の底面付近まで湧水し、春季(1999 年 3 月)には下段部でも湧水しなかった。土層断面図 A-A' に記入した暗褐色土(地山のローム漸移層)を掘り終わったところが上段の底面になっていることがわかる。

【覆土】上段で 4 層、下段の井筒部分で 2 層が見られる。上段の層は 1 層に白色粒子(テフラ?)と炭、3 層には周囲の古墳時代遺構から混入した土師器片を含み、自然に埋没した層と見られる。下段部もローム塊などを含まず、自然埋没の可能性がある。各層ともにしまりが弱いので、それほど古い時期の遺構ではないと見られる。土層断面図に記入した黒色土は表土の下部であろう。

【出土遺物】遺物はごくわずかで、古墳中期末から後期中頃までの土師器(杯・高杯・鉢・壺類など)の小破片である。半球形および口縁部外傾の模倣杯、内斜口縁ふうの椀形杯、短脚・柱状脚の高杯破片などがある。この遺構に伴うものとは思えない。

SG5 区 SE-216 (第 370 図下右、写真図版 55)

【位置】SG5 区南寄りの 10.0-17.5 グリッドに位置する。同じく時期不明の井戸 SE-136 が西にある。東西に延びる近世の溝 SD-135 に北側上部を切られる。

【規模と形状】SD-135 に切られているため、平面形は明確でないが、確認面で推定 1.90 × 1.40m の楕円形で、確認面から約 80cm の深さで稜を持って、円筒状の井筒となる。断面形は漏斗状となる。稜の変換点で 0.78 × 0.68m の楕円形、底面は 0.35 × 0.32m のほぼ円形である。確認面からの深さは 1.58m である。調査を実施した 1999 年 3 月中旬には底面でも湧水していなかった。

【覆土】4 層にわけられる。最下層の 4 層はローム塊と黒色土塊の混土層で、3 層とともに埋め戻した層であると現地調査時に判断した。それよりも上層は白色粒子(テフラ?)や炭を含む暗褐色土で、自然埋没であろう。

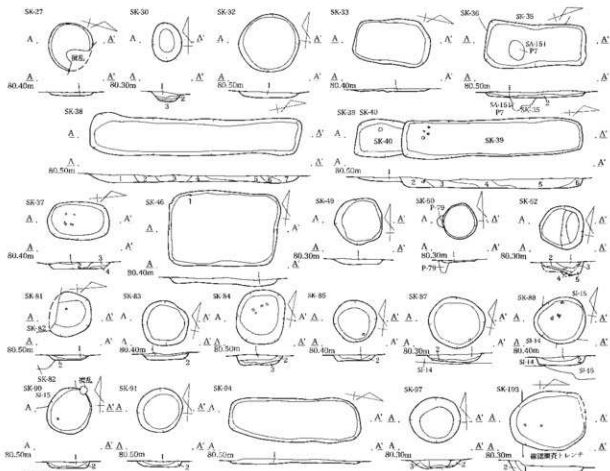
【出土遺物】土師器 3 点だけである。須恵器杯身模倣形の土師器鉢口縁部 1 片、上げ底状の杯か鉢底部 1 片、漆仕上げを行う半球形杯の口縁部破片がある。古墳後期前半期の遺物と見ることができそうだが、SE-216 の時期を示すものとは思えない。

第 18 節 時期不明の土坑 (第 371・372 図、写真図版 56 ~ 60)

時期不明の土坑は SG5 区で 46 基を調査した。SG5 区は古墳時代集落が中心になるので、これら時期不明土坑の中にも古墳時代土坑を含む可能性はある。SK-33・36・37 の 3 基や、SK-87・88・90・91 の 4 基は、それぞれ同種の土坑である。また、SK-81・83・84 もやや類似している。SK-122 は出土した陶器片からみて近世以降の可能性が高い。SK-38・39・40・94・125・126・128・131・152 は近代以降の農業関連土坑(通称「イモ穴」)と考えられる。詳細は表に示す。

第 214 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重層関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中輪幅	覆土
SK-27	18.5-15.5	円形	重層なし	1.00	0.93	0.08		
径 1m 程度の円形で浅い。北東部は浅い。遺物はごくわずかな土師器壺類と杯の小破片で、模倣杯・漆仕上げ杯片はないので古墳中期末葉以前。最も近い穴 SK-2 は古墳時代。形状から古墳時代の可能性もある。SK-49・50 も参照。								
SK-30	16.5-16.0	楕円形	重層なし	0.83	0.62	0.21	N5-W	3 層 白色粒あり
遺物はごくわずかな土師器の小破片で身模倣形の杯片があり、漆仕上げはあるが艶がないため、古墳後期末頃の土器と思われるがこの時期の遺構かどうか不明。3 層は黒土か? 上層は白白色粒が多くなる。写真で見ると谷間にある感じ。両半の上層は失われている。古墳時代の可能性もある。								
SK-32	16.0-16.0, 16.5-16.0	円形	重層なし	1.26	1.21	0.15		
古墳時代の方形甕形 SA-151 の列にあり、SA-151 の P2 と近接する。北東には古墳中期の円筒形土坑 SK-34 があるため、SK-32 も古墳時代の土坑または円筒形土坑の可能性もある。								



- SG5区SK-27
1 暗褐色 ローム層・小坑と褐色土小塊少, 焼, 土器片有。
SG5区SK-30
1 褐色 焼土層・褐色土・白色土・褐色土層, 焼, 土器片有。
2 暗褐色 ローム層・粘り少, 焼土・白褐色土層, 焼, 土器片有。
3 暗茶褐色 ローム層・粘り多, 土器片, 土器片有。
SG5区SK-32
1 暗茶褐色 ローム層・粘り多, ローム層(厚10cm)粘り少, 土器片有。
SG5区SK-33
1 褐色 ローム層粘り多, 土器片有。
SG5区SK-35
1 灰色 ローム層粘り多, 土器片有。
SG5区SK-37
1 褐色 ローム層粘り多, 土器片有。
SG5区SK-38
1 暗茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
2 茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
3 暗茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
4 茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
5 茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
6 暗茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
7 暗茶褐色 ローム層粘り多, ローム層(厚10cm)粘り多, 土器片有。
SG5区SK-39
1 暗褐色 ツツ子ローム粘り多, ツツ子ローム小塊粘り多, 土器片有。
SG5区SK-39
1 暗褐色 ツツ子ローム粘り多, ツツ子ローム小塊粘り多, 土器片有。

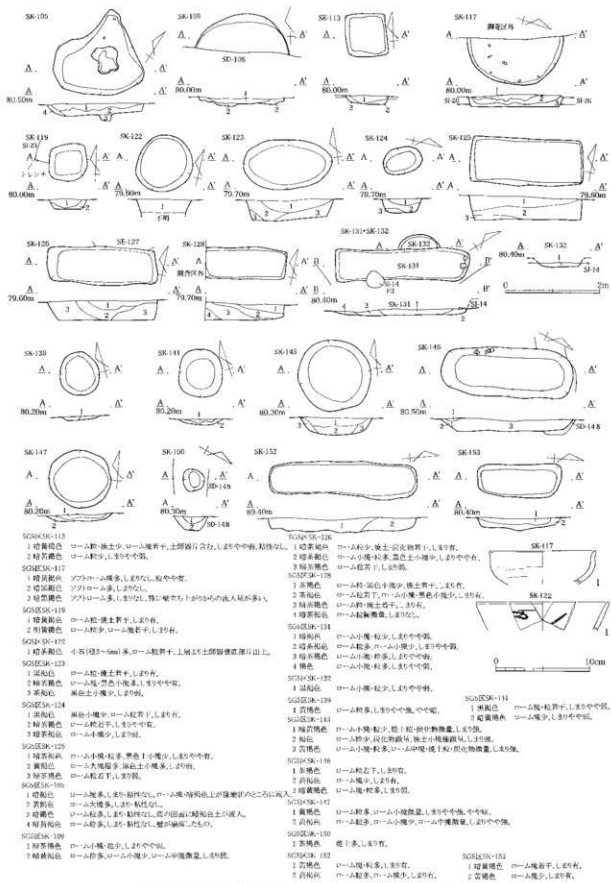
- SUSE区SK-42
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
3 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
4 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
5 暗茶褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-41
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗茶褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-43
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗茶褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-44
1 暗茶褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
3 暗茶褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-45
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-47
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-48
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-49
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-51
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-54
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
SG5区SK-57
1 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
2 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
3 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。
4 暗褐色 ローム粘り多, 土器片有, 粘り多。



第371図 権現山遺跡SG5区 時期不明の土坑(1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5区

遺跡名	グリッド	形状	重要関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中輪軸	電土
SK-33	16.5-16.0	長方形	重なりなし	1.61	0.87	0.06	N-8 W	
長さ1.6m程度なので、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)としては小さい。近くにある古墳時代の長方形土坑SK-31に類似する。SK-31では古墳後期前葉の遺物がわずかにある。この土坑も同じ可能性がある。時期不明のSK-36-37も同じような遺構で、これとセットかもしれない。								
SK-36	16.0-16.5, 16.5-16.5	長方形	重なりなし	SK-151+P7→SK-35→SK-36	2.15	1.02	0.13	N19-E
古墳中期末のSK-35と古墳時代の方形横穴SK-151のP7より新しい。近くにある古墳時代のSK-31や時期不明のSK-33-37と類似する。現地の所見では近代以降の農業関連土坑(イモ穴)とは判断されていない。古い時期の土坑かもしれない。								
SK-37	16.5-16.5	隅丸方形	重なりなし	1.30	0.80	0.14	N10-E	
遺物は土師器4点のみで時期はまったく分からず、内側に縁と思われる片も片も、横軸や漆土上げはないが、古墳中期末以降と見てもできる。古墳時代のSK-31や時期不明のSK-33-36等と同様の遺構の可能性があり、この場合は古墳後期前葉の土坑かもしれない。								
SK-38	16.5-16.5/16.0	長方形	重なりなし	4.48	0.70	0.19	N11-E	
遺物は土師器前葉の銅器2片のみ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か。								
SK-39	16.0-16.0	長方形	SK-40より新	3.81	0.82	0.22	N4-E	
時期不明のSK-40を切る。遺物は土師器前葉銅器と鉢の銅器4片のみ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か。								
SK-40	16.0-16.0	長方形?	SK-39より古	1.02	0.80	0.11	N4-E	
時期不明のSK-39に切られる。遺物は土師器小形器の鉢器1片のみ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か。								
SK-46	16.5-16.0, 17.0-16.0	長方形	重なりなし	2.37	1.50	0.18	N-82 W	軒石あり
古墳中期末。前からは近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と見えない。遺物は土師器鉢・甕・甕の可能性があり、軒石の底部1片のみ。遺物が鉢などであれば古墳中期末が、甕・甕なら縄文定できない。古墳時代の方形横穴SK-151の北部周辺の土師器中葉土坑(イモ穴)か。								
SK-49	18.5-16.0	円形	重なりなし	1.04	0.98	0.10		
遺物は土師器片で焼酎杯・高杯・甕・甕等5点のみ。横軸がないため古墳中期末と思えるが、作るものとは言えない。近くに時期不明のSK-27-50があり、古墳時代の土坑にたまえる類があることから、3層あけて古墳時代となる可能性もある。								
SK-50	18.0-18.5	円形	P79と重なり	0.74	0.72	0.06		
時期不明の穴状土坑P79より土を埋められておらず、P79を切る可能性がある。遺物はない。近くに時期不明のSK-27-49があり、古墳時代の土坑はほとんどが削りだで、古墳時代と見てもできるが、範囲は隣。								
SK-52	14.5-16.5	円形	重なりなし	0.94	0.90	0.29		
表面は凹状。土坑後期の穴状S19の西で、古墳中期のSK-51/96の北にある。SK-51と関連があれば古墳時代となるが、断定する範囲はない。SK-51は方形。SK-52は小さい円形。								
SK-81	16.0-16.5	円形	SK-82より新	0.96	0.88	0.11		
古墳後期の穴状S10の南西にあり、古墳中期のSK-82を切る。遺物はSK-82・甕1として取り上げた土師器前葉の銅器2片と底部1片のみ。この土坑に伴うとは思えないため、時期を限定できない。周囲にある同じような時期不明のSK-83-84と近い時期の可能性もある。								
SK-83	15.5-16.5	円形	重なりなし	1.00	0.93	0.15		
古墳中期のSK-81と類似。SK-81+84等と近い時期と見てもできる。								
SK-84	15.5-16.5	隅丸方形	重なりなし	1.16	0.99	0.20	N5-E	
古い土坑のように見えて、遺物はわずかな土師器片の小片だけで時期を限定できない。時期不明のSK-81/83等と同様の可能性もあるが、形の差から異なるものと見てもできる。								
SK-85	15.5-16.5	円形	重なりなし	0.89	0.87	0.14		
古墳時代の穴状S9の直線にある。遺物は土師器前葉の銅器1片だけなので時期不明。北にある時期不明のSK-83等と同様の可能性もある。								
SK-87	15.0-16.5	円形	SK-14より新	1.19	1.08	0.18		
古墳後期の穴状S14の覆土中に作られ、この土坑が限入している可能性あり。遺物はごくわずかな土師器鉢・高杯・甕・甕等各種がある。時期不明のSK-88-90などに類似。								
SK-88	15.0-16.5	円形	S14+15より新	1.09	0.99	0.22		
古墳中期末の穴状S14+15覆土中にあり、S14+15を切る。遺物はわずかな土師器鉢・高杯・甕・甕等の小片ばかりであり、時期を限定できない。覆土土1点入。時期不明のSK-87-90-91と類似。								
SK-90	15.0-16.5	円形	SK-15より新	1.01	0.89	0.14		
古墳中期末の穴状S15を切る。北端にあるピット部分は覆土か? 遺物はごくわずかな土師器鉢・高杯・甕等の小片だけで、時期を限定できない。時期不明の小さな円形土坑SK-91+88-91とほぼ重なっている。								
SK-91	15.0-16.5	円形	重なりなし	1.00	0.90	0.12	白砂石あり	
遺物は土師器鉢・鉢など小片のみだけで、時期を限定できない。西に時期不明のSK-90。北に古墳中期のSK-92がある。小さな円形土坑で、SK-90に類似するので、SK-90と同様に古墳後期の穴状S15よりも新しいと推定される。時期不明のSK-87-88-90-91と同様の可能性もある。								
SK-94	16.0-16.5	長方形	重なりなし	2.76	0.95	0.10	N-8 W	
遺物はごくわずかな土師器鉢・高杯・甕等の小片ばかりであり、時期を限定できない。長方形で甕が散らかり、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。								
SK-97	14.5-16.5	円形	重なりなし	1.07	0.95	0.18		
遺物は少量の土師器小形器・杯等があるが、周囲にある古墳中期の穴状などから限入した可能性が高い。時期不明のSK-87-88等と同様なものか?								
SK-103	14.0-17.5	楕円形	重なりなし	1.59	1.23	0.27	N5-W	
確認調査トレンチに直線土層が認められる。古墳時代の覆土S22+107と近接する。北端にやや離れて古墳中期のSK-106があるが、土坑が集中する部分とはいえない。遺物は土師器前葉の銅器2片だけしかない。古墳時代の可能性もあるが確定ではない。								
SK-104	14.5-17.5	円形	重なりなし	1.14	1.08	0.18		
谷にはかろう跡面があり、西に時期不明のSK-105がある。遺物は土師器鉢と土師器前葉の小片5点だけで、時期を限定できない。								
SK-105	14.5-17.5	不整形	重なりなし	1.76	1.67	0.40		
遺物は土師器小片6点で、時期を限定できない。古墳時代の可能性もあるが、確定ではない。覆土土深部の小片も限入していた。								
SK-109	13.5-17.0-17.5	円形	SD-108より古	2.00	0.80	0.19		
時期不明の溝SD-108に切られる。SD-108の南端部に土坑周囲の痕跡あり。平面図では覆土状況が不明。遺物はごくわずかな土師器片だけで、横軸・漆土上げ・土師器などはない。高杯・漆土製のミガキなど少く見られる。古墳中期末以降の可能性が高いが、確定ではない。古墳時代の穴状S24+155と近接すると思われる。								
SK-113	13.0-17.0	方形	重なりなし	0.88	0.87	0.20		
古墳時代の楕円柱状遺物S157の北端にある。西にやや離れて古墳中期のSK-110+111+112とは形が異なる。関連するとは見えない。出土遺物はない。SK-119を参照。								
SK-117	12.5-16.5, 13.0-16.5	円形	SK-26より新	2.02	0.95	0.25		
古墳中期のS126を、土坑1個の土師器で片が多く、甕・甕・甕。高杯1点・甕1点があり、S126とほぼ同時期でS126からの限入と思える。覆土に土層があり、新しい時期の土坑か。								
SK-119	13.0-17.0	隅丸方形	重なりなし	0.83	0.80	0.23	N-9 W	
南平の確認調査トレンチに認められる。北に古墳時代のSK-110がある。古墳時代の可能性もあるが、範囲は隣。北東8mにあるSK-113と類似する。出土遺物はない。								
SK-122	9.5-18.0	円形	重なりなし	1.23	1.17	-		
低地への前面にある。確認調査30mで湧水で、掘り下げを中止した面には状況不明。戸の可能性がある。遺物は土師器甕? 底部と側面1片。陶器片から近世以降の可能性あり。								
SK-123	9.5-17.5, 10.0-17.5	楕円形	重なりなし	1.85	1.06	0.46	N79-W	
遺物は土師器3点の他、榎所書のような陶器片・コンクリート片等。ごく新しい時期と推定される。								
SK-124	9.0-17.5-18.0	楕円形	重なりなし	0.85	0.58	0.30	N-28 W	
出土遺物はない。時期は限定できない。								
SK-125	9.0-18.0	長方形	重なりなし	2.39	1.04	0.52	N-80 E	
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。出土遺物はない。								
SK-126	9.0-18.0	長方形	SK-127より新	2.32	0.81	0.44	N-80 E	
時期不明の戸SK-127を切ると思われる。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。出土遺物はない。								
SK-128	8.5-17.5-18.0, 9.0-18.0	長方形	重なりなし	1.69	0.67	0.40	N-78 E	
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。出土遺物はない。								



第372図 権現山遺跡SG5区 時期不明の土坑(2) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

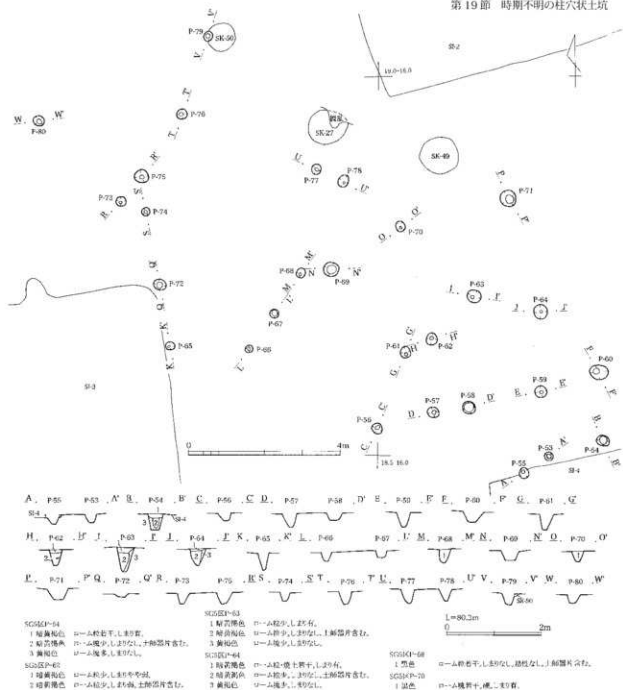
遺構名	グリッド	形状	重なり係	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	半輪盤	覆土
SK-131	15.0-16.5	長方形	SK-14 → SK-132 → SK-131	2.83	0.64	0.32	N-30 土	古墳前期の埴穴 SK-14 と時期不明の SK-132 を切る。遺物は全て遺構からの混入で、SK-14 から混入した可能性大。近代以降の農業関連土坑 (イモ穴) か。
SK-132	15.0-16.5	円形	SK-14 → SK-132 → SK-131	0.95	—	0.18	—	古墳後期の埴穴 SK-14 を切る。時期不明の SK-131 に切られる。北側に SK-14 を切る時期不明の SK-87・88 等があり、これらと同じ時期に作られた可能性がある。出土遺物はない。
SK-139	15.0-16.5	円形	重なりなし	0.92	0.83	0.08	—	山形の土坑 SK-138 の南にあることから、SK-138 に近い時期の可能性あり。出土遺物はない。
SK-141	14.5-16.5	円形	重なりなし	1.01	0.92	0.12	—	古墳後期の SK-141 の東にある。遺物はホルンフェルス破片 (銅片?) 1点と土師器・甕 1片のみで、時期を限定できない。古墳中期の SK-142 と近接し、古墳時代と考えることもできる。
SK-143	15.0-17.0	円形	重なりなし	1.53	1.49	0.37	—	遺物は縄文 (または弥生) 土師片・土師器小破片・ホルンフェルス銅片 1 片だけで、時期を限定できない。古代以前の遺構のように覆土がしまり、現代に近い土坑ではない。
SK-146	15.5-17.0	楕円長方形	SK-148 より前	—	—	—	—	SK-148 より前の。土師器小破片あり。平面図に明示されているが、遺物番号を付けて取り上げられていない。杯 (内面漆仕上げあり・ミガキなし)・高杯・鉢・盃・甕等がある。古墳中期的な土器が多いが、7～8 世紀中葉の白色土師の杯・底部が入っており、7 世紀中葉以降の土坑である。
SK-147	14.0-16.5-17.0	楕円形	重なりなし	1.33	1.19	0.16	N-10 土	古墳後期の埴穴 SK-19 の南にある。出土遺物はない。古墳中期～後葉の SK-51・96 の近くにあるため、古墳時代の可能性もあるが、具体的な相関はない。
SK-150	15.5-16.0	円形	柱穴状 SK-148 より前	0.50	0.45	0.16	—	時期不明の SK-148 を切る。遺物は古墳中期頃と見られる土師器小形赤の体部 2 片のみで、土坑の時期は限定できない。古墳中期の SK-149 と隣ると顔立柱建物になる可能性もある。
SK-152	15.5-17.0	長方形	重なりなし	3.14	0.65	0.32	N-8 土	南北に長・短方形。遺物は土師器 9 点で、杯の面にミガキなし・漆仕上げの白陶色土師土の土師器破片は、7 世紀中葉以降。土師の様子から 2 期の重輪の可能性があり、これは近代以降の農業関連土坑 (イモ穴) のみの方である。覆土が軟しといは記載されていないため、時期は決められない。甕の残片がほつりまみれば副葬の土坑となる。
SK-153	15.5-17.0	長方形	重なりなし	1.78	0.70	0.26	N-4 W	出土遺物はない。時期不明の SK-152 と方が揃うが、確認の様子が不明で覆土にしまりがあるため、近代以降の農業関連土坑 (イモ穴) ではないように見える。どこまで時期がわかるかは分らない。

第 215 表 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ 縦×幅	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG5 区 SK-30				
I 土師器 杯	高 残 2.3 最大 幅 13.0	外面口縁部ヨコナデ、体部クズりで上端無調整部分あり。内面体部ヨコナデ。内外面漆仕上げ。	10YR7/4 に近い黄緑 褐色 砂細粒少、白粉粒微量 や中粒質	体一部
SG5 区 SK-46				
I 土師器 甕	高 残 1.4 底 4.4	外面胴部下端クズリ。底部ナデで、外周は平坦。内側のみくぼむ。内面底部ナデ。	10YR7/3 に近い黄緑 や中粒質 赤粒～細粒少、白 赤粉粒微量 褐色	底上 5cm 底一部欠 1
SG5 区 SK-104				
I 土師器 甕	高 残 2.3 底 残 0.6	外面胴部下平クズりのちナデ。底部クズリ。底部は平底で、浅くくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	5YR6/4 に近い橙 や中粒質 白・赤粒～細粒少 や中粒質	底上 5cm 胴下端～底 1/4 周 6
SG5 区 SK-117				
I 土師器 杯	口 残 11.4 高 残 3.5	表面が滑けるように磨面・削落しており、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ。内面調整不明。	2.5YR6/8 橙 や中粒質 赤粒～細粒少、白粉 粒微量 や中粒質	口～体 1/5 周 SE-117 覆土
SG5 区 SK-122				
I 陶器 甕	口 残 14.0 高 残 3.0	内外面に緑色の文様が描かれる。残存部全体に透明釉施施。	2.5Y7/2 灰青 褐色 黒・赤微粒微量 褐色	口縁部破片

第 19 節 時期不明の柱穴状土坑 (第 373～376 図、写真版第 39)

時期不明の柱穴状土坑 (ピット) は SG5 区で 74 基を調査した。SG5 区北端の柱穴状土坑群 P-53～P-80 から出土した遺物はごくわずかである。P-79 までの柱穴状土坑に少量ずつ入っている遺物は小破片ばかりで詳しい時期が不明だが、模倣杯・長胴甕が入らないことから、P-53～P-80 は古墳中期中葉～後葉の可能性もある。ただし、覆土や柱痕部にしまりが無い土坑があるので、後世の土坑に古墳時代集落の遺物が混入したとも考えられる。P-80 以降については時期の手がかりがきわめて少ない。土坑覆土中の白色粒は、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラの可能性があり、古墳時代遺構を判別する手がかりの一つである。ただし、Ni-S (男体・七本桜石=縄文草創期) の二次流入粒や、As-B (12 世紀初) と考える余地も残る。P-264～267 は、低地部の古墳時代遺物包含層調査区にある古墳時代土坑群の周辺にあり、古墳時代遺構の可能性もあるが、覆土の記録がない。柱穴状土坑の詳細を次表に示す。

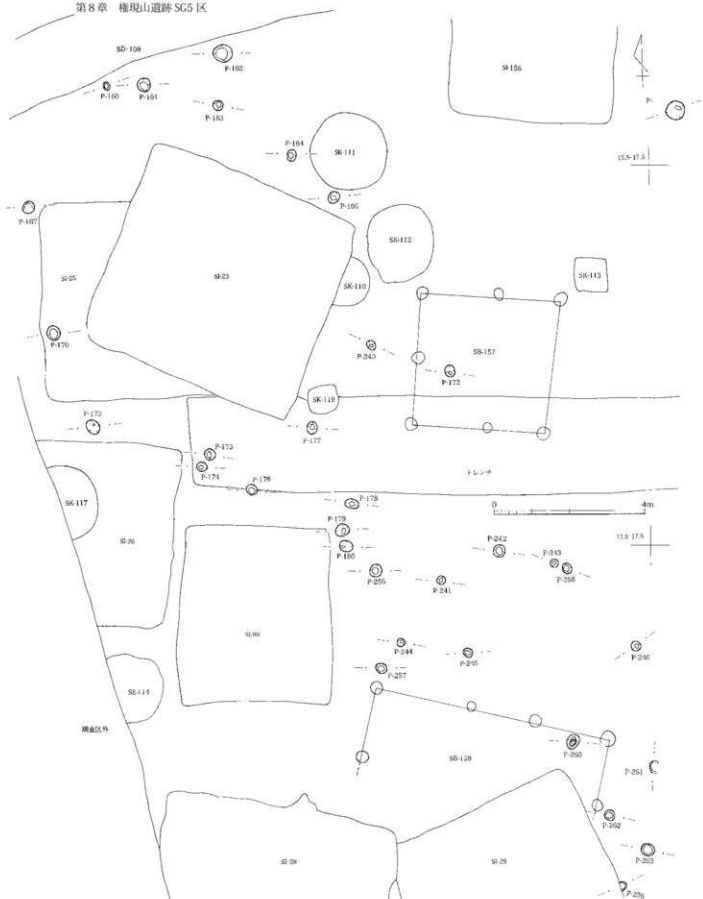


第373図 権現山道跡SG5区 時期不明の柱穴状土坑(1) 遺構

第216表 権現山道跡SG5区 時期不明の柱穴状土坑

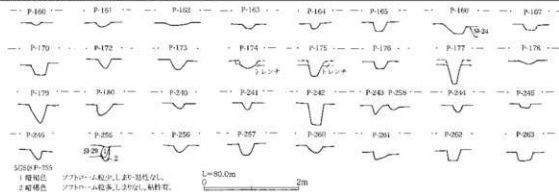
遺構名	グリッド	形状	遺構箇所	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備注
P-53	18.0-16.0, 18.5-16.0	円形	遺構なし	0.24	0.22	0.18	記録なし
出土遺物は無い。							
P-54	18.5-16.0	円形	遺構なし	0.34	0.28	0.35	柱底部のしまりなし
出土遺物は少量で土師器・高杯のみ。							
P-55	18.0-16.0	円形	SI-4より前	0.28	0.25	0.20	記録なし
古墳時代のSI-4を切る。出土遺物は少量で土師器片1点。							
P-56	18.5-15.5-16.0	円形	遺構なし	0.28	0.26	0.15	記録なし
出土遺物は無い。							
P-57	18.5-16.0	円形	遺構なし	0.30	0.29	0.30	記録なし
出土遺物は無い。							
P-58	18.5-16.0	円形	遺構なし	0.34	0.33	0.16	記録なし
出土遺物は少量で土師器・杯のみ。							
P-59	18.5-16.0	円形	遺構なし	0.32	0.30	0.31	記録なし
出土遺物は少量で土師器片1点のみ。							

第8章 権現山遺跡 SG5 区



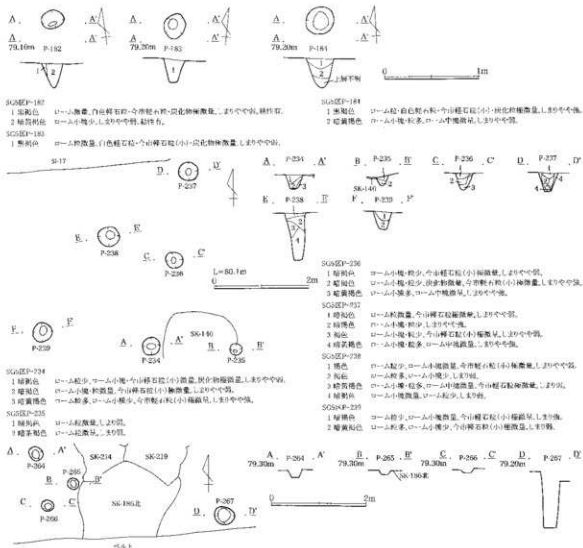
第 374 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱状土坑 (2) 遺構

P-60	18.5-16.0	円形	重複なし	0.50	0.40	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-61	18.5-16.0	円形	重複なし	0.30	0.26	0.33	記録なし
出土遺物は少量で土師器焼片 2点のみ。							
P-62	18.5-16.0	円形	重複なし	0.31	0.28	0.34	上下2層 しまり面
出土遺物は少量で土師器焼片 1点のみ。							
P-63	18.5-16.0	円形	重複なし	0.37	0.33	0.52	柱底部のしまりなし
出土遺物は土師器焼片・高杯片などがあり、柱穴状土坑としては多い。							
P-64	18.5-16.0	円形	重複なし	0.38	0.37	0.35	柱底部のしまりなし
出土遺物は少量で土師器焼片のみ。							
P-65	18.5-15.5	円形	重複なし	0.26	0.22	0.36	記録なし
出土遺物はない。							
P-66	18.5-15.5	円形	重複なし	0.22	0.20	0.19	記録なし
出土遺物は土師器焼片 1点のみ。							
P-67	18.5-15.5	円形	重複なし	0.24	0.23	0.15	記録なし
出土遺物はない。							
P-68	18.5-15.5	円形	重複なし	0.26	0.24	0.29	単層 しまりなし
出土遺物は少量で土師器焼片・杯片のみ。							
P-69	18.5-15.5	円形	重複なし	0.40	0.37	0.20	記録なし
出土遺物はない。							
P-70	18.5-16.0	円形	重複なし	0.29	0.25	0.23	単層 しまり有
出土遺物は少量で土師器焼片 2点のみ。							
P-71	18.5-16.0	円形	重複なし	0.42	0.40	0.25	記録なし
出土遺物は少量で土師器焼片 1点のみ。							
P-72	18.5-15.5	円形	重複なし	0.33	0.28	0.09	記録なし
出土遺物はない。							
P-73	18.5-15.5	円形	重複なし	0.26	0.24	0.23	記録なし
出土遺物はない。							
P-74	18.5-15.5	円形	重複なし	0.22	0.21	0.18	記録なし
出土遺物はない。							
P-75	18.5-15.5	円形	重複なし	0.37	0.33	0.25	記録なし
出土遺物はない。							
P-76	18.5-15.5	円形	重複なし	0.28	0.27	0.27	記録なし
出土遺物は少量で土師器杯片 1点のみ。							
P-77	18.5-15.5	円形	重複なし	0.28	0.24	0.29	記録なし
出土遺物はない。							
P-78	18.5-15.5	円形	重複なし	0.32	0.28	0.26	記録なし
出土遺物はない。							
P-79	19.0-15.5	円形	SK-50と重複	0.27	0.24	0.24	記録なし
時期不明の土坑 SK-50と重複するが断面不明。出土遺物は少量で土師器焼片 2点のみ。							
P-80	18.5-15.5	円形	重複なし	0.28	0.25	0.19	記録なし
出土遺物はない。							
P-100	13.5-16.5	円形	重複なし	0.22	0.19	0.05	記録なし
出土遺物はない。							
P-161	13.5-16.5	円形	重複なし	0.36	0.34	0.10	記録なし
出土遺物はない。							
P-162	13.5-16.5	円形	重複なし	0.52	0.47	0.06	記録なし
出土遺物はない。							
P-163	13.5-16.5	円形	重複なし	0.30	0.26	0.10	記録なし
出土遺物はない。							
P-164	13.5-17.0	円形	重複なし	0.30	0.24	0.13	記録なし
出土遺物はない。							
P-165	13.0-17.0	円形	重複なし	0.34	0.28	0.19	記録なし
出土遺物はない。							
P-166	13.5-17.5	円形	重複なし	0.50	0.46	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-167	13.0-16.5	円形	重複なし	0.34	0.29	0.13	記録なし
出土遺物はない。							
P-170	13.0-16.5	円形	SI-25と重複	0.40	0.35	0.26	記録なし
古墳時代の形穴SI-25と重複するが断面不明。出土遺物はない。							



第375図 権現山遺跡 SGS区 時期不明の柱穴状土坑(3) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 376 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (4) 遺構

P-172	13.0-17.0	円形	重層なし	0.30	0.28	—	記録なし
時期不明の獨立柱建物 SK-157 の範圍内にある。出土遺物はない。							
P-173	13.0-16.5	円形	重層なし	0.38	0.31	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-174	13.0-16.5	円形	重層なし	0.30	0.27	0.09	記録なし
確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-175	13.0-16.5	円形	重層なし	0.29	0.25	0.24	記録なし
確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-176	13.0-16.5	円形	重層なし	0.28	0.24	0.15	記録なし
北半部が確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-177	13.0-17.0	円形	重層なし	0.30	0.28	0.41	記録なし
北半部が確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-178	13.0-17.0	楕円形	重層なし	0.39	0.24	0.09	記録なし
出土遺物はない。							
P-179	13.0-17.0	円形	重層なし	0.36	0.32	0.39	記録なし
出土遺物はない。							
P-180	12.5-17.0、13.0-17.0	円形	重層なし	0.35	0.30	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-182	11.0-17.5	円形	重層なし	0.24	0.20	0.25	白色軽石粉や しまり面
出土遺物はない。低地寄りにある。							
P-183	11.5-17.5	円形	重層なし	0.27	0.24	0.26	白色軽石粉や 単層 しまり面
出土遺物はない。							
P-184	11.5-17.5	円形	重層なし	0.30	0.28	0.31	白色軽石粉や
出土遺物はない。							
P-234	14.5-16.0・16.5	円形	重層なし	0.38	0.36	0.32	自然埋没
出土遺物はない。							
P-235	14.5-16.5	円形	SK-140 と重層	0.25	0.24	0.32	上下2層 しまり面
古墳時代の土坑 SK-140 と重層するが新旧不明。出土遺物はない。							

第19節 時期不明の柱穴状土坑

P-236	14.5-16.5	円形	重複なし	0.38	0.34	0.35	自然埋没
出土遺物はない。							
P-237	14.5-16.5	円形	重複なし	0.41	0.40	0.40	柱底部のしまりややぶ
出土遺物はない。							
P-238	14.5-16.0	円形	重複なし	0.47	0.42	1.00	人為埋戻か
非常に深い。出土遺物はない。							
P-239	14.5-16.0	円形	重複なし	0.42	0.38	0.37	自然埋没
出土遺物はない。							
P-240	13.0-17.0	円形	重複なし	0.28	0.21	0.12	記録なし
出土遺物はない。							
P-241	12.5-17.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.16	記録なし
出土遺物はない。							
P-242	12.5-17.0, 13.0-17.0	円形	重複なし	0.34	0.32	0.46	記録なし
出土遺物はない。							
P-243	12.5-17.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.20	記録なし
出土遺物はない。							
P-244	12.5-17.0	円形	重複なし	0.22	0.20	0.14	記録なし
出土遺物はない。							
P-245	12.5-17.0	円形	重複なし	0.27	0.24	0.09	記録なし
出土遺物はない。							
P-246	12.5-17.0	円形	重複なし	0.26	0.24	0.20	記録なし
出土遺物はない。							
P-255	12.5-17.0	円形	SI-29より古	0.22	—	0.30	柱底部のしまりなし
古墳時代の形穴(29)に切られる。出土遺物はない。							
P-256	12.5-17.0	円形	重複なし	0.35	0.28	0.15	記録なし
出土遺物はない。							
P-257	12.5-17.0	円形	重複なし	0.34	0.28	0.23	記録なし
出土遺物はない。							
P-258	12.5-17.0	円形	重複なし	0.28	0.24	0.12	記録なし
出土遺物はない。							
P-260	12.5-17.0	円形	重複なし	0.40	0.30	0.16	記録なし
埴原平野の龍河SA-156の範囲内にある。出土遺物はない。							
P-261	12.5-17.0	円形	重複なし	0.32	—	0.17	記録なし
出土遺物はない。東半部は固化されていない。							
P-262	12.5-17.0	円形	重複なし	0.30	0.26	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-263	12.5-17.0	円形	重複なし	0.36	0.31	0.18	記録なし
出土遺物はない。							
P-264	12.0-17.5	円形	重複なし	0.30	0.26	0.17	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺にある。出土遺物はない。							
P-265	12.0-17.5	円形	重複なし	0.25	0.23	0.10	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺にある。出土遺物はない。							
P-266	12.0-17.5	円形	重複なし	0.27	0.25	0.10	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺にある。出土遺物はない。							
P-267	12.0-18.0	円形	重複なし	0.40	0.38	1.20	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺で、東へ傾斜する地形に所在する。非常に深い。出土遺物はない。							

第9章 権現山遺跡 SG9 区

権現山遺跡 SG9 区は、上三川町大字磯岡字西谷 406-1・406-3・407-1・407-2・408-1・408-5・409-1・409-2 に所在し、「西谷田」の低地部に立地する。権現山 SG9 区の位置は北緯 36° 28' 50"、東経 139° 54' 23" (世界測地系) である。権現山遺跡 SG9 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.0～79.2m、東側の磯岡遺跡 SG9 区 (標高 79.4m) との比高が約 0.4m である。権現山 SG9 区の範囲は南北長 140m × 東西幅 85m で、調査面積は 4,800m²。権現山遺跡 SG9 区の調査時名称は「杉村遺跡 IX 区」である。遺跡名称・範囲の見直しが行われた結果として、「杉村遺跡 IX 区」のうち東区が磯岡遺跡、中央区から西区が権現山遺跡の範囲に含まれることになった。これに従い、本報告においては東区を「磯岡遺跡 SG9 区」、中央区と西区を「権現山遺跡 SG9 区」と呼称する。

権現山遺跡 SG9 区の北側には SG2 区が続く。1995 年に調査を実施した権現山遺跡 SG2 区の南端部は、権現山遺跡 SG9 区でも重複して調査を行った部分があり、SG2 区で調査済の土坑を再度確認している。この時に、SG2 区中央部南端で南北ベルト下に隠れていた土坑 4 基 (SG9 区 SK-19～22) と溝 SD-34 の調査を実施できた。また、SG2 区で調査済みの土坑を SG9 区で再度調査した部分もある。

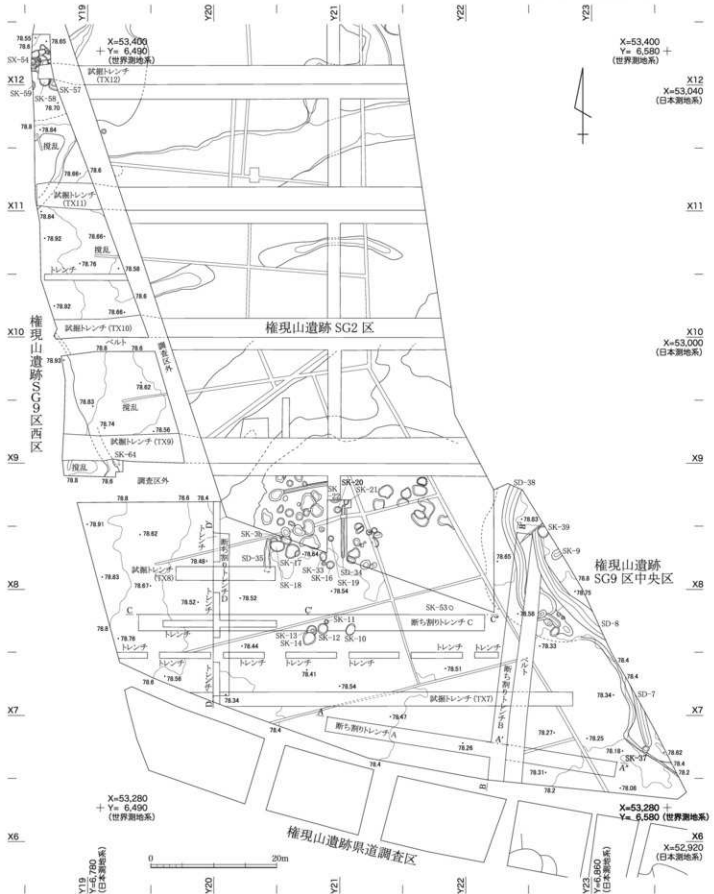
権現山遺跡 SG9 区の南側に隣接する、一般県道雀宮真岡線改良工事に伴う権現山遺跡の 1999 年度調査区 (とちぎ生涯学習文化財団 2000、正式報告未刊) では、SG9 区と関連・連続する遺構はないが、自然堆積層中に自然流木が埋没していた。SG9 区南側の県道調査区「7 区砂層中」で、5.5-23.5 グリッドの標高 77.0～77.6m 付近において、縄文時代晩期ころの埋没樹木層を確認している (位置は第 256 図下端)。この埋没木材の放射性炭素年代は 2710 ± 60 年 BP であり、 $\delta^{13}C$ 測定値 (-27.9‰) から 14C/12C の測定値を補正した上で算出した年代は 2,660 ± 60 年 BP となっている。この年代測定結果が判明する前に書かれた概要報告では旧石器時代の流木と記述されている (とちぎ生涯学習文化財団 2000)。

SG9 区の調査は 1999 年 12 月に開始し、翌年 3 月まで実施した。遺構調査と航空写真撮影 (2 月 24 日) が終了した後に、重機で地山断ち割りトレンチ (A～D) を掘って自然堆積層の土層断面図を作成した。権現山 SG9 区の西側は、権現山遺跡 SG5 区のある台地の東側縁辺部にあたり、東側の低地へなだらかに下る。この付近の遺構は、北端で時期不明の土坑 3 基・道路状遺構 1 箇所、南端で時期不明の土坑 1 基を確認した。遺物は、西側台地上の SG5 区古墳時代集落から流入したとみられる古墳中期土師器破片が Hr-FA テフラ層下や地山礫層直上から出土している。権現山 SG9 区中央区の低地では、中洲状の微高地上で時期不明の土坑群が確認された。中央区の南東隅部では段丘下のよどみ状部分で古墳時代の土師器杯・甕や勾玉などが出土している。この他に遺構外から縄文・弥生土器および石鏃・打製石斧、古墳時代の土器片、古代の須恵器杯などが出土した。縄文・弥生土器および石器は「東谷・中島地区遺跡群 10」(pp.69, 88, 102) で報告した。同書第 45 図 10 に掲載した石鏃は、第 13 表では「4 区」となっているが、注記に示されているとおり SG9 区出土品なので、ここで訂正する。

第 1 節 古墳時代の土坑

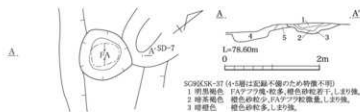
権現山 SG9 区 SK-37 (第 378 図、写真図版 64)

SG9 区中央区の 6.5-23.0 グリッドにある。南西側が低地へ向かって低くなるところに立地する。時期不明の SG9 区 SD-7 に切られる。断面図の西側にはこの土坑よりも先行する窪みが 4 層・5 層として記録されるが、遺構としては認定されていない。SK-37 はほぼ正円形で口径は短径 105 × 長径 115cm。残存する深さは最大 19cm。埋土は自然埋没状で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラが最上層に認められるので古墳中期末ころの土坑と考えられる。東に隣接する磯岡遺跡 SG9 区 SI-49 などの古墳時代集落と関係する遺



第 377 図 権現山遺跡 SG9 区 全体図 (1/600・等高線主曲線 20cm)

構であろう。遺物は出土しなかった。



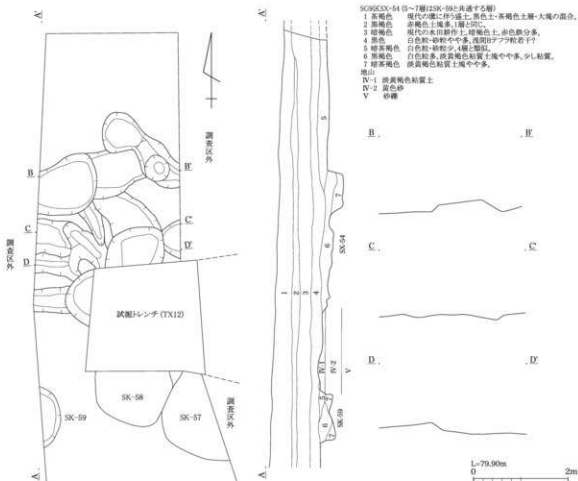
第 378 図 権現山遺跡 SG9 区 SK-37 遺構

第 2 節 時期・性格不明の遺構（通路状遺構？）

権現山 SG9 区 SX-54（第 379 図、写真図版 64）

【位置】SG9 区の西区北端付近で 12.0-18.5 グリッドにあり、西側は調査区外で現代の農業用水路があり、その西側に権現山遺跡 SG5 区がある。東側も調査区外へ少し延びるとみられる。重複する遺構はない。現地調査時には土坑状に深い北西部・中央部・南東部にそれぞれ「SK-54・55・56」の名称を与えた。全体が一連の凹凸面と考えられるので、整理作業時に「SX-54」へ改称した。時期不明の土坑 SK-57・58・59 が南側に近接し、SK-59 は覆土が共通するので SX-54 と時期が近い。

【規模と形状】主軸方位は不明確だが東西方向で、およそ GN-64°-E 前後である。南端が試掘トレンチ(TX12)で消滅して不明確だが、南北幅は 160～170cm 程度と考えられる。通路状遺構（道路遺構）のように波板状の凹部が並列するような規則性は認められない。残存する各凹面の深さは、南部で 9～22cm、北部



第 379 図 権現山遺跡 SG9 区 SX-54 遺構

で2～24cm。底面標高は南部で78.30～78.67m、北部で78.30～78.58m。6層上面の標高は78.66～78.76mである。

【覆土】 調査区西壁と一連の土層図・土層番号で表示した。1層は調査区西外の農業用水路に関する盛土で、2・3層は現代の水田耕作に伴う土層である。4～6層に白色粒を含む。SX-54を覆う4層と5層に含まれる白色テフラ粒は、12世紀初めに降下した浅間B軽石(As-B)と肉眼観察で判断されている。この観察が正しければ12世紀以前の遺構と考えられる。ただし、テフラ検出・同定分析は実施していない。4～5層は砂粒も含む。

6～7層は粘質土で、SX-54が通路状遺構であれば、路面を形成するために埋め戻した整地土層ということになるが、人為的に埋め戻した土層かどうかは明確ではない。6・7層中の淡黄褐色粘質土塊はSX-54が掘り込まれている地山土の塊で、それほど大きな塊ではない。通路状遺構にしばしば伴う、強く締まる砂層はない。6層と7層は類似しているので、ごく短い間に埋まったのであろう。南側1.6mにある時期不明の土坑SK-59に同じ土質の5・6・7層が自然埋没状に堆積しているので、人為的に埋め戻した層ではない可能性もある。

【遺物と性格】 遺物は出土しなかった。凹凸面が連続するので、通路状遺構の可能性もある。ただし、人為的に埋め戻したかどうか不明なので断定はできない。周辺遺跡の通路・道路遺構は、凹凸面を中心として人為的に埋め戻されていた。砂田3区の道路遺構SF-188の埋土は砂粒主体で非常に硬くしまった土で(藤田・田代2002)、立野2区SX-23の埋土はローム塊が主体である(内山2005)。

SX-54を通路状遺構と考えた場合は、SG5区付近の台地から東側低地(SG2区の流路3)に向かう「昇降施設」あるいは「降り口施設」の可能性もある。この位置から東側に続く自然流路(SG2区のB区にある流路3)の底面標高は、SG2区TX12におけるVII層下面や基盤層上面のレベルからみて78.2m前後なので、SG9区SX-54の6層上面からSG2区流路3の底面まで0.5～0.6mほど降りてゆくことになる。

低地や溝へ昇降する通路状遺構は、近隣の砂田遺跡24区(津野他2007)・同遺跡22・36・37区(整理作業中、『東谷・中島地区遺跡群』15掲載予定)・同遺跡宇都宮市調査A区(中山・青木他2005)、砂田姥沼遺跡2区・3区(藤田2011)、中島笹塚遺跡8区(内山2008)、立野遺跡2区(内山2005)で古墳後期から9世紀までの例がある。また、百目鬼遺跡SD-124・125に附属する事例は古墳中期の可能性もある(谷中他2001・上野2005,p.561)。昇降施設でない古代の道路状遺構は、砂田遺跡3・12・25区(『東谷・中島地区遺跡群』2・13・15)、磯岡遺跡(第411図)、推定東山遺跡(藤田2003)がある。

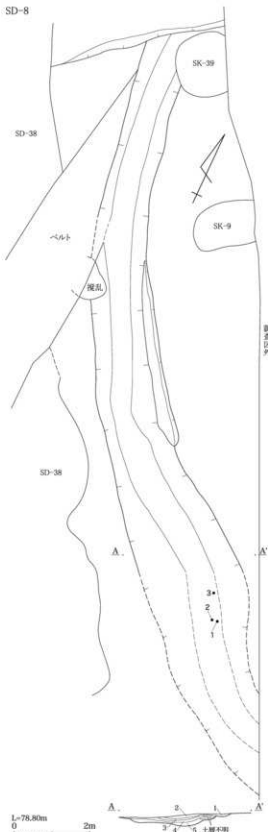
第3節 時期不明の溝

権現山SG9区SD-7(第380図右、写真図版65・188)

SG9区中央区東端の6.5-23.0および7.0-23.0グリッドにある。東側の磯岡遺跡から延びる低台地の西縁に作られた溝である。北側は調査区外へ続き、さらに北側のSD-8と連続する可能性がある。地山のローム層が東から西へ傾斜する面がSD-7のすぐ西にあるので、平面図にその傾斜面も表示した。古墳時代のSG9区SK-37を切る。それよりも南側ではSD-7の状況が分からなくなる。SK-37の東側にある地山ローム層の落ち込みが、SD-7の東半部かもしれない。

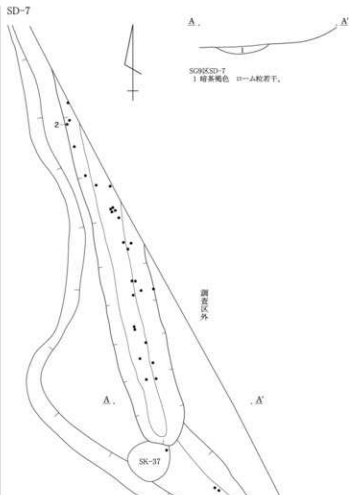
幅128～143cm、残存する深さは12～15cmで、底面が南へ傾斜し、底面標高は北端で78.46m、南端で78.38m。埋土は単層で、テフラの層や粒は見られない。遺物はいずれも混入品と見られ、古墳時代中期後半頃の土師器を主体として、縄文土器、古墳前期(?)のハケ調整甕破片、奈良～平安時代の須恵器瓶(1)、8世紀中葉の瓦(2)、平安時代の常総型土師器甕が少量見られる。SD-8と連続する溝であれば、近世以降の溝と考えられる。

SD-8



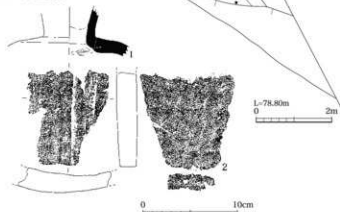
- SG9区SD-8
 1 暗褐色 土—A粒微量。
 2 暗茶褐色 土—A粒少,土—A粒若干。
 3 暗灰褐色 砂粒多,土—A粒少。
 4 黄褐色 小礫多,砂粒若干。
 5 暗茶褐色 土—A粒微量,砂粒若干。

SD-7



- A. A.
 SG9区SD-7
 1 暗茶褐色 土—A粒若干。

SD-7 出土遺物



SD-8 出土遺物



第380図 権現山遺跡 SG9 区 SD-7・8 遺構・遺物

第217表 権現山遺跡 SG9区 SD-7 出土遺物

番号 種類 図番	大きさ 図・厚	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 遺物 断面	箱 5.4 高 残 5.2	胴部上面を粘土で閉塞した後に、孔を開けて胴の基部を押し込んだように見える。内面胴部はやや細なナデとユビオサエで、それ以外の内外面は右回転(時計回り)のロクロで回転コナデ。暗緑色の自然釉が外面に多量に付着し、内面でも中位まで見ゆ。磁子産物?	SY5/1 灰 白 やや粗い 白釉・細粒多、白粒少	胴 1/3 周
2 平瓦	長 残 11.1 幅 残 10.2 厚 残 25.3	凸面の残存部に叩きはない。凸面は磨付面があり布目も残るが、広い範囲を縦方向にヘラケズリ。残存する磁線部もヘラケズリ。宇都宮産物。	N4/0 灰 やや粗い 白釉・細粒多、透明細粒少 或質	北部底上 3cm 1

権現山 SG9区 SD-8 (第380図左と右下、写真図版65・188)

SG9区中央区東端の7.5-22.5および8.0-22.5グリッドにまたがり、東側の磯岡遺跡から延びる低台地の西縁に作られた溝である。南東側は調査区外まで伸びて、SD-7と連続する可能性がある。北端は遺構確認面が一段低くなる場所でSD-8とも認められなくなるが、調査区外まで伸びていたと考えられる。南端は遺構を掘りすぎてしまったために破線部は推定形状で、調査区東壁に見える土層の高まりから判断した。時期不明のSK-39と重複するが新旧関係は不明。溝幅は北部で116～120cm、南部で170～264cm。残存する深さは北部で11～14cm、南部では(高い東側確認面から計測して)深さ21cm。底面が南へ傾斜し、底面標高は北端で78.65m、南端で78.46m。埋土は自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。陶器碗(1)から見て、近世以降の溝と考えられる。この碗は灯明具に使った可能性もある。また研磨痕のある近世以降の瓦(3)、古墳時代の須恵器片(2)、縄文土器・土師器破片もある。2は東に隣接する磯岡遺跡SG9区のSD-40に同一個体の破片があり、同じ遺物の破片が両遺構に流入したのであろう。

第218表 権現山遺跡 SG9区 SD-8 出土遺物

番号 種類 図番	大きさ 図・厚	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 碗	高 残 2.5 底 残 6.4	外底面は倒立してロクロ右回転による回転ヘラケズリ。高台も削り出し、内外全面に厚く黒石釉を塗し、高台底面は釉を拭き取る。また、高台内の縁部も少ない。裏面の狭い範囲に黒褐色のタール状付着物があるの、破損した状態での灯明具に用いていたのかもしれない。	SY7/1 灰白 やや細密 白・半透明釉・細粒 或質	高部底上 7cm 底 5/12周 1 A-A2 層下部
2 遺物 断面		内面は斜位の平行帯。内面はうっすらとした不明瞭な同心円文当目直で、当目の帯が首を出たものと見られる。外面に暗緑色の自然釉が少量だけ着し、やや汚く発色している。内面は暗灰色(N3/0)陶。磯岡遺跡 SG9区 SD-40に同一個体の破片あり。	N6/0 灰 やや粗い 白細粒やや多、白粒少 或質	高部底上 6cm 断面片 3 A-A3 層上面
3 平瓦	長 残 7.0 幅 残 6.6 厚 1.7	凹面は多方向のナデ。凸面は非常に平滑。凸面に焼成後の擦痕が深く格子状に施されているので、研磨具に転用しているのかもしれない。	SY4/1 灰 やや細密 白釉・細粒と透明細粒少 或質	高部底上 6cm 断面片 2 A-A2 層下部

権現山 SG9区 SD-34 (第381図)

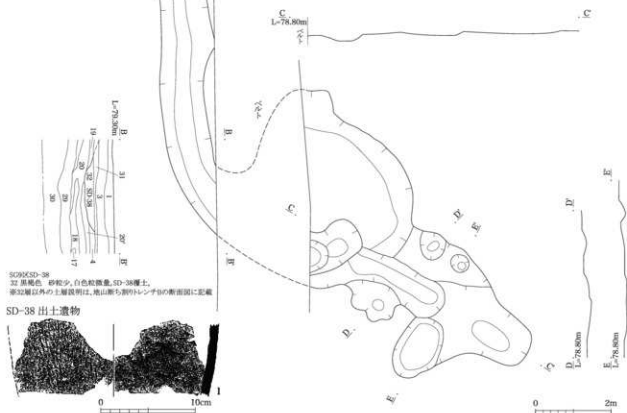
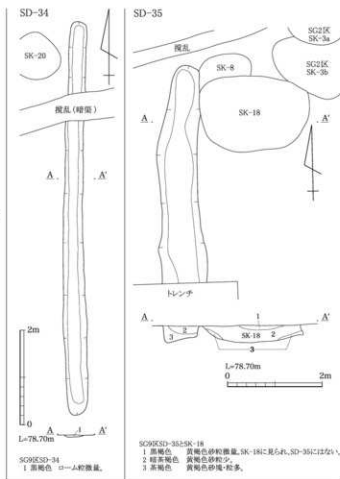
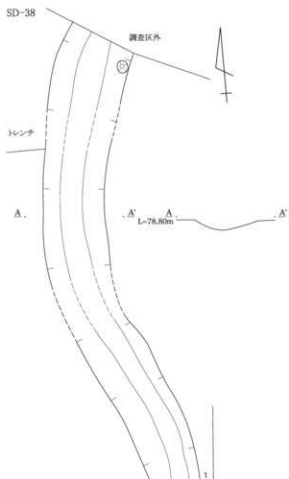
SG9区中央区の8.0-21.0および8.5-21.0グリッドにまたがる。東西方向の暗渠(近代以降の農業用水用連続遺構)に北部で重複するが前後関係は不明で、暗渠よりも浅い。時期不明のSK-20と近接する。幅36～51cm、残存する深さは1～5cmで、底面の高さには大きな高低差がなく、底面標高は北端で78.63m、中央で79.64m、南端で78.60m。埋土は単層で、テフラの層や粒は見られない。遺物は出土しなかった。

権現山 SG9区 SD-35 (第381図)

SG9区中央区の8.0-20.0グリッドにある南北方向の短い溝で、南端部は試掘トレンチで消滅している。東側に接する時期不明のSK-18と同じ土層で埋没しているの、SD-35とSK-18が同時に存在していたことがわかる。幅59～102cm、残存する深さは14～43cmで、底面は中央が低くて南北両端が高く、底面標高は北端で48.34m、中央で48.16m、南端で48.25m。埋土は自然埋没状で、テフラの層や粒はみられない。遺物は出土しなかった。

権現山 SG9区 SD-38 (第381図、写真図版65・188)

SG9区中央区東端の7-22・8-22グリッドにまたがり、北側は調査区外へ伸びる。東側の磯岡遺跡から延



第381図 権現山遺跡 SG9区 SD-34-35-38 遺構 SD-38 遺物

第219表 権現山遺跡 SG9区 SD-38 出土遺物

番号 + 調査 箇所	大きさ 約×約	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 遺物類 書	高 径 7.5	外面は縦位の浅い平円形。内面は無文で其頂の凹凸が明瞭。やや破損状態で、白粉を剥離できないが、新石器の可能性もある。	10Y4/1 灰 黄緑 白練～細粒や少。透明 細粒少 破損	中央の東側部付近 掘下1.0m 埋 了

びる低台地の西縁に作られた溝である。重複する遺構はない。南端部は底面に凹凸があり、北西へ向かって下る。図示した南端部の底面の凹凸は、やや強調して表示してある。北部は幅126～194cm、遺構確認面からの深さは8～17cm、土層断面図B-B'での深さは22cm。底面標高は北部で78.39～78.48m、南端では78.35～78.38mで、底面は特定方向に傾斜しない。埋土は単層である。底面から少し浮いたレベルで10～18cm大の円礫が8点出土している。遺物は奈良～平安時代の須恵器(1)の他に、古墳後期以降の土師器が数片あり、大形壺の大破片を含むが、接合・図化できなかった。古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラを含む層を切るので、古墳後期以降の溝である。SD-7・8と同様に近世以後の溝かもしれない。

第4節 時期不明の土坑 (第382図、写真図版64・65)

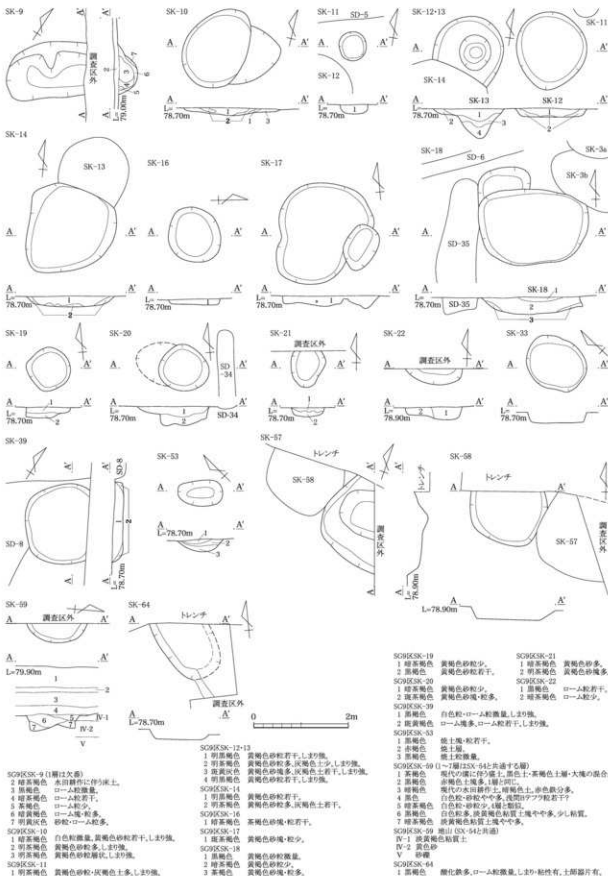
権現山遺跡 SG9区では時期不明の土坑を20基礎確認した。詳細は下記の表に掲載する。この他に、SG9区とSG2区の境界線上にあるSK-3bは、便宜的にSG2区の遺構として扱い、「SG2区SK-3b」として報告した。SG2区南部の土坑集中部(第6章の第251図)に連続する土坑群が中心である。SG2区で調査した土坑群の跡地を再調査した部分は、遺構の形状が不鮮明になっていたため、航空写真に記入した白線の形状がおかしくなっているものがある(図版62・63)。

第220表 権現山遺跡 SG9区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	東西両面	長さ(m)	幅径(m)	深さ(m)	中軸線	埋土
SK-9	8.0-22.5	楕円形	重複なし	1.66	1.17	0.54	N-57-E	記録なし
東端は調査区外。土坑跡は西部が東部より約10m深くなり、北側の中位がやや南側へ湾り出している。遺物なし。								
SK-10	7.5-21.0	不整形円形	重複なし	2.04	1.62	0.17	N-77-E	自然埋没状 白粉色あり
遺物なし。								
SK-11	7.5-20.5	円形	重複なし	0.62	0.58	0.20		単層
遺物は土師器小破片1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-12	7.5-20.5	円形	重複なし	1.65	1.49	0.20		自然埋没状
遺物なし。								
SK-13	7.5-20.5	円形	SK-14と重複	1.20	1.20	0.64		自然埋没状
SK-14と重複するが断面不明。遺物は土師器壺型の小破片3点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-14	7.5-20.5	不整形円形	SK-13と重複	2.02	1.90	0.23	N-35-E	自然埋没状
SK-13と重複するが断面不明。遺物は土師器壺型の小破片4点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-16	8.0-20.5	円形	重複なし	1.16	1.10	0.14		単層
土師器壺型の小破片が9点出土したが、時期を特定できるものではない。								
SK-17	8.0-20.5	楕円形	重複なし	2.06	2.12	0.28	N-5-E	単層
土師器片が少量出土したが、本遺構に伴うとは断定できない。								
SK-18	8.0-20.5	楕円形	SK-3bと重複・SD-35と同時	2.28	1.48	0.40	N-88-W	自然埋没状
SG2区SK-3bと重複するが断面不明。西側に傾いているSD-35と同じ土層で埋没しているため、同時に存在していたことがわかる。東端はオーバーハング状になる。遺物なし。								
SK-19	8.0-20.5	円形	重複なし	0.93	0.93	0.24		
遺物なし。西半分の縦線は、断面図との対比から整理作業時に記入した。								
SK-20	8.5-21.0	円形	重複なし	1.06	1.00	0.42		
時期不明のSD-34と近接するが重複はない。遺物なし。								
SK-21	8.5-21.0	楕円形	重複なし	0.76	0.74	0.10	N-0	
北側は調査区外。遺物なし。								
SK-22	8.5-21.0	円形か楕円形	重複なし	1.22	0.34	0.32	N-89-E	
北側の大半が調査区外のため、正確な形状は不明。遺物なし。								
SK-33	8.0-20.5	楕円形	重複なし	1.25	1.22	0.23	N-44-W	記録なし
遺物なし。								
SK-39	8.5-22.5	楕円形	SD-8と重複	1.68	1.32	0.25	N-30-W	自然埋没状
SD-8と重複するが断面不明。遺物なし。								
SK-53	8.0-21.5	楕円形	重複なし	0.94	0.56	0.29	N-40-W	自然埋没状
遺物なし。								
SK-57	12.0-18.5	円形?	SK-58と重複	1.90	1.14	0.48		記録なし
SK-58と重複するが断面不明。東側は調査区外。北側は確認調査時のトレンチに切られる。遺物なし。								
SK-58	12.0-18.5	円形?	SK-57と重複	1.55	1.15	0.42		記録なし
SK-57と重複するが断面不明。北側は確認調査時のトレンチに切られる。遺物なし。								
SK-59	12.0-18.5	円形?	重複なし	1.27	0.40	0.37		白粉色あり
西部の大半が調査区外のため、正確な形状は不明。遺物なし。時期不明のSK-54と埋土が共通する。								
SK-64	9.0-19.0	楕円形?	重複なし	1.34	1.10	0.22	N-34-W	記録なし
北側は確認調査時のトレンチに切られる。現地調査時の断面には土師器片を含むことが記録してあるが、現状で確認できない。								

※ SK-3bはSG2区とSG9区にまたがって調査しており、SG2区の遺構として扱った。

第9章 権現山遺跡SG9区



第 382 図 権現山遺跡 SG9 区 時期不明の土坑 遺構

第5節 低地堆積層の調査 (第383～386図、写真図版66・188)

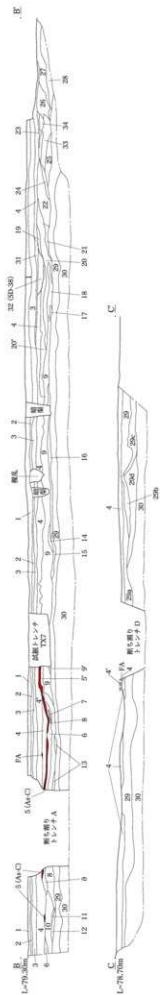
[中央区微高地] (第383・384図) 権現山遺跡SG9区は、中洲状微高地から南東側の低地にかけて存在するので、下層における遺構や遺物包含層の有無を確認するために、4本の断ち割りトレンチを設定した(第377図のトレンチA・B・C・D)。トレンチAとBは地形が最も低くなる南東部に、トレンチCとDは西側台地(SG5区)の東部から緩く傾斜する中洲状微高地に、それぞれ直交する方向で設定した。

4'層の直下に古墳後期初頭のHr-FAが、北側に連続する権現山遺跡SG2区と同様に、広く堆積している。断ち割りトレンチDの断面図D-D'には、Hr-FAテフラ堆積状況を図上部に合成して示した。断ち割りトレンチCの断面図C-C'を図化した時点では、Hr-FA層が除去されている。また、4・5層には古墳前期のAs-C軽石粒を含む。テフラ検出分析や火山ガラス屈折率測定は実施していないので、層相の観察と、Hr-FAよりも下層のテフラ粒は古墳前期に相当するという判断によってAs-Cを認定した。北側に隣接する低地堆積層ではテフラ検出分析でAs-Cが確認されている(第256・257図)。下部には砂礫層が多いので、洪水を受けた状況が考えられる(29・30・35b層)。後期初めのFA火山灰層が流出していないので、古墳時代の中～後期には水の影響が少なくなったことが4層より上のD-D'断面でわかる。

古墳中期中葉の土師器小形壺がある(3・4・5)。1・2・6は古墳中期末頃で、微高地に堆積しているFA層のレベル付近で出土したものであろう。10はSG2区SK-28a・SK-31にあるカキメ調整の上半部破片(第255図)と同個体かとみられる。下位を真格子叩きで調整する古墳終末期～奈良時代初めの甃で、三鑫窯製品かもしれない。9も10に類似している。奈良時代初めの須置器杯の完形品もある(7)。

第221表 権現山遺跡SG9区 中央区微高地の遺構外出土遺物

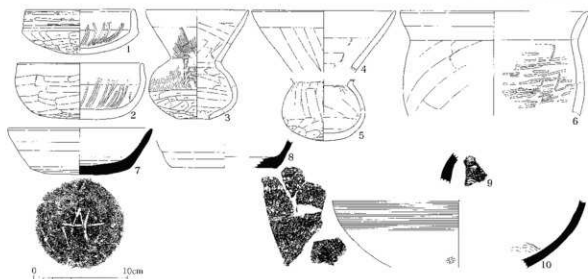
番号 種類 器種	大きさ [cm・g]	特 徴	色調 胎土・釉薬 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.3 高 4.7 最大 12.3 重 219.5	外面は口～体部端に凹線2本と段を持ち、底部に多方向と体部に横位のヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は体部に多方向ヘラズリ後、放射状ヘラミガキ。	10YR7/3 深い黄褐色 やや暗い 白・透明釉→細粒多 赤・赤・灰色粗→細粒少 やや破損	試掘トレンチTX8 口11/12周、体全周 TX8
2 土師器 杯	口 13.2 高 5.9 最大 13.9 重 348.8	厚く重い。外面の口～体部端に密い横筋。外面は底部に多方向ヘラズリ、体部はヨコナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は体部に放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/4 深い橙 やや暗い 白・灰色・透明釉→ 細粒多、赤粗→細粒少 やや破損	7-20グリッド試掘トレンチC-C'29層と対応 完形 TX7-20SD中央FA直下
3 土師器 小形壺	口 径 10.9 底 3.5	外面は浅いタテハケ風に体部下位と底部をヨコナデズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に善なユビナデ、体部ナデ、胴部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。 [目記]7.5-20.2, 7.5-20.3, 7.5-20.4	10YR7/3 深い黄褐色 やや破損 白・透明釉→細粒多 赤・灰色粗→細粒と黒細粒少 やや破損	SK-13の西7m地山断ち割りトレンチCの4層 口11/3周、頸2/3周、 底2/3周 注記は左欄
4 土師器 小形壺	口 径 15.4 高 6.5	外面頸部タテヘラナデと内面胴部ヨコナデの後に内外面の口縁部ヨコナデ。	10YR5/3 深い黄褐色 やや破損 白・透明釉→細粒少 赤・赤・灰色粗→細粒と黒細粒少 やや破損	SK-18の南6m 口1/6周、頸1/4周 7.5-20.10
5 土師器 小形壺	高 径 6.5 最大 8.8	外面は体部に縦位の斜位のヘラナデ後、下下～底部をヘラズリして丸底に仕上げた。内面は底部に1方向、体部に横→斜色のヘラナデ。	5YR6-6 橙 やや暗い 白・灰色・透明釉→ 細粒多、白濁と黄粗→細粒と赤 細粒少 やや破損	地山断ち割りトレンチD の29層 頸1/2周、底全周 7.5-20.11
6 土師器 壺	口 径 19.8 高 径 11.0	外面は胴部ナメヘラナデと口～胴部ヨコナデ、口縁部外面のト下平がやや凹む。内面は胴部ヨコナデ後にヨコナデミガキ、口縁部ヨコナデ。	5YR6-6 橙 細粒多 赤粗→細粒多、黒粗→細粒と白・透明釉→細粒少 やや破損	口17/12周 8.5-19, 8.5-19.2, 9.4-19.1 やや破損
7 須置器 杯	口 15.3 高 4.9 重 344.9	厚く重い。外底面はおおくろ凹へ切り後に中央部を斜りナデ、外側部を斜りナデ。胴部内外面の凹ナデと底面へ切り前は、ともにロクロ右回転(時計回り)。外底面中央のへら記号は「W」に「一」を重ねたように見えるが、縦線のうち2本は底面調整時に生じた段と考えられるので、「川」の記号と判断する。必ず調整？	5Y6/1 灰 やや暗い、白粗→細粒多、白・灰色粗と透明釉→細粒少 破損	自然発掘層の遺物部 SK-53の北4m ほぼ正立 8-21.5 f
8 須置器 壺?	高 径 3.1 底 径 11.0	外底面は凹ナベツケ式で、倒立した状態でロクロ右回転(時計回り)。外面体部と内面は凹ナベツケ式。底面は暗赤色。	5B5/1 青灰 細粒多 灰色粗と白粗→細粒少 破損	調査区南端地山断ち割りトレンチAの4層 底1/6周 6.5-21
9 須置器 壺		頸の頸部で、厚さが上で少しく薄くなるのでそれほど大形の甃ではない。4面の工具で楕圓状文を施す。ロクロ回転方向は不明。三鑫窯産の可能性もある。「SX-30」の注記があるが、遺構出土遺物ではない。	2.5Y8/1 灰白 細粒多、透明細粒少 破損	SG2区とSG9区の間埋 付区(5D-34)の東側 SX-30
10 須置器 壺	高 径 7.3 最大 径 26.8	厚い破片が小さいので復原性は参考値。外面はカキメおよび真格子叩き。内面はナデおよび浅い凹心円文が具現。三鑫窯産の可能性あり。SG2区SK-28a・SK-31の須置器と同じ個体。	2.5Y8/1 灰白 細粒多、白・透明・灰色粗→細粒少 破損	頸1/8周 8-21



- SG9区中央部微高地断ち割りトレンチ
- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黒褐色土
 - 4 黒褐色土
 - 5 黒褐色土
 - 6 黒褐色土
 - 7 黒褐色土
 - 8 黒褐色土
 - 9 黒褐色土
 - 10 黒褐色土
 - 11 黒褐色土
 - 12 黒褐色土
- 13 明褐色土
14 明褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 明褐色土
18 明褐色土
19 明褐色土
20 明褐色土
21 明褐色土
22 明褐色土
23 明褐色土
24 明褐色土
25 灰褐色土
26 灰褐色土
- 13 明褐色土
14 明褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 明褐色土
18 明褐色土
19 明褐色土
20 明褐色土
21 明褐色土
22 明褐色土
23 明褐色土
24 明褐色土
25 灰褐色土
26 灰褐色土
- 13 明褐色土
14 明褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 明褐色土
18 明褐色土
19 明褐色土
20 明褐色土
21 明褐色土
22 明褐色土
23 明褐色土
24 明褐色土
25 灰褐色土
26 灰褐色土

- 13 明褐色土
14 明褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 明褐色土
18 明褐色土
19 明褐色土
20 明褐色土
21 明褐色土
22 明褐色土
23 明褐色土
24 明褐色土
25 灰褐色土
26 灰褐色土
- 13 明褐色土
14 明褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 明褐色土
18 明褐色土
19 明褐色土
20 明褐色土
21 明褐色土
22 明褐色土
23 明褐色土
24 明褐色土
25 灰褐色土
26 灰褐色土
- 13 明褐色土
14 明褐色土
15 灰褐色土
16 灰褐色土
17 明褐色土
18 明褐色土
19 明褐色土
20 明褐色土
21 明褐色土
22 明褐色土
23 明褐色土
24 明褐色土
25 灰褐色土
26 灰褐色土

第 383 図 梅現山遺跡 SG9 区 中央部微高地断ち割りトレンチ 断面図 (1/160)



第384図 権現山遺跡SG9区 中央区微高地遺構外出土遺物

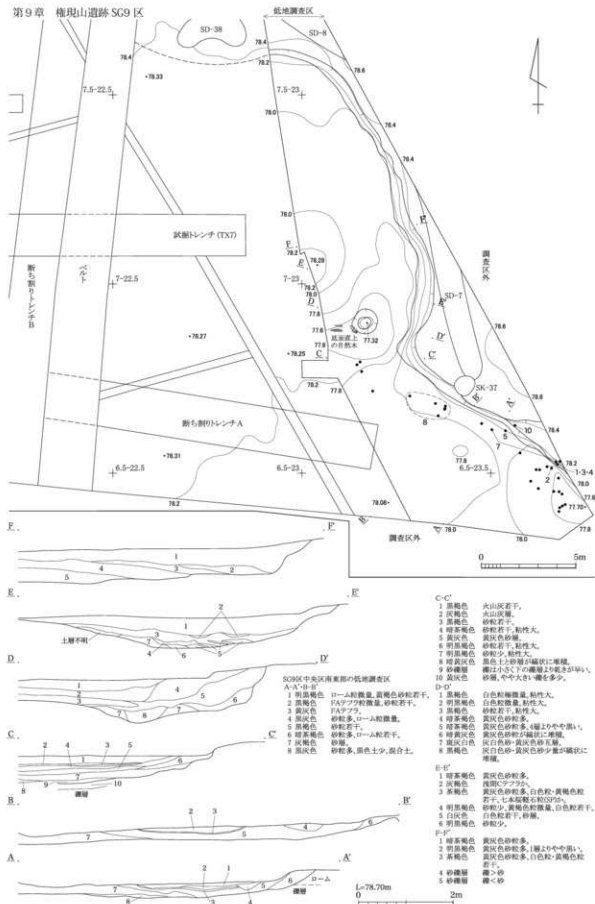
〔中央区南東部の低地〕(第385・386図)権現山遺跡SG9区の南東部である7-23グリッド周辺は、東側に隣接する磯岡遺跡SG9区の微高地西端から低地へ下る位置に相当する。この部分について、低地調査区を設けて基盤層(礫層)の上面まで掘り下げた。等高線と土層断面を第385図に示す。低地調査区の南部にある土層断面A-A'とB-B'では古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラと考えられる層または白色粒が認められた。断面C-C'の2層は、FAであるのかどうかを現地で判断できなかった。北部にある断面E-E'の2層で観察された別のテフラは、古墳前期に降下した浅間C軽石(As-C)と判断した。

遺物は、A-A'およびB-B'の5層中に多い。東側の台地上にある磯岡遺跡SG9区周辺の集落から低地へ降りてきて使用・廃棄した遺物と考えられる。同様に磯岡遺跡の西側低地で土器を使用・廃棄した状況を、磯岡遺跡3区でも確認できる(『東谷・中島地区遺跡群』6)。遺物の表面や破面が磨滅していないので、上流から水で流されてきた遺物群ではない。台地西端から低地へ落ちる際の部分では、完形に近い土器器杯3個(1・3・4)が上向きで重なった状態で出土した(写真図版66)。また、7-23杭の南東側では、D-D'断面図の底面直上で自然木片が3点出土した。低地調査区は、南東隅の6.0-23.5グリッド(土師器64片・1154g)と6.5-23.5グリッド(土師器64片・491g)で遺物が多く、6.5-23.0グリッド(土師器135片・868g)にもやや多い。6.5-23.0グリッドは低地を掘り下げた面積も広いので、南東隅の狭いグリッド(6.0-23.5と6.5-23.5)で遺物密度が最も高く、東側台地上の磯岡遺跡から持ち込まれた遺物であることがわかる。滑石製勾玉(10)はSG5区SI-100などに例がある。

古墳前期の土師器は、東谷中島地区周辺では事例が少ない(8・9)。権現山遺跡では北に連続するSG2区流路2に二重口緑帯、SG2区D区遺構外に高杯と台付甕の破片がある(第244・250図)。S字状口縁台付甕(9)は西方の東谷北浦遺跡SI-139、北方の砂田姥沼遺跡2区SI-1、北東の西荆部古屋原遺跡SI-02に見られる(篠原他2009・藤田2011・清水2002)。

権現山遺跡SG9区の南側に隣接する県道工事調査区では、SG9区中央区南東部低地の南側に続く自然堆積層中で縄文晩期の自然流木が確認されている(位置は第256図下端)。5.5-23.5グリッドの標高77.0~77.6m付近で埋没樹木層を確認し、木材の放射性炭素年代は2710±60年BP、 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値(-27.9‰)から $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値を補正した年代は2660±60年BPである。この年代測定は磯岡遺跡3区の資料を分析する機会に合わせて実施したもので、測定前に書かれた県道調査区概要では旧石器時代の流木と記述されている(とちぎ生涯学習文化財団2000)。

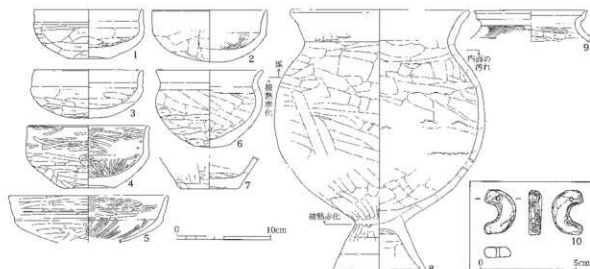
第9章 権現山遺跡 SG9 区



SG9区中央区南東部の低地調査区

- A-A' 剖面
- 1 明黒褐色 U→A粒微量, 黄褐色砂粒若干
 - 2 黒褐色 FAコア粒微量, 砂粒若干
 - 3 黒褐色 砂粒多, U→A粒微量
 - 4 黒褐色 砂粒若干
 - 5 明黒褐色 砂粒多, U→A粒若干
 - 6 暗赤褐色 砂粒多, U→A粒若干
 - 7 灰褐色 砂粒多, 褐色土少, 混合土
 - 8 黒灰色
- B-B' 断面
- 1 明黒褐色 黄灰色砂粒多
 - 2 明黒褐色 黄灰色砂粒多, 白色粒・黄褐色粒若干, 七水硫酸石粒SPD
 - 3 赤褐色 黄灰色砂粒多, 白色粒・黄褐色粒若干
 - 4 明黒褐色 砂粒少, 黄褐色粒微量, 白色粒若干
 - 5 白灰色 白色粒若干, 砂粒
 - 6 明黒褐色 砂粒少
- C-C' 断面
- 1 黒褐色 火山灰若干
 - 2 灰褐色
 - 3 黒褐色 砂粒若干
 - 4 暗赤褐色 砂粒若干, 粘性大
 - 5 黄灰色 黄灰色砂粒
 - 6 明黒褐色 砂粒若干, 粘性大
 - 7 明黒褐色 砂粒少, 粘性大
 - 8 暗赤褐色 褐色土・砂層が連続し連続層は小さく下の層層より5cmほど厚い
 - 9 砂礫層 礫は小さく下の層層より5cmほど厚い
 - 10 黄灰色 砂層, 中々大きい礫を多少
- D-D' 断面
- 1 黒褐色 白色粒微量, 粘性大
 - 2 明黒褐色 白色粒微量, 粘性大
 - 3 黒褐色 砂粒若干, 粘性大
 - 4 暗赤褐色 黄灰色砂粒多
 - 5 暗赤褐色 黄灰色砂粒多, 礫土・中々厚い
 - 6 暗赤褐色 黄灰色砂粒が連続し連続層は小さく下の層層より5cmほど厚い
 - 7 灰褐色 灰白色砂・黄灰色砂互層
 - 8 黒褐色 灰白色砂・黄灰色砂少量が連続し連続層
- E-E' 断面
- 1 暗赤褐色 黄灰色砂粒多
 - 2 明黒褐色 黄灰色砂粒多, 白色粒・黄褐色粒若干, 七水硫酸石粒SPD
 - 3 赤褐色 黄灰色砂粒多, 白色粒・黄褐色粒若干
 - 4 明黒褐色 砂粒少, 黄褐色粒微量, 白色粒若干
 - 5 白灰色 白色粒若干, 砂粒
 - 6 明黒褐色 砂粒少
- スケール: L=78.70m

第 385 図 権現山遺跡 SG9 区 中央区南東部低地調査区 (1) 遺構 (等高線主曲線 20cm)



第386図 権現山遺跡 SG9区 中央区南東部低地調査区(2) 遺物

第222表 権現山遺跡 SG9区 中央区南東部低地調査区 出土遺物

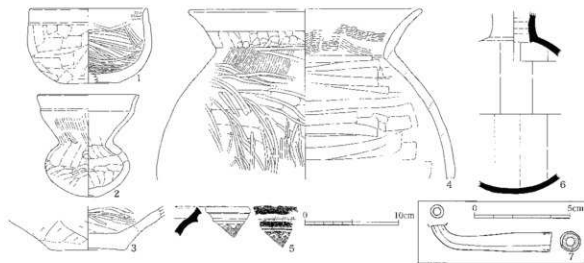
番号 種別 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 質土・構成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.4 高 5.0 底 4.2 最大 11.8	外底面はヘラケズリで凹底状。外面は体部ヨコヘラケズリ、内外面の口縁部ヨコナデ。内面は体部に縦位と底部に多方向のヘラナデ。器面がやや磨耗気味なので、ヘラミガキが行われていた可能性もあるが不明確。残存重量 201.2g。	5YR6/6 橙 やや暗赤 赤黒～細粒と白・黒・透明細粒少 やや軟質	A4B層(FA下)の3枚重ねた杯の1枚目 口11/12段、底全周 6.5-23.5 12
2 土師器 杯	口 12.2 高 5.5	外底面は底部に1方向または多方向と体部に縦位のヘラケズリまたはヘラナデ。内外面の口縁部はヨコナデで、ヘラミガキの有無は磨耗しているので不明。内面体部に多方向の密なヘラミガキ。体部の内面に暗褐色の付着物あり(塗7)。	2.5Y7/8 橙 やや暗赤 赤黒～細粒と白・黒 ～細粒と白・透明細粒少 軟質	A4B層(FA下) 口11/12段、体2/3周 6.5-23.5 2、3、15
3 土師器 杯	口 11.3 高 5.1 最大 12.0 重 残 181.6	外底面は底部に1方向(白)と体部に縦位のヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ。内面は底部に1方向と体部に縦位のヘラナデで、少し凹状を持つ。	2.5YR5/8 明赤黒 やや暗赤 赤黒～細粒やや少、 白・黒・透明細粒少 やや軟質	A4B層(FA下)の3枚重ねた杯の2枚目 口11/12段、体全周 6.5-23.5 13
4 土師器 杯	口 12.8 高 6.6 底 5.3 最大 13.0	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面体部は少し光沢のあるヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に1方向と体部に斜放射状の密なヘラミガキ。重量 296.7g。	5YR7/6 橙 暗赤 白・黒・赤細粒少 やや軟質	A4B層(FA下)の3枚重ねた杯の3枚目 ほぼ完全 6.5-23.5 14
5 土師器 杯	口 復 17.0 高 残 5.0	外底面は体部ヨコヘラケズリ。内外面の口～体部をヨコナデ後、口縁部ヨコヘラミガキ、体部に放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤黒 暗赤 赤黒～細粒やや多、白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	A45～6層(FA上) 口1/4周 6.5-23.5 6
6 土師器 鉢	口 11.4 高 8.2 底 3.8 重 残 263.1	外底面は多方向ヘラケズリで凸面状。外面体部はヘラナデまたはナデの後に、凹面を少し空けたヨコヘケズリ。内面体部はナメヘラナデ後に凹面を形成して平す。内外面の口縁部にヨコナデ。外面底部に7×5cmの黒面あり。	7.5YR7/4 に近い、橙 やや暗赤 白・黒・赤・透明細粒多 ～細粒多 やや軟質	SG9区の高塚段地層下 レンガ6.23グリッド 口1.5段、底全周 TK6-23
7 土師器 盃	口 復 3.5 底 6.3	やや磨しい。外底面は多方向ナデでやや上げ底状。外面は側下位ナデと側部タテヘラケズリ。内面は凹面方向のナデ。外底面に暗褐色かもしれない凹みが見える箇所あり。1注記16.5-23.5、6.5-23.5 1、8	5YR5/4 に近い赤黒やや暗い 灰色調やや多、白・灰色・透明細粒少 硬質	A45～6層 注記は左欄
8 土師器 土師皿	口 復 18.6 高 37.7 最大 22.2	内外面ともに主として縦位のヘラナデ後、口縁部と脚部部の内外面をヨコナデ。脚部と脚の接合部は厚い。外面の脚部から1部位が熱赤化して、内面の脚部に汚染が見られる。外面の口～脚部に縦が付着。	7.5YR6/4 に近い、橙 暗赤 白・灰色調～粗粒多、透 明細粒と白・黒細粒やや多 やや軟質	B5層 口1.5段、脚縁3/4周 6.5-23、6.5-23 2、3、4、10、11
9 土師器 S字状口縁 盃	口 復 12.0 高 残 3.4	外底面は口縁部ヨコナデ後に肩部上端ナメハケと肩部ヨコハケ。内面は肩部ナメハケ後に口縁部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	10YR5/3 に近い黄赤 やや暗い、白・赤黒～細粒やや多、 黒・透明細粒少 やや軟質	口1/4周 6.5-23
10 石製焼造品 写玉	長 2.31 幅 1.63 厚 0.70 重 3.42	両面は彫削に削って打ち割ったほぼ平坦な面で、磨耗しない。側面の全面を縦方向に磨削し、粗い磨削痕がよく残る。右側の面から穿孔し、左側の面に大きな穿孔剝離を生じる。初孔径 2.10～2.20mm、終孔径 1.65～1.75mm。	10YR5/6 黄赤 暗赤で軟質な滑石	A4B層(FA下) 完全 6.5-23.5 5

第6節 西区の遺構外出土遺物 (第387図、写真図版173-188)

権現山遺跡 SG9 区の西区は、権現山遺跡 SG5 区のある台地の東側縁部で、東側の低地へなだらかに下る。この付近の遺構は、北端で時期不明の土坑 SK-58・57・59 と道路状遺構(?) SX-54、南端で時期不明の土坑 SK-64 を確認した。遺構外から出土した古墳時代遺物があり、西側台地上の SG5 区古墳時代集落から流入したとみられる遺物がある。2 は口縁部外面の段が特徴的である。土師器の遺は居館区西溝 (SG5 区 SD-227・SG10 区 SD-43) などに例がある。4 を出土した試掘トレンチ TX11 の 11-18 グリッドは本遺跡 SG5 区と SG9 区の両方にまたがる位置である。1・2・3 は古墳後期初頭に降下した FA テフラよりも上層にあり、SG2 区流路 4 から西側の SG9 区に続く土層中の遺物であろう (第 241・245 図の断面図 C1-C2 左端)。ただし、2 は後期ではなく、中期中～後葉と考えた方がよい遺物である。5 は古墳中期の須恵器甕で、非常に丁寧な製品である。6 は 7 世紀の湖西産フラスコ瓶。7 は近世の煙管。

第 223 表 権現山遺跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 所在状態 注記
1 土師器 鉢	口 径 12.5 高 7.9 底 5.5 最大 径 13.2	外底面は平円でナデまたはヘラナデ。外面は口～体部に浅い段があり、口縁部ココナデ後に体部ヘラナデ。内面は底部に多方向と口～体部に横～斜位の密なヘラミガキ。捺仕上げは見られない。	7.5YR7/4 にぶい彫 や中密 白・黒・赤・透明細 粒や中多。白・赤粒較少 散粒	FA テフラ層より上 口 1/4 層、底 2/3 層 FA 11-18.5
2 土師器 罐	口 径 10.6 高 10.8 底 1.3 最大 径 10.8	外面体部上平タテヘラズリ後ヘラナデ、下平ナメヘラナデ。外底面は小さな凹底。外縁部面にタテヘラナデまたは浅いタテハク。内外面口縁部はココナデで、外面に浅い段を作る。内面は体部ココナデ。頸部ココヘラナデ。頸底部に径 1.0cm の円孔を 1 箇所、丸棒で穿孔する。	10YR7/3 にぶい黄彫 や中粒 白・灰色調～細粒と 黒・透明細粒や中多。赤粒～細 粒少 散粒	FA テフラ層より上 口 1/12 層、頸 1/2 層、 体全層 FA 11-18.5、11-18.5 1
3 土師器 大形甕	高 径 4.6 底 8.0	厚く重い。外底面はナデで鋭い凹面状。外面頸部ナメヘラズリ。内面は円筒方向のナデ後。頸部下位をココヘラミガキ。外面が焼熱した可能性もある。	7.5YR5/4 にぶい彫 や中粒 白・黒・透明細～細 粒や中多 や軟散	FA テフラ層より上 底 11/12 層 FA 11-18.5
4 土師器 甕	口 径 24.3 高 径 17.9 最大 径 31.6	外面は頸部にヘラナデ。肩部に浅いタテハクの後にココおよびタテヘラミガキ。肩部に浅いタテハク後、口縁部ココナデ。内面は頸部ココヘラナデ、口縁部ココナデ後に頸部ココヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄彫 彫 白彫～細粒多。黒・灰色 透明細～細粒や中多。赤粒～細 粒少 や軟散	11-18 グリッド試掘トレン チ 口 1/4 層、頸 1/4 層 TX11-18
5 須恵器 甕	口 径約 30 高 径 3.2	外面は口縁部とその直下に断面三角形の鋭い突縁を持つ。11 箇の工具で右から左へ丁寧な螺旋状文を回転彫する。	N4(白) 灰 や中密 白細粒少 硬質	口 1/24 層 11-18.5
6 須恵器 フラスコ 瓶	高 径 5.2	内外面ともに口ココナデ。穿孔時に頸部を載せて接合し、内面下端が内面に少しはみ出すように内面の回転ナデを行う。薄緑色の自然釉が外面と頸内面にかかる。細孔密着。	5Y7/1 灰白 調 白細粒と黒色焼出し 硬質	頸 5/12 層、体 1/6 層 10-18.5
7 製鉄品 煙管	長 径 6.3 径 1.00～ 1.08 重 径 6.4	削いた銅板を、筒に記入した断面中央のラインで接合して作る。接合部は極細の銅箔で色が異なるので、隠付けをしていると思われる。銅板の厚さは 1.2～1.3mm だが、ラウの割では厚さ 0.8mm の部分もある。火通は欠失し、首部先端の外周に銅釘を打付けていた痕を残す。火通に接する部分で径 6.5mm、孔 4.0mm。ラウの孔径は 4.8mm (ただし、竹材が少し縮んでいるので本来はもう少し小さい)。	銅板製	火通部欠 10-18.5



第 387 図 権現山遺跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物

第10章 権現山遺跡 SG15区

権現山遺跡 SG15 区は、栃木県河内郡上三川町大字磯岡字西谷 410-1・410-2・410-3 に所在し、「西谷田」の低地部に立地する。西側の台地には権現山遺跡 SG5 区の前古墳時代集落、東側の台地には磯岡遺跡 6 区などの古墳～平安時代集落がある。SG15 区の位置は北緯 36° 28' 55"、東経 139° 54' 23" (世界測地系) である。権現山遺跡 SG15 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.4m。東側の磯岡遺跡台地部 (磯岡 6 区付近で標高 80.4m) との比高が約 1.0m、西側の権現山遺跡 SG5 区台地部 (標高 80.5m) との比高が約 1.1m である。SG15 区の範囲は東西長 75m × 南北幅 7 ～ 13m で、調査面積は 900m²。SG15 区の南側には、権現山遺跡 SG2 区が隣接する。

第1節 古墳時代以降の自然流路

SG2 区と同様の自然流路を 2 箇所調査した。SG15 区の周囲に流路が続く状況を 1995 年 3 月の試掘トレンチ TX15 と TX16 (第 388 図) で把握できる。TX15 の断面図を第 389 図下段、TX16 の断面図を第 390 図上段に示した。遺跡の有無を確認する目的で設けたトレンチなので、すべての個別土層については特徴が記録されていない。I 層から XI 層までの記号は SG2 区の試掘トレンチ TX11 ～ TX13 断面図 (第 241 図) と共通する。ただし、TX16 の IX-1 層と IX-2 層は TX16 だけで用いた層名である。

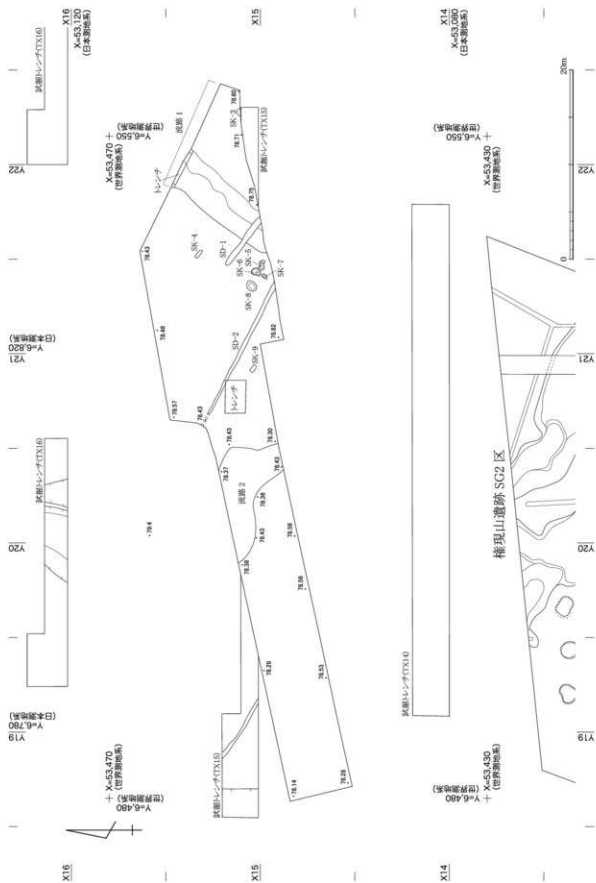
SG15 区流路 1 (第 389 図、写真図版 169)

【位置】 SG15 区東部の 15.0・21.5・22.0 グリッドにあり、時期不明の SD-1 に西端部を切られ、同じく時期不明の SK-3 に東部を切られる。

【規模と形状】 幅 12.2m 以上で、東側は調査区外まで続く。残存する深さは、断面図 A ポイント付近の地山 7 層上面から地山 9 層上面 (6 層下面) までで約 56cm。この 9 層上面が最も深くなる付近での流路底面標高は、調査区北壁面 (断面図 A-A') で 78.50m。ただし、流路の底面が 9 層上面にあることは確実ではない。9 層自体が、ある時代の流路で形成された洪水砂礫層を含んでいる場合も考えられる。調査区北壁に沿った部分は少し下層までトレンチで掘り下げた。それよりも南側は、断面図に記入した暗褐色土 (断面図の 7・8 層)、黒褐色土 (5・6 層)、砂礫層 (9 層) が見える状況で掘り下げを終えている。

【覆土】 水による自然埋没で、軽石と考えられる白色粒が 3 層中に広く含まれる。2001 年 3 月の本調査時に記録された土層の説明 (1 ～ 9 層) と、1995 年の試掘トレンチで記録された土層の説明 (I ～ XI 層) は、層相の記述やテフラの判定がすこし異なっているので、両方を図示した (第 389 図の上端と下端)。3 層のうちでも、3 層下部には軽石粒がややまとまって層状に近くみられる (断面図 A-A')。北側に隣接する試掘トレンチ TX16 のテフラ分析結果 (第 7 章第 2 節) を参考にすると、古墳後期初頭の Hr-FA や、12 世紀初頭に降下した As-B の可能性もある。1995 年 3 月の試掘トレンチ TX15 で確認したテフラは Hr-FA と判断されている (断面図 B-B' の VI 層)。ただし、3 層下部の軽石は、東谷・中島地区遺跡群でよく見られる Hr-FA や As-B とは、肉眼で観察した層相が異なっていた。SG15 区および TX15 ではテフラ検出分析や屈折率同定などは実施していないので、すべて肉眼観察による所見である。

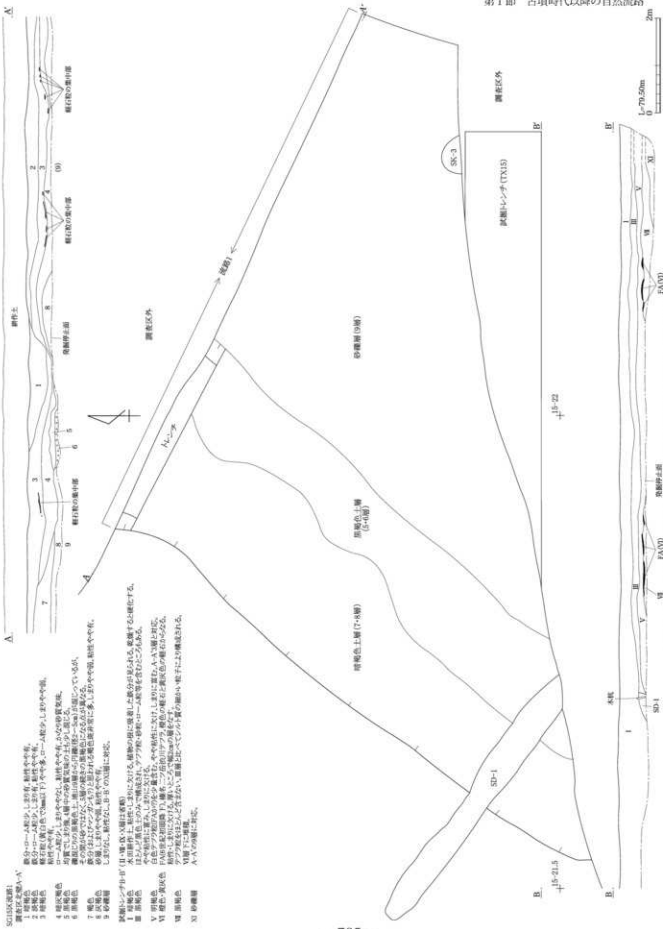
【遺物および出土状況】 かなり新しいと思われる陶器底部小片が 1 点、流路 1 の覆土 3 層中で出土している (SK-3 西側の調査区南壁部)。この陶器片を重視すると、3 層はおそらく中～近世以後に堆積したと考えられる。4 層以下の土層は、権現山遺跡 SG2 区の流路 1・流路 2 に連続する古墳時代流路の可能性がある。確認調査時の試掘トレンチで 15-21 グリッドから出土した古墳時代土師器 23 片中に、SG2 区流路 2 で出土した土師器壺 (第 244 図の 21) と接合する 1 片を含むことも参考になる。



第 388 図 権現山遺跡 SG15 区 全体図および周辺図 (1/400)

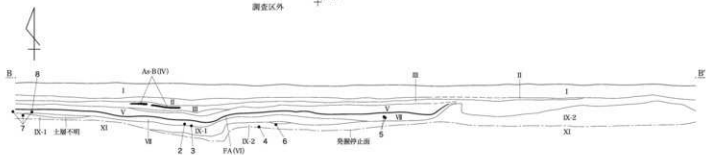
SG155試掘1

- 調査区東部A-A'
- 1 埋戻土
 - 2 埋戻土
 - 3 埋戻土
 - 4 埋戻土
 - 5 埋戻土
 - 6 埋戻土
 - 7 埋戻土
 - 8 埋戻土
 - 9 埋戻土
 - 10 埋戻土
 - 11 埋戻土
 - 12 埋戻土
 - 13 埋戻土
 - 14 埋戻土
 - 15 埋戻土
 - 16 埋戻土
 - 17 埋戻土
 - 18 埋戻土
 - 19 埋戻土
 - 20 埋戻土
 - 21 埋戻土
 - 22 埋戻土
 - 23 埋戻土
 - 24 埋戻土
 - 25 埋戻土
 - 26 埋戻土
 - 27 埋戻土
 - 28 埋戻土
 - 29 埋戻土
 - 30 埋戻土
 - 31 埋戻土
 - 32 埋戻土
 - 33 埋戻土
 - 34 埋戻土
 - 35 埋戻土
 - 36 埋戻土
 - 37 埋戻土
 - 38 埋戻土
 - 39 埋戻土
 - 40 埋戻土
 - 41 埋戻土
 - 42 埋戻土
 - 43 埋戻土
 - 44 埋戻土
 - 45 埋戻土
 - 46 埋戻土
 - 47 埋戻土
 - 48 埋戻土
 - 49 埋戻土
 - 50 埋戻土
 - 51 埋戻土
 - 52 埋戻土
 - 53 埋戻土
 - 54 埋戻土
 - 55 埋戻土
 - 56 埋戻土
 - 57 埋戻土
 - 58 埋戻土
 - 59 埋戻土
 - 60 埋戻土
 - 61 埋戻土
 - 62 埋戻土
 - 63 埋戻土
 - 64 埋戻土
 - 65 埋戻土
 - 66 埋戻土
 - 67 埋戻土
 - 68 埋戻土
 - 69 埋戻土
 - 70 埋戻土
 - 71 埋戻土
 - 72 埋戻土
 - 73 埋戻土
 - 74 埋戻土
 - 75 埋戻土
 - 76 埋戻土
 - 77 埋戻土
 - 78 埋戻土
 - 79 埋戻土
 - 80 埋戻土
 - 81 埋戻土
 - 82 埋戻土
 - 83 埋戻土
 - 84 埋戻土
 - 85 埋戻土
 - 86 埋戻土
 - 87 埋戻土
 - 88 埋戻土
 - 89 埋戻土
 - 90 埋戻土
 - 91 埋戻土
 - 92 埋戻土
 - 93 埋戻土
 - 94 埋戻土
 - 95 埋戻土
 - 96 埋戻土
 - 97 埋戻土
 - 98 埋戻土
 - 99 埋戻土
 - 100 埋戻土



第1節 古墳時代以降の自然流路

第389図 梅現山遺跡SG15区 流路1および試掘トレンチTX15



SG15区 流路2および試験トレンチTX16 (層層は省略)

- I 暗褐色 高炭素粘土。粘性し、主に欠く層物の層に堆積した炭分が見られる。乾燥すると硬化する。
- II 暗褐色 Ae-ffやA層のデンプ粒を含む。粘性し、主にやや重む。
- III 黒褐色 ほとんど黒色土のみで構成され、デンプ粒・砂粒・ローム粒等を含むところもある。やや粘性に富み、しなりに欠ける。
- IV 黄灰色 デンプ、炭粒の軽石を含む。100%堆下。
- V 明褐色 白色デンプ粒(FA)のほとんどを含む。やや粘性に欠け、しなりに富む。
- VI 黄色・黄灰色 FAの量比較的減少し、褐色・二色流川デンプ、褐色の軽石と黄灰色の軽石からなる。粘性し、しなりに欠ける。
- VII 黄褐色 デンプ粒をほとんど含まない。層層の比でシロイ質の層が下層により構成される。VI層下に堆積。
- IX-1 黄灰色 灰色砂の層層を含む。
- IX-2 灰色 粘質土。
- X 砂層 いくつかの層に細分できる層もある。
- XI 砂層 いくつかの層に細分できる層もある。

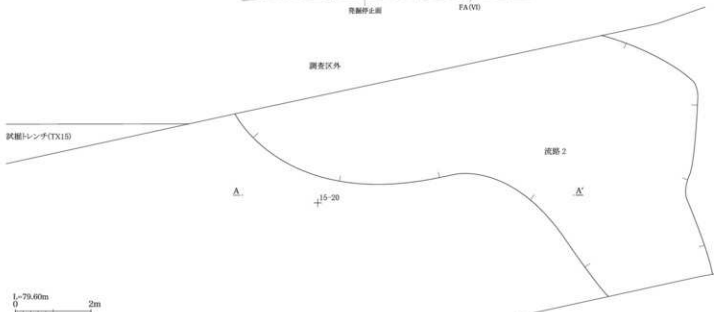
15-20

試験トレンチ TX15 南壁断面図



調査区外

試験トレンチ(TX15)



第 390 図 権現山遺跡 SG15 区 流路 2 および試験トレンチ TX16 の流路跡 (1/100)

SG15区流路2(第390図、写真図版167・215)

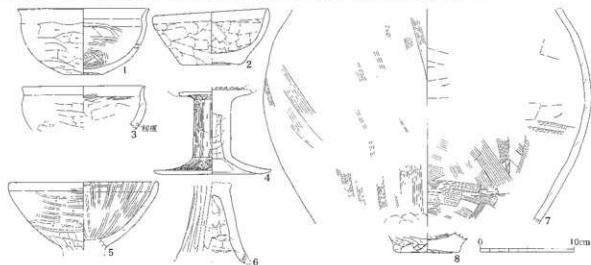
【位置】SG15区中央部の14.5-20.0と15.0-20.0グリッドにあり、南北両側は調査区外まで伸びる。南方約25mにある権現山遺跡SG2区北端の流路1と流路2に連続することも想定できるが(第388図)、中間にある試掘トレンチTX14では確認できていない。重複する遺構はない。

【規模・形状・覆土】上部を削平された浅い流路跡で、幅2.8～11.0m。断面図A-A'で西側から計測した深さは約40cmで、地山および底面は砂層(A-A'のX層)と砂礫層(XI層)である。流路底面の標高は78.37～78.63m。調査区南・北壁面の断面図は作成されていないが、流路両側の地山層を写真で確認できる。1995年3月の試掘トレンチTX15で作成した断面図A-A'は、階段状に掘削したTX15南壁面の上段と下段を合成した図面で、トレンチ設定の都合により流路2中央部から東部の断面図がない。VI層は古墳後期初頭のHr-FAテフラと判断されているので、流路下部の堆積層は古墳中～後期までさかのぼる。ただし、TX15ではテフラ検出分析や屈折率同定などを実施していない。SG15区内の流路2には遺物がない。

北側へ約15mの地点には1995年3月の試掘トレンチTX16で確認した流路跡があり(第390図上段)、SG15区流路2と連続する可能性が高い。TX16の流路は、Hr-FA以前の古墳中期から12世紀初頭のAs-Bまでの時期幅がある(断面B-B')。この部分だけAs-B火山灰が堆積しているので、ほとんど埋没した流路跡の浅い窪地だったのだろう。TX16の流路下部でFA下の各層から古墳中期の土師器片が出土した。TX16の16-19グリッドでは、この流路内で低地堆積層のテフラ検出分析も実施している(第7章第2節)。

SG15区のすぐ南側を穿する試掘トレンチTX14では流路跡を確認できなかった。TX14内の14-20グリッドでもテフラ検出分析を実施し、上下に接近した層位でHr-FAとAs-Cを検出した(第257図)。

【遺物および出土状況】SG15区では流路2から遺物が出土しなかった。SG15区北側のTX16で古墳時代中期の土師器が出土している。3は胎土に混和した稲稈痕が認められる。稈痕の類例はSG10区SI-50などにある。4は成形・調整が丁寧な高杯。FAテフラ下層のなかでも上層に短脚高杯(5)、下層に長脚高杯(4・6)があるので、時期差を持つことがわかる。7と8は同一個体の可能性がある薄い大形壺。



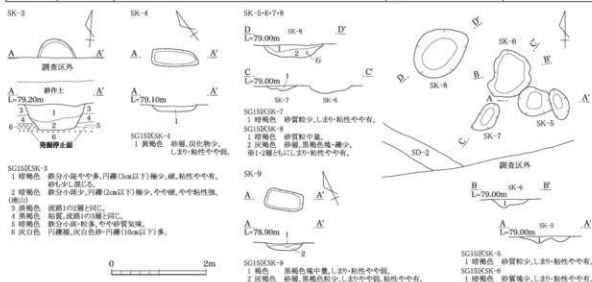
第391図 権現山遺跡SG15区流路2北方のTX16出土遺物

第224表 権現山遺跡SG15区流路2北方のTX16出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 (胎土・焼成 または素材)	出土位置 現在位置 注記
1 土師器 杯	口 復 13.8 高 復 7.0 底 復 4.0	口縁部と体部が融合しないので器高は推定値。外底面は円筒方向にへラケズリして凹底状。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコへラケズリ。内面は上平ヨコナデと下平多方向へラケズリの後にナメハラミガキ。	7.5YR7/4 に近い、やや暗い。白・赤・灰色釉・黒・透明釉粒少	16-20グリッドの試掘トレンチTX16内口1/3層。底2/3層TX16-20
2 土師器 杯	口 12.0 高 5.5 底 6.2 重 現 218.6	外底面は軽くへラケズリした後にナデで、細い凹底状。外面体部ナデ、内面体部ナメナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR7/4 に近い、暗い。白・赤・灰色釉と白・赤釉・細粒多。黒・透明釉・細粒少。数微	流路内3層口3/4層。体～底全層TX16-19 21

第10章 権現山遺跡 SG15区

3 土層 土層	口 縦 12.2 高 残 4.6 最大 残 13.1	外面は体部ヨコヘラナデまたはヨコナデの後に口縁ヨコナデ、内面は体部ナメヘラナデと口縁ヨコナデの後に、口へ体部上位ヨコヘラミガキ、脚土に塗布した緑銅紅土が断面に1箇所覆われる。	2.5YR/6 黄灰 やや細い 白・赤黒・黒粒やや多、黒・透明相～黒粒少	流路内V層中Dc-1層 口1/12層、体1/4層 TX16-19-23
4 土層 高杯	高 残 0.0 脚壁 12.4	丁取な製品。杯底部を打板で作ってから体部を成形。外面は脚部タテヘラケズリと杯底部ヨコナデの後にタテヘラミガキ、杯底部放射状ヘラケズリ、杯部内底面は多方向ヘラミガキ等。脚内面は上部に髑髏ナデ、脚柱下ヨコヘラケズリ、脚部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。	5YR5/6 青 やや細かい 白濁と白・灰色粒 やや多、黒・黄・透明相～黒粒少 やや多、やや軟質	流路内D-2層 杯底全周、脚壁5/6層 TX16-19-7
5 土層 高杯	口 縦 16.0 高 残 7.1	杯体部と杯底部の境がなくて、深い形状。外面は髑髏上端から杯底部までタテヘラケズリ、口縁部ヨコナデと杯体部タテヘラケズリ後にヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデと杯体部ナデがヘラナデの後に全体を放射状ヘラミガキ。	7.5YR5/4 に近い青 やや細く 白・灰色粒～黒粒 やや多、黒・透明相～黒粒少 やや多	流路内V層 口1/4層、杯底5/12層 TX16-20-4, 5
6 土層 高杯	高 残 8.4	外面タテヘラケズリ。内面は上部ユビナデ、下部ユビオサエとヘラナデで、粘土層積み残りを残す。	7.5YR5/6 浅黄青 やや細く 白粒～黒粒少、赤 黒・透明相～黒粒少 黒	流路内D-2層 脚柱全周 TX16-19-3
7 土層 大形器	高 残 22.6 最大 残 34.6	大形であるが器壁は薄い。外面はタテハケおよびナメハケの後に下部に斜色のナデまたはヘラナデ。内面は下位にハケ、上位にヨコヘラナデ放射使用痕はなく、断面下位に13cm以上の黒灰あり。断面が峭折して調整が不明瞭。8と同一体体の可能性あり。	10YR7/3 に近い黄緑 粗い 白・透明相～黒粒少、 黒・黒透明相～黒粒少 やや多	流路内V層中Dc-1層 脚1/3層 TX16-19-25～27
8 土層 大形器	高 残 2.1 底 7.1	外底面は中央の凹みをナデ。外側の高い部分をヘラケズリ。外面側下部にナメヘラケズリ。内面は底中央に髑髏ナデ、底外周にナメヘラナデ。7と同一体体の可能性あり。	10YR6/4 に近い黄緑 粗い 白粒～黒粒少、白濁と 黒・黒透明相～黒粒少 やや多	流路内V層 底全周 TX16-19-25



第392図 権現山遺跡 SG15区 時期不明の土坑 遺構

第225表 権現山遺跡 SG15区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重なり関係	長さ (m)	短径 (m)	深さ (m)	中輪	覆土
SK-3	15.0-22.0	円形	流路1より新	0.80	0.54		中輪無	覆土自然埋没状
由表に調査区外、遺物は陶器小破片と磁器2点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-4	15.0-21.5	長方形	重なりなし	0.99	0.36	0.16	N-55' W	単層 炭化物あり
遺物は炭化土と陶文土器小破片の計2点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-5	14.5-21.0	楕円形	重なりなし	1.06	0.48	0.14		単層
SK-6と接するが範囲不明。2基が重なったように見えるが、覆土から見て1基の土坑。遺物は土層部小破片3点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-6	15.0-21.0	不整形楕円形	重なりなし	1.00	0.78	0.18		単層
SK-5と接するが範囲不明。遺物は土層部小破片6点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-7	14.5-21.0	楕円形	重なりなし	0.70	0.38	0.10	N-37' E	単層
遺物は土層部杯小破片の1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-8	15.0-21.0	楕円形	重なりなし	1.26	0.98	0.26	N-54' E	自然埋没状
遺物なし。								
SK-9	15.0-20.5	長方形	重なりなし	0.82	0.42	0.14	N-66' W	自然埋没状?
遺物なし。								

第2節 時期不明の土坑 (第392図、写真図版168)

SG15区の時期不明の土坑は7基ある。低地にあるので各土坑の覆土に砂が多く、礫も含む。どの土坑も時期の手がかりが乏しい。詳細は表で説明する。SK-3は流路1の覆土3層を切る土坑で、陶器小破片を含むのでかなり新しいであろう。流路1の項で述べたように、流路1の覆土3層は下部にHr-FAまたはAs-Bを含み、3層上部は中～近世以後に堆積したと考えられる。SK-3も中～近世より後の土坑ということがわかる。SK-5は2基あるような形だが、覆土が同一なので一基の土坑として番号を与えた。

第3節 時期不明の溝

SG15区 SD-1 (第393図、写真図版168・169・215)

SG15区東部の15-21.5グリッド。南東部は調査区外へ伸びる。古墳時代以降の流路1を切る。幅47～69cm、残存する深さ5～9cmで、遺構確認面がやや下がりがすぎたため遺構の残りが悪い。底面は中央が少し低く、底面標高は北西端で78.73m、中央部で78.67m、南東端で78.68m。断面模式図(C-C')に記入したように、残存する長さ約40cm程度の木杭を、溝の東西両側縁に沿って打ち込んだものが5箇所で残存していた。同様の木杭は、調査区の南外側で1995年3月に実施した確認調査時の試掘トレンチでも、SD-1の東半で確認されている(第389図B-B')。溝の埋土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

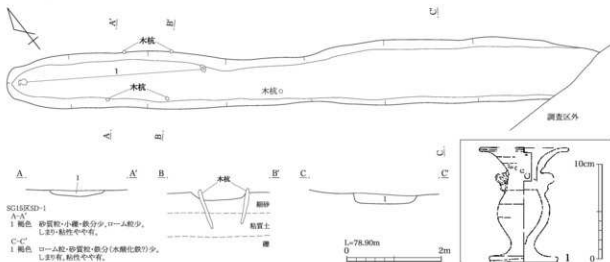
木杭は、径3.0～3.7cmの枝を長さ29.6～38.6cmに切断し先を尖らせたものである。(乾燥して縮んだ現状での計測値)。漆黒釉に長石散らしの仏花瓶(1)は18世紀の美濃産。他に近代以降の工業製品とみられる軽量・白色の瓦破片もあるので、近・現代まで継続した溝で、木杭があるので水路と考えられる。

SG15区 SD-2 (第394図、写真図版169)

SG15区中央部の15-20.5・21グリッドにまたがり、南東と北西は調査区外まで伸びる。北西部は遺構確認面を低くしすぎたために遺構がほとんど消失している。重複する遺構はない。

直線的な溝状遺構である。両側が急角度に掘り込まれて、底面が平坦になる。溝の底面には茎状の植物を平面的に敷いた痕が残る。調査区南壁の断面(A-A')ではSD-2が埋没した上を2a層が覆うのに対して、調査区北壁の断面(D-D')でSD-2が2b層を切っている。2b層→SD-2→2a層の順序になると考えられる。現代の耕作土(1層)のすぐ下にある2層の形成期間中に構築された溝なので、かなり新しい時代(近代以降?)の溝と考えられる。暗渠排水施設を設置した溝かもしれない。

断面A-A'とD-D'で溝上面幅48～70cm、深さは断面D-D'からみて最大70cm。遺構確認面での溝幅25～40cmで、確認面からの深さは約30cm。底面が南東から北西へ傾斜し、底面標高は南東端で78.50m、北西端で78.44m。自然埋没状でテフラの層や粒はないが地山3層の白色粒はテフラの可能性もある。遺物はない。



第393図 権現山遺跡 SG15区 SD-1 遺構・遺物

第226表 権現山遺跡 SG15区 SD-1 出土遺物

番号 種別 品名	大きさ (cm・g)	特徴	色調 釉土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 花瓶	口 径 9.4 高 残 12.0 底 径 7.2 重 残 232.1	底部は回転糸切り。双耳は小さく透を持たない。内面頸部より上と外面の脚底面以外に漆黒釉。頸部に長石散らし。美濃産。	10YR2/1 黒 顔料 透明・半透明緑と黒細粒 少 破片	口1/4周。体全周。 脚底1/6周 1, 2

第11章 磯岡遺跡 SG9 区

磯岡遺跡 SG9 区は、河内郡上三川町大字磯岡字西谷 413・414 に所在し、「西谷田」の低地を西側に望む低台地の東端に立地する。磯岡 SG9 区の位置は北緯 36° 28' 49"、東経 139° 54' 23"（世界測地系）である。磯岡遺跡 SG9 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.4m。西側低地部（権現山遺跡 SG9 区で標高 79.0～79.2m）よりも約 0.4m 高く、東側台地部（磯岡 5 区南部付近で標高 80.0m）よりも約 0.6m 低い。磯岡 SG9 区の範囲は南北長 30m × 東西幅 20m で、調査面積は 600m²。

磯岡遺跡 SG9 区の調査時名称は「杉村遺跡 IX 区」である。遺跡名称・範囲の見直しが行われた結果として、「杉村遺跡 IX 区」のうち東部が磯岡遺跡、中央部から西部が権現山遺跡の範囲に含まれることになった。これに従い、本報告においては東部を「磯岡遺跡 SG9 区」、中央部と西部を「権現山遺跡 SG9 区」と呼称する。

SG9 区の調査は 1999 年 12 月に開始し、権現山遺跡 SG9 区とともに「杉村遺跡 IX 区」の旧名称で遺構調査を実施した。翌年 2 月 24 日には航空写真を撮影し、3 月で調査を終了した。調査区東側から続く台地上にある古墳時代竪穴建物跡 1 棟と、時期不明の溝・焼土集中・土坑がある。磯岡遺跡 SG9 区の東側には、磯岡遺跡 5 区の前・平安時代集落が続く。1999 年度に調査を実施し、古墳時代～平安時代の集落跡を確認している。磯岡遺跡 SG9 区の南側には、一般県道雀宮真岡線改良工事に伴う磯岡遺跡の発掘調査区があるが、SG9 区と連続する遺構はなく、少し東側に離れた地点で古墳時代後期の竪穴建物跡が 1 棟確認されている（とちぎ生涯学習文化財団 2000）。

第 1 節 古墳時代の竪穴建物跡

磯岡 SG9 区 SI-49a・49b（第 396 図、写真図版 2・215）

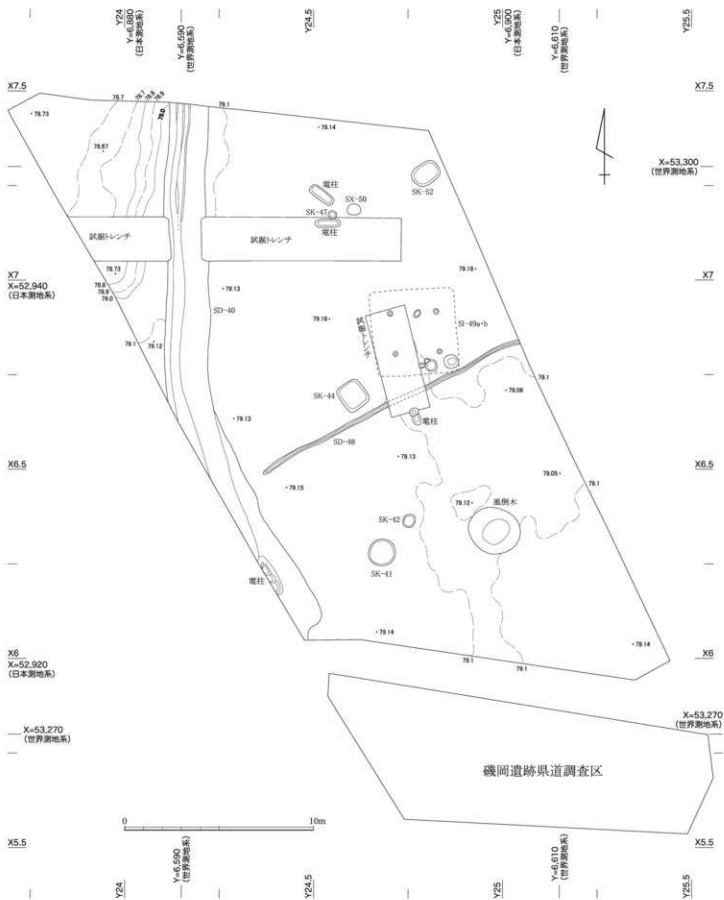
【位置】 6.5-24.5 グリッドにある。開田工事によってすでに地山ローム層面まで削平されているため、竪穴壁は確認できなかった。南東隅が時期不明の溝 SD-48 と重複し、この部分の竪穴壁が消滅しているため確実ではないが、SD-48 に切られる可能性が高い。磯岡 SG9 区内に古墳時代遺構は他にない。東に隣接する磯岡遺跡 5 区の前・平安時代集落に関連する建物である。現地調査時の旧名称 SK-45・46・51 は本建物の入口施設および貯蔵穴として吸収・改称した（SK-51 → 入口施設 P5、SK-45 → 旧期貯蔵穴 P6、SK-46 → 新期貯蔵穴 P7）。

【規模と形状】 旧期建物が SI-49b、新期建物が SI-49a である。方形と推定される建物跡で、主軸方位は GN-4° 30' -W。壁が残存しないので、図示した破線は柱穴及び貯蔵穴の配置から推定した。推定規模は辺長 4.5m 前後。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 2.13m、東西 2.39m（南側）～2.49m（北側）。断面形からみて柱径は 15cm 前後で、床面からの深さは P1=48cm、P2=36cm、P3=36cm、P4=48cm。入口施設と考えられる P5（調査時名称 SK-51）は床面からの深さ 17cm。貯蔵穴は南東隅にあり、P6（旧期建物 SI-49b 貯蔵穴）と P7（新期建物 SI-49a 貯蔵穴）の 2 時期が認められる。P6 は東西 54 × 南北 60 × 深さ 30cm で、幅 20cm 以内・深さ 7～9cm の浅いくぼみが北西部に附属する。P7 は東西 77 × 南北 65 × 深さ 48cm。複数の貯蔵穴を持つ事例は、SG5 区 SI-11 や SG10 区 SI-6 などがある。壁溝・間仕切溝は見られない。

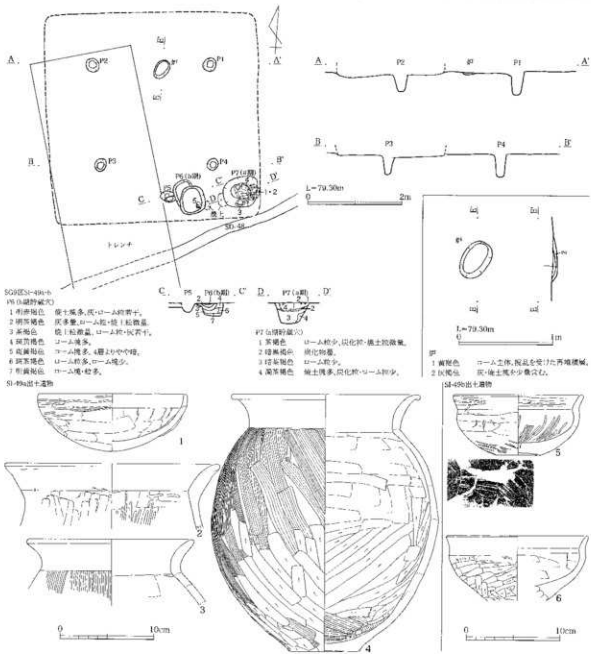
【炉】 中央北部に炉があり、短径 28 × 長径 44 × 深さ 5cm。

【覆土】 削平されているので貯蔵穴以外の覆土が不明である。旧期貯蔵穴 P6 は人為的に埋め戻されている。新期貯蔵穴 P7 内の焼土・炭化物からみて新期建物 SI-49a は火災を受けたと考えられる。火災建物は、権現山遺跡南部では SG10 区 SI-66 や SG5 区 SI-11 がある。

【a 期遺物および出土状況】 新期貯蔵穴 P7 では、覆土 2 層上に遺物がまとまっている（1～4）。この 2 層は炭化物層なので、火災で焼けた貯蔵穴の蓋板痕跡と推定できる。その蓋板の上または付近に置かれた土器



第 395 図 磯岡道跡 SG9 区 全体図 (1/200・等高線主曲線 20cm・間曲線 10cm)



第396図 磯岡遺跡SG9区 SI-49a-b 遺構・遺物

が落ち込んだものと推定された。1は内外面に粘土を貼った補修痕がある。補修痕のある土師器は、SG5区SI-21・SG10区SI-6などにあり、b期建物の5もその可能性がある。裏(4)は、底部に被熱痕がないのに胴部中位の約半周が被熱し、火災の痕であろうか。

【b期遺物および出土状況】旧期貯蔵穴P6の覆土最上部に伏せた状態の土師器杯が1点ある(5)。5は内面に亀裂と一方向のヘラミガキがあり、これも焼成前に亀裂を補修した痕かもしれない。外面に焼成後の平行刻線があるので研磨具にも用いているらしい。研磨具に用いた事例は権現山遺跡SG10区SI-2・25・28・49・50・60・61・76やSG5区SX-118などや、他にも多くの例がある。6は接合する破片の1点が埋め戻されたb期貯蔵穴内にあるので、b期に用いた遺物と考えられる。

図示以外の土師器合計38片・417gの内訳は、杯8片・48g、壺甕類30片・369g。

第227表 磯岡遺跡 SG9 区 SI-49a・b 出土遺物

番号 種類 品類	大きさ 6m・9m	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師 器	口 径 15.5 高 6.1	外面は体部に口と口縁部ヨコナデ、口～体部上位ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。口縁部ヨコナデ。外面上位以外もヘラミガキしていたかもしれないが、断面が崩れているので不詳。断面図に記入したように、内外面に縦長の粘土を貼っているところがあるので、焼成前に生じた亀裂を補修したことが推定できる。	7.5YSr5/6 黄緑 や中黄緑 白・黒・透明陶粒 や多、白陶粒少 破欠	新期前段六P7の底土 43 cm 口1/4 貫 SK-46.2
2 土師 器	口 径 22.4 高 残 7.0 最大 径 22.8	断面が厚く歪み、外面は胴部タテヘラナデで、ごく浅いタテハケと見取るところもできる。内面は胴部ヨコヘラナデ後にタテおよびヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YSr5/6 明赤 や中黄緑、白黒・透明 陶粒や中黄、黒陶粒少 や中破欠	新期前段六P7の底土 43 cm 口1/2 貫、胴上1/2 貫 SK-46.2
3 土師 器	口 径 17.4 高 残 6.1 最大 径 17.8	外面は胴部タテハケ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に胴部ヨコヘラナデ。	10YR7/4 に近い黄緑 や中黄緑 黒・透明陶・細 粒や中黄、白・赤黒・細粒少 や中破欠	新期前段六P7の底土 30 cm 口全貫 SK-46.1
4 土師 器	口 径 20.0 高 27.3 底 径 7.1 最大 径 24.1	外底面は1方向のヘラナデリ後ヘラナデで、わずかに凹面を成す。外面は胴部タテヘラナ後に下半タテヘラナデリ。内外面の口～胴部ヨコナデ。内面胴部は下位に多方向ヘラ、中位にナメヘラナデリ、上位ヨコヘラナデ。外面の胴部上位の平角が焼熟劣化しているので、火災で不規則に焼熟したことが考えられる。	10YR7/4 に近い黄緑 や中黄、白・黒・透明陶・細 粒多、赤・灰色陶粒少 や中破欠	新期前段六P7の底土 26 cm 口1/3 貫、胴1/2 貫、底 全貫 SK-46.3
5 土師 器	口 径 13.4 高 6.4 底 径 4.5 最大 径 13.8	外底面は上げ底状で、おそらくヘラナデリ後にナデとミガキで仕上げられる。内面胴部は尻尾の丸いヨコヘラナデリで、焼成後の平角が鋭角あり。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はナデ後にやや不規則な1方向ヘラミガキで、焼成前に生じた亀裂を補修するために貼いたものかもしれない。	2.5YSr5/6 明赤黒 や中黄緑 黒・透明陶・細 粒や中黄、白・黒・透明陶粒少 や中破欠	新期前段六P6の底土 22 cm 口5/12 貫、底全貫 SK-45.1
6 土師 器	口 径 15.0 高 残 6.9	外底面の丸角が強く突出気味。外面は体部上位に無彫部分を残し、底部に多方向と体部に横位のヘラナデリ。内面は体部に丁寧なヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面のほぼ全体と外面の底面が凹型。	10YR7/6 明赤黒 や中黄緑 白黒・細粒多、赤黒 ・細粒と黒・透明陶粒少 や中破欠	人口施設 P5 と新期前段 六P6の破片が重合 口1/6 貫、体1/3 貫 SK-45、SK-51

第2節 時期不明の溝状遺構

磯岡 SG9 区 SD-40 (第397図上、写真図版2)

磯岡遺跡 SG9 区西端の 6.0-24.0、6.5-24.0、7.0-24.0 の 3 グリッドにまたがり、南北両側は調査区の外まで伸びる。南側は調査区外で現代の農業用水路に重複する位置にあり、用水路に破壊されていると考えられる。重複する遺構はない。

幅 200 ～ 230cm、残存する深さは南部で 27 ～ 30cm、北部で 43 ～ 50cm。底面は南から北へ傾斜し、底面標高は南端で 78.77m、北端で 78.52m。覆土は自然埋没状で、下層の 3・4 層に含まれる白色粒は古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラ粒と判断されている。微量の白色粒に対する肉眼の判断なので断定はできず、12 世紀初めに降下した As-B テフラ粒と考えることも可能である。奈良時代または平安時代の須恵器片があることからみても古墳後期の溝とは考えられない。古代～中世の可能性を持つ時期不明の溝として扱う。

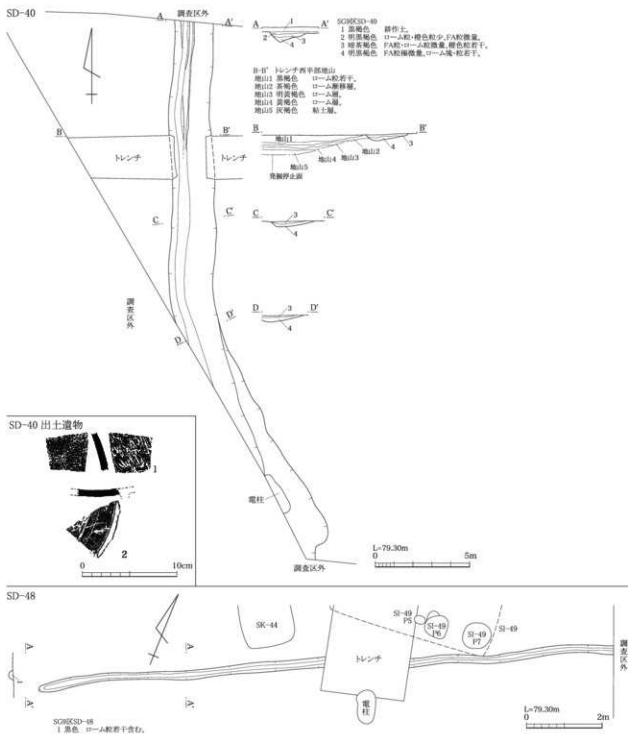
1 は古墳時代の可能性がある須恵器裏胴部片で、西に隣接する権現山遺跡 SG9 区の時期不明溝 SD-8 に同一個体の破片がある(第380図 SD-8 の2番)。同じ遺物の破片が両方の遺構に流入したのであろう。権現山遺跡 SG9 区 SD-8 はおそらく近世以降の溝と考えられ、磯岡遺跡 SG9 区 SD-40 までは 20 ～ 30m ほど離れている。調査区外で 2 条の溝が合流あるいは重複する可能性もあろう。2 はおそらく奈良時代の須恵器有台盤。図示した 2 片以外に、奈良・平安時代の可能性がある須恵器蓋(?)の胴部下半が 1 片ある。

第228表 磯岡遺跡 SG9 区 SD-40 出土遺物

番号 種類 品類	大きさ 6m・9m	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 蓋		外面は斜位の平行明き。内面はうっすらとした不明確な同心円文当りだが、当りの年輪が浮き出たものと見られる。外面に暗緑灰色の自然釉が少量付着し、やや古い黄白色に発色している部分もある。内面は暗灰色 (9N3/10)。権現山遺跡 SG9 区 SD-8 に同一個体の破片あり。	N6/10 暗 黄緑 陶粒 白陶粒や中黄、白陶少 破欠	胴部片 北端
2 須恵器 有台盤	高 残 1.0 胴径 復原 22 ～ 24	胴部を削した状態でも口口右側(指回り)による凹削ヘラナデリ後、高台を取り付けたと推定できる部分の内縁を斜削ヨコナデ。	5Y7/1 灰白 透明陶・細粒少 破欠	底1/9 貫

磯岡 SG9 区 SD-48 (第397 図下)

磯岡遺跡 SG9 区中央部の 6.5-24.0・24.5 グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。古墳中期の SI-49 と重複し、SI-49 竪穴壁が消滅しているので確定ではないが、SI-49 を SD-48 が切る可能性が高い。幅 20～26cm、残存する深さは 5～8cm で、底面標高は 79.04～79.08mm。覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。覆土の状態からみて、かなり新しい時期の溝と考えられた。遺物は出土しなかった。

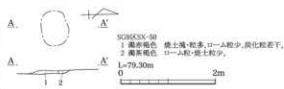


第397図 磯岡遺跡 SG9 区 SD-40-48 遺構 SD-40 遺物

第3節 時期不明の焼土集中地点

磯岡SG9区SX-50(第398図)

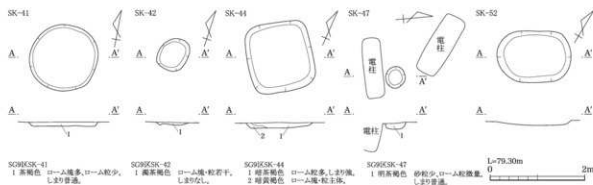
7.0-24.5グリッド所在。時期不明のSK-47が西60cmにあり、古墳中期のSI-49(a・b)が南約4mにある。焼土粒・塊や炭粒を含む土が、短径56×長径74×厚さ6cmの範囲で確認された。遺物はない。



第398図 磯岡遺跡SG9区 SX-50遺構

第4節 時期不明の土坑(第399図)

磯岡遺跡SG9区では時期不明の土坑を5基確認した。古墳時代集落から混入したとみられる土師器破片が少量出土した土坑もあるが、確実な時期を決められるものはない。詳細は下記の表にまとめた。



第399図 磯岡遺跡SG9区 時期不明の土坑遺構

第229表 磯岡遺跡SG9区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重層関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-41	6.0-24.5	円形	重層なし	1.46	1.40	0.10		単層
土師器破片が少量出土したが、本遺構に伴うとは断定できない。								
SK-42	6.0-24.5	不規則形	重層なし	0.77	0.66	0.06	N-49°E	
土師器直線製の破片が3点出土したが、本遺構に伴うとは断定できない。しまりがない覆土なので、かなり新しい時期の可能性がある。								
SK-44	6.5-24.5	楕円方形	重層なし	1.48	1.48	0.12	N-33°E	自然埋没状
遺物なし。								
SK-47	7.0-24.5	円形	重層なし	0.46	0.43	0.16		単層
すぐ東側に時期不明の焼土SX50が隣接する。遺物なし。								
SK-52	7.0-24.5	楕円形	重層なし	1.58	1.10	0.12	N-60°W	記録なし
其側は確認調査時のトレンチに切られる。遺物なし。								

第12章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

磯岡遺跡では、今回報告したSG9区においては縄文・弥生時代の遺構遺物が認められなかった。権現山遺跡北部の報告書『東谷・中島地区遺跡群10』に続いて、今回追加報告した各地区の縄文時代遺物と、権現山遺跡南部にある縄文・弥生時代遺構のうち注意をひくものを列挙する。

縄文時代の遺構外遺物 縄文時代の遺構外遺物は北部の報告書で報告済みであるが、その後の整理作業で確認・判明した縄文時代遺物を今回報告した。注意されるものとして、未完成品ふうの磨製石斧がある(第10図12)。表面の敲打痕を残し、縦断面形の中央が厚い部分を除去しきれていないが、刃部には使用痕が明瞭に残るのでこの状態のままで使用したことがわかる。

縄文早期の土坑 SG10区にある縄文時代土坑6基のうちSK-265に早期条痕文系土器が1片ある(第16図右上)。SK-265は、縄文時代と考えられる土坑SK-443(第16図右下)と連続する同一遺構の可能性もある。

縄文早期～中期の陥穴状土坑 SG10区にある縄文時代土坑6基のうちSK-219・697・699が陥穴状土坑と考えられる(第16・17図)。SK-219には燃系文系土器が1片ある。SK-697とSK-699は2基が並ぶように見え、SK-697では阿玉台Ⅲ式～加曾利E式の破片が遺構確認面付近で出土した。SK-699には遺物がない。

縄文前～中期 SG10区にある縄文時代土坑6基のうちSK-307には早期土器片もあるが、結縄縄文を施す前期末～中期初頭の土器も出土している(第16図左下)。

縄文中期 SG2区にある流路4は古墳時代の遺物・火山灰が目立つが、最下部では縄文中期の阿玉台Ⅳ式土器片も出土している(写真図版11および『東谷・中島地区遺跡群10』の第39図214)。

縄文後期 SG10区北部で、時期不明のSK-532から堀之内1式または2式土器が1片出土した(第237図)。縄文時代土坑とは断定できないことが現地所見で指摘されているので、後世の土坑に混入した可能性がある。

縄文晩期 大洞C2式期の竪穴建物が1棟ある(権現山遺跡SG10区SI-63)。有孔円盤状土製品や深鉢形土器からみて大洞C2式期ではあるが、口縁部上面が広がって文様を持つ浅鉢形土器は大洞C1式になる(第14図3)。周辺に存在した大洞C1式期の遺構等から流入したことを想定できる。SI-63は不整形形で、柱穴は1本だけで、地床が持つ。同時期の竪穴建物を確認できる栃木県中央部の宇都宮市刈沼向原遺跡を見ると、壁柱穴を持つ点は異なるが、石囲が不整形の建物で主体である点はSI-63と共通する(宇都宮市教育委員会1999)。栃木県北部の日光市川戸釜八幡遺跡の晩期の住居は4本柱穴・石囲が、不整形の他に方形プランの可能性を持つ住居もある(片根・田代2011)。栃木県中央部とは違いが見られる。

SG10区SI-63の有孔円盤状土製品(第14図12)は、宇都宮市刈沼向原遺跡(上記)・刈沼遺跡(下野考古研1986・1992・1996)・石川坪遺跡(下野考古研1993)、日光市川戸釜八幡遺跡(片根他2011)、小山市寺野東遺跡(初山他1997)、益子町御霊前遺跡SI-04・09(後藤2001)にあり、西広貝塚(鶴岡2007)など千葉県に多い。SI-63例は小形品である。他に、孔の多い円盤状土製品がSG5区で試掘トレンチと古墳時代のSI-10にあり(第10図2～4)、この付近の縄文時代遺物が古墳時代竪穴に流入したと見られる。

弥生中期 SG10区SK-544で弥生中期後半の土器片と打製土掘具(石錐)が出土した(第18図)。弥生時代の遺構はこの1基だけである。

第2節 古墳時代

12.2.1. 古墳時代の土器変遷

東谷・中島地区周辺では、権現山遺跡の東に所在する磯岡遺跡で、土師器杯を基準とする1～5期の時期区分が行われた(塚原1999)。これに続いて杉村遺跡北関東自動車道路調査区では、藤田(1999)の土器編

第12章 まとめ

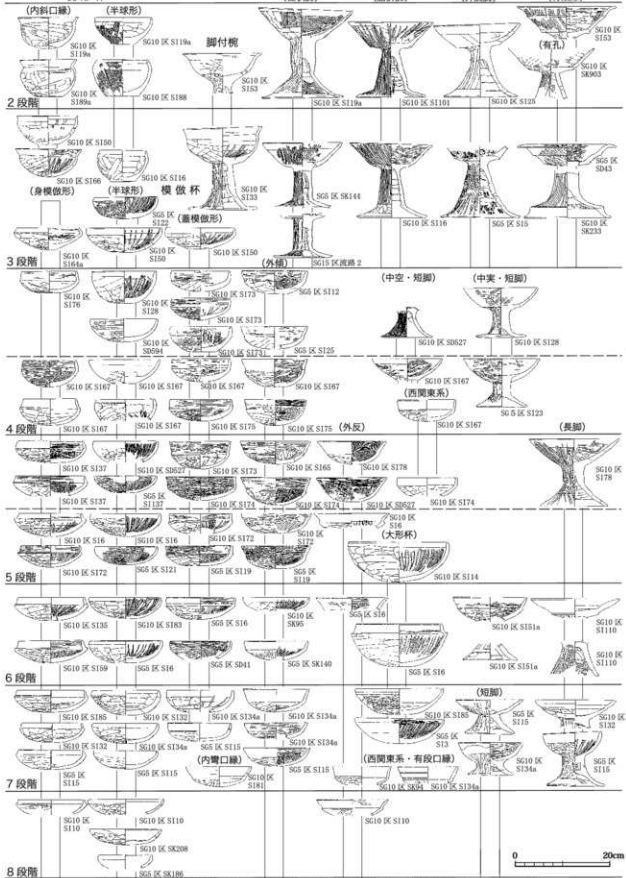
碗形杯

(柱状脚)

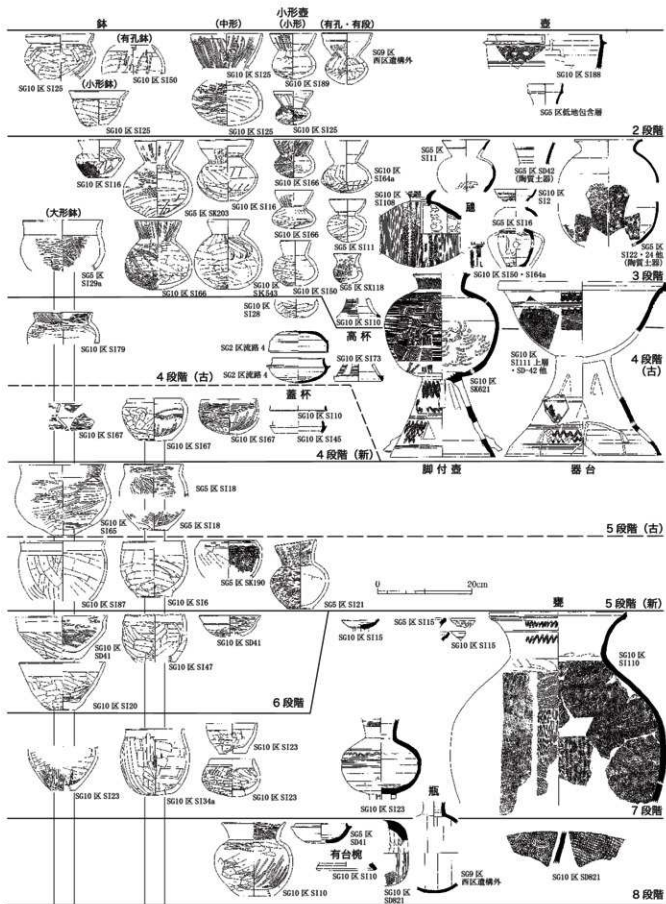
(屈折脚)

高杯
(外反脚)

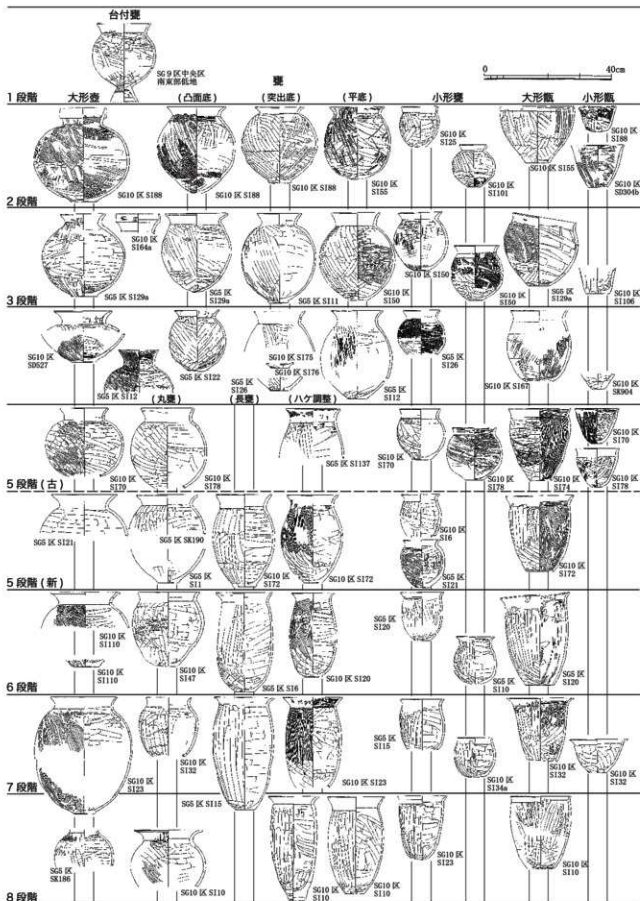
(有段形)



第 400 図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (1) 土師器杯・高杯



第 401 図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (2) 土師器鉢・小形壺と須恵器・陶質土器



第402図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡SG9区出土土器の変遷(3) 土師器大形甕・甕・甔

第230表 権現山遺跡南部と磯岡遺跡 SG9 区における古墳時代・古代・中世遺構と時期区分

編年区分		磯岡遺跡		権現山遺跡南部							
土葬葬	墳墓葬	SG9 区	SG2 区	権現山 SG5 区		SG9 区	SG15 区	権現山 SG10 区			
				竪穴建物以外		竪穴建物		竪穴以外と特殊遺構		竪穴建物	
前期											
	1 段階										
	2 段階	TK73・216		流路 4	SK-208?			南東低地	(SK-117) (P-409・470?)		
	3 段階	TK208	SI-49a,b	流路 1.2				南東低地			
				流路 4 (前段階から継続)	同内外郭溝 SD-43,227 (SD-101?) SK-118 SK-51,86,96,106?; 1307,144,191,198, 199,200,203,204, 205a,206,207,210? 232,225	(3 段階古墳) SI-24,290?,957			竪穴遺構 SI-3692 段階新 ～3 段階古)		
	4 段階	TK23・47		SK-103 流路 2.4 (前段階から継続)	SD-42(4～5 段階) SK-195,218 SK-215?,220?	SI-12,25(古)→ 23(新),26,99? (SI-12,25? は 4 段階古 墳 /SI-23・26 は 4 段 階新墳)		南東低地			
			詳細時期不明 (2～4 段階)	SK-100	SK-82,92,142,189, 196,202,210,213 南・219,247,253,	SI-155? (古墳後期の可 能性もあり)					
古墳前期	5 段階	MT15・ TK10			SD-42(4～5 段階)・ SD-44(5～6 段階) SK-31,98,190,208 上層 218(SK-314 5 段階古墳 /SK-98, 190,208 上層は新 墳)	SI-1,42,77,18,192,1,137 (SI-18,137 は 5 段階古 墳 /SI-1,19,21 は 5 段 階新墳)					
	6 段階	TK43			SD-41(5～8 段階) SD-44(5～6 段階) SK-140	SI-6,8,9,10,20 (SI-6,10 は 6 段階古墳)					
	7 段階	TK209		流路 5	SD-41(5～8 段階) SK-209a	SK-3,14(古)→15(新), 28					
				詳細時期不明 (5～7 段階)		SI-2(5～7 段階), SI-107(6～7 段階), SI-155? (古墳中期の可 能性もあり)					
	8 段階	視鳥 1 新・B			SD-41(6～8 段階) SK-186 南						
古墳終末期	9 段階	視鳥 III・IV									
		詳細時期不明 (8～9 段階)		SK-317				西区遺構群	SD-821		
奈良	10 段階	視鳥 V 藤子館東 4 号 新治一丁田楽						中央区標高 地			
	11～12 段階										
平安	(中) 中葉	三善人芝原 B 藤子館屋 新治小野 1 号		D 区遺構群	SK-120				SK-235	SI-90	
古代 (奈良～平安時代)											
中世											
									道路筋溝 SD-250a・ 250b 区画溝 SD-263? 井戸 SI-232,237,252, 344,377,569, 土坑 SK-92,251 中央区・北部柱六部 (P-425,627,640 等)		

年に基づいて、古墳中期を「杉村1～4期」、古墳後期を「杉村4期以降」と区分して、土器と集落の変遷が明らかにされた(藤田・安藤編 2000)。その後の調査では、今回報告地区から西に連続する権現山・百目鬼遺跡で示されたI～VIII期の土器編年(谷中・大島編 2001)を基礎とし、時期・段階区分の数字を共通させて、各遺跡で編年を行っている。北方にある立野遺跡では1～9段階(内山 2005)、その東にある中島笹塚遺跡ではそれに続けて12段階(奈良時代後葉)までを設定した(内山 2008)。前回報告した権現山遺跡北部・杉村遺跡においても1～10段階を設定した(内山編 2010)。各段階区分と段階名は、百目鬼・立野・中島笹塚遺跡の区分と共通させている。今回扱う権現山遺跡南部と磯岡遺跡SG9区古墳時代遺物は、1～8段階に相当する。1段階よりも先行する古墳時代前期の土師器が少量あり、S字状口縁台付甕が権現山遺跡SG9区南東部低地、二重口縁壺が権現山遺跡SG2区流路2にみられる。なお、砂田姥沼遺跡は古墳前期を「1段階」としているため、他遺跡の編年よりも段階名称の数値が一つ多くなっている(藤田 2011)。

1段階古相は古墳時代前期末または中期初め、1段階新相～4段階は古墳中期、5～7段階は古墳後期、8段階は古墳終末期前半に相当する。古墳時代中期は古市・百舌鳥古墳群に列島最大規模の首長墳が築造される時期として定義し、特定地域の土器様相や横穴式石室導入期を指標とする立場はとらない。中期の下限は、剣や短甲の副葬が終了するTK47型式並行期である。また、前方後円墳の築造終了後を古墳時代終末期とする。Hr-FA テフラの降下期は4段階末～5段階初頭である。

遺物・重複関係・火山灰などから各段階に位置づけられる遺構を第230表に示す。また、古墳時代中・後期須恵器の田辺編年(田辺 1966・1981)、終末期の飛鳥編年(奈良国立文化財研究所 1978)、奈良時代の益子窯跡群・三森山麓窯跡群・新治窯跡群の須恵器編年(津野 1997・赤井 1998)との対応を示した。

各段階の標識的一括遺物を出土した遺構を以下に示す。段階区分は立野遺跡・中島笹塚遺跡と共通する。また、権現山・百目鬼遺跡の北関東自動車道調査区(谷中・大島編 2001)・杉村遺跡の北関東自動車道調査区(藤田・安藤編 2000)・磯岡遺跡(塚原 1999)の各編年、藤田(1999)編年、須恵器編年との対応を示す。

〔1段階古相〕 権現山百目鬼I期・杉村1期(古墳前期末～中期初頭、4世紀末)

…権現山SG9区中央区南東低地の台付甕

〔1段階新相〕 藤田I期(古墳中期前葉)

…今回報告地区では該当資料なし。2段階のSI-88に切られる権現山SG10区SK-11が、1段階の可能性もある。

〔2段階〕 権現山百目鬼II期・藤田II期・TK73～216型式期(古墳中期中葉、5世紀前葉)

…権現山SG10区SI-19a・88・89a、[権現山SG10区SI-25は2段階新相]

〔3段階〕 権現山百目鬼III期・杉村2期・藤田III期・TK208型式期(古墳中期後葉、5世紀中葉)

…権現山SG5区SI-11・22・SX-118・SD-227、権現山SG10区SI-16・50・66 [SG10区SI-36は3段階古相]

〔4段階〕 権現山百目鬼IV期・杉村3～4期・藤田IV～V期・磯岡1期・TK23～TK47型式期(古墳中期末、5世紀後葉～6世紀初頭)

…権現山SG5区SI-12、権現山SG10区SI-28・73 [4段階古相]

権現山SG5区SI-23、権現山SG10区SI-67・75 [4段階新相]

〔5段階〕 権現山百目鬼V期・杉村4期以降120住・MT15～TK10型式期(古墳後期前～中葉、6世紀前～中葉)

…権現山SG5区SI-18・137、権現山SG10区SI-65・70・74・78 [5段階古相]

権現山SG5区SI-19・21、権現山SG10区SI-6・72 [5段階新相]

〔6段階〕 権現山百目鬼VI期・杉村4期以降133住・磯岡2期・TK43型式期(古墳後期後葉、6世紀後葉)

…権現山SG10区SI-35・47・83・110

〔7段階〕 権現山百目鬼VII期・杉村4期以降112住・磯岡3期・TK209型式期(古墳後期末、6世紀末～7世紀初頭) …権現山SG5区SI-15、権現山SG10区SI-32・34a

〔8段階〕 権現山百目鬼VIII期・磯岡4期・飛鳥I新相～II期(古墳終末期前半、7世紀前～中葉)

…権現山SG10区SI-10

遺構を各段階に位置付ける操作を行った時の注意点を、以下に記しておく。3段階のSG5区SI-17(古)→SI-16(新)や、7段階のSG5区SI-14(古)→SI-15(新)は、同一段階の竪穴建物跡が重複している。他にも、a・b・cの記号で細分表記した建替建物が同一段階の中に取まる事例がある。複数の段階に継続する溝状遺構は、権現山遺跡のSG2区流路、SG5区SD-41・42・44、SG10区SD-42・520・304・305・527がある。SG5区からSG10区まで続くSD-42は、居館区画溝・SG5区SI-11・SG10区SI-2(3段階)→SG5・SG10区SD-42(4～5段階)→SG5・SG10区SD-41(6～7段階)として位置づけた。SD-42に少量ある3段階の遺物は、SG5区SI-11および居館、SG10区SI-2・111などからの流入品と判断した。6段階にSD-42の北部を掘り直した溝がSG5区とSG10区のSD-41である。

今回も4段階と5段階の資料数が多いので、前段階や次段階に近い型式の増減を手がかりに、各段階を新古に細別した場合がある。4段階では深身模倣杯や短脚中実高杯の極小化、5段階では口縁外反杯の減少と杯身模倣杯・長脚中空高杯の増加および杯の浅身化が、それぞれ新段階の指標となる。しかし、遺物数が少ない場合や、新古の両相が共存する一括遺物では細別の判断が難しい。この点は権現山遺跡北部・杉村遺跡における編年案(内山編2010)と同様である。

12.2.2. 古墳時代の集落と変遷(第403・404図)

集落成立前 古墳時代前期末～中期初頭に相当する権現山遺跡1段階は、権現山遺跡南部・北部ともに確実な遺構がない。権現山遺跡南部では低地部に前期末の土器が少量みられ、SG2区流路2の二重口縁壺(第244図19)やSG9区中央区南東部低地の単口縁・S字状口縁台付甕(第386図)がある。1段階の建物は、同じ開析谷の北方では島状微高地に杉村遺跡北関東自動車道路調査区60・69・70号住居跡があり(藤田・安藤2000)、さらに北側ではこの谷に面して立野遺跡5区SI-14(内山編2005)がある。また、砂田姥沼遺跡にも古墳前期の建物2区SI-1と3区SI-5が単独で所在する(藤田2011)。権現山遺跡・杉村遺跡付近の集落が2段階に大規模化するよりも前に、開析谷に面する微高地で小規模集落が営まれていたことがわかる。

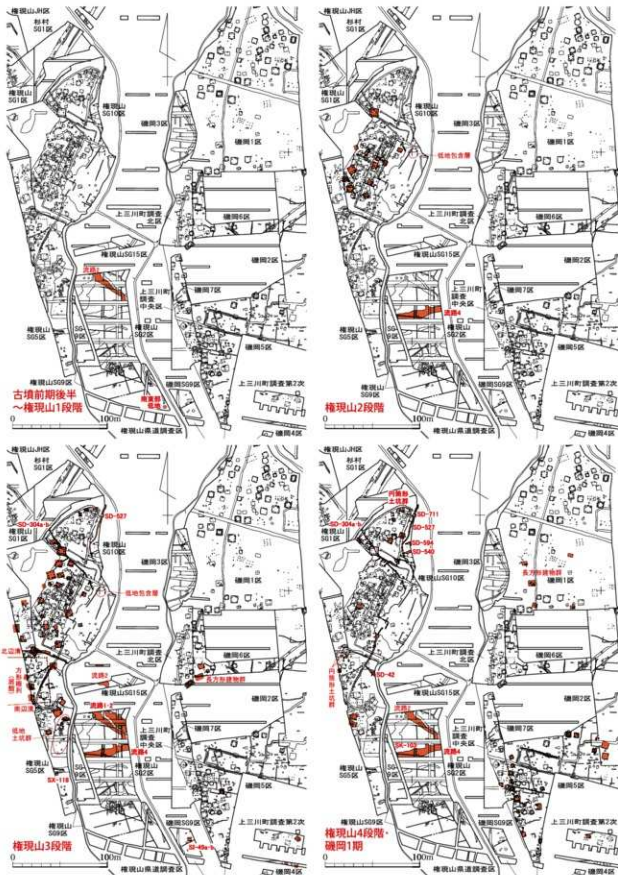
集落の大規模化 古墳時代中期前葉(2段階)から集落が大規模化する。今回報告する権現山遺跡南部ではSG10区に10棟の建物があり、権現山遺跡北部(4区・SG1区)、杉村遺跡GN1区、さらに北方の立野遺跡5区や磯岡北遺跡B区(勝見2005)と磯岡北遺跡SG17区(内山2006)までの広い範囲に集落群が成立する。中期後葉(3段階)にはさらに集落群の範囲が広がって、権現山遺跡南部半(SG5区)、杉村遺跡北関東自動車道路調査区、磯岡遺跡南半部、砂田遺跡まで居住域拡大つまり分村が進む。

権現山遺跡南部居館 権現山遺跡では、北部と南部に1箇所ずつ居館遺構がある。南部居館(SG5区居館)は方形柵列SA-151の東辺長が47.1mなので、北部居館(SG1区居館、東辺長98m)の約半分である。北部居館は古墳中期中～後葉(本遺跡編年の2～3段階)の継続幅を持つ。これに対して南部居館は中期後葉(3段階)である。南部居館の南辺溝(SG5区SD-227)と北辺溝(SG5区・SG10区SD-43およびSG10区SD-221)の遺物が3段階で、SI-100(3段階)→居館北辺溝SD-43(3段階)、さらに居館北辺溝SG10区SD-221(3段階)→SG5区・SG10区SD-42(4・5段階の溝)、という重複関係がある。3段階のある時点で北部居館から南部居館へ移転したか、または北部居館と南部居館が3段階には共存していたと考えられる。

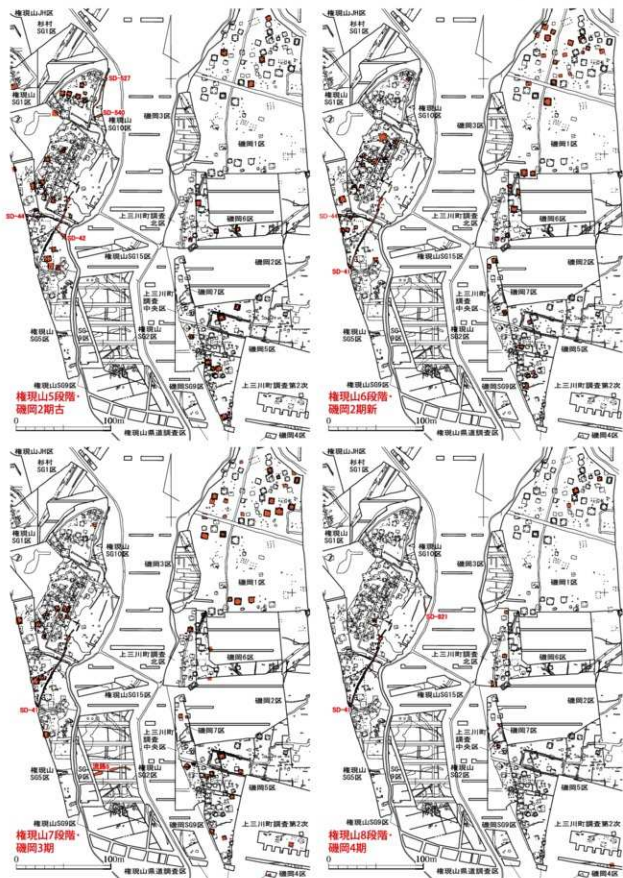
北辺溝は1箇所が途切れて土橋になり、SG10区集落から入る通路であろう。南辺溝SD-227はSD-101に切られる東半が不明であるが、SD-101と同様に北へ曲がりながら低地へ向かうことを想定できる。柵列の柱穴は深さ1mほどなので、地中部分の長さの3倍ほどを地上建築物の柱高と考えるならば(宮本2001,p.17)、高さ3m程度の柵(または塼)を推定できる。

居館が営まれる3段階は、周囲に竪穴建物群や低地部土坑群が隣接するので、周辺集落から隔離する群馬県三ツ寺I遺跡居館とは立地が大きく異なる。ただし、3段階の周辺建物でも居館より古いものがあることが、居館北辺溝に切られるSI-100から判明する。南部居館の柵列内にある3段階の竪穴建物はSG5区SI-13、SI-16(?), SI-17、SI-116で、同じ3段階の中でSI-17→SI-16の重複関係がある。また、柵列外で区画溝の

第12章 まとめ



第403図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷(1) 古墳前期後半～古墳中期



第 404 図 梅現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷 (2) 古墳後期～終末期前半

内側にSG5区SI-11がある。3段階の大形建物は、居館周辺よりも北側にある(SG10区SI-50・60・64a)。

中期集落と円筒形土坑・特殊建物 権現山SG10区の北端部は、古墳中期末葉(4段階)ころの貯蔵穴と考えられる円筒形土坑が集中する。また中期中～後葉の2本柱や無柱の竪穴建物も目立つ(SI-79・80・82・84・86・115?)。古墳中期集落内で貯蔵関連施設と特殊建物がまとまる地区であったことがわかる。磯岡遺跡と杉村遺跡でも中期中～後葉に長方形建物や無柱建物が目立つ(磯岡遺跡では6区と1区南端、杉村遺跡では北関東自動車道路調査区)。杉村遺跡は土師器生産・鉄器生産など手工業生産にかかわる地区で(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.547)、また中期中～後葉の円筒形土坑も分布する。

中期の低地土坑群 SG5区とSG10区で、集落から低地へ降りた付近に土坑群がある。SG5区の土坑群(第345図)は、残存度の高い土師器裏などが出土するので、低地の水を利用する井戸のような施設と考えたいが、祭祀土坑や地山白色粘土採掘坑と考える意見もあろう。SG10区の南東部低地で出土した古墳時代遺物は、遺構(土坑)に伴う遺物と遺構外遺物とのいずれも、古墳時代後期の遺物がほとんど見られない。時期不明土坑・溝に混入している遺物もほぼ中期の遺物である。時期不明土坑の中に古墳中期の土坑も含むであろう。

後期の集落 居館は見られないが、集落の性格や土地利用は中期のありかたを継承している部分がある。古墳後期にも2本柱や無柱の竪穴建物がSG10区北部にある(SI-81・83・114)ことや、後期の大型建物SI-110がSG10区中央部にあることは、中期における2本柱建物・無柱建物・大型建物の位置と共通している。居館(3段階)より後の中期末(4段階)や後期(7段階)にも須恵器脚付壺や器台のような祭祀の器種がみられることも(第401図)、権現山集落が引き続き首長層と関わりを持っていたことを示唆している。

12.2.3 古墳時代の各遺構

竪穴建物の炉 火処に炉を使う2～3段階の竪穴建物は、大半が1箇所の炉を持つ。2段階の権現山SG10区SI-19bと、3段階の権現山SG10区SI-16・33・86は、2箇所の炉を持つ。3段階の権現山SG10区SI-50は6箇所の炉が時期差をもって使われている。SI-50は二重礎を出土する大型建物で、作業場よりも有力者の住居と見たい。SI-50の鍛冶滓1点は南側の鍛冶遺構SI-36から持ち込まれたものであろう。

炉の位置は、竪穴床面の中央よりも東側と北側に寄るものが多い。東側に炉があるものを細分すると、2段階は東部(SG10区SI-19b,55,57)、3段階は南東部(SG10区SI-2,50,60,64a,86)に炉を作る傾向がある。次段階(4段階)のカマドが東壁の南部に多いことと関連するであろう。東側と北側以外に炉がある建物は、中央4例(権現山SG10区SI-50の炉5とSI-106・108・111)、南1例(権現山SG10区SI-80)がある。

カマドの採用 権現山遺跡におけるカマドの出現時期は中期後葉(3段階)で、SG5区SI-13・16の2例である。これ以外は、3段階以前の火処は炉である。同じく3段階の建物でもSG5区SI-17は炉で、それを切るSI-16はカマドを北壁に持ち、3段階の新相でカマドを採用したことがわかる。SG5区SI-13も4段階に近い短脚化した高杯を含むので、3段階の中では新相と考えられる。4段階以後は大半の建物がカマドを採用し、4段階に1例だけが炉が残存する(SG10区SI-79)。

カマドの位置 竪穴建物にカマドを設置する方位は、東側と北側の2種が一般的で、1例だけが南側にある(SG10区SI-72)。南側カマドの事例は磯岡遺跡上三川町調査区のSI-30と、百目鬼遺跡SI-063にある(深谷・高野2004、谷中・大島編2001)。東側カマドは4～5段階に多く、4段階では主流だが、他段階では少数派である(第231表)。5段階以後は、北側にカマドを作ることが主流になる。

第231表 権現山遺跡南部におけるカマドの位置

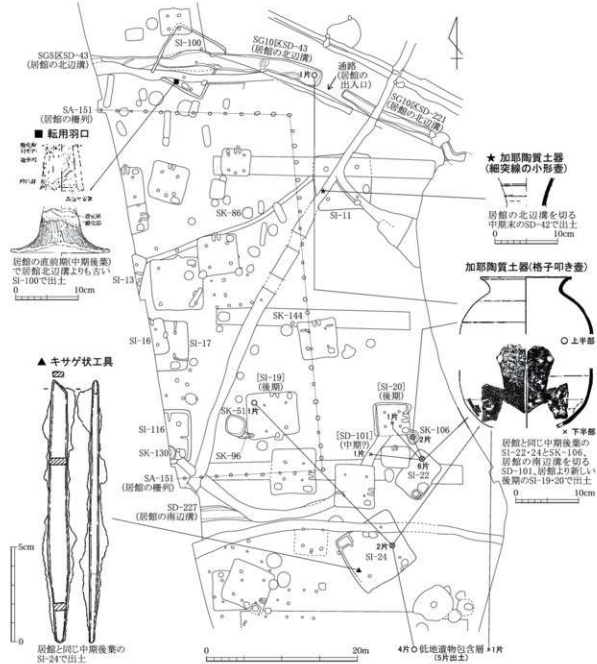
(カッコ内は建物番号)

時期	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階	8段階
東側 (SG5区 SG10区)	1例 (SI-13)	5例 (SI-12,23,26) (SI-28,37)	6例 (SI-1,21,137) (SI-69,70,74)	3例 (SI-20) (SI-20,83)	1例 (SI-32)	0例
北側	1例(SG5区SI-16)	0例	11例	10例	13例	1例
南側	0例	0例	1例(SG10区SI-72)	0例	0例	0例

鍛冶関連遺構 今回報告する権現山遺跡南部では、SG10区SI-36が鍛冶遺構である。南東部以外は消滅しているため建物構造をくわしく把握できない。煤が付着した土師器甕を多く伴い、鍛冶遺構であると同時に生活の場でもあったことを思わせる。この点は、権現山遺跡北部にある鍛冶遺構SG1区SI-33とも共通する。

居館周辺の遺構と特殊遺物 権現山遺跡南部の陶質土器破片は、古墳中期後葉（3段階・TK208型式期）のSG5区居館の周辺部に多い。渡来系文化・技術を取り入れる役割を持つ地区であろう。

格子明きの陶質土器壺破片が出土した遺構のうち、SG10区SD-43は権現山遺跡南部居館の北辺溝である。SG5区SI-22・24も居館と同じ3段階である。SG5区SI-22に壺の下半2片と上半4片があり、位置がわかる1片はSI-22の壁溝底から7cm浮いて出土した。2片を出したSG5区SI-24には、金工具の可能性を持つ「キサゲ状工具」もある。SG5区SK-106とSD-101も中期の可能性があり、SK-106の上層に後期初頭のHr-FAテフラが入る。居館南辺溝SD-227を切るSD-101は軽石の粗砥石を出土した。後期のSG5区SI-19・



第405図 権現山遺跡南部SG5区居館周辺遺構と特殊遺物

20にも格子甲きの陶質土器破片が1点ずつ流入している。

細い突線を持つ陶質土器小形壺は、SG5区SI-11(3段階)にSD-42(4～5段階)が重複する付近で出土した。3段階の居館に関わるSI-11などから、中期後葉～後期前半のSD-42に流入したものと推定する。

小形の鍛冶滓が、SG5区SD-42に1点、その北に続く中～後期のSG10区SD-41・42に3点ある。居館北辺溝に切られる3段階のSG5区SI-100にも羽口があるので、北辺溝設置前から集落内で鍛冶を行ったことがわかる。SG5区の鉄関連遺物は少なく、鍛冶関連作業は北側のSG10区とSG1区で主に行われている。

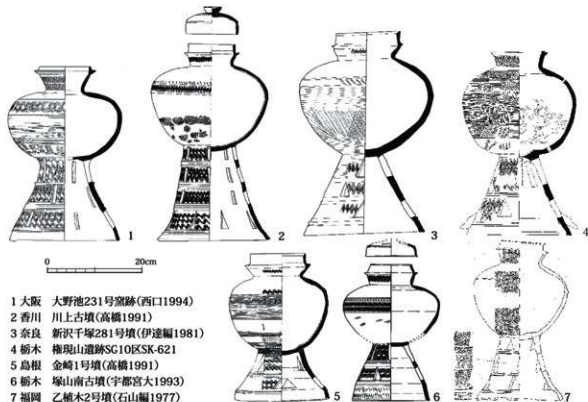
12.2.4. 古墳時代の出土遺物

他地域産の土師器 群馬・埼玉県産の土師器は、古墳後期末(7段階)のSG10区SI-34aに有段口縁杯があり、SG10区SI-67(4段階)・SI-74(5段階古相)・SK-94(7段階)には薄手の杯がある。これらは、第400図で「西関東系」と表示した。雲母を含む茨城県南西部地域産の土師器は、SG5区ではSI-24の高杯(12)があり、隣接するSG10区ではSI-12・21a・22・23・47・59・72・73・74・81・85・114にある。権現山遺跡北部では雲母を含む土師器が2区に多く、他地区にも若干ある(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.550)。第400図で6段階の「外反」土師器杯に示したSG5区SI-6は、東北地方の栗園式系の可能性を持つ(第287図19)。

須恵器二重壺・器台・脚付壺 これらも一般集落ではあまり出土しない器種である。有力者(首長)層にかかわる儀礼用土器が集落で破損後再利用・廃棄されたものであろう。

二重壺は、古墳中期のSG10区SI-50・64a、時期不明の土坑SG10区SK-254、近世の溝SD-201aに破片がある(第401図3段階)。SI-64aの体部内周(第100図49)と、SG10区SI-50・SK-254・201aの体部外周破片(第83・215・237図)が同一個体の可能性もあるが確定はできない。透窓が波状文を切る点で静岡県山ノ花遺跡・長野県金鎧山古墳例に似る(浜松市博物館編1998, p.78; 木下1992)。栃木県域では、北西4.7kmにある塚山南古墳でTK208～23型式期の2点が出土している(宇都宮大1993)。

器台は、脚部が内燻しはじめて口縁部が短くなるIV式(高橋・小林1990, p.38)で、TK23型式に相当する(第



- 1 大阪 大野池231号竪跡(西口1994)
- 2 香川 川上古墳(高橋1991)
- 3 奈良 新沢千塚281号墳(伊達編1981)
- 4 栃木 権現山遺跡SG10区SK-621
- 5 島根 金崎1号墳(高橋1991)
- 6 栃木 塚山南古墳(宇都宮大1993)
- 7 福岡 乙植木2号墳(石山編1977)

第406図 権現山遺跡SG10区の脚付壺と類例

401 図4段階)。同一個体の可能性が高い須恵器器台がSI-111の上層に2片、SI-111の南西10mのSD-41・42出土口縁部1片、古墳時代のSK-292出土杯部1片、時期不明土坑SK-614と近世溝SD-201aと後期の北関東自動車道調査A区SI-141の脚部各1片に分かれて出土した。SK-614はSI-111から北に108m離れている。権現山遺跡には須恵器器台が多く、別個体の須恵器器台として本遺跡南部SG5区低地包含層出土破片(第357図12)、本遺跡北部SG1区居館SD-95周辺の筒形器台(内山編2010, pp.340,550)、北関東自動車道調査B区SZ-003号墳(谷中・大島編2001, 本文編II pp.49,242)にある。

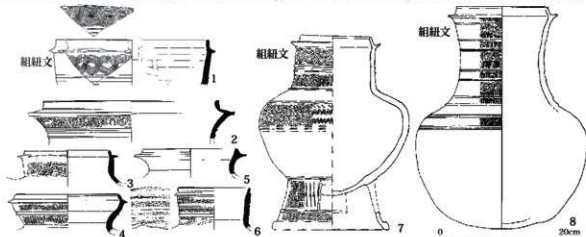
有蓋脚付壺は、肩部の張りや頸部の外傾が弱いものが新しく、口縁端面は水平から内傾へ変遷する(第406図1→4,5→7)。中期末～後期には頸と脚が長くなる(中村他1987)。3と4はまっすぐ開く脚部が共通する。ON231段階(1)→TK208型式(2・5)→TK23型式(3・4・6)→TK23～47型式(7)と考えられる。

SG10区SI-88の有蓋壺(第407図1) 大野池231号窯跡の2～6や、口縁は異なるが第406図1の脚付壺と、平坦な口縁端面・高い蓋受部・やや崩れた組紐文が共通する。TK73型式前半のON231段階に相当する初期須恵器で、文様は大野池231号窯例より古相である。組紐文を描く有蓋壺が分布する慶州・釜山地域(入江2011, p.262)や金海地域の陶質土器が、倭で変容した初期の製品であろう(趙慶元氏の御教示による)。

組紐文は器台に多い文様で、組紐文の壺は台を持つ可能性が高い(入江2011, p.253)。権現山遺跡SG10区例も、特別な意味を持つ大形壺と考えられる。組紐文様の須恵器は中部以西に多く、東日本では東京都野毛大塚古墳(風間1992, p.422)と本遺跡にある。権現山遺跡北部(SG1区)の豪族居館と同時期なので、首長間交流を介して、特別な容器または内容物がたらされたことを想定できる。

SG5区・SG10区の陶質土器 韓式系(朝鮮半島系)土器の加耶陶質土器がSG5区で2点出土した。下半部格子引き調整・上半部無文の壺1点(SG5区SI-22・24他)と、細突線を持つ小形壺の頸部1片(SG5区SD-42)がある。権現山遺跡3段階(TK208並行期)に伴う遺物と考えられる。ただしSD-42は4段階の溝に3段階の遺物が混入するので、小形壺は4段階に下がる可能性もある。

朴升圭氏(嶺南文化財研究院)の御教示によると、第408図1は加耶土器またはその模倣品で、加耶のうちでさらに地域を限定することは難しい。胴部上半の引き目をナデ消す加耶陶質土器の特徴について、次のような指摘がある:「口縁部製作時の回転力を利用したヨコナデ調整は、5世紀代以後になると、手が次第に下方まで降りて胴部まで及びはじめ、最後には胴上半部全体を回転ヨコナデするにいたる。少なくともC字形口縁部を持つ土器の口頸部製作と胴部上半の調整が、ロクロの回転力を利用して同時になされてゆく過程を示している」(金斗植2001, p.93)。倭の古墳中期中後半並行期には加耶・新羅地域でも格子引きの陶質土器が少ない。第408図2は大加耶地域の土器で(金斗植1986, pp.67-68; 朴天秀2009, p.599)、軟質気味の焼成や口頸部



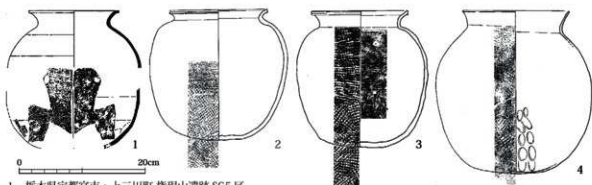
1 栃木県宇都宮市・上三川町 権現山遺跡
SG10区SI-88

2～6 大阪府堺市 大野池231号窯跡(西口1994)

7 韓国慶尚南道金海市 禮安里36号竪穴式石槨墓(鄭澄元他1985)

8 韓国慶尚南道金海市 大成洞1号木槨墓(申敬敏・金宇佑2010)

第407図 権現山遺跡SG10区の有蓋壺と類例



- 1 栃木県宇都宮市・上三川町 権現山遺跡 SG5 区 SI-24 他 (上部)・SI-22 他 (下部) 3 韓国慶尚南道宜寧郡 泉谷里 19-1 号墳 (朴升圭他 1997)
 2 韓国慶尚南道咸陽郡 白川里 1-3 号墳 (鄭澄元他 1986) 4 韓国慶尚北道大邱市 時至 285 号墓 (梁道榮他 1999b)

第 408 図 胴部上半の格子叩きをナデ消す壺



- 1 栃木県宇都宮市・上三川町 権現山遺跡 SG5 区 SD-42
 2 韓国釜山広域市 福泉洞 53 号墳 (宋柱鉉他 1992)
 3 韓国慶尚南道金海市 餘來里遺跡竈穴 111 号 (郭鍾喆他 2009)
 4~6 韓国慶尚南道咸安郡 道項里古墳群
 4 (文)32 号墓 (李柱憲 1997) 5 (慶)61 号墓 (禹枝南他 2000) 6 (慶)破壊墳 (禹枝南他 2000)
 7 栃木県上三川町 殿山遺跡 KT-121 (大川他 1995)

第 409 図 頸部に細突線を持つ小形壺

形状が 1 と少し異なる。新羅地域の 4 も器厚や口縁形が 1 と異なる。陶質土器の格子叩きが古墳中期後半並行期まで続く事例を蓄積すれば、権現山遺跡例の系譜を検討できる可能性がある。

細突線を持つ壺も、加耶の中で地域を限定することは難しいが、慶尚南道咸安地域の陶質土器にある (朴升圭氏御教示)。頸基部に細突線を持つ平底壺は咸安の道項里古墳群に多いが、広口小壺自体は加耶に広く分布するので咸安に限定しないほうがよいという (趙辰元氏御教示)。道項里 (文) 9・29・10・27・32・36 号墳 (李柱憲 1997, 1999, 2000) や道項里 (慶) 破壊墳・61 号墓 (禹枝南ほか 2000) の小形壺にも頸基部の細突線がある。権現山遺跡の南西 4km にある上三川町殿山遺跡 KT-121 の頸基部と体部に細突線を持つ陶質土器平底壺 (第 409 図 7) を検討した定森秀夫氏は道項里 (文) 10 号墳・(文) 27 号墳出土土器を例示したうえで「咸安地域だけに限定することはできず、広く加耶地域のものと考えておきたい」と考えた (定森 1995, pp.22-23)。権現山 SG5 区のような頸部 2 本突線の事例も、咸安地域だけの特徴ではなく、釜山・金海地域 (第 409 図 2・3) や大邱地域 (時至 ID-86 号墓; 梁道榮他 1999a, p.374) にも分布している。

上記の 2 点以外で、韓式系陶質土器の可能性のある遺物に触れておく。古墳時代土坑 SG10 区 SK-346 の小形壺が、外底面に藁を敷いて焼成した痕跡を持つので、陶質土器の疑いもある。植物 (藁) を離器材に使うことは韓国南部の陶質土器に多い特徴で、加耶・新羅地域および梁山江流域で広く行われている (酒井 2005, p.138; 松永 2010, p.179)。ただし、SK-346 の小形壺は口縁部形状が不明で手がかりが少ないので、須臾器として報告した。細突線が口縁部に 1 本ある壺破片が SG5 区 SI-11 にあり、これは須臾器として扱った。格子叩き壺 (SG5 区 SI-22・24 他)、細突線のある壺頸部 (SG5 区 SD-42)、藁痕跡のある小形壺 (SG10 区 SK-346) の 3 点について、韓国出土陶質土器との胎土比較分析を予定している。

手工業生産関連遺物 土師器の補修痕は SG10 区 SI-6・22・23・25・33・87・111 と SK-243 と SG5 区 SK-205a、焼成前亀裂は SG10 区で SI-19a・34a・89a と鍛冶遺構 SI-36 にある。SG5 区 SI-3-8、SI-20-18、SI-21-10、SG2 区流路 2-9、磯岡遺跡 SG9 区 SI-49a-1 も補修の可能性を持つ。SG10 区 SI-18a-2 と、SI-25 の 2・25~27・103 等は変形・剥離などがある不良品土師器で、SI-25 に多い。土師器製作者に関わる遺物である。



第410図 権現山遺跡南部の紡錘車

焼粘土塊も土師器製作関連遺物の可能性がある。SG5区ではSI-3・9(3点=27g)・10(5点=82g)・12(3点=17g)・13・14・15(4点=45g)・16(4点=19g)・17(5点=184g)・18(3点=26g)・20・21(13点=49g)・22・26・29a・116・137とSK-210にある。SG10区ではSI-10・15・20(3点=254g)・23・28(4点=24g)・30(3点=31g)・34a(5点=19g)・37・40・65・70・73・89a・105(5点=25g)と中世～近世の溝SD-263にある。点数を示さない遺物は、1～2点が出土した。SG5区SI-21の13点が最多で、他は5点以下である。SG5区SI-10の重量の大半は大形の1点(68.5g)である。SG10区SI-20の大形板状品は219gで植物痕があり、カマド構築材かもしれない。

稲刈痕のある土師器は、権現山遺跡南部ではSG2区SK-103・流路2・遺構外A区、SG15区流路2(TX16)、SG10区SI-30・50・53・55・64a・66・74・78・82・89a・113a・114とSD-43・304b・527とSK-46にある。また、権現山遺跡北部ではSG1区SI-5などにある。SG10区SI-65の杯(1)とSI-88の杯(13)とSI-110の甕(4)に植物種子圧痕、SG10区SI-18aの甕(5)の胎土中に白玉があることと同様に、土師器の製作または使用に関わる何らかの意味を持って、製作時に混和したものであろう。

紡錘車は、第410図に示した事例がある。中期は滑石、後期は滑石の他に粘板岩も使う。鍛冶遺構SG10区SI-36、キサゲ状工具や加耶土器を出土したSG5区SI-24にもあることが注意をひく。

鍛冶関連遺物 今回掲載した中性子放射化分析の結果、朝鮮半島製の原料を使用した鉄製品を加工製作していると推定された。小山市西裏遺跡・壬生町新郭遺跡などでも知られている朝鮮半島産鉄原料とは異なる「高As・低Sbの系列」で、韓国南部の釜山・陝川地域出土鉄器と同群になることが注意すべき点である(第5章第6節)。また、居館・鍛冶遺構・キサゲ状工具・加耶陶質土器が古墳中期中～後葉の権現山遺跡で共存していることから、首長層の管理下で渡来系技術による手工業生産を組織していた可能性がある(内山2012, p.38)。

古墳時代の鍛冶関連資料は、権現山・磯岡・杉村・砂田・立野遺跡を含む東谷・中島地区遺跡群に多い(第232表)。権現山遺跡を中心とする鍛冶関連資料が集中する東谷・中島地区で大規模な発掘調査が実施されたので、資料数が特に多くなっている。中期には鍛冶が確認できる事例が一定数あるが、後期前葉の砂田遺跡12区SI-6を最後として、後期・終末期には鍛冶が確認できず鍛冶関連遺物だけが出土する場合がほとんどである(内山2012, p.40)。磯岡遺跡も、後期の鍛冶関連遺物を多く出土する遺跡で大規模な調査が実施されたにもかかわらず、鍛冶が確認できない事例である。

SG5区SI-24のキサゲ状工具(第405図左) 基部を木柄に装着して使う形なので、突き鑿のように手に持って使用したと考えられる。キサゲ状工具が金工具であるという意見(大場・石井他1964, p.12)を検討するためには、熱処理の有無を調査することが望ましい(内山2012, pp.40, 42)。SI-24出土例は完形品なので、金属学的な断面調査・硬度計測などは実施していない。長野県安坂将軍塚1号墳の「きさげA」は、硬度測定値からみて、先端部にかぎらず総体に強度の焼入を施したと考えられている(大場・石井他1964, p.12)。韓国・京畿道の峨嵋山シル峰堡壘(6世紀前半の高句麗山城)のキサゲ状工具は、低炭素鋼を素材として製作し、強

度が要求される先端部には焼入れを施している（任孝幸他 2002, pp.168-171）。金工具（キサゲ）の条件も満たしているといえるが、木工具（鑿）を含む可能性も残る。

第3節 奈良・平安時代

古代の遺構は少ない。権現山遺跡に竪穴建物跡1棟・土坑2基、道路側溝が1箇所ある。

推定東山道の側溝 古代道路遺構の側溝がSG10区の北東部で確認された（SD-250a・b）。周辺の各遺跡で調査されている推定東山道（藤田 2003）に連続する道路遺構である。SG10区SD-250a・bから南西に230mの県道北側幅部分でも、側溝の続きと考えられる溝が2006年度に確認調査されている（第8図左下）。

平安時代遺構・遺物 SG10区に竪穴建物跡SI-90と土坑SK-235がある（第192・193図）。SG10区SK-235で出土した須恵器甕と同一個体の破片がSG10区の広域に分布し、古墳時代のSI-30（SK-235と重複）・SI-61（北へ75m）・SD-527（北へ145m）、中世のSE-252（北東50m）、時期不明のSK-254（北48m）、近・現代のSX-308（北48m）から出土している。また、平安時代須恵器杯破片がSI-50（古墳中期）・SI-65（古墳後期）・SK-251（中世）・SG10区SD-263（中世～近世）・SK-289（時期不明）・SX-308（攪乱か）などで出土していることを見ると、平安時代の遺構・遺物は非常に希薄だが、SG10区の広い範囲が9世紀頃に利用されていたことがわかる。SG15区にも平安時代土坑が1基ある。

第4節 中世

SG10区には井戸6基・土坑2基・溝4条・柱穴状土坑群82基がある。この他に、SG10区にある時期不明の井戸5基も中世の可能性が高い。近在の中世遺跡は、区画溝に囲まれた13世紀後半～14世紀前半の井戸・土坑群が権現山遺跡北部のSG1区にある（『東谷・中島地区遺跡群』10, p.556）。

SG10区出土中世遺物の時期 常滑産陶器からみて、13世紀後半から14世紀である（愛知県史2012, pp.37-38, 749）。中世井戸SE-569とSE-377で遺構間接合した常滑産こね鉢は、常滑窯第2段階（6a～6b型式）の片口鉢Ⅱ類とみられ、13世紀後半ころであろう（第200図9）。中世土坑SK-92・中世井戸SE-344・古墳時代土坑SK-46に同一個体がある常滑産こね鉢は常滑窯第3段階（8型式）の片口鉢Ⅱ類で、14世紀後半と考えられる（第198・209図）。

柱穴状土坑P-425・627・640にも中世遺物がある（第208図）。P-425の青磁破片は龍泉窯系青磁碗1-5b類で、13世紀後半に多い（山本1995, p.480）。P-627では皇宋通寶（1039年初鑄）と「□元□寶」（銭名不詳の破片）が出土した。P-640には還元炎焼成の山茶碗系鉢破片がある。

中世土坑SK-92の土師質小皿（かわらけ）は口径不明だが、底径が比較的大きい（5.4cm、第209図2）。時期不明土坑SK-264にある土師質小皿も、重複するSK-92などの中世遺構から混入したものでであろう（口径6.6×底径3.6×器高1.6cm、底径/口径=0.55、第237図中段左）。遺構外出土中世遺物の小皿も底径4.5～5.3cmで、底径/口径=0.67である（第210図）。これらの土師質小皿は今平幸（2001）分類のB類2bに該当し、14世紀後半以後のものである。遺構外出土中世遺物にある直方体に加工した滑石製品（第210図4）は、13～14世紀に多く見られる滑石製石鍋（高田2001）を再加工した可能性がある。

SG10区SE-569の曲物桶 内面に黒色の漆が付着するので、漆容器に使ったことが考えられる（第5章第19節）。ただし、底板部品3点のうち転用材を使った1点だけに黒色が見られないので、底板を修理した後に漆容器以外の用途に変更した可能性がある。この曲物桶は、3枚連結づくりの底板の下面にもう1枚の底板が接して出土したことで、桶内部に補強用の棒とも考えられる木棒があることからみて、桶の下面には別の底板・内面には棒を当てて補強したとも考えられる（第200図1～3）。

第5節 近世

SG10区の南半部に、近世の大形方形区画溝SD-201a・201b・204がある。山水文を描いた染付碗がSG10区SD-201aに1片、鉄軸の大形鉢口縁部片(鉄軸鉢鉢)がSG10区SD-204に1片あることから(第215図)、詳しい時期は不明であるが近世の溝と判断した。権現山遺跡北部の2区SD-5b(『東谷・中島地区遺跡群』10)、立野遺跡5区SD-79・632・296(『同』5)、また砂田遺跡の各地区(『同』3・8・13・15)において、かなり時期が新しく見られる同様の方形区画溝があり、これらも近世の可能性があろう。

SG10区北半部にある不整形方形区画溝SD-503は陶器片と寛永通寶を出土した(第218図)。この溝で囲まれた内部の土地利用はよくわからないが、砥石・土師質小皿が出土した近世土坑SK-71がある(第219図)。また、時期不明の掘立柱建物跡SB-603も近世遺構かもしれない(第220図)、SD-503と同時に存在ではない。

SG15区では、SD-1に鉄軸の仏花瓶が1点ある(第393図)。土岐川以南の美濃窯で生産した「漆黒輪花瓶」(岡本編2004, p.29)とはほぼ同一の製品で、美濃窯の中期(17世紀後半～18世紀中葉)に相当する。

【参考文献】 第2章(遺跡の周辺)と自然科学分析結果(4章2節、5章6・19節、7章、8章2・10節)の文献は各章・節の文末に示した。それ以外の参考文献を以下に示す。

- 愛知歴史編さん委員会 2012『愛知歴史』別冊 窯業 3 中世・近世 常滑系
赤井博之 1998『古代常滑新治窯跡群の基礎的研究 奈良・平安時代の須恵器編年を中心に』『優良岐阜考古』第20号 61-109.
秋元陽光、今平利幸 1998『宇都宮市東谷塚古墳出土の遺物』『岐阜考古』第13号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮、pp.41-64.
安藤美保編 1996『西濃遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第178集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
安藤美保 2001『平定の須恵器模倣品の検討』『研究紀要』9(財)とちぎ生業学習文化財埋蔵文化財センター、pp.143-158.
安藤美保 2008『北原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第312集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学習文化財財団
池田敏宏・藤原祐一 1998『西山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第215集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
池田敏宏 2010『下陰遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第330集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学習文化財財団
石山 數編 1977『粕原須恵町所定遺跡群の調査』『九州考古自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X 福岡県教育委員会、pp.10-26.
出店 博・藤田清信・有山経世 2007『ゴロノミヤ遺跡Ⅱ』佐野市文化財調査報告書第7集 佐野市教育委員会
入江文敏 2011『北陸地方出土の朝鮮半島系土器-三生野遺跡出土台付長頸甕の位置づけ-』『若狭・越前時代の研究』学生社、pp.232-271.
岩上照嗣・石橋知明編 1978『宇都宮市瑞穂地団地遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇都宮市教育委員会
上野修一 2005『低位段丘面の開発とその意義-栃木県貝岡市鶴田A遺跡出土の溝を中心として-』大宮宣英氏追悼論文集刊行会編『古代東国の考古学』慶友社 東京、pp.553-562.
上原康子・麻生高子・藤原祐一 1998『清六田遺跡Ⅱ(古墳時代編)』栃木県埋蔵文化財調査報告第218集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
内山敏行 1997『律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県「東国の須恵器-関東地方における歴史時代須恵器の系譜-」』古代生産史研究会 王生(栃木県下都賀支部)、pp.87-101.
内山敏行編 1998『新野古墳群・新野遺跡・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第214集 栃木県教育委員会・(財)

- 栃木県文化振興事業団
内山敏行 2001『関東の須恵器製作技法』『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会 奈良、pp.31-42.
内山敏行 2005『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学習文化財財団
内山敏行 2006『東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学習文化財財団
内山敏行 2008『東谷・中島地区遺跡群9 中島塚古墳群・中島塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学習文化財財団
内山敏行編 2010『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生業学習文化財財団
内山敏行 2012『豪族居館・首長居宅と関わる鉄器生産-北関東地域の古墳時代鍛冶-』『たたら研究』51 たたら研究会 東広島、pp.33-46.
宇都宮市教育委員会 1999『湖沼・向原遺跡Ⅱ テクノポリスセンター地区開発に伴う埋蔵文化財発掘調査(第2次)』(現地説明会資料) pp.1-4.
宇都宮市教育委員会 2001『湖沼遺跡Ⅱ 湖沼遺跡発掘調査第2次調査』(現地説明会資料) pp.1-4.
宇都宮市教育委員会 2007『世塚古墳Ⅱ』『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかいどう』2007年10月号 栃木県教育委員会、p.6.
宇都宮市教育委員会(とびやま歴史体験館) 2012『塚山古墳とその時代-下毛野の成立を考える-』とびやま歴史体験館第14回企画展
宇都宮大学考古学研究会編 1993『塚山古墳・塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集 宇都宮市教育委員会
宇都宮大学考古学研究会編 1995『塚山古墳外形確認調査報告』『藤考古』第9号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮
宇野隆夫 1992『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 佐倉、pp.215-232.
海老原徳博・津野 仁 2002『西総橋遺跡発掘調査報告書』高根沢町埋蔵文化財調査報告書第8集 高根沢町教育委員会(栃木県塩谷部)
大賀克彦 2002『弥生・古墳時代の玉』北條芳隆・福宜田佳男編『考古資料大観』第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館、pp.313-320.
大川 清・吉岡秀隆・三輪孝幸・中島雄一 1995『栃木県上三川町 磯山遺跡Ⅱ』日本窯業史研究所報告書第46号 馬頭(栃木県那須郡)
大倉 謙 2002『石製紡錘表面の磨痕・刺痕をめぐって』『日々の考古学』東海大学考古学教室開設20周年記念論文集編集委員会 平塚、pp.231-244.

- 大場豊雄・原 嘉穂・寺村光晴・桐原健一 1964 『長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(1)』『信濃』16(4), pp.1-16.
- 大場豊雄・石井昌国・志茂樹 1964 『長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(2)』『信濃』16(6), pp.1-25.
- 岡本久直編 2004 『江戸時代の野毛・美濃宮』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展, pp.25-29.
- 小野麻人・大橋生(東京筑紫研究所) 2007 『砂田姥遺跡B区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集 宇都宮市教育委員会.
- 風岡栄一 1999 『須臾器』野毛大塚古墳調査会(寺田良喜・三浦淑子編)『野毛大塚古墳』野毛谷区教育委員会, pp.419-422.
- 片根義幸・田代隆 2011 『川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第338集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 勝見一高 2005 『磯岡北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第53集 埋蔵文化財発掘調査協議会・宇都宮市教育委員会.
- 亀田幸久 2007 『西赤坂遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第304集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 亀田幸久 2012 『東谷・中島地区遺跡群12 西側部西原遺跡(田石器・縄文・弥生時代期)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第354集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団.
- 菊井和実・藤田典夫・仲山英樹他 1990 『砂部遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第108集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団.
- 木下 直 1992 『長野県下出土の古式須臾器概観-北信・東信地域の資料を中心として-』森研軍塚古墳発掘調査団編『史跡森研軍塚古墳』長野県史跡市教育委員会, pp.545-557.
- 久保三二・大島和子・斉藤均 1979 『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第5集 宇都宮市教育委員会.
- 合田恵美子 2007 『峰高前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第308集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 後藤信祐 2001 『御堂前遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告書第248集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 今平利幸 2001 『下野における中世土師器皿について-飛山城跡出土土器を中心に-』栃木県考古学会誌, 第22集, pp.107-122.
- 今平利幸 2012 『塚塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第78集 宇都宮市教育委員会.
- 今平昌子 2012 『東谷・中島地区遺跡群13 砂田遺跡(10区・12区・13区・16区・27区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第355集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団.
- 酒井清治 2005 『韓国梁山江流域の土器生産とその様相-羅州勢力と百濟-倭の関係を中心として-』『銅澤考古』30 銅澤考古学研究会 東京, pp.115-140.
- 酒井清治編 2007 『群馬・金山丘陵群跡群』I 駒澤大学考古学研究室 東京.
- 酒井清治・藤野一之・三原碧香編 2009 『群馬・金山丘陵群跡群』II 銅澤大学考古学研究会 東京.
- 定森秀夫 1995 『陶質土器からみた東日本と朝鮮』『東京大学論叢』第15集 財団法人韓国文化研究振興財団 東京, pp.5-93.
- 篠原浩志・杉浦昭博・篠原祐一・磯貝厚 2000 『成願寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第239集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団.
- 篠原浩志 2003 『霞内西遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第275集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 篠原浩志編 2009 『五雲遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第322集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 篠原浩志・藤田典夫 2011 『田島持舟遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第339集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 篠原祐一・亀田幸久 2009 『権現山遺跡・東谷北浦遺跡』

- 栃木県埋蔵文化財調査報告書第318集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 清水正幸 2002 『西側部古原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第46集 宇都宮市教育委員会.
- 下城正他 2008 『三ツツ子遺跡』上越新聞編組埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社 北橋(群馬県勢多郡).
- 下野考古学研究会 1986 『刈沼遺跡』第一冊 表採資料, 坂本家書齋資料, 『下野考古学』8 宇都宮, p.52.
- 下野考古学研究会 1992 『刈沼遺跡』第六冊 刈沼遺跡第二次調査E地点調査報告, 『下野考古学』17 宇都宮, pp.116-117.
- 下野考古学研究会 1993 『石川坪遺跡』『下野考古学』19 宇都宮, p.40.
- 下野考古学研究会 1996 『刈沼遺跡』第八冊 刈沼遺跡第三次調査H地点調査報告, 『下野考古学』23 宇都宮, p.139.
- 岡 孝一・永峯光一編 2000 『鳥羽山洞窟-古墳時代再考の素描と研究-』鳥羽山洞窟調査団・信海書齋出版センター 長野市, pp.38-43.
- 高岡正之・橋本澄朗 1988 『木葉城の基礎的研究』『研究紀要』5 栃木県立博物館 宇都宮, pp.27-82.
- 高田大輔 2001 『関東地方出土の滑石製土器』『埼玉考古』第36号 埼玉考古学会, pp.137-152.
- 高橋照彦 1991 『須臾器』小林謙一・花谷浩編 1991 『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長野県教育委員会(香川県大田町) pp.40-47, 110-121.
- 高橋敏・小林昭彦 1990 『九州須臾器研究の課題-岩戸山古墳出土須臾器の再検討-』『古代文化』42(4) 古代学協会 京都, pp.28-43.
- 伊達宗泰編 1981 『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第39冊 奈良県教育委員会, pp.542-560.
- 田中新一 1988 『古墳の調査概要』『王國』銘鉄剣製鋼千葉県市市福高台1号墳出土』市原市教育委員会, p.10, 図10.
- 田中広明 1991 『古墳時代後期の土師器生産と集落への供給-有段口緑環の展開と在地社会の動態-』『埼玉考古学論叢』財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団 大里, pp.635-665.
- 田辺昭三 1966 『陶邑古墳址群』I 平安学園考古学クラブ 京都.
- 田辺昭三 1981 『須臾器大成』角川書店 東京.
- 塚原孝一編 1999 『東谷・中島地区遺跡群No.1 磯岡遺跡(1区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第229集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団.
- 常川秀夫・熊倉直子・大金宣亮・石川均 1979 『塚山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告書第32集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 津野 仁 1997 『栃木の須臾器編年』『東国の須臾器-関東地方における歴史時代須臾器の系譜-』古代生産史研究会 壬生(栃木県下都賀郡), pp.84-86.
- 津野 仁 2005 『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡(2~7区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第292集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 津野 仁 2009 『青龍岡遺跡・皇宮前塚』栃木県埋蔵文化財調査報告書第317集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 津野 仁・篠原浩志・今平昌子 2007 『東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡(4~6・18・19・23・24区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第305集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
- 津野田陽介 2010 『島田遺跡』VII 古墳-歴史時代編1(IV~V次調査) 上三川町埋蔵文化財調査報告書第35集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡).
- 鶴岡英一ほか 2007 『市原市西広貝塚』III 市原市埋蔵文化財センター調査報告書第2集・上総国分寺古跡跡調査報告書XVII 市原市教育委員会, pp.537, 561, 562.
- 寺内武夫・篠崎善之助 1939 『下野中原遺跡調査概報-第一第二回-』『考古学』10(11) 東京考古学会 大阪, pp.537-555.
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2000 『埋蔵文化財センター年報』第10号(平成12年度版).
- 中村享史 2004 『東谷・中島地区遺跡群4 琴塚古墳群(西側部西原遺跡1・2・6区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書

第283集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

中村 浩 2001『和泉陶巴窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版 東京

中村 勝・植山邦雄 1987『福岡市金武小学校所蔵の須恵器』『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会 北九州, pp.85-90

中山 晋・日向野宏志・岩崎浩志・仲山英樹・鎌木理広 1988『第9内遺跡・松香遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第94集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

奈良国立文化財研究所編 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅱ 藤原宮西方官衙地域の調査』奈良国立文化財研究所編第31冊

西岡一則 1994『野々井遺跡・ON231号竪穴』(財)大阪府埋蔵文化財協議会調査報告書第86輯 大阪府埋蔵文化財協議会, pp.54-55, 81-82, 137, 図版111-112.

橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2011『権現山遺跡測量・発掘調査報告』『新潟大学考古学研究室調査研究報告』11 新潟大学人文学部 新潟 pp.1-37.

橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2012『権現山遺跡測量・発掘調査報告2』『新潟大学考古学研究室調査研究報告』12 新潟大学人文学部 新潟 pp.1-65.

橋本浩明・谷中隆 2001『東谷古墳群』と権現山遺跡・百目鬼遺跡』『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団, pp.295-301.

初山孝行・青柳平久・谷中隆・江原英・猪瀬美奈子・井上武 1997『寺野東遺跡Ⅱ 縄紋時代環状土遺構・水溝の遺構編』栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団, pp.652-653.

土生朗治・越智敏・富川努 2008『中島塚遺跡(A区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第63集 宇都宮市教育委員会

土生朗治・宮田和男・越智敏・大塚雅之 2007a『西州部西原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第59集 宇都宮市教育委員会

土生朗治・宮田和男・越智敏・大塚雅之 2007b『砂田姥沼遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第60集 宇都宮市教育委員会

浜松市博物館編 1998『山ノ花遺跡 遺物図版編』p.78
坂 靖 1998『古墳時代の階層型にみた居宅』『古代学研究』141 大阪(再録2008『古墳時代の遺跡学』雄山閣 東京, pp.78-91.)

深谷昇・梁木誠・田熊清彦 2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告書第27集 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第47集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会

深谷昇・高野浩之・戸部孝一・平岡和夫 2004『磯岡遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告書第29集 都市基盤整備公団・上三川町教育委員会・山武考古学研究所

藤田直也 2003『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道間連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告書第274集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

藤田直也 2011『東谷・中島地区遺跡群11 砂田姥沼遺跡・砂田蓮遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第337集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

藤田直也・田代隆 2002『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第265集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

藤田直也・片根義孝 2007『市ノ塚遺跡(第1分冊)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第303集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

藤田直也・片根義孝 2008『市ノ塚遺跡(第2分冊)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第303集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

藤田典夫 1999『栃木県における5世紀の土器編年』『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 藤沢, pp.65-78.

藤田典夫・安藤美保編 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告書第241集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

藤田典夫・仲山英樹 2007『曲田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第324集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯

習文化財団

松本悦枝 2010『高堂 池山洞 44号墳における墳丘祭祀の復元とその特質』『古文化談叢』65(1) 九州古文化研究会 北九州, pp.175-196.

宮本長三郎 2001『原始・古代住居の復元』『日本の美術』420 至文堂 東京

谷中 隆・大島美智子編 2001『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

梁木 誠 1984『藤原宮古墳』宇都宮市埋蔵文化財報告書第13集 宇都宮市教育委員会

山口耕一 1994『北関東地域における茨城産須恵器について(上)―外周同心円型日を有する須恵器を中心に―』『研究紀要』第2号(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター, pp.109-130.

山口耕一編 1999『多功南原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第222集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

山越 茂・楠木茂雄 1995『柿の内遺跡・下台原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第162集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

山本信夫 1995『中世前期の貿易陶磁器』中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真境社 京都, pp.470-484.

【韓国語】

郭鍾岳他 2009『金海餘末里遺跡』우리文化財研究院 學術調査報告17冊 昌原, p.347(111号竪穴)

金斗岳 1986『金海地方の主要古墳遺跡(2) -金海 가담遺跡 地表面調査報告-』『伽耶通信』第15・16合創號, 伽耶道信編輯部, 釜山, pp.50-81

金斗岳 2001『打撿技法』研究 金海 蔚安里遺跡 出土品を中心として』『蘭南考古』第28號 蘭南考古學會 大邱, pp.65-108

任孝亨・崔鍾澤・林高澤・尹相憲・梁時恩・張恩昂 2002『峨嵋山시봉峰堡』서울대학교박물관, 서울대학교人文學研究處, 九里市・九里文化院

朴升主他 1997『官率泉谷古墳群』I・II 蘭南埋蔵文化財研究院學術調査報告第9・10冊 蘭南埋蔵文化財研究院 漆谷, I-p.108, II-p.142(191-194號)

朴天秀 2009『56世紀 大伽耶』發掘斗二 歴史的意義』高堂池山洞 44 號墳。慶北大學校博物館, 慶北大學校考古人類學科・高堂部大伽耶遺跡調査報告書 大部, pp.577-641.

宋桂鉉・河仁秀・洪清翰・李賢珠 1992『東東 福泉洞 53號墳』釜山直轄市立博物館遺跡調査報告書第6冊 釜山直轄市立博物館 釜山, pp.68, 138, 200

申敬敏・金宰佑編 2010『釜海大洞古墳群Ⅳ-Ⅰ～3號墳』慶星大學校博物館 研究叢書第14輯 慶星大學校博物館 釜山

梁道榮他 1999a『時至の文化遺蹟Ⅳ-古墳群3』學術調査報告書第29冊 瀨南大學校博物館・大邱廣域市開發公社 慶山, 本文, pp.156-157, 374(86號墳)

梁道榮他 1999b『時至の文化遺蹟Ⅵ-古墳群5』學術調査報告書第31冊 瀨南大學校博物館・大邱廣域市都市開發公社 慶山, 本文, p.333(285號墳)

梁道榮他 1999c『時至の文化遺蹟Ⅶ-古墳群6』學術調査報告書第32冊 瀨南大學校博物館・大邱廣域市都市開發公社 慶山, 本文, p.359(92-3號墳)

禹枝南・崔鍾圭・金賢・李承一 2000『道項里・末山里遺蹟』慶南考古學研究所遺跡發掘調査報告書 晋州, 本文, pp.166-167, 図面, pp.106, 131

李柱憲 1997『咸安道項里古墳群Ⅰ』學術調査報告書第4輯 國立昌原文化財研究所 昌原, pp.56, 61, 130, 136, 139(9・10・27・29・32號墳)

李柱憲 1999『咸安道項里古墳群Ⅱ』學術調査報告書第7輯 國立昌原文化財研究所 昌原, pp.78, 81, 235(36號墳)

李柱憲 2000『咸安道項里古墳群Ⅲ』學術調査報告書第8輯 國立昌原文化財研究所 昌原, pp.65, 67, 196(48號墳)

鄭滄元他(釜山大學校博物館編) 1985『金海禮安里古墳群』I 釜山大學校博物館遺跡調査報告書第8輯 釜山, 本文, p.131, 圖版・圖說, pp.54, 211.

鄭滄元他(釜山大學校博物館編) 1987『咸陽白川1號墳』釜山大學校博物館遺跡調査報告書第10輯 釜山, pp.27-33